

真・恋姫†無双 飛信譚

しるういっしゅ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めて中華を統一した王朝、秦。その国の王は、三皇五帝を超えた存在として始皇帝と名乗った。少年の頃より始皇帝を支え、中華六将とまで謳われた秦の大將軍——李信。始皇帝の唯一の友として数多の戦場を駆け抜けた彼は、病によって命を落とす。

やがて時は流れ、後漢と呼ばれることになる王朝が中華を統一している時代。宮中に勤める李家に一人の赤子が産まれる。その子は、信と名づけられ成長していく。これは、新たな戦乱の時代を生きる一人の男の物語。

※皆様ご声援有難うございました。本作は一旦完結とさせていただきます。次回更新は未定です。

目次

洛陽の章

第1話：李信	1
第2話：張讓、李信と出会う	13
第3話：目覚めの刻	23
第4話：乱世の英傑、覚醒す	33
第5話：李信と水鏡	55
第6話：李信と水鏡2	67
第7話：李信と婁子伯	77
第8話：水鏡の決心	87
第9話：王道を行く者	103
第10話：李信、涼州へ	118

涼州の章

第11話：涼州への途	128
第12話：蚩尤の一族	138
第13話：漢陽郡	152
第14話：華雄という名の少女	165
第15話：遼来遼来	178
第16話：馬騰と韓約	190
第17話：それぞれの情勢	205
第18話：漢陽紛糾	222
第19話：漢陽戦	241
第20話：李信と劉弁	274
恋姫躍動の章	
蛇足之1：劉弁と張讓	290

蛇足之2：曹操孟徳

303

蛇足之3：天下無双

319

蛇足之4：臥竜鳳雛

342

蛇足之5：劉備玄徳

353

黄巾の章

第21話：反乱の予兆

377

第22話：劉弁と趙忠

403

第23話：荊州黄巾討伐

418

第24話：孫呉の王

432

第25話：豫州黄巾討伐

454

第26話：英雄集結

469

第27話：黄巾の乱終結。そして……

481

恋姫飛翔の章

蛇足之6：大斧と神槍

505

蛇足之7：神箭手

563

蛇足之8：白象の王

586

蛇足之9：治世の能臣。乱世の……

605

洛陽の章

第1話：李信

シンシンと雪が降っている。

時は紀元前二百二十年の冬。咸陽と言われる都市の一面に小さな屋敷。そこは咸陽に住む者ならば小さな子供であつてもその主人は誰であるか知っているほどに有名な屋敷であつた。

主の名は李信。

咸陽のみならず中華に帝政を敷いているこの国の大將軍の一人。

その地位に反比例して、屋敷と同様に質素な生活をしている珍しい男として咸陽では好意的に知られている。

その屋敷の一室に二人の男性の姿を見つけることが出来た。

一人は布団をかぶつて横になつている壮年の男だ。歳は外見だけでは判断し難い。白髪がところどころに混じつた短いざんばらの黒髪。精悍な顔立ちで顔のいたるところに大小の古傷が見受けられ、彼の戦歴を雄弁に語っていたが、どこか身体を悪くしているのか若干表情が青白く見える。五十近くに見えるが、まだ三十程度にも見える不思議な容姿であつた。

もう一人は、布団の傍らで正座している男。

その男性は布団に横になつている男とは正反対とも言えた。肩まで伸びた黒髪は、そこらの女性よりも美しく滑らか。まるで黒曜石を思わせるほどに照り輝き、顔立ちもまた男にしておくには惜しいほどに整っている。細い眉が、八の字に顰めているのは今の状況に苛立っているのは容易く読み取ることができた。膝の上に置かれた両の拳が皮膚に食い込むほどに強く握り締められ、キツときつく横一文字に唇もまた結ばれている。

吐き出す息も白く、肌を刺すような冷たさにぶるりつと身体を震わ

せる。

「……身体の調子はどうだ、信？」

外見からは全く想像できない男らしい声色で布団で横たわっている男——李信に語りかけた。

シンッと静まり返る室内の空気。静謐さを感じさせるそれを破ってしまったことに不安を覚えつつ、李信の返答を待つ。

一分が経ち、二分が経ち、三分が経ち、李信が寝ているのではないかと考えるようになった頃、瞑っていた瞼がピクリッと微かに動く。やがてゆっくりと瞼が開き、李信の瞳が自分を心配そうに見下ろしている男の瞳と交錯する。

「……お久し、ぶりです、陛下」

様々な感情が入り混じった、だが嬉しさを隠し切れない李信の呟きに、陛下と呼ばれた男はぴくりと眉を動かせる。

「宮中ならともかく、今ここには俺とお前しかいないんだ。何時もどおりにしろ」

「それは、命令ですか？」

「……命令では、ない。俺の願いだ」

どこか不満そうにそう語る男に、李信は仕方ないと言わんばかりに苦笑。

「……ああ、わかった。すまん……からかっただけだ、政」

そして李信は謝罪とともに、傍らにいる男の名前を口に出した。

その言葉に厳しい表情をしていた男性——えいせい政はようやく僅かにその表情を緩める。

かつて中国には秦と呼ばれる大国があった。

紀元前七百七十八年という気が遠くなるほどの古より存在する国。

周とよばれた王朝の時代、そこからさらに春秋戦国時代を経て、中華を統一した最初の超大国家。

それを為したのが、誰もが一度は耳にしたことがあるのではないかと——それが秦の王である^{えいせい}政と呼ばれる人物だ。

数百年にも渡って戦乱の絶えなかつた中華を統一するという覇業を成し遂げた彼は、三皇五帝を超えた存在として始皇帝と名乗ることとなった。どのような王も君主も超えた、唯一無二の存在と名乗ることに誰もが異論を挟む者はいなかつたという。

そんな彼には数多くの優秀な部下がいた。

中華を統一するという大偉業を成し遂げたのだから、それは当然とすべきだろう。

文官武官、ともに歴史にも名を残す英雄英傑達。

その中でも最も有名な者達をあげるとすれば、秦の中華六将を挙げるとるのが殆どではないだろうか。

始皇帝を支える武の極限。

戦国七雄とも謳われた、秦を除く斉楚燕韓魏趙を始皇帝の号令の下滅ぼした六人の大將軍。

千里先を読むと言われた王翦。

その息子であり、中華最強の槍使いと褒め称えられた王賁。

中華最高の將軍と称された蒙武。

その息子であり、癖の強い六将の仲を取り持ったとされる蒙恬。智に優れ、武に優れた秦軍最良の武将——^{きょうかい}羌？。

そして——。

武神とまで謳われた趙の^{ほうけん}龐煖を打ち破った秦軍最強の戦神。

その名を李信。

彼ら彼女らを、人は最高の賛辞と怨嗟を込めて中華六将と呼ぶ。

そんな六将の中でも李信と呼ばれた男は、どの書物にも特別であったと書き記されている。

曰く、始皇帝に誰よりも信頼された男。

始皇帝が皇帝どころか、傀儡の王として過ごしていた少年の頃より付き従っていた数少ない武官。

各国の怨念を、怨嗟を一身に受ける始皇帝の眼前で、全てを切り払い防ぎきつた最強の矛にして、無敵の盾。

矛盾という言葉を成立させてしまった文字通り最強の人を超えた人。

始皇帝の李信への信頼は、それこそ周囲の人間に不安を覚えさせるほどであったという。

妻や妾はおろか、その子供達さえも二の次であり、まったりこと政において私を挟まない始皇帝の唯一の欠点をあげるとすればそれであったといえた。

また、始皇帝からの一方的な信頼ではない。

李信としても、公の場では臣下としての礼は崩さないが、二人つきり——もしくは極親しいものだけの場においては友として始皇帝に接する。周囲の者達からしてみれば正気の沙汰ではないが、李信にはそれが許されているのだ。

二人の信頼は尋常ではなく、この咸陽に李信の屋敷があることもまたその証明の一つとも言える。

李信とその妻である羌？を除き、中華六将の誰もが与えられた領地にいるというのに、彼だけは皇帝の御膝元である咸陽に在中することを許される。

まだ少年だったころからの友人である二人の友情は、決して切れることなく今このときまで続いていた。

「……最近は、かなり調子がいいぜ」

「そうか。それは……良かった」

調子が良い、と語る李信に政は静かに頷いた。

だが、それが自分に気を使った嘘であることは承知している。

中華一の名医に診てもらっているが、もはや李信はいつ逝ってもお

かしくはないほどに身体が病魔に蝕まれているのだ。いくつもの死病を体内に抱えており、普通ならばとつくの昔に命を落としている。医者でさえも匙をなげるほどの病状でありながら生き長らえているのはひとえに意志の力。生きたい、と願った李信の精神力のみで余命を伸ばし続けている。詳しい病状をを本人に話してはいないが、きつと気づいているだろう。気づいていながら、身体の痛みを一度として口に出さない。李信らしいといえば李信らしいのだが、今はそれが少しだけ口惜しい。

「……徐福から連絡があつた。蓬莱山への手がかりを見つけた、とな。もう少し経てば長生不老の霊薬が手に入る。そうすればお前の身体も良くなる」

「……まさか、お前が……方士なんて、妖しい奴らの手を借りる、なんてな」

「何を言う。あの武神を屠つたお前は、俺からして見ればそう変わらん」

「……かかかか。違うない」

政の発言に、李信は力無く笑う。

言われて見れば確かにそうだろう。何せ李信の歩いてきた道は生半可なものではない。

勝ち戦、負け戦問わず、常に戦場の最前線で矛を振るい、戦い続けてきた。しかも、武神と名乗った龐煖をも打ち破った彼は、もはや人と言う枠組みに当てはめていいのかどうかも不明である。

「……それにしても、良くここまで、辿り着けたもんだ」

「ああ、そうだな。だが、中華を統一したが安定したとは言えん。お前にもこれからまだまだ働いてもらうぞ?」

確かに政は始皇帝と名乗り、秦は全ての国を呑み込んだ。

だが、彼の目指す理想はまだ成し遂げられていない。長い戦乱によって、民は傷つき疲弊している。

まだ道半ば——それが彼の本心であつた。

「……病人に、無茶を言う。だが、そう言ってくれたのは、お前だけだ」

「——そうか」

李信の台詞に政は言葉少なく頷く。

病から床に臥せっている李信は、多くの者に見舞われた。

多くの者に恨まれ憎まれていると同時に、大將軍として前線で戦い続けた彼はそれ以上に尊敬され、慕われている。それこそ、この小さな屋敷を見舞う者は毎日後を絶たない。

そんな者たちは、李信を気遣ってか、こう言うのだ。

——後は自分たちに任せて欲しい。

——今まで戦い続けてきたのだから、ゆっくりと過ごせばいい。

誰もが李信のことを想ってそれを口に出す。

それこそ、まだまだ働かせるなどということをするのは始皇帝たる政くらいだろう。

だが、李信にとって政の言葉こそ何よりも嬉しい。

彼は、李信という男は骨の髄まで戦人である。

年端もいかない子供の頃より剣の修練を友と行い、縁あって政と出会った戦乱に身を投じた。

そこからは怒濤の人生。戦場に身を置き続け、下僕の身から遂には中華六将とまで呼ばれる地位にまで上り詰めた。

戦を愛し、戦に魅入られ——それでも、政の唯一の支柱として戦い続けたからこそこのまま病床にて死ぬのだけは耐えられない。

政の剣であり、盾である自分がいる意味は、価値は戦場にこそあるのだから。

「……任せろ。必ず、必ず俺は……この病を克服して、みせる」

「お前は何時も、どんな状況においても俺の期待に込めてくれた。だからこそ、今度も込めて見せてくれ」

「——ああ」

こくりと力強く首を縦に振る李信。

ギラギラ輝かせるその瞳の強さに、政は一瞬とはいえ見惚れた。獣のように獰猛で、だがどこか暖かな光を宿した漆黒の瞳。

それがとてつもなく愛おしく、美しい。

今思い返せば、普通ではない出会いだった。

一国の若王と下僕の少年。

本来ならば一生縁の無い、決して交わらぬ道に行くもの同士。

それがどんな奇縁か、出会い友となり、始皇帝と名乗る自分が唯一気を許せる相手——それが李信。

各国を滅ぼした己へ向けられる憎悪、怨念、怨嗟は尋常ではない。常人ならば一日もこの罪科に耐え切れず気が狂うであろう。

それに耐え、こうしてここに居ることが出来るのは間違ひなく李信のおかげである。

彼がいなければ、とつくの昔に自分は正気を保つことができなかつただろう。いや、そもそも、王弟の反乱の時に全ては終わっていた筈だ。

今自分がここに居るのは、全てが李信のおかげというつもりはない。

政のために、多くの人間が命を賭けた。彼の道を照らすために必死に宮中、戦場問わず戦ってくれたのだ。

それは認めねばなるまい。だが、それでも政にとつてもっとも大切なのは、重要なのは——友である李信であった。

「……なんだ、じつと見て」

叫びだしたいほどの激痛に苛まされているだろうに、それを微塵も見せない李信に政は首を横に振った。

「なんでもない。強いて言うならば、相変わらず変な顔だと思っただけだ」

「……くそつ。誰もが、お前みたいな美形じゃ、ないんだよ」

ふつと鼻で笑った政に、李信が口を尖らせて抗議する。

ここで弁解しておくが、決して李信は不細工というわけではない。男臭い容貌というのは否定できないが、それでも宮中でもそれなりに人気を博すほどのものである。

「ああ。まあ、見ていて飽きないからな、お前は。それは羨ましい」

「……上から、目線な奴だ」

「始皇帝と名乗っているんだ、当然だろう？ それに——お前の顔は嫌いじゃない」

優しげな眼差しで政は、李信をじっと見つめ。

「——俺が女だったら、お前に惚れていたよ」

「……気持ち、悪い奴だ」

政の言葉に、李信は苦笑で返す。

そして天井を向くように体勢を変えると、瞼を閉じる。

「……わりいな。少し、疲れた」

「いや。こちらこそ長居しすぎた。今はしっかりと養生しておけ」

「ああ。また、暇な時間を見つけて、来てくれ」

仮にも政は皇帝なのだ。

暇な時間などあるわけがない。

「……近いうちに必ず来よう」

それは口約束ではない。

如何なる手段、方法を使つても政は見舞いに来るだろう。

それを本来なら李信とて止めるべきなのだろうが、政がくることを嬉しく思っているのも事実。それ故に政が見舞いに来ることを止める言葉は口に出さなかった。

政は寝入った李信を起こさないように静かに部屋からでると、屋敷の者達に見送られ外に出る。

門の傍には豪勢な馬車が止まっており、政よりも幾分か年上の初老に差しかかる年齢の老人が礼をして出迎えていた。

「李斯か。徐福から連絡は？」

「……ありません。恐らくは、彼の者は逃亡したのではないかと」「そうか」

政の短い答えを疑問に思った李斯は、下げていた頭をあげて表情を窺うように盗み見る。

そして、それを後悔した。

思わず悲鳴をあげそうになるのを必死に堪え、再び頭をさげる。

ガチガチと歯が音を立て、身体の芯からくる震えを止められない。全身を襲う怖気が、心の臓を握りつぶさんと言わんばかりの圧迫感で押さえつけてくる。

かつての主であった呂不韋も並々ならぬ傑物であったと思うが、始皇帝はその比ではない。人外の化け物の如き恐ろしき、果てしない重圧が立っているだけの政から迸っていた。

陸に打ち上げられた魚のように呼吸が出来ない。

圧倒的。絶対的。まさしく、三皇五帝を超えた始皇帝の名に負けな
い化け物が徐福という愚物に憎悪を向けていた。

「中華全土から徐福の親類縁者を探し出せ」

「は、はい」

「少しでも奴と関わりを持った者も例外ではない。隣に住んでいた者。商売に関わった者。そういった者も連れて来い」

「あ、あの……そ、それは……如何、するおつもりで？」

「極刑だ。例外なく、斬刑に処する」

「——御、意」

李斯は、つまりながらもそう答えた。

今の政には反論は許さない凄みが合った。いや、仮にここで反論をしていれば、政の燃え上がるような憎悪は自分にも向くかもしれない。

元々が徐福への蓬莱山を探すと言う世迷言への援助は、全てが李信の病をなんとか完治させようという藁にも縋る想いの為に許可したのだ。

それを裏切られたとなれば、今の始皇帝の様子も領ける。

馬車に乗り、去っていった始皇帝を見送りながら、李斯は数分の間恐怖で頭を上げることが出来なかった。

それから二カ月後。

李信は遂に再び戦場に立つことなく病のままその一生を終えた。

それを知った始皇帝の嘆きようは、見ている者が涙するほどであったとも言われている。

歴史家は語る。

もし。もしも李信が生きていれば、秦はもつと長い期間中華を統治することができたのではないかと。

そして、李信が逝つて間もなく、始皇帝もまた病氣によつて命を落とした。

それが皮肉にも新たな戦国の世の到来を告げる鐘の音となる。

巡る。巡る。時代は巡る。

戦乱は英雄を生む。

漢の高祖、劉邦。西楚の霸王、項羽。

争い、戦い、そして新たな王朝——漢の成立。

廻る。廻る。世界は廻る。

漢の腐敗。

前漢の滅亡。

英雄、光武帝による後漢の再興。

そして——さらに時は流れ。

漢の首都洛陽。

その隅にある、巨大な屋敷。そこのある部屋に、二人の男女がいた。

女性は寝台に横になりながら、産まれて間もない赤ん坊を胸に抱いている男性を優しくに見つめている。

二人は夫婦であり、結婚してから恵まれていなかった子宝をようやく授かったところであった。

「ああ、うん。可愛いなあ、赤ん坊っていうのは」

「ふふっ」

頬を緩ませて赤ん坊を優しく抱いている夫に、思わず微笑が漏れる。

そんな妻の姿にも気づかず、男は自分の子供に夢中であった。

「……そういえば、あなた。その子の名前は決まったのですか？」

赤ん坊に集中していた夫に、女性は思い出したように問い掛けた。

その質問に、男性は顔を妻へと向け、こくりつと小さく頷く。

「悩んだけどね、流石に決まったよ」

「あら。どんな名前に？」

初めての子供と言うことで、夫が名前を考えるのに悩んでいたことは知っている。

先日まで決まっていなかったはずだが、優柔不断な彼が決めたことに

若干驚いた。

「うん。我ながらいい名前だと思うけどね。この子の名前は——」

すつと息を深く吸い、男はゆっくりと確かな口調で——。

「——信。この子の名前は李信」

「李信、ですか。良き名かと思えます」

夫婦は、胸に抱いている赤ん坊——李信の顔を覗き込むようにして微笑んで。

「強く優しく生きてくださいね、信」

それに答えるように、李信はおぎやあつと小さく泣き声をあげた。

第2話：張讓、李信と出会う

「——ときに、張讓様。最近話題になっております噂話をご存知ですかな？」

馬車に揺られながら無感情な眼差しで外を眺めていた少女に、傍に侍っていた初老の男が機嫌を伺うように語り掛けた。

しかしながら、張讓と呼ばれた少女はそれに微塵も反応することなく馬車の小窓から変わり行く風景をじっと見つめ続けたままだ。

平時と同じく痛いほどにピンっと張り詰めた空気を周囲に散じている主の態度に、この話題を続けていいものかどうか一瞬悩む老人だったが、その迷いを振り払ったのは我関せずの態度を取っていた張讓であった。

「どの噂話だ？」

さらさらと、流れ落ちる白金のような長髪の下、見る者に寒気すら覚えさせる絶世の美貌の彼女が、短く事務的に己の従僕へと問い返す。大抵は無反応な主の珍しい返答に、おやっと若干目を見開いた老人は立派に伸びた白い顎鬚を片手で梳きながら口元を緩める。

「李海、という人物をご存知でしょうか？」

「さて、知らん———と言いたいが、聞いたことがあるな。趙忠の親類に因縁をつけられて閑職にとばされた不運な奴だったと記憶している」

服自体が光を発しているのではないかというほどに豪華絢爛な衣装でさえも、張讓自体が放つ不可思議な圧力の前では彼女を煌かせる一助にしかなくなっていないことに感嘆の溜息をそっと吐く老人。

これまで主の供として宮中の多くの者達を見てきたが、それでも張讓に比肩する容姿の者を見たことが無い。

細く整った眉。鼻筋は通り、薄桃色の唇が異様なまでに艶かしい。服の隙間から見えるのは雪原の如き日焼け一つない純白の肌。真つ赤に燃えるような真紅の瞳もまた印象的だ。多少吊りあがった目元が勝気なイメージを相手にあたえるかもしれないが、それさえも張讓の美しさを際立たせるパーツにしかな過ぎない。惜しむ点を敢えてあげるとすれば、一般的に見て小柄な身体というところだろうか。つまりは、女性としての起伏さも欠けているものの、それ以外はまさしく傾国の美女とでも言うべきか。もともと——生憎と相当なことが無い限り、皇位を継ぐ者は女性と決められているため、その心配はないのだろうか。

「この御時勢に宦官に齒向かう気概だけは買ってやるが、愚かというしか他にはないな。反抗するならば、何かしらの対抗することを可能とする手段を用意すべきであつただろうに」

可憐な雪の妖精染みた彼女ではあるが、その容姿とは裏腹に発する言葉は苛烈で尊大。

女性の持つ柔らかかさ甘さなど微塵も感じられない。真紅の炎を圧縮したかのような瞳でありながら、彼女の放つ言葉は吹雪の如く零下を感じさせた。

「それで、それがどうかしたのか？」

「はい。その李海には息子がいるようなのですが、曰く——神童と評判のようですぞ」

「神童、か」

ふつと鼻で笑った張讓は、一切の興味がないのか視線を馬車の小窓から見える景色から動かそうとすらしていない。

「十で神童。十五で才子。二十を過ぎれば唯の人。人とはその程度のもの。真に才ある者など極稀だ……私やお前のようにな」

自分を才ある者と断じれる張讓は、傲慢に思われるかもしれない。だが、それは紛れもない事実。彼女には誰もが覆すことが出来ないほどの実績があるのだから。

そして、そんな張讓に認められた老人もまた只者ではないのだろ

う。

笑顔で顎鬚をさすりながら、主の予想外の言葉に歓喜を抑え切れずに腰に挿してある無骨な剣の柄を無意識の内にも一度撫でていた。

「張讓様にそこまで評価されていたとは。爺は嬉しゅうございますぞ」

「……他の人間に比べれば、だ。あまり良い気になるなよ、爺」

「ほっほっほ。肝に銘じておきましょう」

自分の鋭い言葉にも臆さずに微笑を浮かべる老人に、彼女は機嫌を損ねたのかふんつと再度鼻で笑う。

そんな様子の主に、従者である老人は剣を撫でる手を止めると、今度は真剣な表情で張讓を見据える。

「ではこのまま宮中に戻られますか？」

「……」

無言を返す張讓に、老人はそれが了承を得たと判断し、馬車の御者へと声をかけるべく腰を浮かそうとしたその時――。

「――良かろう。その李海の屋敷へと案内しろ」

口調は静かであったが、有無を言わさない力強さを伴って張讓は言葉を発した。

「……おや？ 如何なされましたか？」

「気が変わったただけだ。今日はどうせ宮中に戻っても仕事はない。むしろあの趙忠の龔爺の顔を見なくてすむのならば時間を潰していたほうがまだましだ」

「……お気持ちはこちらですが、口に出すべきではないかと。趙忠様の耳もどこにあるかわかりません」

「ふん。たかが長く生きてただけの老害どもが。何を怖れることがある」

現在この洛陽にて専権を振るっている権力者の一人を相手にどこまでも強気な張讓に、感心すればいいのか諫めればいいのか迷った老人だったが、幾ら言っても聞き入れないだろうであろうことは幼少の頃よりの付き合いでわかっている。

頭痛を隠しきれずに自分のこめかみを指で押さえる彼に、ようやく外の景色から視線をずらして視界に入れた張譲は、万人を魅了するように口角を僅かに吊り上げて笑う。

それは女性らしさとは無縁ながら、人の魂までも惹き付ける危険な笑みであった。

「私の前で話題を出したのだ。ならばその李海とやらの屋敷がある場所を把握しているな？」

「……勿論です」

「それは良かった。もしも把握できていなかったら先程の言葉を撤回せねばならぬところだったぞ」

それは才ある者という評価のことであろうか。

主を失望させなかったことに内心で安堵しつつ、馬車を李海の屋敷のある場所へと向かわせるのであった。



宦官、という名の魑魅魍魎溢れる洛陽。

煌びやかで活気に溢れるのは表通りだけで、少しでも裏道に入れば絶望が溢れていた。

親が子を売り、子が親を裏切る。僅かな食料の為に他人から略奪するのが当然——否、そうしなければ生きていけないほどの貧困に支

配されていた。

その原因が、宦官と呼ばれる王の宮廟に仕える官吏の者達である。

本来ならば有り得ないことだが、彼らは皇帝に取り入り政治的な権力を持つようになってしまった。特に靈帝と呼ばれる皇帝の時代、十常侍と呼ばれる宦官の集団が絶大な権力を握り、宮中を支配していたのだ。

宦官と言っても、それは大きく二つに分けられる。

まず一つ目は去勢を施された男性官吏。禁中——すなわち天子が住む宮中のことを指す。その禁中で働くものは万が一のことを考え、自ら去勢を行わなければ宦官として勤める事は出来ない。

そして二つ目が、単純に女性の官吏のことを指す。と言っても、ただの侍女ではなく、古くから漢に仕えている由緒ある家系の者のみで受け継がれてきた官吏である。漢において、皇位を受け継ぐ者は女性が殆どであるため、同性であれば間違いもおきないだろうと考えられたからだ。そのため時代、皇帝によって違いはあれど、男性よりも女性の宦官の方が強い権力を持っているというのが一般的であった。

さて、この時代において専権を欲しいがままにしている宦官の頂点、それが十常位。十常位とは、張讓と趙忠を筆頭として封？、段珪、曹節、侯覽、蹇碩、程曠、夏惲、郭勝の十名で為った宦官の集団であり、彼らの権勢はもはや国の頂点たる靈帝さえも凌駕してしまっていた。

たいした能力も持たずとも、ただ彼らの親族だからというだけで、官位に取り立てられ、自分たちの望むがままに民から搾取を繰り返して私腹を肥やし続けている。

それを咎めるものもいたが、如何に正しいことを訴えても逆に処罰されるのが常であり、それ故に見てみぬ振りをする者ばかりというのが現実となっていた。

能力も正しく評価されずに、宦官の思うが俣に罷り通る政治。

そうなれば当然、彼らに阿って官職を得ようとするものが出てくる

のも当然である。

そういった口だけの者達が多く増えてくれば、国が正常に動かなくなっていくのも目に見えており、漢の腐敗はある意味当然の帰結とも言えた。

そのことに胸を痛めている者達も多くいるのだが、例え高らかに不正を訴えたとしても水面下で行動したとしても、それを見逃すほど宦官の勢力は甘くない。

そして、仮に不正が表沙汰になったとしてもそれを揉み消すことが可能というのもまたこの時代の現実であり、つまりは早い話が漢という王朝は——詰んでいた。



何を考えているかわからない無感情な瞳で、馬車の小窓からコマ送りになっている風景を眺めていた張讓の思考を邪魔するように、徐々に速度を落としていき、ガタンつと車体を小さく揺らし完全に停車する。

「到着したようですな」

従者の言葉に、そうか、と短く頷いて張讓は馬車からゆっくりと降りると、ツンつと少しだけ濁った空気が鼻をつく。

周囲を見渡せば、それなりに大きな家や屋敷が見られるものの、よく見てみれば道端に寝転がっているものも数多く見受けられる。いや、張讓の馬車を見て関わりあいを避けようと逃げ出した者も考慮すればかなりの人数に達するであろう。

貧民街とはまだ遠いものの、それだけ洛陽の住人達が辛い生活を強いられているということだ。

宮中の者達が私腹を肥やせば肥やすほど、そのあおりを受けるのが民である。その一部は恩恵に預かれるだろうが、大部分が搾取されるだけの存在でしかない。

「ちっ……宦官の老害どもが。奴らの影響がここまででているか。このままでは長くは持たんぞ」

舌打ちを一度。

張譲は不機嫌な雰囲気を隠そうともせず目の前にあつた屋敷へと歩を進める。

屋敷とは言つても、彼女の生活している場所とは雲泥の差だ。敷地面積だけを見ても倍どころか、十倍の差はあると思われる。もつとも、一官吏の李家と代々漢を支えてきた一族の張譲とではこの程度の違いは当然と言えるが。

入り口を抜け小さな庭の途中まで差し掛かったところで、張譲は歩みを止めた。

庭の至る所に見られる木々に視線を縫いつけられたからである。

もつとも、良い意味ではなく——所々の部位が剪定に失敗したのか禿げ上がってしまったのだ。

一箇所や二箇所ではない。庭にあるほぼ全てが、そうなのだから、相当に不器用な人間がやったのであろうか。

「これは随分とまあ、碌でもない人間が剪定したようだな」

「職人がしたのではありますまい。もつとも素人が行ったにしても些か……」

主従の駄目出しも至極当然。

はつきりと口に出す張譲と、言葉を濁す老人との違いは、性格の差を表しているようだが。

しかし、このようなはつきり言つて些細なことに時間を取られてい

る暇も、張讓にはなかった。仮にも宮中を統べる十常侍の筆頭の人。仕事が無いとは口に出したが、実際は幾らでもあるのだから。さっさと本来の目的を済ませようと、彼女は止めていた足を一歩踏み出そうとして――。

――ジャリつという砂を踏み締める音を聞いた。

さんさんと照り輝いていた太陽が急激に雲に覆われる。

突如の気候の変化は暖かだった空気を冷やし、この場にいた二人に寒気を覚えさせた。

空を見上げれば、暗雲が立ち込めるている。黒い雲の中で稲光を発するそれは、劈くような轟雷の音となって耳朵を打つ。

現実味を帯びない変化の中で、一步一步ゆつくりと態と音を鳴らし、近づいてくる足音。

まるで伝承にある幽鬼の如く、だが確かに現実にいるのだという不可思議な圧迫感を伴って、一人の少年が姿を現した。

李家の屋敷と入り口を繋ぐ庭の半ば。

そこに、在るのは小柄な少年。

張讓や老人のように綺麗に整えられた髪とは正反対で、短く伸ばしただけの黒い乱れ髪。一般の者が着るような安い生地で出来た衣服。顔立ちは整っている部類に入るのだろうが、やけに鋭い眼光がそれを台無しにしている。身長は少年と言う言葉に比例して、そこまでは高くない。百四十程度の背丈の張讓より僅かに低いだろうか。張讓達の目から見ても、少年の外見だけみれば、精々が十歳。大きく外しているという事は無い筈だ。

しかし、しかし、だ。

張讓は息を呑んだ。呼吸をすることさえ忘れた。

心の臓さえ鼓動を止めてしまうのではないかという錯覚に襲われた。

年齢にはあまりにも似つかわしくない威厳。それは風雨に打たれて幾星霜。打ち付けられ、穿たれ、それでも数千年に渡って変わら

そこにあるような霊木にも似ていた。一切の隙の無い立ち振る舞いに、霊木とは正反対の鋼のような強固さも併せ持つ。

王の威光のように、ひれ伏せさせるのではなく、逃げ出させるのもなく、全てを忘却させるに値する圧倒的な武の極限。それが小柄な少年の身体のうちには圧縮されていた。

だが、それとは別の印象もまた受ける。

ここに居るはずなのに、ここに居ない。少年という身体を持っていながら、それが仮初でしかないような存在感。

まるで固体のようでありながら、気体の如く不明瞭。

それはまさしく、人を外れた人。

人では到達できない武の——いや、暴の化身。

関わってはならない。逃げなければならぬ。戦ってはならない。

これは意思を持った天災だ。人では歯向かうことも、防ぐことも出来ない災厄だ。

息をひそめ、それが過ぎ去るのを待つことが人の取るべき行動である。

現に、張譲の従者である老人は、まるで凍りついたかのように指先一つ動かすことが出来ていない。

だが——。

「——はっ。ははははははははっ!! あはははははははははははははははっ!!」

張譲は高らかに笑った。

それは、尋常ではない笑声であった。

嘲笑が入り混じった、だがその対象は相手ではなくまるで自分に向けられているかのようで。

まるで初めて玩具を与えられた子供のよう、真紅の瞳を爛々と輝

かせて、ただただ面白いモノを見つけたと歓喜を爆発させて射抜くように少年を睨みつける。

主が笑っていると言うことを信じられないのか老人の目が大きく見開いた。

長年従者として過ごしてきた彼にとつて、張讓が声をあげて笑うなど前代未聞の出来事だったのだから。

本当に楽しそうに笑っている美貌の麗人を眼前にしながら、全くの揺らぎも見せない少年に、ますます笑みを深く、声を高くする張讓を尻目に、彼は胸元の位置で包拳をして一礼。

「当家にようこそおいで下さいました。手前は姓を李。名を信。字を永政と申します。以後お見知りおきを」

第3話：目覚めの刻

李信と少年が名乗った瞬間、不可思議な圧力が張讓達の勘違いだっ
たと思わせるほど容易く霧散した。

空を覆っていた暗雲もまた、気がつけば彼方へと流れ去っており、
見上げれば気持ちいい蒼空が見渡す限りに広がっている。

その青空の下、金縛りから解放された従者である老人は流れる水の
ように行動を開始した。

僅か一呼吸の間に、腰元の剣の柄を手で掴み、鞘から金属音を鳴ら
すことなく抜剣する。

抜いた剣を上段で静止させ、痛いほどに柄を両手で握り締め、威嚇
するように大きく構える老人の姿は見る者の心胆を寒からしめるほ
どの圧力を放っていた。後一步でも李信が此方に踏み込めば、容赦な
く一刀両断するという無言の気概がピリピリと空気を伝染していく。

「——やめろ、孟佗!!」

そんな——孟佗と呼ばれた従者を止めたのは、他でもない張讓そ
の人であった。

主を守ろうと決死の覚悟を示した彼でさえも、有無を言わさず従っ
てしまうほどの厳格な少女の一声であったが、しかしながら孟佗は上
段に構えた剣を降ろそうとはしなかった。年老いていながらも彼の
放つ圧力故に、その背中は大きく見える。

並みの者ならば立ち向かうことを諦めるであろう。腕の立つもの
であれば勝ち目の薄さを理解して逃げの一手を打つ筈だ。

しかし、孟佗の標的となっている李信は、その射殺さんばかりの視
線と圧を気にも留めておらず、受け流している。

その姿や、柳に風。軽々といなす様は、既に消失しているとはいえ、先程までの尋常ならざる気配を感じていなかったとしても只者では無いと判断できるだろう。

ここにいる李信は、少年の姿をしただけの何か。

孟佗がそう判断して主を守る為に剣を握っている行動は普通に考えれば決して間違いではない。

「二度は言わんぞ、孟佗。剣をおさめろ」

だが、不退転の決意を胸に抱いていた孟佗の意思を挫いたのは李信ではなく、主である張讓であった。

冷静沈着で傲岸不遜。魑魅魍魎の溢れる宮中で、未だ歳若いながらも十常侍の筆頭を務めるのは決して地位によるものだけではない。無論、先祖代々受け継いでいるその地位が関係してはいないとは言えないが、それでも海千山千の怪物達が数多居る宮中で、その名を轟かせているのは彼女の優れた能力も起因している。

生まれながらにしての上立つ者の圧力。

問答無用で、理不尽なまでに人を屈服させる少女らしからぬ気配を纏う張讓に、漸く孟佗は小刻みに震える手で剣を鞘に納めた。

果たして彼が震える原因は、人とは思えぬ気配を醸し出していた李信へ対する恐れか。それとも王者の風格を漂わせている己の主たる張讓への畏れか。

孟佗は今はまだその答えを導き出すことが出来なかった。

そんな孟佗を尻目に、張讓は一步一步足を踏み出していく。

彼女の歩みには従者とは異なり、恐怖も畏怖も何も無い。歓喜で瞳を爛々とぎらつかせ、口角を吊り上げ肉食獣のような笑みを口元に湛えて李信へと近づいて行く。

それを止めようと孟佗は己の主へと手を伸ばそうとして、張讓は視線だけでその動きを止める。行き場をなくした彼は空中で手を止めて、力無くそれを下ろす。

この場にいるのは李信含めて三人の男女。

されど、互いに意識し、認識しあっているのは李信と張讓の二人のみ。ピリピリとした緊張感に溢れた空気がこの場を支配する。

その気になれば、剣を抜いて相手の首を落とすことが可能な一足一刃の間合い。

そこで足を止めた張讓は、普段の冷徹で無感情な瞳ではなく、自分よりも年下で小柄な李信へと熱く燃え滾った真紅に輝く眼差しを向ける。

「李永政、か。良き名だ。会って間もないが、その名は実にお前に相応しいと感じさせる」

「——十常侍と呼ばれる張讓様にそう言っただけで頂けるのは望外の喜び」

李信の台詞に、ピクリつと孟佗が眉を動かす。

まだ名乗っていないというのに、此方の——張讓の名前を知っている。

或いは、張讓を亡き者にする為の他の宦官による罠ではないかという疑念が浮かび上がったものの、それは無いと孟佗はそれを振り払った。

目の前の李信を、宮中を支配している十常侍であつたとしても従えることが出来るとは全く思えなかつたからだ。権力云々の問題ではなく、極端な話、存在としての格が違いすぎている。

「くつくつく。なんだ、私の名前を知っているのか？ 自己紹介の間が省けたな」

「以前ですが一度だけ遠目に拝見したことがありましたので。それに洛陽に住まう者ならば貴女様を知らぬ者はいないのでと存じ上げます」

「———そうか。そうかそうかそうか。下らん世辞は聞き飽きたと思っていたが、何故かお前の言葉は私の琴線に触れる。久しく感じたことが無かつたぞ。これが嬉しいという気持ちか」

李信の聞こえの良い言葉に、珍しく——本当に珍しく感情を剥き出しにして会話を続ける。

己以外全てが無価値無意味と断じていた張讓の姿に、従者は驚きを通り越してもはや主を止めようとする行動すら思いつかなかった。

「張讓様に申し上げます。此度は何故、このような場所に？」

「——ああ、それだ」

天上の官位を戴く張讓へと、年齢にそぐわぬ礼を尽くしながら李信は静かに問い掛けた。

そんな彼の言葉を遮るように、張讓は何でもないような装いで言葉を紡ぐ。

「その薄気味悪い言葉遣いは止める。何故かわからんが鳥肌が立つ」
眉を顰め類稀な容貌を本当に嫌そうに歪めて、張讓は言葉を続ける。

「わかるんだよ。理解できるんだ。感じるぞ、李永政——違うだろう？ 本当のお前はそんな腑抜けでは無い筈だ。ここには私とお前の二人しかいないのだ。なればこそ、お前の真実を曝け出せ」

自分与李信の二人しか居ないと断言した張讓に、内心で涙を流す孟陀。

「地位や年齢など気にするな。ここに居るのは、李永政と張讓という人間だ。例えどんなことがあろうとも無礼だ、などと口を裂けても言わぬよ。罰を与えるつもりも無い」

仮にも漢の頂点にもつとも近き権力者の一人。

十常侍の筆頭ともあろう人物の言葉とは思えない。

「——私は本当のお前が見たいんだ」

興味と関心を言葉に乗せて、張讓は己の欲望を隠そうともせず舌を回す。

李信の発言を封殺するように間断なく言葉を繋いでいく彼女に対して、李信は何か考え込むようにして口を閉ざした。

闇色に近く、底知れぬ——底が無い漆黒の瞳と燃え上がる真紅の

瞳が交錯し、両者ともが沈黙を保つこと数十秒。

「……国の頂点に近い奴が、どこぞの馬の骨ともしれないガキにそんな対応をしているのがばれたら拙いんじゃないかねえのか？」

今の今までの礼を尽くした対応とは正反対。

ふうつと嘆息までして、どこか呆れた雰囲気や身体中から発しながら、肩をすくめる李信。

急激に変化した雑な彼の言葉に、従者である孟陀は目を剥いた。だが、不思議とそれを咎めようという気持ちにはならない。何故ならばその口調、態度の方が余程李信にしっくりとくると思ってしまったからだ。

一方の張讓は、喜色満面。そんな言葉が相応しいほどに喜びがあふれ出し、顔中に広がっていく。

くつくつくつと抑え切れなかったのか、小さく低く笑い声をあげた。

「はははっ!! やはり良いな、お前は!! 例え私の許しがあるうとも、こうまで遠慮がない奴は初めてだ!!」

「……っ—か、あんたが罪には問わないって言ったんだらう? まさか今更前言撤回するつもりじゃないだらうな?」

「くっはっはっは!! いや、道理だ。ああ、お前の言うとおりだ。そんなことをするつもりは毛頭ないぞ。いやはや、実に面白い」

放つて置けば腹を抱えて笑い転げそうな様子の張讓へ、随分と冷めた視線を向ける李信だったが、その視線に気づきながらも彼女が笑いを抑えるのに暫しの時を必要とした。何がツボに嵌ったのか、それほどまでに張讓は感情を露にしていることに、遂には孟陀は現実逃避までしかける程である。だが、突如として彼女は笑うのを止めると、胸を張り真剣な眼差しで李信を見据えた。

「——なあ、永政。李永政よ。お前を知らぬものは、かく語る。宮中には宦官という名の魑魅魍魎が溢れている、とな。成る程、確かに私

もそれには同感だった。腹立たしいことだが、保身と私腹を肥し果て無き欲望を胸に抱く点に関して、奴らは人外の名を冠するに相応しいだろう」

だが、と短く呟いて。

「重ねて言うが、それはお前を知らぬ者達の言葉にしか過ぎん。李永政よ、お前こそが真の意味で人を外れた人だ。比較することさえもおこがましい。秤にかけることも無駄と断じてやる。お前と比べれば総じてゴミだ。万象全てが塵芥と明言しよう」

まるで恋する乙女のように瞳を煌かせ、だが乙女というにはあまりにも狂暴で凶悪すぎる光をその瞳に宿し。

「ああ、なんだ。お前の人生、それは一体何なのだ。一体どんな道歩めばそこまでの極地に達することが出来る？ ああ、くそっ……眩しいぞ。暗すぎて、黒すぎて、私でさえもお前の底が覗きこめん」

煮え滾るように熱い空気をハアッと肺から搾り出し、張譲は狂氣的でありながらも人を問答無用で惹き付ける危険な笑みを口元に浮かべて言葉を紡ぐ。そして、彼女の勢いそのままに一步足を踏み出した。

「初めてだ。ああ、初めてだ。こんな気持ちはこれまでの生涯を通して一度としてなかった。そしてこれから先も絶対に無いと断言してやる。今ここが、決断の時。全てを別つ分水嶺というのが痛いほどに理解できる。だから、言おう。李永政——いや李信!!」

ばさりつと豪勢な衣服をはためかせ、美貌を愉悦と期待の色に染め、傲岸不遜な眼差しで李信の全てを絡み取る。

さらに一步李信へと近づくと張譲。

「人では為し得ぬ道を歩んだ求道者よ。歳若き、稀代の異才よ。お前の抱えているモノが何かはわからん。だが私がそれを、お前の全てを背負ってやる。女も金も友も地位も名誉も——戦場でさえも、私がお前に与えてやる」

ある種の愛の告白にも似た熱烈な張讓の言葉は、止むことなく口から放たれ続ける。

そして遂には此方と彼方の距離は零となった。

「億千万の死と想いを背負う怪物よ。黒い乱世の化身よ。このままお前が、何も為さず朽ち果てるのはこの私が我慢ならん。それはあまりにも惜し過ぎる。ならばこそ、私とともに歩んでいけ。地獄の釜をともにかき、悪鬼羅刹を駆逐して、この国の未来を切り開こうぞ」

張讓の両手が、李信の両肩に置かれ痛いほどに握り締められる。

狂気と凶気が迸り、尋常ならざる鬼子母神にも似た重圧を背に背負い、それらは容赦なく李信へと降りかかった。

二人の瞳が、一体何度目になるかわからないが、再度交差する。

引力を持つているかのように、両者は視線を合わせたまま身動き一つしない。

二人の微動だにしない姿は、どこか荘厳で侵し難い空気に満ち溢れ、この光景を絵画の中へとそのまま落とし込めるのではないかと錯覚さえ覚えさせるほどであった。

互いに息も止めているのか、呼吸の音も聞こえない静寂の世界。

その世界に二人が居座っていたのは一体どれくらいの時間だったのだろうか。

十秒か。三十秒か。或いは数分も経っていたのかもしれない。

その空気を打ち破ったのは他でもない、李信であった。

「——少し、あいつに似ているな。あんた」

彼の口から漏れ出た呟きは、意外なことに哀愁が混じったものであった。

どこか遣りきれないような悲哀を表情に浮かべる李信はとても少年とは思えない——己や、或いは孟陀よりも歳を重ね疲れ果てたヒトの姿を張讓は見た。

更に言葉を紡ごうとした彼女の両手が空を切る。

確かに李信の肩を掴んでいた筈の両手がいつのまにか外されてお

り、視界から姿を消していた。

たたらを踏むように前へと足を一步踏み出して体勢を整えると、張讓は慌てて周囲をぐるりと見渡す。すると一体全体どうやってかは不明だが、既に目的の少年の姿は李家の屋敷の方へと向かっていた。

その途中、孟陀の隣を素通りする際に、反射的に彼は剣を抜きそうになったが、それでもそれを実行することは無く終わる。主の命を守ったと言えば聞こえはいいが、抜かなかったのではなく、抜けなかつた。それが正しい表現であつた。

「李信——!!」

声高らかに、未練を乗せて叫ぶ張讓を振り返ることなく李信は屋敷の中へと消えていく。

その後姿を追いかけようという気持ちは、張讓の心の中に微塵も湧かなかつた。例え追つたとしても、今の彼を説得することは不可能だろう。そう彼女は確信していた。

——今の私ではお前の主には相応しくないということか。

李信の背中が張讓の心の声を何よりも無言でありながら雄弁に認めていた。

それが悔しいとは思わない。事実、それを受け入れてしまっている己がいる。

様々な言葉を並び立てたが、それでは無駄なのだ。無理なのだ。

李信という名の何かを従えるには、言葉だけでは足りない。決定的に不足している。絶対的にその程度で幕下に加えられるはずが無い。彼を手に入れるには、己のモノにするには、圧倒的な力が必要だ。決して揺るがない強固な意思が必要だ。

如何なる怨嗟も怨念も憎悪も何もかも、全てを背負ってなお歩み続ける不撓不屈の心が重要なのだ。

「——いいだろう、李信。私の覚悟を見せてやる。お前と供に突き進む価値が私にあると認めさせてやる」

くはつと獰猛な笑みを浮かべて張讓は踵を返した。

主の姿に、凍り付いていた孟陀もまた、ようやく我を取り戻し彼女の背を追って走り出す。

全てに無関心だったが主とは思えない、全身を生きる気力に漲らせている張讓の姿に彼は疑問を覚えた。

あれだけ熱烈に誘った李信に袖にされたというのに、逆にそれをどこかで喜んでいるようにも見えたからだ。

「……なあ、爺よ」

そんな孟陀の疑問を感じたのか、馬車へと向かいながら語り掛けた。
きた。

先程までの理解しがたい光景に、喉がひりついているのか碌な返事もできない孟陀を気にせずに張讓は続ける。

「李信が私の誘いを受けなかった理由。それが何か分かるか？」

孟陀は霞がかかった意識を必死に働かせながら思考するも、その答えを元々期待していなかったのか、張讓は口を開く。

「足りていない。欠けている。気力が。意気が。意思が。精神が。心胆が。心が。魂魄が。何が何でも己を通そうとする自分自身」

ギシギシつと骨が鳴り響くほどに両の拳を強く握り締める。

「ああ、悔しいことだが認めねばなるまい。私は生きながらにして死んでいた。こんな世界に興味など微塵もなかった。何時死んでもいいとさえ思っていた。それでは、あの人為らざるモノを従える気骨など持てることがあるか」

ドンつと己の胸を強く叩いて、ギリギリと歯を噛み締めた。

「故に、私は戦おう。己の全盛を賭けて。全力を持って私の為すべきことを為そう。それで死ぬのであれば、所詮私はそこまでだ。李信の

主になる価値も資格もありはしない」

淡々と、だが触れれば焼ける甚大な熱量を持って張譲は歩みを止めない。

これまでの主とは雲泥の差。主が口に出したように魑魅魍魎溢れる洛陽の宮中においてさえも、並ぶ者がいないのではないかと思わせるほどの圧力を発している。

「私は生きよう。一切の無駄なく。全力で。全盛で。全開で。全生を持って!!」

足を止め、張譲は後ろを振り返る。

驚く孟陀を視界にも止めず、歯牙にもかけず、もはや見えなくなつた李信の姿を脳裏に描き、老若男女を魅了する花も恥らう可憐な笑みを浮かべ。

「喜べ、爺。この張譲——天命を知ったぞ!!」

この日この時この場所。

張譲は、確かに目覚めの産声を上げた。

第4話：乱世の英傑、覚醒す

宮中は魔窟だ。

あそこは人ならざるモノが住んでいる。人の姿をしているだけの異類異形。怨霊怪異。魑魅魍魎。

己の欲を満たすためならば、人を殺すことさえ躊躇い無くやってのける怪物達の住処。

とくに十常侍と呼ばれる宦官には、逆らってはならない。彼らに反抗するということは、宮中そのものを敵に回すということと同義に等しい。それは幼い頃より誰しもが耳が痛くなるほどに子守唄のように聞かされることである。

だが、宦官が宮中の全てを掌握しているか、と問われれば首を横に振らざるを得ないだろう。

何故ならば、十常侍の全てが協力関係にあると世間では思われているが、実際はそうではないからだ。特に十常侍の筆頭と言われている張讓と趙忠の二人の関係は最悪と言っても良い。

以前は張讓が面倒を嫌って表立って対立していなかったが、数年前から突如としてそれまでとは正反対の対応を取ることとなる。

隙あらば喉元を搔っ切ろうと虎視眈々と隙を狙うようになった張讓に、流石の趙忠も油断も出来ず、その結果ここ数年は宮中は非常に表面上は穏やかな空気が流れていた。

もつとも二人は水面下で激しい権力争いに従事していたのだが、それは宮中に勤める者ならば嫌な空気を肌で感じ理解することができたであろう。

そんな魔都の中心である洛陽が宮中。

煌びやかな装飾が為された廊下を、壮年の男性と幼い少女が連れ立って歩いていた。

朱色の支柱が視界が届く範囲、さらにはそこから先まで延々と等間隔で立ち並び、足が踏む床は染み一つなく白色の輝きを放っている。

斜陽を迎えているとはいえ、中華を統べし大国というのは伊達ではない。特に財を尽くして建設されたこの宮殿は、人の想像を絶するほどに豪華絢爛。富に溢れ、この世の光景とは思えない。

この宮中に初めて足を踏み入れた少女にとって、そんな感想を持つのはある意味当然の結果であった。

コツコツと床を歩く音が、少女の耳にやけに響くように聞こえるのは緊張しているためだろうか。

喉の渇きも尋常ではなく、激しい動悸が前を歩いている父に聞こえるのではないかと勘ぐってしまう。

改めて前を先導する父の背を少女は見た。短く刈り揃えられた黒髪に、高い身長。

質素だが造りのしつかりした紫紺の衣服に身を包み、目の前の天上の世界にも似た景色も慣れたものなのか、彼の足取りに一切の不安は見受けられなかった。それでも、娘である自分に気を使ってか、歩調はゆっくりとしている。緊張していて今まで気づかなかったが、そのことに心の中で感謝を送り、遅れないように歩くペースを少し速めた。

「――あまり緊張するなよ、華琳」

外見に相応しく、どつしりと重い声で前に行く男性がついてきている娘――華琳に話しかけた。

ちらりつと少しだけ顔を後ろに向け娘の様子を窺ったが、彼が考えていたよりも随分と普段通りだったのか、少しだけ笑みを浮かべて歩みを再開させる。

「はい。問題ありません」

華琳――姓は曹。名は操。字は孟徳。そして、真名が華琳。

彼女は、男性の言葉に力強く頷いた。

この時代、とある事情により真名と呼ばれる特殊なものが存在していた。

姓はそのまま家名を指す。次に名前が来て、成人した証明として授かる字。最後に真名と呼ばれる名前が来て、個人名となるのだ。

真名とは、文字通り、真実の名前という意味合いを持つ。この世界に生まれ落ちたその時に、親から感謝と愛情を込めて名づけられ、その人物そのものを指し示す絶対不可侵の名前だ。

故に、その真名が持つ意味は大きい。命よりも重いものだと考える人も多く、もしも許可無く真名を呼べばその対価として命を要求されることになったとしても情状酌量の余地はない。

そんな意味合いを持つ真名で彼女の名を呼ぶ。

呼ばれた本人は全く顔色を変えずにいるのにも理由がある。

その性質上、真名を呼び合えるのは極限られた者のみ。

例えば、親。兄弟。夫婦や近い親類。親友と互いに認めるもの同士。命を賭して仕える主従などにしか許されない

つまりは、男性は彼女の真名を呼ぶことを許された人物。

曹嵩巨高——それが彼の名前であった。

寡黙だが、情に厚く、忠考を重んじるとこの時勢で珍しい人物だと名を馳せている。

「なに、心配するな。張讓様は世間で言われているような方ではない。お前自身の目であの方と向き合えばよい」

「——はい」

華琳の緊張を解くように、ゆっくりと穏やかに語りかける。

短く返答をし、一度だけ大きく深呼吸をすると身体中を支配していた緊張感が、適度に解けていく。

粘土のようにへばり付いていた重い空気を振り払うように、少しだけ大股になつて宮中の廊下を突き進む。

宮中の空気と威容に吞まれていた彼女の姿はもはや無い。

極上の蜂蜜を思わせる色合いの金色の髪。ツインテールのように左右に分かれたそれがぐるりと巻き髪になっている。曹嵩が着ている服と同色である紫色の可愛らしい服で着飾っていたが、父とは異なり些か此方は高級な布が使われており、装飾にもそれなりの費用がかかっているのは一目瞭然であった。

薄く細く形作られた眉に、程よい大きさの目。万人を魅了するかの

ような顔立ちは、可憐でありながらも美しく、端麗かつ秀麗。しかし、そんな容姿よりも彼女の惹き付けられる点を挙げるとすれば、今年で十二を迎えた少女とは思えない強い輝きを感じさせる蒼天の如き瞳。蒼い、青い瞳が見るものの背筋を粟立たせる。年齢と比例した小柄な身体ではあるが、それでも彼女が並々ならぬ傑物であることは少しでも見る目がある者ならば即座に理解できるはずだ。

己の愛娘の雄姿に、より笑みを深くした曹嵩であったが、突如として彼は歩みを止める。それと同時に浮かべていた笑みは瞬時に消え去り、口元を引き締め表情を消し去った。

何事か、と華琳もまた父の背中の一歩手前で立ち止まり——その理由が判明する。

二人の前から数人の人間が此方に向かってくるのが見えたからだ。徐々にその者たちの姿が大きくなっていき、曹嵩と華琳の前にくると足を止めた。

「おやおや。曹嵩殿ではありませんか」

どろりつと粘着性のある黒い声。

聞いているだけで苛立ちを煽り、不快で神経を逆撫でするような人の声とは思えない音だった。

くんと反射的に鼻を鳴らした華琳が、表情を歪める。何故ならば、彼女の鼻が嗅ぎ取ったのは、思わず逃げ出したくなる程に穢れた臭い。漂う悪臭が、濁流となって幼い華琳の心を激しく打ちつける。

実際に、華琳達の前に立ちふさがっている者達から悪臭が漂っているわけではない。鋭敏な華琳だからこそ気づいたのだ。今自分達の目の前に居る男達は、人として終わっていると。最悪を通り越した最悪。関わってはならない類の宮中に巣くう魔物。それが彼ら——即ち漢を喰らい、腐らせた宦官達。

「これは、蹇碩殿。お久しぶりです」

曹嵩の台詞に、華琳はその名前の人物を記憶の中から検索する。

良くも悪くも、その名前の人物を思い出すのにかかった時間は一秒も必要としなかった。

現在この洛陽を掌握している十常侍の一人——それが蹇碩。趙

忠の派閥の一人にして、宦官ながら上軍校尉に任ぜられその筆頭として近衛軍を統括している男だ。

「そうですね。随分と顔を合わせていませんでしたな、互いに。曹嵩殿もお忙しいようで……御身体の方は大丈夫ですか？」

「はい。これまで病一つ患ったことがないのが自慢でして」

「ほっほっほ。それは羨ましいですね。健康の秘訣でもお聞きしたいところですよ」

「生憎と意識して行っている健康法はありません。強いて言うならば適度な運動かと」

「ほうほう。なるほどなるほど」

「ぐくりつと華琳は口の中に何時の間にか溜まっていた唾液を嚙下した。

言葉だけ聞けばただの世間話だが、その裏に乘せられている感情は怖ろしいほどに冷たい。両者ともが、互いをまるで敵を見るかのような目で射抜いている。

あの穏やかな父が、これほどまでに誰かに敵意を向けていることに驚きを隠せなかった華琳の感情が僅かに揺らぎ——それを見逃すほど宮中に住まう悪鬼は甘くは無かった。いや、或いは最初から彼女に目をつけていたのかもしれない。

曹嵩という百戦錬磨の人間を相手取るよりは、未だ小娘にしか過ぎない華琳の方が組み易しと考えるのが当然だろう。

「おや？ 曹嵩殿は本日は娘殿と御一緒に？」

人当たりのよい老人。自分の孫娘に話しかけるかのように優しい蹇碩の瞳がぎよろりつと華琳の全身を嘗め回す。

反射的に立った鳥肌に、寒気。対峙するだけで削られていく精神。心を直接ヤスリで削られているのではないかと思わせる圧力が、音を立てて華琳を飲み込む。

性根がもはや救い様が無いほどにどす黒く、己以外は人を人とは思わぬ化生の言葉は、それだけで物理的な楔となって幼い少女の肉体を蝕んでいく。

「……ええ。張議殿とお会いする約束がありました」

「張讓殿と？ おお、そうでしたか。あの御方がお会いするとは珍しい。余程貴方の娘殿は優秀だということですね」

恐らくは知っているというのに、態と驚いた振りをする蹇碩の姿が憎らしい。

曹嵩は舌打ちの一つでもしたくなる己を律しながら、華琳を庇うように横に身体をずらす。

「いやはや。羨ましい話ですな。才ある者を集められている張讓殿に眼をかけられるとは。ああ、素晴らしい。しかも、あの曹嵩殿の娘殿とあれば、その将来性は計り知れませんか」

一歩、蹇碩が踏み出した。

粘つく圧力が、華琳のみならず曹嵩さえも包み込む。

指向性のある衝撃が音を立てて波打ってくることに、胃の中にあるものが逆流してきそうな感覚さえ受けた。

それに敗北するように、華琳は顔を床に向ける。それを誰が責めることなどできようか。

これが十常侍。

宦官の頂点に立ち、洛陽の魑魅魍魎の主達。

確かに彼らは、産まれながらにしての風格を備える張讓とは異なり、皇帝に取り入って今の立場と権力を手に入れたに過ぎない小物であった。

だが、権力が人を作るのもまた事実。

今の地位を失いたくない。常にこの光景を見ていたい。更なる富や名声が欲しい。

そんな欲望を原動力として十常侍は漢という国の高き場所にて在り続けた。

やがてその欲望はただの小物であった彼らを、狡猾で老獪な人の姿をした化生へと変化させるに至った。

さらに近づいてくる蹇碩の前に立ち塞がろうとした曹嵩に反応して、蹇碩の従者達が動きを見せる。

中には明確な敵意を視線に乗せてくる者もあり、それがピリピリとした緊張感を生み出す原因となっていた。

「愛らしい娘殿ではないか。まるで小動物のように震え——」

華琳の脅える姿に満足感を覚えていたのだろう。

醜悪に顔を歪めていた蹇碩の足が止まった。足を止めざるを得なかった。

曹嵩の顔に浮かぶ憤怒によつて——ではなく、その背後。彼に庇われているはずの小娘の表情を見てしまったが為に。

何時の間にか、俯いていた少女は顔を上げていた。

それだけならまだ良い。だが、彼女は、華琳は笑っていた。寧猛に、この程度なのかと挑発するように。

「——下がれ、下郎」

静かな、本当に静かに、呟くような声だった。

未だ官位も持たぬ、ただの小娘にしか過ぎない華琳の小さな一喝に、蹇碩は気圧され歩む足を止められ逆に一歩後退した。

少女の言葉は、蹇碩の圧力など比べまでも無いほどの領域。彼の圧力が湖に小石を投げ入れ揺れ起こされた波紋とすれば、今現状で華琳が放つのは比較することさえおこがましい巨岩を放り投げて起こされた津波。

たかが、小娘。

そう高を括っていた蹇碩の想像を遥かに超える敵対者に、久しく感じていかなかった焦燥に襲われた。

まずい、と。このままこの小娘を生かしておけば、近い将来自分達の道を阻む存在になるのは確実。

全力で排除せねばならない。奇しくも蹇碩のみならず、彼の従者達も同様の想いを抱いた。

今ここで消さねば、自分達が喰われかねない。

脅迫観念染みた苛立ちに、もはやこの場所が宮中の一面であるとい

うことさえも忘却しかけたその時――。

「――曹嵩殿。お迎えにあがりました」

蹇碩が感じた苛立ちも焦燥も、華琳の放つ圧力も霧散させる男の声が響き渡った。

ひい、と誰かが小さく言葉にならない悲鳴をあげる。華琳でさえも、信じられないものをみたかのように瞠目した。

彼ら彼女らの視線の先。

この場の主役をたった一言で搔っ攫い、自分に注目を集めたのは一人の少年。

華琳よりは三つか四つ程年上。背丈は蹇碩よりは高いが、曹嵩よりは頭半分小さいくらいだろうか。

口調は丁寧だが、それがどこか造り物めいた印象が受けたのを華琳は勘違いではないと確信した。

皺が目立つ黒い着流し姿の少年。

豪華絢爛な宮中にいる人間とは思えない。ましてや仮にも十常侍や大尉たる曹嵩の前なのだ。

こんなぞんざいな服装で、果たしてこの宮中にいていいのだろうか。

だが、そんな疑問など下らない。

何故ならば、目の前に立つ男の異常性を理解してしまったからだ。違う。明らかに違う。雰囲気か。空気が。気配が。圧力が。

こんな宮中において良い類の人種では――存在ではない。

もはや体臭になるほどに染み付いてしまっている血臭。百や千どころではない。万や十万でも足りない。こんな時代では決して到達できない前人未踏の世界に軽々と足を踏み入れ、そこに居座っている戦人の香りが迸る。

蹇碩や華琳を大小の違いはあれど波紋と例えれば、これは台風。全てを薙ぎ倒し吹き飛ばし、人の全てを蹂躪する大災害。対抗する方法

も手段も存在しない凶悪なまでの天災だった。

華琳が受けた衝撃よりも、他の者達の様子はある意味わかりやすかった。脅え、怯え、蹇碩の従者がパクパクと口を開閉させながら、必死に言葉を紡ごうと試みる。

そしてそれは、十秒以上も経ってようやく実を結んだ。

「李、李信——ど、殿」

李信。

それが少年の名前なのだろう。

不思議と華琳は、その名がストンつと心の奥に嵌りこむ様な錯覚を感じた。

そんな少女の心の内のことなど知ったことかと、李信は足音もたてずに蹇碩と曹嵩の間に割って入ると視線だけを一度蹇碩へと向ける。

「ち、違う。違うんだ、李信殿。私は、私は何もしていない。い、いや……そ、そうだ!! 曹嵩殿を張讓殿のもとへと案内しようとしていたところなのだ!!」

蹇碩は顔を引き攣らせ、必死に弁明するようにそう答えた。

どの口でほざくか、と思わず口から出そうになった華琳であったが、寸でのところで発言を止める。

何故ならば、既にこの場は自分のモノではない。李信の登場により、完全に場の支配を奪われた。幾ら言葉を紡ごうとも、それは意味を為すことは無いだろう。

「そうでしたか。有難うございます。では、後は私が案内いたしますので」

「そ、そうか!! では後はお任せするとしよう」

完全に腰が引けた蹇碩とその従者は、何度も頷くと途中足が震えているのか躓きそうになりながら何とか李信達の前から姿を消して

いった。そんな彼らを見送った李信は、はあつと溜息をつく。「ああ、面倒くせえ。つーか、あんなあつさりと逃げるなよ」

やけに乱雑になった言葉遣いでブツブツと呟く李信は、右手で頭を何度か掻き篦る。

「はははは。それは無理な話かと。李信殿を前にして。平静を保てる文官など私とて知りませぬぞ」

「いやいや。おっさんも十分普通にしてると思うけどな」

苦笑する曹嵩の胸元を軽く拳の裏で小突く李信の態度に、再度驚かされたのは華琳だ。

厳格で、寡黙な父が楽しげに笑顔を見せてまで話をしている。しかも、こんな親しげな対応を許す相手など、見たことが無い。年の離れた友人——そんな関係が二人には相応しい。父が家族よりも信頼感を漂わせている李信を見る目に若干の嫉妬が混じるのも仕方の無いことだろう。

「文官でも化け物染みた奴らを何人か知ってるしな。いやむしろ——
——ごまんといたぜ」

——あの時代には、と。

胸中でそう付け加えた李信の言葉に驚かされたのは、曹嵩と華琳だ。

曹嵩は、李信の実力を知っている。実際にその目で見たことがあるからだ。

張譲に紹介されてから二年ほどの付き合いだが、それでも彼の人外の如き能力の一端を窺い知ることが出来ていた。無論、李信のことを知っているのは曹嵩だけではない。先程の蹇碩の態度を見れば推測できるかもしれないが、十常侍の宦官たちも李信の底知れなさを知っている。

十常侍全てが総じて小物だとは言わないが、それでも彼らの中にはそういった者達も数多い。先程の蹇碩が良い例だろう。

だが、小物だからといって馬鹿にすべきではない。小物は小物なり

に、鼻が利く。天変地異を嗅ぎ取る小動物のように、危険な存在と言うものに敏感なのはそれらであると断言しても構わない。

つまりは、自ずと悟ってるわけだ。李信永政とだけは関わってはならない、と。

勿論本来ならば大した地位にいるわけでもない李信を恐れる筈が無い。

十常侍でさえも彼と関わりあいになるのを避ける理由は、やはり彼が張讓の寵愛を受けているのが挙げられる。彼女が明言しているわけではないが、見ていれば誰であろうとも確信できるほどに李信を重用しているからだ。それなのに、李信はというと随分と淡白な反応をしているのが、哀愁を誘う。

そしてもう一つの理由。

それは、十常侍にとって李信が苦手な類の相手だからである。

宦官として、国の権勢を牛耳ってきた彼らにとって謀略、策謀、姦計はお手の物だ。そういったことを得意とする者ならば十常侍にとっては相手取るには容易い。

しかし、李信は違う。純粋なまでの暴の化身。ただ、そこに在るだけで人の心までも押し潰すことが可能な暴威。

謀略を持って、李信を追い落とすことは容易いだろう。しかし、もしも、万が一にでも彼がそれを知って、襲撃してきたらどうか。結果は火を見るよりも明らか。十常侍など塵芥のように蹴散らされてそれで終わりだ。彼に対抗できる手駒など、今のところ彼らには存在すらしていないのだから。

無論、彼が処罰を受け入れてそのまま宮中を去る可能性のほうが高い。だが、重ねて言うことになるが、万が一李信が反乱を起こした場合を考えればそんな手段を取ることは出来ない。

地位や名譽も大事だが、結局のところ一番大事なのは自分達の命。僅かでも命の危険があるならば、その手段をとることなど出来はしないというのが十常侍の判断であった。

「それで、そっちの小さいのが？」

「はい。娘の——」

華琳を紹介するべく曹嵩が口を開くものの、そんな彼を遮るように華琳が足を踏み出した。

一切の気後れも無く李信の眼前に悠然と立つ姿は、父である曹嵩をして驚かされる。確かに優れた才を持つ子だとは考えていたが、随分と自分は娘を過小評価していたようだと思認識を改めた。

全力とは程遠いとはいえ李信を前にして、平常心を保つなど並の者ができようか。友として付き合ひのある曹嵩でさえも難しい。少なくとも、彼が知る限りそんな傑物は、張讓しか知らなかった。

「御紹介に預かりました。お初にお目にかかります。姓を曹。名を操。字を——孟徳と申します」

睨みつけるように己の名を名乗る華琳に、李信は、ほうつと思わず呟いていた。

第六感。本能。勘——様々な言葉はあれど、李信の直感を僅かに擦る圧力を感じさせる。

面白いなつと口の中で消えていく言葉。

聞いてはいたが随分と年若い。自分が初めて死線を潜った頃よりも若いか、或いは同じくらいだろうか。武人としても彼女の年齢にしては破格の腕前。かつての若き自分と戦えば負けるつもりはないが、それなりに良い勝負が出来るのではないかと具にもつかないことを考えてしまった。

研ぎ澄まされた所作。武人としての力量。十常侍の悪意を押し返す心の強さ。肉体と精神の完璧な調和。

それが、何故かわからないが、物悲しさを感じさせる。いや、本当はその理由はわかっていた。ただ、目を逸らしたただけだ。

ドクンつと李信の心臓が強く胸を叩く。

曹操孟徳と名乗った少女は。目の前にいる者は、人にあつて人為らざる者。

人の上に立つ事が定められた者。即ち、天が王と認められた者に他ならなかった。

似ている。少しだけ似ている。
本当に少しだけ、あいつに似ている。

「——ああ、くそつ。未練、だな」

李信の口から漏れ出るのは果てしない寂寥。
友を残して逝ってしまったという悔恨。友に降りかかる災禍を砕く剣として、防ぐ盾として支えるという誓いを破ってしまった慙愧の念。

自分が生きてさえいれば、友が狂うのを止めることができた筈だ。中華全ての憎悪と怨嗟を背負って戦い続け、ようやく統一した国を僅かな時で滅亡させることは無かった筈だ。自分達はそんなことの為に戦ってきたわけではない。病の身で逝ってしまった己がきつと全ての諸悪の根源だったのだろう。

それが、ただただ、悲しい。ただただ、悔しい。ただただ、虚しい。

張讓は言った。

数年前に出会ったとき、自分は生きながらにして死んでいたと。

それは違う。違うのだ。

それは李信だ。その言葉が真の意味で相応しいのは李信永政という人間だ。

「——生きることから逃げているのね、貴方」

ぽつりつと華琳が呟いた。

それは小さな声だった。しかし、強烈な言霊となって李信の耳朶を打つ。

小娘にしか過ぎない華琳に、己の痛い部分を突かれたのだ。何を馬鹿なことを、と激昂するのが普通だろう。

だが、李信はガシガシと頭を搔きながら小さな王を見つめ返す。

「そうだな。ああ、そうだ。自覚していなかったが、どうやらそうだった

たらしい」

「——そう。それで貴方はこれからどうするの？」

李信の返答に、華琳はキョトンつと怪訝な顔をして見せた。

どうやら彼の返答が自分の想像とは随分と異なっていたようで、それに驚きを隠せなかつたらしい。痛いところを突かれたことへの意趣返しのできた李信は少しだけ満足感を覚え、華琳への返答を口に出す。

「そうだなあ……今更。そう良く考えれば今更な話だった」

カカカカつと少年らしからぬ笑い声を上げて、李信は空を仰ぐ。

「色々考えてくれる奴は今もういないしな。なら決まってる——俺は前に突き進むだけだ」

ニヤリつとやけに男臭い笑みを口元に浮かべ、李信は両手を広げた。

全てを掴み取るように、そしてそれを逃さぬように。

「また目指してみるかな、大將軍つてやつを」

少年の頃から支え支えられた友はいない。

愛し愛された妻達はいない。

戦場を共に駆け抜けた部下達もいない。

鎧を削りあつた戦友もいない。

命を奪い奪われあつた強敵もいない。

友と妻と部下と戦友と共に創りあげた国もない。

何もかもが無い世界。

何一つとして眩しいものが無いこの時代。

だがそれでも俺は——今を生きている。

「まあ、あの世に行つたときの土産話くらいにはしてやらねえとな」

その刹那、それは起きた。

ズズッと音を立てて李信から横溢するのは、言葉では表現できない何かであった。

百を超える戦場を最前線にて駆け抜け、数多の強敵との戦いを潜り抜け、数十万単位の軍勢を率いて、戦国七雄と呼ばれる国を滅ぼしつくした悪鬼羅刹外道鬼人さえも進むことを躊躇うような修羅道を、友との約束を果たすために何の躊躇いもなく突き進んできた秦の大將軍。中華六将が一人。国家間の戦争が当たり前のように行われていた春秋戦国時代の最強に数えられる武将——李信の本当の意味での覚醒であった。

これまでの李信など子供同然。

そこに在るだけで人を圧死させるに足る圧力を放つ文字通りの化け物が、嬉しそうに笑って華琳の眼前にいた。

「再認識させてくれた礼だ。俺に出来ることなら一つだけ叶えてやるよ」

曹嵩ですら言葉を失う空間で、李信は腰を落とし華琳と目線の高さを合わせる意外なことにそう提案した。

こんな圧が溢れる中で、齡十二にしか過ぎない子供になんと無茶なことを、と頬を引き攣らせながら叫ぼうとした曹嵩の予想は一人の英傑によって打ち砕かれる。

「——ならば一つだけ」

躊躇うことなく、華琳は李信へとはつきりと言い放った。

「私が覇を唱える為に。私が私の道を貫く為に——」

普段の自分とは思えない。己の感じるがままに、思うが俣に言葉を紡ぐことに驚きながらも止める事はない。

「——私のものになりなさい。名も知らぬ天下無双の大將軍よ!!」

理屈理由などどうでもいい。

李信を従えるには自分の本気を示さなければならぬ。道理、道義、道德、倫理、それら全てを捻じ曲げてでも成し遂げようとする気概。それを押し通すだけの覚悟を突きつける。

烈火波濤の燃え上がる大瀑布の願いを示した華琳に、李信はカカカ

かつと本当に楽しそうに笑って、くしやりつと彼女の髪を撫で上げた。

そして、即座に放たれるデコピンが華琳の額を軽く打ち据えた。痛つと呻いた少女を尻目に、李信は背を向け宮中の廊下を歩き去っていく。

「十年早いぜ、曹孟徳」

言葉とは裏腹に、彼の背中は期待に満ちている。

曹操孟徳という未完の神器に、己を従えて見せろと、背中が語っていた。

ヒラヒラと片手を振って立ち去った李信の背中を見送っていた華琳と曹嵩だったが、沈黙は長くは続かない。

「——お父様」

「何だ、華琳」

ぞつとするほどに、妖艶に。だが、童女のように愛らしく。

曹操孟徳は妖しく笑う。

「あの御方の名前は何と仰るのでしょうか？」

「……姓は李。名は信。字は永政。張讓殿の懐刀と噂されている方だ」

「———そうですか」

唇に指を持っていき、カリッと強く噛み締める。

蒼天の如き蒼い瞳が、李信という名の台風によって荒らされ潤んでいた。

「お父様。李永政殿は———竜ですわね」

何を言っているんだ、我が娘は。

まさか口に出すわけにもいかず、曹嵩は眉を顰めるが、肝心の華琳はそれを気にも留めずに李信が去っていった方角をじつと見つめている。

中華に語られる神獣。

超上の存在を示すその言葉。

「我ら人は地を歩むだけの存在。しかし、あの御方は遙かなる蒼天を
行く。我ら人がそれを従えられる筈もない」

ガリつと噛み締めていた指に歯が突き刺さり、やがて皮膚を食い破
り浅くではあるが血が流れ出る。

口内を満たす鉄臭い味わいを感じながら、それに気づいていなかった。

「でも、諦められない。では、どうすればいいのか？ 答えは簡単なこ
とです、お父様」

凄絶な笑みを口元に浮かべ、華琳は嗤う。

片手を真つ直ぐに掲げ、指をピンつと空に向かって指し示す。

「従えることは出来なくても、並び立つことは出来る。ならば——」

父である曹嵩でさえも肌が粟立ち、戦慄を隠せないほどに冷たく狂
おしい想いを吐き出しながら、華琳は神聖な誓いをするように掲げて
いた手を強く握り締める。

「——私も竜になればいいだけの話です」

乱世の霸王。

曹操孟徳——覚醒す。



「ようしよ。ようしよ」

小柄な赤みがかった長い髪の少女が両手一杯に筵を持って歩いていた。

それを見かけた中年の女性が、慈しむようにしてその少女に声を掛ける。

「あら、玄徳ちゃん。新しい筵できたの？」

「はい!! 今回は自信作なんですよ」

にぱっと天真爛漫な笑顔で答える少女だったが、突如として女性から視線を逸らして明後日の方角を見上げる。

尋常ならざる少女の様子に、中年の女性は心配そうに声を掛けるが、それに反応することはなかった。

「——何だろう。胸がざわざわする。誰かが、呼んでる？」

自分の胸に手を置いて、ぎゅつと鷲掴みにする少女は、ハアつと熱いため息をついた。

「わからない。苦しくて悲しくて——でも、強い人」

潤んだ瞳で遥かな蒼天を眺め、少女は首を傾げた。

「——貴方は、誰？」

仁徳の王、劉備玄德。

英雄は英雄を知る。

だが、中華が彼女を知るまでにまだしばしの時を必要とする。



「それでね。私は思うわけよ、母様」

「そうね、雪蓮。私もそう思うわ」

こんがりと健康的に焼けた肌が特徴的な少女と、その少女をそのまま大人にした雰囲気的女性が向かい合って談笑していた。

その傍にはさらに小さな幼女が一人。仲むつまじく、暖かな雰囲気
が部屋には流れている。

しかし――。

「うう……姉様」

「どうしたの、蓮華――!?!」

ビクンつと少女と幼女が身体を震わせた。

それに訝しげに眉を顰めた女性だったが、当の本人である二人は、
ここではないどこか、遙かなる北方をじっと見つめている。

一体何事かと気にはなるものの、娘達の普通ではない姿に声を掛け
るのも憚れた。

「姉様……姉様……!!」

「なに、これ。わからない。でも、でもでもでも――何なの、これは
!!」

江東の小霸王。

小霸王の後継。

南海に煌く二つの英雄もまた、乱世の霸王の覚醒に揺さぶられることとなった。

そして――！。



洛陽が中心の宮中。

極一部の者しか入れないさらなる深奥。天子がすまうことを許された禁中。

その禁中の深淵の彼方に、彼女はいた。

無駄に広い室内。

この世のあらゆる贅を集めて彩られた装飾。

数人は横になれるベッドの上に片膝を立て、膝を抱きしめるようにして虚ろな瞳の少女が一人。

入り口の傍らには侍女が二人。だが、その女性達は少女をこの部屋から出さないための見張りとも感じられる程に視線に人間味を帯びていなかった。

ベッドの上に座っている少女。

彼女は、何と表現すればいいのか。人に問えば、誰しもが答えに困るだろう。

星の瞬くことのない夜天の如き黒髪が、腰元近くまで伸びているそれが、ベッド上に広がっている。

高貴なる血筋と育ちによつて醸し出されている雰囲気は、ある種の威厳を周囲に与えていた。ただベッドに座っているだけだというのに、風格と気品、佇まい、どれをとつても息を呑むほどの格を備えている。無論それだけではなく、少女の格に相応しい、美しい容姿であつた。

張譲や曹操も十二分な美貌であつたと断言できるが、この少女の美しさは少し方向性が違う。

彼女達の美は、人を惹き付ける。即ち人間味に溢れたものである。しかし、この少女の容姿は非人間的なもの。神々しい天上の住人のようと言えば聞こえはいいが、まるで人形のように作り物めいた美しさ。何よりも彼女からは生きていけると言う熱を感じない。ただ、生かされている。そんな印象しかうけなかつた。

——だが、美しい。

生を拒絶しているが故の、妖しい魅力。

生と死の狭間にたゆたう少女は、空っぽな漆黒の瞳でじつとここではないどこかを見つめている。

「……虚しい。ああ、空虚だ。全てが夢幻の如く」

何の抑揚もない少女の言葉に、侍女達は反応をしない。

「何故、何故俺は生きている。私は生きている。生きる意味などもはやありはしないというのに」

聞くだけで身体中の力が抜けていく。

崩れ落ちそうになる身体を必死に支える侍女のことなど認識せず
に、少女は朗々と歌うように続ける。

「ここにはお前がない。お前がないんだ。何故いてくれないんだ。お前さえいれば、お前が支えてくれさえすれば、私は何もいらなかった」

胸に穴が開いたかのような空虚感が、じわじわと侍女達を蝕んでいく。

「お前が、お前さえいてくれれば——」

己の命も相手の命も価値を見出していない少女は、切なげに虚空を見つめ。

「——会いたいな、信」

友に語るように。

恋人に語るように。

少女——劉弁は、混沌としたどろどろの感情を求めている名前にのせて吐き出した。

第5話：李信と水鏡

洛陽の宮中の一画にある執務室。

仕事以外のことでは碌に人も寄り付かない区画の部屋に、二人の男女がいた。

そのうちの一人である張讓は、部屋の窓際に置かれた巨大な机に山のように積まれた竹簡の前の椅子に腰を下ろしながら、即座にその書類に書かれた内容をどう判断すればいいのか見極め裁可を下す。あまりの速度に竹簡に目を通していないのではないか疑いたくなるが、それでも部下からは文句や不満の一つもでないことを考えれば、実際にそれらを見事に処理しているのだろう。

窓から差し込まれる太陽の光が、彼女の白金の髪の毛をきらきらと反射させ、どこか神々しさを感ぜさせてくる。

部屋にいるもう一人の人物。

李信はというと、部屋の隅に置かれている椅子に深く腰掛けてどこかぼんやりと天井を見上げていた。両腕を組み、普段よりも気が抜けた彼の姿が気になるのか、張讓は時折ちらちらと視線を李信へと送ってきている。

何時もの李信ならば、そんな彼女の様子にも気を配ったのであろうが、今の彼は全く反応することがなかった。

微妙な空気が部屋を満たしている中、聞こえるのは張讓が竹簡を処理する音だけ。

朝から変わらない李信の態度に、流石の張讓も何かあったのかと心配しながらも、なかなか聞けずにこのような均衡状態が暫しの間続いているのであった。

「……なあ、張讓」

「ん!? あ、ああ……どうした、李信よ?」

そんな空気を全く読まずに、難しい顔をしていた李信が天井から張讓へと視線を送り話しかけてきた。

不意を吐かれた彼女は、若干の動揺を隠せずに僅かに返答をどもらせる。冷静沈着な張讓らしからぬ姿に、もしもこの場に他の人間がいたら驚いたに違いない。皆が想像している十常侍が筆頭の一人張讓とは、まかり間違ってもこのように感情を露にする類の人間ではないからだ。

「先日の話になるが、初心に帰ってある一つの目標をたてただけだな」

「ほう。お前が、か? それはなかなか興味深い。して、その目標とは?」

李信の台詞が意外だったのか、竹簡を処理する手を止める。

言葉通り張讓の赤い瞳は、これから李信が何を言おうとしているのか期待の色に溢れかえっていた。そしてどこか胸を高鳴らせている張讓の顔を見ながら、李信はその目標を何の躊躇いもなく口に出す。

「——大將軍になろうと思ってる」

「そうか。そうかそうか、大將軍か。くつくつく……随分とまあ、高い目標を持ったな。全く、相変わらず私の想像を超える奴だ」

李信の世迷言を聞きながら、何故か張讓は嬉しそうに笑った。

李家という下級官吏の子でありながら大將軍を目指すなど、呆れるものも言えないとはまさにこのことだ。例え、どんな奇跡が起きようともそれを成し遂げるのは不可能だ。万が一どころか、億に一の可能性すらない。即ち、皆無。誰もがそう判断するであろう告白を、張讓はあつさりを受け入れた。

「とは言っても、中々に困難であるのは疑いようがないぞ? そもそも大將軍とは、何の為にある官職か知っているか?」

「ん? 將軍の最上位ってことじゃないのか?」

張讓の質問に、李信が僅かな疑問を感じながら答えを返す。

それに対して、勉強不足だなと笑いながら、彼女は首を横に振った。

「元はそうかもしれないが、この国に置いては意味が異なっている。大將軍とは確かに武の頂上ではあるが、基本的に外戚勢力の筆頭がその座を務める。軍の総帥と言えれば聞こえは良いが、外戚の者達が我ら宦官と対抗する為の地位なのだ」

つまりは、今の大將軍の戦場は、外ではなく内。

血で血を洗うような、死体で大地が埋まる阿鼻叫喚の地獄絵図が舞台ではなく、謀略と策謀溢れる宮中こそが生きる場所。

「ようするに、だ。お前が考えている大將軍とは少し異なっているのではないか？」

現在の漢の状況を嘲笑うかのように、張讓は両手をあげるその姿はまるでお手上げだと無言で語っているかのようであった。

事実、この国の未来は危ういと彼女は考えている。ここ数年、出来る限りの方策を打ち出してはいるものの、絶対的に協力者の数が少なすぎる。十常侍の大多数は趙忠派なのを加え、外戚集団、その他の官僚。各地方の役人、それら全てがもはや民を食い物にするだけの害悪にしか過ぎなくなっている。さらには異民族の侵攻、国の財政の逼迫。むしろ好転する要素が全く持って見つからない。如何に張讓といえど、現在の状態を覆す手段は持っていない。破滅への歩みをほんの僅かに遅延させるだけで精一杯なのだ。

「私の協力者という立場にいるお前では、絶対に為り得ない官位ということだ。それとも——」

熱く煮え滾った真紅の瞳で李信を射抜きながら、張讓は笑みを静かに深くする。

それはどこか三日月を連想させる狂ったような笑みだった。

「——宦官と敵対すればなれるやもしれんぞ？」

「必要とあればな」

漢という国の頂点に近き怪物の重圧を一身に受けながら、李信はあつさりと言いつつ切った。張讓がその気になれば、李信など一声で事実無根の罪を着せられ極刑に処せられるだろう。それなのに、微塵も怯

えることのない彼の姿に、ほうつとやけに扇情的な吐息を漏らして十常侍の筆頭は笑いながら机を軽く何度か叩いた。

「くそつ。ああ、まったくお前と言う男は私の期待を良い意味で裏切ってくれる。この私を前にして、平然とそう言い切るお前の気概。決して曲がらず折れず朽ちずの鋼のような精神力。そのどれもが、眩しくて仕方がない」

李家にて出会って早数年。

その時に比べ、外見は随分と成長した李信と全く容姿が変わらない張讓。

だが、彼女のうちにある気持ちは全く変化をもたらししていなかった。

李信永政という怪物の主に通ずる存在に足れ。その意思だけは常に彼女の心にある。

それだけを目標に、野望を胸に抱きこれまでの道を歩いてきた。

「くつくつく。我が心の臓を騒がせるこの感情を何と表現すればいいのか。男を知らぬ生娘のように心が熱く、身体が火照るぞ。人の心とはまったく不可解で摩訶不思議なものだ」

「いや、生娘のように……というか、お前生娘だろう」

「——空気を読め、馬鹿者がっ」

李信の突っ込みに、張讓が唇を尖らせる。

些か言葉尻が強くなったが、それも無理なからう話だ。

むしろこれは客観的に見れば李信が悪い。

「悪い悪い。てか、まあ……敵対するつもりは今んとこないから安心しろよ」

「……今のところというのが気になるが、仕方ないか。元より、そういった約束だ」

やれやれ、と机に両肘を突き白魚の如き両の指を絡めさせ、その上に顎を乗せる張讓。

真紅の瞳が、一瞬とはいえ寂しさに揺れるものの、それを相手に気

取られる前に一度瞳を閉じる。次に開けた時には、普段の張讓らしく傲岸不遜な力強い瞳へと戻っていた。

張讓の出来る限りの自由を李信へ与えるその返礼として、李信は張讓へと力を貸す。

そこに主従の関係はない。あくまでも二人は協力者。対等の立場として、彼らは付き合っている。

当然、そのことは他の者には知られていない。知っているのは張讓の従者である孟陀くらいだろうか。そして二人以外がいるところでは李信も張讓へ対して敬意を示して対応する。仮にも十常侍である彼女に、普段の本来の李信の態度を取っていたら問題がありすぎるためだ。下手をしたら張讓が軽んじられる結果になる怖れも考えられる。もつともそれが、李信が張讓の寵愛を受けているという誤解の原因になっているのだが、わざわざ否定するつもりは毛頭なかった。

それを考えたら遙か昔、李信がまだ少年だった頃の始皇帝へ対する態度はとんでもないものであった。

当時は秦の脆弱な若王とはいえ、下僕であった李信からしてみれば雲の上の存在。言葉を交わすことはおろか、顔を見ることさえなかったはずだ。そんな^{えいせい}政へ対して、どれだけの不敬な態度をとったことか。お前だの、真名には及ばずとも重視される名を呼び捨てで呼んだり、果てには殴りつけたりもした。今思えば、百回は首を斬られる重罪ではなかったかと若き頃の自分に呆れてしまう。そんな関係でありながらも、李信將軍と始皇帝は支え支えられる終生の友であったのだから、世の中分らないものである。

自分も大人になったものだと思えながら、しかし、敬語等を使用するとき背中がむず痒くなるのを見るに、やはり根っこは変えることが出来ないのだと苦笑しかできない。

「……さて、と。どうしたものか」

本当に困った様子の李信が一人ごちる。

中華六将と謳われた彼の前世とも言うべき人生は、筆舌に尽くし難い。戦災孤児の身でしかなく、幼くして親を亡くす。別にその程度はあの時代ならば有り触れたことだ。だが、後ろ盾も碌にない脆弱な若

王だった頃の始皇帝とともに王弟の反乱を制圧し、その論功にて下僕の身から、平民となる。そしてそれから激動の人生の連続だ。常に戦場の最前線にて剣を振るい続け、名のある武將を屠り、死地を踏破し、飛信隊の信の名は中華全域に轟いていった。

そして百人將、三百人將、千人將、三千人將、四千人將、五千人將を経て——やがて將軍へと至る。

息を吸うかのように戦争があまりにも当たり前前のように行われてきた暴乱の時代。

それはあまりにも辛い人生ではあったが、それでも李信は己の武力で道を切り開いていった。

しかし、今生きているこの時代は、あの頃と当然異なる。秦の頃よりも平和になったのは実に有り難いと思うのだが、その反面——武官としては手柄を立てにくい。あるのは異民族の侵攻か、小さな反乱といったところだろうか。はつきり言って、過去のように手柄をあげて上にあがるのは非常に難しい。

この場に軍師として、妻としても尽くしてくれた河了貂がいれば案の一つや二つ出してくれただろうが、居ない者に縋ったとしても事態が好転するわけもなし。同じく妻であり、中華六將の一人でもあった智と武に優れた羌？ならば、こんな時代でも頭角を現すことができるかもしれない。

自分の開いた掌をじつと見つめ、李信は再度深い溜息をついた。かつての自分がどれだけ恵まれていたか今さながらに実感できるのも、虚しい話だ。

優れた副官。李信のことを誰よりも理解していた軍師。無茶無謀を繰り返していた自分についてきてくれた部下達。

彼らがいれば、例えこの国であっても、その名を轟かせることが出来る自信があった。そんな彼ら彼女らは、今の李信の下には誰一人としていない。自分がどれだけ周囲に助けられてきていたのか、それが実に身に染みる。

が、重ねて言うが無いものねだりをしていても仕方がない。

己にあるのは戦場で培い、積み重ね、到達したこの武威。そして河

了貂をして、感情抜きにしても軍師としてはお前とは戦いたくない——とまで言わしめた、策も罫も何もかも第六感のみで打ち破っていく中華最強と称された本能型の將軍としての技量のみ。

「まあ、考えても仕方ない」

思考をあつさり打ち切ると、李信が軽やかな動作で椅子から立ち上がる。

「む、どうした？」

「難しいことを考えるのは俺の柄じゃないしな。とりあえず飯を食ってくる」

「……もうそんな時間か。良ければ一緒にどうだ？」

「悪いが、街で美味しい店を見つけてな。最近はそっちに顔を出してるんだ」

「……そうか」

少しだけ肩を落とした張讓には目もくれず、部屋から出て行こうとする李信。

そんな彼を見送っていた彼女が、ふと思いついたように口を開いた。

「そういえば、李信よ。良くない噂を聞いた。最近洛陽の街で死体が見つかっている、とな」

「あまり言いたくないが、珍しいことじゃないだろう？」

李信が何を今更と言った表情で聞き返す。

確かにその通りだ。洛陽はかなりましになったとはいえ、貧民外などは犯罪が横行しているのが当たり前前の場所だ。それこそ張讓が言った死体が見つかることなどそう珍しいことでもない。

「——貧民外の方ではなく、洛陽の街の中で、だ。しかもそれなりの官位の者達ばかりが連続して殺されているらしい」

「それは、物騒だな」

「ああ。で、だ。どうにも殺された者達は趙忠派から抜けようとしていた節がある。他の派閥に行かれるよりは、という苦肉の策だとは思

うが」

「おいおい、そこまでののか？」

「趙忠の糞爺ならやりかねん。見事なまでに証拠がないから何とも言えんがな」

忌々しそうに吐き捨てる張讓に、李信は遙か昔のことを思い出した。

かつて秦という大国を王であるえいせい政と二分した勢力。呂不韋によって暗殺者を差し向けられた時や王弟を殺される原因となった反乱の時。犯人ははつきりとしていたのに、王であるえいせい政でさえもその権政の強さ故に呂不韋を裁くことが出来なかった。つまりは、張讓でさえも迂闊に手を出すことは出来ないほどに趙忠一派は漢という国に巣くっているのだらう。

「殺された者達の致命傷となる傷は鋭利な刃物であったり、毒であったり、鈍器であったりと凶器に関しては共通することはない。だが、誰一人として殺された現場を見たものはいないのを考えるに、相当な腕前の刺客と推測される」

「刺客、か。物騒な話だ。それでお前は大丈夫なのか？」

「流石に趙忠の奴も今私を殺せばどうなるかわからないほど蒙昧ではなからう」

現状、この国の政治を動かしているのは十常侍だ。

その中でも、張讓の働きは群を抜いているのは政敵である趙忠でさえも洩々ながら認めていることだ。彼女がいなくなればどうなるか、趙忠一派の勢力が増すのは当然だが、果たして張讓一派は抵抗することなく消えるだらうか。答えは否、だ。

張讓の勢力は、趙忠に比べると人数が少なくはあるが才ある者が非常に多い。しかも、その殆どが彼女に心酔しているということもあり、もしも張讓が暗殺でもされれば吊い合戦よろしく、趙忠一派に攻勢を仕掛けてくる可能性が高い。

そうすれば宮中は今よりもさらに混沌とした状況になるのは火を見るよりも明らか。下手をしなくても国の政治が立ち行かなくなるのが目に見えてわかっている為、趙忠も張讓には直接的に手を出すこ

とは出来ないのだ。

そして、此方の方が大きな理由となるのだが——ようするに李信の存在が張讓へ敵対する者達への大きな抑止力となっていた。

張讓を害すれば、その犯人はほぼ間違いないと趙忠派だと確定する。

となれば、李信が報復に動くことは必至。自分から虎の尾を踏むような行為を己の命を第一に考える彼らがするわけもない。

「そうか。まあ、念のため出来るだけ一人になるのは避けろよ。俺か孟陀の爺さんを傍に置いておけ」

「ああ、わかってる。私とてまだ死ぬわけにもいかんしな。忠告は素直に聞いておこう」

李信の言葉に、張讓は何故か嬉しそうに笑って頷いた。



少し早めの昼食を、と考えていた李信だったが張讓と話しこんでいたのがまずかったのか、宮中から洛陽の街に出てきた時には既に正午を回ってしまっていた。

数年前に比べ随分と活気を取り戻した街並みを見て、ここにはいない張讓のことをたいしたものだと胸中で称賛する。

私腹を肥やすことしか考えていない趙忠一派を相手取り、洛陽をこ

ここまで立て直した張讓の手腕は並外れたものだ。文官としての能力は皆無に等しい李信でさえも、それが一体どれだけ難しいことなのか理解できる。

遙か昔の秦の時代に居たとしても並々ならぬ傑物として名を馳せることが出来たであろう。張讓という女性は李信にそこまで思わせるに値する怪物であった。

優れた政治力。地位。己の目的の為に邁進する意志の強さ。揺らぐことのない精神力。何よりも、李信を前にして臆することのない姿は、嘘偽りなく心が惹かれる。

或いは、彼女を主としてこの時代を生き抜くというのも悪くはない。いや、現状ではそれがもつとも最善の選択肢に違いない。

だが、それを最後の一步で決断することが出来ない。

まるで楔のように心に打ち込まれたあの出会い。

未だ十二歳という若さの小さな霸王。

曹操孟徳という名の未完の大器。彼女との出会いが、李信の選択を鈍らせている。

彼を支え続けてきた本能が、直感が、心をざわつかせ訴え続けていた。

ともすれば、アレは李信の願い、望む存在に到達できる可能性を秘めている、と。

そんなことを考えながら彼が最近気に入っている食事処の暖簾を潜ると、既に空いている席を見つけるほうが難しかった。

昼時を回ってしまっているのだから、これも仕方ないか、と店内をぐるりつと見渡す。

「いらつしやいませえ。申し訳ないですが、今は満席でして……少々お待ち頂く事になりますが宜しいでしょうか？」

店員が、客へと注文の品を配りながら李信へと問い掛ける。

この店で食べようと考えていただけに、今更他の店に行く気もない李信が返答しようとした瞬間――。

「――良ければワシらと相席せぬか？」

喧々囂々と騒ぎ立てている室内に鈴の鳴るような声が響いた。

それが自分へと語りかけてきた物だと瞬時に悟った李信は、声の発生源へと視線を向ける。

そこにいたのは、小さな少女。

張讓よりも更に低い背丈だが、何故か薄ら寒い気配を漂わせている。文官が着る様な白い服であったが、服の縁が金色に彩られた特殊なものだった。両の手は黒い手袋に覆われ、右手には白扇が握られている。腰近くまで波打っている長く美しい蒼い髪がサラサラと揺れていた。黄金に輝く両の瞳が、李信を値踏みしているかのように薄く細められている。人間離れた美貌の持ち主を何人か知っているとはいえ、少女もまたこの世のものとは思えない人を狂わせる魔性を匂いたたせていた。

彼女の放つ気配もまた、歪。張讓を氷、曹操を炎と例えるならば、彼女は幽玄。ここに在って、ここに無い。流れる水の如く、空に浮かぶ雲が如く。掴みどころが無い、浮世離れた雰囲気少女が一人。

いや——もう一人。

そんな少女のすぐ傍に、少女よりもさらに小さな子供が一人。

先端が折れ曲がった三角帽子を深く被り、少女に似た青い髪が帽子からはみ出ている。どこか怯えた翡翠色の瞳が今にも泣き出しそうに揺れていた。隣に座っている少女に、身体を半分隠すようにして李信を恐る恐る窺っている様は、産まれたばかりの小動物を連想させる。

「心配しなくても良いぞ、鳳統。ワシの見立てが間違つてなければ、こやつは平時においては女子供には甘い類の人間よ」

ほっほっほ、と少女らしからぬ笑みを浮かべて、三角帽子をかぶった子供——鳳統へとあやすように語りかけた。

それでも極度の人見知りなのか、鳳統の態度が変わることは無く、それに苦笑した少女は李信へと振り返る。

「是非御一緒願いたいのじゃがのう。かの十常侍筆頭の張讓殿の懐刀

——李永政殿よ」

己の名前を言い当てられ、長年の経験から何やら面倒臭そうなことになるかと判断した李信の目つきが若干鋭くなる。

視線の圧力だけとはいえ、その只ならぬ気配に、ツウつと少女の頬を一滴の汗が滴り落ちるが、それでもなお笑みを絶やさぬ少女は、さらなる言葉を紡ぐ。

「我が名は——司馬徽。字は徳操。さて、その物騒な気配はおさめてくれんかのう？ お主のような化け物を相手するには、ワシのような老骨には骨が折れる」

口元に浮かべた笑みと、そこから覗く八重歯がキラリつと光る。それが奇妙なまでに李信に強く印象付けられた。

第6話：李信と水鏡2

正午を多少過ぎた、太陽が中天に差し掛かる時分。

昼食をとる者達で賑わっている人気の食事処の片隅で、ピリピリと緊張している小さな空間があった。

その発生源となっている人物は、李信永政と司馬徽と名乗った少女の二人であり、司馬徽の背後に隠れている鳳統という子供は目の前の状況に混乱に陥っていた。

下手に声もかけられない、張り詰めた空気にどうすればいいのかわからずにおろおろとしながら泣き出しそうになっている。

それを見た李信は毒気を抜かれ、相手を威圧するように鋭かった視線を緩めた。それに伴い急速に弛緩していく空気に、ほっと胸を撫で下ろしたのは鳳統のみならず、司馬徽も同様であった。

軽口を叩いていたものの、本音を言えば寿命が一年や二年縮まった思いだ。

どこにでもいる少年のような身体から発せられるのは、司馬徽が経験したことが無い類の重圧。これまで漢を支える重鎮と顔を合わせることが多少あったが、ここまで馬鹿げた圧力を感じたことは無い。身体の芯から湧き出てくる恐れを隠すことが精一杯で、もしも背後にいる鳳統がいなければ、脱兎の如く逃げ出していたかもしれない。

なるほど、と彼女は何時の間にか乾いていた唇を軽く舐めて濡らす。

国の中枢を支配している趙忠が、こと張讓に関しては何故腰が引けるのか。最初は彼女の勢力を警戒しているからかと考えていたが、そ

の答えは間違っていたらしい。その解答は、張讓の寵愛を受けし、李信永政。彼が全ての原因だ。

彼の恐ろしさは戦場からは程遠い身とはいえ、理解できる。出来てしまう。ただ、一言三言の会話だけで問答無用で格の違いいというもの骨の髄まで叩き込まれてしまった。こんな化け物染みた存在と真つ向から敵対するなど、何があっても御免被る。これに比べれば、十常侍など赤子同然。まだ、彼らのほうが気楽に接することができるというものだ。

司馬徽は笑みを絶やさぬ仮面の下、内心で鳳統と同じく混乱の極みに達していたが、空気が弛緩したことに内心で安堵しつつ右手で持った白扇の先でコンコンと机を軽く叩く。

「さて、まずは腹ごしらえとしようか。腹が減っては戦は出来ぬと申すしのう」

「そうですね。とりあえず、相席させてもらえることに礼を言っておきます」

話していて自分でも背筋が寒くなる言葉遣いではあるが、仕方ないと割り切って李信は席に着くと本日のお勧めを注文。

店員が厨房に戻っていった後、二人は机を挟んで向かい合う。

内心はともかく、外見上は冷静沈着を保っている司馬徽とどんな厄介事に巻き込まれるのかと考えている李信。似ているようで、そこはかとなく正反対の二人であった。

「まずは話し合いの場に座ってもらったことに感謝を」

「……いえ、武器を向けられなければ話し合いくらいは普通にします
が」

「ふむう？ 随分と噂とは違う印象を受けるようじやな」

「噂？ ある程度は推測できますが、どんな噂が？」

「果てさて、ワシとしてはあまり聞かないほうがよいかと思うがのう」
「……碌でもない噂とだけは理解できましたよ」

司馬徽の台詞に、眉を顰め天井を見上げる李信。

大方張讓の政敵が流した噂話なのだろうが、宮中で李信の姿を見て

逃げ出す者も少なくないことを思い出し、やはり己は宮中で過ごす柄ではないと再確認することが出来た。

病で没するまで戦場に在り続けた百戦錬磨の大將軍。そんな自分が宮中で大人しく過ごす事が出来るはずが無い。

「実際に会って見ねば、人間わからぬものよ」

ほっほっほ、と笑いながら白扇で口元を隠す司馬徽の姿を、李信は天井から視線を移動させて視界に入れる。

改めて司馬徽徳操なる人物を見極めようとする李信に、彼女は心胆を強く持ち視線を真つ向から受け止めた。もつとも、白扇で隠した口元がひくついているのはご愛嬌といったところか。

李信の眼から見ても司馬徽なる人物はいまいち掴みどころが無い。外見はどこからどう見ても李信と同年代か年下にしか見えないが、どこか違和感を覚える部分があった。仮に司馬徽がその年代とすれば、とてつもないという評価を李信は下さねばならないだろう。

武人としては生憎と三流——いや、武器すら扱えない文字通りの文官。だが、文官としての能力は比類なき高み。それだけならば張讓にも比肩するのではないかと思わせる深淵の智謀を感じさせる。

「それで、俺に一体何の用が？」

「話が早いのは有り難いが、何故ワシがお主に用があると思ったのじゃ？」

「……理由としては貴女が俺の名前を知っている点ですか。そして、俺が入店してからの声を掛ける早さ。恐らくは俺が最近この店によく来ている事を調べていたからですかね。後は、勘といったところでしょうか」

「——ふむ。やはり噂話は当てにならぬものじゃな」

李信の言葉に眼を見開く司馬徽は、目の前の化け物の評価を改めることとなった。

勘などと取って付けた様に誤魔化しているが、単純な武一辺倒の暴虐の化身というわけではないことを確信。この店で彼を待っていた自分の選択が間違っていないなかったことに安堵の溜息を漏らしそう

になるが、まだだ、ときつく自分を戒める。まだ第一の関門を突破しただけにすぎなく、更なる難関が待ち構えているのだ。

雰囲気が引き締まっていく司馬徽ではあったが、李信からしてみれば買いかぶりもいいところであった。

ふと思いついたことを適当に並べ立てたが、実際は自分に用があると思つた理由は言葉に出したとおり勘である。だが、勘というものを李信は馬鹿にしていけないどころか、これ以上ないほどに重要視していた。

数多の戦場を駆け抜けた故に身についたそれは、李信自身に降りかかってくる災いに対しては異様なまでに反応する。そのおかげで命を拾つた経験は数知れない。その直感が鳴り響いているのだから、なにかしらの用事が自分にあるのでは邪推しても仕方の無いことではないだろうか。

「お主を前に無駄に言葉を並べるのも悪手となるじゃろうな。さて、何ゆえにお主をここで待っていたか、それは——ワシとこの鳳統の保護を願うためよ」

「……どういうことですか？」

あまりにも直球すぎる要求に、李信が疑問を浮かべる。

司馬徽はいきなり結論から口に出しているのだから、彼が理解出来ないのも当然だ。勿論司馬徽と鳳統の事情を知っていれば、推測くらいは出来たかもしれないが、生憎と李信は彼女達とは初対面。これで、司馬徽の要求を悟ることが出来たならば、ある意味千里先を読む化け物だろう。

もつとも文官よろしく権力争いに首を突っ込み、情報を集めていれば或いは答えにまで到達できたかもしれないが、李信にそれを期待することは間違っている。彼はあくまでも武官にすぎなく、そういった方面は軍師である河了貂に全て任せっきりになっていたのだから。

「ワシとこの鳳統の父は元々宮中で働いておつた。俗に言う、趙忠一派の下でのう」

趙忠と口に出した瞬間、李信を窺っていた司馬徽が僅かに緊張した

のか白扇が微かに震える。

しかし、何かしらの反応をすと思うた彼女の対面に座っている少年は、意も介さないで続きを無言で促してきた。その対応に、敵対する相手の器の大きさを改めて認識させられる司馬徽だったが、はつきりいつて過大評価もいいところである。

「だが、元々宮仕えが性にあつていなかっただのじやろう。鳳統の父と知り合いのいる荊州にでも移り住もうかと良く話しておつた。宮中も何やらきな臭くなつてきたし。う。そういう理由で暇を貰おうとしたのが先日の話じゃ」

どこか言い難そうにしている司馬徽と、俯いて泣きそうになつている鳳統。

その雰囲気を感じた李信は、ふと先程の張讓との会話を思い出す。趙忠一派から抜けようとしていた者達が死体で見つかつている、と。そこから考えるに、つまり鳳統の父は――。

「成る程。それで趙忠殿と反目している張讓殿に助けを求めると言うわけですか」

「――う、うむ。勿論、ただでとは思つておらぬ。ワシが知る限りの趙忠一派の情報を提供しよう。あやつらの勢力を一掃するとまではいかぬが、それなりに勢力を削ぐことは出来る筈じゃ」

氣を利かせた李信の先回りした答えに、多少予想外だったのか詰まりながらも彼女の眼に浮かんでいた恐怖がほのかに薄れる。

司馬徽の提案に、李信は考え込むようにして両腕を組みつつ机に視線を落とすと同時にこの提案の利点と欠点は一体どういうことになるのか、即座に頭の中で思考する。

利点としては、司馬徽が提案したこと他に他ならない。彼女がどれだけの情報を提供できるかわからないが、張讓の一助となることに疑いようはないだろう。その小さな身体で宮中の魑魅魍魎と渡り合っている彼女の助けになるならば、李信としてもそれは願つていない幸運である。

欠点として、これが趙忠一派の罠である可能性も捨てきれないということだ。

疑いたくは無いが、司馬徽が趙忠の密命を受けて此方の陣営に潜り込もうとしている可能性も皆無ではない。それに、良かれと思つて彼女達を受け入れたとして、それが逆に張讓の負担にならないとは断言できない。

自分だけの考えで、この二人を張讓一派にうけいれるかどうかは判断し難い。

こういう時には、やはり軍師が必要だと痛いほどに思い知らされる李信であつた。

「……直接張讓殿に、というのは難しいにしても、他にこの話を相談するに相応しい相手がいたのでは？」

「確かに、そうやもしれん。だが、恐らくは信用しては貰えないじやろう。それにワシの話の裏を取る為に少なくとも無い時間がかかるのは簡単に想像できる。張讓殿の耳にこの話が届くのは何時になるかわからぬ。そうすれば——」

まず間違ひなく刺客によつて命を奪われることになるだろう。

言葉には出さなかつたが、司馬徽はそう続けたかつたのは想像に容易い。

「俺に話を持ちかけたとしても、張讓殿に話していくとは限らないのでは？」

「……確かにそれは否定できぬ。だが、ワシが考えたもつとも高い可能性をとつたに過ぎんよ。なにせお主は、あの張讓殿の寵愛を受けただだ一人の男じゃからな」

「……世間ではそう言われていますね、そう言えば」

司馬徽から語られたそれは、宮中に広がっている噂話の一つだ。

残念ながら肝心の張讓が面白がつてそれを否定しないものだから、その噂が真実であるのではないかと拍車をかけている。

もつとも、李信は与り知らぬことだが、意外とそれは的外れでも何でもない噂であるのだが。

現状、幾ら考えても司馬徽の提案が本当の話なのか罠なのか李信に

判別は出来ない。

だが、第六感がたいした警戒を示していないところを見るに、罨である可能性は限りなく低いだろう。第一、鳳統のような年端もいかな子供を連れて敵陣に紛れ込もうなど悪手にも程がある。

「わかりました。張讓殿には俺の方から話してみます」

「——感謝するぞ、李永政殿」

表情を緩めて、深々と頭を下げる司馬徽が、人知れず安堵の吐息を漏らした。

自然体に見えていたが、やはり己のみならず親友の娘の命を賭けた大博打を打っていたことに緊張していたということだ。

「それならば早速だが情報を一つ提供させて貰うのじゃ」

下げていた頭を上げた司馬徽が、李信の予想を上回る提案をしてきたことに若干驚かされる。そういった駆け引きは実際に張讓としたほうが、司馬徽にとっても利点が多いのではないかと考えたからだ。

李信を驚かすことに成功した彼女は、白扇を軽く振りパチンつと音を鳴らして、儂げな笑みを浮かべる。

「まずは手付金といったところじゃよ。お主にとっても、その方がワシらのことを話しやすかろう」

「確かにそうですが。まあ、有り難くその情報とやらを聞かせてもらいますか」

「うむ。最近洛陽で殺人が横行していることは知っておるみたいだが、その実行犯についての情報じゃ」

「……ほう」

予想以上の情報だったことに、李信が感嘆の声を漏らす。

何気にそれは張讓に報告すれば、司馬徽達を保護する為に、前向きな材料になるに違いない。

李信の眼前にいる、白い服を纏った蒼い少女は、一度大きく息を吸い込むと、遂にその言葉を吐き出した。

「その名は、朱凶。数百年の歴史を持つ、中華最強にして最凶の暗殺一族じゃ」

「——あいつらまだ生きてたのかよ!!」

司馬徽の思いもよらぬ言葉に、反射的に李信が席を蹴って立ち上がり、椅子が勢いよく床に倒れこみ大きな音を立てた。

昼時で騒いでいる者が多い店内でさえもその音は響き渡り、店内はシンと静まり返る。店中の人間の視線と言う視線を集めた李信だったが、一瞬で我を取り戻し、頭を下げながら着席する。それを切っ掛けに、何事かと注目していた客達も、再び自分達の世界へと戻っていった。

李信が声を荒らげたのも無理がない。その名は前世とでも言うべきかつて耳にしたことがある相手だったからだ。

まさかの因縁がある存在の登場に、呆ればいいのか悩めばいいのか判断しがたい李信の態度に、司馬徽もまた難しい表情で白扇を弄りながら声を落として話を続ける。

「朱凶の名を知っているとは、さすが李永政殿といったところじゃな。それなりに裏の世界に足を踏み入れた者しか知らぬ名だというのに。ワシとしてもあの最悪な化け物達に狙われるとわかつていながらお主に助けを求めるのも引け目を感じてのう。故に、早めにこのことは伝えさせてもらった」

「……いえ。誠意は見させて頂きました」

「心苦しいが、何卒お願い致す。最悪、ワシのことは見捨てて頂いても構わぬ。せめて鳳統だけでも——」

「そ、そんな……だ、駄目です!!」

司馬徽の身を切るような想いに、そこで初めて鳳統が悲鳴染みた声をあげた。

自分の服を掴んで、涙目で訴えてくる鳳統に、何一つとして曇りのない笑顔を見せて首を横に振る。

「良い。我が友の忘れ形見であるお主だけはワシが如何なる手段を使っても守ってみせる。それがあやつへ対する贖罪じゃ」

「で、でも、そんなの、そんなの——」

涙を溢れさせ決壊寸前の鳳統を温かく見守る司馬徽は少女の外見ながら、まるで子を見守る母のようにも見えた。

死を覚悟している司馬徽の姿は、成る程確かに理解できる。

彼女が語った朱凶とは、表立っては知られていないが、その筋では決して敵対してはならない一族とも言われているからだ。中華最古にして最強の、今は確認されていない蚩尤という名の一族にかつて仕えていた集団。蚩尤が裏舞台からも姿を消した後、台頭してきた暗殺一族。それが朱凶。金次第では如何なる相手も暗殺し、狙われれば最後彼らから逃れられる術はない。漢の重鎮である十常侍でさえも恐れる怪物達。

まず間違はなく彼らと戦おうなどと考える者は中華広しといえどいないだろう——ここにいる李信を除いては。

「とりあえず落ち着いてください。今日中にでも張讓に話は通しますので。二人とも御安心を」

冷静な李信の一言に、ぴたりと動きを止める司馬徽と鳳統。

まさか朱凶の名を知りながら、平然とそんなことを言つてのけるとは考えてもいかなかったからだ。正直な話、司馬徽はここで李信に断られる可能性が高いと踏んでいた。というのも、確かに彼女の情報は張讓にとって利になりはするが、朱凶を敵に回してまで得たいものか、と考えれば首をひねざるを得ない。

だからこそ、鳳統だけでもと敢えて提案したのだ。趙忠側としても、恐らくは始末するのは司馬徽だけで、鳳統にまで魔の手が伸ばされるかは判断に難しい。残された心配は、自分が逝ってしまった後の鳳統の行く末。並々ならぬ才を持つ子供ではあるが、まだ年齢が年齢。故に、張讓の庇護下に入れてもらおうと考えていたのだ。張讓は才ある者を厚遇するため、鳳統もまた無碍にされることはないだろうという思惑もあった。

そのため、李信の発言に二人して瞠目する結果となったのはある意味当然とも言える。

彼の言葉の意味を理解するのに暫しの時間を要し、やがて噛み砕くようにしてその台詞をゆっくりと呑み込んだ。やがて、今度は先程よりも深く長く司馬徽は頭を垂れる。まるでそれは、忠誠を尽くす主に對する姿にも見えた。

神聖な儀式を思わせるその光景に、ごくりつと息を呑む鳳統だったが、彼女もまた司馬徽と同様に頭を下げて――。

「――あ、有難うございませしゅ!!」

盛大に囓んでお礼を言つてのける。

自分が礼を囓んだことに、あわわつと慌てる小動物に、これは流石に罠はないだろうと確信すると同時に、ついでに朱凶をどうしようか、片手間に考える李信であつた。

第7話：李信と婁子伯

「おいおい、まさか李永政に接触するとは随分と思いつた婆じやないか」

「さて、どうする？　あの化け物の目を潜り抜けて仕留めるのは至難の技だぞ？」

李信と司馬徽が話をしている食事処から少し離れた建物の二階。

窓から覗くように顔だけ出して二人の男が心底参ったというように苦々しい顔つきで、李信達がいる飯屋を見下ろしていた。それなりに高級感溢れる部屋の中で、坊主頭の若年の男が窓際から離れると音を立てて胡坐をかきながらもう一人の初老の男へと疑問を投げかける。

「……完全に俺達の失態だ。どうせこの洛陽から逃げ出すだろうと考えていたが、まさか張讓へと泣きつくとはな」

「ああ。くそっ……雇い主からも奴には手を出すな、と言われているしな。もつとも頼まれても出す気もないが。割りに合わない相手なんて化け物じゃねえぞ、あのガキ」

初老の男性は、自分達の考えの甘さに舌打ちをしたくなる衝動を抑え、右手の親指のつめを強く噛み締める。

坊主の男はというと、これからの任務の邪魔になるであろう少年のことを想像し、悪態をつきながら拳で床を強く殴りつけた。

洛陽の街にならどこにでもいるような二人の男。

だが、もしも武の道歩んでいる者ならば、この男達が只者ではないことに気づけた筈だ。なんとと言っても、これだけ騒いでいるというのに、受ける印象がとてつもなく薄い。目の前にいながら、まるで空気のよう認識することが困難なのだ。もつともそれも当然であろう。何故ならば彼らは朱凶と呼ばれる数百年前から暗殺を生業としている一族の一員であるからだ。

古くは春秋戦国時代の頃より、様々な国家や権力者に雇われて、彼

らに敵対する者を秘密裏に暗殺していた一族。

もつともその時代は他に多くの暗殺一族がいたのだが、漢が中国を統一しそれなりに平和が訪れると時代には逆らえず、暗殺を生業とする血族は消えていった。それでも需要が減ったとはいえ、皆無ではない。細々とはあるが、朱凶は研鑽と実戦を積み重ねていき、遂には中華最凶の暗殺一族とまで呼ばれるようになった。

その末端員ではあるが、彼ら二人は宮中の宦官に雇われて、最近暗殺を繰り返していたのだが、最後の最後になって最悪の事態に陥ってしまったことに頭を抱える現状になってしまっている。

言葉に出したとおり、彼らの雇い主からは手を出してはならないとキツク釘を刺された相手が二人いた。それは十常侍の筆頭である張讓とその配下である李信である。

張讓に対してはまだ分かるが、どうして一介の官吏でしかない李信に不干渉を決め込むのか理解できなかった二人だが、その疑問は件の人物を一目見てあつさりと氷解することとなった。

朱凶の実行員としてそれなりの仕事をこなしてきた二人だからこそわかる。あれは関わってはならない類の化け物だ、と。人生の全てを人を殺すことだけに費やしてきた朱凶の一族でさえも、一般人と変わらないように見えてしまう外れ具合。戦うことは愚か、近づくことさえも御免被る真正銘の怪物。自分達とは根本から違っている、何か別の生き物。それが李信永政という少年に対する、彼らの第一印象であった。

「……悩んでいても仕方ない。一旦様子見とするか」

「ああ。もしくは、李信と離れた隙について仕留めてしまうか」

「それも悪くない。目撃者はできるかもしれないが、あの小僧の隙を突くよりは随分とましだ」

兎にも角にもどうやって対象を暗殺するか考えに耽る二人。

その時、ふわりつと部屋の空気が揺らぐ。

「——いや、止めておけ。貴様らでは到底及ぶ相手ではない」

そして第三者の声がその場に響き渡った。

二人に全くの気配を感じさせなかつたというのに、一度勘付いてしまえば激烈なまでの存在感を叩き込まれてきた。ゆらりつと部屋に入ってきたのは小柄な青年。一見すれば子供と見間違う肉体でありながら滲み出る気配は、元から部屋にいた二人と比べるまでもない。背負っている巨大な剣が、歩くたびにカチャカチャと音を鳴らしているが、それは相手を威圧するためにわざとそうしているのだろう。ゾクゾクと背筋を這う怖気は尋常ではなく、自分達のような木っ端な朱凶の一員とは明らかに格が違う。

「わ、若様……」

「若っ、来ておられたのですか!？」

慌てる二人だったが、思わぬ援軍に笑顔を隠せない。

だが瞬時に、自分達の未熟さを恥じるように顔を伏せた。

そんな二人の様子に、新たに来た青年は気にするなど言わんばかりに笑って首を横に振る。

「なに、嫌な予感がしたのでは。それに来たのは俺だけではない」「若様以外にも来られ——」

たのですか、と続けようとした坊主頭の男の声が止まった。

いや、止められたのだ。喉元をつかんで握られたかのような圧迫感。この場にいる誰よりも自然体でありながら、その圧力は強制的に跪かされそうになるほどに強い。抑え切れずに、身体から自然と溢れてくる冷たい空気が、全ての人間の感覚さえも狂わせる。その発生の元となっているのは、若と呼ばれた青年の背後に従って歩いていた人影。

周囲を圧する気配を発しているながら、その肉体は弛緩していて、気負いを全く背負ってはいない。だが、良く見てみればそれは女であった。性別にしては長身瘦躯で、服の上からでも一目でわかる程に鍛え上げられた肉体。彼らと一緒にいるということは同じく暗殺者であることは疑いようがないのだが、意外なことに武器一つ持つては

いない空手なのが逆に目を引く。

「妻子伯、殿」

李信に送っていたのと同様に、どこか怖れにも似た感情を二人の男は妻子伯と呼ばれた女性に向けていた。

妻子伯——それが女性の名前だ。暗殺一族である朱凶の一員ではあるが、血族というわけではない。というのも、以前に族長が彼女と出会い、どんな甘言を囁いたか分からないが一族に引き入れた人物。意味は少々異なるかもしれないが、客将みたいなものだろうか。

はつきり言つて、裏の世界の住人である朱凶の彼らであっても、出来れば関わりあいになりたくないというのが隠しようがない本音である。相對するだけで感じられる底冷えする薄気味悪さ。恐怖、という言葉がそのまま具現化した存在。

ただ一つ、確かなのは——その圧倒的な強さ。朱凶が最強の名を戴いているのは、彼女の存在がとてつもなく大きい。強さと恐さを兼ね揃えた真正銘の異質。故に、朱凶といえど、彼女を見る目に良くない色が混じるのを止められるだろうか。止められるはずがない。

そんな感情が籠った視線が身体に突き刺さっているというのに、彼女は特に気にするでもなく長い髪を靡かせながら、男達を無視して窓際へと近づいていく。眼下を見下ろせば、食事を終えたのか李信と司馬徽、鳳統の三人は連れ立って雑踏の中へと消えていく姿があった。それを見送った後、緊迫した雰囲気が続く中、妻子伯が感情を見せない獣染みた瞳をギラギラと輝かせ口元に不気味な笑みを浮かべる。

「なんですか、アレは。中々に面白い子供ですね」

「面白い。面白いか。そんな表現をするのは貴女くらいだ、妻子伯」

「んふふ、凄いですよあの子。だって、貴方達が観察していることに気づいていましたよ?」

「——なっ」

妻子伯の言葉に、驚きを隠せない二人の男。

暗殺業に身を染めている以上、気殺の技は何よりも重要視されるべき点だ。当然、彼らもその穩行の術においては自信がある上に相手に気取られるような下手を売った記憶はないものの、彼女が何の意味も

なくそんなことを言うような人間だとは思えない。

「もつとも、流石に場所までは特定できていなかったみたいですけどね。んふふふ」

「……あの化け物なら在り得んことではない、か」

話し掛ける事も憚られる雰囲気の婁子伯に、青年は肩を竦める。ほうつとやけに淫靡な溜息を吐いた彼女は、それ以降他の人間の声など聞こえていないかのようになり、視線の方向を変えることはなかった。

完璧に自分の世界に入っている婁子伯に呆れつつ、青年はとりあえず彼女のことは一旦放って置くことにして、二人の男へ近づいていく。

「二度雇い主に伺いたててみるとしよう。生憎とあんな鬼つ子とやりあうなど、朱凶の次期族長としても許可できません」

真つ向から戦えば勝つのは難しいにしてもそれなりの戦いを演じることが出来ると青年自身は考えているが、それは危険が多すぎる。彼らはあくまでも暗殺者。正々堂々などという言葉は他の者に任せるべきだ。

忌々しそうに吐き捨てた青年に、二人の男が安堵したかのように頷いて――。

「あら、そうですか。ではあの子供はわっちが貰いますね？」

ゴキンつと部屋に響き渡るある意味聞き慣れた音。それは骨が砕け折れる、何度聞いても聞きなれない破滅的な音響だった。

朱凶の次期族長である青年の身体が、糸の切れた操り人形のように床に崩れ落ちる。全てがやけに遅く感じられる光景に、男達は指先一つ動かすことも出来ずに目の前で起こった凶行に目を見開く。

床に倒れた青年と、二人の男は目が合った。

うつ伏せに倒れているというのに、何故視線があうのか。それは単純な理由でしかなく、青年の頭が百八十度回っていたからだ。人間の身体構造上不可能な姿に、反射的にひいつと男達は短く悲鳴をあげ

た。濁った瞳と、唇から垂れた赤い雫が、人殺しに慣れている彼らをして思考に空白を造りだす。

そしてその空白が、決定的な隙となる。

死体に注意を払っていた男達が我を取り戻し、この光景を生み出した女性へと武器を向けようとする間もなく妻子伯がゆらりと間合いを詰めてきていた。彼女は確かに空手——しかし、その拳には鈍色に輝く金属製の手甲がはめられており、それを纏った右手が殺人的な速度で坊主頭の顔面を貫いた。トマトを潰したかのように赤い花を咲かせると同時に、返す刀の裏拳が初老の男の横顔を強かに打ち据える。両者ともが、部屋中に赤い血を撒き散らしながら激しい音を立てて壁に激突。床に血の海がじわじわと広がっていく光景に、自分の唇に飛び散った男の血を舌でぴちやりと舐め取りながら、妻子伯は静かにその惨劇の跡を見つめていた。

「残念ですねえ。貴方達が戦うという選択肢を選んでいれば殺さずに済んだのに。あんな美味しそうな子を前にして据え膳なんて酷すぎるじゃないですか。ええ、わっちって我慢できない性格でして。好きな食べ物は先に食べちゃう駄目な大人なんです。んふふ」

台詞とは正反対に、相当な手練れであった朱凶三人を息を吸うように殺した彼女は特に何とも思っていない様子で喉を震わせて言葉を紡いでいく。部屋中を満たしていく血臭と死臭が絡まりあい、吐き気を催させるこの場所にて、妻子伯は赤い唇に指を当て、可愛らしく小首を傾げる。

「お世話になりました、朱凶の方々。後はわっちの自由にさせて貰いますから」

妻子伯は、物言わぬ軀となった三つの屍骸の前にて、んふふ、と血の海の中にありながら邪悪さと凶悪さを隠そうともせず艶やかに笑った。



張讓との対面は、司馬徽の想像を遥かに超えてあっさりと実現した。

本来であれば食事が終わって別れる予定だったのだが、何故か李信に誘われて直接張讓の下へと案内されたのだ。

内心で少し焦りながら、張讓へと話をつけにいった李信を待った時間は数分程度だっただろうか。あっさりと戻ってきた李信に連れられ、辿り着いたのは張讓の執務室。それに司馬徽が唾然としたのは当然の反応であった。十常侍の筆頭ともあろう超重要人物に、前もつての連絡もなく御目通りが叶ったのだから。

目の前の出来事が信じられないように、鳳統が目を瞬かせている。その姿を見て、司馬徽は逆に自分を落ち着かせることが出来た。自分よりも混乱に陥っている人間を見ると、逆に落ち着くという話を実体験出来た司馬徽は、己を律する為に一度深い呼吸を吐く。

確かに張讓との対面は成功したが、まだここからが本番なのだ。難関をことごとく突破できたとはいえ、まだ最後にもうひとつ。宮中にいる海千山千の文官達を相手取り、一步も引かない文官の頂に立つ者を説得しなければならぬ。

「李信から話は聞いた。司馬徽、鳳統、私はお前達を歓迎しよう。暗殺騒ぎが治まるまでは、我が保護下で大人しくしているといい」

昼食前までは山のように机の上に置かれていた筈の竹簡が何時の間にか処理され残り僅かとなった机を間に司馬徽と鳳統と向かい

合った張讓はそう言い切った。

躊躇いも逡巡も何もなく司馬徽達の受け入れを決めた十常侍の筆頭は、話は終わつたと言わんばかりの様子で、さがれつと短く呟きながら手を軽く振る。予想を超えた事態に、ぽかんつと口を大きく開けて唾然とする司馬徽がもはや反射の勢いで頭を垂れながら張讓へと疑問を投げかけた。

「張讓様に申し上げます。何故、我らの話の内容も吟味せずにそのような結論に？」

考えられる最高を通り越した状況だというのに、浮かんだ疑問を問い掛けてしまったのは文官としての性だろうか。

司馬徽の質問に、張讓は両腕を組んでいた彼女は、何を言っているんだ——そんな表情へと変化していった。

「李信が言ったのだ。お前達は信用していい、とな。ならば今更是非を問うことなどあろうか。お前達もたらす情報の内容に関わらず厚遇すると約束しよう」

一切の戸惑いもなく堂々と言い切った張讓に、司馬徽は衝撃を受けた。

李信永政の取り成しが、ここまでの効果があったことに。彼が張讓という名の至高の権力を持った女性に対してこれほどまでの影響力をもっていることに。

そしてまた、張讓という女性が放つ王の威厳とでもいうべき圧力に自然と気圧された。しかし、その威厳に気づかぬ者がこの光景を見れば、官位も碌に持たない少年の言葉を完全に受け入れている色狂いでも邪推されるかもしれない。だが、男に狂っている権力者の目や雰囲気ではない。彼女はただ、李信を限りなく信頼しているのだろう。それ故に、無駄な手間となる全てを省いて自分達を受け入れたのだ。

司馬徽と鳳統は場の雰囲気呑まれ分からなかったが、李信が目配せを張讓に送り、それに気づいた彼女が小さく頷いた。

「さて、司馬徽よ。事態が収束するまでは我が屋敷にて滞在されるが
良い」

張讓の厚遇するという意味に偽りはなく、何か罣があるのではないかと司馬徽は逆に心配になるほどだ。

疑心暗鬼に陥っている彼女を尻目に、張讓は流れるように言葉を発していく。

「私の仕事ももうすぐ終わる。屋敷までは一緒の馬車で行くのが良からう。もう少しだけ部屋の外で待っていてくれまいか？」

「……お心遣い感謝いたします」

「あ、ありがとうございますゆ!!」

鳳統の噛み具合に少しだけ面白そうな視線を向けた張讓だったが、残された竹簡を処理する為に仕事に取り掛かる。

それを見た司馬徽と鳳統は退室の辞を述べて、部屋から静かに去っていった。

二人が部屋から完全に退室したのを確認した張讓は、視線を竹簡から傍に侍っていた李信へと移動させる。

「それで、お前はどこまで本当だと考えている？」

「詳しいことはお前が調べたほうが確実だろ。俺に言われてもわかるかよ」

「勘でも構わん。お前が感じたことをそのまま言えば良い」

張讓の台詞に李信は少し考える素振りを見せるのも一瞬。

「嘘を吐いているって感じはしないな。それに、あの二人が狙われているってのは本当のことだと思っぜ」

「……ほう。それは？」

「街中の飯屋で話しているときにどこからか視線を感じた。朱凶かどうかわからんけどな」

「ふむ……そうか」

今度は張讓が思慮に耽る。

とりあえずは、司馬徽達の情報待ちなのだが、張讓の中では二人を受け入れることに確定していた。李信の悪い予感はないということとを信頼していることもあるし、彼女がもたらす趙忠側の情報にも心惹かれる。

「でも、注意はしておいたほうが良いことが一点ある」

「む？　なんだ、李信」

「相当に厄介な奴が一人いた。結構面倒臭そうなやつだ」

「——お前がそこまで言うほどか」

李信の下した評価に、若干の驚きを隠せない張讓。

今まで彼がそれほどまで高く見積もった敵対者は聞いたことがなかったからだ。

どうやら想像以上に朱凶という一族は厄介なのだと認識を改めなおす張讓だったが、それでも司馬徽達を今更見放すという決断を下すことはなかった。

彼女は上に立つ者だ。正義感だけでは動かない。利益と不利益を天秤にかけ、己に有利に働く方を掴み取る判断をすることが出来る。本来ならば朱凶などという相手と敵対することを選択しない。だが、彼女もまた人だ。人は利だけでは動かないのもまた事実。

明確な敵である趙忠に一泡ふかすことが出来るなら多少の危ない橋でも渡ってやろうと言う気概など、数年前に準備は完了している。それにどことなく女子供には甘いところがある李信も今更見捨てるなどと言えない筈だ。ならば、それくらいは呑み込む度量の一つや二つ見せねばならない。

「まあ、良い。相手が誰であろうと敵対するのであれば殲滅するのみ」
ここにはいない見えない暗殺者達へ向けて凍える吹雪が如く氷点下の言葉を贈る。

「笑わせる。たかが暗殺者如きが我が道を阻めると思うなよ」

椅子に座ったまま両手両足を組んだ張讓は、普段通りの傲岸不遜で尊大な力強い瞳のまま、投げかけてくる言葉が李信の耳を打つ。

「李信。我が想いを、誇りを、命をお前に託すぞ。お前が死ぬときこそ我が道の途絶えるとき。私の全てはお前とともにある。朱凶——
—何するものぞ」

焼き尽くすような灼熱と凍て付くような冷たさ。

相反する二つを併せ持った決して退かぬと言う不退転の意志を言葉に乗せて、張讓は豪然と高らかに宣言した。

第8話：水鏡の決心

十常侍筆頭としての地位に相応しい広大な敷地面積を擁する張讓邸。

屋敷だけでも目を疑うような巨大さではあるが、その建物に応じ庭の広さも寥廓たるものがあつた。その屋敷の中庭に面した一室の前の廊下に腰を下ろしながら李信永政は、庭園に眺えてある池に映った丸い月影をじつと見つめている。夜風が吹くたびに、ゆらゆらと球体状の影が揺れ、歪な形を作り出す。

既に夜分遅く、使用人の殆どは眠りに落ち、警備に当たっている幾人かの者が起きているくらいだろうか。夜の空から煌々とした満月の光が降り注ぎ、夜の暗闇と合わさって哀愁を感じさせる。

ぼーと庭園を眺めていた李信だったが、右手が傍らに置いてあつた装飾も何もない無骨な一本の剣の柄を軽く握り締め、ゆらりつとその場から立ち上がるとそこからは無駄な動作一つなく、廊下から一歩離れ、姿勢を低く刃を頭上に掲げた。

それと時を同じくして真上に掲げた剣から伝わってくる重い衝撃。李信の予想よりも、本当に僅かに早く叩き込まれた硬質な一撃に、臆することなく気合一閃。

剣はおろか、身体ごと押し潰そうとしてくる何者かの襲撃に、衝撃を受け止めたまま音もなくその原因となる人物を両断すべく空に向かつて剣を滑らせた。

だが、その刃が断ち切つたのは何もない空気だけ。
いや、僅かに遅れてトンつと刃の腹に感じる違和感。

真上を見上げた李信の視界の端に映るのは張讓の屋敷の建物と、李信の剣を身体を捻って避けるのと同時にその樋の部分を蹴り上げて空中から離脱した何者かの姿。

逃がすものかと放った追撃の一手が襲撃者を切り裂くよりも一瞬

早く、その影は李信の間合いから逃げ出すことに成功していた。

ざあつと地面を擦りながら降り立った人影——妻子伯はハラリつと一房切られた己の髪が風に運ばれていく様を見送りながら、背筋を這った快感染みた寒気に身体を震わせる。

闇に紛れての自分の奇襲があつさりと防がれたことへの驚きは勿論あつたが、これくらいならば対処してみせると言う予感がしていたのも事実。紛れもない好敵手たる存在に、自然と火照っていく肉体と、早く暴れさせろという身体中からの歓喜の信号が発せられる。

対して李信は冷徹冷静。

剣を襲撃してきた相手に向けて、油断なく見据えている。

だが襲撃者の想像を超えた実力に、李信も僅かな驚きを胸に抱く。昼間に感じた良く分からない気配の持ち主のようだが、自分の直感が間違っていないことに確信。己の初撃を避け、二太刀目も届かなかった相手は如何ほど振りか。少なくとも、そこらの一兵卒どころか、かなりの実力者であることは明々白々。一挙手一投足見逃さぬように、指先一つの動きさえも把握し間合いを計る二人。

「ああ、いいですねえ。その年齢でこのわっちの奇襲を防ぎ、なおかつ反撃を加える。実に素晴らしきかな」

満面の笑顔で、されど油断することなく妻子伯は、一旦構えを解くと優雅に一礼する。

「わっちの名は妻子伯。しがない暗殺者として活動しております。以後お見知りおきを」

「知っているとは思いますが名乗っておく。姓は李。名は信。字は永政。念のために聞いておくが、屋敷を間違えたつてことではないんだな？」

「ええ。狙いは、この屋敷に匿われている司馬徽の命。もつともわっちにとつてはそれはついでですけどね」

ついで、という言葉にぴくりつと眉を動かす李信。

暗殺者としてそれ以上に優先すべきことなどあるのだろうか、と懷疑の念を抱く。

「張讓か俺の暗殺でも依頼されたか」

李信の台詞にキョトンとした顔を見せる婁子伯だったが、時を置かずして不気味に口元を歪める。

「いえいえ、それは依頼には含まれておりませんが。見つかつてしまったからには司馬徽を仕留める前に貴方をどうにかしなければなりませんねえ」

「……なるほど。そういうことか、戦鬪狂」

あまりにも不自然すぎる婁子伯の言葉に、李信は舌打ちを一度。

この手の類の人間とは何度か戦った経験がある。強き者と戦うことを何よりも欲する戦いの求道者。己が認めた相手と戦い、勝利した瞬間に得られる快感を目的に血で血を洗う修羅道を行く者。

本来であれば、司馬徽を殺すという目的を第一に優先すべきことだ。その前に現れた李信は二の次でなければならぬ。しかし、婁子伯は李信そのものが目的となっており、司馬徽こそが言葉通りのついででしかない。

そんな緊迫した空気が充満する中、パシャンと激しい音を立てて屋敷の扉が左右に開かれる。

部屋の中から大股に姿を現したのは、十常侍が筆頭の張讓その人であった。その姿に婁子伯は訝しげに眼を細める。勿論、ここは彼女の屋敷なのだから居るのは当たり前と言えれば当たり前だが、それならば何故婁子伯は驚きを僅かにとはいえ表情に見せたのか。

李信が待ち構えていたということは、朱凶——この場合は婁子伯になってしまったが、彼女の襲撃を予想していたということだ。ならば、何故張讓が避難せずに屋敷に留まっていたのだろうか。暗殺の対象には入っていないとはいえ、そのことを張讓は知らないはずである。命の危険があるにも関わらず、敢えてこの屋敷に残留する理由が分からない。

「ふん。貴様が婁子伯、か。名前は嫌と言うほどに聞いているぞ。かの朱凶でも最悪の使い手だとな」

「……おい、邪魔だからさっさと部屋に戻ってろ」

廊下まで歩み出てきた張讓が、婁子伯を見下しながら言い放つ。隠

れていると口を酸っぱく言ったはずなのに、出てきてしまった張讓の行為に、李信は頭痛を隠せずに呆れ果てる。

部屋の中では、暗殺者の前に姿を現すという張讓の愚挙に、顔を引き攣らせた司馬徽と鳳統の姿があった。同じく愕然としていた孟陀だったが、自分の役目を思い出して慌てて張讓を守るべく身体を盾にするように前に乗り出す。

「張、張讓様、御下がりを。相手は、あの妻子伯でありますぞっ!!」
「中華にその名を轟かせる朱凶において並ぶ者なしの狂人、妻子伯か。随分と大物を送り込んできたものだ」

盾となった孟陀の身体を片手で退けると、張讓は相も変わらず尊大な態度で廊下に仁王立つ。

司馬徽が狙われているとはいえ、それが張讓を狙うための陽動とは限らない。故に、同じ部屋に居たほうが李信にとっても守りやすいため一緒に部屋に居たのだが、まさか司馬徽を受け入れた当日の夜に襲撃をかけられるとはこの場にいる者達のだれもが予想もしていなかった。ただ一人、李信だけは何かを感じ取っていたのか護衛に付いていたのだが、それが結果として吉とでることになったのだ。

「悪名とはいえ中華にその名を轟かせる妻子伯よ。李信と一合とはいえ渡り合う剛の者よ。その腕、実に見事だ。この洛陽広しといえど、それほどの力量を持つ者は見つからぬだろう。お前さえ良ければ我が幕下に加わらぬか？」

己の命を狙っているかもしれない暗殺者に向けてのまさかの勧誘に、李信を除いて誰もが目を剥いた。

「——と、言いたかったが、止めておこう。確かに貴様の實力は我が陣営に欲しいのは事実だ。だがな、目を見て理解した。貴様は誰かの下で大人しくするような人間ではない。いや、果たして人と言っているものか。貴様は飢えた獣そのものだ。餌を与えようが決して懐くことはなく、隙あらば主の喉笛さえも噛み切ることを狙っている狂犬に過ぎん」

だが、即座に彼女は自身の誘いを否定する。

淡々と、まるで熱量を感じない張讓の言葉は、まるで書かれた数字

をただ読んでいるだけのような、違和感。異質感。

つまらない、結局のところそれに全てが収束されていた。

「何よりも、貴様はそそれれん。李信に比べて微塵も心が揺さぶられんぞ。お前はただの外道だ。人を人とも思わぬ悪鬼羅刹よ。貴様はここで朽ち果てよ。それが貴様にとつての幸福となるはずだ」

夜風以外に吹き荒ぶのは、王者の風だ。

張讓の力ある言霊に、飄々としていた婁子伯の視線に冷たいものが混じる。

「李信」

「……ん？」

「お前の友である張讓の願いだ。疾く——終わらせよ」

全幅の信頼を寄せた宣誓が終わった瞬間、李信の剣が張讓の眼前にて弧月を描いた。

耳を劈く金属音が高鳴り、弾ける火花。黒色の短剣が、張讓の前の地面に突き刺さる。夜の闇に紛れての投擲を、李信はあっさりで見抜き弾き落とした。

張讓を守ることを優先とした結果、作り出された一瞬の隙。

李信の全身を痛いほどに叩きつけてくる殺意という名の暴風に、咄嗟の判断で身をそらす。

一秒を分割した瞬間の時に、耳に聞こえる風きり音。

身を逸らす前に顔があった空間を、物騒な轟音をたてて鈍色の手甲が通過していった。

ばさりつと婁子伯の長い髪が翻り、一步後退した李信が体勢を整えるよりも一手早く、彼女の肉体が懐深く踏み入ってくる。相当に重いはずの手甲に動きが阻害されること無く、婁子伯の速度は人の域を容易く超えていた。

先程空を切った左拳の勢いを殺すことなく、流れるような動作で右の拳が、ひたりつと静かに李信の腹部へ添えられる。

次いで聞こえるのは、鼓膜を揺さぶる爆撃音。婁子伯の両足が地を踏み締め、一切無駄なく肉体全てを稼動させた。

地を震わせる踏み込みと同時に放たれた右の拳が、何の容赦も無く李信の腹を食い破るべく放たれるものの、それが貫いたのはただの残像。轟、とあまりにも物騒な音をあげた右拳から逃れた李信が、たたらを踏むように背後へと後退。

だが、妻子伯の動きは止まらない。

更なる追撃に、体勢の整わない己へと襲撃する暗殺者に、舌打ちの一つでもしたくなるが、そんな暇もあるわけがなく咄嗟の判断で剣を頭上へと振り上げた。

打ち下ろされた拳と振り上げられた剣が激しく音を立てて交差する。

激突する拳と剣が、互いの腕に衝撃を伝えてきた。一瞬とはいえず、由を奪うほどのそれに、驚愕したのは奇しくも両者同様であり、立ち直るのもまた同時。

いや、ほんの僅かに体勢を持ち直したのは李信のほうであり、瞬時に突き出された切っ先が妻子伯の喉下に迫るが、その一撃を許すものと真下から跳ね上がった爪先が剣をさらなる上方へと受け流す。その蹴り足の力を利用し、後方へと一回転。間合いを離脱した妻子伯が、李信の行動を見逃さぬように双眸を冷たく細く歪める。

瞬きの一つもなく、指先の動きはおろか、骨格の稼動さえ見逃さぬように観察していた。

なるほど、とてつもなく強い。

ヒュッと短い呼気を漏らした李信は素直に相手の力量を認めた。

少なくとも、この時代に生まれ育つてから戦ってきた相手は、言つては悪いが相手にもならなかったの一言だ。

何故か実力的に女性の方が強い傾向があることに一時は驚かされたが、幸か不幸か女性でありながら化け物級の妻を知っていた為にすぐに時代に適応できた。が、それでもかつての生と死が隣り合っていたあの時代に比べれば、生温さを感じていたのもまた事実。

だが、この妻子伯という名の女の実力は本物だ。李信の圧力に負けず、懐に踏み入ってくるその姿は感嘆の声さえ漏れでそうなほどだ。張讓が、自分で否定はしていたが陣営に引き入れようとしたくなつた

気持ちも分からなくてもない。従者であり護衛でもある孟陀でさえも恐らくは数合と持たずに屠られるであろうその力量。

つまりは、漸く出会えたというわけだ。李信が本気を出して戦える戦闘者に。

「楽しい。本当に楽しいですよ!!。どれくらいぶりでしょうか!!。このわっちと互角に渡り合える化け物はっ!!」

「たいしたものだと思うぜ、婁子伯。強いぞ、お前は。その研鑽、経験——曲がっていながらもとんでもないな」

「んふふっ!!。その言葉そっくりそのままお返ししましょう!!。その年齢で、まだ少年としか表現出来ない年月で!!。よくぞそこまで!!」
「まあ、俺にも色々あるもんだ。ただ一つだけ言っておいてやる。後ろで見てる奴が怖い顔してるんでな。悪いがそう時間はかけられん」
「つれない事を言わないでくださいよ!!。まだこれから本番でしように!!」

李信の言葉を遮り、爛々と瞳を嬉々として輝かせ、婁子伯が間合いを詰めてきた。疾風と化した女性の肉体が弾丸となつて一直線に駆け行きて、踏み足の接地が地響きをたて、それと連動して放たれる掌打。

まともに受けければ、馬車に引かれた人間のように弾かれる程の重みが込められているのは一目瞭然。その打突に剣をあわせ、切り払うようにして半ば強引に捌いた。

避けようと思えば容易く避けれるのだが、後ろには何と云っても守るべき者達がいる。

「てか、とつととさがれよ、張讓」

「何を言う。戦っているお前の雄姿。それを眺めることが出来るここが特等席だ。何があっても、誰であつても譲れんぞ」

「面倒臭いな、全く。まあ、別に構わんが」

一手でも間違えれば命を落とす死線の上にて、そんな戯言を交し合う二人に、他の者達は半ば呆れ、そして——婁子伯の気配が急激に高まっていく。

互角に見えるこの戦い。だが、果たして真実はどうなのか。戦いを

思い返せば李信は、張讓達を背に庇うようにしてその場から僅かにしか動いていない。しかも左右には一步も移動せずに前後のみの運動で、襲撃を全て捌いている。そんなことがありえるのか、と婁子伯は驚愕を表情に浮かべて頬を引き攣らせた。

臆するな、と弱気になった己を叱咤する。

戦闘という行為において、ここまで迷いが生じたのは何時以来だろうか。

初めて人を殺した時ぶりではないかと薄笑いを浮かべて最凶の暗殺者は地を駆けた。

今の李信にとって回避行動が取ることが出来るのは前後のみ。

行動範囲が限定されている彼の動きは、故に読みやすい。それを作戦に組み入れれば、李信を封殺することさえも可能。

されど、そんな彼女の思考を覆す剣閃が一筋。

反射的に喉から飛び出そうになった悲鳴を噛み殺し、婁子伯は必死に身体を捻って唐竹に振り下ろされた一撃を回避する。

柄越しに伝わってきた感覚は、標的の長い髪の一部を断ち切っただけ。その身に傷を負わすことは出来なかったものの、婁子伯の背筋を死の予感が撫で上げるに十分に足るものであった。

彼女が一陣の風となったそれよりも速く、神速の挙動で一步を踏み出した李信に、薄ら寒さを感じながら再度その身を半ば無理やりに稼動させる。

間をおかず、地面を斬りつけた刃が跳ね上がり、逆袈裟の軌道で牙を剥く。避けるのは無理だと踏んだ婁子伯は、その刃を手甲で受け止め流す。ギャリンつと生理的に受け付けられない金属音を高鳴らし、流された剣は空を断つ。

その場には、剣を振り切り体勢が整っていない李信。

絶好の機会。これを逃せば、もう二度と勝利への道筋が見えなくなる。

刹那に感じ取った直感。ここがこの戦いの分水嶺。勝敗を分ける最後の山場。

それでも、婁子伯は踏み込めなかった。

李信が放つ尋常ならざる冷たい気配に当てられて、僅かに迷ったのは十数分の一秒という一瞬。

だが、そこは踏み込むべきだった。絶対に退かないという決死の覚悟さえ持っていれば、或いはこの戦いにおいて李信を凌駕することが出来たかもしれない。どれだけ言葉を取り繕うとも、踏み込めなかったという現実と、取り返しのつかない一瞬となったという事実だけが残された。

本能が、妻子伯の身体を強引に後退させる。

その姿を見送りながら、李信は剣の柄の握りを何度か確かめる仕草を見せ、そして決定的な台詞を口に出す。

「感謝する、妻子伯。お前のおかげで一つはつきりとすることができた」

「……」

李信の礼に、言葉を返す余裕などあるわけもなく、必至になってどうすれば現状を打破できるのか思考する。

だが、その行為は無駄に終わる。李信の姿は戦闘の開始からまるで変わっていない。されど決定的に違っていることが一つだけ。両者が隠していた実力差に違いがありすぎた。いや、それは正確ではないだろう。李信の力が際限なく上昇している、というのが実際だ。まるでそれは、嘯みあっていたいなかった何かが漸く合致しているような感覚というのが正しいか。

「俺がどれだけ弱くなつて——どれだけ強くなつたか」

「……なん、ですか。貴方は、何を言っている……!?!」

ある意味支離滅裂な李信の台詞に、妻子伯はたまらず叫び声をあげた。

殺しあっている相手の非難の訴えに、だが李信は特に気にすることもない。

妻子伯の耳元で聞こえる荒い息遣い。地震のように聞こえる激し

い鼓動。それが何かと思えば、彼女自身が己を驚かせる音を放つ発生源であった。今にもこの場に崩れ落ちたくなる自分を叱咤しながら、銀色の手甲を嵌めた拳を更に強く握り締める。その感触だけが、彼女を支える唯一無二の支柱となっていた。

相対する李信は、そんな婁子伯を前にしながら緊張感も何もなく軽く剣を振った後、緩やかな一步を踏み出してくる。

「重ねて言うが、礼を言うぜ。俺は——あの頃よりも強くなれる確信を持った」

李信の感謝の念が空気に溶けた、刹那。

閃光が迸る。夜の闇を切り裂く、白銀の煌き。

それは言葉にすれば何とすることも無い。ただ、婁子伯に向けて踏み込み剣を袈裟懸けに振るっただけ。

特殊な動きも技も何も無い。平々凡々な、一太刀だ。

だがそれは、李信永政という唯一無二の戦狂いの怪物が放った、神速となりし凡庸な一撃。

故に——婁子伯如きが、回避できようはずがない。

己へと迫ってくる銀閃に、呆然と愕然と、魅入られる。

あまりにも美しすぎるそれは、人を殺すということだけに特化した殺戮の一手。

生涯を研鑽と殺人に費やしてきた自分でさえも到底及ばず。いや、違う。立っている土俵からして違っていた。単純な話、戦っていたと思っていたのは自分だけだったのかもしれない。彼方と此方にはそこまでの差があった。

「——ああ。なんて、素晴らしい」

陶然と眩き全てが緩慢に見える視界の中、反応することすら許さない李信の刃が、婁子伯の左肩から右脇腹までをなんの躊躇いも無く一刀の下に切り捨てた。

戦国七雄を滅ぼした中華六将。

戦狂いの悪鬼、李信。秦国最強の戦神とも謳われたその名に——
偽りは無し。



張讓宅襲撃事件より数日が経ったある昼下がり。

首都洛陽の名に相応しく、この街に訪れる人間は数多い。それと同時ここから旅立つ人間も数え切れないほど存在する。

街全体を囲むように聳え立つ城壁。そして内と外を分け隔てる城門は、多くの人間でゴった返していた。

そんな人波のなか、李信と司馬徽、鳳統はいた。

普段通りの服装で手ぶらな李信とは異なり、二人は旅装束めいた服装と多くの手荷物を持っている。

「本当に世話になったのう。まさかこうして鳳統のみならずワシまでも命を拾えるとは思っておらなんだよ」

「あ、有難うございます」

ほっほっほ、と口元に笑みを浮かべながら礼を述べる司馬徽と、頭を深々と下げる鳳統。

対照的な二人の姿を気に留めることも無く李信は肩をすくめた。

「いや。お蔭で、張讓の奴も嬉々としていたし。かなり趙忠の勢力を削れるみたいだしなあ」

「それは良かった。これで何の有益も無い情報であつたならば、ワシとしても申し訳が立たぬところであつたよ」

白扇を右手に優雅に微笑む司馬徽は、張讓の姿を思い浮かべて、その笑みを苦笑へと変化させた。

ここ数日で、李信と多少は距離を縮めることが出来たのか言葉遣いもまた張讓達へと接するように雑なものへとなっている。それが不快だと思わないし、逆に李信が敬語で話しているのを聞くほうが何故か背中が痒くなってしまう違和感に襲われてしまう。

「あのお方も随分と変わった御仁よ。暗殺者の前に堂々と姿を現し、そして一歩も退かぬとは」

「変わった人間だというのには賛成しなければならないな」

李信と婁子伯の死闘を平然と間近で見物していた張讓の肝の太さは実際大したものだ。

もしも、あそこになっていたのが他の十常侍であつたならば腰を抜かして必至に逃げ出していただろう。もつとも、それよりも以前の話で姿を現さなかつただろうが、むしろ李信としては隠れていてくれたほうが随分と助かつたというのが本音ではある。

しかし、あれ以降溜まっていた鬱憤が晴れたのか、楽しそうに職務に向き合っている姿を見受けられた。

「しかし、申し訳ないのう。お主に受けた恩を返す前に、この街を離れなくてはならぬとは困つたものじゃ」

「それは仕方ないさ。趙忠派の奴らに目をつけられては生活も難しいだろうしな」

確かに暗殺者を撃退したとはいえ、趙忠派と敵対したまま洛陽で生活するのは少々厳しい。

如何に張讓の保護下にあるとはいえ、それに変わりは無い。李信とて、四六時中彼女達の警備に当たれるわけでもないのだ。

それ故に、司馬徽と鳳統はほとぼりが冷めるまで洛陽から遠く離れた田舎で暮らすことになった。

「だが、それではやはりワシの気が済まぬ。故に、これを持って返礼としたい」

拱手とともに、頭を垂れた司馬徽が深く息を吸う。

「我が姓は司馬。名は徽。字は徳操。そして真名は——」

己の魂の名を口に出そうとした瞬間、パシンと額を叩かれ言葉を止められる。

何事か、と思つて見れば叩いた張本人である李信が首を横に振つていた。

「悪い。それは受け取れない」

「——何故、じゃ」

真名を預ける。

同性同士ならば、仲の良い友人同士でも珍しいことでもない。主従関係ならば尚更だ。

けれども、異性となればその関係は極端に減少する。友人同士はどうか、主従関係であつてさえも、真名で呼び合うことは殆ど無いに等しい。そこまで重要視されている真名を異性である李信に預けようとした司馬徽の行動は、生涯であるかないかの大決心であつた。

考えられているよりも相当に重い覚悟を止められた司馬徽が、愕然とするのも当然であつたらう。

「お前の覚悟は受け取つた、だがな、俺は真名は呼ばん。その者の根本を指し示す魂の名。それは、俺には重過ぎる」

どこか疲れた表情で、李信は語る。

「これはただの意地だ。だがな、譲れない意地でもある。俺が魂を委ねるに値した相手は後にも先にも先にもあいつだけだ」

「……張讓、殿かのう？」

司馬徽の言葉の中に少しだけ陰が混じってしまったのは致し方ないことだ。

李信がこのような表情を浮かべさせる相手とは一体どんな人物なのか、心が揺さぶられる。

「ん？ いや、アイツじゃないな。まあ、秘密だ」

カカカカつと先程まで浮かべていた哀愁を消し去った李信は高らかに笑う。

彼の態度に、追求したくなる気持ち在必至に堪える。李信の様子から恐らくは、例え聞いたとしても答えては貰えないことは想像に容易かったからだ。

「礼は次会う時までを考えてくれていればいいぞ」

「……ふむう。仕方ないのじゃ」

司馬徽は現状で己から贈れるものはないと判断し、不承不承小さく頷く。

そんな二人の会話を中断させるように、城門の方角から声がかかった。商人達で結成された大規模な隊商の出発が間近に迫っており、集合するように呼びかけているようだ。この御時勢、流石に小さな鳳統と二人旅というのは危険ということもあり、隊商と一緒に出発できるように張讓が手配してくれたのだ。

「気をつけて。また会えるといいな」

「お主には本当に世話になった。この恩は生涯忘れぬよ」

「有難うございました、李信さん。御恩は一生忘れましょん!!」

最後まで噛み噛みだった鳳統に笑みを送りながら、李信は背を向けて歩き去っていった。

その姿を見送りながら、司馬徽は傍らにいる鳳統の手を握り締める。

「鳳統……荆州はいいところじゃ。きっとお主も気に入るだろうて」

「はい、司馬徽さん」

「ん……実はのう、鳳統。ワシは前々からやりたいことがあったのじゃ」

「はい？ どんなことでしょうか？」

鳳統が上目遣いで手を握っている司馬徽を見上げる。

小柄な彼女の姿とあいまって、非常に可愛らしい。

「前々から教師、というものに憧れておつてのう。田舎では私塾を開こうかと思つておる」

「塾、ですか？」

「うむ、そうじゃ。我が手で世に埋もれている才ある者を育てたい、という欲求がワシにはある。それも全てはお主と出会つてはつきりとした」

司馬徽の台詞にキョトンとした鳳統に笑いかけ。

「お主の才は別格よ。並ぶ者無しと表現したとしても過分ではあるまい。そういった宝石の原石を磨き上げてみたいのじゃ」

「わ、私なんかそんなことないでしゅ」

司馬徽の褒め言葉に顔を真っ赤にして否定する鳳統だったが、それを愛おしそうに見ながら司馬徽は続けた。

「それに、もう一つワシには目標が出来た」

「もう一つ、でしゅか？」

「うむ。恐らくは、これより戦乱の時代が到来するじやろう。そんな中、間違いなく李信殿は頭角を現す人物だと確信しておる」

「……」

司馬徽の李信への評価に、鳳統は一も二も無く頷いた。

短い付き合いだが、彼が大人しくしている姿の方が思いつかない。

「見たところ、李信殿には信頼できる配下と言うものがまだおらぬようじゃ。これから先どうなるかわからぬがな」

それも頷ける。

あの強さ。あの風格。放つて置いても、彼の下に有能な人材は集まってくる筈だ。

「出来ればワシもその一員になりたいと願つておる。しかし、悲しいかなワシは一流にはなれても超一流にはなれぬ。ありとあらゆる面において、ワシよりも優秀な人物はいるじやろうて」

そんなことはない——そう叫びたかった鳳統の頭を撫でた司馬徽は、自虐的な発言とは裏腹に輝きに満ちていた。

「それ故に、ワシは育てよう。戦略軍略戦術用兵、計略謀略策略姦計謀計。ありとあらゆる面に置いて追隨を許さぬ智の怪物を。武の化身である李信殿と並び立てる叡智の化身を」

司馬徽の手を握っていた鳳統は、何時の間にか嫌な汗をかいていた事に気がつかなかった。

どこか禍々しさを感ぜさせる司馬徽の笑顔に、鳳統は幼いながらも恐怖を感じた。だが、その手を振り払おうとは思わない。何故ならば、鳳統もまた司馬徽の考えを完全には否定出来なかったからだ。

命の恩人である李信の役に立ちたいという気持ちだが、恐怖を塗りつぶしていく。その姿に満足気に頷いた司馬徽は、どこまでも続く蒼天を見上げた。

「——四海において勝るもの無し。最高の軍師を育て上げ、それを以て李信殿への返礼とする」

第9話：王道を行く者

「——こんな馬鹿げたことがあるものかつ!!」

年齢的に既に六十を超えたと思われる老人が、洛陽が宮中にある自分の執務室にて椅子を全力で蹴り上げた。

激しい勢いで蹴り飛ばされた椅子は、盛大な音をたてて壁に激突し床に転がる。

ハアハアと肩で荒い息をつき、憤怒の形相でここにいない誰かを睨みつける彼の姿に、部屋の隅に控えていた従者達が怯えながら床に視線を下ろす。十常侍の筆頭として冷静沈着が服を着たように宮中では振舞っている主——趙忠が、ここまで激怒した姿を長い間侍ってはいるものの見たことが無かった。

綺麗に整っている白髪を右手で掻き乱しながら趙忠は、今朝の出来事を思い出す。

政敵である十常侍の張讓が珍しくにこやかに話しかけてきたかと思えば、趙忠の配下達が私腹を肥やしていることをそれとなく弾劾してきたのだ。別にそれは構わない。何故ならばこの時代、もはやまともな官吏の方が数少ない。多少の不正を働いたところで趙忠程の権力を持つてば、もみ消すことは可能。問題は、それらの情報をこと細かに張讓が知っていたことだ。

情報の価値を、趙忠は知っている。

この宮中においては、情報こそが最大の武器。

それ故に、趙忠ほど情報の管理を徹底している者はいないといっても過言ではないだろう。

それなのに何故、張讓側にそれが漏れてしまっていたのか。

疑問を抱きながらもその場をなんとか乗り切った趙忠だったが、自分の執務室に戻り改めてその事実を知ると目の前が真っ暗になった。

「ふざけるなっ!! ふざけるなっ!! あの朱凶だぞっ!! 数百年の歴史を持つ暗殺一族だぞ!! それを、それをそれをそれを——!!」

まさか、自分が秘密裏に雇っている朱凶が暗殺に失敗したうえに、絶対に手出しをするなど厳命していたはずの張讓の屋敷に襲撃をかけるなど、青天の霹靂もいところだ。

激怒する理由、それは飼犬に手を噛まれた———というのもあるが、最大の理由は朱凶の中でも名の知れた妻子伯が撃退された為だ。顔を合わせたことは無いが、中華にその名を轟かせる化け物、妻子伯でさえも一蹴される。やはり自分の見立ては間違っていなかった。

李信永政という怪物とは敵対すべきではない。仮に事を構えるにしても、最大限の出来得る限りの準備をしてからでなければ、戦にもならないということを趙忠は改めて実感できた。

そう。結局のところ彼の怒りの感情の根本となってるのは、恐れ。それを誤魔化すために怒り猛っているにしか過ぎない。

「くそっ……使えぬ奴らめ。しかもよりもよって張讓にこちらの情報を流すことになるとは……」

奥歯を砕けんばかりに噛み締めて、趙忠が未だ治まり切らない怒気を隠そうともせず部屋中を歩き回る。

ぼさぼさになった白髪を揺らしながら部屋の中を行き来していた彼だったが、突如として扉が開く音が聞こえ反射的に振り返った。

十常侍の趙忠の執務室に、入室の声掛けもせずに入ってくるなど正気の沙汰ではないが、部屋に現れた女性を見て平静を保つように、露にしていた怒気を飲み込んだ。

「あはははっ。苛立っているねえ、趙忠の大将」

「おおっ……夏憚かうんか。話を聞いておらんのか？　これが、苛立たないでいられるものか」

「ああ、さつき聞いたよ。随分とまあ、あのお嬢さんに手酷くやられたってねえ」

「忌々しい小娘だ。小娘は小娘らしく大人しくしていればいいものを」

「もう小娘って年齢でもないけどさあ。大人しくしていればいいってのには同感だねえ」

趙忠と対等に話をしている夏憚という女性はどこか不思議な雰囲気纏っていた。

十常侍は良くも悪くもそれなりに他者を圧倒する気配を放っているが、特に張讓は別格であり、それには及ばずとも趙忠もまた並の者と比べるまでも無く強い圧力が身体中から滲み出している。

それと比較すると夏憚は、何も無い。まるで街にいるそこの一般人と見間違ふほどだ。身長は女性にしては高く、痩せ型。容姿に関しては特別に優れているというわけでもなく、目を惹かれる要素が微塵もない。

だからこそ、そんな人物が趙忠という老人と対等に話をしているという事に違和感を抱いてしまう。

「しかし、まあ……あの李信って奴は化け物だねえ。あの妻子伯を撃退するなんて、想像以上さあ」

「……アレには関わるな。あれほど厳命したというのに、本当に使えぬやつらよ」

「あはははっ。結構重用してたつてのに酷い言われようだねえ、朱凶も」

「ふん。もはや奴らの利用価値は無いに等しい。精々利用し尽してやるわ」

朱凶の行く末に苦笑いしながら、夏憚は言葉を選びながら相手を落ち着かせるよう会話を続ける。

彼女に不平不満を聞いて貰えた為か、趙忠もまた暫く経つと冷静さを取り戻し、そんな己を恥じるように己の仕事へと戻っていった。仕事が溜まっている彼に暇を告げると、夏憚は執務室を後にする。

宮中の廊下をゆっくりと歩きながら、彼女が考えるのは張讓達のことだ。

「いまいちよくわかんないなあ。あのお嬢ちゃんの考えていること」

李信永政。

あの十常侍筆頭である張讓が傍に侍らせている少年。

それは数年前まで全てに無関心であった彼女とは思えない行動だ。そのせいか、張讓と李信の関係はあることないこと噂となって宮中

を駆け回っている。生憎とさすがに皇族の方にまではそんな下種な噂は流れていないようだが、この宮中で働いている官吏ならば誰しもが一度は聞いたことがあるだろう。

基本的に不正を許さず厳罰に処する張讓にしては、自分の周囲に流れる悪評をそのままにするのは少々おかしい。特に趙忠と敵対している彼女は、どんな些細なことでも致命傷となる筈のそれを放置するなど正気の沙汰ではない。

「……それが狙いなのかなあ？」

例え、己の悪評に直結すると理解していても傍に置く。

それはつまり、張讓にとつては李信がその危険性と秤にかけても側近とする価値がある。

周囲の敵対する者達にそう考えさせるため。只者ではない——自然と皆が李信のことをその様に評価する。実際に、李信と会ったことがない者まで、彼のことを恐れている節があった。あの張讓の懐刀として、李信永政の名前は轟いている。

だが、果たしてそんな必要があるのか。

以前見たことがあるが、はつきり言つてあれは化け物だ。こんな時代に何故存在するのか分からないほどに逝かれている。戦場帰りの武官でさえも、可愛く見える程だ。言つてしまえば、箔をつけるための噂話など必要ないだろう。

そんな相手を碌な官位も与えずに傍に侍らせているだけ。体の良い護衛といつても良い。才ある者を愛し、重用する張讓にしては無駄にしすぎている。もしくは噂どおり、寵愛しすぎるあまり目が曇っているのかもしれない。

己の命を守る為に、単純に傍に置きたいが為に、李信を護衛にしていると考えたがそれもいまいち筋が通らない。先日見た張讓は、別段変わった様子は見られなかったからだ。

張讓は、保身を第一に考える他の十常侍とは覚悟が違う。命を賭けて宮中で政敵と見えない刃で斬り合っている彼女が、今更命惜しさに李信をただ護衛のためだけに使用するものだろうか。

「……いや、或いは命が惜しくなったと私達に思わせるため？」

張讓が怖ろしかったのは、勿論彼女の政治的手腕もあるが、死すら恐れぬあの覚悟だ。

趙忠派の者達の喉笛を、油断すれば噛み切るぞと発している執念は餓狼の如し。

そんな彼女が命惜しさに保身に走ったとすれば、趙忠派としても随分と余裕がでてくるが——それで生み出される油断を狙っている可能性も無きにしも非ず。

もしくは、そうこちらに思わせておいて、本当に保身に走っているだけかもしれない。愛するものが出来れば人間は命が惜しくなるのも当然。それも完全には否定できない。

「う、うむう……ようわからんなあ。頭がこんがらがってくるわあ」

思考の迷宮に入り込みそうになった夏惲は、嘆息すると泥沼に片足を突っ込みかけていた自分に呆れ果てる。

幾ら考えても現状では、相手の思惑など一から十まで理解することは不可能だろう。凡庸な者ならば、思考を辿る程度は容易いことだが、相手は厄介極まりない張讓なのだ。こうして此方を悩ませることさえも相手の思惑かもしれない。

「これは一度実際に言葉を交わしておいたほうがいいかねえ……」

夏惲は廊下を歩きながら、自分の予定を思い出しながら近いうちに会うことになる李信の顔を思い浮かべた。

「まあ、流石にいきなりは殺されはしないだろうし。気軽に会ってみましょうかあ」

全ては直接会ってから。

そう決断した彼女は、あはははと高い笑い声を残しながら自分の執務室へと戻っていくのであった。

ある昼下がりの洛陽。

先日から昼食をよく食べに来ている飯処。司馬徽達と一緒に談話をした場所であるのは記憶に新しい。本日も満員御礼となっており、李信は窓際の小さな食卓で昼食を取っているところであつた。

窓の外に見える人の流れを視線で追いながら、見事な味わいの炒飯をレンゲで口に運ぶ。

何度か咀嚼しながら丁度良い味付けに感嘆しつつ、食べ終わったらまた宮中に戻らねばならないことに溜息を吐く。

いい加減戦場にも出て槍働きでもしたいものだが、張讓曰く——もう少し待て、とのお達しがあり悶々とした生活を続けている毎日だ。そんな李信にとって先日の暗殺騒ぎで、今の自分の力量を大体把握できたことが唯一の救いとなっていた。

「おーっほっほっほっ!! 早く行きましたよ、華琳さん」

「……慌てないで、麗羽。まだ十分時間があるわよ」

多くの人が行き交う通りでさえも耳に届く少女の高笑いに加え、どこかで聞いた記憶があるまた別の少女の呆れ声が聞き取れた。

どこかで聞いた覚えが——ではないと、李信はすぐにその声の主を思い出す。短い邂逅ではあつたが、彼の心に十分に刻み込まれた覇者の資質。霸王としての格を備えた人の上に立つ者。曹操孟徳その人が、疲れた表情を隠し切れずに街路を歩いていた。

そして、曹操の前を行くもう一人の少女がいる。

年齢体格ともに曹操と同程度で、髪の色も同じく綺麗な金色。敢えて違う点を挙げるとすれば、曹操に比べて随分と長く伸びている髪く

らいだろう。くるりつと巻き髪となっているそれがまずは第一印象として目に留まるはずだ。そして一目でわかる程に贅を尽くされた豪華な服装。太陽の光を反射させ煌びやかに光り輝いている。

当然この時分街路は人通りで溢れているが、そんな二人の少女が歩く先は不思議なことに次々と人の波が割れていく。まるで何か怖ろしいものを見た、という表情で道を明けていく街の住人達。

一瞬曹操孟徳の影響かとも考えた李信だったが、人々の視線を追ってみれば、その行く先はもう一人の豊かな金髪の少女であった。

幼いながらも覇者としての風格を湛えている曹操を差し置いて、人々から恐れられる少女に少しの興味が湧く。

「——あらっ。」

思わず凝視してしまった李信の視線に気づいたのか、通りを歩いていた曹操と飯屋の窓から覗いていた李信の目が合った。

にこりつと微笑んだ彼女は足取りを変更し、飯屋の暖簾を潜つてくる。自分達平民とは明らかに格が違う少女の登場に、建物で食事をしていた者達は会話を止め、結果としてシンつと静まり返る室内。

難癖をつけられないように誰もが視線さえも我関せずと明後日の方向を向いている様は、平民との力関係を如実に現している。

「お久しぶりです、李信殿。お変わりないようで何よりです」

「一ヶ月ぶりくらいか、曹孟徳。そちらも元気そうで安心した」

「はい。あれからの御活躍、お父様からお聞きしております。かの朱凶を退けた、と」

「あー、それか。噂ほど大きなことをしたわけじゃないんだけどな」

「御謙遜を。張議様の屋敷に侵入した朱凶の一族を壊滅させたとか」

「……話がどんどん大きくなってるぞ、おい」

曹操——華琳の言葉に、呆れ顔で李信が呻く。

人の口に戸は立てられぬ、とはよく言ったものだが、李信が妻子伯を倒した噂は即座に洛陽中に広まった。

最初のうちこそ正しい話が伝わっていたが、伝聞を繰り返すことによって噂話はメダカが鯨になっていく。遂には、何故か李信が朱凶の一族を壊滅させたというところまで大きくなってしまっていた。

「確かに正確ではないのでしようが、全てが間違っているということもないのでは？」

「……まあ、詳しいことは言えないけどな」

くすくす、と微笑む華琳に李信は言葉を濁す。

ここまで市井に広まっているのに疑問を覚えるが、恐らくは張讓の手の者がそれとなく噂を喧伝しているのではと予想を立てた。

これほどまでに洛陽の街に話が広がってしまったえば、流石の趙忠も噂が沈静化するまでは迂闊に手を出せなくなるだろうと踏んでのことだろう。もつともそこまでしなくても、趙忠は彼女に手を出そうと現在のところ考えておらず、今回の襲撃事件は婁子伯の暴走だったのだが——その答えに辿り着くのは如何に張讓といえど不可能であった。

二人がそんな会話を続けていると、先に行っていた筈の金色の髪の少女が華琳の声を頼りに探していたのか、店の敷居を大股で越えて入ってきた。室内を軽く見渡し、人の多さと然程清潔とは言えない内部の様子に、多少眉を顰めながら嘆息する。

「どこに行ったのかと思えば、このような所で何をしているのかしら？」

「……御免なさい、麗羽。少し知り合いがいたのよ」

「華琳さんの知り合い？」

金色の髪の少女——麗羽と呼ばれた彼女は、華琳と向かい合っていた李信を一目見ると驚いたように目を見開く。

「華琳さんに男の方のお知り合いがいるとは珍しいですわね」

「貴女も名前くらいは知ってるでしょう。李永政殿とはこの方よ」

「……李永政？ 残念ながらご存知ありませんわ」

李信の名前を聞いても顔色一つ変えることなく言い切った麗羽は、おーっほっほっほ、と相変わらずの高笑いをする。

その姿に頭が痛いとはばかりの仕草で華琳は額に手を当てて溜息を漏らした。相手が誰であろうと自分の調子を崩さない学友に、呆れると同時に尊敬を抱いてしまう。

確かに宮中に轟いている彼の名前だが、未だ官位を持たない麗羽や

華琳の耳には届かないというのが実際のところだ。ましてやあの麗羽が世間の噂話に耳を傾けるとは思えない。しかし、李信を自身の目で見てこの対応。はつきりと言って、普段通りの自分を保てることのできる人間は相当な凡愚か稀代の天才か、そのどちらかであろう。

華琳の目から見て、この学友の彼女はどちらに区別されるか。それは考えるまでも無いことであった。

「申し遅れましたわ。私は——袁紹。字は本初。華琳さんのお友達なら、私も宜しくしてあげますわ」

麗羽が名を名乗った瞬間、店内で静まり返っていた客が一瞬ざわめいた。

それも一秒にも満たない時間であり、彼らは華琳が入ってきたときよりも関わりあいになるのを避けるべく頭を下げ自分たちの手元だけをじっと見つめてる。その姿に李信は、然もありませんと胸中で相槌を打った。

容姿だけではわからなかったが、袁紹本初という名前を聞いてようやく住人達のこの態度に納得がいく。

「かの名門汝南袁氏とは知らず失礼を致しました。既に曹操殿からご紹介に預かりましたが姓は李、名は信。字は永政と申します」

席から立ち上がり礼を取る李信の姿に満足げに頷く麗羽。

「おーっほっほっほ!!.. なかなかわかってらっしやる方ですわね」

そんな少女の姿に、改めて確信した店内の者達の身体が緊張で強張っていく。

無理も無い、と李信は思った。何故ならば目の前にいるこの少女は、言葉にした通りの名門の御息女。いや、名門どころか、名門中の名門。この後漢において四代に渡って三公を輩出した名門貴族の後継者と名高い人物だ。宦官が権力を持つこの時代ではあるが、彼らを持つてしても袁家を無視できないほどの権勢を誇るほどである。あの張讓をして、袁家にはあまり関わるなと忠告してくるのだから、その厄介さは理解できるであろう。

李信としても出来れば今のところこれ以上の繋がりは持ちたくないというのが本音であったが、この状況からどうやって逃れようか頭

を回転させているところ、先に口を開いたのは麗羽であった。

「李信さんとおっしゃいましたね。貴方は誰かしら忠義を誓っている方はいらつしやるのかしら？」

「……いえ。特には」

一応は張讓の下に在るとはいえ、忠義を誓っているかと言えば、そうではない。

あくまで協力者という関係にしか過ぎないのだが、それをわざわざ口に出すのは憚られる。

「そう。宜しかったら私の下で雇って差し上げても宜しくてよ。」

「——ちよ、ちよっと待ちなさい、麗羽!? 貴女何を言ってるの!？」
麗羽のとんでも発言に、目を剥いて食って掛かる華琳。

だが、肝心の彼女はそんな友人の対応も全く気にせず高笑いを続ける。

「そうですね。前將軍程度ならば、用意してあげますわ」
「っ!？」

たかが十二、三の子供の戯れと一笑に付すのは容易い。

だがこの少女が、袁紹本初が口に出すのであれば、それは現実味を増す。それを知っている華琳は言葉を失った。

一介の官吏にしか過ぎない李信を仮にも將軍職にあてがおうなど普通に考えれば不可能だ。だが、恐らくは袁家の力を持つてすればそれすら可能とする。

売官制度というものがこの時代にはある。それは文字通り官職を金で買うことができるという制度だ。それは三公という官職さえも買うことが可能であるが、当然それには相応しい大金を必要とする。

宦官や外戚とも肩を並べることが出来る袁家——いや、純粹な資金力でいえば、彼らなど齒牙にもかけない圧倒的な差があった。古くから漢王朝に仕える名門の汝南袁氏とはそこまでの力を持っているのだ。

しかし、初めて会ったばかりの男にこれほどの好待遇。普通に考えれば有り得ない。つまりは、麗羽は最初から李信の名前を知っていたということだ。

——この狸め。

思わず胸中で舌打ちを打った華琳と、一拍遅れて李信もまたそれを悟る。

だが、破格の待遇で誘われた彼は、一瞬も迷わずに決断を口に出す。

「勿体無きお言葉。ですが——」

「——御嬢様、此方におられましたか」

李信が断りを入れようとした瞬間、それに割って入ったのはしやがれた男の声だった。

暖簾を潜って姿を現したのは、枯れ木のように細い腰の曲がった老人。杖を突きながら覚束ない足取りで麗羽へと近づいてくる。好々爺のような笑顔は、見ている者の毒気を抜いてしまう印象を与えてきた。

「あら、沮授さん。どうかしましたの？」

「時間が迫ってきたのに御嬢様が来られぬと、顔良と文醜が心配しておりましたぞ」

「……もうそんな時間でしたの」

「……はい。それよりもこのような場所にお一人で来られるのは控えて戴きたい、姫」

二人の会話に割って入った新たな人物に、反射的に誰もが声のした方角へと視線を向けた。

店内の人間は沮授と呼ばれた老人の他に、もう一人若々しい男が入り口付近に居ることに声を聞いて漸く気づく。細い目の、蜥蜴のような雰囲気を纏った陰気な青年であった。

姫と呼んだのは彼であったのだろうか——この場に現れたのはその二人だけではなかった。

「紹嬢様。勝手にどっかに行くのは止めて欲しいですよー」

ひやりつとその台詞だけで室内の空気を氷点下まで下げた人物が一人。

燃えるような赤い長髪をうなじあたりで紐で縛り、眠たそうに目尻がとろんつと下がった少女。気を抜けば今にもその場で居眠りをしてしまうのではないかと思わせるほどに、彼女は怠惰な気配を放つて

いる。空気の温度を下げる圧力を発した同一人物とは思えない差がそこにはあった。

だが、店内の人間は確かに悟る。コレには関わるな。貴族だから、官位が遥か上だから、そういったものではなく、子供と大人。いや、子猫と虎ほどの差を感じさせる。この少女と敵対するくらいならば、飢えた人食い虎の前に出されたほうがまだましだ。自然とそんな風に思ってしまうほどに異常であった。異端過ぎていた。強き者。武人。戦場を知ってなお生き残る兵。その中で生まれ育つ千人に一人――否、万人に一人の逸材。天から中華に落とされた怪物の一人。怠惰で眠たげな様子など仮初の姿にしか過ぎなく、吐き気がするような血の香りが充満していく。

だが違う、と華琳は息を呑んだ。

この少女だけではない。老人も蜥蜴のような雰囲気青年も、この三人は明らかに常人が持つ雰囲気を超えている。

外見からは、少女は武官であり男二人は文官だと推測された。周囲の人間を圧する気配を放つ少女はともかくとして、文官である筈の老人と青年が纏う気配も尋常ではない。あの華琳をして、瞠目させるほどに。文官であるはずが、その圧力は下手をしたら將軍級のそれに匹敵している。それを証明するように、華琳含むこの場にいる者達の中には本来の三人より一回りどころか二回りは大きく見えた。

「田豊さんに張×さんまで。心配をかけてしまったみたいですね」

「……出来れば軽はずみな行動は控えて頂きたいものです」

「うちは別にいいつすけどねー。沮授の爺さんの寿命が縮まるかもしれないつすから気をつけて欲しいつすよ、紹嬢様」

気難しそうな田豊とは正反対の張×は眠たげに答える。

その二人の諫言に、嫌な顔一つ見せずに麗羽は鷹揚に頷くと、その場から踵を返す。

「それでは、今回の返事は次回会った時に聞かせていただきますわ。またお会いしましょう、李信さん」

場末の食事処とは思えない、花薫る匂いを残して麗羽はシンと静まり返った店内から外へと出て行った。

沮授と田豊は、外に出る前にちらりつと李信へと視線を送るもの何とも言わず主に付き従って行く。張□は、にへらつと笑顔を見せると手を振った後、他の二人と同様に麗羽の後を追った。

四人の姿が消えてからも、店内の空気は未だ冷たい状態が続いていた。

それが溶けるまでに要した時間は、数分も必要とした。非日常の出来事が終わりを告げたことに、確信を持てなかった彼らだが店内の空気が普段と同じようになると、ようやく安堵の溜息を漏らしそれぞれの会話に戻っていく。

「……噂とは随分と違った人物だな」

「そうね——いえ、そうですね。麗羽の噂は色々聞いていますが、どれもこれも的外れかと」

「ああつと、普通の言葉遣いで構わんぜ。丁寧な言葉遣いってのは苦手だな」

「……宜しいので?」

「ああ。俺としてもそつちの方が話しやすくて助かるしな」

「有難う、助かるわ。遠慮なくそうさせて貰うから」

張□の気配に当てられた華琳の緊張が解けるまで待っていた李信が、気軽にそう話しかけた。突然だったためだろうか、思わず素となった華琳に苦笑した李信の対応に、ようやく本来の自分を取り戻したのか嘆息を一つ。

「化け物っていうのは探せば意外といえるものなのね」

「それには同感だな。あれは相当にできるっつーか、やばい」

「あの李信殿にそこまで言わせるほど? 参ったわね……麗羽のやつどれだけ隠し玉をもっているのよ」

カリッと右手の親指の爪を無意識の内に噛んだ華琳の内心は複雑である。

学友であり、将来的には敵となると見据えている相手の手の内を今のうちに見ることが出来たのは幸運だが、その手札があまりにも凶悪すぎた。或いは、麗羽なりの挑発なのかもしれない、と華琳はそう感

じた。

「袁本初が袁家の後を継げば衰退するのは間違いない。宮中で噂されているが、どこの馬鹿だ、それを流したのは」

「さあ？ 確かに麗羽の行動だけを見ていればそう判断されるかもしれないわね」

あの高飛車で驕り高ぶった態度を常に取っていれば、甘く浅く見られるのは当然だ。ましてや華琳や張讓のように、人を圧する霸王としての風格を備えているわけではない。

彼女はあくまでも人としての範疇に止まっている。だが、多くの者が勘違いしているが彼女にはそれで十分なのだ。

「かもしれないな。だが、袁本初もまた王の器だ」

「それは認めるしかないわね」

華琳のような霸王足る器を持っているわけではない。

袁紹本初は、言ってしまうえば空の器。本人自身は多少優れた能力しか持つてはいない。だが、その器は果てしなく大きく深い。それを満たすのは本人でなくても良いのだ。数多の配下の者達によって、その器は満たされていく。そして、幾らその器に入れようとも溢れかえることはない。即ち彼女は霸王の器ではなく——人に戴かれる王。霸道ではなく、王道を行く王。

「広大で肥沃な土地。莫大な資産。王の器に優れた人材……大丈夫か、袁家」

「その気になれば国を盗れるかもしれないわね」

くすりつと微笑とともに不敬にも程がある発言を零す華琳をたしなめる気持ちは李信にはなかった。

なぜならば、彼もまた同じようなことを考えていたからである。今はまだ弱まったとはいえ漢の王朝の威光も強く、大丈夫のはずだ。だが、これから先どうなるか予想できない。

万が一、袁家が謀反を考えたらどうなるか。果たして止めることが可能な勢力があるだろうか。

少なくとも現時点では存在しない。そこまでの私兵と資金力を彼らは擁している。

人によつては對抗馬として、涼州の馬騰や江東の孫堅をあげるものもいるかもしれない。

だが、そのどちらともが中原より遠く、しかも勢力的に見ても圧倒的に袁家よりも下である。個々としての能力は勝るかもしれないが、兵数自体が違いすぎる。桁が違うといつても良い。確かに武将の質も重要だが、戦争とは数が基本となる。相当な運に恵まれ優れた武将が率いれば千の兵で一万の軍に勝てるかもしれない。だが、十万の大軍勢に勝てるであろうか。それが二十万になったらどうか。如何に策を練ろうが質の良い兵士を揃えようが、勝てる訳がない。

しかも袁家はこれよりさらに躍進を遂げるであろう。

近い将来、袁家は一つの国となると断言しても構わないだろう。

少なくとも華琳はそう予想をしていた。いや、それはもはや確信である。

そして、自分が覇を唱えるためには、その袁家を滅ぼさなくてはならない。

ぶるりつと、華琳は己の確信に背筋を振るわせた。一体それはどれだけ困難なことか。

今の彼女には何も無い。

自分の手足となる武官も文官も。尖兵となる兵士も。土地も無ければ守るべき民も居ない。

まさしく無位無官の小さな霸王。

「——それでこそ、私の全てを賭ける価値がある」

少女とは思えない烈々たる笑みを浮かべた華琳は、静かにそう呟く。

誰にも聞かれることの無い小さな宣言は空気に溶ける前に李信の耳に届き——彼は少しだけ眩しそうに華琳を見つめるのであった。

第10話：李信、涼州へ

「ほっほっほ。しかし、御嬢様……一介の小僧つ子に將軍位とは随分と大盤振る舞いでございますな」

「そうですね。私もそう思っていました。李信さん……その名を覚えていても損はなさそうですわ」

大通りを埋め尽くす人垣が自然と割れていくことに満足感を覚えながら歩いていく麗羽の背後にいた沮授が、突如としてそう切り出した。主の度量の大きさは知ってはいるが、幾らなんでも先程の勧誘は不自然に過ぎる。

好敵手として、友として見ている曹操孟徳の知り合い故に自分の陣営に引き込みたいと考えたのでは、と憶測するが彼としてはいまいち納得がいかなかった。如何に強大な力を持つ袁家だとしても名も無き一介の者に將軍職を与えるなど有り得る事ではない。いや、多くの優秀な者を抱える袁家だからこそ、上に立つ者には並々ならぬ才覚を必要とする。

もつとも相手が最近噂になっている李信永政なる人物であれば麗羽の勧誘にも納得が行くが、沮授はその名前を主の耳に届けた覚えは無かった。しかし、主の対応から見て彼女が前々から李信の名を知っていたのは明らかである。しかも、彼女の——私もそう思っていた、という発言。

となれば、当然麗羽に李信について話をした人物がいる筈だ。

そう考えた沮授は、己の横を歩く若い青年にちらりと視線を向けると、その視線に気づいた田豊は特に表情を変えることなく小さく頷く。

「お主だったか、田豊よ。李永政を此方に引き込むように御嬢様に進言したのは」

「はい。つい先日、姫に話を通したばかりです」

「時期尚早だったと思うが。案の定、拒否するようだったぞ」

「……まさかこれほど早く機会が巡ってくるとは私も予想外でした」

沮授の厳しい言葉に田豊は、自分でも失敗をしたと理解しているのかやや困ったように頬を搔く。

外見雰囲気冷たい印象を与える彼もこのような仕草をするのだと、沮授は意外なものを見たと厳しかつた視線を緩めた。

「して、噂の李永政なる人物をどう見る？ 將軍職を持って迎え入れるに値する人物か？」

緩んだ空気を引き締めるように沮授が言葉を硬く強く、田豊に問い掛ける。

その質問を受けて考え込むこと数秒。蜥蜴のような雰囲気青年は、沮授にも負けないほどの力を込めた言葉を口から紡ぐ。

「条件を些か変更しなければなりません」

「……ほう？」

「將軍職に五百万銭を用意してでも此方に引き込むべきかと」

田豊の発言にギョッと目を見開いた沮授だったが、それも一瞬のことではさもなく、己の白髭を撫でながら好々爺然とした笑みを浮かべた。

「五百万銭とはまた随分と高い評価をしたものだな、田豊よ」

「噂話だけでは判断はつきかねませんでした、一目見て確信を得ました。アレは敵に回すべきではありません」

「……ふむう」

將軍職だけでも過分だというのに、五百万銭も用立てるというまさに破格の待遇の提示を聞けば、誰もが驚き理解に苦しむに違いない。未だ十五、六の小僧をそこまでして自分たちの陣営に引き込む、他の者達からすれば正気の沙汰を疑う筈だ。

しかも、五百万銭という金額を口に出したことに意味がある。それはかつてとある人物が司徒の地位に就く為に必要とした金額だ。つまりそれは、李信にはかの三公に匹敵する価値があるという意味に他ならない。

「はてさて、沮授殿は反対をされますか？」

どこか試すかのような田豊の物言いに、沮授は深く静かな笑みを零しながらゆつくりと首を横に振った。

「いいや、わしもそれには賛同せねばなるまい。あれほどの怪物を見たのは二度目故に動揺を表に出さずに済んだが……」

「……そうですね」

沮授と田豊は同時に背後を振り向けば、その先には眠たげに目を瞬かせている張ⓧがいた。

二人の視線に貫かれた彼女は、話を聞いていなかったのか欠伸を噛み殺しながら首を傾げる。

「なに見てるんっすかー、二人とも?」

「……いや。お主の目から見て、どうであつたか?」

「李信って子のことっすかね?」

「うむ、そうだ」

沮授の問い掛けに、張ⓧは両腕を組んで考え込むように空を見上げた。

「化け物っすねー。そこそこ戦場は渡り歩いたつもりっすけど、ありゃ別格っすよ。あと数年もすれば、天下無双を名乗っても誰からも異論は出ないんじゃないっすか」

袁家でも一、二を争う実力の武官である張ⓧの評価に沮授と田豊の二人は驚くでもなく、なるほど、と静かに呟く。

彼らは文官である。文官と言つても、袁家の支柱として名高い二人は、数多の人間を見てきた為、その経歴上才ある存在には鼻が利く。だが、やはり武官と文官という畑違いは否定出来なく、細かな力量までは読み取ることができないのは当然だ。そういった意味で専門である張ⓧに意見を求めたのだが、彼女の評価に驚かなかったのは、単純に李信ならばそれくらいになるであろうと予想がついてしまったからだ。

「ふむ……つまり数年以内ならば、お主なら勝てるということか?」

「まあ、本音を言えばあまり殺り合いたくない相手っすけどねえ。十中八九勝てると思っすよー」

李信という規格外の化け物を目にしていながら、張ⓧは平然と言いつ切った。

己の力量を過小評価も過大評価もしない張ⓧ儁乂が、自分と相手の

力量差を確認し、認識した結果が彼女の口からでた言葉だった。そして、その判断は限りなく正確である。

「ただ、あの子はまだまだ成長途中なんっすよねー。見た感じ伸び代も切れることが無い化け物っすから、余裕を見て数年。下手をしたら二、三年以内にはうちの手には負えなくなるかもしれないっすけどね」

現状でも戦えば腕一本は持っていられる可能性高いっすねー、と眠たげな表情そのまま笑う張□の台詞に、逆に笑えないのは文官の二人である。袁家最強にして最高の武官の評価に、改めて李信の恐ろしさで強さを確信。

最悪敵に回った場合、張□に対処して貰うしか手段はないのだが――
――まかり間違えば、袁家の支柱であり武の四柱に数えられる彼女を失う結果にもなりかねない。数多くの人材を抱えている袁家ではあるが、流石に張□級の武官を失うのは大きな痛手だ。やはり何としても袁家に引き込むべきだという思いをより一層強くする。

「ただ、あくまでも一対一の話っすよー？ いざ敵対したとしても、顔良と文醜、菊義と高覽に援護して貰いつつ、うちの自慢の直属兵に包囲させて、審配と逢記に指揮させれば押し潰せると思うっすよ」

李信一人を倒すために、袁家の怪物達を総動員する。

普通ならば断じて有り得ないことだ。そこには一対一だとか正々堂々などという概念は存在しない。明確で、確実な方法を取る張□は、武人でありながらも冷徹なまでの現実主義者であった。戦場において一騎打ちこそが、戦の華。そう考える武人が多い中で、彼女の考えは少数派だ。しかしながら、だからこそ彼女は、張□儁又は強いと言える。敵は殺せるときに殺す。隙があれば、そこを突く。如何なる手段を用いても殺す。如何に効率的に、合理的に殺せるか。眠たげな姿を見せる彼女であるが、その本質は遊びも無く、油断も無く獲物を仕留める狩人であった。

自分があげた者達でかかれれば相当な被害を受けるだろうが、李信を討てるのであれば高い買い物にはならない筈と考える根が武人である張□とは異なり、沮授と田豊はたった一人の敵を相手にそこまでし

なければならぬ状況を改めて省みると、背筋が粟立つのを抑え切れなかった。

「まあ、あんまり気にしないほうがいいですよ。これは勘っすけど、当分はあの子と敵対することはなさそうっすからねー」

にへらつと笑った張は、二人の背中を軽くぱしんつと叩くと足取りも軽やかに前を行く麗羽の後を追った。

勘、などというあやふやなものを信じるわけではないが、あの張がそう言うのなら軽視すべき情報にはならない。戦場で生まれ、戦場で育ち、戦場で生き抜いた生粋のいくさ人。そんな彼女の第六感は、文官二人には理解できないものの、不思議と説得力があった。

「麗羽様、どこに行ってたんですか？」

「姫つてば、時間が結構ぎりぎりになってますって」

そんな三人の会話に割って入るように、二人の少女が若干慌てて人波の中から駆け寄ってくる。

一人は、穏やかな表情で黒髪のおかつぱ頭の少女。もう一人は、快活な笑顔を浮かべ、頭に布を巻いた短い髪の少女。そのどちらともが麗羽よりも僅かに年上か同じくらいの年齢に見えた。だが、未だ幼い身でありながらその実力の高さは、佇まいだけで覚えることが可能な筈だ。無論張には及ばずとも、あと数年もすれば袁家にとってなくてはならない人材になると、沮授と田豊は推測していた。

「斗詩さんに猪々子さん。ご迷惑をおかけしましたわ」

二人が心底自分を心配していることがわかっていいるからか、一応の謝罪を口に出す麗羽ではあったが、反省している様子は全く見せない姿に、斗詩と猪々子——即ち顔良と文醜という名の袁家において近い将来武の四柱に含められるであろう若き天才達は疲れたように溜息を吐いた。

「全く……絶対に時間は厳守するって言ったのは、姫なんだしさあー」
ぶつぶつと文句を口に出す猪々子を、まあまあと宥める顔良であったが、どこか不安そうな色を視線に乘せて躊躇いがちに口を開いた。

「その……麗羽様。本当に宜しいのですか？」

「何のことですか、斗詩さん？」

「……ええっと。趙忠様のお誘いを無視して、他の方の屋敷を訪問するというのは、少し拙いのではないのでしょうか？」

「何のことかと思えばそんなことですよ」

本当にどうでもいいと考えているのか、呆れた様子で嘆息する麗羽に、肝を冷やすのは斗詩である。

宮中を支配する十常侍が筆頭の一人である趙忠の誘いを無視するなど本来であれば認められないことだ。下手をしなくても無実の罪を着せられて官職を追われることになるのは目に見えている。だが、如何に趙忠といえど、袁紹本初という袁家の当主を罷免することは難しい。趙忠も圧倒的な権力を有しているとはいえ、袁家を敵に回すのは無謀としか言えないというのが現状の為——今回の誘いは麗羽を自分達の派閥に組み込むことを目的としているのは想像に容易い。

それを辞謝して、他の者からの招きに応じる。しかもその相手は、趙忠の毛嫌いする人物。

「折角の曹騰殿からのお誘いですもの。趙忠さんとは比べるまでもありませんわ」

おーっほっほっほ、と嬉しそうに笑う麗羽の台詞に、顔良は言葉を失った。

曹騰とは、一昔前まで宮中で辣腕を振るっていた宦官である。簡単に言ってしまうえば、華琳の祖父のことなのだが、実はその名は中華全土に広まっている有名な宦官であった。安帝、順帝、冲帝、質帝の四帝に仕え、宮中にて三十余年の日々を過ごし、去った現在でも多くの者達に慕われている有能にして実直な人物。

現在は、完全に引退して洛陽にある屋敷にて隠居しているのだが、未だに彼の下を訪れる者は数多い。

その曹騰が、孫である華琳との話題にあがった麗羽に、何時も孫が世話になっている礼の意味を込めて屋敷に招いたのだ。そのことに喜びも露にしたのが麗羽であった。曹騰の残した逸話を幾つも聞いていた彼女は、半ば尊敬の念を抱いていた為だ。

それ故に、麗羽は趙忠の誘いを断り、現在こうして華琳の住んでいる屋敷に向かっているとどこであった。

生憎と趙忠にとつては、曹騰は邪魔者だったこともあり、半端ではない敵愾心を向けている。

自分の誘いを拒否して、その曹騰の屋敷に向かうというのが耳に入れば、趙忠は激しく怒り狂うだろう。

まずいことになるかなあ、と頭が痛くなる斗詩ではあったが、現状を作り出した張本人である麗羽はすこぶる上機嫌で歩んでいく。それを見た黒髪の少女は、苦笑して己の主の背中を追うのであった。



「李信。涼州へ向かえ」

「……………おい、いきなり過ぎるぞ」

昼食を終え、張讓の執務室へと帰ってきた李信を迎えた第一声がそれであった。

あまりにも唐突な台詞に目を白黒とさせた李信へと、張讓は薄い胸を張りながら答えを返す。

「異民族の侵入に手を焼いている地域の一つだ。その刺史と渡りがついたが、最近は随分と襲撃が多いとのことだ。人手は幾らあっても足りない」と泣き付かれたがな」

「……………お、遂にか」

珍しく喜色を露にした李信だったが、ようするに漸く用意されたということだ。

李信永政が本来居る場所。望んだ世界。即ち、生死を賭けて争う戦場が。

「ただし、お前に部下はつけられない。涼州へと向かうのはお前だけになるが、異論はないか？」

「いや、構わんぜ。むしろ、つけられても困る」

戦も経験したことがなく、ぬくぬくと洛陽で育った兵士など全く役に立ちはしない。

言葉に出したとおり、邪魔になるのは目に見えていた。それに下手に兵を付ければその中に、趙忠の手の者が紛れ込まないとは限らない。それを考えれば、李信一人の方が身軽に対応できる。

張讓の私兵を供にするという手段も考えられるが、李信と一緒に涼州へと赴けばその分、彼女の身の警護が甘くなる。ただでさえ李信が洛陽を離れるのだ。万が一の事態を考えれば、兵士を減らすわけにはいかない。

それを認識していた李信は、だからこそ一切の不満を見せはしなかった。

そんな彼へと張讓は、手に持っていた竹簡を放り投げる。

放物線を描いて手の中に納まったそれと、張讓を順番に見比べながら李信は素直に疑問を口に出す。

「なんだこの竹簡は？」

「涼州刺史へ渡しておけ。相手にされなかったならば、この張讓の名前を使え。さすれば大抵の無茶も通る筈だ」

「……わかった。涼州に着いたら渡しておけばいいんだな？」

「ああ。一応は話は通してあるが、末端の者にまで行き渡っているかはわからない。その点は気をつけろ」

淡々と、だがどこか寂寥を滲ませている張讓だったが、ふうつと嘆息すると椅子に深々と倒れこむようにして身体を沈ませる。

「お前のことだ、今すぐにでも出立するつもりなんだろう？」

「ああ。良く分かってるな、流石は張讓」

嬉しそうに、一切の曇りのない笑顔を見せる李信が少しばかり憎らしい。

自分がこんなにも、もどかしく思っているというのに、肝心の彼は既に心ここにあらずといった様子なのだ。

可愛さあまつて憎さ百倍。とりあえずその顔面を一度引つぱたきたくなる衝動を必至に抑えながら張讓は平常心を保つように心がける。

「出立の前に、私の屋敷へ寄って行け。既に旅の用意をさせている。それに、お前が前々から欲していた例の武器——用意しておいたぞ」

「おっと、出来たのか。感謝するぜ、張讓」

「別に構わんよ。しかし、あんな武器を扱えるのか、お前は？ どう見てもお前の体格で扱えるとは思えん代物だが」

「涼州までの道すがら、使いこなせるようにはしておくさ」

「そうか。お前がそう言うならば、出来るんだろう。くれぐれも無駄にはするなよ？」

ああ、と短い返答をして李信は背を向けると、ひらひらと片手をあげる。

「じゃあ、ちよつと行って来る」

「ああ。行って来い。息災でな」

「お前こそ。次会うときは墓の下とかだつたら笑えんぜ」

「ぬかせ。お前こそ戦場であつさりと散ってくれるなよ？」

互いに皮肉な言葉を贈りながら、それが両者の別れの言葉となった。

扉を閉めて去っていった李信へと、張讓は普段ならば絶対に見せることのない愛情を込めた優しい視線で見送っていた。

やがて数分もそうしていた張讓であつたが、どこか疲れたように天井を見上げる。

ここ数年常に一緒にいた李信が傍から離れたことに、まるで半身をもぎ取られたかのような寂しさを覚えた。だが、これは李信が望んだことであり、己が認めたことだ。元々は戦場を用意してやると言った

のは彼女の方だ。今更それを後悔するなど愚かにも程がある。

それに、張讓はある種の確信を抱いていた。それは、李信が近い将来に洛陽に戻ってくるという未来予知にも似た確信だ。

これから彼が生きているのは戦場。強き者でもどんな些細なことで命を落とすか分からない。しかし張讓は、李信は絶対にそうならないと信じていた。必ずや、その名を轟かし、再び自分の下へ戻ってくるだろうと信じて疑わなかった。

「……李信。次にお前と会う時を楽しみにしているぞ」

部屋に響く張讓の独白。

しかし、彼女の独白はどこまでも空虚に満ちていた。

李信永政。

後の世にて、天下無双の飛將軍と称されることになる彼の歴史。その第一歩は、動乱の地涼州から始まる。

涼州の章

第11話：涼州への途

涼州の歴史は古い。

紀元前百十年——前漢の武帝の時代にまで遡る。その時代の皇帝である武帝は、全国を上手く治める為に、それぞれの地方を十三の州に分けて、さらにその地の太守や官吏を監察するために刺史の役職を設けた。北は匈奴、南は西羌と隔たり、幽州に勝るとも劣らず異民族の侵攻が激しい土地である。漢王朝最西端に位置する州だけあり、西域への要衝として位置する重要な場所と認識されているものの、中原の民からは田舎としか見られていないのもまた事実であった。

しかし、異民族の侵攻が激しいとされているが、領地が隣り合わせであること以外にも理由がある。

その理由の一つを例に挙げてみると、涼州は幾つかの郡にて管轄されているのだが、そのうちの一つである敦煌という郡は、西域へと繋がる絹の道の道中にある都市である。本来は異民族の支配下にあつたのだが、前述した武帝の時代に遠征が行われ漢の支配する場所となつてしまった。彼らからしてみれば、元々が自分達の土地だったというのに力で奪い獲られてしまったという想いが捨てきれないのだろう。そのため、異民族達は武力を持って漢王朝へと侵攻を繰り返しているのだ。

さて、西域の要衝というだけあって、この地方へ行商へと向かう商人は多い。

そして、中原を離れるということとはそれだけ漢の威光が通用しなくなるということも意味する。

この涼州を治める役人としても、異民族への対策に手を取られる事が頻繁な為、つまりは賊の類への警戒がどうしても薄くなりがちとなるのだ。しかも大掛かりな徒党を組んでいるのではなく、幾つかの小

さな集団で纏まって略奪行為を繰り返すことよって足取りを追われ難くするという方法まで取っている。他にも漢王朝に不満を持つ者が反乱を起こしたこともある。その戦に参加した者、逃げ出した者などが盗賊に身を襲すことよって、他の州は当然として涼州もまた中華屈指の危険地帯となっているのが現状であった。

そんな涼州への道中、若干荒れた道を行く複数の馬車が見受けられる。

ガタガタ、と車輪が音を立て、中に乗っている人間の身体を揺らす。最後尾を行く馬車の中に居たのは、三人の男女であった。

といつても、年齢は一桁の小さな少女とその父親。そして、その対角線上にまだ成人前と表現するに相応しい小柄な子供が一人。これから行く涼州のことに想いを馳せているのか多弁に父親に話しかけている少女とそれに笑顔で答えている父親には目もくれず、もう一人の子供は胡坐を掻きながら瞑想に耽っていた。

白と赤の二色で染められた服を着て、しかしながら相当に旅をして回っているのかその衣服は多少薄汚れている。頭に手拭いらしきものを巻き、艶やかな黒髪を纏めてる。顔立ちは異様なまでに整っており、少年とも少女とも見られる中性的な容姿であった。

傍らには護身用なのか一振りの剣が置かれていた。この御時勢、少し旅をするのも命の危険があつて楽ではない。それゆえに自身を守る為に武器を所有している者が多いとはいえ、その剣は目を奪われるほどに美しい外装であった。もしも売るとすれば相当な価値を持つことになるのは商人である父親の目から見ても明らかである。

その時、ぎゅるうつと腹が鳴る音が聞こえた。

誰かと思えば、瞑想をしている子供の腹の音だったのだろう。それに気づいた少女は、自分が腹がすいたときに食べようとしていた饅頭を取り出すと、躊躇うことなく差し出した。瞑想をしていた子供は、そんな自分よりも幼い少女の気遣いに目を開けて、じっと相手を見つめる。

「……良いの？」

「うんっ!!」

「有難う。遠慮なく頂くよ」

感謝を述べた黒髪の子供の薄く笑った笑顔に、幼女は一瞬目を奪われた。

その笑顔は今まで見てきた誰よりも美しく見えたからだ。だが、我に返った幼女は恥ずかしそうに父親のもとへと戻ると背中に隠れてしまった。そんな自分よりも幼い子供の行動に再度微笑むと、貰った饅頭をゆつくりと頬張る。

安く売られている代物だろうが、空腹の身ではどんなものも美味しく感じるものだ。空腹は最大の調味料と考えながら、たいした時間もかけずにその饅頭は腹に収まった。

馬車の中を静寂が支配する。

気まずい静けさではなく、どこか暖かさを感じる空気がじんわりと広がっていく。

だが、その時黒髪の子供がピクリつと反応して視線を馬車の後方へと向けた。

その行動に疑問を覚えた親娘だったが、その行動の答えはすぐに知ることとなる。遙か地平線の彼方から砂煙が舞い始め、徐々に震動と馬が駆ける音が響き渡り始めた。

「ぞ、賊だー!!」

「に、逃げろー!! はやく、速度をあげろっ!!」

他の馬車にいる商人達の脅えた声があがり、大恐慌に陥った。

一人や二人ではない。視認できるだけの人数でも軽く十数名。いや、或いはそれ以上の野盗の集団に、娘は脅えたように父親に強く抱きついた。父親も突如として吹いてきた戦場の匂いに、脅える娘を抱き返すことしかできない。

そんな二人にちらりつと目を向けた黒髪の子供は、傍らの剣を手に取るとゆつくりと立ち上がる。速度をあげた馬車は激しく揺れているが、それを全く意に介さず——父親に抱きついている幼女の頭を一撫ですると背を向けた。

「時間はボクが稼ぐ。キミ達はそのうちに逃げるといい」

饅頭の礼だ、と呟きが聞こえたのか定かではないが、黒髪の子供の発言に目を剥いたのは親娘であった。まさか、饅頭一個でそのようなことを言う者がいるとは夢にも思っていなかったに違いない。

だが、彼らが何かを言うよりも早く馬車からその身を投げ出すと、地面に華麗に着地。

遠ざかっていく馬車と親娘の声を背中に受けて、黒髪の子供は剣を引き抜くと鞘をその場に突き立てた。

そして、剣を一閃。虚空を断ち切った白銀の煌きが、大地に歪みのない一線を描く。

それと同時に迫ってきていた盗賊達が、眼前に佇んでいる幼い剣士の姿に馬を止める。その勇敢さを称えてではなく、明らかに彼らの顔には嘲りが浮かんでいた。それも当然であろう。盗賊達は、総勢二十名を超える体格の良い男達。しかも、多くの商人や襲撃した村の人々を容赦なく殺した経験を持つ荒くれ者揃い。それを迎え撃つのは、年齢的には十三か四前後で、身長百四十程度の小柄な子供。誰がどう見ても、結果がどうなるかは火を見るよりも明らかかな状況なのだ。

「おいおい、どうした坊主？ テメエ一人で通せんぼかよ、勇ましいな」

「いや、見捨てられたんじゃないのか？ 最近の商人どもはえげつねえな」

蔑んだ言葉を投げかけてくる盗賊達に、反論することなく小さな剣士は自分の愛剣の握りを軽く確かめる。

強面の自覚がある自分達の恫喝に全く恐怖を滲ませることのない相手に、ここでもようやく彼らは違和感を抱いた。

彼らとて、それなりの死地を踏破してきた過去がある。つい先だつては、反乱を起こした者に従って戦争に参加して、殺戮を繰り返した思い出も新しい。化け物染みた連中もそれなりに顔を合わせた経験もあるため、強き者に対しての鼻が利く自信はある。

しかし、目の前の小柄な剣士からは何も感じない。強さや威圧感といった圧力を肌で味わうことはなかった。

つまりは、ただのはったりか、と判断した盗賊達は舌なめずりをし

ながら一步を踏み出す。

すると今まで泰然としていた黒髪の剣士は、彼らに押されるように一步後退するとその行動に自分達の推察に確信を抱いた盗賊達は、躊躇いなく眼前の獲物に殺到した。

己よりも頭二つ分は高く体格も良い盗賊達に、しかし恐れる様子を微塵も見せずに、黒髪の剣士は凍えた視線を彼らに這わせる。

「その線よりこちらはボクと敵対するということの意味する」

短く言い切り、迫ってくる男達を前にしながら悠然と佇み——そして、彼らが自分の描いた線を越えた瞬間にその目は鋭く細まった。その目つきはまるで猛禽類のように鋭く、暖かみがない。多くの人間を惨殺してきた盗賊達よりもなお、冷たく暗い狩人の瞳だ。

「——ボクは高族が順。キミ達はボクに強さの意味を教えてくださいませんか？」

高順と名乗った剣士の発言は、何故か直接脳髓に叩き込まれたかのような不快感と不安感を持って盗賊達にここで初めて奇妙なまでの死臭を感じさせた。ぞわりつと急激に下がっていく周囲の温度。全身の毛穴と言う毛穴が開き、彼らの動きを鈍らせる。

誰かが、あつと短く叫んだ。改めて眼前の子供を値踏みしてみるのが、かつて見た一騎当千の化け物達のような全てを押し潰す圧力を放っているわけではない。だがしかし、そこで彼らは気づいた。確かに高順は強者たる雰囲気を外側に向けて放ってはいない。高順は、放っていないだけでその全てを内側に圧縮しているだけだったのだ。それが盗賊達に目の前の子供は自分達の手には負えない怪物だということを感じさせるのを遅らせる結果となった。

ヒュバつと目の前で砂塵が舞い跳んだ。

盗賊達のもつとも先頭にいた二人の視界を影がよぎり、一瞬後に何かが掠めて過ぎた首に灼熱を感じた。反射的に拭った彼らの指先どころか、腕全てを鮮血が真っ赤に染めあげる。断末魔をあげる暇もなく、頸動脈を切られた男二人が地に沈む。

一度の交差で二人を屠られた盗賊達の喧騒と警戒。

それを嘲笑うかのように、高順の動きが加速していく。あつさりと

この場全ての盗賊の視界から姿を消し去ると、それに慌てたのが残された盗賊達だ。周囲を見渡すものの影も形も見当たらず、ましてや気配や足音すらたてていない。

必死の形相で高順の姿を見つけようとするが、数秒もたったところに風を切る音が彼らの耳を打つ。

土を踏み蹴る鈍い音。彼らの右手から聞こえたそれに反射的に剣を向けるが、それは姿を現した高順の鼻先を掠めるだけに止まった。いや、それは紙一重で敢えて見切った結果なのだろう。そして、その一撃をかわしざま、手に持った剣が左右にいた男の首を奔らせる。パシヤッと赤い花が二つ咲き、唾然とする男達の中心へと高順はその身を躍らせた。

身を低く地を滑るような独特の動きに誰一人ついていくことが出来ない。

そんな高順は、冷静に残された盗賊の人数を確認。まだまだ残っていることに嘆息を一つ。

——少し潜るかな。

胸中にて呟いた瞬間、これまでの比ではない死臭が男達の感覚全てを擦った。

声にならない悲鳴をあげて、本能がこの場から逃亡せよという指令を喚きたてる。彼らは盗賊だ。物を奪い、人を殺し、女性を犯す。外道を歩む彼らではあるが、だからこそ自分の命を重要視している。故に、次に取った行動はある意味当然のものであり、この場から一目散に逃亡するということであつた。

しかし、それを許さぬ怪物がここにいる。

背を向けた者は、容赦なくその首をあっさりと落とされていく。

これまでとは異なる突然の動きの変化。先刻までは盗賊達の視界から逃れる変則的な動きだったというのに、それが急激に変化したのだ。直線的な機動でありながら、それを捉えることは出来ない。圧倒的という言葉すら生温い、目にも留まらない疾風迅雷。何か動いたと視認した時には、既に敵の刃が容赦なく盗賊達の急所に叩き込まれていく。

既に半分となった事実に関を引き攣らせながら、盗賊達は覚悟を決めた。

一縷の望みをかけてある者は剣を振り下ろし、ある者は剣で突き殺そうとし、ある者は水平に剣を薙ぎ払う。

だが、それら全ては全く意味を為さない。総勢十名からなる残された盗賊達の凶器はかすることなく空振り以て終わる。

ゆらりと身体がぶれたかと思えば高順の肉体は何時の間にか空を駆け、上方の死角から空を引き裂いて切り落とされる白銀の刃。

空を滑るように新たに交差した盗賊二人の頭蓋骨に叩き込まれた切っ先が、脳漿と血をばら撒く。そして着地したかと思えば、さらにその小柄な身体が静かに爆ぜる。

果たしてこれを戦いと呼んでいいのかどうか。

一方的に蹂躪するだけ。絶対強者による完全な狩猟。

それを証明するかのように、戦いが始まって僅か三十秒——それで戦の趨勢は決まっていた。

物言わぬ軀となった二十近い男達。そして、唯一残っている盗賊は腰を抜かし、持っていた武器すらも地面に落としてその場で震えていた。

「ま、待て、待ってくれ!! お、俺は止めようといったんだ!! 盗賊なんて真似止めようって!!」

ガチガチと歯を震わせながら必死に訴えてくる男には目もくれず、高順はゆっくりと彼に近づいていく。

太陽光をきらりと反射させる剣を引っ提げて徐々に自分に向かって歩んでくる高順から逃れるように、後ろへと下がっていくもののそれで遠ざかれる筈もない。

「た、頼む!! 俺にはまだ幼い子供が——」

そして、高順は命乞いをする男を無視して、手に握っていた剣を軽く振る。

目を奪われるような美しい半円を描いた軌跡が虚空を断ち切り、容赦なく男の首を落とした。

切断面から溢れ出る鮮血が大地に血の海を作り、その中へとパシヤ

ンつと音を立てて頭をなくした男の身体が転がり倒れる。軽く周囲を見渡して、生き残りがいないことを確認した高順は、死体の服で己の愛剣の血糊を拭う。

愉悦も罪悪感もなく、総勢二十名の人間の命を奪った高順には一切の揺らぎがなかった。

人は人を殺すことを躊躇う種族である。極稀にだが、その箍が外れ、人を殺すことに喜びを見出すものもいるが、そんな者は極一部。例外中の例外だ。それを省みて考えれば、怒りも憎悪も何もなく、これだけの人間を殺すことに一切の躊躇いを持たない高順もまた、実に珍しい類の人種に当てはまるだろう。

高順が人を殺すことを躊躇しない理由。

それはとある目的があるからだ。高順は、自分の強さに疑問を持っていた。

物心ついた頃より、己を鍛える日々。睡眠と食事以外の時間全ては、全てを鍛錬に費やした。

それを疑問に思ったことはない。何故ならば、とある辺境の山奥に住まう一族の者全てが同様の生活をしていたからだ。

ただひたすらに己を鍛え続ける日常の中で、ふとした疑念が小さく心に浮かび上がった。

自分と同年代の者。幾つか年上の者。鍛錬を指導する一回り以上も年齢が上の者。その誰もが、自分より弱く見えた。一族の者しか知らない高順にとって、自分の強さは一体どれほどなのか。自分の生涯を賭けて追求している強さとはどれほどのものなのか。

その疑問を晴らすために、とある祭りが行われる前に一族の者達に戦いを挑んでみれば、結果は実に呆気ないものとなる。誰一人として高順にかなう者はいなかったのだ。そして、高順が属していた高族はその日を境に滅び去った。

一族全てを皆殺しにした高順は、自分の強さを確かめるべく中華の世へと足を踏み出し——そしてあらゆる地域を旅をして現在に至る。

「……駄目だね。やはりキミ達はボクに強さを教えてはくれなかった」

僅かな失望とともに眩かれた言葉は一際強い突風が浚っていき、地面に突き刺していた鞘に剣を納めようとした刹那。

「凄いな、お前。久しぶりに見たな、その舞を」

「——っ」

叫び声を噛み殺し、高順はその場から瞬時に飛びのいた。

大幅に距離を取り、振り返ってみれば何時の間にかいたのか、血の海から少し離れた場所に一人の少年が佇んでいる。高順と同じ黒髪に、頭一つ高い身長。そして、その体格には似つかわしくない長大な矛を背負っている。旅装束なのを見ると、涼州へと向かう旅人なのだろうが、問題は高順でさえも声を掛けられるまでその存在に気づかなかつたということだ。久しく感じていなかった緊張感に、高順は何時の間にか乾いていた唇を舐めて濡らす。

何故かわからない。だが、目の前に突如として現れたこの少年ならば、自分に強さというものを教えてくれるのではないか、という漠然とした予感に襲われた。喜びとも恐怖とも知れない感情が荒れ狂い、自然と口角が緩んでいく。

「ボクは高族の順。キミは？」

高族、と名乗った高順の発言に、黒髪の少年はぴくりつと眉を僅かに動かす。

そして、自分はやはりどこまでも彼女と縁があるのだと不可思議な運命を感じざるを得なかった。

呆れたように、懐かしむように、少年——李信は、複雑な感情を乗せて高順へと名乗りを返す。

「姓は李。名は信——初めまして、だな。蚩尤の一族」

第12話：蚩尤の一族

「……蚩尤の名を何故知っている？」

李信の発言に、高順は内心の驚愕を隠すことが出来ずに目を見開いて呆然と呟いた。

それもそのはず。蚩尤の名を知っている者など、外界の世界に一体どれくらいいるだろうか。

伝承は伝わっているかもしれないが、この僅かな対峙で高順を蚩尤の一族と看破するなど絶対に不可能だ。結論を下す材料があまりにも不足している。ならば、李信が蚩尤のことを知っていた、と判断するしかないのだがそれも少々納得が行かない。

数百年昔にある事情により衰退してしまった蚩尤の一族は、外界との関係をほぼ断ち切って生活していた。無論、完全にとは言えないが、それでも彼女達のことを知る者はほぼ皆無に等しい筈である。

蚩尤の一族。

その起源は遥か千年以上も昔に遡り、中華の闇の世界で恐れられてきた特異体質を持つ一族だ。

ただし、一族と言っても実際には血の繋がりはなく赤子を浚っては一族の後継者として育てるのだ。そして弛まぬ日々の鍛錬により、彼女らは人を遥かに超えた世界へと辿り着く。彼女たちは才能があるから蚩尤になるのではない。蚩尤に育てられるからこそ、蚩尤になるのだ。

ただし、蚩尤を名乗れるものは何時の時代にも一人だけとなる。とある辺境の山に住む十九もの氏族の中から、選り抜かれた化け物達が祭と呼ばれるしきたりの末に、蚩尤の名を受け継ぐことが出来る。元々は、神を降ろすことを目的とした巫女の一族ではあったが、時代の変遷によってこのような異形の変化を遂げていったという。

その十九の氏族を全て李信が覚えていたか、といえれば記憶が妖しくはなるが、それでも高族という名があったことを臆気ながら頭の片隅から引つ張り出すことに成功した。そして、何より李信が目の前で見

た高順と名乗った者の動きは、かつての蚩尤の一族の者と一致はしないもののどこか髣髴とさせるものがある。

元々が巫女ということもあり、蚩尤の一族の剣技はまるで演舞を行うかのような技術。

通称——巫舞、と呼ばれるそれは、十九の氏族ごとに異なる拍子で舞い、独特の呼吸法で自身に荒ぶる神を墮とすという。

さて、時代の闇に潜んでいた蚩尤の一族のことを何故李信がここまですべて知っているのか。それは実に単純な理由だ。

彼の妻であり、中華六将に数えられ、智と武に優れた中華最良の大將軍とまで謳われた——羌？。彼女こそが、蚩尤の一族の出身であったというだけである。勿論、彼女はただの一族の者ではない。羌族最強にして最高傑作とまで言われ、狂気と凶気が支配する祭を潜り抜けた本物の蚩尤を打ち倒した剣士。秦国最強と称されたかつての李信でさえも、日々行っていた試合においては負け越している真正正銘の化け物であった。もつとも、李信達がまだ年若かった頃からの数も入っていたための負け越しであり、成人してからの勝敗は常に拮抗していたと言っても過言ではなかったであろう。

「蚩尤の氏族から抜けた知り合いがいる。そいつに舞を見せてもらったこともある」

かといって、李信の事情を説明するという訳にも行かない。

真つ正直に全て話をしたとしても頭がおかしくなったと思われるのがおちだ。

ある程度内容をぼかして、とも考えたがまさかこんな所で蚩尤の者と会うとは思ってもおらず、肝心の李信自身も頭が回る方ではない。そのため無難な回答となってしまうが、それに訝しい様子で眼を細める高順。しかし、無難な答えだけあり、それを嘘だと決め付けることは出来ない。

「そう……」

高順が世話になっていた高族では里から逃亡した者はいなかったが、それ以外の氏族の状況は詳しく知っていない為実情は不明である。もしかしたら事実逃げ出した者もいるかもしれない。氏族同士

の繋がりが希薄だったことが、李信の弁明に少ないながらも信憑性を持たせることとなった。

「それにしても、凄いな。二十もの盗賊を、碌な抵抗もさせずに皆殺しか」

改めて周囲を見渡した李信が感嘆する。

血の海に沈んだ二十名からなる死体を吹き付けた風が、鉄臭くも生臭い血の香りを彼の鼻へと届けてきた。

賊に襲われている人間がいると慌てて助けに来てみれば、辿り着くまでに襲っていた筈の彼らが斬り殺されてしまったのだから予想外もいいところだ。

改めて李信は目の前で敵意とも殺気とも取れる気配を滲ませている高順の姿に関心の目を向ける。

今の自分よりも二つか三つばかり年下という若き身でありながらその実力は疑いようもないが、戦意を隠し切れないところはまだまだ青いと評価するしかないだろう。

「この程度なら百人いても一緒だよ。それはキミも一緒だろうけど」
平然とそう言い切った高順だったが、その目つきは鋭く厳しい。手合わせをするまでもなく李信の力量を読み取ったのか、臨戦態勢を崩さずにある一定の間合いを取って様子を見ている。チリチリと肌を焼いてくる歳若き蚩尤の一族の気配に、李信は疑問を覚えた。

本来ならば、高順がここにすることは有り得ないことである。

数百年の時が流れ、李信が知る蚩尤とは異なっているかもしれないが、千年に渡って異常な進化を遂げてきた一族が、そう簡単に良き方向に変わるとは限らない。それを考慮すれば、この時代も李信の知る蚩尤の一族と大きく変化していないはずである。

それを前提に推察すれば、氏族達が住まう里を降りることが出来るのは極限られた者だけだ。

祭を潜り抜けた蚩尤。もしくは、それに従う氏族の者。外界の赤子を浚ったり外の情報を仕入れる役目の者。そのような者達だけが、里の外に行くことを許される。

しかし、高順は蚩尤の称号を戴ける世界の住人かと問われれば、首

を横に振らざるを得ない。

李信が初めて会ったときの妻より、力量は明確に劣る。伸び代こそ計り知れないものがあるが、現状ではあの頃の差？ほどの得体の知れなさを感じはしないというのが本音である。つまりは、高順が祭を潜り抜けた蚩尤という可能性は潰される。

ならば他の役目を担ったものか、とも考えられたが、それも首をひねざるを得ない。そのような役目を背負っているのならば極力目立つことを避けるはずだ。商人達を助ける為に身を投げ出すなど考え難い。

ならば最後の可能性。

高順が、かつての妻のように氏族を抜けてきた。

蚩尤の一族から出奔したとなると、高順がここにいる理由にも納得が行く。

故に高順は李信に敵対する意志を向けているのは、追っ手ではないかと疑っているためだろう。もつとも、李信が追っ手ということはある理由で絶対にならないことは高順も理解しているはずだ。だが、蚩尤の一族であることを看破したということは、何かしらの関係性があることは明らか。そのため、警戒を怠らないとすれば筋道が通る。

「二つ言わせてくれ。さっき言ったとおり俺は元蚩尤の一族に知り合いがいただけで、特に関係があるわけじゃない」

誤解を解くべく李信は弁解を始める。

しかし、それは高順の態度に変化をもたらすことはなく、どうしたものかと色々と思考を巡らせる李信だったが——戦場で鍛え上げた直感が一歩だけ身体を後退させた。

それと同時に空気を切り裂く音が響く。触れるかどうかの一寸の見切り。間合いを殺し飛び込んできた高順の切り落としが李信の眼前を通過する。避けられたことに驚かず、再び後退して間合いを外した高順が剣の切っ先を李信へと向け、油断のない瞳で筋組織の動きさえも見逃さないように集中力を高め始めた。

「危ないな。下手をしたら死んでたぞ、おい」

「よく言う。ボクの剣をここまで軽々と避けたのは、キミが初めてだ」

「そりやまた随分と狭い世の中で過ぐしていたんだな」

李信の台詞にピクリつと高順は眉を動かしたが、挑発染みたその言葉に激昂することもなく冷静さを保とうとする。

完璧に敵と見られたことに内心で困り果てる李信だったが、これは完全に自業自得であった。最初の会話で、蚩尤の一族などと口に出さなければここまで酷い状況にはならなかったはずである。随分と久しぶりに妻とは異なるが、どこか似通った巫舞を見て郷愁に駆られてしまった結果がこれだ。

「キミは強い。キミならボクに強さの意味を教えてくださいませんかもしれない」

「——強さの意味？」

そんな李信の思考を遮るように、高順の要領を得ない言葉が口から紡ぎだされる。

なんだ、それは——と疑問を口に出そうとした李信だったが、それを聞き返すことは出来なかった。

高順の瞳が色を無くしていく。今まで発していた戦意が消失し、李信を見ているようで見ていない。虚ろを漂わせた瞳で、ゆらりつと全身を脱力させる。意識を手放したかのような高順の姿に、相對する李信はチツと舌打ちを一度。独特の拍子とともに、身体を軽く上下させる姿はやはりかつての妻を髣髴とさせる。

集中しきれない李信を置き去りに、タンつと正面にて地面を蹴りつける足音。

しかし、李信の視界には高順の姿を見つけることが出来なかった。

いや、視界の左端に霞んだ足の残滓を確認。その方向へと意識を向けようとした瞬間、ぞわりつと首筋に感じた悪寒。

第二刃となった攻撃は、首の真後ろから貫くように一直線に放たれた刺突。身体を捻りながらその一撃を避け、振り返りざまに放った蹴りは空を切る。瞬時に攻勢に転じたというのに、煙のように消え行く様は、まるで幻を相手にしているかのようであった。

地面を摺って歩く音が、李信の聴覚を狂わせる。視界の端に映る高順の身体の一部が、視覚を惑わせる。周囲に散らばる死体から漂う死

臭が、嗅覚を乱れさせる。ありとあらゆる手段と方法、技術を使い、李信を殺めようとする高順の巫舞は、羌？とは異なる類のもの。ある意味、自分にとっては非常に面倒な相手であることを僅かな対峙で確信した。

高順の動きは、常人から見れば目にも留まらない速さではあるが、純粋な速度で言えば李信より劣る。

それなのに何故彼の死角を突けるのか。それは高順が李信の注意を上手く誘導しているからに他ならない。

聴覚と嗅覚すらも歪ませた高順の攻撃は、李信の予測を僅かにはいえ上回り、対処を遅らせる。

正面から突き出された切っ先を咄嗟に首を傾け皮一枚で避けた。

耳に残るのは本場に僅かな空気を貫く音のみで、人を殺すのに最小限の力しか込めていないことがわかる。

目前にいた高順の身体がゆらゆらと揺れ、突き出された剣を水平に薙ぎ払う。人を殺そうとしているのに感情も気配を揺るがさない剣士は、人殺しとしては実に優秀であった。やはり朱凶などは格が違いう生粋の殺戮者ということだろう。

自分の頸動脈を断ち切ろうとした剣の腹を拳でかちあげ、真上へと逸らす。

反射的に放った防御からの流れるような右の拳が高順の顎を打ち抜くものの、それが殴りつけたのは実体を持たない残像でしかなく、既にその姿は李信の視界から消え失せていた。

剣を抜くべきか否か。

自分に襲い来る攻撃を捌きながら、李信が考えていることはそれであった。

先に剣を向けられたのだから、斬っても特に問題はない。例え逃がしたとしても、蚩尤の一族である高順が司法に訴えることはないはずだ。それに、現在のところ目撃者はいない。仮に叩き切ったとしてもこの現場を見れば、盗賊と相打ちになったと判断されるのが関の山だ。

かといって、徒手空拳で相手をするには些か分が悪い。

武器を抜かねば下手をしたら敗北を喫するのは李信の方である可能性も捨てきれない。

しかし、懐かしの蚩尤の一族ということと、高順に羌？の僅かな面影を見つけ、それが李信の決断を鈍らせる。

——ああ、実に面倒な相手だ。

嘆息する胸中とは異なり、李信の表情を一切変えることはなかった。

確かに厄介だ。真正面から戦ってくる相手の方が余程ましだ。高順のように相手を誘導させる敵と李信の相性はとてつもなく悪い。

かつて戦場で戦った多くの武将が正面から戦うことを好むものが多かったこともあるだろう。高順のような戦い方をする者は珍しい。故に、このような暗殺者にも似た動きをする相手と戦ったことは数えるほどだ。しかも、随分と戦い方が上手く、こういった者との戦闘経験不足は否めない。さらに戦い難い理由もあるとすれな、状況は最悪だ。

「——まあ、かといってこのままってわけにもいかないか」

轟、と背負った矛を引き抜いて真正面、縦一文字の打ち降ろし。

小細工、技術全てを蹴散らす力の一撃。爆撃染みた鉄槌が地面を抉り、粉塵を舞い上がらせる。砂塵に空気が揺らぎ、周囲の視界を覆い隠す。突然の出来事に若干の逡巡を抱きながらも高順は、李信の気配を察知して攻勢に出ようとするものの、再度聞こえる物騒な風きり音。

粉塵を引き裂きながら今度は横一文字に振り切られた矛が暴的でありながらも正確に精密に高順へと襲い掛かる。

身体を低く、その矛の下を潜り抜けた高順の視線と交錯。

巫舞状態に入り込んでいるが故の生気の無い瞳。変性意識状態に自らを落とし込むことにより高順の感覚は常人を遥かに超える程に活性化されている。人の肉体にかかっている枷を意識的に外すことが可能な蚩尤の氏族の奥義。

地を滑り迫ってくる高順が、足を蹴り上げると地面の砂と血が舞い

散って、李信の視界を潰す。

矛を一振り、視界の邪魔となったそれを一掃する間に、幼い暗殺者の携える切っ先が李信へと襲い掛かる。

いつそ緩やかにも見える高順の攻撃は、その機会、軌道、ともにこれまでよりもさらに洗練されていた。李信の予見を悉く外してくる技術は、静かでありながら心に強く印象付けられる。攻撃されているのが自分でなければ、李信は感嘆の言葉を贈る事に迷いは無かったであろう。この年齢でここまで到達するには余程の鍛錬を積まなければならなかったに違いない。

視界が晴れたなか緩い速度で踏み込んでくる高順が、するりと李信の横を素通りし、置き土産とばかりの一閃は左脇腹に容赦なく叩き込まれた。緩急をつけ、相手の意識を乱し、感覚を潰し、巫舞の世界に入った高順の攻撃を李信といえど流石に避けきることは出来ず、己の会心の一撃と為った事に確信を抱いた剣士を邪魔するように高鳴る金属音。

最初から避けるつもりはなかったのか、李信の左手が腰の鞘から瞬時に引き抜き、その刀剣の半ばの腹で自分の剣が受け止められたことに驚愕しつつ、高順が追撃となる一手を放つかどうか迷った刹那の時。

李信が両手で握りなおした矛が高順を狙い打つ方が遥かに早く、この場からの撤退を余儀なくされる。地面を蹴りつけ、李信の視界から姿を消しつつ距離を取ろうとする高順であったが、突如として背中を襲う悪寒。その悪寒の理由は、即判明する。視界から逃れた筈なのに、李信の矛は正確に自分を狙ってきているのだから。一直線に振り下ろされた一撃を、横に身体を転がらせなんとか回避したと同時に、げほつと咳き込む高順。

その場に崩れ落ちそうになる虚脱感に耐えようとするものの、身体に衝撃が奔った。李信の鋭い前蹴りが高順の肩口に叩き込まれ、まるで馬車に跳ねられたかのように小柄な身体が弾け飛んだ。数メートルも離れた地面に激突、ごろごろと転がっていき動かなくなる。

しまった、やりすぎた——と、思わず頬を引き攣らせた李信だっ

だが、心配無用とばかりに地面に倒れていた高順は、身体を起こすと吹き飛ばされていながらも手放さなかった剣を杖代わりに立ち上がった。だがしかし、呼吸は荒く身体は小刻みに震えている上に、額に脂汗まで滲ませている。

李信の蹴撃の威力は手加減していたということと、自分から後方へと飛んだこともあり致命的というには程遠い。

問題は、激しく乱れている呼吸の方だろう。幾ら生死の境目があやふやな境界での戦いだったとはいえ、僅かな対峙でここまで呼吸を崩すなど有り得ないが、李信はすぐにその原因が巫舞による影響だと確信した。

人間の身体能力を超えた力を発現させることが可能な蚩尤の一族特有の奥義である巫舞。

それを何の見返りもなく使用できるか、といえはそうではない。独特の呼吸法と拍子によって突入できる巫舞の世界は、呼吸の長さや深さでそれぞれの力量が表される。深く巫舞の領域に潜れるものほど化け物染みた能力を発揮できるが、その反面呼吸が深い者ほどその世界へ止まれる時間が短い。逆に呼吸が浅い者ほど長時間を維持できる。それが一般的な蚩尤の巫舞ではあるが、極稀に現れる天才——そういったものは長く深く巫舞の状態を保つことが可能だ。それを知っている李信の眼から見て、高順は才能という点では問題ないだろうが、まだ若い。そして巫舞が解けた以上、自分の身体の限界を超えた能力を引き出した反動として碌に身体が動かなくなるのは必然。

矛の切っ先をピタリと高順の喉元に突き付けると、李信はじつと高順を見つめる。

高順もまた、李信の視線から逃げずに睨み返す。

「勝負ありだな。もう少し巫舞に関しては鍛錬が必要だが、たいしたもんだ」

「……」

ぜえぜえ、と必死になって呼吸を正常の状態に戻そうと苦心している高順だったが、例えば普段通りだったとしても反論の言葉を口に出す

ことはなかったであろう。正直な話、目の前にいる少年はあまりにも強すぎた。高族の里にいた誰よりも強い。いや、戦ったとしても相手にもならない筈だ。まるで巫舞の領域に入った者と戦いなれている印象を受ける。それは疑問に思うところだが、先程言っていた元蚩尤の一族と知り合いというのも、案外嘘ではないのかもしれないと高順は考え始めていた。

こんなことなら盗賊と戦った時に巫舞を使うべきではなかった、と今更悔やんでも結果が覆ることはない。

それにあの時巫舞を使わなかったとしても、恐らくは同じ結果になったことは想像に容易い。

高族の隠れ里から外界に出て中華を旅して回った身として、自分の力量が上位に位置していることは理解していた。しかし、自分がここまで為す術なく敗北を味合わされた相手は初めてである。理不尽なまでの強さを誇る、己より僅かばかり年上の少年に、今は我が身の命すら握っている彼に——本音を言えば見惚れてしまった。荒唐無稽で滅茶苦茶で、どこまでも不合理で不条理で、しかし全てを押し通す程の理不尽なまでの強さ。それは、高順が求めて止まないものにならない。

「……ボクの負けだ。キミの好きにするといい」

殺されるかもしれない、という恐怖などない。

むしろ逆だ。ここまで理想的な武の到達者に殺められるならば、それに歓喜すら感じてしまう。

自分はこの男の経験となつて生きる。そのことに深い陶醉感すら抱き、知らず知らずのうちに口元が緩む。そんな高順に呆れつつ、李信は矛を引き寄せると溜息をついた。

「蚩尤の一族つてことで苦労したつてのはわかるが、まだ若い身空でそんなことを言うもんじゃないな」

李信の軽い物言いに、高順は意外とばかりに眼を見開いた。

殆ど問答無用で命を奪おうとした自覚はある。だが、李信を見れば、特に高順を咎めようという様子はない。これまで見てきたどんな男とも違う目の前の武人に、次に抱いた感情は興味となった。

「で、だ。さつき言ってたのはどういうことだ？」

「……うん？ 何のこと？」

「強さの意味がうんたらってやつだ」

「——ああ。そのこと」

李信の質問に、得心がいったと高順が頷いた。

そして、高順は己の境遇を語った。幼い頃から高族として、蚩尤となるために日々の鍛錬に明け暮れたこと。そして、その過程で気づいた疑問。疑念。強さとは何なのか。自分が全てを手放してでも求めている強さの意味を知りたかった。そのことを淀むことなく、嘘をつくことなく李信へと話している高順は、自分がおかしくなったことを自覚する。まだ会って間もない少年に、しかも今の今まで命のやり取りをしていた相手に相談事を持ちかけるなど普通に考えれば有り得ない。だが、自分を軽々と一蹴した相手。そんな彼ならば何かしらの求めている答えを教えてくれるのでは、と淡い期待をってしまった。李信は黙って高順の話聞いていたが、全てを聞いた後に深い溜息を吐く。

「——強さの意味？ そんなのわかるか」

そして、ある意味高順の期待の斜め上に行く答えを遠慮なく言い放った。

「強さなんてものは人によって受け取り方が違うだろう。武の道を極めんとした馬鹿も知ってるが、あれも碌な人間じゃなかったしな。それに自分が求める強さなんてやつは、自分が死ぬときにでもようやくわかるもんじゃないのか？」

どこか呆れた表情で、高順へとつらつらと告げていく李信。

だが急に神妙な顔になると、ああ違うか、と短く呟く。

「訂正するが——自分が死ぬときでもわからない、な」

遠き過去を思い出しながらの李信の台詞は、懐古の念に覆われていた。

秦国の大將軍として、戦乱の時代を駆け抜けた身。確かに自分の強さに関して様々な想いを抱いたことは数知れない。力不足に嘆いたことは両手の指で数え切れない。それは、まだ若かった頃は当然とし

て、大將軍となった頃にも多々あった。病によって命を落とす寸前まで、自身が満足する答えなど出した覚えはない。

「……じゃあ、強さの意味は？」

「知らん。自分で探せ」

自分よりも遥かに強い少年の言葉に、高順はいつしか聞き入っていたが、己が捜し求めていた答えの問いへのいべもない返事に、乾いた笑みを浮かべた。どすんつと地面に倒れこんだ高順は、仰向けになった状態で空を見上げる。どこまでも続く蒼天が目眩しい。雲一つない空を見上げていると、何となく自分が悩んでいたことが馬鹿らしく思えた。里から飛び出し、強さを追い求める日々。それに没頭するあまり何時しか周囲が見えなくなっていたのかもしれない。

そんな高順の姿は見下ろしながら、李信は矛を背に戻す。

既に戦意はなくなっているのは確認済みだ。生憎と気の利いた言葉をかけることは出来なかったが、相手は歳若いとはいえ小さな子供でもない。一から十までを説明しなくても立ち直ることはできるだろう。それにこれ以上の慰めの言葉など、李信は持つていない。このあたりは、かつての友が上手かったと、ふと昔を思い出す。

兎にも角にも、高順の呼吸も戻りつつあるため、放って置いても大丈夫と判断した李信は、涼州へと向かう為に北へと足を向ける。

随分と長い期間かかったが、なんとかあと二、三日で辿り着くことが可能な距離まできたところだ。

特に大きな問題もなくここまでできたが、まさか最後の最後でこんな状況に巻き込まれるとは想像もしていなかったが、無事涼州へと到着できることに安堵の溜息を漏らしたが——その時、李信の足を引き止めるものがあった。地面に倒れこんでいた高順が片手で李信の足を掴んでいたのだ。

とりあえず無視して歩いていくと、ずりずりと引き摺られながらそれでも気合で手を離さない高順だったが、流石に地面が背中を擦って痛いのか非難の目を向けてくる。

「……普通は足を止めない？」

「普通は足首を掴まん」

高順の問い掛けに平然と切り返す李信に、それもそうかと納得しかけるが、慌てて上体を起こすとその場で座り込み頭を下げた。

礼を尽くす姿に、李信は仕方なく足を止める。下げていた頭をあげて上目遣いに見上げる高順はどこことなく可愛らしい。

「キミの答えは理解した。でも、ボクはボク自身が願って求めた目的を簡単に諦めることは出来ない」

「まあ、当然だろうな」

高順としては、一族全てを皆殺しにしてまで求めようとした願いだ。

李信なりの考えを聞いたが、頭では納得できても心まではそれに応じようとしないのは当然ともいえた。

「ボクはボクなりに自分の答えを探そうと思う」

「……それで良いんじゃないか？」

己の内心を訥々と語っていく高順に、李信は相槌を打つ。

高順が出した結論に口を挟むほど、自分は立派な人間ではないと知っているからだ。

「だから、これからはキミについていく」

「——はあ？」

そして、高順が口にした台詞に思わず間の抜けた返答となったのは致し方のないことだろう。

「待って待て。どこをどうしたらそんな考えになる？」

李信の疑問は当然である。

高順の思考が全く読めずに、難しい表情でその疑問を晴らすべく問い掛けた。

「キミは強い。強すぎる。少なくともボクが知る限り中華最強の男だから」

「……だから？」

「うん。だから、ついていく。一緒に行く。それだけ。キミとともに歩めば、答えが見つかる——」ような気がする」

高順のあやふやな答えに、李信は言葉もない。

どうしたものかと悩む李信だったが、そんな自分をじっと見つめて

くる相手の姿に本日幾度目になるかわからない溜息を吐いた。

どことなくかつての妻の面影がある高順を無碍には出来ない。しかも氏族こそ違うものの、蚩尤の一族という共通点まである。ここまですれば、実は高順は李信の血筋ではないか、と疑ってしまうが——
—前世を生きたのは今より数百年前も昔。流星にそんな偶然はないか、と考え直すとガシガシと頭を強く搔く。

「まあ……好きにしろ。ただし、給金はだせないからな」

諦めたように李信は高順の提案を受け入れた。

それを聞いた高順は出会ってから初めてとも言える純粋な笑顔を浮かべると、頭に被っていた手拭いに手をかけそれを取る。

サラサラと纏めていた黒髪が零れ落ちた。太陽光を浴びた髪が長旅で汚れていながらも美しく照り輝く。薄く細く形作られた眉に、程よい大きさの目。鼻筋が通っており、よく見れば肌もきめ細かく艶やかだ。まだ成人する前の年齢の若さが放つ瑞々しくも健康的な魅力。

高順の素顔を見た李信は、呆然と目を奪われた。それは高順が可愛らしかったからではない。何故ならば髪を下ろした高順は亡き妻に似ているなどという話ではなく、面影を色濃く残していたからだ。

そんな李信の心の葛藤など知らず、高順はもう一度頭を下げた。

そして、躊躇いなく逡巡もなく、彼女は言葉を紡ぎだす。

「改めて名乗る。ボクは高族が順。李信——ボクはキミの為の剣となろう」

第13話：漢陽郡

西方への入り口となる涼州。

その地へと足を踏み入れた李信と高順であったが、二人の目的となる場所は、実はそこまで遠方という訳ではない。

最西端となる郡の敦煌。そこから東へ酒泉、張掖、武威と郡国が置かれている。そして、その武威を囲むようにして西に金城。南西に隴西。東に北地。南東に安定。南に漢陽。そして、安定と漢陽の更に南に武都があり、これら十の郡国によって涼州は治められていて、その郡の中でも漢陽は涼州の中でも最も人口も多く、繁栄している地域である。その漢陽郡の隴県が李信の目的となる場所であった。

二人の出会いから数日を経てようやく到着した涼州随一の人口を誇る都。

地方都市ではあるが、数万人が生活を営む大きな城塞都市。

意外にも街区はきつちりと区切られ、整備された道が縦横に走っている。

ずらりと軒を連ねた露店や商店からは、威勢の良い掛け声が聞こえ、途切れることなく人々がその前を行き来していた。

到底地方都市とは思えない活気に満ち溢れ、絶え間ない喧騒に町が包まれている。

「へえ……」

高順の歩幅にして軽く五十を超える大通りとなる道を前にして、小さくではあるが彼女は感嘆の声をあげた。

その横にいた李信もまた口には出していないだけでこの街の活気に驚きを隠せなかった。

西方の入り口ということもあり、また洛陽では涼州のことを相当な

田舎だということばかり耳にしていたが、実際に目にしてみれば意外や意外、李信達の想像を超える程に繁栄している場所であった。確かに洛陽とは比べるまでもないが、もつと寂れた街を予想していた李信にとつては、目の前の光景は少しばかり予想外な光景とも言える。

もつともこの人の多さはある意味当然であった。

涼州は北に行くほど異民族との隣り合わせの生活となる。その全てが漢に敵対しているかと言えば、それは異なるものの、危険が多いのもまた事実。その為必然的にその地に住居を構える人間も少なくなつていく。

そのため比較的中原に近い漢陽郡は、涼州の総人口の実に三割を超える程の民を抱えていた。その結果は、今李信が見ている光景に他ならない。

ざつと李信が周囲を見渡せば、遙か遠方に城壁が聳え立っているのが目に付いた。

街の周囲を隙間なく取り囲む巨大な壁。その外側には堀が巡らされ、東西南北に一つずつ巨大な橋が架けられている。橋の先には街と外を繋ぐ門が鎮座しており、その門の前では街の中へと入る者達を厳しく審査している兵士達もいる。かくいう李信達も、街に入る際に幾つか兵士達と問答があつたのだが、特に後ろめたいこともない二人はあつさりと言へることが出来た。

「随分とまあ、物々しい雰囲気があるが？」

「そうだね。確かに涼州は物騒だけど、この様子は少しおかしいかも」
門を警備している兵士達からはピリピリとした緊張感が発せられている。

その雰囲気にも門を通る旅人達は身体を縮こまらせ、機嫌を伺うようにしている者が殆どであった。だが、通りを行き交う街の住人達には兵士達のような緊張は見られず、活気に満ち溢れている。それに若干の違和感を覚えながらも、李信と高順は街の中心へと足を向けるのであった。



「……北の様子はあまり芳しくないようね」

ふうつとどこか疲労を滲ませた吐息を漏らし、然程広くはない執務室にて竹簡が山のように積まれた机を前にしている一人の女性の姿があった。椅子に座っているものの、その背丈は相当に高い。軽く百七十を超えている身長は、女性にしてはかなりの長身である。淡い新緑の如く、気持ちの良い髪の色。肩口近くで切り揃えられており、容姿自体もかなりの水準で整っている。とろんつとした垂れ目が人目を惹く、年齢的には二十代半ばくらいなのだろうが率直に言ってしまう、可愛いという言葉が似合う女性だ。

そんな彼女は、目の前の竹簡の一つに目を通しながら頭痛を隠せないように額に手を当てて再度溜息をついた。

「はい、傳燮様。不穏な様子を見せている者も少なくはない、と耳にしています」

そして、部屋に響くのは傳燮と呼ばれた女性以外の声。

部屋の隅に、傳燮と同じくらいに竹簡が積まれた机を前にしてそれを処理している少女の一人。

傳燮に似た髪の色。しかしながら、この少女の方がずっと深い緑色の髪であった。長く伸びた髪を三つ編みにして肩からすらりつと下がっている。眼鏡をかけ、竹簡を処理する彼女の眦は少しあがっているのが相手に多少キツイ印象を与える。年齢も十三、四歳程度と随分

と下ということもあるが傅燮と比べて小柄なのが、厳しめの印象を相殺して見る者に可愛らしさを感じさせた。

「そう……。本当に頭の痛い話ね、賈☒」

困ったように語る傅燮に、賈☒という名の少女は、こくりつと小さく頷くと深く眉を顰める。

元々漢民族と異民族との関係は良好とは言い難い。漢陽の太守を務める傅燮の政策によってかなりの多くの異民族——即ち羌族が帰順はしているものの、所詮それは一握りの者達に過ぎない。賢君と知られる傅燮であったとしても、漢民族と異民族との間に築かれた壁は厚く硬いものであった。

「……馬騰様に連絡を取ってみますか？」

「そうね。お願いしてもいい？ 韓約殿には私から書状を届けておくから」

「はい。承りました」

その会話を最後に執務室に響くのは竹簡を処理する音だけとなる。数分も黙々とその作業は続いていたのだが、何かを思い出したのか、傅燮が手を止めて顔を上げた。

「そういえば例の方はまだ到着していないの？」

「例の方、ですか？」

傅燮の突然の曖昧な問いかけに、賈☒もまた竹簡を処理する手を止める。

上司の視線を受け止めながら、一体どのことを言っているのか記憶の中からそれらしき心当たりを探り出そうと頭を回転させた。やがてその膨大な知識の中から、数秒もたたずして傅燮の言いたかったであろう質問の答えを引っ張り出すと、下がりかけていた眼鏡を人差し指でくいと一度あげる。

「李永政殿、ですね。耿鄙殿が言うには最高の待遇で歓待せよ、ということですが」

「そうそう、李信殿と言ったわね。それにしてもあの刺史さんがそこまで重要視するなんてどんな人物だと思う？」

「……非才な我が身としては、思いつきません」

「またまた謙遜して。貴女が非才だなんて言ったら世の中には才ある者なんていなくなっちゃわよ?」

「……買い被りです」

「あらあら。照れちやって。可愛いわね」

くすくすつと笑みを零す傅燮に、ほんのりと頬を赤くした賈逵が顔を明後日の方向に向ける。

上司として尊敬できる相手ではあるが、時折このようにからかってくる傅燮に、僅かに賈逵は苦手意識を感じていた。しかし、大した実績もなかった自分達を召抱えて要職に配してくれた恩は忘れてはいない。

だが、事あるごとに傅燮は賈逵のことを誉めそやす。時には彼女のことを、今張良、などと呼ぶのだけは勘弁して欲しいというのが賈逵の本音であった。漢の初代皇帝である高祖劉邦を支えた稀代の天才。漢の三傑とまで謳われる大英雄。そんな人物と一緒にされてはたまらないという気持ちがあると同時に、上司にそこまで高い評価をされることを嬉しく思っていた。そして、かの張良のように、友の覇業を助けることが出来るようになりたいと心底願っているのもまた事実。或いはそんな気持ちを傅燮は見抜いているのかもしれない。

「それで、冗談はおいとくけど、凄く気になるのよ」

「確かにそれは否定できませんが……」

傅燮の台詞に賈逵も同調する。

別に上司の言葉だから頷いた訳ではなかった。涼州の刺史である耿鄙は、仕事に然程熱心という人物ではない。部下の程球に仕事を完全にまかせつきりになっており、肝心の彼は刺史としての仕事をしてはいなかった。そんな彼が先日突然、傅燮に普段とは異なる真剣な表情で伝えてきたことがあった。それは——近いうちに訪ねてくる李信という人物を厚遇して取り立てよ、という内容だ。

それが何故か。理由は、と軽く問いただしてみたものの、耿鄙はそれについて詳しく話そうとはしなかった。

相手は刺史ということもあり、それ以上突っ込んだ話を聞くことは

できなかつたが、その命令に疑問を抱いたのは傅燮ではなく賈逵や他の者達も同様であった。洛陽上層部の権力者の子弟へ対しての箔付けかとも予想されたが、生憎と李信なる者の名を調べたが官位においてその名は見たことがなかった。或いは中央の者達から見れば御荷物同然の涼州への島流しかとも考えたが、それにしては耿鄙の態度がどこかおかしかった。まるで何かに脅えているかのようにビクビクとしており、李信のことをくれぐれも無碍にしないようにと何度も念を押していたのだから、何かがある、と疑うと言うほうが無理な話だ。

ちなみに御荷物同然とはどういうことか。

涼州は羌族の反乱に悩まされてきたこともあり、漢朝は金城郡に護羌校尉を設置して反乱の予防、対応にあたらせているのだが、軍事にかかる莫大な費用が王朝の経済を圧迫する大きな要因の一つとなっていた。涼州を放棄するべきか否か何度も論議されるほどなのだから、その負担の大きさは想像に容易い筈だ。

異民族との戦いに明け暮れ、中原と比べて遥かに命を落とす危険がある涼州に——しかも、あの張讓のお墨付きの人物がやってくるなど、一体どんな事情があつてのことなのか予想すら出来ない。

これが刺史や他の官位を受けてならまだ悩む。しかし、前もって挙げたように特にこれといった地位も持たずに訪れるというのだから、二人の頭を悩ます結果となっていた。

「あの……傅燮様。今宜しいでしょうか？」

二人が未だ見ぬ李信のことを考えていると、部屋の外から声が可愛らしい声がかかる。

「ええ、大丈夫。入りなさい、董卓」

「はい。失礼します」

恐る恐ると執務室に足を踏み入れてきたのは賈逵と同年代の少女であつた。

白髪というよりは、銀髪というに相應しい肩口まで伸びた美しい髪。紫水晶を連想させる瞳が、どこか困惑しているかのように揺れている。人形染みた非現実的な容姿は、見る者の心を刺激して保護欲を

沸き立たせ魅了する。

触つてしまえば消えてしまう儚さ——それが董卓という名の少女の印象であった。

「この時間に来るなんて珍しいわね。何か問題起きたの？」

「は、はい。い、いえ……その、問題という訳ではないのですけど」

はつきりとせず、どこかおどおどとした口調で傅燮に答える董卓であったが、その対応が何と答えればいいのか迷っているようにも見えた賈詡はそんな友人を援護したくなるものの、良くしてくれるとは言え上司の会話に割り込むことも出来ずに心配そうな視線を向けることしか出来なかった。

気が弱く、内向的で自分に自身を持ってない董卓に、ハラハラとしながらも見守る賈詡の視線に気づいたのか、安心させるようにぎこちない笑みを返すと、自分の中で漸く纏まったのか董卓は口を開く。

「その、門の前で衛兵の方と言い合いになっていてる方が二人います……その方々が言うには耿鄙様にお会いしたいと」

「刺史殿に？」

傅燮の返事に、董卓は頷いた。

だが、何故そんなことを一々報告に着たのか傅燮は内心で疑問を感じる。

涼州刺史ほどの権力者ともなれば、彼に取り入ろうとするものはそれこそ掃いて捨てるほどいるのだから、それを知っている董卓が今更そんな些細なことを報告しにくる筈がない。

それが顔に出ていたのか、やはり董卓は困ったように表情を曇らせながらも続きとなる言葉を紡ぐ。

「その……今回の方は、何と言いますか、普通の人とは違うんです」

「——へえ」

董卓の発言に、傅燮は興味深そうな色を瞳に浮かべた。

漢陽太守として辣腕を振るってきた彼女ではあるが、はつきりいつてこの涼州は優秀な人間が少ない。正確には、優秀な文官、となるが。それ故に、傅燮は太守の権限を使つてまで董卓や賈詡といったまだ若く実績も然程ない人材を部下として取り立てていた。そうでもしな

ければ仕事を回せないという切実な問題もあったのだが、賈☒は文官としての能力は超一流。董卓は賈☒には及ばないものの一流と断言しても構わないのだが、それ以上の才として人を見抜く力とでも言うべきものを持っている。

そんな彼女をして、違うとまで言わしめる相手。優れた人材を欲している傳燮としては、聞き逃せない情報であった。

「あの……傳燮様？ その、もしかして、ですが……例の方では？」
「その可能性もあるかと思っただけ……。董卓、訪ねてきたのは二人だったのよね？」

賈☒の指摘に、傳燮もそれを考慮していたのか、確認するように董卓へと改めて問い掛ける。

「はい。男女二人の訪問者みたいでしたが……」

「来るのは李信殿一人って話だったし、可能性は低いと思うんだけど」
「ですが、もしかしたら予定を変更したという可能性もあるかもしれません」

賈☒の意見に、それもあるかもしれないと考え直した傳燮は、思考すること数秒。

椅子から勢いよく立ち上がると、その拍子に机に積まれていた竹簡が幾つか床に落ちて音を立てる。

それを気にすることなく、パチンつと両手を叩くと、董卓と賈☒を順に見ながらにこりつと笑顔を浮かべた。

「うん、よし。とりあえず董卓、その者達をここに連れて——」

傳燮はそこまで言ってから突如口を閉ざすものの、一秒もたたずしてその続きを二人に告げる。

「やはり、私達の方から行きましょうか」

「——す、少しお待ちください。傳燮様自ら、ですか？」

「ええ。もしも李信殿だったら、衛兵達の対応を謝罪しないといけな
いもの」

賈☒の呆れたような驚いたような視線に、満面の笑顔で答える傳燮。

「もし違っていたとしても、董卓が御眼がねに適うほどの人物。どち

らにせよ損はないと思うのよ」

「確かにそうですが。ただ勝手に仕事の息抜きに見に行くというわけではないのですね？」

「……も、勿論よ」

じつと眉に皺を寄せて見てくる賈の冷静な一言。

それに僅かに声を震わせる傅燮だったが、賈の視線から逃れるように顔は明後日のほうを向いている。

間に立つ董卓はおろおろとどうすればいいか迷っている様子だったが、そんな沈黙が部屋を支配する中、賈は深々と溜息を吐いた。「わかりました。確かに根を詰めすぎるのも効率が悪いですね。このあたりで一息いれましょうか」

「流石賈。話がわかるわね」

喜びを露にした傅燮がぐりぐりつと賈の頭を撫で付ける。

それに面倒くさそうにしながらもなすがままの賈だったが、拒絶しないのだから本当に嫌がっているというわけではないのだろう。一通り撫できつた傅燮は満足したのか、撫でる手を止めて執務室の扉から外へと出て行った。その背を追うのは、董卓と賈。向かう先は、この城の入り口。途中で幾人かの官僚と通りすがったが、その度に礼を尽くされたのだが、それも当然。

何せ、傅燮は漢陽太守を務める実質上の頂点。その彼女のお気に入りである賈は県丞の任を受けている。そして、董卓はこの県の長であり、統治権を持つ——県令であった。

まだ十五、六にしかならない小娘二人が仮にも県の一、二の官職を戴いているのにも理由がある。

本来ならばそれほどの要職は、中央から派遣された者達で埋められるかもしれないが、とくにこの地方——涼州は異民族の侵入が日常茶飯事の出来事。そんな場所を中央の者では抑え切れないということもあり、要職はこの地方の豪族によって代々選出されていた。

そしてこの董卓は異民族、特に羌族の顔役の多くと交流を交わしているということも重要視され、異例の大出世である県令の職につくことができていた。勿論それに加え、傅燮の推薦と後ろ盾も大きかった

であろう。県令の地位を狙っている者もいたが、不正を許さない傳燮のもとでは旨みが少ないと判断した者が多かったというのも、反発が少なかった理由の一つかも知れない。

三人はさして時間もかからずに城門へと到着する。

そこで見たものは、門を封鎖する衛兵数人と、その前に平然と佇む二人の少年少女。

その二人を目にした瞬間、傳燮は真剣な眼差しで様子を窺いながら足を止める。

風が吹く。

無風であった筈のこの場所で、濁流の如く強い疾風が傳燮の身体を強かに打ち据えた。

その風を受けた彼女は、身体中の血液が沸騰したかのような熱に全身を震わせる。

これは、一体なんなのか。傳燮本人でさえも理解に及ばない不思議な予感に絶頂にも似た快感で背筋を粟立たせた。

「——董卓」

「へ、へう!？」

強張った傳燮の声がやけに大きく響く。

思わず奇妙な返事をしてしまった董卓が頬を朱に染めるが、そのことを気にも留めず傳燮は視線を逸らさずに見つめ続ける。

「特大の大当たりよ。よく教えてくれたわね」

「い、いえ」

普段とは異なる傳燮の姿に、知らず知らずのうちに董卓は息を呑んだ。

それと同様に、賈☒もまたその場から自分でも気がつかないうちに一歩後退していた。チリチリと全身の肌を焼いてくる異質なまでの圧迫感。これまで県丞という立場故に多くの者にあつてきたが、ここまで本能が喚きたてるなど滅多にあることではない。下手をしなくても馬騰や韓約といった英傑級なのは見ただけで理解できてしまった。いや、果たしてそんな枠組みに当てはめてもいいのだろうか。

己の友である董卓の霸道において必ずや障害になる。絶対に排除

すべきだ、と理性が告げてきた。

決して敵対してはならない。敵として相対すれば、問答無用で潰される、と本能が悲鳴をあげた。

背反した二つの感情に、心の天秤を揺らされながらこの場から動けなくなつた賈☒を尻目に傅燮が一步を踏み出す。

「こんにちは。刺史の耿鄙殿に用があると聞いたのですが？」

にこり、と相手に警戒させない微笑とともに傅燮が少年——李信へと話しかける。

突然の来訪者に、衛兵と李信は訝しそうにするも、傅燮だと気がついた衛兵達は慌てて彼女の前から横に避けると拝礼した。兵士達からしてみれば雲の上の存在なのだからこのような対応も当然である。

李信はというと、新たに現れた傅燮が只者ではないと瞬時に悟つた。周囲の兵達の対応もそうだが、洛陽でも見てきた官僚と比べて明らかに格というものが違っている。上に立つ者としての格。他者を圧倒する圧力。常人とは一線を画する雰囲気や自然と放っている。

「お初にお目にかかります。手前は李信。字は永政と申します」

「——永政、殿。申し送れました。私は傅燮。漢陽の太守を勤めております」

傅燮の名を聞いて、李信と高順の纏う雰囲気や僅かに揺らいだ。

かなりの重役かと踏んでいたが、まさかの漢陽郡における頂点に立つ者の登場とは、予想以上の事態であった。

「貴方のことは耿鄙殿から聞いています。我らに御力添えをして頂けるとのこと。感謝の念に耐えませぬ」

「いえ。そのように言っていただけ助かります。それで刺史殿はこちらに？」

「残念ですが、耿鄙殿は他の県へ行かれています。ですが、御安心を。貴方のことは耿鄙殿より任されておりますので」

「———そうですか。ご迷惑をおかけしますが、宜しく願います」

にこやかに話をする二人であったが、李信の隣で退屈そうに欠伸を噛み殺す高順に視線を一瞬だけ向ける。

文官である傅燮だが、数え切れない修羅場を潜ってきた経験から、

この少女もまた尋常ではない怪物だということとは自然と悟ることができた。少なくとも、どちらか一方でさえも、この場にいる全員掛かりでも相手にもならないほどの化け物であろう。

なんとしても自分の陣営に引き入れたくなる気持ち在必死で抑えながら、表面上はその内面を微塵も感じさせない笑顔で話を続ける。「長旅でお疲れでしょう。本日はゆっくりとお休みください。詳しい話はまた明日にでも」

「お心遣い痛み入ります」

傳燵は近くにいた衛兵に、李信達を客室に案内するように言う。衛兵は緊張しながらも、二人を先導して城の中へと消えて行った。

兵士達の緊張は、何も傳燵や董卓、賈☒がいるばかりではない。李信と高順という二人の武の化身を前にしていた為というのものもあるだろう。あの二人の力量は、兵士達でさえも向かい合えば理解出来る筈だ。恐らくは一合も持たずに自分達が屠られるということは彼らとてわかっていた。だが、門を守る役目を忘れず、この場から逃げることなく留まっていた行動に傳燵は一種の感動さえ覚えていた。

とりあえず酒の差し入れでもしてあげるべきか、と考え込む傳燵の横で難しい表情で今はもう背中も見えなくなった李信達へと厳しい目を向けた賈☒が、一度身体をぶるりつと震わせて口を開く。

「……宜しいのですか、傳燵様？」

「いいのよ、賈☒。貴女の言いたいことはわかってるけどね」
「……」

李信という人間はあまりにも危うい。

あんな化け物染みた存在を自分達の懐に入れてしまう危険性は計り知れない。

ましてや傳燵や賈☒からしてみれば、李信の狙いも目的も不明だ。何の為にこの涼州まできたのか、それさえわかれば対処もできようが、現状では全くの手詰まり。もしも此方の弱味を握ろうとする間者であったならば彼を止めることが出来る者はいないだろう。その程度のことば傳燵が気づいていない筈がない。

それなのに何故こうも容易く李信を懐に入れてしまったのか。理

解に苦しむ賈□であつたが、そんな彼女を愛おしそうに見ながら傳燮はたおやかに笑つた。

「多分だけど、彼は敵じゃないわ。私の勘だけどね」

「——勘、ですか」

勘などという根拠も何もないあやふやな答えに、賈□が渋面を作つた。

「ええ。でもね。感じたのよ、風を」

両手を広げて、蒼天を見上げた傳燮が眼を細める。

「この終わりのない争乱の地に吹いた——新たな風を感じたの」

もしかして彼が何かの切っ掛けになるのかもしれないわね——
そう言つた傳燮の笑顔は何故か賈□が知る限りもつとも美しく見えた。そんな上司にこれ以上何も言えることもなく、賈□は口を閉ざすのであつた。

第14話：華雄という名の少女

遙か頭上には蒼天が途切れることなく広がっている。

手を伸ばせども決して掴み取ることは出来ない。どこか遠い目で遙かなる青空を仰ぐ、一人の武人がいた。女性と少女——どちらの言葉が相応しいか迷う年齢である。

白銀の短い髪。傷一つない玉のような肌。切れ長の目。顔立ちは整っており、多くの異性の視線を集めることが可能な美少女と表現しても構わないだろう。ただし、だらりと垂らした両手には、巨大で——あまりにも無骨な一振りの巨斧の刃が大地を噛み締められ、その柄を強く握っている。それが彼女の容姿と相反する印象を見る者に与えてきた。

そしてそんな彼女の眼前には夥しい数の墓石がある。

軽く三桁を超える墓石は然程昔のものではないと思われるが、それでも綺麗に磨かれ丁寧に扱われているのが一目でわかった。

「——また、逝ったか」

眼を細め、空を仰いだまま、彼女は抑揚のない声で呟く。それには込められた感情は、悲哀であり寂寥であった。荒涼たる生命の輝きがない無の砂漠を連想させるほどに、彼女の言葉には悲しみが込められている。

涼州の生活は過酷だ。異民族の襲撃が何時あるかもわからない。たった一夜にて村を滅ぼされることなど日常茶飯事とは言えないが、そこまで珍しいこともなかった。

彼女もまた、物心ついた頃に異民族の手によつて住んでいた村を滅ぼされた過去を持つ。父や母の顔ももはや覚えてはおらず、気がついたときには辺境の裏町の一画にて、生活していた。それこそ、彼女は生きるためならば何でもやった。強盗、略奪、時には人殺しさえ躊躇わなかった。やらなかったことといえば、子供を殺さなかったことと

身体を売らなかつたことくらいだろうか。幸いにも街のごろつき程度は軽々と屠れる力を彼女は持っていたからだ。泥水を啜り、塵を漁り、ただ空腹を満たすためだけにその日を生き延び続けた。誰も彼もが敵に見え、どこに行つても受け入れられず、誰に会つても忌み嫌われる。絶望と虚無に覆われた幼い時代を過ごししてきた。周囲の存在は全てが敵。そんな毎日の中で、信じられるのは自分の持つ力だけ。いや、圧倒的な暴力とでもいうべきものだけだった。

自分の力の使い道など考えもせず、異民族へ対しての復讐心を胸に秘め、仕官を試みたのは数年前のことだ。外見で侮られたことは慣れていた為、ただ己の力を見せ付けた。恐怖と畏怖に彩られた視線を向けられたが、そんなものには一切心が揺れ動かず、それからひたすらに戦い続けた。勝つて殺して、力を示し続け、僅か数年もかからずに彼女の名前は涼州に轟くこととなる。

彼女は戦い続けた。勝ち続けた。己の力を誇示し、味方でさえも近づくことを躊躇うほどの屍山血河を作り上げてきた。優越感も何もない。満足感さえもなく、己の空っぽな心を満たすために、復讐心が薄れるのを恐れるように戦い続けた。殺すこと。それしか、彼女は自分の心を守る方法を知らなかつただけだ。

常に戦場の最前線で武器を振る異民族を屠ってきたが、そんな彼女を気にかける者達もいた。彼女と同じ部隊で戦場を駆け抜けた兵士達。彼らの中には、彼女を娘のように見る者もいた。孫のように見る者もいた。尊敬すべき同士と見る者もいた。背中を預けるに足る友と見る者もいた。そういつた彼らを煩わしく思いながらも、どこか暖かな光を彼らの中に少女は見ていた。

彼らのおかげで、少女は獣から人となる。だが、彼らは英雄ではない。英傑ではない。人間の域を出ることが出来ない彼らは、出撃する度に命を落としていった。殺して殺され、奪つて奪われ——それで少女は歳を重ねながら戦場で生きる。

不思議なものだ、と過去を振り返っていた少女はよりいっそう強く斧の柄を握り締めた。幼い頃のような激烈な憎悪は既になく、自覚していた。実に皮肉で陳腐な表現になるが——時の流れが全

てを忘れさせる。もはや家族の恨みというよりも、自分を支えてくれた戦友の想いを継ぎ、無念を晴らしたいという気持ちのほうが大きくなってしまっているのも事実だ。

数多の戦場を駆け抜け生きぬき、数年の時間が流れた今では彼女は属する部隊で最古参の兵士となつてしまった。それと同時に部隊を率いる隊長を彼女が兼任することとなつたが、己自身隊長の仕事をこなすことが出来ているとは考えていない。基本的に個人での戦闘能力が突出しすぎた彼女は戦場を縦横無尽に駆け抜けることしかしてこなかつた。元々頭を使うのが得意ではないということもあり、部隊を率いるなど出来るはずもなかつた。

ならば彼女の補佐に軍師を——と考えられたこともある。だが、この涼州において軍師は貴重だ。ましてや優秀な者など数えられるほど少ない。特にこの少女とその配下達を動かすことが可能な人間など、現在の県丞の任についている賈コウくらいであろうか。そして肝心の賈コウは仕事に忙殺され戦場に出ることは実質不可能。つまり、現状では今ある手札でなんとかやりくりするしか手段はない。

しかし、その結果が目の前に広がるこの光景だ。その原因となつている己の力不足に唇を噛み締めた。このままこの状況が続けば、眼前の墓石はさらに多くなつていくことは確実に予想される。一体どうやって現状を打開すべきか珍しく思索に耽つっていると、バタバタと慌てて駆け寄ってくる足音が聞こえた。

「華雄の姉御ー!!」

手を大きく振りながら、駆け寄ってきたのは小柄な少女だ。焦げ茶色の長い髪が慌てて走つて来ているせいで左右に大きく揺らし、団栗のようにくりくりとした大きな瞳が印象深い。胸部と下半身には丈夫そうな防具を纏つているが、何故か腹部は外気に曝け出すという謎な装備が人目を惹く。ましてや、年頃の少女と言うこともあり、傷一つない白い素肌が男にとっては目に毒になるだろう。だが露出が多い服装を気にもしていないことを——華雄と呼ばれた少女は知っていた。

「——胡軫か。そんなに慌ててどうした？」

「大変でござえますよ、姉御!!」

「……だからどうした？」

人の言うことを聞かない長い付き合いの友人に呆れながら、華雄は再度問い掛ける。この程度のことですべて全く苛つかなかった点は、自分でも成長したのだと自覚できた。昔だったら一撃を即座に頭に叩き込んでいたものだと思わしむ華雄の前で、あわあわと両手を大きめに動かしながら身体全体で今の自身の慌てつぷりを表現する胡軫。実に一分近くもそうしていた胡軫に痺れを切らしつつあつた華雄だが、それに気がついたわけではないだろうが胡軫がようやく本題を口に出した。

「なんか、中央から来たガキンちよが色々視察してやがります!!」

「……別に視察だけなら問題はないんじゃないのか？」

「ところがどっこい。何でもそのままどこかの部隊に入るって噂を小耳に挟んだのですよ!!」

「——はあ？ そんな馬鹿な話があるか」

胡軫の発言に、眉を顰めて華雄が否定する。

生と死が薄皮一枚挟んで日常となっているこんな地域に、中央の者達が好んで来るとは思えない。

事実これまで何人かの者達がこの地に赴任してきたが、その誰もが速くて二、三日。長くても一月も持たずに涼州から去っていった。しかもそれら全てが文官であったにも関わらず——だ。武官で来たものなどそれこそ出撃するたびにあっさり死んでいった。あまりにも死にすぎて、味方に殺められているのではないか、という尾ひれがついた噂話まで流されるくらいの死亡率である。

「一体誰から聞いたんだ？ 張遼あたりにならまたかつがれたんじゃないのか？」

「いやいや、流石の自分も張遼様にはもう騙されないうござえますよ」その台詞は何度聞いたことか。

胸中で呟くに留めた華雄。悪戯好きの数少ない友人のことを頭に描いていた華雄だったが、次の胡軫の発言に小さな衝撃を受けた。

「蓋勳様から聞いたですよ、その情報は」

胡軫の口から飛び出した情報源となる人物の名前に華雄はおもわず目を見開いた。

蓋勳とは、漢陽太守である傅燮の補佐を勤めている女性である。公明正大、清廉潔白、不正や曲がった事を許さない厳正な人物。ただ嚴格なだけではなく、情も持ち合わせた烈士。傅燮とともに涼州でもその名を轟かせる数少ない善良な官吏である。そんな彼女は華雄や胡軫といった比較的まだ若いながらも、常人とは一線を画す人外の域に達した怪物達を平然と受け入れる懐の大きさを持つ。異民族が多いこの涼州で漢王朝に大規模な反乱が起きないのも、この二人がいるからといっても過言ではない。

その蓋勳からの情報ともなれば間違っているとは考え難い。

ましてや我が娘同然に可愛がっている胡軫へ対して、嘘をつくとは思えなかった。

「……何かが引つかかるな」

華雄がぼつりつと呟いた。

宮中の勢力争いに敗れて涼州へと流されてきたのだと仮定したとしても、死亡率が異常に高い部隊に配属を望むとは普通ならば考えられない。それともこの地がどれだけ苛烈なのか知らないのか、とも考えられたがそのこと自体少しでも調べればわかるようなことだ。

「……自分で望んで来たとしても言うのか？」

そんな馬鹿な、と自分でも信じられないような発想が思い浮かぶ。

異民族が蔓延る涼州へ望んでくるなど無謀に過ぎる。勇気ではなく若さ故の蛮勇。もしも推測道理ならば、華雄は未だ見ぬ若き来訪者の行動を少なくともそう断じた。若さは根拠のない自信を生む。それ自体は良くも悪くもないが、行き過ぎた過信は慢心に繋がる。まるで自分こそがこの世界の主役なのだとの錯覚してしまうほどの何かを自身に齎すこともあるからだ。

考えに耽る華雄だったが、その隣にいた胡軫が短く、あつと声を出す。

その声に釣られ、胡軫の視線が向かう先を見た華雄の瞳が三人の人

間の姿を捉えた。一人は少年。一人は少女。そしてその二人を先導している見知った衛兵。だが、華雄の視線を捉えて離さなかったのは自分と同年齢と思われる少年——李信であった。

李信と華雄。対峙する両者。交差する視線。ぶつかり合う圧力。チリチリと全身の皮膚が火傷をしそうな熱気に周囲一帯が包まれる。先導をしてきた兵士は突然の緊迫した空気にうろたえるように挙動不審気味に華雄と李信を窺う。

少女——高順は、厳しい眼差しで華雄を。胡軫は、李信を油断なく見つめている。

何かがあれば、二人とも自分の従うべき相手の盾となるべく飛び出そうとする気概が見て取れた。静かな、嫌な静寂がシンとこの場を支配する。

「華、華雄殿。此方、この度赴任してきた李信殿です」

恐る恐る、胃がキリキリと痛む空気が充満するなか、引き攣った声で李信を紹介する兵士。だが、肝心の二人はそれが聞こえていないのか、再び沈黙がこの場を包み込む。十数秒も経った頃、漸く李信が口元を僅かに綻ばせ拱手の礼をとって一度頭を軽く垂れた。

「御紹介に預かりました。李信。字を永政と申します」

「我が名は華雄。生憎と下賤な身でな。字はない。校尉を務めている」

互いに紹介を終えた後、華雄は李信の全身に視線を送る。

頭から足の先までを一通り確認した彼女は、どこか不思議そうな面持ちで首を傾げた。

「洛陽から来訪したと聞いたが、相違ないか？」

「はい。この度はこの地にて研鑽を積むようにと任を受けました。宜しく御指導後鞭撻の程をお願い致します」

「——ふっ」

李信の返答に、華雄は苦笑を浮かべる。

だが、それも一瞬。李信が反応するよりも早く、彼女は言葉を続けていく。

「一つ聞きたい。一体貴殿はどここの戦場帰りだ？」

抱いた疑問を一切隠そうともせず、率直に華雄は李信へとぶつけた。

「そこまで直接的に聞かれるとは思っていなかったのか、李信は若干眉をあげるものの、それでも冷静な仮面を崩さない。」

「質問の意図がわかりませんが？」

「わからないはずがないだろう、永政殿。中原の……それも洛陽などという戦場から最も遠き場所で貴殿という存在が生まれ出でるはずがない」

くくくつと楽しそうに笑みを零す華雄に反して、胡軫は意外なものを見たとき驚きを隠せない様子だ。あの華雄が、戦場に咲く雄々しき華が、初めて会った相手にここまで興味を示すなど一度として記憶になかったからだ。

「御期待に添えなく申し訳ない。生憎と洛陽から出たのは今回が初めてですが」

「——全く隠そうとしていないというのに、それを信じると思うのか？ 戦場生まれの戦場育ち。そう表現するしかないほどの外れ具合だ。私が言うのもお門違いだが、正気の沙汰ではないな。まともじゃない。碌な人生を歩んでこなかった私でさえも、可愛く見えるぞ」

酷い言われように、傍で聞いていただけの筈の兵士が顔を引き攣らせた。

しかし、兵士の心配は無用となる。激昂してもおかしくはない台詞を受けている肝心の李信はどこか愉しげだ。

「買い被りとは思いますが、あの華雄殿にそこまで評価して頂けるとは有り難い話です」

「どこまでも恍ける気か。まあ、それでも別に構わんが」

——本心を引き出すには此方の方が手っ取り早いのか。

そんな台詞を口に出し、獯猛で狂暴。肉食獣染みた笑みを浮かべ、華雄が斧の柄を握む手に力を入れる。

軽々と、片手一本で巨大な戦斧を持ち上げると、天を突くかの如く上段に抱えあげた。そして、音が鳴るほどに強くしっかりと両手で握

る。威嚇するかのような構えとともに膨れ上がる彼女の重圧と不穏な空気に、兵士は腰が砕けたかのように地面に尻餅を突く一歩手前で耐え切ると、とぼつちりを受けない為にか、この場から逃げ出した。

それと連動するように、高順が反射的に腰の剣の柄に手を当て、それを見た胡軫もまた己の得物に手を添えた。一触即発の空気が充満するなか、四者四様に己の敵となる相手を見据え、何時でも動けるように神経を張り詰めさせた。誰しもが意識を集中させたせい、まるで世界が凍ったかのような違和感をそれぞれに覚えさせ、何か切っ掛けがあれば爆発することを見る者に想像させた。

息を止め、完全に集中状態に陥っている四人の前に、一陣の風がどこからか一枚の木の葉を運んでくる。ゆらゆらと揺れた葉っぱは、風に煽られくるりつと宙にて回転。風に流されるようにして、李信と華雄の丁度中間に舞い降りた。

地面に触れた瞬間、本当に微かな音がこの場にいた者たちの耳に届く。それこそ集中していなければ聞き取れないような小さかったそれは、だがしかし緊張感に張り詰めていた空気を破裂させるには十分に足りるものであった。

シツという短い呼吸音を皮切りに、唐竹一直線に振り下ろされる戦斧。その速さ、高順が飛び出す暇も隙も与えない電光石火。あらゆる防御を粉碎する破壊の鉄槌そのものが、李信めがけて襲い掛かった。単純極まりないこの一撃ではあるが、これまでの彼女の人生で防がれたことは一度としてない。そして、回避することが出来たものはたった一人だけ。つまりは、敵対した者全てを屠り去った必殺の一撃。彼女の戦斧の刃が李信の頭を砕き割ると予想する間もない一瞬の斬撃は——されど彼と彼女の丁度中間にて、激しい金属音を軋ませて止められることとなった。ギシギシと周囲一帯に響き渡っているのは振り下ろした華雄の戦斧と振り上げた李信の矛が鬨ぎ合う音。李信の飛燕の早業に驚愕を隠し切れないのは止められた華雄であり、部下である胡軫だ。華雄が戦斧を放った時、確かに李信は背から矛を抜いてもいなかった。初動が圧倒的に遅れていたにも関わらず、二人の丁度中間にて武器を止められる。そんな真似どれほどの差があれば出

来るのか……その事実に至った胡軫は脂汗を滲ませる。一目見て、強いのはわかつていた。華雄の言うとおり、中原からきたとは思えない人間なのは一瞬で理解していた。だが、これほどのものか、と、背筋を粟立たせるなか、同様に驚いている者がもう一人。それが高順だ。彼女もまた驚いた理由、それは華雄の強さにだ。中華をそれなりに旅して回った経験を持つ彼女であるが、それでも自分がどれだけ大陸を回りきれていなかったのか。李信もそうだが、華雄と名乗る少女もまた十分な怪物。少なくとも高順は戦って勝てるという確信を持てなかった。

一度は霧散した緊張の空気。されど、再び張り詰めるそれは、まさに戦場そのもの。

もはや本心を暴き出そうとする自身の試みなど完璧に忘れ去った華雄は、クハツと楽しげな笑みさえ浮かべ両腕に更なる力を込めて行く。防がれた。ならばこのまま押し潰す。言葉にせずとも雄弁に伝わる彼女の嬉々とした表情に、自然と李信も口角が上がっていく。それが止められない。自分の全てを曝け出し、全力全身でぶつかってくる華雄という名の少女の姿に、ふつつつとした歓喜の念が心の奥から沸き立ってきた。策を練るのも構わない、数に頼るのもいいだろう。様々な高度の技術を使うのは当然だ。だが、策も数の暴力も技術も使わない、正真正銘ただの力技のみで己を見極めようとするこの少女。ああ、なんと面白くも興味深い。正直なところ——そそられる。

「——華雄ううう!!」

戦場の空気を灼熱色に染め上げる李信の圧力が無言の咆哮を上げたその瞬間——そんな緊迫した空気を切り裂いて轟く、雄叫び染みだした少女の声。霧散した戦場の気配。鉄火場の予感を消失させた張本人……眉を顰め、この場に現れた賈囂は厳しい眼差しで華雄を睨みつけながら凄まじい勢いで四人の場所まで走り寄ってくる。勢いよく駆けてくる小さな少女。だが止まらない。さらなる加速。微塵も速度を緩める様子などなく、武器を噛みあわせている二人の手前で跳躍。何をするのかと思えば勢いそのまま、賈囂の飛び蹴りが華雄の横つ面を狙い——ひよいっとあっさりとかわされた。目標を失っ

た賈☒は、地面に上手く着地できず十分に加速していたこともあいまってゴロゴロと転がっていく。何回か転がってようやく止まった賈☒の姿にこの場にいた四人は沈黙。そんな悲哀を誘う姿に、どうするんだと目線で問い掛けた李信に、華雄は放っておけと首を横に振る。いいのか、と眉を顰める李信だったが、問題ないと今度は首を縦に振った。出会ったばかりで完璧な意思疎通を成し遂げる二人の姿に、何故目線で会話できてるんだ、と胡軫と高順は首を傾げる。二人が沈黙のまま会話をすることしばしして、賈☒がようやく立ち上がりパンパンと自身の身体についた埃を叩き落とすと――。

「ちよつと華雄、僕が目を離れた際に客人相手に何やってるの!？」

今度は飛び掛る真似をせず、華雄に纏わりつくようにして大声で迫っていく。顔が真っ赤になっているのは果たして怒りからだろうか。いや、間違いなく羞恥からくるものである。やいやいと、華雄に食って掛かるその姿を見て四人は同時に、先程の行為をなかつたことにしようとしている、と直感的に思っていた。騒ぎ立てる賈☒によつて完全に場の空気が弛緩したことに華雄は舌打ちを一度。渋々といった様子で噛みあわせていた戦斧を地面へと突き刺すと、李信から一歩遠ざかり、それにあわせて李信も矛をおさめ、高順と胡軫の二人も自分の武器から手を離す。旧知の仲なのか、賈☒の華雄へと注意する姿と口調には遠慮が感じられず、気安さが見え隠れしていた。様子が治まらない賈☒の姿に、彼女に助けを呼びに行っていたのである。う兵士が汗だくになりながら、李信と高順を次の場所へと先導することにした。兵士に従つてこの場を離れようとする二人の後姿を視界の端に捉えた華雄が、なお言い募つてくる賈☒の頭を片手で抑えて彼女の台詞を一旦とめる。

「永政殿。一つ助言をしておく」

離れていこうとした李信が立ち止まる。

「その使い慣れていない丁寧な口調はここではやめておけ。この涼州で、礼儀など気にする者はごく一部だ。私達のような輩にもそんな口調だと舐められるぞ」

もつとも彼を前にして、舐めてかかろう者などいやしないだろう

が、と考えながらも忠告は続く。

「それにどう考えても、そんな言葉遣いは貴殿らしくない。今会ったばかりの私ですらも違和感しかないぞ」

口に出したとおり、それに尽きる。僅かな対峙、武器を交えたからこそ分かる李信の姿。いや、交える前から理解していた彼の本領。即ちそれは生粋の武将。中原などではなく、戦乱絶えぬこの涼州でこそ光り輝く。煌々と熱く燃える大炎。それが彼だ。李信という怪物である。そんな彼の丁寧な言葉遣いには薄気味悪さしか感じない。

「……その忠告。有り難く受け取っておく」

また一悶着あつては堪らないと先導を急ぐ兵士に連れられ、李信と高順はやがて華雄達の視界から消えていった。それに気づいた賈☒もまた、普段から溜まりに溜まっている不満はあれど後を追おうと踵を返そうとして、再度華雄に頭を鷲掴みにされた。ゴキッと首がいい音をたて白目をむきかける賈☒だったが華雄の魔の手から逃れ——なにをするのか、と問い詰めようとして普段とは真逆の、真摯な華雄の表情を見て言葉が詰まった。

「賈☒。お前に頼みがある」

「……何よ?」

嫌な予感しかしない。あの華雄がこんな態度で頼みごとをするなど記憶に一度としてないのだ。

「あの男を……永政殿を私にくれ」

「はあ!?!」

「な、何言ってるんでござえますか、姉御!?!」

賈☒と胡軫の驚きように、キョトンとするものの、苦笑。

「ああ、言葉足らずだったな。あの男を私の部隊に欲しい……そういう意味でいったつもりだ」

「え? ああ……うん。別にいいけど——」

反射的に頷きそうになった賈☒だったが、その台詞は途中で消え入りそうに尻すぼみとなっていき、はたつときづく。

「いやいや、絶対駄目だつて!! あんたのところの独立遊撃部隊、この涼州でも最悪の死亡率のところですよ!!」

悲鳴染みた賈囂の言葉。

その内容に嘘偽りはない。華雄を隊長とした独立遊撃部隊。この涼州を荒らしまわっている異民族へ対抗するために独自の行動権が与えられた部隊だ。聞こえはいいが、つまりそれは常に命の危険がある戦場に身を置く事に等しい。賈囂の言うとおり、実際兵士の死亡率としては最悪。中央から派遣された者が一度だけ在籍したことがあるが、遭遇した異民族との争いによってあっさりと死亡した例がある。あの張讓のお気に入りをもんな部隊に入れたとあっては、どんな罰を下されるかわかったものではない。

「確かにそうだが、お前もわかっているだろう？ 何かしらの手を打たねば私達の部隊も長くはない」

「そ、それはそうだけど……」

実際に華雄の言うことも理解できる。

出撃する度に減っていく人員。かといって彼女達の部隊がなくなれば、襲われている涼州の民はさらに被害を増すであろうことは明白。華雄率いる隊がいるだけでそれなりの抑えとなつているのも事実だからだ。かといって、そんな危険がある隊に李信を配属してもいいものかどうか。

「なに。まずは永政殿に聞いてみればいいだろう？ 本人が断ればそれまでだ。決して無理強いをするつもりはない」

「……わかったわ」

渋々、といった様子を隠しきれずにだが賈囂は華雄の提案を受け入れた。そして難しい表情のまま、今度こそ李信達の後を追う。残されたのは華雄と胡軫。しばらくの間静寂が支配していた二人の間であつたが、やがておずおずと胡軫が切り出した。

「あの、華雄の姉御。なぜあの男を？」

「別にたいした理由がある訳ではない。強いて言うなら勘、だな」

「勘、でござえますか」

「ああ。あいつがいれば随分と私たちも楽になる。そう思わないか？」

「はあ……それは確かに。戦力としては凄い助かりますですが」

それに——と何かしら付け加えようとした華雄だったが、途中で口を閉ざし首を横に振った。そして胡軫から隠すように未だ震えがおさまらない両の掌を力いっぱい握り締めた。たった一撃。僅か一合。それだけの対峙であったにも関わらずこの有様だ。力には自信があつた。嘘偽りなく、自画自賛でもなく、彼女の膂力はおそらく涼州で一、二を争えるほどのものだ。そんな華雄がここまでの差を見せ付けられたのだ。有り得ない、などとは決して言わない。自分が最強だと自惚れたこともない。だが、確かに彼方と此方の差を如実に示された。それだけでも自分の隊に欲しいとは思つたが、それ以上に見惚れたのは彼の一撃の重さ。決して膂力だけでは生まれぬ圧、あれは背負う者の重さだ。生死が曖昧な涼州生まれの涼州育ちである自分のような人間ならば多くの人間の命を、期待を、想いを背負う機会があるのはまだわかる。だが、中原育ちの李信が一体どうすればあれほどのモノを背負うことができるのか。

「……実に面白い」

くはっと抑え切れなかつた笑みが口角を自然と吊り上げていく。

この日、この時、この場所が、先行きが見えなかつた涼州の、暗闇に染まつた彼女の道が——ようやく眩い光を放つた瞬間であつた。

第15話：遼来遼来

「今日は良い天気やなー」

馬上にて蒼天を見上げながら、氣の抜けた声を漏らしていたのは一人の少女。陽光を浴びてキラキラと艶やかに煌く薄紫の髪を頭の後ろで軽く縛っており、馬が歩くたびに軽く上下している。服装は大変変わっており、上半身を隠すのはサラシのみで、襦裙は佩いているものの切れ目を自身で入れているのか、太腿が殆ど見えている状態だ。肩にかけるように上着を羽織っているが、あまりそれに意味はないようにも思えた、比較的露出が多い———というか、多すぎる状態は、上司でもあり友でもある賈□からは会うたびに改めるように言われている。だが、警邏隊として出勤が多い彼女にとって、動きやすい服装というのは重要である。特に少女にとつての最大の武器は速度である。防具などを着用すればその分、当然速度は低下する。故に危険度は上がるものの、このような格好を好んでいるという理由があった。

「張隊長。警邏も終わりましたのでそろそろ帰還のご命令を」

「あー……まあ、待ちいや。そない慌てても碌なことが起きへんって」馬を寄せてきた副官に、張と呼ばれた少女———張遼はニカッと眩

しい笑顔で答える。後頭部で両腕を組んで、くあつ、と欠伸を一つ。雲ひとつない空を見上げていれば自然と眠気も襲ってくる。決して手抜きをするわけではないが、常に気を張り詰めていては身が持たないということを経験した張遼は知っているからだ。そんな張遼を追うのは馬に乗った三十人程度の兵士達。誰もが一糸乱れぬ行軍を見せ付けている。隊長である少女の部下とは思えないが、反面教師にでもしているのだろうか。副官も何時ものことのように彼女の意見を受け入れて隊長の僅か後方に下がって馬を走らせる。

自分たちよりも一回り近く年下の少女を隊長としているというのに、従う兵達に不平不満や不安の色は見られない。何故ならば少女の

名を聞けば誰であろうと理解し、納得するだろう。少女の名は張遼文遠。その名は涼州中に鳴り響いている。最良の太守が傳燮であるならば、文官の頂点が董卓と賈詡であり、そして武官の極地として轟いているのが華雄と張遼の二人であった。神速の機動を持って、馬を自在に操る異民族を討伐する武將。現在漢陽に所属する武官において、唯一騎馬民族を馬上において凌駕する戦士であるといっても過言ではない。見かけによらず、武と義を重んじ、俠気に満ち溢れる漢陽——いや、涼州随一の武將である。故に彼女の直属の部下のみならず、多くの他部隊の兵士からも尊敬の念を一身に浴びるほどだ。もつとも、彼女の直属兵からしてみれば、確かに尊敬に値する上司ではあるものの一つだけ悪癖というべきものが張遼には存在するため、それだけは改善して欲しいと言葉にはしないものの願っている。

張遼率いる部隊はそのまま走ること暫く。突如として先頭に行く彼女の馬の足が止まる。何事かと思った部下だったが、秒も立たずしてその理由を悟った。どこまでも続くと思われる草原の彼方、随分と先の丘を越えた遠方に、もくもくと立ち昇る黒煙。チリつと肌を焼くのは戦場の空気。

「——いくで」

短く、簡潔に、有無を言わせない力強さを持って張遼が馬の足を加速させた。先程までの張遼の表情とは思えない、まるで猛禽類を連想させる鋭い目つきと表情で、少女の駆る馬が爆ぜる。その速さ、部下達を置き去りにしていくほどの差があった。必死になって隊長に続く兵士達だったが、見る見るうちにその差は広がっていくばかりだ。だがしかし、丘の上に辿り着いた張遼が突如として馬を止める。幾分か遅れて隊長のもとへと辿り着いた兵士達が見たのは、荒らしに荒らされた小さな村。村の中にある家屋からは炎と黒煙が燃え盛っており、村の至る所に老若男女問わずの死体。その数は咄嗟には判断出来ないほどのもの。大人の男女、年寄りとは言わずもがな、果てはまだ一桁の年齢しか生きていない子供すら血の海に沈んでいる。その原因を作り出したと思いき犯人達によって村中に残された馬蹄の跡。即ち一目でわかる異民族による略奪の痕跡に、ギリつと齒軋りをする兵

士達。怒りに身を震わせている兵士達とは異なり、張遼は村の状態を観察し、そして西へと続く略奪者の逃亡の跡を確認していた。

「兵十名を残して、残りはウチについてこい」

部下の十名に村の生き残りを探し出し、保護するように指示を出し少女の馬が紫電と化した。略奪の痕跡、鼻につく血の香り、家屋の燃えている状況から逆算すると、恐らくはこの村を襲った連中がここから逃げ出してそこまで時間はたっていない。自分ならば今からでもこの略奪者の正体を確認できる。冷静に判断した結果から、張遼は西へとひたすらに疾駆していく。部下達も隊長一人を先行させる結果になってはいるものの、置き去りにされてなるものか、と決死の覚悟で追従する。幸いにも相手の馬の足跡が残されている以上、見失う心配だけはない。だがそんな中、張遼は冷静に逃亡している略奪者を、馬の足跡からおおよその人数ではあるが予測を立てていた。

「……ウチらだけじゃ、相手にするのは難しいかもしれないなあ」

風を切って走らせる中、ポツリと漏れた弱気ともいえる張遼の言葉。それも無理ななろう話だ。恐らく、敵の数は百を超え二百に届く可能性もある。対する此方は、村に十人を残したため自分を含めて二十人程。戦力比にすれば約五から十倍強。ただのならず者や盗賊程度ならば何とかなるかもしれないが、この手際によき、相手は相当な手練れと見える。自分達だけでは少々心許ないというのが隠しきれない本音であった。最悪略奪者の正体だけでも、と判断し半刻ほど馬を走らせただろうか。先程よりも大きな丘を登頂し、見下ろす先にてついに見つけた草原を行く異民族。その馬の扱いは一人一人が、張遼の優秀な部下を凌ぐほど。それはつまり中華の民を遙か太古より苦しめてきた脅威——厄介極まりない羌族の民であった。

離れていても分かる一人一人の高い錬度。このまま追って行ったとしても追いつけるかどうか。追いつけたとしても、部下達では馬上においては恐らく一人一殺が限度であろう。いや、下手をしたら一人も倒せぬまま殺される可能性すらある。明らかに分が悪い状況で、打つ手が無いとしか判断出来ない。先程考えていた通り、襲撃者の正体が掴めただけでよしとするしかない。チツと思わず反射的に舌打ち

を一つ。今度会ったときは、絶対にこの惨劇の復讐をしてやる、と西へと駆ける羌族達を睨みつけていた——その時、二百を超える馬軍の遙か左。即ち南に聳え立つ丘陵から砂埃をあげて駆け下りてくる一団が彼女の視界の端に映りこんだ。目を細めてみれば、その一団には華の文字が縫いこまれた旗が風に靡いていた。

「華雄、か!」

華雄率いる独立遊撃部隊。涼州でも恐らくは漢軍最強を名乗っても許されるであろう命知らずの連中によつて構成された一団。兵数としてはまだ負けているが、自分と華雄に加えて二つの部隊が合わせば十分に勝ちの目が見えてくる。見えてきた光明に、如何に華雄と連絡を取るか即座に策を考え始めた張遼を置き去りにするかのよう——駆ける一つの流れ星。華雄の一団を後方へと置き去りにする黒毛の馬が一頭。華雄の部隊の他の人間が遅いわけではなく、飛び出したその馬に乗った少年は丘陵から駆け下りる勢いを加味したとしても、その速度が尋常ではないだけだ。騎馬を自在に操る羌族の連中はおろか、張遼すらも超えた動きはまさしく人馬一体。人と馬の理想の果てを思い知らされる躍動感で、神速の勢いを持って一直線に西へと逃げ延びようとする羌族の横っ腹を食い破ろうと迫り行く。だが、それは無謀だと、思わず叫びそうになった張遼もまた、華雄隊を援護するべく止めていた馬を走らせた。

僅か一騎で二百近い敵部隊へと攻撃を仕掛ける姿は見事。後方から来る味方の兵へ対しての鼓舞効果も期待できるだろう。それでも、一騎で何ができるといふのか。蹴散らされてそれで終わりだ。一番槍の手柄の為に命を落とす気なのもかもしれない。例えば張遼であったとしても二百の兵を相手にしてまともにやって勝てる道理などありはしない。

突出した単騎に気づいたのか、羌族の十名程が隊から抜け、近づいてくる敵へと狙いを定める。瞬時に片付け即座に合流するつもりなのであろう彼らは、それぞれの武器を手に、一騎掛けする少年へと襲い掛かった。張遼が反射的にあげそうになった怒号は——次の瞬間には露と散り、驚愕のあまりに馬の足を反射的に止めてしまってい

た。何故ならば、少年が抜いた巨大な矛を振り下ろし一閃。それで五人が文字通り馬上から斬り飛ばされた。何が起こったのか理解出来ぬまま、返す刀の切り上げられたもう一閃にて、驚愕も露にしている残り五人もまた斬られ、千切れ飛ぶ。

想像を超える理解の及ばぬ結果がそこには残され、あまりに非現実的な光景を生み出した少年は速度緩めぬ勢いそのまま、羌族の一団へと突撃した。抜く手も、振るう手も霞む領域にて大矛が次々と羌族を斬り、断ち、振るわれ、叩き潰し、大軍を前にして一切の恐れも見せない黒毛の馬と少年は部隊を突き破って北方へと潜り抜けた。鞍上人なく鞍下馬なし、あまりにも完全にして完璧すぎる連携。その少年の放つ凶悪なまでの圧力と容赦ない殺戮に、分断された後続は馬が脅え混乱に陥った。前部隊もまた同様だ。まさかたつた一騎で横つ腹を食い破られるとは考えてもいなかった彼らは、瞬時にどう動けばいいのか判断に迷い、部隊の長である男へと継る視線を送る。その視線を一身に浴びる長もまた、一体なにがどうなっているのか現状の理解が追いつかない。このまま逃亡したとしても間違はなく後方から狩られて終わる。ならば、今ここでこの敵を仕留めるしかない。北へと抜けた少年が馬首を返し、再び此方へと迫り来る姿を見てそのような判断を下した長が号令を飛ばそうとするも——それはあまりにも遅い判断であった。

「貴様らが足を止めたらただの案山子にしか過ぎんぞ!!」

烈火の咆哮と同時に振り下ろされる巨大な戦斧。馬ごと断ち切る超重量級の斧撃が、一騎駆けした少年——李信へと意識と注意全てを持っていかれていた羌族の背後から襲いかかった。何の躊躇いもない一撃が、肉と骨を叩き潰す音を響かせて敵兵を肉塊へと変えていく。

「入れ食いでござーますな、姉御!!」

「ん。楽ちんだね」

胡軫と高順は華雄とは対照的に、確実に無駄もなく敵兵の急所を狙って片付けていく。華雄と同様に逡巡一つない彼女達の動作は、それぞれの剣を振るうごとに容易く命を終わらせていった。こんな命

危うい戦場においてなお、華雄や胡軫、高順以外の隊の者達の顔に浮かぶのは凄絶な笑みだ。雄叫びをあげ、不敵な笑みを浮かべ、敵を屠つていく姿はまるで物語の悪鬼の如く。華雄隊の全ての者が、恐れも、怖れも、畏れもなく完全に統制と冷静さを欠いている羌族を次々と斬殺し、突殺し、圧殺する。各隊員の躊躇いのなさが、涼州という地域は命のやり取りが日常的に行われることを指し示している。いや、彼らの存在は涼州という過酷な地においてなお、異質異端異常な連中の集まりであった。

「はははっ……」

その光景を呆然と見ていた張遼の口からは、乾いた笑いが漏れ出でていた。

「なんや、アイツら。なんや、アイツ」

グツと握り締めるのは自身の相棒である偃月刀。

眼下に広がるのは自分たちよりも遥かに多い異民族を前にして、平然と狩りつくそうとする狩人達の戦場だ。自分の命も相手の命にも何の価値も見出していない大馬鹿者達の戦の庭だ。

「張、隊長……一体、なに——」

ようやく追いついてきた副官が、張遼が見ている光景を見て驚き、次いで上官である彼女へと視線を移すと同時にヒツと短い悲鳴をあげた。彼の前には、樂しげに、愉悦を滲ませ、ただただ興味という感情のみを嬉々として全身から発している獣がいる。咄嗟に止めようとした副官を振り切つて馬を再度走らせた張遼は、未だ混乱の最中にいる敵部隊の最後続へと危険も顧みずに突撃を慣行した。

「隊長!? お待ちください!! 副長、速く止めにかかないと!!」

隊の中で最も若い兵士が困惑し、静止の声をあげるものの、副官の男はどこか疲れた表情のまま首を横に振った。その姿に再度言い募ろうとした若い男を、副官は鋭い視線のみで彼の台詞を止めさせた。「好きにさせておけ。隊長が……張文遠が本性を解放した。我らに彼女を止める術はない」

自分たちの隊長の無謀とも言える行動を、張遼隊の誰もが黙って見送った。その行動の意味を、真意を掴めなかった若い兵士だったが、

即座に響き渡るのは自身の尊敬する上司の雄叫び。そして、彼は知る。張遼という名の少女の性質を。本質を。本領を。彼女が異民族に『遼来遼来』と忌み嫌われ、畏れられるその理由を。

「——ウチも混ぜてや!! なあ!! なああ!!」

新たな敵の乱入に、さらなる混乱に陥る羌族が咄嗟に放った槍の攻撃を慌てもせずに偃月刀を縦にして柄部にて苦もなく受け流すと、瞬時に手の内で回転させ、その遠心力を利用。刀刃で横薙ぎ、敵の首を落とす。襲い掛かってきた縦一直線の剣の斬撃を馬上で僅かに横に移動させ避けると、背後からの右水平の太刀筋をこれまた身体を沈ませてやり過ごす。第二刃を放とうとする敵二人よりも速く、張遼の石突が空を渡る。まともにそれぞれの鳩尾に入った衝撃に、呼吸が止まり、馬上からずるりつと落馬した。休む間もなく振るわれる袈裟切り、逆袈裟、左切り上げ、右切り上げが、神速を持って一閃一殺を成し遂げる。何がおきたのか理解できていない敵兵は、良的にしかならずに瞬時に穿たれた刺突が三人の喉下に風穴をあけた。気がつけば一呼吸の間に十名の兵を殺害したその姿——戦場でなお映える美しき紫紺の獣。まるで人喰い虎を思わせる獣の出現に、シンツと静まり返った周囲を省みず嬉々として数多い敵兵へと偃月刀を向け言い放つ。

「なああああああ!! 一緒に遊ぼうやあああああああああああ!!」

灼熱色に燃え上がり、戦いへ対する興奮に身を震わせる獣が、ウチを見ろと言わんばかりに猛け吼える。それは羌族に対しての表現なのか、その実彼女の視線はただ遠方にて矛を振るい続けて戦場を支配する李信にのみ向いている。

張遼の存在に気づいた華雄隊の兵達は、関わっては駄目な奴がきた——といった様子でとぼつちりを喰らわぬように彼女の周囲から

戦いの場を他へと移す。好戦的かつ、強い者との戦を好む張遼文遠。それが彼女の唯一の悪癖とも言えた。

隊長でもある華雄とも仲が良い故に、彼女の取り扱い方は誰もが承知のことであつた。彼女の前に残された異民族は、初めてそこで気づいた。己の前にいる獣の正体に、ようやくと悟つた全ての羌族が顔を青ざめさせる。遼来々。張遼がきたぞ。悲鳴が上がった。あらゆる異民族に恐れられる最速最悪の獣。漢陽最強の一角。太守傅燮の懐刀。今ここに数多の異名を持つ張遼文遠の武が唸る。

後続部隊が張遼によつて殺戮の限りを尽くされている中、まだ前部隊が相手にしている人数は少ない。僅か四人の少人数だ。華雄、胡軫、高順の少年少女と判断される歳若い兵。されど羌族の混乱がおさまつてなお、彼女達の蹂躪は止まらなかつた。それは純粹な力の差。格の違い。英傑の領域に足を踏み入れた怪物達の晩餐会がここに開かれている。彼女達の戦斧が、小剣が、剣が空に煌くたびに新たな命が散つていく。

そしてその中でなお異彩を放つ鬼人が一人——大矛をまるで我が手足のように扱う李信。相手が反撃を試みるより速く、回避に転じようとするより早く、防御ごと押し潰しまるで意味を為さない圧倒的なまでの爆撃染みた斬撃が瞬く間に敵兵を屠つて行く。一呼吸の間で数名が斬殺され、数秒経つ頃には二十の敵兵が文字通り消し飛んでいる。この逆境を覆そうと決死の覚悟で気炎を吐き、それぞれの干戈を手に戦いを挑むものもいた。そんな覚悟を持った勇者でさえも無意味だと断じて悉くを塵殺するは鬼人、否。鬼神の如きその力、彼の前に立つ者は一切合切全てが灰燼と消ゆ。

「——ふざけんな!! なんだよ、こいつらは!! 漢朝は、こんな化け物を飼いならしてるのかよお!!」

羌族の一人が泣き喚いて響いたその台詞。敵味方問わず多くの兵士達の耳に届きながらも、戦場の雑音に紛れて消えた。それを言い放つた羌族の男もまた、李信の傍らで獅子奮迅の働きを見せる華雄の戦斧の乱舞に巻き込まれ肉体が四散する。血と臓物が撒き散らされる死山血河の頂に立つ、美しくも雄々しき華は新たな標的を求めて咆

哮を上げた。張遼にも負けず劣らずの獣の女王、華雄ここに在り。

僅かな時間でもはや立て直すどころか、壊滅寸前にまで追い込まれた羌族の長には既にまともな思考が残されていなかった。それは無理なかるう話だ。自身の兵よりも寡兵で一方的に殺されて行く部下達。抵抗を試みようとも、彼の想像を遥かに超える化け物が五人。策など容易く力技で突破することを可能とする怪物達。そんな連中を相手して、こんな状況で一体どんな指示を出せばよいのか。故に、次に彼のとった行動は決して責められることではなかった。つまりは——自分ひとりでの逃亡である。全ての部下を見捨てて、たった一人馬を西へと走らせた。後方で響き渡る怒号と悲鳴。それを鼓膜に響かせながらも、彼はこの場から、化け物達から一分でも一秒でも早く遠ざかる選択肢を選んだのだ。それは生物としての本能が取らせた結果だ。無理もない。ただ単純にこんな化け物達と会敵した運の悪さを責めるしかなかった。だが、それに不満を持った男が一人。逃亡した長の姿を視界の端で捉えた戦士が、大矛を振り回して周囲の羌族を斬り飛ばした。そして、それら血が散布される空間に黒毛の馬を走らせた。戦略的撤退ならば認めよう。戦況を打破する目的ならば容認しよう。だが、仮にも一団の長が、隊長が、部下すら捨てて命惜しさに脅えて逃げる。そんな真似を認めてなるものか。

「おい……大将が、背を向けて逃げるなよ」

まるで耳元で囁かれたと錯覚する程に、大声で怒鳴り散らされたわけでもないのに、その声は長の脳髓深くにまで入り込む。ヒイツと自然とあがった心の底からの恐怖の悲鳴。見なくてもわかる。自分の背後に迫り来る、大矛を構える悪鬼の姿が確かに想像できてしまった。そしてその想像は微塵も違うことなく現実となる。李信の手から解き放たれた大矛の切っ先が、長の右胸を貫いて巨大な風穴を開けるとやがて馬上から力なく地に落ちた。自身の血の海に沈む彼は何故こんなことになったのか、なってしまうたのか、考えはしたもののその思考は数瞬後には閉ざされることとなった。

「なあなあ。あんたなんて名前なん？」

羌族を殲滅した後、襲われていた村に戻ったもののやはり生存者はいなかった。華雄隊と張遼隊が協力して墓を作った後に、並んで漢陽へと帰還している途中のことであった。張遼が李信の傍へと馬を寄せて、語りかけてくる。その際にチラつと横目で華雄を見ると、彼女は無言で頷いた。それを確認してから李信は張遼へと返事を返すべく口を開く。

「李信だ。字は永政。よろしく頼む」

「ほえー。李信か。ええ名前やな、うん。ウチは張遼。字は文遠ちゅーねん。よろしゅうな」

裏表ない男女問わず魅了する張遼の笑顔を向けられても、特に感じることなく頷くことで答えとする。その瞳の奥には、底知れない怪しい光が灯されていることに気づいていたからだ。いや、そもそも戦場にて荒れ狂う張遼の姿を見れば、まともじゃないことくらい一目でわかるというものだ。

「なんや、つれないなあ。まあ、ええけど。それはそうと、あんた強いな。めっちゃ吃驚したで、ウチ。あんたが単騎駆けした時はなんやあの命知らずはって思うたけど、あんたほどの腕前なら納得や」

「あれくらいなら問題はないな。自分の腕にはそれなりの自負があ

る」

「ははっ。二百を超える敵兵相手に突っ込むことがあれくらい、か。壊れてるなあ、あんたも」

期待を裏切らない李信の台詞。知らない人間が聞けばそれが慢心や驕りではないかと思うかもしれない。だが、先程までの光景を目にすれば、それが思い上がっている人間の言葉ではないことが理解できる。李信にとっては、敵が二百だろうが三百だろうが十分になんとかなる範囲なのだろう。それを再確認した張遼の口元が静かに緩んだ。ああ。駄目だ。本当に駄目だ。この男は絶望的に絶対的に駄目すぎた。今まで見てきた怪物級の武将達が子供に見える外れに外れた超級の化け物だ。涼州にて名を轟かせる手下八部や、北宮伯玉だろうが、馬騰も韓約でさえも、見劣りする。彼らが弱いわけではない。その強さ、十分に英傑級。例え張遼が全力で戦ったとしても、例にあげた武将全て楽には勝たして貰えない戦士達だ。いや、韓約のみは文官なので例にあげるのは正しくないかもしれないが。それでも今この場の隣にいる少年はそれら全てを超越している。それは武将としての経験と、獣としての直感だ。キヒッと唇を緩ませた張遼が本命となる言葉を繋げようとしたその時。

「……あまり私の副長の手を煩わせるなよ、張遼」

二人の間に馬を割って入らせたのは華雄であった。邪魔をされる形となった張遼は、不満も露に眉を顰める。

「なんや、華雄。ウチは今この兄ちゃんと話してるんや……って、副長？」

華雄の言を信じるならばこの少年が華雄隊の副長を勤めている。それはおかしい。ついこの前まで副長はもう少し年嵩の者が受け持っていた筈だ。

「ああ……この前の戦闘の時に、な」

「あ、そうなん？」

華雄の隊の副長は結構な古株だった。それが死亡したということはかなり痛手であっただろう。その後任についたのは目の前の李信という少年だ。この若さゆえに果たして反発はあったのではない

か、とも張遼は考えたがそれはないか、と思いなおした。涼州において常に死が近いこの地域は力というものに皆が敏感だ。力こそ正義、と認めるわけではないが、少なくともそういう傾向が多いのもまた事実な部分がある。

「お悔やみ申しあげるわ。まあ、それはおいといて……兄ちゃんたちよつと話したいことがあるんや。すまん、華雄」

今自分は李信と話をしている。だからお前は口をだすな、と言外に含ませた返答をする張遼。その遠慮の無さに華雄は怒るでもなく、苦笑を返す。そんな姿を意外に思ったのは張遼であった。つい先日までの常に誰にでもピリピリとした威嚇染みた圧力を放っていた華雄とは違う。言うなれば余裕のある態度。まるで地に根を下ろしたかのような巨木を感じさせる雰囲気を感じさせている。

「お前の気持ちもわからんでもない。だがこんな状況で始められても困るぞ。せめて漢陽までは我慢しろ」

「……しゃーないな」

華雄の余裕。自信に溢れたその姿。これまでの彼女とは明らかに段階が異なっている。友人の劇的な変化に毒気とやる気を削がれた張遼は無意識のうちに偃月刀に添えていた手を放すと、李信達から自身の隊へと馬を戻し空に浮かぶ雲を数えながらも、後頭部にて手を組んでクアッと蒼天を見上げた。そんな彼女の姿にとりあえずはなんとかなったか、と安堵する華雄。しかしながら、張遼の頭の中は漢陽に戻ったら速攻で李信を訓練場へと引っ張っていこうと逸る気持ちで占領されていた。

第16話：馬騰と韓約

ある日の漢陽の官庁は蜂の巣をつついた騒ぎになっていた。漢陽中の文官が朝から休む間もなく仕事に追われている。文官不足の涼州にて忙しいのは当然のことでもあるが、この日は特に群を抜いており、混乱に陥っていると言っても過言ではない状況であった。その理由は実に単純。ある二人がこの漢陽を来訪するからだ。たかが二人訪れるからなんだ、とそれを聞いた者は思うかもしれない。だが、その二人が問題となる。つまりは騒ぎとなるほどの大人物——即ち。

「馬將軍、韓將軍……お二人が到着されましたア!!」

官庁中響き渡る緊張をはらんだ声。馬騰と韓約。この涼州においてその名は大きな意味を持つ。涼州における大勢力を誇り、漢朝のみならず異民族に対しても一目おかれている英傑だ。両者ともが義に厚く、賢明であると噂されており、実際に漢民や羌族などの異民族からも多くの尊敬を集めている人物達。

元々昨今の涼州の治安や異民族からの侵略などについての書状をだしていたのだが、まさか書状での返信ではなく漢陽へとわざわざ訪問してくるなど誰が想像し得ただろうか。しかも、二人同時。偶然という言葉で片付けられるはずがない。もともとが馬騰と韓約は義姉妹の契りをお互いほどの仲でもある。二人して連絡を取り合っただけで示し合わせたと考えた方が無難であろう。その二人が一緒に来訪し、一体どんな無理難題が話題になるのか想像もつかない。ここまでは太守傅燮と賈詡の両者の予測は一致していた。

漢陽官庁における謁見の間。洛陽などに比べれば当然見劣りするが、流石に涼州最大の都市ということもありそれなりの大きさの広間にもっとも上座の位置に傅燮が、その両隣に賈詡と董卓がそれぞれ座している。そして両側縦一直線にこの漢陽を支える文官達が並

んでいた。皆が皆、あまりに突然のことであつたため平静さを保ててはいない状況なのは一目見て明らか。普段通りなのは傳燮のみで、あの賈☒や董卓ですらも表情に若干の困惑が見える。

ドクンドクン、とこの場にいる全ての人間の心臓が早鐘を打っていた。それぞれの唇も乾き、会う前から既にまともな状態を保つてられない皆に、傳燮は大人の女性にしては子供っぽい動作で自身の右人差し指を唇にあて少し考え込む動作をするも一瞬。

「——お腹減ったわねえ」

緊張が瞬間的にだが霧散した。今のままで扉の方を落ち着かず見ている文官達がガクつと思わずよろけてしまったが、すぐに傳燮へと全員が向き直る。

「傳燮様……このような時に冗談はおやめ下さい」

「ええ……だってもうすぐ太陽が中天に差し掛かる頃でしょ？ お昼

ごはん普段だったならもう食べてるんだし」

「確かにそうですが……。これから来る二人のことを思えば食事など……」

「ご飯は重要よ？ 食べないと力がでないもの。ああ……貴方達がそんな顔しているのもきつとご飯を食べてないからじゃないかしら？」

「……そのような顔をしていましたか？」

「ええ。馬騰殿と韓約殿も気にされるんじゃない」

くすくす顔をほころばす傳燮の姿に、自分たちがどれほど平常心を失っていたのかようやく悟る。ふうつとそれぞれが深い呼吸を繰り返し、皆がぐつと奥歯を噛み締めた。冷静さを取り戻し、目の色が変わった文官達。既に先程まで萎縮していた彼らの姿はここになり。もともとが傳燮に認められ、任じられた優秀な者達ばかり。この過酷極まりない涼州にて、漢陽はその一部地域に過ぎないとはいえ最大の郡にまで成長させた力量は伊達ではないのだ。

そんな彼らの姿を見て、賈☒は思わず上手いと思った。あの誰もが緊張して平静ではなかった状態で会見をすれば一体どうなっていたか。緊張をほぐすために、わざと傳燮は全く関係がない話題で配下の

意識を一度ずらした。そして今度はどれだけ自分たちが平常心を保
てていなかっただか本人達に気づかせた。実に単純なことではあるが、
それは絶大な効果を発揮している。このような機転が利く上司のこ
とは見習うべきだと考えているが、自分では無理だろうとも考えてい
る。元々がそこまで人付き合いも人当たりも良いわけではない。好
んでしようとも思えない。賈コウにとつては、友人である董卓さえいれ
ばそれで人生は完結しているのだ。ちらりつと視線を傅フを挟んで
逆側にいる董卓へと向ければ、それに気づいて彼女は小首を傾げた。
どうしたの、とでも言いたげな友人の姿に何でもないと首を横に振つ
た。そういったことは友人に任せておけばよい。彼女の人柄、穏やか
な性格はこの涼州では貴重だ。能力も優秀、気の弱そうな外見ではあ
るものの意外な芯の強さもある。賈コウは友人と言う鼻ハナ目を除いて
も何時か彼女がこの涼州に安寧を齎すのだと信じていた。
「参られ、ました」

平静であろうとしているものの、その言葉には隠しきれない畏れを
含ませた案内役の者がついに扉を開ける。ギィつと扉が音を軋ませ、
謁見の間へと姿を現した人物を見て、文官達の身体が固まった。文官
と言えど、ここは涼州の地。命の危険があつたことなど数知れない。
海千山千の実力者を数多見てきた彼らでさえも、現れた馬騰率いる一
団を見て思考に空白を作り出される。

先頭を行く者は、その一団においてなお異彩を放つ巨大な女性で
あつた。その背丈は実に六尺を超える大きさ。この広間にいる誰よ
りも背が高く見上げねばならぬほどだ。だが、顔の容貌自体は整つて
おり、茶色の短い髪がその風貌に良くあつている。彼女の背後に追従
している者数名もどこか似たような雰囲気と顔つきで、もしかしたら
親類縁者なのではないかと想像をかきたてる。問題は、この広間へと
姿を現した者達のなか、武の臭いをさせている者は二人だけ。その他
は恐らく自分たちと同じ文官の立ち位置なのだろうが——その全
員が本来の彼女達よりも大きく見えるということだ。覚悟は完了し
ていたというのに放つ重圧は誰もが尋常ではなく、一人一人が戦場
の武将級の気配を纏わせている。本来の相手よりも一回り違って見

えるということとはつまりは漢陽の文官達がその圧に気圧されているということ。格が違っていることに他ならない。されど、彼女たちはカッカツと足音をたてながら傅燮の前まで歩み寄ると、洪手の礼を取って膝を折る。

「久しぶりですな、傅燮殿」

先頭を歩んでいた大柄の女性が一番に口を開く。何でもない挨拶にしか過ぎないそれは、だがしかしこの場にいる全ての人間の身体を圧した。聞く者の心を、覚悟を打ち砕く戦場の圧力。されど、打ち砕いておきながらその心を大きく包み込む不思議な包容力。そんな相反した威圧に晒された皆が皆、ただ呆然としてしているなかで、やはり傅燮は変わらない。穏やかで優しげな笑みを浮かべたままだ。現に彼女だけはこの一団をその姿以上には見ていなかった。

「ええ。本当に、ね。馬騰殿」

初めて会う者はこれほどのものか、と。久方ぶりの者は、これこそが馬騰なのだど認識するに至った。そんな中、違和感を抱いている者が二人。賈□と董卓である。その違和感を二人は必死になつて探っていたが、ふと気づいた。それはかつて会ったときほどに大きく見えていない、ということだ。以前会ったときはあまりの重圧に何も考える間もなく、冷静になる時間もなく別れて終わった。だが、今は確かに多少は大きく見えるが、それでもそれは本来の馬騰達と比べれば僅かな誤差に過ぎない。二度目で彼女達の圧力に慣れたのか、と安堵しそうになったとき、賈□は気づいた。彼女達の存在感は確かに凄まじい。少なくとも今の自分では馬騰には及ばないだろう。だが、自分もつとんでもない化け物を知っている筈だ。会っている筈だ。言葉を交わしているはずだ。李信という名の怪物に比べれば、十分に人間の範疇ではないか。

「……ああ。そうか」

ぽつりつと漏らした言葉はあまりに小さく傍にいた傅燮にしか聞こえなかった。幸いにも上司はそれを咎めることはせずに、賈□の表情を見て触れないほうが良いと判断したようだ。それに感謝をしつつ、気を引き締めなおした賈□は、瞬きを一度。開け放った次の瞬間

「我!! 参上!!」

ドンつと背後に文字が出そうな勢いで無い胸を張って白い八重歯を覗かせながら大きな声で笑い続ける韓約の姿に、馬騰は苦虫を噛み潰した表情で背後まで歩いていくと未だ高笑いしている彼女の頭に拳骨をたたき落した。

「ふ、ふぎやあ!?!」

なにやら不気味な声を上げ頭を抑えて蹲る韓約に、嘆息しつつ馬騰が頭を下げた。

「約が失礼した。久しぶりの漢陽で若干興奮しているようで、申し訳ない」

「いえ。相変わらず韓約殿は予想を裏切ってくれて面白いわね」

韓約の姿を知らなかった者は、まさかこの少女が噂に名高い西涼の雄なのか、と驚きを隠せない。しかし、韓約の容姿は幾らなんでもおかしいことにはたつと気づく。馬騰と韓約の名が知れ渡り始めたのはおおよそ十年も前からだ。馬騰ならば年齢と合致するが、韓約の十年前を想像すればまだまだ幼い時分のはずだ。だが、肝心の傅燮が少女を韓約と認めているのだから疑うわけにはいかないものの、やはり疑問が残る。

「この度は突然の訪問にも関わらず、時間を作っていただき感謝しますぞ」

痛みを堪えている韓約を放置して話を続けることとした馬騰に、一度頷く傅燮。

「いいえ。わざわざ漢陽に来てもらったのだもの。時間くらい幾らでも作るわよ」

「重ねて言うが、真に申し訳ない。緊急に伝えておきたいことがあったためこのように礼を欠くことになってしまいました」

「大丈夫よ……ああ、それはそうと、韓約殿と二人揃ってなんて珍しいわね。何かあったのかしら?」

傅燮と賈☒が気にしていた、二人同時の訪問について直球で聞きに行った傅燮だったが、その質問に対して馬騰は僅かに眉を顰めて無然とした表情で韓約を見下ろす。

「特にない、としか言えません。たまたま約が私の屋敷に遊びに来ていたのですが、暇だからとそのまま着いてきただけです」

「ひ、暇だから……?」

「はい。約の立場からすれば当然そんな訳はないのですが……どうやら部下に仕事を割り振ってきたようで。残った金城の者達は地獄を見ていると予想するのは容易いですな。北に戻る際には送つていく予定です」

深読みしていた傳燮や賈☒、その他の者達にしてみれば想像の遙か外。とんでもなくどうでも良い理由であった。或いは馬騰の嘘かとも思ったが、痛みに頭を押さええている韓約の姿を見れば、実際的にありえそうなものだから恐ろしい。

「うむむむ……酷いぞ、騰よ。幾らなんでも強く殴りすぎだ。馬鹿になつたらどうするのだ」

「お前は少しくらい馬鹿になつたほうが丁度いい」

「なんと冷たい。我ら義姉妹の契りをかわしたというのに。あの頃のお主はどこへいったというのだあ!?!」

「……あの頃は私も若かった。今思えば少し早まったかもしれない」

馬騰の台詞にガーンと地味に打ちのめされた韓約であったが、精神的には耐性があるのか崩れ落ちることなく両腕を組んで再び笑い声を上げ始める。そして、その話を聞いていた周囲の文官達は別の意味で呆然となった。彼女達の言を信じるならば、やはり見かけ少女にしか見えない彼女は韓約に他ならない。つまりは、御歳二十を超え、下手をしなくてもその後半には差し掛かっていてもおかしくはない御年齢となる。彼女の肌のはりや艶、とてもそんな年齢には見えない。もはや驚きがそちらに大部分食われてしまっている状況であった。

「さて、傳燮殿よ。此度はお主らに伝えねばならんことがあつてまかりこした」

「ええ。私が話の腰を折ってしまったけど、そういえば先程馬騰殿も言っていたわね。何かしら?」

「うむうむ。我と騰とのそれは一緒だ。故に我が纏めていってしまったおう。よいか?」

頷いた馬騰を確認後、韓約は何の躊躇いもなく口を開いた。

「近々この涼州にて大規模な反乱が起きるぞ」

平然ととんでもない爆弾を落とした韓約に、この場にいた漢陽の者達は反応ができない。まるで今日のご飯の内容を語るかのようになり、日常会話の如く言つてのけたが故に、言われた方としては理解するのが遅れてしまった。それはあの傅燮ですらも同様で、董卓も目を白黒とさせている。

「お待ち下さい。文約様……反乱？ 反乱がおきるとは一体？」

その中でも最も早く立ち直つたのは賈詡であつた。

優秀な文官であると同時に、軍師としての才能も持ち合わせている彼女は出来る限り情報を搾り出そうと質問をぶつける。上役である傅燮の了承を取らずにこういった行為にでることはない彼女が反射的にでも行動してしまつたことを悔やむものの、今は僅かでも話を引き出したほうが良い。

「うむ。実を言うとな、先零羌の者達から先日打診があつたのだ。面倒事には巻き込まれたくないゆえに、受けなかつたが、随分と大規模な人数になつているぞ、あれは。起きれば或いは涼州がひっくりかえるやもしれん」

「私の元にも連絡がきましてな。保留にしていますが、奴らは本気ですな、あれは」

「……そんな馬鹿な」

賈詡が漏らした心からの本音。今まで異民族からの反乱がなかつたわけではない。だが、涼州がひっくり返るなどという発言。一体どれほどのものかというのか。

「先零羌のみならず、既に数万の人間が参加しているとも聞く。流石に拙いのではないか？」

数万。それが事実であるならば、はつきり言つて漢陽に止める手立ては存在しない。方法があるとすれば、早い段階で金城郡にて異民族の反乱防止にあつている護羌校尉に動いてもらうしかない。そしてそれは金城郡にて名声と地位を得ている韓約に頼むべきである。

「みなまで言わずともよい。先程言つたが我もこれから金城に戻る。

太守にその旨しつかりと伝えることを約束しよう」

戦争などでできればしないほうが良い、と言い切った韓約にこの場の者達は思わず安堵した。最悪の情報ではあったが、それが形になる前になんとか手を打つことができるかもしれない。それに胸をなでおろす。パシンつと小気味宵よい音をさせて洪手の礼を取った傅燮は深々と頭を下げた。

「馬騰殿。韓約殿。貴女達の心遣いに感謝を」

「よいよい。我とて本気で朝廷と争うなど無謀にすぎると考えておる。如何にかつてより衰えているとはいえ、現状反乱を起こしても勝ちの目など見えはせぬ」

「無駄に死人を出すのは私も好きではないですから。私の支配地では反乱に手を貸さないように前もって通達しておきます」

その後様々な話をするものの、最初の反乱の情報ほど大きなものもなく、当たり障りのない会話で馬騰と韓約の謁見は終了するのであった。



「ところで約よ。あの娘をどう思った？」

話し合いが終わり、謁見の間から出て歩き出してから馬騰が突然にも切り出した。それに考え込む韓約だったが、すぐに顔を上げて歩みを止めることなく口を開いた。

「なかなか面白い!!」

「やはり、か。お前が言うならば本物だろう」

賈文和。二人同時にその名を口に出した。

「我らを前にして臆しておらぬその姿。なんと見事なものか。あれで十四……五か? 未恐ろしい小娘であるな」

「全くだ。私の娘も連れて来るべきだったか」

「ほう。馬超を? 確かに文和があれほどに化けているならばそのほうがよかったやもしれんな」

「ああ。自分と同年代で文官とはいえあれほどの高みに昇っている。良い目標になりそうだ」

「互いに切磋琢磨する関係になれば、どれほどの領域に辿り着くか。ははははははははっ!! 実に興味が絶えないものだ」

二人の会話を聞いている背後に追従していた供の者の顔には疑問がありありと浮かんでいた。傳燮の傍に控えていた小娘が何故にこれほどまでに主に評価されているのか。確かにあの状況で終始冷静であったのはたいしたものだと思うが、まだ小娘にしか過ぎない発展途中の一文官を評価し過ぎではないか。彼女達にここまでの好評価された人物を聞いたことがない。そんな内心が表情にありありと表れているのか、馬騰と韓約は自身の配下に小さく笑みを浮かべた。

「完成されているモノの何が面白いか。私にとって、賈文和は未完成だからこそ心惹かれる。僅か数ヶ月で鼠が獅子に化けたのだぞ?」

果たしてアレはどこまでの高みに達せられるか。楽しみが出来たというものだ」

出来れば自分の配下に欲しい。と付け加えた馬騰。

「うむうむ。騰の言うとおりで。だが、我は少し意見が違う。完成されているモノ。それは面白くはないかもしれん。されどそれは、美しい。研ぎ澄まされ、磨き済まされた完璧なモノにこそ我は惹かれる」

見事に反する二人の意見。

だが、二人はどちらも互いを否定しようとはしなかった。若かりし頃なんども問答したということもあるが、そのどちらとももの言い分も

理解出来るからだ。この二人は一緒にいるときは子供なのだ。若かりし頃よりこの涼州にて生き抜いてきた彼女達。年齢を重ねることによって、彼女達は次第に地位と名声を得てきた。背負うモノも増えてきた彼女達は、日々苦悩と苦勞を一身に浴びている。背負っている。故に様々な考え意見はあろうが、この二人は義姉妹でありながらも友である。そして二人でいる時のみ童心に帰る事が出来る。そんな馬騰と韓約の会話を結局は理解出来た者はいなかった。配下の者達もまた、二人の本質を完璧には解ることが出来ていないという話に集約されるのだろう。やがて官庁の入り口の広場まで辿り着く間近、長い階段を降りているときだった。

「たくっ……お前はしつこすぎるぞ、張遼」

「ええやん。ええやん。ウチも仕事が忙しくてあんまり李信と遊べんし。なんならもう二、三回くらい模擬戦やつてもええくらいちゃう？」

「いい加減にしろ。お前が李信とやりすぎて、私の時間までなくなっただろうが」

「えー？ やらしいな、華雄。私のなんて強調しすぎやない？ 他の隊員も待ってたんやろうし」

「揚げ足を取るな……」

「おお、成長したでござーますな、姉御。昔だったら速攻にぶちきれて斧ふるってたはずでしたが」

「……そんな短気だったの？ そういえば最初あったとき有無を言わず殺す気で襲い掛かってきたっけ」

階段を降りる馬騰達とすれ違う形で階段の横を通り抜け、わいわいと騒ぎ立てて歩く一団がいた。何でも無いような会話をしている彼らであった。実際に供のものは全く気にしていなかったが、馬騰と韓約の二人の反応は劇的であった。特に韓約は、階段の手摺から身を乗り出し、一団を見下ろした。一団の先頭を歩く少年の姿を確認すると、キラキラと目を輝かせ——勢いよくとめるまもなく空中へと小さな身体を躍らせた。秒もたたずして、彼女は地上へと到達する。丁度李信達の前に立ち塞がるような格好だ。

「ふはははははははっ!! 我、参上!!」

足の痺れに涙目となりつつ、薄い胸を張りながら声を張り上げる韓約に、冷たい視線を送るのは李信だ。

「……なんだ、この頭のおかしい奴は」

嘘偽りない本音が飛び出てくる。失礼にもほどがあるが、いきなり空中から飛び降りてきて、この台詞。確かに普通ではない。むしろ頭がおかしいと言われてもおかしくはないというか、おかしい。こんな中でも涼州で一、二を争う文官なのだから世の中わからないものである。彼の容赦ない辛辣な評価を受けながら、韓約は気分を害した様子は見られない。むしろ、慌てたのが李信に続いている者達だ。

「あー。李信。確かに頭のおかしそーな人ではあるんやけど。一応その人結構なお偉いさんやで」

「……うむ。明らかに普通ではないが、一応は金城で名の通った方だ」
韓約と顔見知りである張遼と華雄は、なんとか彼女の奇行を補おうとするも、思わず本音がまろびでていた。十分に彼女達の台詞も失礼に値するのだが、それを責める者は誰もいなかった。

「で、このちびっ娘は……結局誰なんだ?」

「ああ……この方は——」

「驚き、慄き、頭を垂れよお!! 我こそは、涼州に名を轟かせし韓約!!
字は文約であるぞ!!」

華雄が韓約を紹介しようとするものの、それよりも早く韓約が名乗りを上げた。韓約、韓約、と口の中で呟いていた李信であったが、しばらくしてその存在を思い出した。あの辛口の張讓が、珍しく高評価をしていた涼州の人物。文官の極みの一人。なんでも宦官不要説を引っ提げて、あの何進に直訴したとも言われている女性だ。それを聞いた際の張讓の爆笑ぶりは、傍にいた李信でも思わず引きかけたほど。

「……それは失礼しました。手前は李信。字は永政と申し——」

「よいよい!! 今更そのような鯨張った言葉遣いなど不要!!」

かぶせ気味に李信の台詞を遮ると、洪手をした李信へと近づいてい

く。恐らくは先程まで張遼達と訓練をしていたのだろう。普段よりも一段階重い圧力を纏っている彼に全く恐れも見せないその姿。この場で誰よりも小柄な韓約であったが、彼女の放つ圧力も尋常ではなかった。先程の謁見の間での彼女とは既に別物。別人だと称しても信じられるほどに違っていた。

「李、信。李信か!! 凄いな、お主。初めて見たぞ、我が友馬騰を上回る化け物を!!」

目の前で李信を怪物呼ばわりする韓約だったが、目を輝かせて李信を上目遣いで窺っていた突如としてその麗しの顔を曇らせる。

「……むう。なにやら違和感がある。お主見かけ通りの年齢、か？」

もしかして我と同じような若作りと言うわけではあるまいな？ その年齢で、これほどの高み。絶対にあいえぬ……が、それは私の物差しにしか過ぎぬ。私の想像を超える者がいてもおかしくは——」

ガンツと響くのは本日二度目の拳骨の衝撃。

階段を降りてきた馬騰の拳が先程よりも強烈に、友の頭に振り下ろされた。今度は悲鳴もあげずに地面に倒れた韓約を、担ぎ上げて肩に引っ提げる馬騰。

「約が迷惑をかけた。こいつに代わって謝罪しよう」

固い表情の馬騰が頭を下げこの場から去っていく。その姿を唾然と見送った張遼達だったが全員が互いに顔を見合わせて首をかしげた。一体なにをしたかったのか。肝心の馬騰達がいなくなってしまうのだから、その理由も聞くことが出来ない。まあ、いかと李信達は昼食を取るといふ本来の目的を果たすために、馬騰達とは正反対の方角へと向かっていった。

そんな李信達から離れて官庁から抜け出た馬騰達であったが、彼女は肩に背負っている韓約だけに届く小さな声で呟く。

「アレには関わるな。強い弱い、才能があるない。武將だ文官だ、などという枠組みにいない。戦場で生き戦場を支配する者。その気になれば漢朝すらも喰い破る、制御不能な悪鬼羅刹だ。中央のものは何を考えている。戦場溢れるこの涼州に、何故あんな化け物を追いやった」

逆だ。逆なんだ。全ては逆だというのに。李信という男に戦場を与えてはならない。アレは如何なる戦場でも生き抜き、戦果を上げる。絶対に死ぬことなどありえない。殺すことなど不可能だ。逆に戦渦となつて、あらゆる戦禍を周囲に齎す。あのような人の枠組みから外れた怪物は、戦場からもつとも遠い洛陽でこそ飼いならすべきなのだ。それが中央の官僚達はわかつていないのだ。いや、わかつていながらも自分達から遠ざける為に涼州へと送ったのかもしれない。それが近い将来自分たちの首を絞める結果に繋がっているとも知らずに。

「やはり反乱軍の申し込みは保留にしておいてよかつた。あんな輩と真つ向からぶつかりあうなど、ご免被る」

「——思い出したぞ!!」

バツと馬騰の肩から飛び降りた韓約は、痛む頭を押さえながらも李信達が消えていった方角へと視線を向ける。

「何を思い出した、約？」

「李信。かの中華六将が一人と同姓同名だ!!」

「中華六将？」

「うむ。かつて中華を初めて統一した大国家秦の建国に尽力した將軍の一人。個の力ならば中華六将の中でも最強と謳われた男。武神殺しとも言い伝えられる色褪せぬ伝説の武将だ」

「私が知らない時点で十分色褪せていると思うが……」

「う、うるさい!! しかし、数多の伝説を残すあの李信と名を同じくするか。ふ、ふははははははは!! あの庄、雰囲気、力量!! その全て!! 生まれ変わりとと言われても我は信じるぞ!!」

「……好きに言つてろ。ああ、全く。お前の武将好きも困つたものだ」

とんでもない韓約の発言に若干どころかおおいに呆れた馬騰は、韓約と連れ立つてその日のうちに漢陽から出立するのであった。だが、それから十日あまりが経過したある日、漢陽を激震させる報告が傳變の下へと届けられる。反乱軍によって護羌校尉及び金城太守は殺害され、金城郡陥落。反乱の参加者は異民族である先零羌だけではない、かつて羌族の反乱を何度も鎮圧した破羌將軍段?の配下だった者

たち。これまでのような単なる羌族によるの異民族反乱ではなく、彼らを鎮圧する立場でもあった義従や涼州に住まう漢民族までもが反乱軍に参加している一大蜂起がおきたということ。そしてその反乱軍の総大将の名は——韓約文約と言った。

第17話：それぞれの情勢

その日、漢の首都である洛陽に急報が飛び込んできた。慌てた様子の急使による報告は瞬く間に文官のみならず、洛陽に住まう者達にすら広がっていった。宦官の十常侍筆頭の一人である張讓もまた例外ではなく、その報を聞くと屋敷に帰っていたにもかかわらず慌てた様子で服を着替えなおし宮中へと向かった。既に夕陽が差す時間帯ではあるものの、そんな悠長な状況ではないことを理解していたからだ。

馬車の中、彼女は涼州に広がっている反乱の情報をまとめながら、果たしてこの事態を重く受け止めている者がどれくらいいてくれるだろうか、淡い期待と若干の苛立ちを胸中に抱き、ようやく目的の宮中の軍議が行われる間へと到着した。いきおいよく扉を開けてみれば、そこにいたのは――わずか十人足らずの人間のみであった。僅かな落胆をするものの、自分の派閥にいるものには連絡をとばしたため、少くない人数がほどなくしてここには来るであろう。それを期待しつつ、室内にいた十人のうちの一人である自分の最大の政敵とも言える趙忠へと足音響かせ近づいていく。はつきりいつて好んで会話をしようと思う相手ではないが、そんなことを気にしている暇もない。

「先の急報聞かれたか、趙忠殿」

「……うむ。涼州の件であろう」

「ああ。今すぐにも討伐軍を組織するべきだ。アレは放っておけば最悪の事態に陥るぞ」

表情のみならず全身から放つ雰囲気にも焦りを滲ませる張讓に、珍しいものを見たとき趙忠は軽く目を見開いた。自分の半分も生きていない小娘ではあるが、彼女の能力には一目置いている。常に冷静たら

んとしている張讓のこんな姿は随分と貴重である。

「お待ちを、張讓殿。困りますな、勝手にそのようなことを申されては。討伐軍を組織するにせよ、まずは軍議で話し合いをせねばなりません。すまいて」

焦燥に駆られている張讓に、普段の恨みを晴らそうとでも言うのか十常侍の一人でやや小太り気味の中年の男性——郭勝が二人の会話へと割って入ってきた。趙忠一派の一人である彼の言に人でも殺せそうな鋭い視線を向けて無言のまま睨みつける。ヒイツと反射的に悲鳴をあげた郭勝は二、三步後ずさってしまったが、その小物つぷりに舌打ちの一つでもしてやりたい気分ではあるものの、彼の言うことは確かに正しい。軍を起こすにしろ、送るにしろ流石に張讓の好き勝手に出来る範囲を超えている。

「私の部下には既に招集をかけた。程なくして集まるであろう。それで、貴殿の方は如何した？」

「へ？ い、いや……その」

「まさかまだ連絡を送っていないとでもいうと申されるか？ ならばこの場にいるよりもやることであろう」

さっさと動け。さもなくば挽き肉にしてやるぞ。殺意に染まった無言の訴えの視線に、郭勝は慌てて部屋の外へ出て行った。その話を聞いていた室内の者達は、何人かが郭勝のように外へと向かっていく。張讓からの追求が自身に来る前に事を為しに行ったのだろう。人が更に少なくなった軍議場を支配するのは静寂である。その静けさが、今の張讓には腹立たしい。

「しかして、張讓殿。随分と冷静さを欠いておるな。普段のお主とは雲泥の差だ」

「……これが慌てずにいられると思うか。反乱軍の規模は聞いたであろう？」

「報告を信じるならば既に数万を超える者達が参加していると聞くが……どこまで信じるべきか」

「全て、だ。私の部下からの情報とも差異がなかった」

「……信じられんな。だが、信じるしか、ないか。それにしても

宦官を誅殺するべし、か。表向きの名目としては聞こえが良いが……儂らとしては笑えんな」

反乱軍の目的。それはつまり言葉通りの意味である。漢の衰退の原因は宦官であり、それを排そうという名目で人を集めている。現実的にこれほどの人数が集まってしまったのだから、現状の漢朝がどれほど弱ってしまっているのかがはっきりとわかってしまった。かつての漢であれば、ここまで簡単に反乱を起こそうという輩もいなかったであろう。もつとも、涼州に送られた中央の官吏が目が行き届かないのをいいことに相当に好き勝手をやり、現地の民や異民族から相当に恨みを買っていた、というのが大きな一つの原因になるのだが。

良くも悪くも十常侍の頂点に立ちながらも派閥争いを行っている二人の、珍しくも皮肉も交えない会話に残された者達と新たに部屋へとやってきた文官は驚き目を見開いていた。それほどにこの二人がいがみ合わない状態が稀有なことを指し示している。やがてしばらくすると更に多くの者達が集まってきていた。召集をかけた張讓の配下や派閥の者のみならず、趙忠の配下の者達までやってきていることが現状の悪さを皆に思い知らしめていく。ここで断っておくことになるが、趙忠とは決して無能な人間ではない。確かに彼の行ってきたことは他の人間からしてみれば褒められたようなものではなく、弾劾されても仕方のないことであろう。多くの者を傷つけ、罷免させ、私腹を肥やしてきた。だが、ただの無能な男が果たしてただの運だけでこれほどの高みにのぼり、維持できるであろうか。例えその性根がろくでもないにしろ、それを為すだけの能力と判断力を併せ持った非凡なる者であることに間違いはないだろう。それだけは政敵である張讓も素直に認めていることでもあるのだが、もつともそれが漢朝にとって是最悪の方向に繋がってしまったというのが皮肉な話だ。

「いやいや。しかし困りましたな。まさか涼州で反乱が起きるとは」「ええ、全くです。これでは一体何の為に護羌校尉を設置して反乱の予防にあたらせていたのかわかりませんな」

「ははは。やはり涼州など放棄すればよかったですよ。さすれば軍事にかかる莫大な費用が浮きますからな。」

しかし——始められた軍議において話されるのは愚にもつかないことばかり。届いた急報を聞いたであろうに、集った彼らの顔に浮かぶのは何故自分たちが呼ばれたのかわからない、という意味での困惑であつた。最初は黙つていた張讓であつたが、次第に組んでいた両腕に力がいっていき、その秀麗な美貌の表情が引き攣つていく。なんだ、こいつらは。何を話し合っている、いや、何も話し合っていないのだ。対岸の火事の如く。自分たちには全く火が及ばない、危険など何もない。これではその程度の認識しか持ち合わせていない馬鹿者達の雑談会だ。ついに我慢の限界にきた張讓が机を力一杯両手で叩き立ち上がる。あまりの衝撃の大きさに、楽しげに話し合っていた官僚達の言葉がピタリと止まり、一体何事なのかと張讓へと視線を注目させた。

「なにを悠長に取るに足らぬ話ばかりしておるかっ!! 今は涼州の反乱を如何に対処すべきか話合う場であらうが!!」

張讓の烈火の怒りにシンと静まり返る軍議場——だが、それも一瞬だ。部屋のあちらこちらから聞こえるのは冷笑染みた笑い声。

「はははは。いやいや、張讓殿。少しは落ち着かれたらどうですかな?」

「そうそう。所詮は異民族どもが起こした反乱ともいえない騒動でしょう。ご心配めされるな」

「我ら漢朝の者がサルなどに脅えては御先祖様方に申し訳がないでしょうに」

駄目だ。ああ、駄目だ。こいつらとは徹底的に、壊滅的にまで噛み合わない。私腹をこやすことだけを目的とした最悪の大馬鹿者達だ。出来ればこの場で全員誅殺して、自分と配下の者達だけでまわしたほうが遥かにまともに機能する。無能な味方は敵よりも恐ろしい。普段から感じていたが、その意味を嫌というほどに実感出来た。

「——少し黙るが良い」

それら失笑を止めさせたのは他でもない彼らの主である趙忠であつた。自身の派閥の長によるまさかの一喝に、慌てた様子の子の彼らを

尻目に、渋い表情を隠さずに机に広げられた地図を睨みつけている。趙忠は、地図とそれに置かれた駒を見ていたが、苛立たしげに舌打ちを隠そうともしていない。やがて顔を上げると彼は真っ直ぐと張讓へと視線を向けて口を開く。

「金城太守と護羌校尉は？」

「……殺された。つまりは既に金城郡は落ちたと考えても良い」

「金城を落とす程の勢力になるまでなぜ奴らは気づかなかつた。そこまでの大きさになるまでに幾らでも対応策は打てただろうに」

「反乱軍の主体となつているのはどうやら北地郡の先零羌だ。それが枹罕や河関の盜賊どもを吸収か協力かわからんが組み入れて、それだけの人数となつた。相当に水面下で動いていたのだろうな」

「幾ら水面下で動いたとしても限度があるだろう、張讓よ。全く気がつかないとは思えんが」

「恐らくは涼州の官僚は気がついていたのではないか？　こちらに報告がなかったのは涼州刺史による情報の封鎖があつたと思えん。もともとが自分達の失策が原因の一つであると悟つた奴らは、己の責任問題になることを嫌って内々に処理しようとしたのだろう。こちらには涼州の情報など入ってきにくいしな」

「ちっ……無能な味方は敵よりも厄介極まりないものだ」

「それはもう私が考えていたことだ。趙忠……お前がそれを言うのか、と私が言いたい気分だがな」

既に敬称すら付け忘れるほどに話に没頭する二人。

「ふん。貴様には貴様の。儂には儂のやり方がある。それより、幾らなんでも金城が落ちるとは……。あそこの城壁はなかなか堅固だったはずだが。籠城の間に他の郡より援軍も送れただろうに」

「……反乱軍の総大将を誰が勤めているか知っているか？」

「いや……先零羌の指導者ではないのか？」

「韓約。韓文約だ」

「韓文約……まさか、何時ぞや宦官不要説を何進に進言した、あやつか？」

「ああ。その人物であつている」

「なるほど。それならば反乱軍が掲げる宦官を誅殺すべし、という文言にも納得は出来るが……その者が大将だからといってどうしたというのだ？」

「韓約は自分の進言を排された後、涼州へと戻った。そして金城にて別駕従事を勤めていた」

ガンッと今度は趙忠が机を力一杯に叩きつける。ギリギリと音がるほどに強く齒を噛み締めながら、地図にのっていた駒を怒りのあまり払い除けた。

「韓約の手引きかつ!!」

「恐らくは、な。刺史の補佐として動ける地位があるならば、それも容易いことであろう。最悪なことに、涼州での韓約の名と人望は普通ではない。それを考慮すれば内応によつて金城は落とされたと見る方が自然だ」

「おのれ……自分の意見が取り入れられなかった腹いせに、ここまでの実力行使にでるとはな」

「……いや。少しだけそれに関しては気になる点がある」

「気になる点、だと？」

「実は私は韓約と会ったことがある。自分の進言が受け入れられなかったことに対して、笑っていた。元々不可能だと思っていながらの意見だったと言っていたな。さして気にした様子もなく、郷里へと戻っていった。彼女には中央への未練も見当たらなかった」

「己の心中を隠していたという訳ではないのか？ 貴様が気がつかなかっただけかもしれんぞ」

「ふん……お前ではあるまいし、私がそれに気づかないと思うのか？ 私が読めない相手は中華広しといえどただ一人だ」

張讓の台詞に、憤怒に染まった顔から一変しどこか呆れた表情となる趙忠。彼女の台詞の中にあつただ一人、という意味に気がついたからだ。意識してではなく反射的にでたであろう言葉に呆れる以外どうしろというのか。かつては全てを無意味だと断じていた無気力な時もあった。ここ数年では自分の政敵として全力で辣腕をふるってくる厄介極まりない張讓が、時折こんな女の部分を見せてくる。そ

のあたりは間違いなくあの男の影響であろう。まあよい、とそれにはあえて触れずに趙忠は先を急がせる。

「それでそれがどうしたというのだ？」

「要するに、不平はあれど、不満はない。そんな韓約が郷里に戻って要職についた。かといって、今更反乱など起こすか、という話だ」

「……考え難いものではある。だが、郷里にもどって意見がかわったのかもしれない」

「確かにその線は捨てられない。あくまでも可能性の一つとして考えてもらいたいだけだが——果たして反乱軍の総大将は本当に韓約なのか？」

「飾り、ということか？ いや、しかし……」

「それに金城を征服した後の反乱軍の行動を知っているか？ 郡の町村は略奪の限りを尽くされているという。老若男女問わず皆殺し。特に女はこれ以上ない辱めをうけてから殺されるとも、な。そんな行為を有智高才の韓約が進めるとも許すとも思えない」

「……なるほど」

「あくまで可能性の一つ、だ。それに今ここでそれについて考えたところで意味はない。総大将が別の人間だったからといって反乱軍がどうこうなるわけではないしな」

張讓の考えに、趙忠は確かにと納得をする。反乱軍は名目上としては宦官の誅殺を掲げている。というのに、州郡の村や町を襲い略奪を行う。これはまだ或いは戦争上許される範囲かもしれない。だが、皆殺しまではやりすぎだ。明らかにその行為は、宦官の誅殺とは筋が違っている。となれば、一体誰が反乱軍の本当の大将なのか。それに何故韓約は飾りとはいえ総大将など引き受けたのか。

「それよりも、趙忠よ。こやつらとの話し合いでは一向に埒があかん。早く討伐軍を組織するべきだ」

「……ああ、そのことか。そろそろだと思いが」

考え込んでいた趙忠は、張讓の呼びかけで顔を上げる。彼の返事に、何のことかと眉を顰める張讓であったが、次の瞬間にはその疑問は氷解することとなった。

「やつほー、趙忠の大將。頼まれていたこと、終わったよお」

気の抜ける声を発しながら、軍議場に姿を現したのは一人の女性——十常侍の夏惲であった。そういえば姿を見ていなかったな、と考えていた張讓に、目線があつた夏惲は軽く手を振ってくる。派閥争いをしていく故に趙忠派の者からは憎々しい目で見られることが多いなか、趙忠派でありながらこの女性だけは負の感情を見せることなく、趙忠張讓どちらに対しても肩入れすることのない行動を取っている。

「速かつたな。それでどうなつた？」

「無事引き受けてもらえたかな。やつこさんも今回はマズイと判断してるんだろうねえ。一も二もなく了承貰えたよお」

「ふん。それだけは幸いか。その他に頼んだことは？」

「ばつちり。兵站から武装、兵の足りない分の募兵まで手配しといたよ」

「貴様の優秀さを他の奴らにも分けてやりたいくらいだな」

「私は別に優秀つてわけでもないけどね。言われたことだけやつてるだけ」

「……それが出来ぬ者もいるのだ」

二人の会話から、まさか——と浮かんだ疑問を解消するように、軍議室の外から一人の女性が足を踏み入れてきた。女性として丁度脂が乗っている魅力的な身体と、豊かな紫紺の髪を頭部の左で一本結びとし、幾つかの髪飾りが歩きたびにカチャツと音を立てている。思わぬ人物の登場に、ざわりつと室内にいた文官達がざわめきが響き渡った。

「急な召集であつたが、よく来てくれた。名だたる武將が出払つてる今貴公がこの洛陽に留まっていた事は不幸中の幸いであつた——

義真将軍」

「いえ。遅ればせながら、皇甫義真……参上しました」

皇甫嵩義真。性格は真面目で、この御時勢にしては珍しくも慈悲深く、人々からの尊敬を集めている。優れた血筋に頼るばかりでなく、文武において努力を惜しまず。詩書や剣、弓、馬術も高い領域で習得

している。現在の漢朝において、三本の指に入る実力を持つ將軍。その彼女を引つ張り出すことに成功した。思わず両手を力一杯握り締める張讓。

「金城の人間は乳飲み子に至るまで皆殺しにされているという。死体はその場に晒され、血の海が出来上がったそうだ。反乱軍のこの暴挙……許すわけにはいかぬ」

「聞き及んでいますわ。全てこの私にお任せ下さい」

洪手の礼とともに跪く皇甫嵩の姿に、大袈裟など思っている官僚はまだ半分近くもいた。張讓及び、その配下。そして趙忠と夏惲、皇甫嵩。これだけの人数しか現状を把握できていないことに眩暈すら覚えるが、この宮中の改革も早めねばならないと思いを新たにするか、話は続いていく。

「では、明日にでも皇帝陛下に任命式を執り行っていたたく。將軍……反乱軍は任せたぞ」

「確かに承りました」

それを合図として、軍議場にいた官僚達は次々と帰っていく。張讓もまた、自身の配下に指示を出して帰らせると趙忠と話をしている皇甫嵩へと近寄っていく。そして、彼女へむかって潔く頭を下げた。その行動に驚き目を剥いたのが皇甫嵩だ。あの張讓が誰かに頭を下げるなど考えもしなかったことなのだから。

「義真殿。この度は討伐軍大将の責、引き受けていただき感謝の言葉もない」

「い、いえ。微力ながら將軍としての任、全うしたいと思っていますわ」

「御謙遜を。貴女程今回の任務に相応しい方もいないだろうに」

張讓と話し始めた為か、趙忠は少し離れた場所にいた夏惲の傍まで行きなやら小声で指示を出す。それを横目で確認した彼女は、さらに一步皇甫嵩へと間合いをつめる。あまりの近さに皇甫嵩の頬がピクリつと引き攣った。張讓にここまで密着される覚えはないし、嫌な予感しかしてこない。

「貴女に一つ頼みたいことがある」

「……なんでしようか」

小声となつた張讓に倣つて皇甫嵩もすぐ傍にいる彼女にしか聞こえない程度の声の小ささで聞き返す。

「もしも涼州にて、李信と名乗る男と出会えたならば保護して頂きたい」

「……失礼ですが、確約はできかねます」

「それは勿論わかっている。あの広い涼州で出会うこと自体奇跡に近い。だからもしも、で構わない」

「それならば……まあ。出来る限りは尽力してみますわ」

「貴女の心遣い感謝する」

それだけを言いたかつたのか、張讓もまた軍議場に背を向けて歩き出した。そんな彼女を見て、皇甫嵩は溜息をつく。公私を挟まないと噂の張讓も所詮女であつたのか、と。傍に侍らせていた少年——李信が涼州に派遣されていることは聞き及んでいる。彼を優先して保護してもらおうなど、女の考えそんなことだ。それほどまでに張讓から愛されている李信のことが若干羨ましくもあるものの、皇甫嵩は準備に向けて心機一転させるべく気合を入れた。だからこそ、気づかなかつた。張讓の本当の意味での求めていたことを。彼女が何故李信を保護させようとしたのか。彼女の真意まで考えるに至らなかつた。去つていく張讓が、思わず漏らした本音。本心。それは誰の耳にも届かなかつた。

反乱軍を喰い尽くす前に、保護して欲しい。

「……頼むぞ、義真殿」

張讓と皇甫嵩。決定的な差異に気づかぬまま、彼女達は別れてしまった。

燃えている。人が作り上げた道が、家が、城が、歴史が——全てが燃え上がっている。遙か後方にて黒煙をあげながら燃え続けている金城の町々を背後に数万の軍勢が闊歩していく。その軍の丁度中間の位置にて馬を走らせているのは韓約文約である。周囲は腕利きの兵で固められており、彼女を害すことは実質的に不可能だ。問題は、総大将を勤めているはずの彼女ではあるが、普段とは異なり明らかに憔悴している。目に力もなく放つ圧も鳴りを潜めていた。それを見ていたのか、馬を並走させている男が彼女へと近づいていく。「どうしましたかな、韓約殿。そのような顔をされては配下の者達も心配されるでしょう」

「……白々しい。お前がそれ言うか、伯玉よ。如何に我とて我慢の限界というのも存在するぞ」

「いやはや、怖い怖い。もしも総大将を降りたければ好きにしても宜しいですよ、出来ればですけどね」

「……」

韓約は無言のまま隣の男を睨みつける。その男は眉目秀麗な細目の優男であった。だが完全な漢の民と言うわけでもない。何故ならば彼は湟中義従と呼ばれる、漢王朝に帰順した異民族。その中でも名が知れ渡っている羌族の一人。即ち——北宮伯玉。それが彼の名前であった。反乱軍を指揮する副将の立場に座し、軍を実際に指揮する將軍の一人。いうなれば反乱軍における大幹部の彼に向ける大將の目を憎悪すら籠っている。

「……私の妹は、家族は無事であろうな？」

「勿論ですよ。貴女が僕を裏切らない限りは、彼女達の安全は保証しますから」

韓約は腹が煮えくり返る思いでその返答を聞く。

馬騰に金城に返された後、しばらくは通常の生活をしていた韓約であつたが、ある手紙が彼女の元へと送られてきた。それは反乱軍を率いたこの男によって韓約の家族及び親類縁者は人質に取られてしまったという内容であつた。そのため、韓約は北宮伯玉の命令通り、金城を落とすために力を貸して、挙句の果てには反乱軍の総大将という役柄まで押し付けられてしまったというのが現状である。

「しかし、韓約殿はやはり随分と皆に慕われているようで。いやいや、随分羨ましい話ですね」

「……」

もはや口も利きたくないという姿に、肩をすくめる北宮伯玉。

元々は羌族に対して彼が反乱を唆し軍を起こさせたのだが、考えた以上に兵が集まらなかった。これでは漢王朝を崩すなど夢のまた夢。そのように考えた彼は、頭に人望ある者を据えることによって人員不足を解消しようとした。候補としては馬騰もあがつたが、生憎と彼女の一族は皆が怪物揃い。そう簡単には人質にすることもできなかつたし、馬騰自身も反乱を起こすことに賛成していなかつたため、次点として韓約に白羽の矢が当たった。だが、彼女もまた反乱には後ろ向きな立場だったため人質をとることによって言いなりにしている状況であつた。

「貴女には感謝しかありませんよ。何せ、手下八部まで我が軍に参加して頂けたのですから」

韓約が総大将を勤めているということが広がると、多くの漢民のみならず異民族まで参加を申し出てきた。特に、手下八部と呼ばれる勇将八人の参加も大きい。楊秋、侯選、張横、程銀、成宜、李堪、馬玩、梁興の八人で構成された涼州でも指折りの猛将であり、それぞれが軍閥の長でもある。彼らの参加によって、反乱軍の勢力はさらに強大化

して、もはや涼州で彼らを止める事はできないほどに拡大してしまつた。

「彼らを指揮し、漢王朝を潰す。そして——僕が王になる」

くすくすつと嫌な笑みを浮かべる北宮伯玉に、無言のまま韓約は馬の速度を上げてはしらせた。

なんと無様なことか。そして愚かか。人質を取られたくらいでこのような事態に陥つた自分の間抜けさに腹がたつ。だが、いまはどうしようもない。人質を解放する術も今の自分にはないのだ。方法はひとつだけ。それもまた人頼み。自分の情けなさに涙が出てくる。

それにもはや自分は、韓約文約は詰んでいる。大々的に韓約が反乱軍の総大将だと広まってしまった。如何に脅されて引き受けたのだとしても、許されるはずがない。反乱が失敗すれば、まず間違いなく死罪となるだろうし、北宮伯玉とは違ってこの反乱が成功するとは夢にも思っていないし、漢王朝を打倒するのは不可能だろう。成功すると信じて悦に浸っている馬鹿もいるが、まずせめて数年後でなければ成功の兆しすら見えていない。これは破滅の道だ。だが、逃げ出せない。家族のこともあるが、韓約を信じて反乱軍に身を捧げた多くの人を裏切れない。それに、自分は既に許されざる大罪を犯したのだ。家族のためなどと逃げるつもりはないが、彼女が確かに金城郡を蹂躪させる切っ掛けを作つたのは確かなことだ。そして、行われた殺戮と凌辱の嵐。それを目を逸らさずに見ていた。見なければならなかった。自分がその原因となつたのだ。せめて目に焼きつけておかねば、と思つた。それだけの罪を背負つてしまつているのだ、韓約文約という女性。もはや、自分には助かる方法もなければ、生きていて許される筈もない。ただ、死のみが自分に与えられる罰である。

「ああ……馬騰。騰よ……家族を頼む」

擦れた一切の希望を持ち得ない韓約の声が漏れ出でる。空を見上げれば長年の友人であり、義姉妹の契りをかわした馬騰の姿が浮かび上がる。そして、もう一人。自分を罰してくれる可能性のある人物。この破滅的な反乱軍をなんとかしてくるのではないか、という淡い希望を抱かしてくれる少年の姿。一度会っただけだというのに。そ

う思わせてくれる一人の少年の姿も浮かび上がった。

「……李、信。ああ……李信よ。我を……」

殺してくれ。

声なき声を響かせながら、反乱軍はひたすらに東へと進んでいった。



「——伝令い!! 韓約様からの伝令だあ!!」

馬騰が拠点とする街の館に、馬を走らせた一人の男が駆け込んできた。その慌てよう、相当に急いでやってきたのだろう。息を切らせて馬から降りると、館の入り口へと駆け寄っていく——。

「そこまでだ」

ピタリつと伝令の男の足が止まる。疲労とはまた別の震えが体の奥底から湧き上がってきた。気がついたときには目の前には一人の少女が立ち塞がっており、自分の首下に十文字の槍の穂先が突き刺さるかどうか寸前のところで止められていた。身体が凍ったかのように身動きが取れない。カチカチと音がすると思えば、自分の歯が震えから噛み合わされていることによく気づいた。茶色の長い髪を後頭部で纏め垂らした総髪。年齢的にまだ十代半ばであろうが、その

年齢にしては女性的な体つき。キリつとした大きな瞳と一般的な女性と比べれば大きめの眉。全体のバランスが良く、十二分に見目麗しい美少女だと断言しても構わない。そんな少女が槍を片手に男の足を止める姿は色々な意味で目を引いた。

「書簡は受け取る。母様にはあたしから届けておくからもう戻るといい」

「え？ 母様？ まさか、馬騰殿の……」

「ああ。あたしは馬超。納得してもらえるか？」

「貴、貴公が錦、馬超!!」

馬超孟起。馬騰の娘という立場でありながらもまだ若輩ながら槍の腕前は既に涼州一とも褒め称えられる若き英傑。その力量はかの英雄韓信、黥布にも匹敵するという武勇を持ち、異民族である羌族にも心服されている。確かに若いとは噂で聞いたものの、これほどとは伝令の男も思ってもいなかった。これ以上これほどの相手にごねるわけにもいかず、持っていた伝令の書簡を馬超へと渡す。それを確認していた馬超だったが、ふとその眉を顰める。

「封が割れているんだけど……どういうこと？」

「あ、ああ……すまない。一度落馬してしまっただ。その時に割れてしまったのではないかと……」

「ふーん。まあ、いいや。伝令、ご苦労さん」

十字字槍を引くと、槍と書簡を片手に館へと戻っていき、母である馬騰の部屋へと戸を叩く。入れ、と返答はあった馬超は中へと進むと馬騰に持っていた書簡を差し出した。

「……誰からだ？」

「あーっと……韓約様からだって」

「約？ 反乱軍の総大将になったとか噂に聞いたが、あいつも面倒な噂を流されたものだな」

「母様はアレってやつぱりただの噂だと思ってる？」

「まあ、そうだろう。約が反乱軍などに籍をおくはずがない。ましてや、総大将などいわずもがなだ……おい、超。封があいているが、お前が開けたのか？」

「ち、違うよ。あたしじゃない!! 伝令の者がなんか落馬したからその時かもって!!」

書簡を勝手に見たのか、と睨まれた馬超は慌てて首を横に振って身の潔白を訴えた。その姿に、どうやら本当に見ていないのかと判断すると書簡を開き目を通す。書簡の書かれている文字を目で追って行く馬騰であったが、次第に彼女の顔が強張っていく。これはまずい、と娘である馬超は空気を読んでか退室しようとするも――。

「やってくれたな、伯玉めがっ!!」

ドゴンつと猛烈な破壊音と凄絶な怒号が部屋中に響き渡った。遅かったか、と後ろを振り返れば怒りのあまり呼吸を乱した馬騰が、立ち上がり足元には粉碎された机が転がっている。自身の近くに飛んできていた書簡を拾って読んで見るものの、内容的には憤慨に至るまでもないもの。ようするに、反乱の総大将になったからお前も力を貸してくれ、というものだ。重ねて言うことになるが別に馬騰がここまでする内容では――と考えてはたつときづく。

「伯玉? だれだっけ?」

どこかで聞いた覚えがあるが思い出せない。それに、そんな人物の話題はこの書簡には一字も記されていないではないか。

「北伯玉……あのくされ外道のことだ」

「あー、あー、あー。確かいたなあ、湟中義従に。敵対した一族皆殺しとかやってたから良い印象は全然ないけど。で、そいつがどうしたっていうの?」

「……封が割れていたのは事故ではあるまい。恐らくは伝令の男が中を檢めたのだろう」

娘の疑問には答えようとせず、見当違いの話しをしだす馬騰だったが、馬超はそれに茶々をいれるような真似はしなかった。母がこのような話をしだすには必ず理由があるからだ。

「内容を知られぬために、約は暗号を使った。私とあいつしか知らぬ、通じぬ暗号をな。この文章の中に含まれたそれを読み解くと、伯玉の小僧が反乱軍を裏で操っている。飾りの大将として、約は家族を人質に取られているということだ」

母が少しは冷静になつたかと思つたが、逆だ。怒りが振り切つてしまつて冷静に見えるだけだ。ヤバイ。本気でマズイツと馬超は冷や汗をかく。ここまであの馬騰が怒りを露にしたことなどほとんど目にすることがなかった。

「馬を引け、超よ。そして兵を纏めよ!! 我らの友を侮辱し陥れた罪、あの小僧に命をもつて贖つてもらうぞ!!」

上着を羽織つて室内から出て行くこうとする馬騰に、恐る恐る手をあげてその足を止めさせた馬超は、首をこてんつと横に倒しながら確認するように問い掛ける。

「えつと……反乱軍に敵対するってことでもいいのかなーって」

「それ以外にどう私の言葉を受け取つた」

「あたしたちは兵をかき集めて精々が五千くらいだけど、反乱軍は数万をこえているっていうけど?」

「それがどうした。我ら馬一族を怒らせたことを後悔させてやる。お前は不服か、超よ」

ぎろりつと睨みつけてくる母に、首を横に振つて不敵な笑みを返す馬超。十倍以上の敵と相對するといふのに、彼女は確かに笑っている。凄絶に、凶悪に、荒々しくも美しく。彼女には一切の不安も心配の色もない。この少女もまた怪物。あらゆる敵を打ちのめし、討ち滅ぼす戦いの天才。そんな彼女は戦いへ対する喜びと興奮を隠そうともせず、槍を片手に天へと突き上げた。

「何言ってるんだか、母様。あたしはね、数万じゃ足りないって言いたい。反乱軍の奴らに————本当の西涼の流儀を教えてやるよ」

西涼の雄。馬騰率いる馬一族が、反乱軍への進撃を静かに開始し始めた。

第18話：漢陽紛糾

漢陽郡冀県の郡城。傅燮が太守を勤めるその地には、多くの民が押し寄せてきていた。周囲の村や小さな町の民はこぞってそれぞれの住んでいた場所からこの街へと難民が如く逃げ込んできていた。それは反乱軍による金城の凄惨な虐殺を知られば当然のことであり、傅燮もまた彼らを受け入れた。幸いなことに、この街は漢陽の要所として豊富な兵糧があり、涼州の武器庫としての役割も担っていたからだ。逃げ込んでくる民とは正反対に商人達や旅人などは関わりあいを避けるべくこの地を避けて通っていた。

なんと言っても反乱軍の行いは、これまでの漢王朝の歴史でも類を見ないほどの虐殺と略奪を繰り返して突き進んでいるからだ。彼らの通った後には草一つ生えていない焦土となった地のみが残される。それを聞けば、民は逃げ出し、商人や旅人も近寄る筈もない。そんな反乱軍が近づく中、今まさに郡城の謁見の間にて喧々囂々とした軍議が行われていた。参加しているのは官僚だけではない。太守傅燮、補佐蓋勳、県令董卓に県丞の賈コウ。その他全ての文官に加え、張遼、華雄、胡軫や高順——無論李信といった者達までもが参集されていた。これだけの人数での軍議などこれまで行われたこともなく、これが初めてであったが、それも無理な कारण 話だ。現在話し合われていることは、反乱軍へどう対抗するべきか、である。

「反乱軍の数は割り出すことが出来たのか!？」

「正確な人数は不明ですが、物見によるとおよそ六万にも及ぶのとです!！」

「六、六万!? 馬鹿な、以前の報告ではもっと少なかった筈では!？」

「手下八部全ての将が参加したことによって、更に兵数が増加したのではないかと」

「ぐっ……馬鹿な。なんという数か」

「しかも、多くの異民族のみならず、漢民もまた反乱軍に参加しているとのこと!!」

反乱軍の兵数に愕然とするのはこの場にいる全ての人間であり、賈☒や傅燮であってもそれは例外ではない。顔には出していないものの、横顔から滴り落ちる珠の汗が彼女達の内心を示していた。

「それで反乱軍はどこまで進んでいるの!?!」

凄まじい声が響き渡る中、賈☒が声を張り上げ反乱軍がどの位置まで来ているのか確認を取ろうとする。一瞬静まり返った謁見の間ではあったが、その時激しい音をたてて一人の男が部屋に慌てて入室してきた。洪手とともに跪き、顔中汗だらけの様子ではあるが、それを拭く余裕もなく傅燮達に向かって報告を飛ばす。

「狄道の城、陥落との連絡がつ!!」

シンと再び静まり返るのは、それが衝撃の報告であったからだ。狄道といえば、既に自分たちがいる場所から目と鼻の先。後数日どころか二、三日もせずに、六万という大規模な軍勢であろうとも辿り着くことは必至。もはや一切の猶予も余裕もない彼らではあったが、一体どうすればいいのか未だ意見はまとまっていない。

「……私は別の地域へと撤退すべきでは、と考えます」

「しかし、今現在のこの街の民をつれてどこへ逃げるといふのだ!?!」

元々の民に加えて難民も合わせれば四万。そのうちの半分が女子供に老人だ!!」

「反乱軍を構成するのは騎馬民族が多い。奴らの行軍速度を考えれば必ず追いつかれる!! さすれば後は地獄だぞ!!」

「ならばどうするといふのだ!! まさかこの城で籠城を行うといふわけではないだろうか!?!」

「そ、それは……」

「確かに兵糧はある!! 武器もある!! だが、肝心の扱う兵士が圧倒的にたりないのだ!!」

この時代の兵役制度は大体であるが四種類に分別することが出来る。一つ目が戸籍に登録された民を召集して兵士とする徴兵制。これは遙か昔から変わらず行われている制度で、かつての李信の子供の

頃にも村の仲間がよく徴兵されていた思い出がある。二つ目が軍人の家系による子を兵士とする世兵制。三つ目が罪人の罪を免じる代わりに兵士とする謫兵制。四つ目が賃金払いによる兵士を雇い入れる募兵制などがあった。この街には世兵制や給料を払って召し上げている募兵制などによつて兵士をまかなっているのだが……。

「足りないのはわかってる!! だが、戦うしか他に道はない!!」

「そうだ!! 反乱軍による暴虐の嵐は聞いておろう!! 老若男女問わず皆殺しだというのだ!! この地でそんな馬鹿な真似させてなるものか!!」

「現実を見る!! こちらには正規兵が四千しかないんだぞ?! それで一体どうしろというのだ!! お前たちはそれでもどうにかなるとも言うのか!?!」

この街にいる兵士は他の町より多いといえどおよそ四千。それでもその人数は破格だ。さらに滅ぼされた街々から逃げ延びてきた兵士が二千。あわせて六千の兵士しかない。つまり、傅燮軍六千対反乱軍六万の戦いとなるわけだ。戦力比にすれば十倍。李信や華雄が最近戦っていた異民族との戦力比も十倍などさらにあったが、それとは比較する人数の桁が違う。

義憤にかられていた者達の勢いが弱まると、撤退を押し出す者達が出た。先程からこれの繰り返しだ。全く意見が出ないよりはよほどましであるのだが、一歩も先に進んでいないというのもまた洛陽で行われた軍議と同様であった。もつともさすがにそれはこの地の文官達にとつては失礼な物言いかもしれない。

文官達が騒ぎ立てるなか武官組みの者達も渋い顔をしている者が多かった。彼らは軍人だ。戦う者だ。生死を賭けて争う戦人である。だが、それでも兵士六千で六万の軍勢をどうにかしろと言われても——はつきりいってどうしようもないという答えしか返すことが出来ない。野戦におけるここまでの数の違いは致命的だ。しかも相手の多くは騎馬民族。個の能力でも圧倒的に劣っているであろう。

ならば、籠城はどうか。それもなかなか厳しい話だ。確かに攻城

戦においては守り手が有利となる。攻め手は三倍の戦力があるなどとは良くいったものだ。だが、それは籠城するほうに十分な戦力があつてこそだ。六千の兵士ではこの街を守るには絶対的に人数が足りていない。一部を崩されればそれを補う兵力がないのだ。それに籠城をしたとしてもその勝利のためには援軍が必要となる。だが、今現在他の郡や県からの援軍は期待できない。自分たちの街を守護することで手一杯ということもあるが、反乱軍の進撃目的はあくまでも漢朝の首都。そこへ至るまでの道から大きく逸れている街々には今のところ兵を送っていないのが現状だ。放つておけば通り過ぎる災禍へとわざわざ救援に来る者達がどれだけいるだろうか。一応は救援要請をしているものの期待できないというのが皆の本音であつた。

口論が続く中、ふうつと深く息を吐いた傅燮。彼女は周囲に侍っている蓋勳、賈逵、董卓へと一度視線を向ける。三人ともが頷いたのを確認するといきおいよく立ち上がり手を振りかざした。

「反乱軍への徹底抗戦を漢陽太守傅燮が命じるっ!! 今更逃げて多くの無辜の民の命を無駄に散らすことは許さない。我ら一同の全てを持って、この城を守りきるのだ!!」

傅燮の命とともに、ざわついていた官僚達は一斉に洪手とともに膝をつく。今の今まで撤退を訴えていた者達でさえも覚悟を決めて傅燮とともに戦うことに異論はないように見えた。彼女が如何にこの涼州で慕われているかがわかる光景でもあつた。

「幸いにもこの街の門は強固だから簡単には壊すことはできない。城壁も高く、反乱軍の長梯子も届きにくいはずです」

賈逵の説明に頷く文官達。賈逵の説明どおり、この街は籠城するにあたってはかなりの優良な場所でもあつた。城壁、城門の二つがそう易々と突破されないのだから、その報告には胸を撫で下ろす。

「あー、賈逵つち……ん。賈逵……せやけど、反乱軍も幾つかの攻城戦をこなしてきてるやろうし。それなりの道具をもってるはずや。多分城壁には上つてこられると思うで」

「そこは城壁の上の乱戦勝負に持ち込むしかない。それに守城戦というのはそういうものでしょ?」

「まあ、そうなんやけどなあ……誰も言わんけど、ちと厳しいで」

「……兵が足りないってこと？」

「そうや。さつきも言うてたけど、うちら正規兵が四千。で、くたびれた兵が二千。あわせて六千やで？ はつきり言うけど幾ら城壁が高い言うても、そこら中から敵兵がよじ登ってくるで」

張遼の現実を見た発言に、幾度目かの静寂が謁見の間を覆いつくす。如何に傅燮の命令で徹底抗戦を選ぶのだとしても、兵力差自体は如何ともしがたい。そしてそれを埋めなければ籠城すらもままならない。張遼の言葉に、賈コウは何かを言いた気にながら口を開き——しかし、それは言葉にならずに消えていく。横目で董卓の方をチラッと見るものの、賈コウは後一步を踏み出すことが出来ないかのようであつた。兵力差をどう補うべきか、誰もが思考し考えるものの答えが出ない。嫌な空気が充満する謁見の間にて、どこか呆れた溜息の音が聞こえた。誰かと思えば——李信その人。彼がパシンとおざりな洪手とともに口を開く。

「傅燮殿。発言をお許し下さい」

「……どうぞ、李信殿」

「兵は六千。なるほど、これは絶対的に増減はない。しかし、兵数を揃えるならば方法はあるかと」

何を言っているんだこの若造は。そんな視線が李信の全身を貫いていく。その方法がないから、こうして意見を出し合い、しかしこの静寂を作り出しているのだというのに。肝心の李信は一切気にすることもなく、ある一人の文官を一度見る。

「先程そちらの方が言つたかと思いますが。この街には難民を含めて民四万がいる、と。これで此方は兵六千と合わせれば四万六千。十分に籠城戦になるかと」

李信の発言に空気が凍つた。誰も彼もが理解できない。したくない。武官としても人としても最低の台詞であつた。既に徴兵制が廃れ始めているこの時代において、民を戦わせるといふ発想をあつさりとしながら、さらに一度も戦場にたつたことがない民をこの絶望的な戦いに狩りだそうとするなど正気の沙汰ではない。

「き、貴様あ!? 気が触れたか!! 一般の民を兵士にしたてて戦うだと!」

「戦を舐めるなよ、小僧!! しかも民四万の半分は女子供老人を含むというではないか!! お前は我らを馬鹿にしているのか!!」

非難が轟々と謁見の間を支配する。あまりの大きさにキンツと耳が痛くなるほどだ。胡軫など反射的に自分の耳を手で押さえてしまった。それら全てを一身に浴びながら、李信はふっと笑った。

「——黙れ、馬鹿共。戦を馬鹿にしているのはどちらだ!!」

数十人からなる怒号を、一喝で消し去る李信の咆哮。噴出するあまりの圧力に室内を満たす突風が吹き荒んだ。仮にも命の危険を何度も乗り越えてきた文官達や、多くの武官ですらもその場に尻餅をつき呆然と愕然と、そこに現れた怪物を見上げていた。

「徹底抗戦を決めたんだろが!! ならば俺たちにできることは今ある中で最善を尽くして戦うことだ!!」

「……永政殿。貴方の言いたいことはわかる。守城戦は後方支援が重要視されるから戦の素人がもつとも加わりやすい戦場だしね」

賈☒がまるで李信を補う形で言葉を紡いでいく。その表情には先程とは変わらさずどこか痛ましさが見て取れた。

「ああ。負ければ兵士は勿論、市民も皆殺しになるんだろう? ならば彼らを使わない手はない。それに野戦ならば難しいが、守城戦ならば民兵の力も役に立つ。全てを使ってもこの窮地を乗り越えるしかない」

「だけど一つだけ問題がある。ううん……これが唯一にして最大の問題。戦術、戦略なんでももの前における前提。つまりは戦意。民のままだは駄目。全員が兵士にならないと」

そうだ、と誰かが声を上げた。賈☒の言うとおり頭数は揃っても、彼らに戦意がなくなれば戦いにもならない。戦う気持ちすらなくば、戦力どころか邪魔になるだけだ。そういった意味では、今現在のこの街にいる民では戦力にはならない。全てを失って逃げ込んできた難民と、反乱軍の虐殺を聞いて、震えているだけの者達。果たして彼らを如何

にして兵にまで戦意を高めるのか。

「それが不可能に近いことは解っている。だが、他に方法も手段もない。それならば、どれだけか細い道であろうとも、そこを突き進むしかないだろう。それに、兵士でなければ戦えないというのなら、それを為すのが上の者の役目ってやつだ」

俺がやってもいいが、と平然と言い放つ李信に誰もが開いた口が塞がらない。なんと大法螺を吹く少年なのだ、と誰しもが思いながら――それでもこの李信ならばそれを為すのではないかという淡い希望が胸の奥に浮かんでくる。ただの少年ではない。彼の背後に浮かぶは、何十何百万という兵士の幻覚。本来ならば見えるはずのないそれをこの場にいた全ての人間が確かに見ていた。

「だが、それはあんたの役目だ……傳燮」

「……」

自分へと語りかけてきた李信を、傳燮は全てを受け入れるかのような静かな瞳で見つめている。まるで彼がそんな発言をすると悟っていた、とでもいふべき姿であった。

「反乱軍は殺戮と凌辱と破壊の限りを尽くしている。あんたの血と汗を流して作り上げてきたこの地の平和を、平穏を、全てを蹂躪しようとして進撃している。敵は屈強だ。民兵など相手にもならないだろう。戦えば多くの血が流れ、それ以上の民の命が失われる」

李信の淡々とした発言に、これから起きるであろう悲劇に、周囲の文官も武官も恐れにも似た表情を浮かばせる。

「それでも。それでも、だ。この地を愛したあんたなら、民の気持ちを動かせる。この地の民を愛したあんたなら、民の戦意を燃え上がらせられる」

この街を救えるのはあんただけだ。最後に短く締めくくった李信に、傳燮は椅子に深く深く座り込み天上を見上げた。どこか疲れたように、しかしどこか覚悟を決めたが如く。謁見の間にいる全ての配下の視線が一身に浴びせられるのを感じながら傳燮は小さな吐息を漏らした。

「……少し、考えさせて」

彼女の返事を聞きながら、それでもその場に集っている文官武官は感じ取っていた。既に傅燮は自分の進むべき道を決めている、と。後はそれを為すための覚悟を決めるための時間が必要である。言葉にせずとも皆が皆悟っていた。

「では、後はあんたたちに任せる。俺は少しやることがあるんでな」

この状態を作り出した原因が、平然とそう言いながら謁見の間を出て行った。慌てて追っていく華雄と高順、胡軫達を、呆然と見送る官僚達。あまりに自然に出て行くものだから、止める暇もなかったようだ。どうするべきか、これから何をすべきなのか、迷っている皆を尻目に、この場から飛び出した人物が一人。賈文和その人である。謁見の間から駆け出した彼女はもつれそうになる足を動かし、どんどんと離れていく李信達の背を追いかけた。そして思いつきり息を吸い――。

「――待って!!」

決死の想いを込めて呼び止めた。ピタリつと足をとめた李信が振り返る。呼び止めた人物が予想外だったのか、驚いた表情を一瞬間見せる彼だったが、何か用か、と短く返答をする。今は一分一秒が惜しい鉄火場だ。それを理解しているであろうに、肝心の賈は何かを言いたげにしてはいるものの、肝心の言葉が出てきていない。何度かそれを繰り返していた賈ではあったが、遂に腹を括ったのか震える声で自分の本心を口にする。

「…………ごめんな、さかい」

謝罪とともに賈が頭を下げた。あの賈文和のその姿に、華雄と胡軫が信じられないものを見た、と目を白黒させる。一体何故彼女がこんな謝罪をしているのか、それが理解できずに李信と賈の二人を交互に黙って見守ることしか出来ない。

「何を謝る必要がある、賈文和?」

「…………ボク。ボクは…………ボクが言うべきだった。ボクが言わなくてはいけなかった」

とりとめもないその言葉に、華雄達は先程の李信の発言のことだと悟った。民を兵士とすること。民兵として戦わせるという意見。そ

れを賈☒は自分が意見として出さなかったことを悔いているのだと。「何を気にする必要がある、賈☒よ。そもそもこの状況で民を兵士として戦わせるなど考え付く方がおかしい」

「それでござえますよ、賈☒殿。李信殿の発想がちよつと普通じゃないだけですよ」

慰める二人に向かって、賈☒は違う違うといわんばかりに首を横に力なく振る。

「思いついていた。考え付いていた。どれだけ思考しても、それしかないってボクもわかっていたんだ。でも……言えなかった」

賈☒は語る。自分も李信と同じ発想に至っていたのだと。そしてそれしか方法はないのだと理解もしていた。だが、そのことを口に出すことは出来なかった。何故ならば――。

「民を戦わせる。それは、それは……月が悲しむ。あの娘を傷つける。優しい娘だから」

そして、そんな作戦を出した自分は董卓にどんな目で見られるのだろうか。蔑まれるかもしれない。恨まれるかもしれない。憎まれるかもしれない。それを想像しただけで、自分の存在意義が失われるに等しい恐れに襲われた。賈☒文和にとって、もつとも大切なのは董卓だけだ。それ以外は全てが無意味。彼女以外欲するものもないし、得ようと思うものもない。故に、例えどれだけ自分勝手に身勝手であろうとも、李信のように民を戦わせるという提案を出せなかった。

「永政殿。貴方が言ってくれた。ううん……貴方に言わせてしまった。ボクが逃げたばかりに。だから、ごめんなさい」

自分は最悪だ。最低だ。友から嫌われることを怖れて全てを台無しにすることであった。賈☒にとって董卓は全てだ。だが、悲しいかな董卓にとっては、賈☒は大切なものの一つでしかない。彼女は全てを愛している。民も上司も同僚も、あらゆるもの全てを慈しみ、愛する。全てを包み込む優しさと器を持っている彼女だからこそ、賈☒も友人として董卓を愛しく思っている。そんな彼女の愛するものを見捨てる行為をしかけていた。先程の軍議の最中の董卓の顔を見て、ようやくそれに気づくことができた。ならば、後は董卓の為にも自分

は最善を尽くすのみ。この叡智、全てをこの戦の為に振るって見せよう。

一切の余分が含まれていない純粋な謝罪を受けた李信はというと、ガリガリと頭を乱雑に掻き乱す。別に賈☒のことを考えて言ったわけでもないし、彼女の代弁をしたわけでもない。これしか方法がないと判断したから提案したただけだ。だが、賈☒が同じ考えに至っていたことを聞かされて驚きと、今回の戦に関して小さくはあるが光明が僅かに見えてきた。

「今回の戦は正直な話、かなり後がない状態だと俺は考えている」

「……うん。ボクも同感だ」

実際のところ、李信が兵六千を率いて反乱軍に局地戦を仕掛けることができれば、反乱軍を壊滅とまではいかなくても足を止める程度のこととは可能だ。生き残ることを考えず兵六千を犠牲にすれば、反乱軍の総大将の首をあげることも可能であろう。そんなことを言い出せば何を馬鹿な、と思われるかもしれないが、それを為せるのが本能型の畢竟である李信という名の大將軍だ。もつとも、肝心の兵六千を自分に預けるといっても絶対に許可は下りないことはわかりきっている。ならば、先程もいったが現状の手札でどうにかしなければならぬ。

「賈文和……お前に聞きたい」

「答えられることなら何でも答えるけど……何？」

「先程は俺の見立てで出来るといったが、実際に長い付き合いのお前から見て太守は出来ると思うか？」

民を兵士にできるのか、との問い掛けに賈☒は一瞬も考えずに頷いた。

「勿論。傅燮様なら必ず」

「ならば籠城したとして、援軍の見込みは？」

「既に出せる相手には全部援軍の要請を送ったよ」

「……速いな。何時の間に？」

「二日前。ボクの予想ではほぼ全ての郡県からの援軍は期待できない。できるとすれば一つだけ」

「一つか……なかなか厳しいな。ちなみにお前の予想だどどこが動いてくれる?」

「恐らくは馬騰様が」

賈☒の予想は、李信にとつての予想外の返事であった。何故ならば、反乱軍総大将の韓約の友である馬騰がこちらに味方するとは思えなかったからだ。それが表情にでていたのだろうか、賈☒が予想の根拠を語り始めた。

「これは完全にボクの予想でしかない。でも限りなく正解に近いものだと思う。反乱軍の総大将は別にいる」

「……その理由は?」

「まず一つ目。先日ここを訪れた韓約様は反乱軍の招集を拒否しているといっていた。油断を誘うため? そんな馬鹿な。わざわざそれをボク達の前で言っていく意味はない。二つ目、馬騰様が反乱軍に参加したという話は聞いていない。義姉妹の契りを交わしているあの二人ならば、手を組んでいたらさっさと合流している筈。三つ目、韓約様が総大将を勤めているならあんな暴虐を絶対に許しはしない。四つ目、今現在反乱をおこしても絶対に鎮圧される。漢王朝はこの程度で倒れるほどまだ弱まっていない。それを知っているながら韓約様が反乱を起こすはずがない」

この間初めて会った時の韓約の印象は李信にとつては正直随分とおかしい人間しかなかったが、他の者達からの評価は随分と高いらしい。その彼女が負けるとわかっていている勝負に出るはずがない。韓約の人望を利用する為に反乱軍の飾りの大将とした。そう考えた方がしっくりとくる。賈☒の説明に、おもわず成る程、と納得する李信達。韓約が本気で反乱軍の長として動いていないのならば、馬騰がそれを止める為にこちら側の援軍要請を受け入れてくれる可能性は高い。

「お前の予想はわかった。だが、もう一つ援軍がくると思うがな、俺は」

「……もう一つ?」

「ああ。漢王朝からの援軍だ」

「それは……」

今回の反乱は当然鎮圧しなければ中央の者達もまずいとは思っているはずだ。だが、果たして中央がそんなに早く討伐軍を組織するだろうか。今までの経験上難しいのでは、というのが賈☒の本音だった。

「張讓がいるからな。あいつが嫌といつても援軍を送ってくるはずだ」

十常侍の筆頭張讓。とんでもない化け物染みた噂しか聞いたことがないが、李信がそれだけの評価をする相手。不確かではあるものの、それならば期待が出来るというものだ。そこで会話も一段落ついたのか、李信が賈☒へと背を向ける。

「今は相手の戦力を削っていかないと何ともならない。とりあえず傳變殿の準備が終わるまでに先遣隊を潰してくる」

「つ、つぶ……？ え？ 潰す？ で、出来るの？」

「多分な。華雄達とその隊は連れて行くけどいいな？」

「う、うん……。てつ、えええ？ 本当に!？」

「無理そうならそのまま帰ってくるから心配するな」

絶対に不可能なことを出来て当然と言わんばかりの軽く言ってくるのだから、賈☒としても反応に困る。冗談なのかとも思ったが、李信の様子的に冗談ではないらしい。他の人間ならば死んでも止めるのだが……何故か彼の場合は止めるという行動が思いつかない。逆に実際にやってのけてしまうのではないかと微かな期待すら覚えてしまう。

「籠城での策は任せる。俺なんかが言うのもお門違いかもしれないが……素質はあるぞ、賈☒」

「へ？ あ、ちよ……ちよつとお!？」

不意打ち気味に初めて呼ばれた名前に、ドクンと一度強く心臓が胸を叩く。珍しくも混乱の極みに達した賈☒が頭の中を整理しきれないうちに、李信は華雄達を伴って姿を消してしまった。あつと言う間に賈☒のことも気にせずに、自分たちの出来ることを行うため出発していった彼らの姿に、何だよもう……と短く漏らした賈☒であったが、未だおさまらない激しい動悸に自分は何か病気になってしまった

のではないかと心配しながらも、これからの守城戦への策を練るため
謁見の間へと引き返すのであった。



狄道の城を反乱軍の本隊が落としたその頃。漢陽郡冀県の郡城へと傳燮や賈𡵗の想像を超える速度で迫り来る一つの部隊があった。手下八部と称えられる涼州でも名を轟かせる勇将。韓約の旗の下に集った傑物が一人——李堪。彼が率いる総勢五百からなる一団が、斥候の役目を担って漢陽郡へと侵入してきていた。彼らは途中にある村や町を攻撃することもなく粛々と目的地である郡城目掛けて馬を走らせる。李堪は自分の配下で特に優秀な五百の兵を連れて斥候の任を自ら志願した。というのも涼州にて生まれ育った彼は、傳燮、蓋勳という人物を知っていた。

漢朝において腐った人材が多いなか、彼女達は本物だ。本物の戦士であり、優秀な戦略家でもある。まともにやりあえば相当な苦戦を強いられる相手なのは戦う前からわかつていることだ。反乱軍の目的は漢王朝そのもの。宦官を誅することを目的としている。傳燮を相手にするということは、かなりの時間を浪費することだろう。かといって、彼女を放置して突き進むことは絶対に来ない。最悪、挟み撃ちという形をとられる可能性もあるからだ。それに太守傳燮と韓

約はかなりの友好を結んでいたというのも聞いている。敵対し、韓約の悲しむ姿は見たくないがゆえの行動でもあった。その為戦端が開かれる前になんとか傳燮に下るよう説得を試みようとしているところだ。

乱れることのない騎馬が地を駆ける。目的地でもある郡城まではまだしばらくかかるが、この調子で走らせればほぼ予想通りの時間につくことができるであろう。僅かに気が緩んだその時であった。急激に空気の色が変わった。チリチリと肌を焼いてくるのは、感じなれた戦場の気配。いや、違うと李堪は熱い空気を肺から搾り出した。どんどんと空気が熱されていき、身体中にへばりつく重さを増している。何かがいる。何かが来る。戦場を駆け抜け、戦場を支配する何かが彼方よりやってくる。

「――全軍、止まれ」

李堪が馬を止め、付き従っている配下に声をかけると一糸乱れることなく彼らもまた足を止めた。何事か、と自分たちの主を見れば、李堪が視線を送る先、彼方の丘の上から駆け下ってくる騎馬隊があった。巨大な矛を片手に持つ一人の少年を先頭に、おおよそ百名からで構成された部隊だ。

「寡兵ですが。如何いたしますか？」

部下の問い掛けに、李堪は黙ったままだ。間違いなく敵兵だ。反乱軍に組するものではない。それに反乱軍に加わろうとする者達でもないのは一目で明らか。彼らからは燃え上がるような敵意のみが迸っている。此方は李堪率いる精銳五百の騎馬部隊。相手はどこものとも知れない寡兵百名。考えるまでもなく、勝利の文字は揺るがない。そのはずが、主である李堪は沈黙を保ったままで、その姿に配下の者達の間でわずかなざわめき揺れ起きる。

「……少年兵か。丁度俺の息子とおなじくらいだ」

ぽつりつと漏らした李堪の呟きに、そのせいかと納得しかける配下であったが。

「だが、放つ圧。纏う雰囲気は尋常ではない」

背負っていた籠から矢を取り出すと弓に番えると、その姿に配下は

皆見惚れた。背中がピンつと伸ばされ弦が胸に、矢が頬に付く位置でとめ、矢の狙いが一箇所絞る。右肩と左肩を結んだ線が矢と平行。腰の中心と頭頂部を結んだ線がそれと垂直に交わっている。基本的に忠実。奇想天外な弓の引き方もしない。だが、彼の弓の腕前は——中華十弓に数えられる領域に至っている。

「先頭の少年は俺が全力を持って射殺す。残りはお前たちが蹂躪せよ」

御意、という配下の返答を背に受けて、中華十弓の矢が解き放たれた。瞬きする間もなく空を渡る一矢が、李信目掛けて牙を向く。馬を走らせている彼からしてみれば、体感速度は止まっているときに比べてさらに速い。あらゆる敵を射殺してきた正確無比の李堪の矢を、あろうことか大矛を振って弾き落とす。ギャンという金属が噛み合う音が後から響いた。

「ばか、な……李堪様の矢が止められた？」

「偶然だ……隊長の矢をあんなガキが見切れるものか」

ざわめく配下。信じられないモノを見た、という彼らを余所に、李堪は口元を歪ませた。

「……俺の矢が、見えているか」

だが、と新たな矢を番え狙いを定める。先程よりもさらに近づいてくる一団は、遠くから見ると随分と強い。このままぶつかれば此方とただではすまない。特にやはり先頭を行く少年。李信は危険だと武将としての直感が警鐘を嫌と言うほどに鳴らしてくる。距離が近くなれば次の一撃はさらに早く李信には感じられる。それでも防ぎきれるか、と次なる一矢が煌いた。先程よりも一段と速い、気がついたときには目の前に届いているその矢を、それよりもなお速い大矛の盾が防ぎきる。啞然と言葉もない部下達を尻目に、かつてない強敵の出現に李堪の口角の笑みがさらに深くなった。

「見事。次の一射……防ぎ切ることができればお前の勝ちだ」

もはや彼方と此方の距離は殆どない。李信の神業に呆然としていた部下達も、慌てて李堪の前へと馬を駆けらせる。その合間を縫って放たれた二射。一つは李信の脳天へ。次いでほとんど同時に放たれ

たもう一矢は、李信の乗る馬へと狙いを寸分違わず放たれた。自分を殺そうと飛ばされた一つ目の矢を防いだとしても、馬までは守れまい——と、考えていた李堪の想像はあっさり覆される。腰から抜いた剣で自身への攻撃を防いだ李信は、大矛で自分の愛馬へと降りかかってきた死を振り払った。その間、秒を十数に分割した刹那の出来事。

そしてぶつかりあう両軍。五百と百。本来ならば結果は明らかだ。しかも五百は李堪の配下でも精鋭中の精鋭。だが、獅子の突撃を鼠がとめることができようか。いや、できはしまい。李信の一振り李堪を守ろうと前へ前へと出てきた騎馬が斬り飛ばされる。強い、という表現を超越してしまった人外染みた鬼神の行進。圧倒的な突撃力と破壊力を持って五百の軍勢に風穴を開けていく。それに付き従う華雄達もまた凶悪だ。華雄、胡軫、高順の三人だけでも十分に李信の援護ができていたというのに、さらに加えての百名。突撃を続ける李信を守るべく、続くべく、咆哮をあげながら敵兵の蹂躪を開始した。外から見る分と実際に戦った際の強さの違いに誰もが驚かされた。精鋭五百の兵が、為す術なく屠られていく。既に弓の間合いを崩された李堪もまた、剣を抜く。撤退の二文字も考えずに、迫り来る李信へと刃を向けた。こいつはここで殺さねばならない。さもなければ、必ずや韓約にとつての災厄となる。反乱軍を潰しかねない、真正正銘の化け物だ。手下八部の誰であろうと、この存在とまともにやりあえる者はいない。いや、辛うじて手下八部最強の武将である楊秋ならば渡り合える可能性はあるかも、といった程度だ。

「韓約様。大望願うこと……お祈りしております」

部下を斬り殺しながら迫り来る李信へと、馬を走らせる李堪。せめて相打ち覚悟で——と振り上げた渾身の一撃は、振り下ろす前に腕を飛ばされ、返す刀の切り上げで首を落とされた。勇将手下八部。中華十弓が一人、李堪——戦死。

「急げえ!! 敵が来る前にそれぞれの配置につけ!!」

「走れっ!! 走れ!! 足をとめるなっ!!」

「ここにいる者は全て西門だ!! そっちは南だ!!」

「反乱軍はじきにやってくるぞ!! 皆いそげ!!」

李信達が敵斥候を蹴散らしてから郡城へと戻ってきてみれば、そこは興奮のるつぼと化していた。民と言う民が、それぞれ武器甲冑を身に纏い、街の至る所に配置されていた。誰もが、誰かに強制されたわけではなく、強い意志の光を瞳に宿し、戦いへの恐怖と向き合いながらも戦争への準備を行っていた。城壁の上には力の強い男達が、老いも若いも関係なく配置され、後方支援組みには女子供の多くが、負傷者の救護隊、武器の補充組み、食事隊などとして割り振られた。城壁の上で戦う者達との交代を行う予備隊。弓を打つ部隊なども準備された。その熱気溢れる光景に、華雄達は驚き目を見開き——そして李信はかつてのとある光景を思い浮かべた。脳裏に描くそれと今の状況が似通っており、このような危機に陥っていないながらも不思議な郷愁に襲われる。そんな中、官庁へと辿り着いた李信の姿を見つけたのは、大声をあげながら様々な人に指示を出している賈コウであった。

「——李信!! 戻ったの!?!」

「ああ。今さっきだけだな。というか、凄い熱気だな。火付けには成功したのか」

「勿論よ。傅燮様の檄で、見てわかるところけど……皆が戦う兵士の

顔になったよ。これで最低限の準備は整った」

「たいしたもんだ。俺よりも随分と上等な結果だ」

「……ちなみに李信。貴方が傳燮様の代わりをしたらどうなったと思う？」

「兵士には出来る。だけど精々が持つて二、三日くらいだろうな」

李信と傳燮。元々が信頼、尊敬の桁が違うのだ。幾ら李信が檄を飛ばしたとしても今これ以上の結果に出来るとは思えない。それこそかつての友には及ばないものの、これならば方が一が見えてくる。

「で、籠城の割り当ては？」

「反乱軍が落として行っている街から予測すると、間違いなく西からやってくるはず。となれば、西壁が一番の激戦区となる。次いで南、北……東。となれば、西壁にはもつとも信頼できる武將を配置しないといけない」

「張遼か？」

「いいえ。李信。貴方よ。貴方をお願いしたい」

賈逵の発言に予想外の答えを聞かされた李信がキョトンとした表情を作り、それが少し可愛く思えた賈逵は苦笑した。

「理由があるわ。張遼の本領は馬にのつての野戦。狭い城壁の上では力を十全に発揮しにくい。かといって、蓋勳様は指揮官としての経験や知識はあるけど戦場を離れて久しい。傳燮様はボク達の最後の砦。最大の激戦区に配置できるはずもない。月……董卓は、実戦の経験が皆無」

賈逵が指揮官として西壁に入ることも考えた。だが、それは悪手だ。四方から揺さぶられどこかに必ず穴があく。その際に的確に増援・対処を行わなければあっさりこの街は落ちるだろう。賈逵以外の文官は、様々な武官を挙げはした。だが、それら全てを切り捨てて、賈逵は李信をえらんだ。今まで様々な間違いを犯してきたが、この選択だけは失敗ではない。それはきつと胸を張っていえる。

「激戦区の西壁に李信。南壁に張遼。北壁に蓋勳様。東壁に傳幹様。中央の司令室にボクと傳燮様と董卓。それぞれの城壁の指揮官はこれで行くから」

傳幹、と聞きなれない人名に首を傾げれば、傳變の息子だと付け加えた。まだ年若いのが、優秀な武官ということらしい。賈☒が評価するならば間違いないか、と李信は人選を受け入れた。

「それと……」

一度華雄を見た賈☒だったが、彼女が何を言いたいのか悟ったのだろう。口元に笑みを浮かべながら、頷いた。

「李信。ボクの権限により貴方を華雄の代わりに独立遊撃部隊の隊長に任命します」

西壁の指揮官として戦う以上、所属している隊の長である華雄との指揮系統に齟齬が発生する。故に、独立遊撃部隊の隊長に李信を。副隊長に華雄を、となるのがもつとも納まりが良い。

「ごめん、華雄。相談もなく勝手に決めて」

「なに、構わんさ。元々私に隊長の責務は重かった。代わってもらえるのならば非常に助かる」

本心から言っているのだろう。華雄の表情からは肩の荷が下りた、とでも言わんばかりの朗らかな様子が見て取れた。実際に華雄としても口に出したのが本心だ。むしろ、隊長から降りることによって自由に暴れられるようになる分、彼女の武が活かされる事になるのは間違いない。伝えること全て伝えきったのか、この場から離れようとした賈☒だったが、ふと振り返って握った右拳を李信へと向けた。その動作に、李信もまた自身の拳を掲げてゴツンとぶつけ合う。

「期待してるから。西壁は任せたよ、李信」

「お前の指揮にも期待しているぞ、賈☒」

絶望的な状況にも関わらず、軍師としてあるまじきことではあるが、賈☒はこの籠城戦がなんとかなるのではないか、という楽観的な想いを抱いてしまった——が、それを一瞬で打ち消して、自分の全てを持ってこの戦いを勝利に導こうと心に決めるのであった、

そしてこれより二日後——反乱軍。ついに郡城へと到着。激戦の幕が開く。

第19話：漢陽戦

武装した六万の軍勢が遙か彼方よりやってくる。行軍の際に起きる兵士たちの歩みが、地震めいた大きな音をたて郡城にいる民の心を脅かす。敵兵の数は聞かされていた。どれだけの大軍なのか覚悟してはいた。それでも実際に六万という兵士を目の当たりにするとあまりの多さに、息を呑む。だが、それとは対極のことが反乱軍にも起きていることを城壁にいる者達は気がついていなかった。情報では傅燮は籠城を決めたとのこと。しかし、所有する兵士はわずか数千。それなのに、反乱軍から見える兵の人数は軽く万を超え、見渡す限りの城壁を埋め尽くしている。援軍でもきたのか、と予想する兵士たちとは異なり、韓約は城壁の上の兵士たちの正体にいち早く気がついた。だが、そのことについて自ら口に出すことはしない。今自分でできることは、反乱軍の暴虐を少しでも減らすこと。わざわざ傅燮の不利になるであろう発言はしないほうが良いと判断した結果だ。

「随分と多いですね。援軍が送り込まれたか……或いは、民を武装させたか」

馬蹄の音とともに韓約の傍によってきた白髪交じりの長い髭が目立つ初老の武将。手下八部が一人……馬玩。この者もまた、涼州という戦場を生き抜いてきた勇将の一人。相手のどこか浮ついた雰囲気、を遠くからでも感じ取っているのだろう。髭を擦りながら、慌てるでもなく敵の様子を窺っている。

地平線の彼方より際限なく出現する反乱軍が、指示通り四方に散っていく。街から幾ばくかの距離を保ち、隊列を整えながらゆつくりと確実に包囲網を形作っていった。じわじわと包囲されていく光景を眼下に、城壁の上の兵士たちは心臓を掴まれたかのような緊張感と圧迫感を持ってそれぞれの武器を頼りにするべく強く握り締める。

「完璧に、包囲されたな……」

「……あ、ああ」

それは反射的にでた言葉であった。街は反乱軍によつて蟻一匹通さない厳戒な包囲網に絡めとられ、自分達の逃げ場が完全になくなつたことを悟つた故に無意識にでてしまった。これから自分達は目の前に立ち並ぶ反乱軍と殺し合いを行うのだ。逃げ場はない。もはや戦つて生き残るか、負けて皆殺しにされるか。僅か二つの道しか自分たちには残されていない。

「戦つてやるっ!! ああ、もう戦うしか他にねえんだ!!」

「そうだ!! 俺もだ!! ぶつころしてやる!!」

敵兵の重圧に恐れ戦き、それでも自らを振るいあがらせようと、若い民兵が雄叫びを上げる。それにつられて、周囲の者達も武器を片手に天へ向かつて大音声で消え入りそうな心を燃え上がらせるべく咆哮が連鎖していく。完全に戦に対して舞い上がっている彼らの姿を遠目に確認した馬玩は、呆れたように肩を竦める。

「若い。無様なくらいに若い。平常心すら保てないとは……。間違はなく、民兵でございませぬ、これは」

「……ああ」

馬玩の発言が広がっていった訳ではないが、彼らの様子に反乱軍の兵士達もまた気づく。自分達の相手が兵士ではなく、一般人が武器を持つているだけであると。それでも、反乱軍には戸惑う様子は見られなかった。何故ならば、民の虐殺は既に幾度か経験をしているからだ。無抵抗の者を殺して回ることすら慣れてしまっていた。むしろ、抵抗してくるのならば、逆に後ろめたさもなくなる。遠慮なく殺すことができるというものだ。そんな覚悟が完了している反乱軍の中で、少し異質な部隊があった。街を落とすことのみを考えている者が多い中、韓約の周囲を固めている騎馬兵は戦意を滲ませることもなく隊列を組んでいる。その数およそ五千。彼らの期待を背に、城壁へと近づいていく一騎があった。即ち反乱軍大将である韓約。容姿自体は幼く、体も小さい彼女の姿に、何故こんな戦場に子供がと城壁の者達が考えたのも束の間。

「反乱軍大将、韓約である!!」

少女にしか見えない姿でありながら、彼女の声は遙か彼方にまで届き響き渡る。その声に驚き、そして彼女の正体を知った者達はさらなる驚愕に襲われる。

「昨日まで武器すらもたず暮らしていた貴殿達の勇氣、覚悟。實に見事!! この韓約、心よりの尊敬と賞賛を送ろう!!」

自分たちがただの一般人であり、兵士に偽装していることがあつさりとばれたことに狼狽する民兵達。

「だが、ただの民がその気になっただけで戦が出来ると思うな!! それは勇氣ではなくただの蛮勇でしかないぞ!!」

韓約の威圧にも似た一喝に、知らず知らずのうちに体が震えた。

「所詮戦の素人でしかない貴殿達とは異なり、此方は日々戦に明け暮れる先零羌やそのほか多くの戦士達で構成されている!! そしてこの反乱軍の総大将は我、韓約である!! 他にも勇将と名高い手下八部とその配下の者達も参加している!! 万に一つも貴殿達に勝ち目はないぞ!! 無駄に命を散らすな、勇敢な民達よ!!」

ばさりつと羽織ついていた衣を風に靡かせながら、韓約は敵の民を褒め称えながらも声を張り上げていく。

「——降伏し、太守傳燮を差し出せ!! さすればこの韓約が貴殿達の命を保障しよう!!」

命を保障する。全ての民兵に届いた甘露なその言葉。ざわざわと、張り詰めていた空気が揺らいでいる。圧倒的な兵数の差、兵力の差を目の前で見せ付けられ訴えられた状態で、韓約からの悪魔の囁き。

「誰が降伏なんてするものかよ!!」

これはまずいのではないか、と心配する正規兵を他所に、数人の歳若い民兵が片手を天に掲げ決死の覚悟で吼え、拒絶する。それにもなつて全ての兵士が、よくぞ言ったと賛同するように地響きをも引き起こす巨大で相手を圧倒する大音をあげた。ビリビリと空気が波打つ民兵としては有り得ないほどの戦意の高さ。予想外の戦への意欲に、驚きを隠せない韓約だったが、これを切り崩すのは現状不可能と読み、馬を後方へと下げさせる。そして副将である北宮伯玉の指示のもと、遂に反乱軍が動き出した。反乱軍の弓兵が巨大な盾を構えて

城壁へと近づいていく。それを確認した城壁の上の兵士達も興奮と不安に苛みながらも、眼下の地平にて距離を詰めてくる敵兵へと狙いをつけた。射程にはいれば問答無用で戦が始まり、もはや戦争を回避することは不可能な事態に陥っている。その最中、下がって行った韓約へと北宮伯玉が馬を寄せてきた。

「困りますね。勝手に民の命を助けるなど約束しようとされては」
「この街における要は間違いなく傅燮であろう。あやつさえ欠いてしまえば、民は烏合の衆へと戻る。さすれば命までとる必要はないぞ。逆に中央へと攻め入るための時間も節約できるというものだ」

眉を顰め、韓約を非難する北宮伯玉に、理路整然と反論をすると、ふんつと鼻を鳴らす。それを聞いていたのか、傍に仕えていた馬玩もまた北宮伯玉と韓約の間に馬を割って入らせた。それはまるで主を守る従者のような行動にも見える。実際のところ、馬玩が忠誠を誓っているのは韓約に、だ。事実彼女が反乱軍の大将ではなかったら間違いなく参加していなかったであろう。

「大将が決めたこと。如何に副将とはいえそなたが異論を唱えるのもおかしなものだ。ワシとしても韓約様の方に理があると思うがな。それに先程の韓約様の言は、配下からの陳情故に、だ」

「……陳、情？」

「うむ。北地郡の胡族から傅燮の命は助けて欲しい、と皆が頭を下げて韓約様に願った。韓約様はそれを受け入れたに過ぎん」

馬玩の言葉に、北宮伯玉は初耳だと言った様子で、沈黙を保っている韓約から幾許か距離を保ちながらも周囲を護衛している五千の騎馬を見やる。副将からの鋭い視線を受けながら、彼らの心が揺らぐことは微塵もない。彼ら胡族にとって傅燮は大恩ある人物だ。せめて彼女だけでも故郷へと無事に帰りたい。その想いのみで、命を賭けて韓約へと願いでたのだ。

結果は残念なものになってしまったが、未だ彼らは傅燮を助けることを諦めていないのは一目見ればわかってしまう。その姿に、北宮伯玉はチツと舌打ちを行う。だが、最悪の事態は避けられたことにも安堵した。もしも先程の韓約の降伏勧告が受け入れられてしまえば、仮

にも総大将が約束した事柄。そう簡単には違えることは出来ない。民四万の命は保障したうえで、傅燮も人質として預からねばならなかった。彼女を傷つけることは間違いなく胡族が許さないだろう。もしも傅燮の首を跳ばそうと思えば、胡族の騎馬兵五千を切り捨てねばならない。それは戦力的に痛いという話を超えてしまっている。故に郡城の民兵達が傅燮の引渡しを拒否したことは北宮伯玉にとっては吉と出たということだ。

手下八部が所属してから、韓約を自分の思うとおりに操ることがなかなか出来なくなっている。彼が韓約の家族を人質にして無理矢理大将に仕立て上げたことまでは流石に手下八部もわかつてはいないようだが、時間が経てば経つほど事実が明るみとなる可能性は高まっていく。韓約が漏らすことは恐らくないだろう。それを周囲に漏らせば家族に害が及ぶと脅しているからだ。だからといって、このまま放置というのも将来的に見れば自分にとつては不都合に寄っていく。漢朝を滅ぼす頃には彼らには退場願うか、と策を巡らし始めると、遂に反乱軍が城壁の弓兵の間合いへと到達した。

「——射てええ!!」

中央の司令室にて間合いを計っていた賈逵の合図を皮切りに、城壁の民兵による弓の一斉射撃が始まった。降り注ぐのは数千、数万にも及ぶ矢の大雨だ。幸いにも、敵兵の数は膨大。狙いをつけずとも、矢を放てば敵兵の誰かには当たる。そのため彼らはただひたすらに狙いをつけることもなく城壁へと迫ってくる反乱軍へと矢を射っていた。大盾を構え城壁へと近づいてくる敵兵に、矢の多くは防がれるものの、それらの隙間を縫って、突き刺さる矢も多い。悲鳴をあげて倒れる反乱軍ではあったが、その屍を越えて彼らは進む。やがて敵兵が城壁へとさらに近づくことに成功し——つまりそれは、反乱軍からの弓矢の間合いとなったことを指し示す。

「正面に各員、集中射撃を!!」

合図とともに反乱軍からお返しとばかりに放たれる矢。しかもそれは、民兵のような出鱈目に射っているものではない。狙いを定め、確実に敵を倒す一斉射撃。城壁が高いとはいえ、空に向かって撃たれ

た矢が、放物線を描いて城壁の上の兵士へと降り注ぐ。顔に、腕に、胸に、膝に、足に突き刺さった矢が激しい痛みとともに戦いへ対する恐怖を呼び起こす。

「怯むな!! 恐怖に負けるな!! その痛みこそが戦いだ!! 勇気を振り絞り、立ち向かえ!!」

傳燮の檄に、痛みを下を向いていた民兵の顔が変わる。必死の形相で、痛みを耐えながら矢を放つ。そんな矢が互いに降り注ぐ撃ち合いになっていく最中のことであった。反乱軍が幾つもの梯子を縛りつけ、長大な長梯子を準備し始め、それを何十人も力を利用して、郡城の城壁へと架けようと試み始めた。ギリギリに撓らせた梯子が、凄まじい勢いで城壁へと向けられる。それが城壁に衝突、巻き添えをくつた民兵たちが吹き飛ばされた。侵入を防ぐ高い城壁を利用した籠城を考えていた賈☒達を嘲笑うように、あっさり梯子を架けられ、そこを反乱軍の兵が登り始める。想定外の事態ではあるものの城壁へと登らせるものか、と梯子の前で立ち塞がっていた民兵を、反乱軍兵は容易く斬り殺す。単純に反乱兵は強く、民兵が戦うには数人であろうやく一人といった力の差がそこにはあった。必死に抵抗はすれど、民兵はいいようにやられていく一方で、それが反乱軍兵をさらに勢いづかせる結果となっていた。梯子を架けられた場所を拠点とし、次々と兵士が梯子を駆け上がってくる。幾らなんでも力の差がありすぎるという疑問を覚えた賈☒が目を凝らしてよく見れば、登ってきている全員の武装は統一されていて、侯の旗が風にたなびいていた。その事実気づいた賈☒が頬を引き攣らせる。

「侯、選?! こんな頭からなんて部隊を送り込んできてるの!?!」

賈☒の悲鳴染みた絶叫に、傳燮と董卓、その他の文官も開いた口が塞がらない。戦の緒戦も緒戦で、手下八部が一人。侯選配下の兵隊が捨石にも等しい突撃を行っている。なんて無茶苦茶な、とも思えど——これは理に適っていた。幾ら民兵といえど、経験をつめばつむほど厄介になっていくだろう。つまりは彼らが戦に慣れる前、未だ緊張で身体もろくに動かないであろう緒戦において精鋭の兵士が攻め込めば一方的な戦いにしかならない。こちらが民兵だと気づいてから

城攻めまで僅かな時間しかなかったというのにそれを思いつき実行する。流石は戦上手の手下八部が一人、侯選。気がつけば、西壁の梯子を架けられた場所を中心として既に百人以上がさらに拠点を広げようと猛攻を仕掛けてきていた。だが突如そんな侯選兵の一部が消し飛んだ。一瞬で数人の手練れが宙に舞い、何事とか注意をそちらに向ければ大矛を振り回す李信の姿があった。

「ちっ……正面からまともによりあうな。囲って殺せ!!」

この場でもっとも厄介な相手だと見抜いた指揮官が、周囲の兵に指示を飛ばす。それを受け、民兵を蹴散らしていた侯選兵が即座に李信を取り囲もうと動き出すが、わざわざそれを待つ馬鹿はいない。大矛の僅か三振りで、包囲網を作ろうとしていた精鋭を撃退し、新たな指示を出す間もなく苦勞して作り上げた拠点を守る指揮官及び兵毎瞬く間に斬殺され、捻りつぶされた。未だ梯子を登ってくる新たな兵士を薙ぎ倒すついでに駄賃とばかりに、梯子を破壊すれば、それに掴まって登ってきていた兵士達が墜落しぐちゃつと肉が潰れる音を響かせた。

「ここは任せた、田徽」

「おうよ!!」

華雄の配下として涼州を生き延びてきた生え抜きの一人。独立遊撃部隊の一員である田徽他数名にこの場を任せて李信は次の拠点へと足を向ける。西壁のあちらこちらで喚声があがり、架けられていた梯子が落とされていく。流石に西壁全てを李信が助けて回れるはずもなく、隊を三つに分けて拠点を潰しているところだが、華雄隊と高順隊もうまくやったのだろう。しかし、城壁がこれほど高いというのにあっさり登られすぎじゃないかと思っただが、風向きに気づいてこれは仕方ないかと嘆息する。現在は西から東へと風が吹いており、西壁は敵に風上を取られた状態だ。矢の射ち合いにおける高低の有利不利を打ち消す強風が、城壁の上に降り注ぐ矢を強烈にしている。城壁へと近づけさせない弩隊の矢が効果がないとは言わないが、本来よりも矢の嵐を潜り抜けやすい状況となっている。それは激戦区の西壁がさらに辛い状況に陥っているということだ。だが、裏を返

せば現在の状況ならば東壁は有利な立ち位置をとれているということで、実際に東壁の弩隊は反乱軍の兵士を城壁に近づけさせないほどの凶悪な戦果を上げているところであった。北壁では蓋勳が、南壁では張遼がそれぞれ民兵を奮起させ互角以上に渡り合っている。つまりは、現状の問題はやはり——西壁。

飛信隊と李信が名づけた独立遊撃部隊。副長華雄を筆頭にした涼州での異民族との争いを潜り抜けた超精鋭。しかしながらその人員は僅か百名。数万からなる大軍同士による戦争の大局を変えられるわけもなく、戦場とはそこまで易くはない。だが、城壁の上に限っては戦う場所が限定されているぶん、個の力が大きく発揮する。たかが百名。されど百名。その百名は、西壁にておおいに登ってくる反乱軍を撃退することに成功していた。その中で刮目すべきは、華雄高順胡軫の三人であろう。ほぼ一方的に敵兵を斬り、粉碎し、突き落とす。その強さ、連携の巧みさに中央の司令室から見ていた全員が驚きを隠せない。独立遊撃部隊の名に相応しく、日々異民族の侵略に対抗する為にあちらこちらを駆けずり回っていたが為に、彼らの力を直に目にする機会は殆どなかった。報告だけは受けていたが、ここ最近は特に眉唾な情報が多く殆どの文官はそれが水増しされたものだと考えていたほどだ。そもそも戦力比が数倍から十倍にもなる異民族との戦闘を頻繁に行いながら隊にはほぼ被害がないなど誰が信用しようか。そう考えていた者達の考え全てを否定する圧倒的な力を持つ部隊が城壁を駆け巡る。そして、文官の皆はようやく悟った。何故賈があれほどまでに西壁に李信達を配属させることに拘ったのかを。

「いけるっ!! いけるぞっ!! 何と言う強さだ、あやつらは!!」

「あの小童、吼えるだけの力をもっておるっ!!」

興奮冷めやらぬ文官達が驚嘆する司令室において、冷静な者達もいた。いや、彼女たちは半ば無理矢理に平静であろうと心がけているもいえた。武将とは異なり、軍師に必要なのは冷静な揺れない心。四方の城壁の情勢を見て、今出来る最善を尽くしていかねばならない。

「今のところはなんとか防げているようね、賈」

「はい。すぐに穴を開けられそうな城壁は……見受けられません」

「……凄いな、詠ちゃん。民兵の皆、あんなに必死になって戦ってる」
「うん。傳燮様を、月を守る為に、皆頑張ってる」

民の皆が奮起している理由。それは傳燮と董卓の治世が良かったからに他ならない。腐りきった官僚が多い中、この地に平和と安寧をもたらすべく奮起してきた太守と県令。彼女達の努力には頭が上がらないことはこの街の民ならばわかりきっていることだ。故に彼らは民兵として最後の一人になるまで戦うことを誓った。自分たちがそが絶大な恩を受けた二人の為に命を投げ出すのだ、と。そして、そんな董卓は戦いを見ていることだけなど出来る筈もなく、行つてくるね、と短い言葉を残して負傷者の救助と治療に飛び出していった。それをとめることは賈☒にはできない。それに自分の為に命を燃やしている民兵をただ見ているよりも、何かしら動いていたほうが董卓の気も紛れるだろうという打算もあった。

「……民兵主体の、戦に不慣れな軍。今日が一つの鍵よね、賈☒」
「ええ。初日を持ちこたえることが出来るか。勿論、四方の城壁の指揮官も重要ですが、もつとも要とすべきは数の多い民兵。彼らがどこまで戦えるか……」

それはつまり、戦いへ対する戦意。士気の高さ。恐怖に、痛みにも、命を奪うことへの嫌悪に負けずに戦場に立ち続けることができるか否か。もしも、民兵がそれらを乗り越え翌日を迎えることができれば、この絶望的な籠城戦にも光明が差ししてくる可能性がある。賈☒は陽が沈みつつある空の彼方を見ながら祈らずにいられなかった。

激闘が続く中、矢が届かない遠方で城壁の戦闘を見ていた一人が、小さくありやりや……と呟いた。馬に乗った軽装の鎧を着た中年の男だ。無精髭を摩りながら、手に持っていた槍を持つ手に力を入れる。さらに城壁に作った拠点がまた一つ潰されていく光景を見て溜息をついた。

「俺様の配下があそこまで簡単にぶったおされるか。民兵にはちよいと無理だよなあ」

「そうですね。正規兵が多く配置されているのでしょうか」
「うーむ。例えそうだとしても、ああまで簡単に俺様の直属兵が守つ

てる拠点潰すっておかしくね？」

「まあ……おかしいといえはおかしいですけどね。でもなんといつてもあの傳變が大将の城ですよ？ 想定外のことくらいおきますって」

「しゃーない。俺様がちよっくら行って暴れてやるとするかあ」

「ええ？ 指揮官自ら前線に行くって頭おかしいですよね、やっぱり。ねえ、侯選様」

侯選と呼ばれた手下八部が一人。無精髭の男は、副官の毒舌も気にせず高らかに笑いながら新たに架けられた長梯子を駆け上っている。トントンと梯子を蹴りつけ軽やかに、あつと言う間に城壁の上へと舞い降りる。彼の出現により、西壁の空気が明らかに変わった。自分達の主である侯選の出現に、直属兵の気がより一層引き締まる。彼らは無様な姿を見せるものか、主の為に敵を一人でも多く、早く倒すべく気炎を吐いた。

「おー、頑張れ頑張れ」

軽い応援とともに繰り出されるのは、常人では視認することすら不可能な超速の突き。突かれた相手は自分が侯選に突き殺されたのだと気がつく間もなく仕留められていく。突く速度も驚異的だが、引き手の速さも異常であり、連続で放たれる突きは三度突いたというのに一度にしか見えないほどのものであった。鋭い槍の穂先が、次々と民兵を刺殺していく。一気に加速していく拠点作りに、順調順調と戦場にあるまじき楽しいげに笑い声まであげるしまつ。だが、突如として彼の鼻歌が止まった。慌てた様子である方角に顔を向ければ、常に飄々としている侯選らしからぬ焦燥を表情に浮かべている。珍しい主の姿に、彼の周囲で戦っている一部の直属兵がどうしたのか、と問い掛ける暇もなく、拠点を広げていた侯選兵が、李信によって薙ぎ倒されて半円状に形作られていた陣形が歪に歪む。

「……なんだ、ありや。外れてるにも程があるだろ」

自然と引き攣った頬を誤魔化すために、周囲の部下達を安堵させるためにもなんとか普段通りの自分を演出しようと試みるも、なかなかにはそれは直らない。戦場においてなお、異質異端な悪鬼羅刹の登場に、瞬間的に撤退を考えるもこの城壁の上から逃げ出すのは難しい。

「てっ……ああ、くそ。これも作戦のうちか。ただ籠城するだけじゃなかったってことかよ、こいつら」

単純に籠城するだけでは援軍を待つ間持つかわからない。守城を続ける中でも傳燮側としてもなんとかして反乱軍の戦力を削っていきたいという思惑があった。現状反乱軍が嫌がることは二つある。それは時間を浪費することと戦力を失うこと。時間をかければかけるほど漢王朝の反乱軍への対応は万端となってしまう。戦力を削られたとしても、彼らにそれを補給する人員がない。例え出来るにしても、今は日和見に徹している異民族に味方になるように説得し引き連れてこななければならず、時間がおおいにかかってしまう。理想としては弩隊による弓矢による攻撃で削るのが理想だが、それだけでは難しい。故に城壁にあがられた時点で、兵数の差を利用してまとめ敵の戦力を確実に削っていく。無論この方法は諸刃の剣だ。下手をしたら城壁を突破され最悪の事態に陥るかもしれない。必要なのは圧倒的な力。どんな戦場でも支配できる絶対強者が要。だから賈逵がこの策を授けたのは李信にだけであった。

「李信!! その男、絶対にしとめて!!」

賈逵の指示に応、という短い返事を残して、李信の肉体が疾駆する。それは荒れ狂う竜巻。触れればそれだけで消し飛ぶ人型の天災。侯選までの線上にいる者全てが無情の死を遂げる破竹の進撃。李信の狙いに気づいた侯選兵が彼の足を止めようと立ちふさがるもの、秒ももたずして人壁を突破され、侯選へと迫られた。

「こいつは参った。李堪を殺したのもお前さんの仕業かね。勝てないまでも……腕一本くらいは貰っていくぜ」

李信が自分の直属兵を突破した僅かな隙ともいえぬ隙を狙って、繰り出されるのは侯選の突き。だが、それを見ていた全ての人間が一驚させられた。何故ならば放たれた侯選の槍が、ぐにやりつと途中で撓り軌道を変化させる。言葉通り李信の片腕を狙っていたはずが、槍の穂先は狙いを変えて彼の胸へと突き刺さりんと突き進む、これこそが龍指と呼ばれる槍使いでも達人級の者しか使いこなせない秘技。これを初見でかわすこと、防ぐことが出来る者はそうはいない。まして

や侯選は中華七槍と呼ばれる領域の達人。もしもこれの標的になったならば、華雄や張遼であつたとしても致命となる一撃となつたかもしれない。

バキイと何かが砕ける音が響き、激しい痺れが侯選の手に残る。一瞬で槍を握る握力が奪われ、手が震えた。気がつけば李信へと放たれた槍は、彼に届く前に大矛で叩き落され槍の途中から砕き折られている結果がそこにはあつた。

「はっ……中華は広いねえ」

どこか呆れを乗せた最後の言葉を皮切りに、大矛による胴に向かつての右薙ぎが、侯選に回避する暇も与えず下半身と上半身を真つ二つに両断した。斬り飛ばされて城壁の下へと落下していった上半身が、数秒後には地面へと墜落。やがて城壁の下にいた誰かが悲鳴をあげはじめ。それは爆発的に反乱軍に広がっていった。即ち———手下八部が一人。侯選討ち死に、と。

誰もが知る勇将の死に、反乱軍の足が止まる。唯一干戈を手に李信へと襲い掛かったのは主の仇をとるべく激しい怒りに身を任せている侯選兵のみであつた。だが、それらも誰一人として李信に傷一つつけることなく程なくして殲滅された。

よし、と両手を握つて喜びを露にする賈☒。この緒戦において手下八部を退場させられたのは非常に大きい。ああいう武将は残つていれば後になればなるほど厄介な存在となる。ざわめく敵陣とは異なり、此方の戦意は最高潮だ。涼州ならば誰もが知る孟将の首をあげる事ができたのだから。

「……初日が最初の山だつたわね、賈☒」

「はい。見てください、傳燮様」

「ええ。日暮れ、ね」

何時の間にか薄闇が世界を支配しつつある時間になっていた。太陽は沈みかけ、もう間もなく夜の帳が起きる自分。城壁の上の反乱軍は完全に駆逐され、成果も見込めないことを悟つたのか、彼らはそれぞれの上役の指揮のもと、夜営の準備の為に引いていった。撤退していくまだまだ膨大な数の敵を見ながら、それでも民兵たちは互いに顔

を見合わせて——天に向かつて手を突き上げた。

「うおおおおお!!」

「やったっ!! やったぞおおお!!」

「うおっしやあああー!!」

まだ初日が終わつたにしか過ぎないというのに、まるで勝つたかのような民兵の姿。それでもこれは仕方のないことだろう。初めての戦。既に多くの血が流れ、友が、家族が死んでいった。それでも、確かに自分たちがこの街を守つたのだ。自分たちの行動は決して間違つてはいない。この興奮の雄叫びはそれを確認する意味でもあつた。



二日目。初日の夜は興奮と緊張もあつてろくに休めなかつた民兵達であつたが、それでも戦意は高い。傳燮の檄が効いていると言う事もあるが、戦争の初日を生き延びた、ということが彼らに自信を与えることとなつた。自信の大きさは士氣の高さに直結する。たかが一日と侮ることなかれ、戦争における勝利とは人を十分に化けさせる経験に他ならない。既に彼ら民兵は兵士としての顔つきとなつて、それぞれの城壁を突破させてなるものと準備万端に待ち構えていた。

攻城戦である以上、反乱軍としても正攻法でかかるしかない。奇抜な手などそうあるわけでもなく、傳燮軍と反乱軍の戦いは初日の焼き増しを見ているようでもあつた。ただ今回は、無風な状態が多く弩隊による矢の乱雨による効果が守城側に大きく働き、高低の差がそのまま有利不利となつていた。あまりの矢の多さにろくに城壁に近づく

ことも出来ない反乱軍。次々と負傷兵が運ばれていく中、胸中穏やかにいられないのは反乱軍の副将である北宮伯玉である。正直な話、ここまで苦戦するとは夢にも思っていなかったからだ。噂に名高い傳燮といえど、たかが数千の兵では相手にもならないと思っていた。民兵が城壁にいるのを見たときでさえも、たかが民兵と侮って、蓋を開けてみればこのような結果。

「なんなんだ。こいつらは……」

反射で漏れた本音は反乱軍と傳燮郡との争いの怒号で誰に聞かれるでもなくきえていく。相手は戦いの素人でしかない。下手をしなくても初日で落とすことができるのでは、と踏んでいた予想を覆され、苛立ちのあまり頭を強くかきむしる。さらに手下八部の一人の侯選も討ち死にするという信じられない報告もあつた。確かに若干の邪魔を感じてはいたが、まだ本命となる漢王朝との戦も始まっていないうこの段階で失われるには大きすぎる損失である。如何に野戦を得意とする騎馬民族中心とはいえ、ここまでいいようにやられるなどあるはずがない。ましてや先程も述べたとおり、手下八部の侯選まで倒すことが出来る人物が西壁にはいる。

「くくく……はーはっはっはっは!! 随分と頭にきているようだな、伯玉よ!!」

鼓膜が破かれるのでは、というほどに大きな声が本陣に響き渡つた。ビリビリと空気を揺らすほどに大きな圧力を迸らせながら、一人の男が現れた。強いて言うならば、巨人。その体軀や七尺に届きかねないほどのもの。髪を綺麗にそりあげ、体軀に相応しい巨大な錘を背に担ぎ、地獄の鬼もかくやという不気味な笑顔を浮かべてやってきた。

「……楊秋殿か」

「いかにも!! 聞いたぞ、伯玉。なんでもあの侯選が討ち取られたとな!!」

「ああ。戦の初日に西壁に登ったのは良いが、あっさりと敗北したらしい」

「ぐははははは!! 侯選ほどの使い手がよもや民兵如きに負けるは

ずがない。そこらの兵士も同様だ!! 西壁には随分と手練れがいるようだな!!」

「……あいにくと誰が侯選を討ち取ったかまでは不明だ。城壁にあがっていたものは全員殺されている。だが、遠目で華雄なるものが確認されたとの情報がある」

「ほう!! あの噂に名高き戦場に咲く花か。その実力、何でも漢陽でも一、二を争うと聞くぞ」

「噂が確かならば、侯選を討ち取れるかもしれない。だが……」

「おう!! 李堪と侯選……強さの質が違う。遠距離と近接を得意とする正反対の武将同士。その二人を討ち取るなど至難の技だ。或いは……華雄以上の使い手がいるのやもしれんな!!」

反乱軍にとっては不穏な話となるのに、楊秋は高らかに獣の如き笑い声をあげている。強い者がいる。自分と戦える者がいる。それだけで身体中の血管という血管を熱い期待と興奮が駆け巡っていく。

「苦戦が続くようならば、俺の部隊を出しても構わんぞ」

「……貴方の部隊はまだ温存して貰いたい」

「ふふん。よかろう!! だが、もしも四日目までに城を落とす見込みがたたなかったならば、明日は俺の好きにさせてもらおうぞ!!」

「……はい」

渋々と北宮伯玉が頷いた。本音のところ楊秋と彼の率いる部隊は言葉通り温存させておきたい。反乱軍でもずば抜けた破壊力と突破力を誇る最強の部隊と武将。来る漢王朝との決戦の時の為にも、彼らをここで無駄に消費させてしまうのは悪手である。特に彼らは野戦を得意とし、攻城戦にはあまり真価を發揮できないだろうことは簡単に推測が出来る。それでも、この男が好きにするとしたら好きに行動を起こすのだろう、実際この反乱軍で楊秋をとめることができる者はいない。他の手下八部とは少し気色が違うこの男が興味があるのは力のみだ。反乱に参加したのも韓約に忠誠を誓うというより、戦場が彼を呼んでいたからといった方が良い。

「ふはははははー!! 見よ、天が俺を怖れているわ!!」

蒼天にかかっていく雲を見て、去っていく巨人の姿に溜息一つ。こ

これは彼らを前線に出さないためにも早期決着をつけねばなるまい、と指示気合を入れなおした北宮伯玉が各方面に伝令を送った。各自全力を持って城壁を攻略すべし。副将からの指示があれど、決して止むことがない弩隊の矢の嵐と、兵士となった民兵が城壁への侵入を防ぎきる。そうして二日目の戦も多くの犠牲をだしながら、一日を終えるのであった。

そして——三日目。

城壁の上にいる民兵達の動きは明らかに鈍かった。夜間に休めるとは言っても、怪我を負ったものは痛みで碌に休めず、戦いへの緊張で満足に睡眠を取れる者が少ない。そんな状態で二日間も戦い尽くめ、三日目ともなれば疲労が全身を襲っている。それは正規兵ですらも同様だ。辛うじて変わらずに動いているのは、西壁の飛信隊。南壁の張遼隊くらいだろうか。あくまでもあまり変わらさずというだけで確実に疲労は蓄積されていつている。幸いにも反乱軍本陣から遠い東壁には、反乱軍の中でのあまり手練れの武将が配置されておらず、なんとかギリギリのところでもたせている状態でもあった。状態は最悪の一步手前。何かがあればなし崩し的に前線が崩壊する。そこまでの危機感を持った賈囂は、司令室から四方の城壁を守るべくひたすらに指示を出し続ける。

「北壁薄くなってる!! 予備兵千をつれて蓋勳様のもとへ!! 紫洪、張遼の援軍に予備兵から五百つれていつて!! 間永、同じく五百つれて東壁へ!!」

怪我をした民兵は董卓や女子供の治療部隊にまわされ、かわりに予備兵と交代となる。初日と二日目でかなりの人数が予備兵と交代しているため、予備兵の数も尽き掛けているのが現状だ。それでも援軍を回さねば城壁が落とされる。それがわかっているから予備兵を使うしかない。

「くそがつ!! ばけ、ばけものめっ!!」

そんな中、荒れ狂っている戦士がいる。李信は普段と一切変わることなく、ただただ大矛を振るい続ける。一振りすることに敵兵がそれ

それぞれの干戈毎薙ぎ倒され、斬り殺された。鬼神もかくやという咆哮をあげ、恐怖に萎縮する反乱軍の侵略を許さない。既にあげた敵兵の首級は二千を超え、それでも緩むことのない進撃に、味方であるはずの文官達ですら恐怖を覚えるほどのもの。

だが、ともに戦う兵士達からしてみれば、頼もしいことこのうえない。李信がいればまだ戦える。疲労で鈍くなった身体と心に渴をいれ、前を向いて敵兵を討つ。一人一殺じゃなくてもよい。万全ではない自分たちならば二、三人で敵兵一人を道連れにできれば上等だ。

「戦える……戦えるぞお!!」

「おおおお!! 俺たちは、まだ戦えるっ!!」

城壁に倒れ伏していた民兵も立ち上がり、武器を拾い、剣で斬られようが槍で突かれようが、致命傷を負ったとしてもそれでも相打ち覚悟で反乱軍へと襲い掛かる。あまりの光景に、相対する反乱軍兵士からしてみても異様で異常にしか見えない。まるで地獄から蘇ってきたのではないかと思わせる民兵の姿に、李信とは異なる恐怖を覚える。心身ともに疲労している民兵の覚醒。それが四方の城壁の上でおこり、敵兵を押し返し始めた。多大な犠牲を払いながらもこの郡城が息を吹き返し、押し寄せる反乱軍を民兵達の手によって真っ向から跳ね除けられる事態に陥った。三日目が終了し、夕暮れを迎える頃には——たかが民兵と侮っていた反乱軍の武将も兵士も、得体の知れない何かと戦っているのではないかという不安と薄気味悪さを感じるようになってきていた。

四日目——この日は反乱軍はこれまでと異なる様相を呈していた。

普段であれば、既に攻城戦を仕掛けてきているというのに、今回は矢が届かない間合いを取って陣形を保っている。その様子を不思議に思えば、反乱軍より進み出てくる一人の騎馬があった。韓約——ではない。馬にのった優男風の武将。

「反乱軍副将の北伯玉である!! 郡城の全ての民に告げる。お前達の反抗、実に見事だと言わざるを得ない!! だが——」

「——黙れえい!! 伯玉よ!!」

北宮伯玉の発言をかき消す超弩級の雄たけびが、反乱軍傅燮郡ともに一人残らず耳に届いた。声を通るといふ類ではなく、単純に声がありにもでかい。反射的に城壁の上の民兵は耳を塞ぐ。北宮伯玉の後ろから巨大な馬に乗った——これまた人とは思えぬ巨躯の武将がやってくる。彼は、副将の姿など目にもはいらぬと言わんばかりの態度で通り過ぎると馬から降りて地面に仁王立った。それと同時にドンツと地響きが聞こえる。何事かと思えば、北宮伯玉の背後に整列している兵士が、一斉に大地を踏んだ音であった。

「涼州最強!! 涼州最強!!」

兵士達が雄叫びを上げる。

「中華最強!! 中華最強!!」

決して揺るがぬ、その男の武を信じきっている兵士が叫ぶ。

「天下無双の絶対最強!! それは誰か!! それは誰だ!!」

ドンツと再度の激しい足踏み。

「天下無敵の不敗の王者!! 楊秋!! 楊秋!! 楊秋!!」

配下の檄をその背に受けて、七尺の巨人が堂々と城壁の前にて大錘を抜き地面へとたたきつけた。激しい衝撃音、生じた風圧が城壁の上にいる民兵の肌と心を揺さぶった。あまりの光景に少なくない民兵がその場に尻餅をつく。

「我こそが、中華最強——楊秋であるぞおお!!」

その巨軀に相応しい迫力ある宣言が、傅燮軍の民兵の戦意を叩き折る。四日目まで戦ってきた彼らには自信があった。戦意があった。士気の高さがあった。それでも——敵対者にて初めて出会った、真の強者。どれだけ多くの兵でかかろうとも太刀打ちなどできよう筈もない。彼方と此方の差は歴然としており、勝ちの目など皆無。ただすりつぶされるだけの勝敗のみが存在する絶対強者。

「……楊秋か」

「知ってるのか、華雄?」

「この涼州で知らない者を探す方が難しいぞ。奴の配下が言っている事はあながち間違いではない」

「そうでござえますな。なんでも戦歴は五十を超えるとか嘘くさい話ですが、あの様子を見るに本当みたいですな」

「……相当、強い。潜つても多分、きついね」

高順が眉を顰めて楊秋の評価をする。李信から見ても妥当な話だ。距離があつてもわかる、あれは本物の戦士だ。これまで戦った李堪や侯選もかなりの手練れだったが、そのもう一つか二つばかり格が違っている。

「郡城の者よ!! 攻城戦など、せせこましい争いなど俺は好かん!! さあ、俺と一騎打ちをしようという勇氣ある者はおらんのかつ!!」

そして告げた楊秋の宣言に、何を言ってるんだと言った表情の両軍。攻城、守城に全力を尽くして四日目に突入したというのに、今更一騎打ちをしようなど意味がわからない。

「李堪と侯選を倒した者がいるのは知ってるぞ!! さあ、俺と戦え!! 俺に戦う喜びを教えてください!!」

西壁にいる民兵が咄嗟に李信へと視線を送った。数千の眼で注目をあびた李信だったが、ついつと司令室にいる賈コウへと視線を向ける。判断を仰いできている彼の姿に、賈コウはこの状況における利益と不利益に何がおきるかを思考し始めた。そもそも手下八部とは反乱軍における大幹部である。それぞれが軍閥の長であり、涼州にその名を轟かせている武将達。本来ならば軍の後ろでドンつと構えている人間が、前線に出てきていることがおかしい。彼らを討とうと思えば尋常ではない被害が此方に齎される。その手下八部の一人が堂々と単騎で軍の前に出てきている。今ここで最強と名高い楊秋を倒すことが出来る機会。こんな好機は二度とないかもしれない。さらに、楊秋を討ち取ることができれば、民兵の戦意が間違いなく回復する。疲労で身体が思うように動かない今、重要なのは心だ。精神が肉体を超越して動かしているこのとき、戦意の高さは命綱となる。

ならば受けなかった際の不利益は何か。勿論、手下八部の一人を狙うという好機が失われることは当然として、敵にしるああまで真つ直ぐと一騎打ちを望んで来た相手を袖にする。戦争である以上当然と言えは当然だが、民兵にはそれがわからない。こちらが逃げたと判断

するだろう。さすれば戦意はがた落ちだ。結果として、城壁を守る気が果たして持つか。

厄介な、と内心で臍を噛む賈。相手の一騎打ちの申し出を受けるしかない。果たして問題は、遠目で一目見ただけでわかる楊秋という名の怪物を打倒できるか、という話に直結する。例え相手の申し出を受けたとしても、敗北すれば結果は一緒だ。民兵の士気は極限まで下がるであろうし、反乱軍が感じていた薄気味悪さを消し去るほどの高揚感を与えるだろう。

思索の為に下げていた頭を勢いよく上げ、じつと李信を見つめる賈。

信じていいのね。ああ。

二人は目線だけで会話を行うと、司令室の柵を両手で力一杯握ると天を仰いだ。

「――その申し出、受けよう!! 楊秋將軍!!」

可憐ながらも確かな芯の籠った賈の宣言。

「出番よ、李信!!」

それは信用であり、信任であり、信頼であり、心頼であった。

相手は涼州最強。手下八部が一人、楊秋。それがなんだ。それが一体なんだというのだ。

反乱軍よ。傳變軍よ。天下よ、知れ。李信永政という怪物を、心に刻め。

賈に向かつて握りこぶしを掲げて見せた李信が、城壁から垂らした縄を滑り落ちて地面へと着地する。驚いたのは反乱軍の全ての兵だ。まさか楊秋の姿を見て一騎打ちを受け入れ、さらにはこんな少年を立ち向かわせるなど正気の沙汰ではない。肝心の楊秋は、近づいてくる李信を最初は訝しげに見ていたが、それが徐々に変わっていく。「ほう!! ほう!! わかる。わかるぞ、小僧!! お前、相当に強いな。外れているな!!」

くははははは、と嬉しそうに笑う楊秋。笑うだけでビリビリとした威圧にも似た波動が周囲の敵味方問わず襲ってくる。大錘を地面から持ち上げると肩に担ぐ。

「嬉しい。嬉しいぞ。例え誰であろうとも、俺に立ち向かっている者がいる。こんな嬉しい事があるだろうか」

子供のようにきらきらと眩しい笑顔を浮かべて心の底から楊秋はこの状況を楽しんでいた。

「本音を言おう。この楊秋……戦いへ対する失望しかなかった。自分が最強であることを知っていたからだ。戦いへ対する熱も失われ、失望しか胸に抱けていなかった」

胸中を嬉しげに語る楊秋を前にして、李信は黙ってそれを聞いていた。

「初陣からこの時まで、俺には敵がいなかった。この涼州という戦乱に明け暮れる世界にて俺は戦い続けた。もはや五十の戦場を経験し、それでも一度も俺に敗北はない。一度も、だ!!」

五十の戦場を、死線を越えてなお、たった一度の敗北も知らない。正真正銘の無敗の男。

「その俺が!! 天の気まぐれでこの中華の地に落ちた、人の枠組みを外れて生れ落ちた超越者であるこの俺が!! ようやく出会えた!! 俺と同じく人の枠を外れた者!!」

大錘を両手で握り締めると、さらに手に力がある。ビキッと金属が軋む音さえさせて、楊秋が李信へと今にも襲い掛からんと構えを見せた。

「名乗れ、小僧!! 俺と同じ超越者よ!! お前を喰らい、俺は真の意味で中華最強とな——」

「——話がながいぞ、あんた」

切り上げられるのは李信の大矛。右斜め下から放たれた龍の顎の如き刃がヒヤリッと楊秋の背を撫でる。それは彼が初めて感じた死の予感。死ぬぞ、という死神からの呼び声であった。対する楊秋の行動は反射であった。無意識に脳が身体を強制的に動かさせた。振り下ろされた大錘が、李信の矛を激突。拮抗するのは一瞬で——吹き飛ばされたのは楊秋であった。シンッと静まり返るのは楊秋直属兵。彼らは皆、楊秋とともに涼州を駆け抜けてきた生粋の戦士達。そんな彼らが、長い付き合いの中で、主が吹き飛ばされるのを見たのは初めて

の光景だ。力負けした楊秋は呆然と未だ痺れる両手と李信を順に見て対する李信は、珍しく驚いた表情を見せていた。まさか今の一撃を防がれるとは思っていなかったのであろう。

「ぐ、ぐははははははー!! なんと重い一撃かつ!! 見事、見事だ!! 俺は今高揚しているぞ!! 李信といったな……俺はお前と言う好敵手と出会えたことに!! そして、生まれて初めて全力を引き出して戦える瞬間が訪れたことに!!」

ビキビキと楊秋の全身の筋肉が解放へ対しての歓喜の雄叫びを上げる。言葉通り、生まれて初めての全力闘争。楊秋という名の確かな超越者が、全力全盛を持って大錘を李信に向かって打ち下ろす。迎え撃つは李信の大矛の激突。数度繰り返すが結果は一緒だ。李信の一撃の前に巨人の肉体がたたらを踏むように流され飛ばされる。だが、幾人かは気がついていた。打ち合うたびに楊秋の身体が、吹き飛ばされる距離が短くなっていくことに。大地を、世界を揺らす激動を巻き起こし、二人の大錘と大矛が幾度も幾十度も噛み合い、破滅的な軋み音を轟かせる。これが、こんなモノが人の戦いか……と誰かがぼつりと呟いた。それも致し方なし。それほどまでに人の争いから随分と外れた闘争であったのだから。

「なんだ、なんだ……アレは一体なんなんだ……。楊秋はまだわかる。それと互角に戦うあの怪物は、一体なんなのだ」

楊秋の言うとおり、アレは外れた者だ。人の枠組みの限界を容易く突破し、易々と至強の頂に座する人にして人を越えたモノ。少なくとも、北宮伯玉には絶対に手が届かない。届かせたくもない領域に鎮座する暴虐の破壊者だ。

「……これはこれは。実にはいたしたものだのー。まさか楊秋と互する武将がいるとおもわなんだ」

パカラつと馬の上で欠伸をする女性。全身から感じ取れるのは、やる気のなさだった。女性はゆったりとした雰囲気と、ややたれている目元が特徴の二十を少し越えたくらいの年齢であった。その彼女の双眸が二人の激闘を捉えている。

「張横……なんだ、あの少年は。あんな化け物が傳變軍には存在した

のか」

「李信とか言ったかのー。あいにくとあたしは知らないけど、最近入った奴なのかのー。あの若さで楊秋と互角以上とは信じられないけどのー」

「……このままでは楊秋が負けるのではないか？」

「あ、それはないのー」

北宮伯玉の心配をあつさり切つて捨てる。それに疑問を覚えるのは当然だ。二人の戦いを見れば確かに互角に見えるかもしれないが、先程まで楊秋はおされてきたのだ。

「あたしなんかには理解できないけど、武将同士の戦いつてのは単純な武力だけじゃ決まらないのー。積み上げてきた戦歴、責任、経験……そんな格というものを双肩にのせて戦う。見えなくても確かに存在するそれは、時として力を凌駕するときもある。五十を越える戦場を越えてきた楊秋に、あの少年では及ばないのー」

だから心配ない——そんな張横の台詞が終わった瞬間の出来事であった。李信の速度が上がっていく。放たれる一撃一撃の速度、圧力、破壊力、衝撃、それら全てがさらなる進化を遂げていく。いや、皆が進化と感じたそれは本人のみはそれを退化と理解していた。かつての自分の力を取り戻していく。大小あわせて数百の戦場を駆け抜けた大將軍の重さが李信から噴出し始めた。あまりの攻撃の圧力に防戦一方となる楊秋。このままではまずいと判断し、決死の一撃で李信の大矛を弾き飛ばす。

「舐めるなよ、李信!! この俺が、この楊秋こそが!! 不敗の!! 中華最強のおおおお!!」

「不敗はくれてやる。変わりに中華最強は貰っていくぞ」

数百の戦場を駆け抜け、幾度もの敗北を経験し、それでも生き抜いてきた中華六将が一人。大將軍李信の唐竹に振り下ろした大矛が、楊秋の大錘を粉々に粉碎し、彼の頭を木っ端に打ち砕いた。

静寂は一瞬だ。傳燮軍からは勝利と興奮の雄たけびが。反乱軍からは恐れと畏れの嘆きが、周囲に木霊する。そのなかで一気に動き出した部隊があった。楊秋の直屬兵。彼らは凄まじい形相で主を討つ

た李信へと殺到する。一騎打ちが終わった今すぐならば、楊秋と戦って疲労している今ならば李信を撃てる。主の仇を取る事ができる。そんな想いで三百からなる兵隊が李信へと襲い掛かった。城壁の上にあった民兵達からは打てる手がない。一騎打ちが終わればすぐに李信が戻ってくる手筈になっていたが、まさかこうまで早く動き出すとは考えてもいなかった。反乱軍の兵士に飲み込まれた李信を助けるべく弩隊が弓を射とうとするもそれはとめられる。間違いなく李信も巻き込まれることになるからだ。次なる手をどう打てばいいか迷った次の出来事であった。

李信を取り囲んでいた楊秋兵の一部が奇妙な呻き声をあげ始める。やがて彼に殺到していた兵士達が、血飛沫をあげ始めた。歴戦の勇士、楊秋とともに戦場を生き抜いた精鋭中の精鋭が、まるで草を刈る程度の気軽さで、虫を踏み潰すかの如き手軽さで、たった一人に粉砕されていった。ただただ呆然と積み上げられていく屍山血河。単騎で全てを凌駕する暴虐の鬼神がここに在る。

その光景を、賈文和は手摺を強く握り締めたまま黙って見つめ続けた。瞬きするたびに蹴散らされる楊秋兵。数秒経つ毎に目に見えて減少していく敵兵。ぶるりっと身体が震えた。それは恐怖ではない。畏怖でもない。

彼女は、賈文和は文官であり、軍師でもある。それ故に彼女は知っている。人は力で敵わぬ相手と戦う為に武器を使う。一人では敵わぬ武人を討つ為に数を集める。大人数の戦争に勝利する為に策を練る。万を超える人が入り乱れる戦場においては、策が勝敗を左右する。それが軍師としての当然の考えだ。それが当然だと、当たり前だと、学んできた。だがそれ故にそうではないものを見たいと願う自分がいる。それもまた人の思いだ。

「ああ……ああ……なんて、なんて、なんて綺麗な……」

賈文和は見てもしまった。知ってしまった。理解してしまった。圧倒的な力が策も数も凌駕するその瞬間を。

襲ってきた全ての楊秋兵の息の根を止めた李信は、あまりの殺戮劇に動けない反乱軍を余所に城壁まで退くと繩を伝って城壁へと戻っ

ていった。城壁へと戻れば華雄達からの手荒い歓迎を受け、身体をバシバシと叩かれる。楊秋との一騎打ちよりも余ほど痛みを受けるといのが皮肉な話である。この一騎打ちは絶大な効果を發揮し、この四日目もまた意気消沈した反乱軍からの攻勢にもなんとか耐え抜くことが出来たのであった。



五日目。まさに郡城の民兵にしてみれば正念場である。

前日の一騎打ちが尾を引いているとはいえ、反乱軍の攻勢は手を緩めることはない。そして反乱軍は西壁よりも、組みやすしと見た南壁と北壁へと戦力を大きく振り分けた。楊秋を討った李信なる者が守っている西壁には最低限の戦力だけを向け、他方向からの攻略を試みたのである。しかし、それを賈逵に読んでいた。恐らくはそうなるであろうことを予測して西壁よりも、他三方向へより多くの予備兵を差し向けた。初日や二日目に負傷した民兵もまた痛みを響めながらも戦線復帰し、城壁の防衛に当たり始める。一向に崩すことが出来ない郡城の守りに、苛立ちを隠しきれない北宮伯玉は本陣にて地図が乗っていた机を力一杯蹴りつけた。

「五日、五日だぞ……民兵主体のこんな城がっ!! 一体どれだけ時間

をかければ気がすむというんだ!!」

北宮伯玉の怒りもわからないでもない。本来ならば初日、或いはかかって二日程度で終わらせることが可能だと考えていた攻城戦だ。これだけ時間をかけてしまえば既に漢王朝も反乱軍への対策を立て終えてしまっているだろう。しかも丸々戦力が残っていれば良いが、城攻めで少くない兵士が死傷している。更に加えて手下八部の三人が討ち取られるという有様だ。もはや反乱は失敗したといっても過言ではない。それほどまでに現状は悪化の一途を辿っていた。

さらには朝には西壁の前に雲霞の如くいた反乱軍兵士も、その数は既に一割を切っていた。登壁部隊が底を尽き始めていると言うのに、城門が内側から開けられる様子は一切見られない。登っていった兵士達は何をしているというのか。北宮伯玉の疑問は実に簡単な答えだ。つまりは——皆殺し。他三方に予備部隊を出し尽くし防衛を強固にした代わりに、西壁の兵力は他に比べてかなり少ない。一人一人にかかる負担が大きい中、その状態で城壁の上を死守している。それでも、城壁の民兵達は死力を尽くす。最前線にて矛を振るい続ける男の姿。李信が矛を振って敵を薙ぎ倒すごとに、指一本動かかせないと思っていた身体が動く。足が前へと踏み出される。李信の背中が何も語らぬその背中が、民兵達の心と身体を突き動かした。ただただ斬って、ただただ射って、ただただ殺す。無心を武器に戦い続ける民兵達。いつ命の灯火が燃え尽きてもおかしくはない現実。それでも彼らは戦い続ける。何時終わるとも知れないこの死線にて、命を燃やす。

「……おい、あれ」

四方の城壁が死闘を繰り広げる最中の出来事であった。誰かが何かを見つけた。アレはなんだ、と短く問いだした。彼らが見るのは遙か北方。地平の彼方よりそれらがやってきた。砂塵を巻き起こし、数千の馬軍が離れていても感じる圧倒的な重圧をともに引き連れて。馬の文字が縫い付けられた旗を幾つもたなびかせてやってきた。

「——きたっ!! きてくれた!! しかも、五日で!! きてくれたよ、李信!!」

司令室にいた賈☒の感謝の雄叫びが、郡城全てに響き渡った。

馬の文字。それは即ち——涼州の覇者。最強の軍を率いる英傑馬騰。その人に他ならない。しかし、民兵達の顔色は優れない。なぜならば彼らは知っているからだ。韓約と馬騰が義姉妹の契りをおこなっていることを。普通ならば反乱軍の援軍にきたと思うしかない。逆に反乱軍は思いもよらぬ援軍に胸を撫で下ろす。だが——。

「……約よ!! いや文約よ!! お前は私を裏切ったな!! 義姉妹の契りをおこなった私を裏切った!! 決して反乱軍には組せぬと誓った私に、暗殺部隊を送り込むとは!!」

それは怒りであった。隠しようがない憤怒であった。

「我が家族を狙ったお前の裏切り!! それはそっくりそのままお前に返させて貰った!! お前の家族が隠れ住んでいた屋敷を焼き討ちにしてやったぞ!!」

全ての人間に聞こえるように、叫び吼える馬騰。それを聞いた反乱軍の本陣にいた韓約は呆然と彼方にいる馬騰を見ていた。それにあわてたのが北宮伯玉である。まさか、どうしてだ。韓約の家族は人質にとったあと自分の配下に見張りを付けさせていたはず。いや、そういえば二、三日まえから連絡が途絶えたことに、気づいていなかった。それは予想外の苦戦の結果だ。だが、何故馬騰が韓約の家族の場所を——。

「約束を、守ってくれたか……騰よ」

「……お前か!! お前だな、韓文約!! お前があの女に情報を伝えたのか!!」

「何のことだ……とはもう言わぬ。そうだ、我が騰に暗号で全てを伝えていた」

「お前、くそっ!! だが今更人質解放が成ったからなんだというんだ!! お前はもはや破滅しか残されていないんだぞ!!」

「当然だ。我ももはや生など求めておらぬ。家族さえ助かれればそれでよい。我は賭けにかかったのだ。それに……今更我を慕って反乱軍に参加した皆を裏切るきにはなれん」

反乱軍、傅燮軍の皆が馬騰の言葉を聴いた。韓約文約の家族は焼き

殺した、と。これで彼女の家族には刑が及ぶことはない。死んだものを裁く法はないからだ。後は馬騰が責任を持つて韓約の家族を遇する。それが書簡の暗号に書かれた韓約最後の願いであった。それが明るみに出たときはただではすまない。その危険性を知っていながらなお、馬騰は韓約の願いを引き受けた。義姉妹の契りは、それほどに馬騰にとつては重かった。

「ぐう……南、北壁の登壁部隊を馬騰へと向かわせるんだ!! 敵は精々が五千!! 精兵といえど如何様にも——」

「諦めよ。我らの負けだ、伯玉よ」

「何を言つて……」

そして今度こそ北宮伯玉は言葉を失つた。韓約の視線の先、遙か東側から此方に迫つてくる軍があつた。皇の文字が刻まれた旗がたなびく大軍団。実に総勢六万にも及ぶ漢王朝からの討伐部隊であつた。

「皇の字だど? まさか……皇甫義真かっ!!」

こんな状態で漢王朝からの討伐隊が届く。予想よりも遙かに早い。これでは反乱軍が蜂起してからすぐに準備をせねば間に合わない計算だ。今の王朝にそんな判断力があるとは予想外もいところだ。全てが、北宮伯玉の計算を越えたところで動いていた。韓約も、馬騰も、傅燮も、漢王朝も。全てが彼の計算を狂わした。

「さてさて。まさか郡城が落ちていないとは。斥候部隊の言うとおりですね。流石は傅燮殿。感心するのはあとにしてとりあえずはまあ——」

殲滅することになりましたか。

皇甫嵩の指揮と同時に雪崩れかかつてくる討伐軍。唯一勝つていた兵力も、討伐軍参加でひっくり返された。もはや勝ちの目が一切なくなつた状況に、北宮伯玉は混乱に陥つた。ここから逆転の一手などありえない。折角築き上げた反乱軍が潰されるのは口惜しいが、今はこの場から逃げ出すしか方法はない。

「大将文約よ!! 副将北伯玉よ!! お前たちの首はこの馬騰がもらいうけるっ!!」

怒号とともに軍の先頭を駆ける馬騰が逃がすものかと、二人の名を

名指しで叫ぶ。それに忌々し気に舌打ちする北宮伯玉だったが、あんな化け物と真つ向からぶつかり合うなど願い下げだ。乱戦に持ち込まれた隙を狙ってさっさと撤退を試みようかと決断した。城攻めをしていた反乱兵も、馬騰が敵なのだど理解したものの、さらに加えての討伐軍。もはや勝負はあった。末端の兵に至るまで勝敗がついたのだと悟った彼らの行動は綺麗に二極化した。即ち戦う兵と逃げる兵。半ば成り行きで参加した兵からしてみればこれ以上の戦は無駄に命を散らすだけだ。韓約の宦官誅殺すべしという理想に従って参加した兵士達は、自分たちこそが漢王朝を救うのだという確固たる目的を持っていて。故に、今更逃げ出すものかと決死の覚悟で突撃を繰り返す。

完全に救われる形となった郡城の民兵は、命すら燃やし尽くすほどに戦った影響かほぼ全てが城壁の上に座り込み、援軍に來た馬騰と皇甫嵩の軍の応援を行い始める。生き残った。勝ち残った。それに安堵しながら、勝利を願っていた。司令室にいた人間もまた同様だ。数万の民の命を背負った傅燮もまた壁にもたれかかって吐息を漏らす。この五日間の責任たるや、凄まじいものであったからだ。いかに傅燮といえど平然としていられるわけがない。そんな傅燮がふと気づいた。賈☒がなにやら思索に耽っていることに。なにやらぶつぶつと呟いており、少し気味が悪いかなどと……と結構酷いことを考えていた傅燮を置き去りに、賈☒が声を上げた。

「———そういうこと、か。それしかない。うん……間違いない!!」
そして賈☒は、手摺を飛び越え——高台となっている司令室から飛び降りた。止める間もない彼女の行動に悲鳴をあげそうになる傅燮。城壁へ向かって落下している彼女はただ一箇所のみを見つめながら息を大きく吸う。

「李信——!!」

突如聞こえた賈☒の声に、何事かと上を見上げれば落下してくる賈☒の姿。さすがに度肝を抜かれ飛び降りてきた彼女を慌てて受け止める。下手をしなくても打ち所が悪ければ死ぬ可能性があったかもしれない賈☒の行動を諫めようとするも、肝心の彼女は李信の胸に抱

かれたまま口を耳に寄せてなにやら囁いた。他の誰の耳にも届かないほどの小ささで幾度かの語りを終えると、李信の手から離れて城壁へと立つ。

「……出来る？」

「全力は尽くす」

「うん。お願い」

手を掲げた賈逵に戦争開始前と同様に拳を合わせる。軽く準備体操をした後に、自分の背後にいる隊員に声をかけた。

「動けるものはない。これが最後の大暴れだ」

本来ならば行く必要はない。後は馬騰と討伐軍に任せれば良いのだから。だが、隊長が行くと言うのだ。ならばとことんまで付き合おう。ろくに動かない身体をおして、華雄も、高順も、胡軫も、そのほか飛信隊全ての者が李信の背を追った。

乱戦が続く。続いている。だが、殆どが反乱軍の兵士がほぼ一方的に虐殺されていつている。彼らも五日間という攻城戦の真つ只中で奇襲を受けたのだ。一方的になるのも当然の話である。特に目立つのが馬騰率いる騎馬隊で、圧倒的な制圧力と突破力で本陣に向けて一直線に攻め入ってきていた。先頭に立つ馬騰——いや、何時の間にか馬超が軍の前を行き、その槍捌きで瞬く間に多くの敵兵を突き殺していく。そこへ止めに入る者達もいた。何と彼らは馬騰達の突撃を身を呈してとめて見せた。相当な熟練の騎馬兵の登場に馬騰は邪魔だ、といわんばかりに槍を放った。恐らくは実力から見て手下八部の誰かの配下。相当な力量の持ち主ばかり。これはそう簡単には抜けないか、と考え付くも、なんとかして本陣に辿り着かねばならない。もはや韓約を救う術はない以上、せめて友を討つのは自分の役目でありたい。ましてや自分以外のものが彼女の首をあげようなど認められるものか。韓約の亡骸を辱めようなど絶対にさせるものか。強い意志と確固たる信念を持って馬騰が吼える。それに続くように馬一族の騎馬隊が放つ圧力を増していく。

近づいてくる馬騰を尻目に逃げ出そうとした北宮伯玉だったが、彼の足はとある二人に止められていた。馬玩と張横に、である。二人の

放つ殺気と視線はそれだけで人を殺せるのではないか、と思わせるほどに鋭く冷たい。

「……わしらが愚かだったということか」

「そうだのー。ろくでもない人間だとは思っていたが、考えていた以上の最低な奴だったのー」

彼と彼女。二人は武将と言うよりは軍師よりの人間である。そんな二人は韓約がこの反乱軍に対する本気度が薄々さほどではないことに気づいていた。だが、それでも韓約には恩がある。故に従っていた。だが、先程の馬騰の台詞でようやく気づいた。違和感しかない馬騰の宣言。恐らくは韓約は北宮伯玉に人質を取られていた。反乱軍総大将の座を引き受けたのはそのためだ。そこに気づかなかった自分たちの愚かさが憎いが、今はそれよりもこの愚か者をどうするかの問題だ。この男の首を持って討伐軍に降り、助命を請う……いや、無理だ。幾ら脅されたといえど大将を助けることなど絶対に不可能。許されないだろう。ならばどうするか。如何にして韓約を助けるべきか。考える二人であつたが、時間があまりにも足りなく、状況は切迫していた。

「どけ、お前達。僕の道を邪魔するな」

「いやいや。お主はここで殺さねばならん。いや、殺す。韓約様を裏切つたお前は絶対にいかしてはおけん」

「同感だのー。お前は生きていて良い理由なんて存在しないのー」

三者三様。後何かしらの切っ掛けがあれば堰が決壊する川の如く。

ピリピリとした空気が充満する中で、騎馬隊を押しつけて韓約の名を叫びながら馬騰が馬を走らせる。

「お前が我を殺してくれるか、騰よ。やはりお前は私の最高の友——」

韓約の感謝の言葉を邪魔するように、馬騰とは異なる方角から激しい衝撃音が鳴り響いた。あらゆる敵兵を退け、砕き、押しつけて、飛来する矢が如く、李信を先頭とする飛信隊が乱戦の場を潜り抜けてきた。李信を邪魔しようとする敵兵を、隊員が防ぎ、隊長を一人目的へと向かって押しやった。手練れの騎馬兵達は華雄と高順、胡軫が相手

取り、ついに李信は全ての敵兵を突破して疾駆する。彼の動き、速度、距離、全てをとって馬騰よりも更に速い。

韓約は自然と友である馬騰から李信へと視線を移した。

迷いのないその姿。曲がることのない鉄の意志。楊秋すらも容易く屠った絶対的な力。

それら全てが我には眩しい。どう考えても持つはずがなかった籠城を成功させたのは間違いなく李信の存在だ。数を凌駕する完成された武。完全なる武。畢竟へと至った武。ああ、なんと美しいことか。その姿、私の冥土の饑には上等すぎる。一度しか会っていない。一度の顔合わせ。それだけだったが、我とお主にはそれで十分だ。お主が我を殺す者だと、殺して欲しい者であったこと。それが今ここでかなえられる。

二つ結いの紐をはずし、はらりつと風になびく真紅の長髪。完全に死を受け入れた韓約が、目の前で地面を蹴って飛翔した李信を抱きしめるように両手を広げた。

「ああ……やはりお主が。私の……」

死神であったか。

恋する乙女が如く。狂愛する女が如く。

死を届けに来る李信を愛おしむ。

「我が首をもって、飛翔せよ。遥かなる蒼天の彼方まで。この時代における最強の將軍と成り果てよ」

子供の時より数多の書物を読み解いた。その中で最も心惹かれたのは戦乱の時代でなお光り輝いた者達。中華で初めて統一国家を作り上げた大国家秦。大国家秦でその名を轟かせた中華六将。武神を殺したという伝説の男。わくわくした。胸がときめいた。かつてはそんな男が存在したのだと。だが、ああ、だが……お主ならば神をも殺すことができるやもしれん。

そうだ。そうなのだ。お主が。お主こそ我が中華六将李信である。

だが、天から降り立った李信は韓約の乗る馬を蹴り——更なる加

速を行つた。その衝撃で馬が暴れ不意の出来事に韓約は馬から振り落とされた。地面へと墜落した彼女が見上げれば、視線の先にて大矛を一直線に北宮伯玉へと振り下ろす姿の李信があつた。されど、北宮伯玉は李信の矛を剣で受け止めた。馬鹿な、と誰しもが驚いた。あの楊秋を屠つた男の一撃を優男の北宮伯玉が受け止めることができるのか、と。

「舐めるなよ、小僧。僕は王になる男だ。僕を殺すということは、国を滅ぼすことに等しい!! お前如きが王たる器である僕をどうにかできるとでも思つて——」

「悪いが」

ギシつと大矛からの圧力が増していく。

骨が砕き折れそうな衝撃をともなつて、剣が圧された。

「国ならば幾つも滅ぼしている」

「ちよ、ちよつと待つ——」

命乞いの暇も与えずに、李信の大矛が剣ごと北宮伯玉の頭を砕き割つた。びしやりつと弾けとぶ鮮血を浴びながら地面へと降り立った李信は一息。

「——飛信隊が李信!! 反乱軍総大将韓文約討ち取つたぞ!!」

戦場の隅々にまで聞こえる将の声が、反乱の終結を告げる勝鬨を響かせた。

第20話：李信と劉弁

「……これは、一体どういうことなのだ？」

何がおきたかわからない。そんな疑問がありありと顔に出ている韓約。それに彼女の下まで辿り着いた馬騰もまた同様だ。確実に死を理解した。李信に殺されることを望み、願い——それなのに何故生き残っているのか。ましてや、李信のあげた宣言。北宮伯玉を討ち取っておきながら、反乱軍総大将の韓約の名を叫んだ。それはこの戦場の隅々にまで届いただろう。まさか間違えたわけでもなからうに。そんな呆然としている二人へと李信が近づいてくる。歩いてくる途中に血まみれになっている服を脱ぎながら、上半身が裸になった李信が足をとめた。その姿にゴクリつと生唾を飲み込むのは韓約だ。極限にまで鍛え抜かれた彼の身体。未だ成長途中でありながらも、鋼までに磨き上げられた李信の肉体に目が釘付けとなる。そんな韓約へと李信が脱いだ服を投げつける。バサつと頭から血まみれの服を被った小柄な彼女を軽々と抱え上げると、馬上にいる馬騰へと放り投げた。視界が封じられたさなかの空中浮遊に、はぎやつと意味不明な声を上げた韓約を受け取った馬騰の訝しげな様子に李信は流星に説明は必要か、と頭の中を整理してから——。

「まずは援軍来て頂いた感謝を。そして賈□からの伝言だ。韓文約はここで死んだ。そう伝えればあんたならわかると言つていたが……どうだ？」

「……まさか。文和は、此方の事情を知っていたのか？ 伯玉めが策謀を張り巡らしていたことを」

「いや。今さっきまで全く知らなかったらしいが。あんたの様子と発言で、なんとなく察してみたんだぞ」

「——はっ。信じられぬが、信じるしかあるまい。あの文和が、戦争を経験して化した、か。あやつももはや怪物の類に至ったか」

賈□の予想。想像。戦争前から感じ取っていた違和感。総大将が韓約ではないことに薄々気づいていた賈□だったが、一体誰が本当の大将であるか、流星にわかってはいなかった。だが、馬騰の登場に

よってその疑問は氷解する。馬騰の発言のちぐはぐさ。彼女を知っているからこそそれに気づけた。あの韓約が馬騰に暗殺部隊を送るはずがない。そんな馬鹿な。そしてその報復として韓約の家族を焼き討ちとした。それもありえない。絶対に馬騰は行わないと断言することが出来る。ならばその発言の真意は何か。韓約が反乱軍に参加する理由……馬騰の言から家族を人質に取られたのではないかと賈☒は読んだ。飛躍しすぎだと他の者からは思われるかもしれないが、その発言の後にでた北宮伯玉の名。外道で知られる彼ならば、それくらいはやってのけるはずだ。家族を人質に取られれば韓約は反乱軍に参加せざるを得ない。だが、単純に反乱に参加した大将ともなれば親類縁者ともに極刑に処せられるだろう。従うだけでは駄目だ。故に秘密裏に馬騰に助けを求めたのではないか。そしてそれに馬騰が応えた。韓約の家族は既に殺した、と宣言することによって漢王朝から親類だけでも命を助けようとしたのではないか。そして、馬騰が突撃の最中に叫んだ北宮伯玉——あれは彼女が隠しきれなかった憎悪をぶつける相手。憎むべき存在。つまりは、反乱軍を影で操ろうとしていた男ではないか。あの短い間にそこまでを読んだ賈☒は、李信にあることを頼んだ。それが、先程行ったこと。北宮伯玉を殺し、韓約の身代わりとすること。そうすれば韓約の命を助けることが出来る。もちろん、漢王朝まで首級が運ばればばれてしまう可能性があるため、あえて顔ごと粉碎させた。勿論、このことが明るみにできれば関わったもの全てがただでは済まない。その覚悟があるか、という意味で馬騰を見つめる李信に、彼女は力強く頷いた。

「……お前達の行動全てに感謝する。この恩は山よりも高く谷よりも深い。必ずこの恩は返すことを約束しよう」

くんくんと李信の血まみれの上着の匂いを嗅いでいる韓約を馬前に乗せて、馬騰は深く頭を下げた。数日間戦いの間着続けた服からは凄まじい匂いがするだろうに、どこか彼女の表情は恍惚としている。二人にじっと見られていることに気づいた韓約は、ごほんつと咳払いをしてなにやら誤魔化そうとしているが、騙されるような二人ではない。

「……し、しかし。我には反乱軍を率いた者としての責任が——」

「——反乱軍総大将、韓約様!! 討ち死に!!」

「韓約様討ち死にですのー」

韓約の発言を途中で遮る声が響き渡った。馬玩と張横、二人が馬に乗り、そんな言葉をひたすらに叫び始めた。二人とも、馬騰と李信の会話の意味を悟ったのだろう。馬上から、ふつと笑った二人は背を向けて西へと向かって走り出した。喉が潰れても構うものか、と延々と繰り返す。韓約が討ち死にしたことを全ての者に理解させようとしているかのようであった。

そんな二人の行動に胸を痛めながらも、韓約はすまぬ……と小さく感謝と謝罪を漏らした。やがて韓約が討ち取られたのが事実だと知ると、反乱軍の全ての兵士達が総崩れとなって西へ西へと撤退を開始する。もはやこの流れはとめられない。ここに反乱軍の、いや北宮伯玉の野望はついに潰えた。

「李信……我は、お主に感謝しかない。完全に諦めていた我が命。こうして拾えるとは思ってもいなかった」

「その礼は賈☒にでもいってやってくれ。ここまでの絵図は全部あいつが描いたんだからな」

「それでも、それでもだ。ありがとう、李信」

「まあ、漢王朝にせいぜいばれないようにしてくれたらいい。拾った命を無駄にするなよ、韓約」

「——韓遂、だ」

「うん? 韓遂?」

「韓約は死んだ。この日この時この場所で。李信……お主に確かに討ち取られたのだ。今ここにいる我は、韓遂。これより韓遂と名乗ろう!!」

これ以上この場に止まっては危険だと判断した馬騰が馬を北へと走らせた。あつと言う間に遠ざかっていく。離れていく李信へこれ以上ない未練と愛情を捧げて韓約——韓遂は叫んだ。

「我が頭脳!! 我が心!! 我が身体!! 我が命!! 我の全てを……必ずやお主のために使って見せよう!! 待っててくれ、我の中華六将よ

!!



涼州における反乱が終結してから早一ヶ月。李信の姿は首都洛陽の宮中前にあつた。一年も離れていないというのに随分と久しぶりに感じるのはそれだけ赴任していた涼州の日々が濃密だったからであらう。そして彼のすぐ後ろには二人の少女が周囲に落ち着き無く視線を散らしながらも付いてきていた。賈☒と董卓の二人である。本来であるならば、太守傅燮が来るはずであつたが、混乱冷めやらぬ涼州から抑えとなる彼女が短期間とは言え不在となるのは状況的に宜しくない判断し、結果この二人が李信とともに洛陽に派遣されることとなつた。

門を通され、宮中へと入っていく李信達三人を遠目で見ていた人物がいた。たまたま宮中近くに用事があつた名門汝南袁氏が後継——袁紹本初であつた。彼女の後ろには、かつての時と同様に沮授と田豊、張☒の三人がつき従っている。本来ならば袁紹が声をかけようとしたのだが、珍しくも真面目な顔をした張☒が主を止めた。今まで聞いたことがないほどに緊張感溢れる声で、だ。どうしたのか、と問い

掛ける袁紹だったが、李信達の姿が見えなくなってようやく安堵の吐息を漏らした。

「うちは、こう見えてもそれなりの場数を踏んできたつすよ。数多の戦場を生き抜いて、戦い抜いてきたのはご存知だとは思うんすけど……だからうちはそれなりに自分の勘つてのを信頼してるわけつす」

文官のお二人には理解できない事かもしれないが、と。

「その、うちの勘が完全完璧に外されたつすよ……李信。あの子、うちでも手におえない領域に足を踏みいれちゃってる感じつすねえ」

以前ならば片腕一本を犠牲にすればなんとかなったが、今は逆に李信の片腕一本を持っていけたら運が良いほうだ、と答えた張□だったが、何故かあははは、と愉しそうに笑う。それに馬鹿な、と短く驚きの言葉を発するのは沮授と田豊だ。名門袁家武の四柱の一人にして、最強の武人張□が、戦う前から負けを認めるなど。しかも、以前会ったときから一年も経っていないというのに、張□に追いつき追い越した。そんなことがあり得るのか、とただただ驚嘆するばかり。

「おーほっほっほっほ!!」

そんなうろたえる部下を尻目に、高笑いをするのは袁紹である。張□の言ったことなどまるで聞いていない、堪えていない。泰然と佇むその姿は、幼いながらも配下に安堵感を与えるものだ。

「面白いですわね。李信さん……是非とも私の軍に入っていただきたいですわ」

民に戴かれる王。袁紹本初は、宮中へと入っていた今は見えない李信の姿を脳裏に思い描きながら楽しげに、愉しげに、部下に止められるまで笑い続けていた。

一方、宮中へと入った李信は何やら奇妙な笑い声を聞こえたのか、反射的に背後を振り返る。洛陽に到着してから気もそぞろになっていた二人であったが、宮中に至ってからは既に挙動不審な様子が目立っていた。そんな状態でいきなり李信が振り向くのだからビクッと面白いほどの反応をする。何よ、と不満も露な賈□に、気のせいだと短く答え歩くことを再開させる。それに続く二人の動作が緊張で固いのは無理ななろう話だ。涼州という片田舎から出たことなの

かった賈☒と董卓が、他の州へと出た初めてが首都なのだから。勝手に知った家とばかりにどんと通路をゆく李信の姿を頼もしく感じながら——突如として立ち止まった彼の背中に顔を打ち付けた。「痛っ……ちよつと何止まってるのよ」

思わず口からでた文句も聞こえていないのか、まっすぐと前を向く李信の視線を追ってみれば豪華絢爛な通路の先に一人の女性が仁王立ちしている姿が見かけた。その女性を見て、思わず賈☒と董卓はポカンと口を開いた状態で釘付けとなってしまった。可憐な董卓は当然として、自分の容姿もまた周囲から褒められていること知っていた賈☒はそれなりであると自負しているが、そんな彼女でさえも見惚れてしまう絶佳の美貌の女性がそこにいる。太陽の光を浴びて光る白金の長髪が、同性でありながらも心惹かれた。容姿の美しさだけでなく、離れていても分かるのは桁外れの重圧だ。馬騰や韓約といった英傑級のさらに上。半ば人間を辞めかけている文官としての畢竟。それに加えてあらゆる者を問答無用で惹きつけ従える上に立つ者としての風格。全てを揃えたある種の到達者。知らず知らずのうちに、うあ、と短いうめき声が漏れていた。言ってしまうえば格の違いを向かい合うだけで思い知らされた。

「張讓……」

「久しぶりだな、李信よ。随分と大きくなった」

「一年も経っていないんだ。そんなに簡単に身体が大きくなるものかよ」

「身体ではない……お前の在り方だ。といつても、本人にはわからんか」

ツカツカと音を鳴らしながら李信へと近づいていく張讓。彼女はバツと両手を広げてそのままの勢いで彼に抱きつき力一杯手を背に回す。突然の行動に、後ろにいた賈☒と董卓の開いた口が塞がらない。突如弩級の美女が現れたかと思ったら李信を抱擁する。彼女達の理解度を超える事態に、思考が固まったとしても仕方ないだろう。胸に寄せた頬から伝わるのはドクンドクンと力強く波打つ心臓の音。李信の鼓動を聞きながら、張讓は目を閉じた。久方ぶりの李信との邂

近に、身体の奥から燃え滾る熱が這い上がってくる。氷の張讓と噂される彼女の全てを溶き焦がす、大灼熱の高揚感。力が、想いが、心が、深奥から沸々と沸きあがってきた。

「ちよ、ちよちよちよちよ——ちよつと、な、な、なになになににするのよ!？」

いつまでもこうしていたいという気持ちを防げる賈文の声が周囲一帯に轟いた。へう、と顔を赤くしながらもまじまじと見ている董卓とは逆に、賈文がビシッと指を指しながらこちらもまた顔を真っ赤に染め上げて李信と張讓に噛み付かんばかりの勢いで言葉を投げかけた。それは董卓と同じような羞恥からきていたのか、それとも別の感情からきていたのか、どちらであるのかはまだ賈文自身気づいていないものだった。

「……無粋な。なんだ、こやつらは」

「漢陽で世話になった二人だ。若いが、優秀だ。特にそっちの賈文和は、下手をしなくてもお前に匹敵するぞ」

「ふっ……お前がそういうのならばそうなのだろうが。あまり私を甘く見るなよ、李信」

上目遣いで李信へと語りかける張讓は大層可愛らしくも妖艶だ。だがそんな色香で参るのならば、とつくに李信は誰かしらの手に落ちてしまっていたことであろう。抱きついていて張讓から逃れる為に、軽く胸元を押しやれば——固い感触しか手に残らず。無意識に出た、固いという言葉に、張讓がスパンと李信の頭を軽く叩く。なかなか酷い言葉だったのは自覚しているのか李信は素直に、すまんと謝罪する。自分の身体が女性的な特徴に欠けている事は認識しているし、事実のためそれ以上は張讓も李信を責めたりはしなかった。そんな気安さを感じさせる二人の関係は一体どんなものかというのか。そこで賈文は気づいた。李信が呼んだ彼女の名……それは張讓。それを改めて脳内で呼びなおすと、頬を引き攣らせた。なんと相手は十常侍の筆頭ではないか。涼州に送られて来た際には、確かに張讓のお墨付きという話はあったが、まさかこれほどまでに張讓に大切にされている存在だったとは。明らかに張讓の目には暖かな光が見て取れ

た。普通ではな想いを抱いているのだと、初めて会った賈□ですらはつきりと理解出来る。だが、何故かそれが気に入らない。元々鋭い眼光がさらに鋭くなって、張譲を見つめる賈□の姿に、睨まれている張本人はそれを浴びながら、ふっと笑った。

「面白い。私にここまで遠慮なく敵意をぶつけてくる者は久しぶりだ。それがどんな想いであろうとも、なかなか心地よいぞ小娘よ。お前も私と同じか」

だが……と短く呟いて。

「我ら二人。求める者はただ一つ……自覚していようがいまいが、我らは俱に天を戴かず」

求める者はたった一つ。たった一人だ。絶対に、決して、誰であろうとも譲らんぞ。言葉にはせずとも確かに伝わった熱き想いに賈□は——気圧されたのは一瞬だ。戦乱を経験し、完全に化けた彼女は張譲の圧力すらも耐え切れる強さを身につけていた。ここでは死んでも退けないという強い想いで、張譲をさらに強く睨みつける。その視線に晒されながら、張譲は気にとめずに最後にもう一度李信を強く抱きしめ何が愉快だったのか笑いながら宮中の奥へと歩き去っていった。

「……ちよつと!! ちよつと、李信!? 何よ、あいつは!?!」

「詠ちゃん……張譲様にそれは失礼だよ」

あまりの噛み付き具合に董卓がやんわりと注意をするものの、賈□の勢いは止まらない。李信としては、張譲と賈□が何故ここまで噛みあわないのかと不思議でならなかった。才を愛する張譲ならば、賈□のことは大層に気に入るのではないかと思っていたからだ。いや、実際に言葉では不穏なことをどうこう言ったが、実のところ気に入ったのではないかと、李信は考え直す。本当に嫌っているのならば、あの張譲録に話しかけることもしないからだ。賈□のほうは……どうやら第一印象はあまりよくなかったようだ。面倒なことだと、賈□を宥めながら論功行賞が行われる間へと急ぐ。賈□や董卓の緊張もほぐれたようで、それだけが幸いであった。

やがて三人は巨大な、それこそ賈□や董卓が見たことがないほどに

大きな部屋へ辿り着いた。普段通りとなつた賈逵達ですら、思わず気圧されるほどの人がそこには集まっている。武官、文官問わず、謁見の間を埋め尽くす人だらけ。これら全てが漢王朝を支える者達なのか、と息を呑む。三人は集団の一番後ろへと待機し——しばらくすると趙忠が皆の前に姿を現した。ざわめいていた集団がシンツと静まり返り、ガーンと鐘が鳴らされる。

「皆の者、拝礼せよ。弁皇女の御入殿である!!」

一切に皆が跪く。賈逵達も慌ててその場に膝をつき拝礼するも、皇女を見ようという気持ちはあれど、恐れ多くも漢王朝の皇女様。視線を送ることなどできよう筈がない。だが、何故皇女がでてくるのか、と不思議に思うのは当然で、このような場合皇帝である劉宏が行うからだ。そんな疑問が表情に出ていたのか、李信が小さくその答えを賈逵へと囁いた。

「……大きな声ではいえないが、劉宏陛下はあまり身体が調子がよくないらしい」

「……そうなんだ。式典にもでられないほど?」

「さてな。末端の俺には調子などわから——」

李信の言葉が途中で止まった。何事かと賈逵が顔をあげれば彼の視線はゆらゆらと揺れながら歩いて現れた一人の少女の姿に釘付けとなっていたからだ。女に夢中になっていることに若干の腹が立つた賈逵だったが、その少女を見て悲鳴を抑えるのが精一杯であった。漆黒の長い髪を揺らめかせ、触れれば折れるのではないかと思われる細い肉体。仙姿玉質……人とは思えない、思わせない病的なまでの美貌。だが、それ以上に彼女はおかしかった。決定的に理解が出来なかった。彼女が背負うのは闇。いや、そんな言葉すら生温い。地獄の亡者すらも裸足で逃げ出す、どうしようもないほどに壊滅的で絶望的な人の世の全ての怨念を背負って劉弁は玉座に座った。ありえない。何故耐えられるのか。何故生きていられるのか。あれだけの人の憎悪と嫌悪。悪意と怨念。忌み嫌われ、死を望まれる。数万数十万などという数ではない。数百万でも足りない。数千万、数億。或いはそれ以上の死を背負い、それでも平然としている化け物がこちらを静かに

無感情に睥睨している。あれは魔王だ。あらゆる人の上に立ち、あらゆる王の上に立ち、万象全てを支配し、気に入らなかつたら破壊する。なぜ、なぜ漢王朝が劉弁をあまり表に出さないのか。こんな存在を公表してよいわけがない。その気になれば漢王朝すらも歯牙にもかけず滅ぼすであろう化け物が。まさか王族などで存在しようとは。

「……それではこれより論功行賞を始める!!」

賈☒の思考を遮るように、趙忠が論功の開始を宣言した。

「まずは皆のもの。反乱軍の鎮圧、大儀であった。今回は特に功の厚かった四人を賞する!! この四人には特別に……祝いの剣を授与しよう!!」

本来であるならば、劉弁から祝いの剣を贈って貰いたい所ではあるが、相変わらず何を考えているのか不明な爆発物的な皇女様に、これ以上余計なことはさせられぬ、と趙忠は途中で文言を変える。この論功行賞に顔を出してもらえただけでも奇跡的なことなのだ。それでは今は満足するしかない。

「それでは第四功……皇甫將軍前へ」

今まで静寂を保っていた謁見の間に喚声が響き渡る。武官、文官ともに皇甫嵩の功績を褒め称えていた。

「討伐軍を従え反乱軍を鎮圧した貴殿の功績は実に見事。褒美として爵位を一つ昇級。金二千と宝物十点を授ける」

「ありがたく」

趙忠の前にて進み出た皇甫嵩が膝をついて彼から祝いの剣を受け取った。内心では殆ど何もしてないんですけどね、と棚から牡丹餅状態の自分に呆れつつ自分の立ち位置へと戻る。その際に最後尾にいる李信をちらりと見て、ふうと吐息を漏らした。

あれが李信。張讓の保護して欲しいと願った男。反乱軍鎮圧の時に見た荒れ狂う獣の姿。なるほどなるほど。どうやら自分は完全に勘違いしていたらしい。あれは近い将来必ずや自分達將軍の位を突き抜けていく存在だ。戦場で生き、戦場を支配する。まさかこんな時代においてあんな化け物が生れ落ちるとは。いや、或いはこんな時代だからこそかもしれませんね、と新たな世代の息吹を彼女は感じ取っ

ていた。

「第三功。郡城の住民にこれを授ける。彼らの多くがただの市民でありながら漢王朝のために命を投げ出し戦った。それは賞賛に値すべきことである」

ひいつと悲鳴をあげた郡城の住民代表がカチコチに固まりながらも前に出て趙忠の前で跪いた。趙忠のこの言葉は嘘偽りのない本音であった。彼もまた元々はそこまで位が高くない文官であった。だがそれこそ智謀を張り巡らして全てを賭けて十常侍筆頭にまで上り詰めた彼だからこそ、ただの一般市民が数万にも及ぶ兵士から街を守りきったことに對する感動を覚えた。彼らを賞賛することに何のためらいがあるうか。

「第二功。太守傅燮。及び賈文和」

ついに来たか、と賈☒が気合を入れて立ち上がった。この広間にいる全ての者からの視線を一身に浴びた彼女は、かつてない緊張に襲われる。地に足がついていない。頭がふわふわとするなか——落ち着けという隣の李信の言葉に我を取り戻す。軽く頭をふつて前へと出て行く賈☒に、初めての時は自分もあだつたと懐かしい思いに浸っていた。いや、それよりも……。

「……何やってんだあいつ」

隣にいた董卓にしか聞こえない呟き。それを董卓は賈☒のことかとも思ったが、友は特に失敗をするでもなく趙忠から褒美の剣を受け取っている。一体誰のことを言っているのか、と疑問に思えど……結局董卓にはその意味を理解できなかった。肝心の李信は他のことを考えていたせいか、賈☒の論功もいつのまにかおわっており、彼女は特に大きな失敗をするでもなく李信の横へと戻ってきた。昔の自分よりよほど据わっている賈☒の心に苦笑。かつては何がなんだかわからずに、前に座っていた土門將軍を踏み潰して歩いていったこともあった。よく斬られなかったな、俺はと内心で呆れる李信。

「そしてこれが最後であり、最大の功。第一功にして、特別大功である」

ざわりつと空気が揺れた。そこまでの功績を残した武将がいるの

か。

第一功にのみならず、本来ならば授けられることのない特別な大功。それを授与されるなどこの場に集まった彼らでさえも聞いたことがない。

「涼州独立遊撃部隊。飛信隊……隊長の李信、前へ」

まさかこのような場で李信を論功することになるとは。政的である張讓の懐刀、自分の多くの策謀を打ち破った憎き男。だが、それでも今回の彼の残した武功は褒め称えられるべきである。それだけは認めねばなるまい。ふん、と目の前に来た李信を睨みつける趙忠であったが、肝心の彼の視線は趙忠にない。趙忠の背後に送られる視線に、なんだと疑問に思えば――。

「……飛信、隊？ 李信……？ 李、信だと？」

がたつと音がした。まさかと思つて振り返れば劉弁が玉座から立ち上がり信じられないものを見た、と驚きを露にしている。そんな彼女の姿を見て、驚くのはこちらだと言わんばかりに趙忠が頬を引き攣らせた。決して感情を見せない、漢王朝の全ての闇を背負つて生まれたのではないかとも噂される劉弁が、何故にこのような絶対にありえない姿を見せているのか。ざわめく全ての配下も気にも留めず、ふらふらと李信の下へと歩み寄つていく。李信の目の前まで辿り着いた劉弁は、彼の頭の前から足元まで、ゆつくりと視線を這わせる。

「……ああ……ああ。お前か。お前なのか。お前なんだな、李信。生まれ変わるか、或いはそれとも――」

口を抑えてポロポロと涙を流し始めた黒髪の美少女。そんな皇女を前にして李信は眉を顰めて。

「何やってるんだよ、お前。何時から女になったんだ……政」

「ああ……くそつ……わかるのか、お前、わかつてくれるのか……お前は、なあ、信。こんな姿形も変わってしまった……この俺のことを」

「馬鹿か、お前は。姿が変わったくらいで俺がお前を見間違えるか」

「……ああ。そうか。そうか。ああ、馬鹿め。ああ、くそつ……俺しかいないこの世界。空虚で生きていく意味がなかった我が人生。意味があつたのか……あつたんだ。お前がいるならば、お前の

おかげで、俺の世界は色づいてくれた」

劉弁が泣き始めた時点で謁見の間に怒号が響き渡った。感情を決して見せない劉弁の姿に一体何事だと騒ぎ立てる皆。張讓もまた、あの男はいつも自分の想像を超えることを巻き起こしてくれる、と興味深そうに李信達を見ていた。幸いに彼らが騒ぎ立てるおかげで李信と劉弁の会話は誰にも聞こえることはなかった。

「……信」

「ああ」

「なあ……信」

「……ああ」

「信。なあ、信よ」

「……ああ」

「信、信よ。ああ、李信」

「……うるせえ。さっさと論功行賞すめろよ」

劉弁の何度もの確認に、面倒くさくなった李信が乱雑な返答をする。その雑さに、もしも他の者が聞けば卒倒したであろうが、何故か劉弁は喜色満面。李信の立場が偉くなるに従って、失われていったかつての関係。絶対に途切れることのない友人と言う立場は続いていたが、時には子供の時のようにこんな口調で語りかけて欲しかったという気持ちも残っている。それが嬉しい。気持ちよくて堪らない。だがこれ以上続ければ李信をおこらせるかもしれない、と気持ちを切り替えた劉弁は服の袖で己の涙を拭き取ると、傍で呆然としている趙忠に手を差し出した。

「趙忠よ。後は余がやろう。此度の最大の武功をあげたもの。余自らが称する」

「——い、いえ。しかし」

「不服か？」

ガクンつと趙忠はその場で跪いた。劉弁の放った言葉。それに身体が一瞬で屈してしまったのだ。身体が震える。心が悲鳴をあげる。なんだ、この少女は。今の今まで全ての闇を背負っていたというのに、それは今でも変わらないというのに——それでも眩しい。闇と

光。強大なその二つを併せ持つ。長らく漢王朝に使えている身でありながら、こんな存在は見たことがない。

趙忠から書簡を受け取った劉弁は、コホンッと軽く咳払いをすると内容に軽く目を通す。通していくうちに、彼女の表情が綻んでいった。相変わらず無茶苦茶な、なんとという戦功をあげているのかと。

「この者は、先遣隊として送られてきた手下八部李堪を討ち取った。そして郡城戦では最激戦となった西壁の将として自ら先頭に立ちこれを守り抜き、更には手下八部でも名が知られている侯選と楊秋の二人の首を上げた!!」

ざわつく謁見の間が別の意味で驚愕の声を上げる。戦乱の地涼州で名前が知られている手下八部のうち三人の首をあげる。さらには最激戦の西壁を最後まで守り抜いた。そんなことができるのか、と。「あげた反乱軍兵の首級は一人で五千を超え、最後には反乱軍総大将の韓約を討ち取った!!」

驚愕を通り越して皆が固まった。武功がどうのこうのという話を越えている。手下八部の首一つでもとつもない功績だというのに、それを三つ。雑兵とはいえ五千。作り話ではないのかとも思えど、まさかこのような場でそんなことは話さないだろうし、論功しないであろう。ならば本当にそれだけの武功を為したのか。恐怖と畏怖の視線に彩られたそれら全てを背に受けて、されど李信は気にも留めない。

「飛信隊の信よ……大儀であった」

艶やかに笑う劉弁が祝いの剣を李信に授けようとした時だった。

他の者と同じように跪くかと思えば、なにやら少し考えた様子で、李信は悪戯小僧のように小さく笑う。

「……なあ、政。どうすればいいんだ？」

李信の言葉に不意をつかれキョトンとする劉弁に、ああそうかと彼女もまた小さく笑い返す。

「前の三人を見ていなかったのか？ 片膝をついて有り難く……と」

くはっと笑った李信が、片膝をつき劉弁が授けてきた祝いの剣を静かに受け取った。

その姿。その光景。何故かわからないが、この時彼らは、二人の姿を見ている者の心を奪った。言葉では表現できず、皇女と独立遊撃部隊隊長という立場に天と地の差がありながらこの二人の姿はあまりにもしつくりきていたからだ。人の理解を越えた美しさに皆が一瞬静まり返るもの——次の瞬間には大きな喚声へと変わった。もはや戦場にも近い咆哮が飛び交う中、愛おしむように見下ろす劉弁が、思い出したかのように口を開く。

「そういえば知ってるか、信。この時代には私達の時にはなかった真名なるものがあるらしいぞ」

「……私って一人称なのか、お前」

「うるさいっ……別にいいだろ。それで、だ。知ってるかそのことを」

「ああ、そりゃ知ってるが。それが？」

「当然、私にも真名がある。煌コウという。誰にも呼ばせたことがない名だ」

「……煌？ そーいえばなんか昔のお前の嫁さんも似たような呼び方じゃなかったか？」

「奇遇にも、な。ああ、本当に人生は面白い」

「全くだ。まあ……これからもよろしく頼むぜ、煌」

李信の言葉に、満面の花咲く笑顔で劉弁は頷いた。

「ああ、信。ともに生きよう。そして今度こそ——ともに死のう」

死が二人を別つまで。この漢という時代を精一杯一緒に生き抜こう。

なあ、刎頸の友。比翼連理たる我が李信よ。

了)

恋姫躍動の章

蛇足之1：劉弁と張讓

洛陽が宮中。その中心に位置する謁見の間の玉座に座ることができるのはこの中華を統一している漢という国家の皇帝ただ一人。現在で言えば後漢第十二代皇帝にあたる劉宏に他ならない。だが、皇帝劉宏は現状病に倒れており、人前に出てくることは少ない。空席となつていることが多かったその玉座に、一人の少女が座っている。

玉座から伸びる階段下の広間にて平伏している張讓は、得も知れぬ強大な重圧に耐えかねて緊張の吐息を漏らす。玉座の少女——劉弁と張讓の二人しかいない空間のため、如何に広いといえはその吐息すら離れている相手に聞こえるのではないかと思わせる静寂がこの空間を満たしていた。本来ならば如何に謁見の間……しかも弁皇女がいるというのに人がいないなど有り得ない。ことは単純で、彼女が人払いをしたからである。全ての官僚、護衛が渋面を作りはしたものの、劉弁の命令に誰一人逆らえず部屋を後にした。

わかる。わかつてしまう。平伏しているが故に、劉弁の姿は視界に入っていない。それでも、彼女の視線が自分を貫いていることが確かに理解できてしまう。英傑英雄などによく聞かれる、格が違う桁が違うなどの表現を逸脱してしまったそれこそ次元が異なる超越者。万象全てを支配する唯一無二の魔王とでもいうべき王の中の王。そんな頂点が玉座に在った。

「よい、張讓よ。面を上げよ」

もしもここにいる者が張讓以外のものであったならば、彼女に許可を得たというのに顔を上げることは出来なかったであろう。それほどまでに場を支配する劉弁の放つ雰囲気は、頭が身体を動かすことから拒否させる圧を謁見の間全てを満たしていた。それほどまでの異

常な状況でありながら、張讓は言葉通り頭を上げる。頭を上げた張讓の姿に、ほうと感嘆の声を漏らしたのは劉弁だ。意識して解放していた自分の威圧にも似た気配を受けてなお、平常心を保っていられることに驚きと賞賛が沸々と浮かび上がってくる。文官としても現在の漢王朝で一、二を争うほどに優秀で、名門の出。この漢における頂点の一角である十常侍の筆頭としても名を馳せる。優秀、という言葉では足りないほどの一種の怪物。その立ち振る舞い、心の強さ実に見事だと劉弁は自分を見上げている張讓を内心で褒め称えていた。

「すまんな。忙しい中、無理を言った」

「いえ。殿下からのご命令とあらば、この張讓何時如何なるときにも」

「そうか。その忠に感謝を。だがな……」

一言一言が両肩に岩を乗せてきているのではないかと勘違いするほどに重い。

「実を言うと特に用事があったわけでない」

「……」

劉弁の台詞に思わずガクツと肩が落ちそうになる張讓。呼び出してくらい来て見れば、人払いまでされ何の話かと覚悟していたというのに——用事がないとは。

「公にはな。そなたと話をしたかった。つまりは完全な余の私事だ」

「私事で——」

「信のことについてだ」

「——っ」

緊張からの緩和。そして再度、深い緊張へと襲われる。悠然と、泰然と椅子に在る劉弁は美しくもどこか楽しげだ。張讓の反応を見て、僅かに口角を吊り上げる。

「今までの信の世話、ご苦勞であった。そなたには礼を言わねばならぬ。あいつとともにいるのは中々に骨が折れたことであろう」

「……いえ。そのようなことは」

「安心するが良い。これからは信は余とともにある。余とともに生き、余とともに死ぬ。何があっても何が起きようともそれは変わら

ぬ。あいつの全ては余が貰い受ける……それはもはや決定された確定事項だ」

何を言っているのだ、皇女は。おまえ 反射的に口から出そうになったその言葉を必死に呑み込むと、自分を落ち着かせるためにも一度目を瞑る。二度三度、と深い深呼吸をすれば沸騰しかけている己の心が本当に少しだけだが落ち着いた気がした。

「お言葉ではありませんが、李信は私の部下です。それに幾ら弁殿下であらうとも、李信の意向を無視してそのような勝手な真似は……」

「信は余の願いを受け入れてくれたぞ？ それにあいつとそなたとの主従はあくまでも仮ではなかったか？」

劉弁の反論に口が止まるのは張讓だ。確かに李信と張讓の関係は少し特殊なものだ。数年前に出会って以来、彼の主に相応しい人物になろうと突き進んできた。そしてようやく二年ほど前によく口説き落とし、仮の主従関係を結ぶに至ったのだが、もしも李信が真に主と認める存在が現れたならばこの関係は解消できるような約束もしてある。その時は自分以外にそんな存在が現れるとは考えてもいなかったし、思ってもいなかった。李信が使えるべき主と、劉弁を戴いたなど、嘘だと叫びたい気持ちに襲われたが——以前の論功行賞の折の二人の姿を見れば、それを否定するのは難しい。それほどまでに二人の姿はまさしく絶対の主と唯一無二の配下であったのだから。「なに。これまでのそなたの功は筆舌に尽くしがたい。もしもそなたが李信に目をかけていなかったならば余と信との再会も随分と時間がかかったものになったであろう」

それだ。それが問題だ。漢王朝皇女劉弁と李信。再会と口に出したが、一体どこで出会う機会が会ったのだろうか。宮中に来てから出会っていたのか。いや、それはない。李信が宮中にあがって張讓の傍に侍っていた間、劉弁が自身の部屋から出てきたことは全くない。ましてやもしもその時に会っていたならば、宮中にいる間は会いやすかった筈だ。あのような劇的な再会、と喜ぶはずがない。では、李信がまだ幼かった頃の知り合いなのか。それこそまさかだ。そんな時代に劉弁が市井の民と交流をかわしたなど聞いたこともなく、許され

るはずがなかったであろう。ましてや彼女は幼い頃から死と闇に愛された忌み児として禁中奥深くに封じられていた。とうの本人は全く気にせず表に出てくることはなかったが。

「張讓。そなたは実に優秀だ。現在の漢王朝において間違いなく頂点に座することができるほどのもの。だがな、そんなそなたでも余と信の関係を推測することは絶対に不可能だ」

張讓の表情を読んだのだろうか。考えていたことをピタリと当てられ一瞬息が詰まる。ここまで手玉に取られたのは一体何時以来だろうか。

「さて……そなたの功に関しては、余に出来ることならば何でも叶える事を約束しよう。もしも望みがあるならば言うが良い。もつとも今でなくても構わんが」

シンと静まり返っている謁見の間。ありとあらゆる願いを叶える。そう約束した劉弁の誓いに、李信との再会はそこまで彼女に対して大きく重かったのだと認識することが出来た。何かしらを考え込んで顔を床に下げていた張讓だったが、しばらく身動き一つしない彼女に興味を無くしたのか、玉座に深く持たれかかった劉弁が手を軽く振った。よい下がれ——口から退出を促すそれが出る間際、張讓の顔がふとあがり、視線が劉弁と交差する。轟々と燃えあがるのは不撓不屈のあらゆる物を焦土と化す紅蓮の猛火の意思を噴出させる官僚の頂点張讓。劉弁の圧にも負けない真紅の瞳が熱く燃えている。

「ならば一つだけ願いがございます」

「ほう。良い、言ってみよ。重ねて言うが余ができる事ならば叶えよう」

「はい、弁殿下。貴女様ならば出来ることです。いいえ、弁殿下。貴女にしか出来ないことです」

「面白い。さあ、言え。張讓よ」

「李信を返していただきたい」

先程までの比ではない静寂が場を支配する。森閑、無言、無音、沈黙——様々な言葉があれど、確かに耳が痛くなるほどの静かな世界

ならば、と。故に私は答えたのです。願ったのです。貴方様にしか出来ないことを。貴女様にならば出来ることを」

ピシリつと空間に輝が入る音がしたのを二人が聞いた。数百年も続いた戦乱の世を統一した唯一の王。三皇五帝を超えたと自称したのは伊達ではない。億千万の死と怨念を背負って統一国家を創りあげた怪物は、人にして人を越えている。李信とは正反対の超越者、それが劉弁だ。大將軍李信をこの世でただ一人従えることができ、彼の手綱を取れる唯一無二の主。その彼女を前にして、決して口に出してはならない願いを敢えて言い切る。そのような真似一体誰が出来ようか。無茶無謀は百も承知。それでも今ここが分水嶺だ。かつての時と同様に、ここで退いては全てを失う。引けば終わりだ、退けば全てを失う。誇りも覚悟も意思も、李信すらも。ならばこそ死中に活を求めるのみ。

「……笑えんが、面白い。この余を前にして、怒りを買うことを覚悟して言い切るか。三皇五帝を超えし最初で最後の王に噛み付くとはな」
ははははつと今の今まで放っていた圧力が霧散する。あくまでも李信が世話になった人物程度の認識しかしていなかった劉弁が、ここではじめて瞳に興味という色を乗せた。少しでも臆している様子が見られればここまで興味を惹かれなかったであろう。文字通り命がけの上奏。たった一人の男の為に、自身の全てを賭けて行った訴えに何故か皇女は愉しげだ。

「良いぞ……とは生憎と言えん。何故ならば余は信の信念を、意思を唯一のモノとしているからだ。それに余が言ったとしてもあいつはそれに従わん。そなたは余と信の関係を主従と思っているようだが、それは少し違う。我らは主従であり、友である」

「——友？」

あまりにも意外な答えに張讓のキョトンつと表情が緩んだ。皇女と一武官の關係に、友などという言葉がでてくるとは。流石に理解の範疇を超えている。されど肝心の劉弁は、うむ友だ——と頷いた。
「なに。少し意地の悪いことを言った。あいつは自由だ。余に仕えは

するものの、そなたとの関係を解消することなどなからう。実を言うと、あの信が仮とはいえ仕えていたそなたに興味があった。此度の呼び出しは其れ故だ」

「……」

なんとという茶番か。李信の仮の主の存在だったから張讓がどのような人物か見極める為に呼び出した。ならばこれまでの会話行動は一体なんだというのか。

「合格だ、張讓よ。そなたは李信と並び立つ資格がある」

気を抜いたのは一瞬だ。突如として劉弁がそのようなことを語ります。

「……一体何のことでしょうか、弁殿下」

「簡単なことだ、張讓よ。そなたは実に優秀だ。余がこれまで見てきた中でも指折りの者。もつとも女では、という言葉が入るが……それは気にするな。そなたほどの者ならば信を支える一助にはなろう」

「は、はあ……」

「なんだ。まだ理解できないのか。つまりはあいつの妻として支え、子を産み育てよ……と余は言っているのだ。そなた、あいつ信に好意を抱いておろう。いや、既に愛情と言い換えたほうが良いか」

「……」

妻？ 子？ 好意？ 愛情？ 弁殿下は一体何を言っているのか。

誰が？ 誰と？ 誰に？ —— 私と李信が？

「——っ!？」

ようやく劉弁の放った言葉の意味を理解した。理解するに至った。彼女の明晰な頭脳を凍らせる程の爆弾発言。思考が沸騰する。まともにもノを考えられない。顔が真っ赤になっているのが自覚できる。未来を想像して別の意味で心臓がバクバクと早鐘を打つ。これまで全く考えていなかった……いや、それは嘘だ。敢えて考えないようにしていたそれを、劉弁はあっさりと言い放った。

「弁、弁殿、下。一体、な、何、なにを……」

「意外と初心であるな、そなた。なかなか可愛らしい。強気な女のそういう部分は男にも受けよう。信に通じるかわからんがな。何度

も言うがそなた程に優秀な相手ならば信を支えることも出来よう。もつともそなたを軽くみるつもりはないが、一人で支えきけることは不可能であろうがな」

「あ、一体、その……弁殿下、貴女様は……」

「そうだな。うむ……文官として支える者。日常を支える者。武将として支える者。軍師として支える者。それぞれに必要なではあろう」

「——文官？ 日常？ 武将？ 軍師……とは、一体？」

混乱の極みに至っている張讓を放置して指折り数える劉弁は、とてもなく愉快そうだ。先程まで発していたこの世の終わりを見せてくる気配など微塵も感じさせない。

「なんだ、そなた。一人で信を満足させるつもりだったのか？ 存外独占欲が強いな。まあ、やめておけ。絶対にそれは不可能だし、余も誰か一人に信を独占させるつもりはない」

事実かつての時代、李信は多くの女性に愛された。妻としたのは僅かだが、彼を求めた女性は一体何人いたのだろうか。それは流石の劉弁も把握し切れてはいない。平然と言い切る劉弁に、浮かぶのは確かな疑問だ。

「何故ですか、弁殿下。あの李信が誰よりも主と認め、この世でただ一人真名を口に出す貴女様ならば、独占することも可能でしょうに」

「独占？ 誰が誰を？ 余が信を、か？」

今度は劉弁がキョトンとした表情で首をこてんつと横に倒した。やがて、くくくと口角を歪ませた。思ってもいかなかった張讓の発言に改めて自分の今の状態を省みる。

「そういえばそうであったか。今は余も女であったな。まあ、女の部分はそなた達に任せても良からう」

なんだ。この女は何を言っている。

どこか噛み合っていない劉弁と張讓の会話。

「そなた達が子を為せば、それは実にめでたいことだ。信の子供ならば、相手が誰であろうとも我が子のように可愛がり、愛おしむことができよう」

或いはわが子以上に。

そう。特に麗。外れに外れたかつての我が娘よりは確実に間違いない。

「ところで張讓よ。そなたあいつに好意を抱いている女を知らぬか？ どうせ信のことだ。一人や二人や三人や……流石に二桁はないだろうが、どこぞで女子の気を惹いておろう」

わからない。この女が、劉弁が全く持つて理解ができない。明らかに普通ではない感情を抱いている李信に対して妻になることを勧めたり、新たな女性の影がないか探るなど。しかもそれは嫉妬や何やらで調べているのではない。彼女にはそれが無い。自分が賈文和に抱いたような、絶対に負けるものかという気持ちか微塵たりとも存在していないのだ。それが不思議で仕方ない。

「……怖れながら質問をお許し下さい」

「むう？ 良いぞ、許す」

「……殿下は、何を考えでしょう。李信への気持ち、想い……ただ事ではないと推測します。それなのに何故このよう……。李信に大切なものを与えようとするのか。そして貴女様は李信が大切ではないのですか」

「ふむ？ 何やら誤解があるようだな、張讓よ。余は信をこの世の何よりも誰よりも大切だと思ってるし、信が最も大切だと思ってるのは余であるぞ？」

平然と言い切る劉弁に、彼女の答えが理解不能な張讓。

「……ふむ。これは例えの話だ。信が張讓、お前と家庭を築き、子を為したとしよう。余はそれを祝福する。なんと目出度いことか。信が幸せならばそれは余にとつても幸福である。さて、そこである問題が起きたこととする。例えば余をとるか、そなた達全てを含む漢王朝を取るか……どちらかを選ばなければ中華が滅ぶ。そんな究極の選択肢を突きつけられたとしよう。だが、あいつは何の躊躇いもなく余を選ぶ」

なんだこいつは。一体何の確信があつてそのようなことを口にす。まるでそうするのが当然であると。李信ならば間違いなく自分を選ぶと豪語している。だが、何となくわかつてしまう。彼女の言う

ことは恐らく正しい。李信はきつとそちらを選ぶであろうことは何となく理解できた。

「そなた達の捧げる愛情も、大將軍の地位も、国の想いも全てを投げ打つてでも、余が間違えていなければ信は余を選ぶであろう。何故ならば李信……あいつは余の劍にして盾であるからだ」

そして——余も同様の二択を選ばなければならぬとき、李信を選ぶ。

漢王朝の皇女という立場でありながら臆面もなく言い切る劉弁に、言葉もないとはこのことだ。

「何故、ですか。それだけの、想いを抱いていながら……何故、他の女をあてがうような真似を。貴女様は李信を愛していないのですか!」「なにを馬鹿な。愛しているに決まっておろう」

張讓の弾劾にも似た叫びに、一体どれだけ説明すればわかってくれるのか。出来の悪い生徒に教えるように、溜息をつきつつ肝心の劉弁は言葉を紡いでいった。

「お前が言う愛は所詮、女の立場から見ただけのものだ。愛し、結ばれ、子を為す。それを否定するつもりもない。だが、余と信の関係をその程度のもと邪推するなよ、張讓。いや……或いは女とはかくも男からの愛情を求めるものであるのか。ならば麗の行動もわからなくも……いや、あいつはあいつで無茶苦茶だったか」

劉弁の口にした女性らしき名前。麗という名前に何かが引つかかる。それに気づいたのか、劉弁がふむつと短く呟いた。まあ、この程度は語っても問題ないかというように。

「少し昔話をしてやろう。かつてとある大国の王の娘として生を受け、た女がいた。その名を麗。その王女は幼い頃にとある男に命を救われた。国の首都を攻められ壊滅的な被害を受け、母子ともに殺される寸前での救出劇であったそうだ。それ故だろうな……麗は己を救った男に憧れた。その想いはどこまでも高く何よりも深い。王女でありながら男に憧れ剣を取った。才があったのだらう、その力量は大国のなかでも將軍職の者すら凌駕するに至った。だが、憧れた男はある国攻めで大失敗を犯した。いや、あれは本人の責任ではなかったか。

国の中枢に住まう政治的に敵対する者達との兼ね合いにより必要な兵数や兵站など用意できなかったせいであろう。さて、男の大失態に友である大王もかなりの無茶をした。と言っても死刑を回避するところが限界であったがな」

急に何やら語りだした劉弁であったが、何故かその物語には聞き入ってしまうなにかがあつた。それに先程口にだした麗という人物も気にかかる。

「それに激怒したのが王女麗だ。彼女は男の邪魔をした人物を調べ上げ——そして自らの手で皆殺しにした。麗はそれら全ての首を持って、領地に蟄居していた男の下へと訪れたという。貴方を陥れたものは私が全て殺しましたよ、と男の前で笑いながら語ったそうだ」

ちなみにその時の李信のドン引きぶりは凄まじかつた。慌てて自分のもとへと麗を引き連れやってきたことは記憶に鮮明だ。麗が行つたことを知って母親は卒倒して、我が子が引き起こした事件ながらも李信同様に大いに引いた。

「さて、そんなそなた達の行動に通じるものがあるな。それは、信に愛されたいという想いだ。不安なのか？ 心配なのか？ 信を果たして何時まで自分のもとに引き止められることができるのか、懸念があるのだろうか。少しでもあいつの関心を引きたい。自分を見て欲しい。愛して欲しい。そんな混沌とした想いが伝わってくるぞ」

まあ、麗の方が頭がおかしかつたが。

自分の娘に対して随分と酷い評価だが、それも仕方ないだろう。あの娘は最後の方など親である自分すらも李信を取ろうとする憎むべき敵であるような素振りすら見せていたのだから。

「ああ、下らんな。本当に下らないぞ。なあ、張讓。そなたに信は何も求めていない。独りよがりのお前の想いを、思いを受け止めて受け入れる。だが、それだけだ。もう一度言うぞ……信はお前に何も求めていないのだ」

ズキリつと心が痛んだ。

それは知っている。それを知っている。李信との付き合いは数年になる。だが、彼には壁があつた。決して踏み入れることの出来ない

強固な壁だ。自分であろうとも、賈文和であろうとも、他の誰であろうとも壁の内部には立ち入れない。いや、目の前のこの女だけは別だ。会ったその時から、既に劉弁は李信の横にいた。その何と——
—妬ましいことか。

「だが、勘違いするな。余はそんなそなたを認めた。うむ、認めているのだ。信の横に立つ資格だけはある、とな。まあ、もつとも……あいつが何と言うかはわからんがな」

あいつは存外奥手だからな……と劉弁の呟きすらも癪に障る。まるで李信の全てを自分こそが理解しているのだという様子に、心が悲鳴をあげていた。

「さて、張讓よ。話は終わりだ。長くなつたが……そなたには期待している」

では、下がつてよし。退出の命令を持つて張讓は頭を下げて謁見の間を出て行こうとしたその時。

「余と信。我らの間にあるのは数百年経つても変わらぬ不変の友愛である。互いの首すら刎としたとしても我らに一切の後悔もない。如何なる者でも我ら二人の間に立ち入ることはできんぞ」

朗々と謳う劉弁の声を背に、張讓は何一つ言い返すこともなく外へと足を踏み出した。ようやく話が終わったのかと入れ替わりに官僚、護衛の者が中に戻ろうとして彼女とすれ違った瞬間、小さな呻き声を漏らす。心の底からの震えがくるほどの冷気。零下にも感じられる冷たい空気が彼女から散じていた。

「……なんと無様な」

自分の胸に手を置いて心臓を握りつぶそうという勢いで力を込めた。

劉弁の言葉に反論できなかつた自分の弱さ。鈍さ、覚悟の無さ全てが憎い。己は優越に浸っていたのだ。自分こそがもつとも李信の傍にいと。誰よりも彼と親しい関係を築けているのだ。例え壁があるろうともやがてはその中に至れるだけの関係になれるのだと。それが、愚かしい。どれだけ時間を、無為に過ぎてきていたのか。これは、この屈辱は己の失態。無駄に過ぎしてきた自分への罰である

う。

「だが、弁皇女も良く言うものだ」

誰かに独占させるつもりはない。劉弁は確かにそう言った。だが、無意識であろうと彼女は気づいている筈だ。自分こそが李信を独占しているのだと。絶対の優越感にして無自覚であろうとも悟っているからこそいえる言葉でもある。確かに今はそうだろう。李信にもっとも近いのは劉弁である。それは疑いようがない事実だ。これから先もそれは変わらないかもしれない。だが、不変なものなどあるものか。必ず……必ずだ。李信を自分へと振り向かせて見せる。主従としても女としても――。

「貴女を超えて見せよう……弁皇女よ」

李信。中華全域を独立遊撃部隊として駆け回る彼は、本人の与り知らぬところで何やら戦争が勃発していることを知る由もなかった。

蛇足之2：曹操孟徳

曹操孟徳という若き俊英がいる。洛陽の街にて何時しかそんな噂話が真しやかに流されるようになった。彼女は中常侍・大長秋まで勤めた曹騰の孫。即ち大尉である曹嵩の娘でもある。所謂名門とも言われる彼女が齡十五を迎えたつい先日、孝廉に推挙され漢王朝の首都洛陽の北側の尉に着任した。尉とは軍事・刑事を司る役職を指す。曹操は歴代でも一、二を争う程の成績を残したとも噂され、彼女の幼い容姿もあいまって相当に注目を浴びていたのが功を奏したのか、曹操が着任した場所には見物客まで集まる始末であった。

「それでは、今日も一日頑張りましょうか。ねえ……春蘭、秋蘭」

背後に仕える僅かに年上の少女二人に曹操孟徳は声をかけた。曹操の声掛けには、はっと膝をつき短く答えたのは二人の女性。腰まで届く長い黒髪を、額が出る位までにあげた少女。腰には少女らしからぬ巨大で無骨な一振りの大剣。放つ気配は全てを焼き尽くさんばかりに燃え上がる大火。彼女の名は夏侯惇。字は元讓——真名は春蘭。

もう一人は淡い水色の短い髪。額を出しているのは夏侯惇と同様だが、右目を隠すように一部の髪を垂れ下げている。彼女が持つは特殊な製法で作られた弓と籠に入った矢。夏侯惇とは対極の全てを凍らせる程に冷たい極北の吹雪を連想させる気配を放っている。彼女の名は夏侯淵。字は妙才——真名は秋蘭。

二人は姉妹であり、曹操の従妹にして部下でもある。

曹操が北部尉を勤めることになった際に、我慢できず二人して家を飛び出して曹操の下へと押しかけてきた。呆れた曹操ではあるが、可愛い従妹二人たつての願いもあり、そのまま夏侯惇と夏侯淵を配下として仕えさせている。実際に彼女達が来てくれて助かったというのも事実だ。徐々に洛陽の状態は回復して行っているとはいえ、優秀な

人材はまだ少ない。一から鍛えるにしても手間もかかるし、時間も必要だ。この地に任官してから非常に困ったことがそれである。そんな中、現れた二人は非常に役に立つ。夏侯惇は……頭脳を使う事柄に關してはあまり頼りに出来ないが、武に關しては随一だ。きっと近い将来にその名を中華に轟かせる武將になつてゐることだろう。もう一人の夏侯淵は文武両道。文官としても武官としても高次元で纏まつた優秀な人材だ。しかもその弓の腕前は曹操が知る限り限りなく頂点に近い。彼女もまたそのうちに中華十弓に名を連ねることが可能な少女だ。

二人を引き連れて曹操は今日もまた職場である洛陽の北の門へと到着した。現在この洛陽の街を囲つてゐる城壁の北側には内外を通行するための門が四つある。だが、曹操が着任した当時、その門全てが随分と痛み、ぼろぼろとなつてゐた。まず彼女がしたのはそれらの門の改修である。

無論それだけではない。改修後は、門の両側に五つの棒を吊り下げた。五彩棒と呼ばれるそれは、罪科を犯した者を叩く為のものである。というのも、洛陽の治安悪化を防ぎ民を守る為、北門の夜間通行禁止令が発令されてゐた。これを破つた者は如何なる者であつたとしても、打擲の罰を与えるという内容の立て札を門の前に立てて注意喚起を行つた。

最初はこれに誰もが反発してゐた。例えば、着任当時の北門にいた門番達は、曹操のことを完全に舐めてゐた。それも当然だ。いいところのお嬢様が、しかも年齢よりもさらに小柄な可憐な小娘が上司として着たのだ。誰一人として彼女のことを真正面から見ても、彼女の命令に従う者もいかなかった。だが、それが間違いだと思つたかされたのは一日もしなかつたときの事。命令に従わなかつた配下の罪は、上司である副官の罪という事で、曹操は自分の倍は生きてゐる男を殴り倒し、持つてゐた棒で幾度も打擲した。何度泣き叫ぼうが謝ろうが、決して手を緩めぬ彼女の姿に、この北門で働いてゐる者達は瞬時に悟る。人を罰することに何の躊躇いもないその姿、放つ気配は姿形とは対極で、重厚かつ強大。この少女はこんな官位に居ていい人間ではな

い。上位者に関しては鼻が利く小物揃いの彼らは、即座に曹操の下で働くことを受け入れた。それ以来北門を完全に掌握した曹操は、ここ周辺の治安を回復させた実績から、民からの人気と信頼を獲得していた。ちなみにそれは夏侯惇と夏侯淵が来る前の出来事。曹操一人で北門を支配下に置いたことに二人の従妹は、流石華琳様と完璧に心酔したのであった。

日々の仕事に精を出し、確実に評判をあげていつている曹操。

そんな彼女が北門の北部尉となつてから数ヶ月が経つたある日――

――曹操の名を更に知らしめる事件がおきた。



既に陽がくれ、北門の通行が禁止された時間帯。

曹操の禁止令が広く知れ渡っているのか、通行禁止となつた時間以降、この北門を利用する人間はほぼいない。いるとすれば、洛陽へとやってきた旅人か。或いは長らく洛陽を離れていた者か、そのどちらかであろう。門の周囲には篝火が焚かれ、門番達が洛陽への通行を妨げている。こんな時間だというのに手を抜くことなく仕事にあたりている彼らの姿は、曹操のここ数ヶ月の指導の賜物だ。北門を除く、東西南の三門のどこよりもこの場の門番達の意識は高く、仕事に従事している。流星は孟徳様と、全身から喜びを滲ませて何やらウンウンと頷いている夏侯惇を、姉者はかわいいなあ……と冷たい雰囲気とは正反対のほっこりとした視線を送る夏侯淵。ちなみに二人とも曹操

から真名を呼ぶことを許されてはいるが、人がいるところでは呼ぶことはしない。他に人がいないところでは、華琳様と曹操を呼ぶが、普段は字の孟徳様と呼んでいる事が多い。とはいっても夏侯淵はそこらは徹底されているが、猪突猛進な夏侯惇は時折真名を口にしてしまうことは多々あった。

夏侯惇と夏侯淵。二人もまた夜間の警備に当たっているその時――北門の外側から一台の馬車が走ってくる。門番二人が持つていた槍を左右から交差させ、その行く手を阻むものの、その馬車から姿を現した中年の男性を見て固まった。豪華な服で着飾った男性。それだけならばまだ良い。だが、この場にいる門番全てがこの男の名前を知っていたからだ。

「蹇康様……」

「このような時間まで門番に勤しむか。実にご苦勞なことだ」

高らかに笑いながら、一度門番達に声をかけ、そして御者に馬車を出すように促した。馬車の後ろにも多くの護衛達がおり、その人数は実に二十人近くにも及んでいる。だが洛陽へと入ろうと動き出した馬車を止める人物がいた。馬車の前にて恐れもせずに行く手を阻む二人、夏侯惇と夏侯淵である。

「お待ち下さい、蹇康殿。夜間の通行は禁止されています」

礼を失せぬように、夏侯淵が一步前へと足を踏み出し男に向かって通行禁止の旨を告げる。流石にこれほどの大人物に礼儀が緩い姉に相手を任せるわけにも行かない。

蹇康。それはかの十常侍が一人蹇碩。宦官ながら上軍校尉に任せられ、その筆頭として近衛軍を統括している雲の上の官位を勤めている彼の叔父。相手が悪いなどという話ではない。

「黙れ、小娘!! わしは趙忠様に呼ばれ会いに行く途中であるぞ!! 一時でも遅れようならば死に値する不敬!! 貴様らのような下賤の者の命など幾らあっても申し開きがたたぬわ!!」

止められたことに腹を立てたのか大声で威嚇する蹇康に、夏侯淵は口を塞ぐ。相手が相手だ。これ以上怒らせるわけにはいかない。自分だけなら兎も角、下手をしなくても曹操の進退問題に発展する恐れ

もあるからだ。だが、ここで引くわけにはいかないという理由もある。これまで曹操は立て札に書かれてあるように、どんな相手であろうとも夜間通行の禁止を徹底してきた。相手が幾ら十常侍の叔父だからといって、はいそうですかと通してしまえば、これまで築いてきた主の威厳が失墜する。所詮は権力の犬であったのか、と洛陽の民に侮られることであろう。それだけは絶対に許せないことだ。そして問題は、自分の後ろで今にも剣を抜きそうになっている姉をどうするか、だ。刃傷沙汰だけは絶対にまずい……そう判断を下した夏侯淵は、姉の前へとさりげなく移動して視界を塞ぐ。なんとかこれで伝わってくれないかと願いつつ、蹇康を説得するべく口を開いた。

「蹇康様には真に申し訳ありませんが、如何なる方の如何なる理由があったとしてもこの禁令を厳守されるように仰せつかっております」「なんだとお……」

顛顛をピクピクと震わせて、馬車から降りた蹇康は、怒りも露に夏侯淵を睨みつける。彼の怒りの視線を目の当たりにしながらも夏侯淵はどこ吹く風だ。逆に背後に隠している夏侯惇のほうが今にも爆発しそうな勢いであった。頼む、姉者。大人しくしていてくれ、という想いが伝わったのか、自分の圧力にも負けなかった夏侯淵に舌打ちを残した蹇康が北門に立てられていた立て札のもとへと足音をたてて向かっていくほうが速かった。そしてまじまじと立て札の内容を確認した蹇康は、馬鹿らしいと言わんばかりの様子で、立て札を蹴り倒すと周囲を仰ぎ見る。

「このわしを誰だと思っておる!! 夜間通行の禁令など全く持って馬鹿らしい。曹操とかいう愚か者をつれて来い!! 逆にわしが直々に打擲の罰を与えてやるわ!!」

一刻を争うような事態ではなかったのか、と周囲の門番達は考えつつもこの事態をどう收拾すればいいのか判断不可能な状態であった。なんとか宥めつつ、お帰り願うしかないのか……とこれからの行動を迷っていた彼らの背後で、砂を踏む音がする。

「あら。罪人が随分と分不相応な台詞を吐くのね」

それは反射であった。声を聞くだけで礼の体勢をとるまでに仕込

まれた日々の訓練。ざっと洪手の礼を取りだした全ての門番の姿に薄気味悪さを感じる蹇康だったが、夕闇の彼方から姿を現した曹操へと視線を向けてようやっと理解した。彼らの行動、様子が尋常でなかった訳。こやつが、この北門の主か、と。

「……さて、曹操だと。まさか、貴様……曹孟徳か」

「まさか蹇康様ともあろうお方が私の名前をご存知とは。恐悦至極に存じます」

くすつと笑う曹操は、得も知れぬ迫力があつた。本当ならば顔を合わせたならばすぐにでも怒鳴りつけてやろうと考えていた蹇康が、口を開けない不可思議な迫力を醸し出している。そして、彼女の名前。二年ほど前に聞いた記憶ある。十常侍でもあり甥の蹇碩から、あまり関わりあいにならないほうがよい、と言われた人物。それが曹操孟徳ではなかったか。

「う、うむ。騒がしたことは謝罪しよう。だが、わしは趙忠様の下へと

「ですが、如何に蹇康様といえど罪は罪。罰は罰。残念ですが——
捕捉しなさい」

蹇康の言い訳など聞く耳持つものかと言った様子で、夏侯淵と夏侯惇に視線を向けてニコリと笑う。彼女の命令に、一瞬の迷いもなく二人は動き出す。夏侯淵が蹇康の背後に回ると彼を地面へと引き倒した。主の危機に護衛の者達が動き出すが、それより速いのが夏侯惇だ。相当に不満と怒りが募っていたのだろうか、嬉々として僅か二、三分足らずで護衛全てを殴り倒した。すつきりとした表情の夏侯惇が妹のもとまで戻ってくると協力して打擲台へと無理矢理に引き摺っていく。肝心の蹇康が必死になって抵抗するも、二人の少女の力はそのれよりも遙かに強い。間もなく罰を執行する打擲台へと引き倒された彼は、まさか本当にやるまいなと顔を引き攣らせながら自分のすぐ前に立っている曹操を見上げた。だが、彼女の表情には一片の曇りもなく、緊張も見られない。駄目だ、こいつは。確実に、間違いなく刑罰を実行する気だ。

「ま、待て待て待て!! わ、わしはあの十常侍の蹇碩の叔父であるぞ!?

その名聞いたことがあるう!!」

「ええ。それは立派なお方を親族に持つのね。で、それがどうかしたの?」

「つ……け、蹇碩を呼んでくれえ!! 奴を呼べば、お主もわかってくれる!! 奴に頼めば昇級など思いのままだ!! このようなところで働かずにすむぞ!!」

「昇級に褒美。ふふふ……困ったわね」

「年齢十五とは思えぬ程に妖艶に、艶やかに——曹操孟徳はあらゆる人間を魅了する笑みを浮かべる。

「聞いたかしら、元讓。妙才?」

「はい、孟徳様!!」

「この耳でしかと」

「従妹二人に確認を取った曹操の姿に不吉を覚える蹇康。いや、不穏な様子しか感じられない。

「賄賂を堂々と扱った罪。さらには武尉への侮蔑。官命汚辱の罪。さらに罪が増えてしまったじゃない」

「——ああつ」

「駄目だこいつは。立て札にあったとおりだ。こいつは、この少女は本当に絶対に許すつもりはない。如何なる相手であろうとも。如何なる事情があつたとしても——この北門を騒がした自分を必ず罰するつもりだ。

「蹇康殿。良いですか。この台の両端にある棒を強く握ってください。そして加え棒をしっかりと噛み締め、絶対に放さないようにしてください」

「乗せられた打擲台にて、罰を受ける際の説明を淡々とする夏侯淵に對しても戦慄が走る。文字通り官位で見れば雲の上の自分を罰しようとするこになんの躊躇いもなく、恐れもない。夏侯惇にしてもそうだ。一人で二十人からなる護衛全てを殴り倒し、今まさに刑罰を執行しようとしているのに嬉々としている。なんだ、この小娘どもは。いかれている。普通ではない。なんでこのような狂人達がこのような場所にいるのだ。」

「良いですか、もう一度言います。このくわえ棒は貴方が痛みのあまり舌を噛み切ってしまったためのもので。なに、たかが打擲は二十回程度です。気合を入れれば……死ぬことだけは避けられましよう」

冷笑を浮かべて訥々と語る夏侯淵に、短い悲鳴をあげてしまう。まっつてくれ、と思わず彼女に縋りつく。

「お、お前も昇級させてやるっ!! なあ、こんなところでこのような仕事よりももつと相応しいものがあるはずだ!! そ、そうだ!! 將軍職なんかどうだ!?!」

轟、と打擲棒が蹇康の真横を通りすぎ、地面を激しく殴打した。表情に変化はないが、夏侯淵の内面からは沸々と熱い怒りが湧き出してくている。

「こんな仕事とは無礼千万。孟徳様の傍にあることが私の最大の喜びだ」

すがりついてきた蹇康が、自分から飛びのくほどに夏侯淵の怒りは凄まじかった。そんな彼を夏侯惇が再度打擲台へと押さえつけられる。そして夏侯惇が打擲棒を受け取って強く握り締めた。

「ひとつ!!」

気合いととも放たれた打擲棒の一撃が、蹇康の背中を強かに打ち据えた。その衝撃たるや、あまりの痛みには叫び声すら上げられないほど。蹇康は声なき声をあげつつ打擲台から転がり落ち、地面をごろごろとのたうち回っていたが——突如としてその動きが止まった。

周囲の門番が恐る恐る蹇康に声をかけるものの全く反応がない。どうしたものかと考え込んでいたその時、誰かが、あつと声を上げた。「し、し、死んでおり、ます」

まさかの刑罰一打擲目で死んでしまうとは。いや、さすがに十常侍の叔父を殺してしまったのはまずいのでは。いや、まずいなんて話を通り越している。下手をしたら北門全ての者の首が跳んでもおかしくはない。それほどの事態だというのに、肝心の曹操は苦笑するだけだ。

「死んでしまったら仕方ないわね」

護衛の兵を叩き起こして蹇康を引き取っていかせなさい。

指示をそれだけ出すと、平然と自分の仕事に戻っていかうとする。上司のあまりの大物っぷりに部下も、まあなんとかなるのか、という様子で後片付けを始めた――が。

この場にいる全ての者が気づいた。才がある者。ない者。優秀な者。そうではない者。行われていた刑罰を見にきていた市民。全てに関係なく、それに気づいた。遙か北方より飛来するのは洛陽全てを熱し焦がすのでは、と思わせる莫大な超熱波。これまで誰一人として感じたことのない人知を逸した集団が近づいてきている。市民はその場で尻餅をつき、曹操の薫陶を受けている門番ですら身体が固まってしまっている。夏侯惇と夏侯淵までもが、かつてない脅威に身体の奥からくる震えを隠すことで精一杯であった。ただ一人、曹操孟徳は、驚き――そして華も恥らう笑顔を浮かべた。

「久しぶりの洛陽だな。随分と遅くなったが、まあ日が変わる前でも良かった」

「本当でござえますね、華雄の姉御。久しぶりにちゃんとした寢床で休むことができますですよ」

「……地獄。地獄だよ、最近。一体どれだけあっちこっちの戦場を駆け回らないといけないのさ」

誰もが息を呑んだ。北門を通り抜けやってきたのは三人の少女。愉しげに何やら語り合っているものの、彼女達が放つ気配は絶大。華やかさとは無縁で、香るのは戦場の匂い。今先程まで命のやり取りをしていたと言われても納得してしまうほどの常在戦場。夏侯惇、夏侯淵はその三人の力量が明らかに並々ならぬ領域に至っていることを瞬時に理解し、今の自分たちでは勝てないと悟った。夜間の北門は通行禁止だ。止めなければならぬ。現実に蹇康であろうとも止めたではないか。内心で思いはするものの、門番の誰一人として身体が動かない。威嚇されたわけではない。威圧されたわけでもない。彼女達の気配、雰囲気……それに触れただけで関わりあいになることを身体が、本能が拒絶している。

「お前達には無理をさせて悪いがな……まあ、付き合ってくれ」

「ふはははははー!! 何を言うか、我が主よ。お主が行くところに我あり!! 中華の果てまで供するぞ、わが中華六将よ!!」

三人の少女から遅れること少し。巨大な矛を背にする男の姿を見て、誰かがヒイツと隠すこともしない恐怖の悲鳴をあげた。三人の少女はまだ理解できる範疇だ。だが、この男はそれら全てを突き抜けてしまっている。武に経験がある者、ない者問わず納得させる凄味があつた……のだが、肝心の李信は何やら黒尽くめの服で全身を覆い、仮面で顔を隠した小柄な——声からして女性らしき人物を肩車して歩いてきていた。その差異たるや、あまりにも違和感がありすぎて、悲鳴をあげた市民もまた目をパチクリと何度も瞬きを繰り返す。「まあ、なんというか……そろそろ降りたほうがいいんじゃない、韓遂」

「流石に目立つでござえますよ」

「全くだ。あまり目立つ行為は貴女としても望むところではないでしょうに」

「ふはははははっ!! 生憎と我は身体の弱さは天下一品!! お主らについていくことなど出来はせん!!」

結構雑な扱いの高順と胡軫に比べ、年長の華雄が怪しい仮面の女性に一番礼儀を尽くしているというのも可笑しな話だ。三人からの集中砲火を受けていながら仮面の女性は自慢出来ないことを口に出しながらも、降りる気は全く持つて見られない為、ちらりつと互いに顔を見合わせた華雄と高順が動く。李信の背後に回ると肩車をさされていた仮面の女性の足をそれぞれが掴むと、引き摺り下ろそうと強く引いた。

「はぎゃっ!! ひ、ひっばるでないぞおお!? お主ら、足がもげるもげるう!!」

痛みに絶叫する仮面の女性だったが、引き摺り下ろされてなるものか、と前のめりの体勢となつて自分の胸を李信の後頭部に押し付けて両腕を回して抱きしめた。張讓と一緒に全然柔らかくないぞ、と思つていた李信だったが、両足を引っ張られた仮面の女性が引き摺り下ろされるギリギリのところまで何とか止まっただけのもの、それはつま

りで彼の頭に全ての負荷がかかっていることに他ならない。ビキビキと首が悲鳴をあげ始め、表情がゆがみ始める。

「放せ、韓遂っ」

「死んでも断るう!!」

「馬鹿がっ。このままでは死ぬのは俺だ!!」

結構な逼迫した状況ではあったが、傍から見ているとなんだこれは状態でもある。それを一人見ていた胡軫は、平和でござーますなあ……と一人呟く。同様に、李信達の後からついてきている部隊の者達も何時ものことだと言わんばかりの姿が見受けられた。実際に似たようなことが日々起きているのだから慣れるのはある意味当然。そんな中で、李信達以外の部隊の者を見た夏侯姉妹の反応は劇的であった。現れた兵達は恐らくただの部隊兵なのだろうが……それでも一人一人の錬度の高さが窺い知れる。一兵隊がかつてないほどの高みの強者。少なくとも、夏侯姉妹であっても、そう易々と倒せる相手ではなかった。なんとという強者の集まりなのか。このような部隊が漢王朝には存在したのかと戦々恐々する二人を差し置いて、止める間もなく曹操孟徳が前へと歩み出る。

「お久しぶりです、李信殿。御壮健で何よりです」

パシンと小気味よい音を響かせて、洪手の礼とともに曹操の挨拶に、ようやく混沌とした状態がピタリととまった。仮面の女性——韓遂の力が緩んだ瞬間を狙って、彼女の魔の手から逃れた李信が首をコキコキと鳴らしながら曹操へと近づいていった。

「ああ。久しぶりだな、曹孟徳。随分と大きく——いや、なんでもない」

彼女と最後に会ったのは一年と半年ほど前ではあったが、その頃から比べて身体的な成長は全く見られていなかった。少し気まずくなった李信ではあったが、当の本人の曹操は全く気にしていないのか、篝火を浴びて煌く笑顔を口元に浮かべているばかりだ。ちなみに、李信の頭から解放された韓遂は、支えがなくなったため結構な勢いで地面に叩きつけられて、はぎやつと悲鳴をあげていたが、特に気にしたものはなかった。

「御活躍聞き及んでいました。涼州にてとてつもない武功をあげたと」

「時機がよかったからな。丁度涼州に赴任した時と反乱が重なったというのがでかい」

「例えそうであつたとしても、あれだけの大功を為したのは李信殿であるからこそでしょう」

「褒め殺しだな。それより以前も言ったが普通の言葉遣いで構わんが……」

「有難うございます。ですが私も今は漢王朝に仕える身でありますので」

「……そうなのか？ ああ、だからこんな時間にここにいるのか」

「はい。洛陽北部尉に任じられました」

この少女を部尉？ 幾らなんでもそれは勿体無いのではないかと感じた李信ではあつたが、肝心要の曹操に腐っている気持ちは見られない。全身全霊を持って職務に当たっているのである。ならば、そこは自分が口を出すのはお門違いだ。もしも頼られれば幾らでも口を利いても良い、と考えているほどに李信からの曹操孟徳の評価は高かった。

「む……なんだ、李信よ。その者と知り合いなのか？」

「ん？ ああ。友人の娘だ」

「え？ 李信に友人ついていたの？」

「はっはっは……ぶっ殺すぞ高順」

華雄の問い掛けに答えた李信の返答が意外だったのか、本音が思わずでてしまった高順に、笑顔でそんなことをのたまう。そこにある気安さに、この部隊の絆を見た曹操は、若干の羨ましさを感じずにいられなかった。

「私は華雄。李信が隊長を勤める隊の副長だ。よろしく頼む」

「同じく副長の高順。よろしくね」

「華雄の姉御の補佐をやつてる胡軫といいますですよ」

「御丁寧に。私は曹操。字は孟徳と申します」

興味深そうに三者三様の挨拶をしてくる彼女達に、曹操も名乗りを

返す。僅かそれだけで彼女たちは互いに、互いの力量を感じ取った。曹操は、戦場を駆け抜ける李信の隊の者達の力がこれほどのものなのか、と。逆に華雄達からしてみても戦場から程遠い洛陽にて曹操程の逸材が生まれ出るものなのか、と。

「ふははははー!! 我を忘れてもらってはこまるぞお!!」

地面に仰向けに倒れていた韓遂が、両足を上げて振り下ろす勢いを利用して立ち上がろうとするもの——微塵も上体を起こすことなく失敗に終わる。あまりの運動神経の悪さに、溜息を吐きつつ李信が韓遂の手を引っ張り起こす。

「やあやあ、我こそは漢王朝にて名高い中華独立遊撃部隊飛信隊が軍師、韓遂であるぞお!!」

「殆ど兵站のことばかりやってるけどね」

「いや、兵站は重要だ。私は絶対にやりたくないから助かってるぞ」

「実際面倒でござえますからねえ」

これまで悩みの種であった兵站管理など、韓遂が参加してからは彼女が一手に引き受けていた。事実、彼女が合流するまでは飛信隊はそこらへんがかなり適当になっていたため、韓遂の存在は地味に大きい。誰一人としてまともに来る者はおらず、李信もかつての経験で四苦八苦しながら行っている程度の管理だったため、そこは李信も感謝している部分があった。

「で、何かあったのか?」

「罪人を罰しただけです。お気になさらずに」

ちらりつと門の隅の方で蹇康に群がっている護衛達の大騒ぎしている様子に、李信が目線を向ける。それに気づいた曹操は、その結果死んでしまいましたけどね……と付け加える。平然と言い放つ少女の姿に、目を見張るのは華雄以下飛信隊の面々だ。表情に出していいのは李信だけだろう。まあ、この曹操孟徳ならばこれくらいはやつてのけるだろう、程度の思いは抱いていた。だが、相手を聞いて流石の李信も顔色を僅かとはいえ動かした。

「蹇康? おいおい、十常侍の関係者じゃないか。大丈夫なのか?」

「はい。ですが私は私の任を全うしたのみ。誰からも糾弾される謂れ

はありません」

「俺でよかつたら協力できることがあつたらするが……」

「いいえ、李信殿。大丈夫です。お心遣いに感謝いたします」

こんなところで未完の大器を潰されたくない思いから口に出た言葉を、首を横に振って断るのは張本人である曹操だ。笑みを消すことなく泰然と佇む彼女の姿に、余計なことを言つたと謝罪する李信。自分の行動は自分で責任を持つ。蒔いた種は自分で刈り取る。無言で彼女はそう語っていた。

「で……どんな罪を犯したのだ、その蹇康殿とやらは」

仮にも十常侍の叔父を打擲する。それほどまでの罰を与えらるとは、如何なる罪だったのか。気になるのは当然だ。華雄もまたそれを聞こうと疑問を口に出した。

「現在この洛陽北門には夜間通行禁止令がでています。蹇康殿はそれを破り無理矢理に通ろうとされました。それ以外にも賄賂を堂々と扱った罪。武尉への侮蔑。官命汚辱の罪……等。様々な罪科を重ねました」

「……夜間通行禁止？ いつのまにそんなのでたでござえますか？」

「私が着任して暫し経つたときからです。如何なる者も如何なる理由があつてもそれを曲げることは罷り通りません」

「……えつと。ちよつとまつて。ということとはボク達も通行できないってこと？」

高順の質問ににこりとこれ以上ないほどの笑みを浮かべる曹操。まさしく花咲く笑顔という表現が相応しい。相手の全てを受け入れる慈愛に満ち溢れた微笑であつた。

それを見た周囲の門番、市民は安堵する。どうやら今まさに通行しようとしている怪物連中は、曹操の知り合いである。ならば流石の彼女もそこは融通を利かせるだろう。蹇康のような事態は起きないはずだ、と思つたのも束の間。

「はい。李信殿……如何に貴方でもここは通せません」

驚愕が周囲を満たす中、僅かな敵意が膨れ上がる。飛信隊の配下の者達からの視線だ。それも無理はない。これまで多くの戦場を渡り

歩き、ようやく洛陽に戻ってきてみればこの仕打ち。ただ北門を通るだけだというのに、それが許されない。多少の融通くらい利かせればよいのではないか。彼らの負の感情にいち早く反応したのは、夏侯惇と夏侯淵。主である曹操を守ろうと彼女の前に飛び出した。それぞれの武器に手をかけて、李信達の前に立つのは未来の英傑。続くのは沈黙。静寂。何かがあれば爆発しかねない、張り詰めた空気。

「く……はははっ。はははははははははっ」

緊張に満ち満ちたそこで楽しそうに笑うのは李信その人。ここまですべて大笑いをする李信も珍しい。久方ぶりの機嫌のよさを前面に出す隊長の姿に毒気が抜かれる。ゆらりつと李信の姿がぶれたと思えば――背筋が凍るのは夏侯姉妹。目の前から李信の姿が消えたと思えば、気がついたときには彼の姿は自分たちを通り越し曹操の前にあつたからだ。動けない。指先一つ動かすことが出来ない。背後に脅威がいるというのに、身体が動くことを拒否している。これが、李信永政。かの涼州でおきた反乱で大功をあげた中華最強の候補に数えられる武将。手下八部三名を討ち取り、兵五千の首級をあげ、総大将の韓約の首までとった現在もつとも中華で名が知れ渡っている男。そんな存在が主を害そうとしているかもしれないというのに。動け、我が肉体よ。ここで動かねばなんとするか。決死の想いを抱く二人に、だがしかし曹操は危機感など全く覚えていない様子で声をかけた。大丈夫、と。それを証明するかのようにな李信は笑いながらパンパンと曹操の肩を何度も叩く。

「先程の言葉、訂正するぜ」

笑うことをやめた李信は、かつてのときのようにくしゃりつと曹操の頭を軽く撫で上げた。

「大きくなったな……曹孟徳」

全隊、行くぞ。李信は部下全てを引き連れて北門から去つていった。

まるで台風が過ぎ去った後のように静かになった、この場所で。ようやく安堵の吐息を漏らしたのは夏侯姉妹。もしも李信達に主を傷つける気があれば、完全に守りきれなかった自分達の弱さが恨めし

い。飛び抜けた才を持ちこれまで負け知らずだったが故の、格上との初めての遭遇は——されど二人の心を折るには至らず。逆に夏侯惇、夏侯淵の二人は更なる飛躍を決心することを心に誓う。もう二度と主は無様な姿は見せまいと、二人は目線のみで互いに固く約定をかわした。そして背後にいる主へと振り向いてみれば——。

「どうしたのかしら、二人とも？」

長い付き合いでありながら、一度として見たことがない程に上機嫌な表情の曹操。その笑みや、美麗美的秀丽端麗見目麗しく、華麗にして佳麗。即ち——女の顔をした彼女がいた。

どうやらあの男は敵のようだ。うむ。そうだな姉者。

夏侯姉妹が口に出すことなくそんな会話をこの時したとかしなかつたとか。

蛇足之3：天下無双

中華全域を駆け巡る独立遊撃部隊飛信隊。要請があった地域に派遣されあらゆる戦場の勝利に貢献する漢王朝最強の遊撃部隊——
—といえば聞こえはいいが、その実ほとんどが北方における異民族との争いに駆り出されている。そんな彼らは、ある任務を終えて洛陽へと帰還する途中に立ち寄った街でとある噂話を聞いた。街の近くにある今は廃村となったそこに盗賊が住みついてしまったらしい、というものだ。一度討伐隊が向かったもののあつさりと負けてしまったとのこと。次の討伐隊を組むまで時間もかかる為、自分たちの任務ではないが、洛陽への帰り道ついで、盗賊程度討伐してしまおうと決断し翌日飛信隊の面々はその廃村へと出発した。

緑豊かな山間に、鳥の声が一つ高く木霊する。飛信隊が行く空には雲ひとつない晴天が広がっており、中天に差し掛かった太陽は、暖かな日差しを地上の李信達へと惜しむことなく降り注いでいる。穏やかで優しい風が汗ばんできた身体を心地よく撫でていき、そのあまりの気持ちよさに馬上でありながら居眠りの一つでもしたくなる陽気でもあった。

「いい天気だ。このまま続いてくれたら助かるんだけどな」

くあつと軽い欠伸をしながら一人ごちた李信に、ウムつと頷くのは韓遂だ。彼の隣に馬首を並べ、並行して走らせている彼女の騎乗は実に巧みだ。運動神経が壊滅的だとは思えない腕前に、そのあたりがどうも不思議でならない李信だったが、馬に乗れないよりは良いか、と無理矢理自分を納得させている。

「天气が良いのは良いことだが……我にはなかなかこの日差しは辛いものがある」

「いや……まあ、そうだろう」

正体を隠すためとはいえ相変わらずの怪しき爆発の格好。黒尽く

めの服に、鉄仮面。もしも夜の暗い時分に出会えば反射的に叩き斬る自信があるほどの不審人物ぶりを発揮している。とはいっても、韓遂は涼州の反乱の折に李信に討ち取られたことになっていない為、流石に素顔のまま出歩くのは不都合が生じる。彼女の顔を知っているのは限られているとはいえ、危険を減らすためには仕方のない格好だ。

「で、軍師様。今回の盗賊の件については作戦とかってある？」

「うむ……どうも話を聞く分に大勢が住み着いたというわけではないようだ。ごく少数……されど討伐隊を退けたということとは、それなりの力量を持つ者が混ざっておるやもしれん。まあ、そこらはこの部隊ならば問題はなからう。隊を二つにわけ、廃村を包囲しつつ逃げ場を無くして殲滅する」

「捨りはないけど、十分でござえますね」

「ああ。では、二つの隊はどうわけ？」

戦力で重要となる数さえ勝っていれば、奇策に頼らずとも正攻法が一番有効だ。ましてや飛信隊の白兵戦における力は漢王朝で随一と言われているのも決して大袈裟なものではない。隊の中心となる百名は、華雄とともに涼州にて異民族と戦ってきた古強者。しかも大規模な韓約の乱において漢陽守城戦を戦い抜いた生粋の戦士。彼ら百人の力量は、それぞれが他部隊の將軍級の腕前と言っても過言ではない。さらには追加で飛信隊に加えられた新兵も、普段の練兵と戦場による経験で一線級の兵士へと成長している。

「ふははははっ!! 勿論、我と主の二人つきり——」

スパンつと頭を高順に叩かれた韓遂が、ぎゃわつと甲高い悲鳴をあげた。顔は仮面で隠されているものの、後頭部まではさすがに防げない。真面目にやる、と怒られた韓遂は仮面で見えないが涙目になって痛む後頭部を摩りながら流石にふざけすぎたか、と若干の反省をした。

「我、華雄、高順の三人と親衛隊から五十。主と胡軫と親衛隊五十。あとは隊を半分ずつが適当であろう」

「……妥当な組み合わせだね」

「それが無難だな」

基本あまり作戦を考えずに突っ込む華雄と高順を抑え指揮するための韓遂。地味に二流程度とはいえ軍師の真似事ができ、様々な援護や援助が出来る胡軫が李信の補助にあたる。戦力的にも、人間関係の兼ね合い的にもこれが一番おさまりがよいというのも確かなことだ。華雄と高順のどちらかを李信につけても片方が面白くないというのがあるためだ。かと言って、李信、華雄、高順ともなれば、残った韓遂と胡軫では戦力的にやや不安が残る。もともと、命の危険がある戦場においては流石にどんな振り分けをしたとしても文句がでることはないのだが。

飛信隊が一刻ほど馬を走らせると目指す先はなだらかな丘陵が連なり、街道がうねる線を描いて遠くまで伸びていた。その途中、街道を少し脇へ逸れた所へ、幾つかの建物が集まっているのが見えた。建物群の向こうには、荒れ果てた広い畑が見受けられ、それら建物を囲っている長くも朽ち果てかけている囲いもあるようだ。多くの建物があるのだが、煙の一つも上がっていない。遠くから見る分には、建物の荒れ具合がわからないが、それら廃村の周囲には動くものが何一つとしてないようだ。街道から少し逸れた平地にあつて、粗末な柵に囲われた集落——あれが目的の廃村であろう。

街道脇の廃村に近づくにつれ、柵に囲われた建物郡の姿も顕になってきた。背の低い木造の建物の多くは壁板が剥がれ、大きな穴が幾つも開いている。簡素な屋根も地板が剥き出しになって野ざらしな状態だ。幾つもの建物が幾つも向かい合わせに立っているものの、若干斜めに傾いているようにも見えた。廃村の入り口にもかつてはあつたであろう看板などももはや文字が見えないほどに劣化してしまっている。

入り口に兵を置き、華雄隊を時計周り、李信隊を反時計周りで廃村の外側から中の様子を窺いつつ逆側まで周る事にした。合流地点は廃村の逆の入り口ということを決め、それぞれの部隊が出立する。いつ戦闘になってもいいように、意識を集中させ、村の内部の気配を感じ取りながら馬をゆつくりと走らせるのだが——。

「……おかしいな」

「そうだね。人の気配が全くないよ」

「見た感じ、誰かが拠点としている様子も見られない……むむう」

華雄と高順が首を捻る。言葉にした通り、村の中に盗賊がいるような気配が微塵も感じられない。それに如何に少数とはいえ人が住む以上生活の痕跡が残る。それがあまりにも見られないのだ。或いは既に盗賊達はこの廃村から離れてしまったのではないか、と眉を顰めた韓遂達がとにかく李信と合流しようと考え始めた矢先の事であった。華雄と高順が突如として下馬し、華雄が戦斧を両手で握り締め上段に構え、高順が剣を抜き払った。何事か、と韓遂が二人の視線の先を追って——息を呑んだ。

ぼろぼろの村の柵。そこに腰掛けた一人の少女がいた。肩程度まで伸びた赤に近い桃色の髪。ピョコンつと天に向かって伸びる二房の髪が印象的だ。冷徹にも見える全てに興味がなにかのような無感情な表情を浮かべた幼いながらも人をひきつける容貌。その危うさは、老若男女問わず魅了する異様で不思議な雰囲気纏っていた。ところどころが破れ、ろくに修繕もされていない白と黒の直裾袍、とてつもなく長い紫紺の布を首に巻いている。彼女の傍らには、少女よりもなお長大な柄と、その穂先には巨大な刃。三日月状の月牙と呼ばれる横刃が、穂先の横に取り付けられた希少な武器。方天戟の亜種——それを人は方天画戟と呼んだ。

ケタケタと何かが笑う。クスクスと何かが嗤う。キヒヒと何かが晒う。

ああ、それは地獄の亡者だ。それは冥府より来る死神だ。如何なる強者も死へと導き、魂すらも喰らう悪鬼羅刹の頂点の頂点。人類の極点へと至ってしまった絶対強者。周囲を満たす頭がおかしくなるような笑い声。それは幻聴にしか過ぎない。現実には何も笑っていないし、叫んでもいない。それでも聞こえるのはつまり、自分たちが今まさに生と死の境界線。死という名の崖っぷちに立っていることに他ならない。

ポタリつと音がしたと思えば、それは汗が地面へと滴り落ちる音であった。韓遂は勿論、あの華雄や高順も同様で、飛信隊の面々すらも

平常心を保っている者はおらず……事実この少女に吞まれていない者はいなかった。韓遂すらも、この少女の存在感に緊張を隠せずにした。何故ならば、目の前にいる少女が本来の彼女よりも数段大きく見えるからだ。これほどの経験、馬騰と会った時すらなかった。いや、馬騰どころの話ではない。この少女は——李信にすらも比肩する。「……何か用？」

百を超える武装した兵隊を目の前にしながら、少女は揺らぐことなく問い掛ける。純粹な疑問を口に出したただけだというのに、華雄も高順も戦闘体勢を崩すことはなかった。彼女から目を離してはだめだ。一瞬の油断が、命取りとなるほどの格の違い。それが此方と彼方と此方の間には埋めがたい溝として大きく開いている。一体この少女は何者なのか。何故こんな廃村に一人いるのか。ぐるぐると数多の疑問が浮かんで言葉になる前に消えていく。

「……お前は、何者、だ!？」

結局華雄の口からでたのはそんな台詞だった。その問いかけを受けた少女は暫く天を仰ぎ見ていたが、それに対する答えを導き出すことが出来なかったのか、首をこてんつと横に倒した。

「……恋は恋」

恋とは何ぞや、と一瞬解らなかつた飛信隊の面々であつたが、それが少女の名前であり一人称であることに遅れて気づく。

「……この地に盗賊なる者が、住み着いていると聞いた。お前はそれを知らないか？」

「……盗賊？」

華雄の搾り出す声に少女は一瞬考え込む仕草を見せるものの、何かに気づいたのか。ああと短い声を上げた。

「……それ恋のこと。最近商人を襲ったことがある」

これだけの漢王朝の兵を前にして平然と言い放つ少女の胆力や如何ほどのものか。華雄達の方が一瞬なにを言っているのか解らなかつたほどだ。

「——そうか。ならば、悪いが縄についてもらうぞ」

華雄と高順がジリジリと間合いを詰めていこうとする。二人の気

当たりとでもいふべき圧が、少女の肌を痛いほどにピリピリと打ち、それを見ていた飛信隊の皆が言葉も見つからない。隊でも李信に次ぐ彼女達が、手加減を一切しない本気の威圧をしているのだ。相手が只者ではないの是一目でわかるが、この少女はそれほどのものなのか、と。

「それは無理。だつてお前たちは……弱いもの」

涼州でも名を馳せ、今では北方の異民族にすらも怖れられる華雄達を弱いと言ひ切る少女。彼女は別に意識してその言葉を発したわけでもなく、煽る意味合いで口にしたわけでもない。ただ純粹に、心からの本心で忠告を兼ねてそう言ったのだ。だが、それが武人にとっては最大の挑発となることをこの少女は知らなかった。それだけの話だ。

「——ッ!!」

身体中を満たす憤怒に身をまかせ、華雄と高順が先駆けて少女へと襲い掛かろうとしたその時。

「——落ち着けい、馬鹿者達が!!」

彼女達の足を止める戒めの雄叫びが響き渡った。

馬上で真剣な表情を見せる韓遂は、一種の腹を決めた人間を思い起こさせる。

「そのまま行けば無駄死にぞ!! おぬし達二人でも、そやつには及びはせぬ!! それは、人ではない」

言葉にせずともそれにはこの場の全員が同意する。見ているだけで寒気が止まらないのだ。多くの戦場を駆け抜けてきた飛信隊の面々でさえも、これほどの化け物と出会った事は一度としてなかった。戦ったとしても勝利する光景が微塵も見えず、果たして戦闘という行為に持つていくことすらできるか怪しいものだ。

「だが、化け物を打ち倒すのもまた人である!!」

鉄仮面を放り投げ、黒尽くめの服を投げ捨てた。身軽となった韓遂が、ギリギリと少女を睨みつける様は異常であった。彼女から何か被害を受けたわけでもないというのに、その瞳には少女を絶対に討ち取るという強い想いが乗っている。

「良いか、飛信隊よ!! 我ら一人一人ではそやつには決して及ばん!!
故に力を合わせよ、我ら飛信隊の真骨頂を見せ付けてやれ!!」

それほどまでの化け者を相手に韓遂は戦うという選択肢を選んだ。決して退かぬという不退転の意思をその胸に刻み、飛信隊へと指示を出した。だが、その指示に従う飛信隊の面々は動きが鈍い。それも当然である。相手は人型の天災。勝利の道筋が全く見えない怪物だ。こんな存在を前にして何故退かない。何故戦うのか。いや、隊長である李信を呼びに行ったほうが良いのではないか。そんな疑問が沸々と湧いて出てきた。

「馬鹿者どもがああああああああああああつ!!」

そして二度に渡る韓遂の怒号。これまで戦場をともに何度も渡り歩いてきた軍師の一度として聞いたことがない怒りに満ち溢れたそれに、飛信隊の皆が身をすくませるのも一瞬。

「理解しろっ!! いいや、理解しているはずだっ!! こいつは、こやつは……李信殿を殺せるものである、と!!」

それは、韓遂のその絶叫に別の意味で身体が凍った。

「こやつもまた人にして人の枠組みをはずれし者!! 人外の到達者!! 我が主と、李信殿と伍する頂点よ!! その怪物を、その存在を自覚してながら、お主達は李信殿を呼べというのか!?!」

紛れもない怒り。戦う前から勝利を諦めた部下の、兵士達への怒りに憤慨しながら韓遂は続ける。

「飛信隊の頭は誰か?! 李信殿だ!! 我らは手足!! 手や足がなくなるとも生きてはいける!! 李信殿だけが飛信隊で唯一無二の存在だ!! その李信殿に危機が迫ろうとするのを、易々と見過ごすつもりか、お主達は!!」

武将としては恐らくそこらの兵士にすら劣るであろう韓遂が、自らの腰から剣を引き抜き少女へと向ける。

「李信殿と会おう前に、この少女は殺さねばならん!! 討ち取らねばならん!! この少女こそ、我らが主の唯一の天敵と知れ!!」

自分達の隊長に危険が迫る。それを知った兵士達の顔つきがかわる。今の今まで戦うことに難色を示していた彼らはすでに覚悟を決

めていた。

「そやつは強い。驚異的だ。恐らくは李信殿すらも殺し得る領域の怪物であるっ!! だが、我ら飛信隊に命じる……一人で、いや二人でかすり傷一つでもよい!! それのみを目標とせよ!!」

それぞれがそれぞれの干戈を手に取った。隊長の敵を討ち滅ぼすために。隊長の命を守る為に。常に隊の最前線で矛を振り続けてきた李信を守るのは自分たちだといわんばかりに。

「お主たちは、死ぬだろう!! 我が策にて、我が命にて!! だが、おぬし達の死は決して無駄死になどではない!! それは李信殿の道筋を照らす確かな光となる!! よいか、我の為に死ぬ必要はないぞっ!!」
そこで大きく韓遂は息を吸った。

「——李信殿の為に戦い、そして死ぬ!!」

了解だ、軍師殿。

飛信隊が奮起の雄叫びをあげ、華雄と高順もまたその身が爆ぜる。ただ威力のみを追求した戦斧の一閃。全てを賭けた全力全開の振り下ろし。超重量の爆撃が少女へと向かって牙を向く。だが、キインと心許ない金属音が響き渡り、ふと軽くなった自分の手に覚える違和感。くるくると華雄の視線の隅っこで何やら回転している何かがあった。脳が現実の処理においつかない。何故ならば回っているそれは……柄の半ばから断ち切られた戦斧のそれであったからだ。長らく苦楽をともにした相棒の最後に呆けてしまうのは無理もない。それは一瞬のことですぐさま我を取り戻す。

だが、追撃となる少女の一撃が迫り来ようとしている今このとき、その一瞬すらもが命取りとなった。この時、華雄は死んだ、と思った。防ぐことも回避することも出来ない絶対死。自分の死を理解した彼女が次に取った行動は——少女に向かって飛び掛ることであった。例え身体を分断されたとしても命をかけて喰らいつく。僅かなときでも少女の動きを止めてしまえば他の者が続いてくれる。そんな想いが彼女を突き動かした。だが、華雄への攻撃の手を止めると、少女はその場から横へと跳び下がった。秒後、少女が今までの空間を高順の剣が薙いでいた。すまん、高順……そんな気持ちを込めて視線を

送るもそれに反応することはない。肝心の彼女は、ただただ虚ろな瞳で己の敵を見やっている。特殊な呼吸音が傍にいる華雄にも伝わってきており——潜ったことを華雄は瞬時に理解した。

予備の武器となる剣を抜いて、高順とともに少女へと再度の突撃を繰り返す。その間際飛信隊からの援護となる矢の嵐が降り注ぐものの、慌てもせずに方天画戟を数度振るうと自分に迫ってきていた矢全てを弾き落とす。そこに生じる僅かな隙を狙って華雄の剣が唸りをあげた。右側面からの横一直線の横薙ぎを、軽々と呂布は方天画戟の柄で受け止め、振り払う。踏ん張ることすらできない圧倒的な膂力差により、彼女の身体が弾き飛ばされ地面へと転がった。次いで自分の背後から気配も感じさせずに踏み入ってきた高順へと振り向きながらの一閃。それを地面ギリギリにまで上体を低くしやり過ぐすと、遂に化け物の間合いへと侵入することに成功したが——高順が剣を振るうよりも早く、少女の前蹴りが彼女の肉体を蹴り飛ばす。剣の横っ腹で受け止めたとはいえ受け止めることなど出来はせず数メートルは飛ばされた地面へと墜落。血反吐を吐きながらも、華雄と高順は即座に立ち上がった。

彼女達の姿に首を捻るのは少女である。遠くから放たれた投槍を方天画戟で切り落とすと、自分を襲う違和感に疑問を生じざるを得ない。少女は強かった。いや、強すぎた。この世に生を受け、物心ついたその頃より彼女は絶対の強者であり、視界に映るもの全てが弱者。自分の出身がどこであったのかも思い出せないが、ただ自分と同等の存在を、ただ自分と遊べる強者を求めて広大な大陸を旅して過ごした。それから十余年、未だ自分が満足できる存在と出会えなかった彼女が、これまで全ての敵を一撃で屠ってきた自分の攻撃を受けて命がある者が二人。確かに全力ではなかったし、本気でもなかった。ただの戯れ程度の攻撃しかなかったが、それでも希少だ。これほどの力量を持つ者は、記憶を遡っても数えるほど。それでも——少女の表情を動かすには至らない。

続けて幾度も自分を狙ってくる投槍を若干面倒臭そうに弾き落としながらも、ちらりつと韓遂を見やる。先程の檄といい、隊の者に指

示を出している姿といい。この場でもつとも厄介なのは彼女である。それを理解した少女の動きは素早かった。地面を軽く蹴りつけた少女の身体が疾駆する。矢の雨も投槍も軽々と潜り抜け、地をかける猛獣。そして赤い獣が飛翔した。驚異的な跳躍力が、飛信隊の面々を飛び越えて、後方にいた韓遂の手前へと少女を導く。驚愕も頭にする兵士も韓遂も置き去りに、方天画戟が軍師を狙う。瞬時の判断で馬から飛び降りた韓遂の選択は正解であった。何故ならば、その一拍子後には少女の刃が馬を両断していたからだ。血飛沫があがり、地面へと身体を投げ出した韓遂に降りかかり、もはや逃げ出すこともできなく地面に座り込む彼女へと少女が方天画戟を振り上げた。

させるものか、と飛信隊の兵士が少女へと武器を片手に立ち向かうとするも——遅い。少女が刃を韓遂にむかつて振り下ろす方が速いであろう。それを悟っていながらも飛信隊は止まらない。そんな中、自分へと迫ってくる方天画戟の切っ先を見ていた韓遂の心は意外にも落ち着いていた。もはや死は避けられない。それは事実であり現実だ。だが、もとよりこの命は李信に救われたもの。二度目の生だ。なにを失うことを怖れる必要があるか。せめて、この命最後の最後まで敬愛し、尊敬する我が主の為に。地面に倒れていた韓遂が突如として振り下ろされる方天画戟目掛けて勢いよく立ち向かった。それは自身の身体を利用して、相手の武器を一瞬でもいいから妨げようという決死の行動であった。文字通りの命がけ、命を燃やし費やした韓遂の賭けでもあった。その一瞬について飛信隊の誰かが少女を殺せれば御の字だ。いや、そこまでの命の重さはあるまいて、と苦笑する。せめて腕一本、傷一つ……その程度の爪痕でも残すことが出来れば——主が勝つ。そうこの身体、この想い、この肉体、髪の毛一本に至るまで、全て。全ては——李信のために。

声なき韓遂の咆哮が少女の全身を強かに打ち付けるもそれで止まるような彼女ではない。何の感慨もなく遂に振り下ろされた方天画戟が——それより更に強大な威力の大矛に弾き飛ばされる。少女の肉体が衝撃に耐え切れず、その場から馬車馬に弾かれたように彼方へと転がっていった。シュウつと金属同士が噛み合って生み出され

た焦げ臭い匂いを嗅ぎながら、呆然と韓遂は前に立つ李信を見つめる。三度命を救ってもらった。それには感謝しかない。それでも、来てしまった。間に合わなかったのだ、自分達は。無傷の少女と李信を会わせてしまった。どちらも人類の極点に達した者同士。底知れないというには二人がそうだが、韓遂からしてみれば少女の方がそれにあたる。普段から李信とともにいるが故に、彼の力量、才覚全てを知っているつもりだ。逆に少女のほうは何も知れない。何も解らない。純粹に、ただ強い。中華における絶対強者。そんな二人を戦わせてなるものか。

「ま、待つのだ……主よ!! 我らは、我らはまだ負けておらん!! あやつは我らに任せて——」

ガンッと響くのは李信が韓遂の頭を殴りつけた音であった。

はぎやつと抑えて蹲る韓遂に嘆息しつつ、彼は立ち上がった少女へと視線を送る。

「馬鹿か、お前たちは。無駄に命を散らすなよ」

ぶんと大矛を軽く振って握りを確かめる。

僅か一合のぶつかり合いで理解した。何故、韓遂がここまで取り乱しているのかを。華雄や高順までもがあそこまで疲弊しているのか。手にもたらされた軽い痺れが、少女が尋常ではない相手であることの証左であった。

「待つのだ、待つて……」

涙目で未だ李信を止めようとする韓遂の気持ちも理解出来る。だが、ここは譲れない。譲れるものか。自分はここにいる。今ここにいるのだ。かつての時のように手遅れになる前に間に合った。

「韓遂、華雄、高順。それにお前たち。心配するな。俺を誰だと思ってる」

大矛を肩に引つ提げ、余裕綽々といった表情で李信は笑う。

天下の大將軍になる男だ。

心配。懸念。憂慮。不安。煩慮。怖れや恐れ。それら全てを一掃し、配下に安堵と安心をもたらす李信の存在感。それを口ではなく、彼の物言わぬ背中が雄弁に語っていた。

そうか。ならば、良いのか。わが主よ。お主に任せても。頼っても良いのか。

言葉にせずとも伝わる思い。思い。誰よりも頼りになる背中を見送った韓遂は、自分の弱さ、愚かき、女としての想いを抱きながらも、くしやりつと顔を歪ませた。

「飛信隊全員!! 隊長李信殿に—— 拜手!!」

韓遂の喊声に、飛信隊全ての人間が恭しく礼を取る。

全員の想いを引き連れて、とうとう人にして人為らざる者同士が対峙した。李信と少女……互に向かい合い顔を合わせるものの、二人ともがかつてない衝撃を受ける。これまで戦ってきた者達を遥か後方に置き去りにする強き者。いや、強い弱いという表現の前に、二人ともが住んでいる世界が違っていた。二人はただ一人で完成され、完結に至っていた。数え切れないほどの民が住む中華において強さという意味合いでは孤独であった彼と彼女。至強の頂の上にて全てを見下ろしていた怪物二人が、ようやくこの日この場所にて邂逅した。

「……強いね、貴方」

少女がぼつりと呟いた。言葉数は少ないものの、明らかに華雄達に比べて対応が異なっている。彼女は確かに李信に敬意を払っているようにも見えた。見掛け同様、まだ少女の年齢を脱していない彼女に、李信の内心は複雑だ。

「お前もな。まさかこの時代で—— 武神の領域に足を踏み入れかけている奴に出会えるとは思ってもいなかった」

「……武神？」

「こつちの話だ。まあ……随分とあいつとは様子が違うみたいだな」

かつての宿敵とは正反対とも言える姿。だが、擁する実力はまぎれもなくかつて李信が幾度も苦渋を舐めさせられた武神を思い出させる。向かい合っている今現在、久々に感じる勝敗がどちらに転ぶかわからない緊迫感がひしひしと伝わってきていた。ただ、純粹にこの少女は強い。スつと少女が方天画戟を背後に引き自身の姿で隠したかと思えば—— 地面がポッと爆発した。それは彼女が地面を蹴りつ

けた際に発生した衝撃。土が舞い跳び、それが落ちるよりもなお早く、少女の方天画戟が半円を描いて李信の左側面を狙って打ち払われた。彼女の肉体が死角となって突如として出現したように見える方天画戟が、間合いと長さを狂わせて襲い掛かってくるものの、慌てる様子を微塵も見せずに大矛でそれを受け止めた。大矛と方天画戟がかみ合い生じた金切り音に、反射的に誰もが身をすくませるが、防がれたということに僅かに表情を変化させた少女のその後の行動は流れる流水であった。方天画戟で大矛を引つ掛けると内側に捻り込むようにして相手から武器を奪おうと試みるも——膂力は互角。

ギチギチと互いの武器と肉体が悲鳴をあげながらもピクリとも動かない。李信がそれを無理矢理に振り払い、上段からの縦一閃。軽く後ろにとんで一寸の見切りを持ってそれを回避する少女は、目の前を暴風を撒き散らして通過していった大矛の刃が見えていながら平然としていた。大矛が地面に着弾、爆発。大地を抉る破碎の鉄槌が砂と土を吹き上げさせ、それを目くらましとして飛び出す少女が身体ごと叩きつける刺突となつて李信へと迫り行く。三度の金属音が高鳴り、驚愕もあらわに今度こそ表情を大きく変化させたのは少女だ。大矛の切っ先が方天画戟の切っ先と重なり合つてピタリと静止している。たまたまや偶然でこのようなことが出来る筈もなく、起きることもない。自分との戦いのさなかに狙つてやったという恐るべき神業を見ながら——少女は笑つた。童女のように愛らしく、獣が如く狂暴に。

飛び下がるのも同時。準備運動は終わりともいうのか、この日初めて二人は本気で、真剣で、全力の戦闘体勢を取る。普段では有り得ない間合いの距離を取り、測りつつ互いの筋肉の動きや纏う空気すらも把握し、隙ともいえない隙を狙い探る二人。周囲にて見守っている者達は、呼吸も出来ない緊張感に吞まれていた。まるでここが深い深い、深淵の水の底と思わせるほどに空気が重い。指先一つ動かす労力すらも今の皆には一苦勞な状態だ。

「……李、信とか言つた？ 貴方に一つだけ頼みがある」

限界極限に張り詰められた糸。後一つ何かが起こればそれが切れる。誰もが固唾を呑み、身動きを許さない中、少女が体勢を低く取っていく。地に着くほどに身体を低く。それは射られる寸前の弓矢を連想させた。

「……簡単に、死なないで」

李信はそれに、返事をする事はなかった。正確に言うならばその余裕がなかったからだ。獲物に襲い掛かる猫科の肉食獣の姿そのままに、目が離せない。鼓動音、呼吸音、筋組織の萎縮音、筋肉の配置、骨格一挙動毎の所作。目に見る限り、耳に聞く限り、彼女の備える技量が全く把握できない。視線が合いながらも互いに覗き込む瞳の奥底にあるものが読みきれない。次なる瞬間は先程の巻き戻し。少女が大地が踏みつけた衝撃で地面が抉れ——今度はそれが上空へと飛び散るよりも早く、その時には既に李信の間合いへと踏み入っていた。その動きや赤い閃光。放たれた矢どころか、音さえも彼女の後からついてくる。それは咄嗟の判断だ。眼前を大矛で遮った李信の目の前を煌く方天画戟の斬閃を寸でるところで受け止める。一瞬の判断の迷いが生死をわける前世今世あわせても指折りの怪物の圧力に、李信の額から珠の汗が飛び散った。

対する少女は、膨大な重圧を背にさらに一步。李信を押し込む桁外の肉體が、さしもの彼も後ろへと一步たたたらを踏む。同時に、少女の肉體が一瞬身を沈めて反転し、李信の両脚を刈り払うすれすれの踵をなんとか跳び避け——その身体が地に着くよりも迅速なるすくいあげの一撃が彼の真下から昇竜の勢いで放たれた。地に足がつかず不安定な状態の李信が迎え撃つも、膂力が互角であるならば結果は火を見るよりも明らか。事実、大矛と方天画戟の打ち合いは、後者に軍配があがる。拮抗するのは瞬間で、李信の肉體が玉を放り投げるように弾き飛ばされた。だが、彼の動きは軽やかだ。くるりつと宙で身体を捻り地面に着地。腕に残る痺れに眉を顰めつつも、追撃を仕掛けてくる少女へと大矛を向けた。余計なことを考えている暇もない。余裕もない。一瞬どころか刹那の時が互いの勝敗を決定する究極の闘争。それに身を置く李信は無心の世界へと没入していく。

それとは対極なのが少女であった。生来口下手で口数も少ない彼女は、別にそれでよいと思っていた。必要もないと思っていた。その彼女が、自分以外が全て弱者と思っていた少女が、この時ほど自分の性格を恨まずにいられなかった。今の彼女にあるのは感謝だ。目の前の男へ対する、自分と戦える存在へ対する億千万の感謝を言葉で紡ぎたかった。だが、言えない。思いつかない。それが齒がゆい。しかし、それが自分だ。ならば今は自らが誇る力で語ろう。

さらなる加速。一条の赤閃となった少女の肉体。今度は武器ごと李信を断つ。それだけの速度と威力と覚悟を秘めた方天画戟の切っ先を向けた呐喊。次いで振り下ろされる袈裟懸けの方天画戟。回避不能と思われた神速のそれは、李信の肉体を斜めに両断するはずだったそれは、抉ったのは空気と地面のみ。肝心の彼の肉体を傷つけることはかなわなかった。バツと見上げれば空中に身を翻す好敵手の存在が見え、頭上最上段からの切り下ろしが少女の頭蓋を砕かんと放たれた。しかし少女も驚くこともなくそれに対応する。自分の武器の柄で攻撃を受け止めるものの、返す刀での片腕片足を斬りとばす狙いの斜め切り上げ。それも避けることを見透かしていたのか、首を飛ばす横薙ぎ、少女が回避と防御を繰り返すものの、それでも止まらない李信の一撃狙いの急所攻撃。矢継ぎ早の連撃に、今度は少女の方が後退をせざるを得ない。反撃を封じる刹那の間で繰り出される追撃に、防戦一方となる少女。

少女はかつてない強敵の存在に身を震わし、驚愕する。彼女はこれまで誰かに師事したこともないし、武を習ったこともない。純粹に、生まれつきの超越者であった。人を遥かに超える膂力、速度、反射神経、五感、そして認識力と理解力。故に彼女には手に取るようにわかるのだ。向かい合えば、戦いを前にすれば、彼女の優れた全ての感覚が、自然と相手の行動を教えてくれる。それは一種の心眼ともいえるある種の究極。相手の心が、肉体が何を次の一手とするか読めてしまう。それに加え、彼女の全てを後方へと置き去りにする肉体さえあれば彼女に勝るものはなく、比肩する者などいないのが当然だ。李信に対してもそうだ。少女は彼の行動が読めている。次なる挙動が何

なのか未来予知にも似た感覚で覚ることが可能だ。それでも……それでも。それでも、李信の攻撃を完全に避け切ることができていない。己の両手で握っている方天画戟を持ってしても、彼の太矛による連撃を防ぐことで手一杯だ。反撃を試みようにも、合間合間に隙もなく下手に攻勢に出れば叩き潰されるのが必然。最速にして最悪の致命打を繰り出し続けている。

このままでは吞まれる、そう判断した結果——流水の如き攻撃のさなかに僅かに覗いた隙、李信へと反撃を仕掛ける玉響、それが相手の罠であつた事に気づいた。無理矢理に方天画戟を引っ張り、左胸へと襲い掛かつてきた太矛の刃を受け止めるも、無理な体勢で受ければどうなるかわからない少女でもない。地面を蹴りつけ自ら横に跳ぶことによつて太矛の威力を逃がし、流す。今度は少女が先程の李信のように空中で身体を捻り見事に着地。彼女のしなやかな肉体が、ほぼ全ての衝撃を逃がしていることに気づいているのはこの場で戦っている李信だけであつた。

李信の戦いを見慣れている飛信隊の面々でさえも、呆けた様子で目の前で行われている怪物達の饗宴に息を呑む。戦場で生き、戦場を支配する李信の姿。これまで見てきた彼の姿は、まだ本領ではなかつたことに愕然とした。これが李信の、隊長の全力なのか。今まで見てきた彼の力は、鬼神の如きその力は——少女という好敵手の出現によつて最高にまで高められている。先程の打ち合いにしてもそうだ。李信が繰り出したのは合計二十五にも及ぶ爆撃の斬閃。それらが僅か数秒の内に行われた。極限に圧縮された時間のなかで彼と彼女は生と死を繰り返していた。全てが見えたわけではないが、李信の太矛は確かに相手の命を奪うという点では、全身の筋肉を最大限にまで利用した、人は愚か人外の域に達したであろう彼の最高にして最速の連撃を繰り出していた。だが——生きています。いや、それどころかたいたした手傷すら負っていない少女もまた、やはり怪物。

「……これが、これが人の戦いなのか？」

彼方と此方。その差は決して埋めようがないほどに広く深い。最強同士の出会いと闘争。その結果が目目の前の光景であり、高順をして

畏怖という感情を隠しきれない。目指す果ては自分が考えているよりも遥かに高い頂の上。愕然とする彼女へ背後から華雄が首に腕を回してぐつと自身の胸に押し付けた。

「そうだ。あれが私達の目指す先だ」

華雄の瞳には恐怖はなかった。畏怖もなかった。ただ、自分の求める男の強さを知れた女としての喜びだけがあった。それを引き出しているのが自分ではないことに若干の不満はあれど、それでも李信の全力を見て知れて、純粹に歓喜の念に包まれていた。

二人の思考会話を邪魔する雷撃染みた破壊音と衝撃音が鳴り響く。発生源は言わずもがな、二人の怪物。二頭の化物。ありとあらゆる武人を置き去りにする両者全力全開の斬撃、刺突、薙ぎ払いがぶつかり合い両者ともが弾き飛ばされる。それでも二人は嬉々として互いの命を削りあう。全てを叩き付け合う。何人たりとも立ち入れない不可侵領域をそこにいる二人は形成していた。

だが、次第に形勢はある一方へと偏りつつある。有利となつていつているのは李信のほうだ。元来強い者と戦えば戦うほど自身の力量を底上げしていく武の結晶。戦闘のさなかに成長していく理不尽の塊。それが少女との戦いで十全に発揮され、彼女を追い詰めていった。攻守が互角の手数であった戦いは、李信の一撃一撃が重さを速さを増していくことによつて比率を変えていく。つまりは李信の攻勢が多くなり、少女がその火勢に飲み込まれていく状態だ。腕に痺れがはしり、身体中が悲鳴をあげる。これ以上の攻撃は受けきれないと、彼女を長年支えてきたもつとも近い友である肉体が彼女の想いとは裏腹に裏切ろうとしていた。ドゴンつと響くさらなる凶悪な衝撃に――方天画戟で辛うじて直撃は防げどついに小柄なその肉体が消し飛び廃屋の壁を突き破つて姿をけした。シンつと静まり返る戦場で、勝利したのは我らが隊長李信だというのに、肝心の彼は大矛をおさめることなくジつと廃屋へと消えた少女を見たままだ。それを前にしているからだろうか、勝ちどきを上げる気にもなれない。いや、本音を言おう。皆が悟っているのだ。このままではあの怪物は終わらない。それが皆の共通認識であった。

その時ピシリつと揺れた気がした。家が、廃村が、周囲一帯が、中華全域が。パラパラつと廃村全域の壁の塗料が剥がれおちていく。村の地面に幾つものヒビすら入っていき始めた。ひび割れが増えるに従って、少女が姿を消した廃屋が傾き始め彼女を埋め立てるようにして、完全に崩れ落ちる。舞い上がる砂埃が全ての人間の視界を封じ

「——アアアアアアッ!!」

それはまさしく獣の咆哮であった。意味を為していない、甲高い少女の雄叫びが鼓膜を打ち振るわせる。聞く者の戦意も敵意も存在すらもかき消す天蓋の獣の容赦ない威圧が李信の身体を四方から叩きつけられた。ただの雄叫び、言ってしまうばただの音だ。それでもそれは不可視でありながら李信の意識を刹那失わせるほどの大質量の荒波。激しい空気振動に伴う大気密度の変動に、脳が揺さぶられ視界の全てが揺らいでいた。周囲の温度さえも変化させたのではないか、と思わせるそれはグツグツと空気を煮立たせる。未だ震える視界で空を仰げば、太陽を遮る影一つ。そして赤い塊が降ってきた。地を揺らす少女の肉体が、李信を飛び越えて後方へと降り立つと、方天画戟を器用に苛烈に振り回す。咄嗟に後方へと離脱し、水平に薙ぎ払われた超重兵器の間合いから脱出。その際に生じた空気がぶわりつと遠く離れたはずの李信の身体を撫で付ける。耳鳴りが未だ残される万全とはいえない状況で、赤い獣が眼前へと躍り出た。全身の回転運動全てを利用した方天画戟の袈裟懸け、逆袈裟、打ち下ろしに振り上げ、右薙ぎ払いに左薙ぎ払い、コレまで以上に速く、重く、鋭い。先程までとは完全に逆となる光景だ。一切の容赦も油断も隙もない獲物を食い尽くす獣の攻勢に、ところどころで薄皮一枚斬られる程度ではあるが手傷を負いながらも回避と防御を繰り返す。

意識がとんでいる事によって籠が外れたか。獣性の解放。あらゆる枷から解き放たれた獣が本能をむき出しにして李信へと喰らいついていく。血飛沫が舞う決闘において、死が眼前に迫っているというのに李信は笑った。クカカカカつとまるで過去の死闘を思い出させる現状に、かつてないほどの絶望を持って襲い掛かってくる天蓋の獣

れ以上に彼の背に憎悪を悪意をぶつけている兵士達。地平の彼方まで埋め尽くす、尊敬と崇拜と憎悪と悪意。膨大すぎるそれを背負った男の姿に見惚れるくらいに眩暈がした。

全てを焼き尽くす太陽の熱を発する李信に反射的に手を伸ばした獣が次の瞬間——間合いへと詰め入った李信によって、首を掴まれ全力を持って大地へと叩きつけられた。地面を粉碎すると同時にひび割れ陥没する。ごぼつと口から多量の血を吹き出した彼女は、ついにその動きをとめる。

地面に四肢を投げ出し得物となる方天画戟も手にはない。見上げる少女と見下ろす李信。勝敗がどうなったか一目見て明らかだ。だが、勝者の筈の李信も至る所に大小の裂傷を負っており、あくまでも致命傷がないというだけの状態である。もしも後一步なにかが間違っていれば勝敗は逆になっただけの状態である。もおかしくはない戦いであった。ピタリと地面に倒れ伏している少女の喉下に大矛の切っ先を寸止めして一息。

「……負けた」

ぽつりつと少女が呟いた。既に先程の狂乱状態は過ぎ去っており、彼女の瞳には確かに理性の光が見て取れる。口に出したとおり、少女は自身の初めての敗北を受け入れていた。負けたくないという一心で、本能に身を任せた結果がこれだ。いや、どちらにせよ今の自分ではどうしたって勝ちの目はなかったのだろう、と目をゆっくりと閉じた。強かった。本当に強かった。夢を見ているのではないかと思うほどに最高の時間であった。短くも濃縮され圧縮され凝縮された、この世の全ての快楽を天秤にかけたとしても量るまでもない煌く光を放つ時間。だが、それもお仕舞いだ。自分は破れ、彼が勝った。彼は生き、そして自分は死ぬ。その事実が、心が震える。死ぬというところがここまで恐ろしいことだったとは。自分が戦ってきた者全てに与えてきた感情はこうまで悲嘆にくれるものだったとは。あと少し、李信がもう少しでも大矛を突き出せばそれで終わりだ。だが、その気配が見られない。何故だ、と疑問を感じながら目を開けると、そこには李信の足に噛り付く子犬の姿があった。

「——赤、兎？」

ギョつとする少女が無意識にその子犬の名前を呼んだ。何故出てきたのか。絶対に隠れて出てこないように言いつけておいたというのに。いや、赤兎だけではない。十匹を越える子犬子猫が李信から少女を守ろうとするかのように間に割って入っていた。小さな小動物に威嚇され、流石の李信もどうすればいいか困り果てている。これだったらまだ敵意をもって攻撃してくる者のほうが対処しやすい。眉を顰めている李信へと、少女は身体を起こし座り込む。そして真つ直ぐと頭を下げた。

「……この子達は、助けてあげて」

平伏し、動物の命を嘆願する少女にどうするべきか。完全に毒を抜かれた李信が助けを求めて華雄達へと視線を送ると韓遂が何かに気づいたのか、李信達の方へと歩み寄ってくる。

「お主まさか、盗賊まがいのことをしているとは……この子犬達を育てるためにか？」

「……」

こくりつと頷いた少女に、青天の霹靂とばかりに皆が驚く。この少女が、誰かの為に……というか、動物達のために動いていたのか。そんな中で、通りでと李信は一人頷く。強さは間違いなく武神級。だが、あの男ほどの外れ具合ではなかった。自分以外を切り捨てて武の道に行く求道者。他人など必要としないそれとは違う。彼女にもまた守るものが、大切なものがあったのだ。戦いの最中に気づいた違和感はそのから来ていたのかもしれない。

「そうか。ならば、小娘!! 我らがその動物達を引き取ろう!!」

突如韓遂が奇妙なことを口走り、何を言い出すんだこいつは、と思うのも束の間。

「洛陽にてお主も世話ができるように屋敷を用意し、世話役もつけよう!! 給金も出す、その代わりに我らに力を貸すがよい!!」

なにを突然と思ったが、皆がそれは悪くないと瞬時に判断を下す。

少女の力は驚異的だ。彼女が加わればとてつもない戦力となるだろう。しかも、李信に伍する少女がともに戦うとなれば——李信の

命を脅かせるものなどいなくなる。少女の答えは如何に、と皆が注目するなか、少女はじつと李信を見つめ続けている。一分が経ち、二分が経った。我慢強く少女の答えを待っていたものの、ついに痺れを切らして韓遂が答えを急がせようとしたその時、少女が口を開く。

「……わかった。貴方達に従う」

もとより少女に選択肢はない。断ったらこのまま殺されるだけだ。今までだったら別にそれでも良かったが、今は死にたくないという感情が芽生えてしまった。

「貴方の背負っているモノ……それが貴方の強さの秘密？」

少女の問い掛けに、何のことだと首を捻るも一瞬で——驚いたの
か目を見開いた李信が心底驚嘆してそれに答える。

「見えたのか」

個としての強さの極点にいる少女ではあるが、これはきつと将としての才能もある。驚き、感心する李信だったが、周囲は何のことかわからず首を捻る者ばかりだ。

一方の少女は、ほうつと息を吐いた。じわじわと胸を熱くする感情が渦巻いている。それは目の前の男の強さを知ってからだ。その強さは孤独だ。数多くの死した者達の想いを双肩に乗せる彼の強さ。誰一人として同じ地平に立てやしない。彼の苦痛、苦悩は計り知れないだろう。それがわかるのは、自分もそうであったからだ。だからこそ、自分こそが彼の隣に立つ。自分が彼を満足させよう。決して孤独などにさせてやるものか。自分がそうある限り、自身もまた孤独には決してならない。中華でただ二人、ようやく出会った唯一無二の天蓋の存在。我ら二人——その強さの目指す果ては自分たち以外は辿り着けぬ絶対の孤高。

「……そういえばお前の名前は？」

李信のふとした疑問に、誰もがアッと短く呻いた。

確かに彼女の名前を聞いていない。いや、恋といていたような気もするが。正式な名前は何だと言うのか。

「……呂布。字は奉先。よろしく」

呂布奉先。どこにも恋なる文字は存在しない。

まさか、と皆が顔を引き攣らせるなかそれについて問うた結果――
――真名かよつと全員から手荒い突っ込みを受けたとか。

後の世にて漢王朝最強を謳われることになる飛信軍。

その軍の突撃隊長として名を馳せる一騎当千。李信と双壁を為す
二人目の飛將軍呂布が加わった瞬間であった。

蛇足之4：臥竜鳳雛

漢王朝が領土としている中華の丁度中央あたりに位置する荊州。南陽郡、南郡、江夏郡、零陵郡、桂陽郡、武陵郡、長沙郡の七郡を管轄しているかなり大きな州でもある。そんな荊州の片田舎。人里からも離れた森の中に、とある屋敷があった。

普通の民家のおよそ十倍はあるであろう建物とさらに広大な土地を、漆喰の白い塀が囲っている。塀の高さはかなりのもので、大人であろうとも易々とは侵入できず、出入り口は東側の門一つだけ。太陽が沈みつつある時間帯、夕闇が迫り邸内には幾つもの箇所で篝火が焚かれていた。もつとも大きく広い母屋以外にも幾つか離れが存在し、敷地の端には幾つかの倉が建てられている。

そんな母屋の一室。この屋敷の主である一人の女性が正座をして机に乗せられている報告書に目を通していた。さらさらと背中にもでかかる蒼い髪が特徴の年齢不詳の自称美少女——司馬徽徳操。数年前に十常侍の趙忠に命を狙われながらも李信と張讓に命を救われ洛陽からここ荊州に移り住んだ女性である。荊州を支配している劉表から何回もの誘いがあったにも関わらず仕えようとはせず、才ある者を集めこの屋敷にて教鞭をとって暮らしていた。そのため劉表からは疎まれてはいるものの、以前のように政争に巻き込まれては適わない、と政治談義には決して口を出すことはなかった。ふむふむ、と書簡を最後まで目を通した彼女は背筋を伸ばし、ほうつとやけに扇情的な吐息を漏らす。

書簡の内容。それは今はこの屋敷を離れた生徒の一人から送られた物。荊州の片田舎かつ山奥にあるこの場所では中華の情報が全く入ってこない。それ故に、外へと仕官した生徒の伝手を頼り、時折こうして書簡に纏めて送って貰っているのであった。内容は、先程も語ったとおり中華における大小関係なく起こった出来事。そして、とある人物の情報である。その人物とは言うまでもなく、李信永政とい

う男についてだ。生徒としても、男を寄せつかない鉄の女性の印象が強い師が、ここまで拘ることに驚かされているが——これを送らないと機嫌が悪くなるのだから始末が悪い。司馬徽は最高の書物を読み終えた後のような幸福感に包まれて、頬を若干薄桃に染めている。「やはり李信殿のことに關して良く見聞きしているのは徐庶のようじゃな。上手く書かれているのう」

送ってくる書簡によって書く人間が違うのだから受ける印象は異なってくる。その中でも特に司馬徽の心に訴えてくるのは徐庶である。今まで育ててきた生徒の中でも五指に入る優秀な人材で、文武両道な少女。今はこの屋敷を離れ、中華を放浪して回っているという。自分が求める主君を探し回っていると聞いていたが、どうやらこの調子ではまだ見つかっていないのだろう。

荊州の山奥にほぼ隠遁状態の彼女ではあるが、李信のことに關しては情報を集めることは怠ってはいない。司馬徽という人物は基本的には優秀で秀才とも言える女性なのだが、こと彼に關しては病的なまでに偏執している。誰が何を言っても耳を貸さないところがあり、そこは生徒達からも少し気味悪がられていた。

「李信將軍……漢王朝における実質最強の将にして、軍を率いる男。此度は、元中山太守の張純の首級をあげる、か」

くつくつく。と自分のことのように喜びの声を上げる司馬徽。張純とは元中山郡の太守を勤めていた男である。とある問題を起こし逃亡して烏桓族の大人である丘力居の配下に入り、弥天安定王と自称し、三郡に渡る烏桓の総指揮者となった。そして青州、徐州、幽州、冀州の四州に攻め入り、多くの役人や民衆を殺し略奪を行なった。厄介極まりないその張純率いる烏桓族を一万の兵を持って壊滅させ、首級をとる。唯一の主君と定めた男の幾度目になるかのとてつもない武功に下腹部がキュッと悲鳴をあげた。彼が表舞台に出てきたときから信じられない武功の連続である。涼州の韓約の乱から始まり、漢王朝への反乱を悉く潰し、中華を侵略してくる北方の羌族、鮮卑、烏桓などの異民族を壊走させる。本来であるならばそちらと国境を面している州は異民族からの侵略に日々苦しんでいるところだが、被害は

激滅している状態だ。流石に面している土地が広すぎるため、全てを防ぐことは出来ないが、彼の名声は北方に住む者達にとつては知らぬ者がいないほどに広まっている。

何時までもこの幸福感に包まれていたいと思う司馬徽ではあるが、そう言う訳にもいかず、書簡を戸棚の中へといそいそとしまし。しまい終わったその時、部屋の外から自分を呼ぶ声が聞こえた。声からして間違いなく自分の生徒であることを確信。師として浮ついた自分を見せてはならないと、パシンと軽く己の頬を叩くと気持ちを入れ替えた。自分の席へと座って、コホンッと咳払い。背筋を伸ばし入室の許可を出す。

それを合図として二人の少女が部屋へと入ってきた。二人は司馬徽と向かい合うようにして床に座る。

司馬徽の前に平伏している少女のうちの一人は龐統十五元である。数年前に比べると多少は……本当に多少だが成長している。三角帽子を被っているのは以前と同様、もともと長かった髪であったが、この数年でさらに長く伸ばしたのか座った状態だと薄蒼の長い二つ結いの髪が床につきそうだ。自信がなさそうな表情は全く変わっていないかった。

もう一人の少女は、龐統と然程年齢も背丈も変わらない。短いさらさらの金の髪。帽子を被っており、髪には大きな翡翠色の髪飾り。龐統のようにどこか脅えた様子は見られずに、落ち着いた姿で司馬徽の前にて平伏している。司馬徽が教師として指導してきた中でももっとも優秀な、そして最後の生徒となる二人。その二人が司馬徽の前である許しを得ようとしている。とはいっても、彼女達の願い、悩みは以前から相談されており、受け入れてはいる。だが、筋を通す彼女達らしく、最後にもう一度司馬徽に挨拶に来たのだろう。なんとも可愛らしい生徒であるのか、と苦笑しながらも彼女は幾度目になるかの答えを金髪の少女へとかけた。

「ワシに許可をとる必要などないぞ。既にお主達はこの学院を卒業した身。自分の好きに行動すればよい」

「……政争、戦争に関わる事を避けている水鏡先生の教えに従えず申

し訳ありません。ですが……」

「よい。みなまで言うでない。それにお主は一つ勘違いしておるのう」

「……勘違い？」

千里先を見通すであろう自分の弟子が、キョトンとしている顔が少し愉快で苦笑する。パンパンと羽毛扇を右手で持ち、左のてのひらを軽く叩きながら司馬徽は続ける。

「ワシは別に戦争も政争も否定はしておらぬ。ただ故あってあまり目立つことはしたくなかつたのじゃ。ここ数年、我が生徒達を指導するのにも忙しかったし。だからお主がそのことを気にする必要などないぞ」

生真面目な少女を氣遣つて、ふふつと笑う司馬徽に、黙つて頭を下げる少女。十秒近くも平伏していた彼女に、司馬徽はふと氣になつていたことを問い掛ける。

「それで……お主は仕えるべき主はもう決まつておるのか、孔明よ」

諸葛亮孔明。それが少女の名前であつた。

荊州にて腰を落ち着かせた司馬徽は、かつての願いどおりに私塾を起こすことにした。最初はこれぞ、と司馬徽自身が才ある者を見つけて生徒にしていたのだが、ここを卒業した者は大層優秀かつ勤勉で取り立てられた上役の者からも評判よく、何時しか多くの者が門戸を叩く有名な私塾となつた。もつとも、水鏡先生と呼ばれる司馬徽の御眼鏡に適つた者のみが入塾できるという点には変わりはないが、兵法や経済のみならず、算術や地理、農政……そのほかありとあらゆるものが勉強できる学び舎として水鏡女学院の名は荊州以外の他の州にも名が知れ渡つている。その私塾において、間違ひなく歴代でも一、二を争う優秀な人材——それが今司馬徽の目の前にいる少女でもある。間違ひなく文官軍師として見ても、司馬徽は彼女が自分の遙か上に行くを理解していた。聡明叡智……願わくば唯一の主と決めている彼に仕えて欲しいという気持ちがある。それ故に出た言葉でもあつた。

「いえ……まずは中華を旅して周り、仕えるべき主を探したいと思つ

ています」

「そうであるか。まあ……お主ほどの者だ。如何様な相手でも喜んで迎え入れるであろう。ゆつくりと探すが良い」

中華にて名を轟かせている才ある者はここ数年で増えてきている。

例えば涼州で一大勢力を誇る馬騰。その娘である錦馬超。他馬一族。彼女達と懇意にしている傅燮や、慈愛の王とも称される董卓とその軍師である賈文和。県令として民から磐石の支持を集める曹操孟徳と配下の夏侯姉妹。孫武の子孫とも自称し、それが許されるほどの戦上手で江東の虎と謳われる孫堅文台。数多くの武官文官を擁し、膨大な軍事力を保有する袁紹本初。その他にも数え切れないくらい英傑がこの時代には存在している。如何に孔明といえど、聞いた限りでは判断が難しいというのものもあるだろうし、実際に見てみなくては彼らの器も計れない。全ての者にあつてから誰を主と仰ぐか決めればいい。諸葛亮孔明にはそれが許されるだけの才覚が確かに存在しているのだから。それよりも、だ。と短く呟き司馬徽は目を細めて隣にいる龐統へと視線を移動させる。

「お主も、孔明とともに行くのか、龐統よ」

それは重い……とてつもなく重い言葉であつた。部屋中の空気が急に質量を増していき、代わりに粘着性のある黒い水が流し込まれる。陸上で溺れるような違和感。異質感。それに包まれる二人が、かふつと何度も咳き込みを繰り返す。気当たりの本命は龐統であり、横にいる孔明はただの余波でしかない。それなのにここまでの息苦しさを感じることに、孔明は改めて師の恐ろしさを知つた。軍師として知恵を絞りあつて渡り合えば間違いなく自分が勝つであろうが、それでも怖い。司馬徽という人間の能力の引き出しは底がなく、幅が広い。たった一人でありとあらゆる学問を修め、生徒を導く。誰よりも遅く寝て、誰よりも早く起きる。学問に全てを注いでいる司馬徽に、一体どんな目標と覚悟があればそのようなことが出来るものなのか、と尊敬と畏怖を感じずにはいられない。

「は、はい……朱里ちゃんと……一緒に、行きます」

「———そうか」

ふと部屋の空気が軽くなった。自分たちは何時もどおりの部屋にいる。これまでが全て幻覚であったことに、当たり前前だと思いつつも安堵した。だが、司馬徽の怒りがおさまった訳ではない。そこにあつたのは失望だ。もはや全てがどうでもいいと、お主の好きにしろと言わんばかりの師である水鏡先生に、孔明は首を捻る。自分に対してはここまでではなかった。なのに、友人である龐統——雛里に対しては明らかに対応が異なっている。いや、彼女に対して幻滅までしているのではないか。師らしからぬ態度に、孔明が口を開こうとするも、司馬徽の話は終わりだと言わんばかりにくるりと背を向け机に向かう。拒絶する彼女の背中になにを語ればよいのかわからず隣の友人の様子を窺うと、きつと悲嘆にくれていると考えていた孔明の予想を覆し、どこか腹を決めた表情をしていた。

「あ……雛里ちゃん？」

「ごめんね、朱里ちゃん……後で行くから先に部屋に戻っててくれる？」

諸葛亮孔明——真名は朱里。龐統士元——真名は雛里。互いに真名を呼び合う水鏡女学院で、否。人生で最高の友人同士。気が弱い彼女の、龐統のこんな姿は初めて見た。自分が知らなかった一面に、気圧され思わず頷いた孔明は友人を気にしつつも礼を取るとこの部屋を後にする。孔明がいなくなつて一分が経った。二分が経った。一向に話を切り出さない龐統を気にせずに、机の書簡を片付けていく司馬徽だったが、遂に覚悟を決めた龐統が頭を下げた。

「先生には謝ることしか出来ません。ここまで育て導いて下さった恩を仇で返すような真似をして……」

「よい。それがお主の選択ならば、ワシは何も言うことはない」

冷たくも龐統の謝罪を切つて捨てる。数年前に命を救われて以来彼のための、彼のためだけの最高の軍師を育て上げる。その結晶が龐統だ。彼女を全力で鍛え上げ、かつての言に違わぬ智の怪物を創りあげる事が出来た。だが、肝心の龐統が孔明とともに旅に出るといふ。人生の虚しさ儚さを感じたとしても無理はなからう。こうなれば他の生徒の誰かを李信へと献上し、この腹搔つ捌いて詫びねばならん

……そこまでの覚悟を抱いた司馬徽は、徐庶にすべきかそれとも向朗を連れて行くか。どちらを再度鍛えなおすか考え始める。門下生の二人にしてみればとんだとぼっちりである。

「……朱里ちゃんは、とてつもない軍師だと私は思っています」

司馬徽の思考を遮る龐統がポツリと呟いた。

「先生のもとで学び始めて数年。その私に二年程度で追いついたあの娘が、純粹に恐いです」

自画自賛ではない。幼く見えるが龐統に比肩する者など、探す方が難しい。ある目的のためだけにひたすらに司馬徽のもとであらゆる学問兵法を学んだ彼女は実際に、水鏡女学院で歴代一位の記録を残し続けてきた。彼女を仕官させてほしいという誘いはそれこそ星の数ほど司馬徽のもとにも来ていたが、それら全てを彼女は突っぱねていた。そこに割って入ってきたのが諸葛亮孔明である。

「……多分ですけど、私が負ける相手がいるとすれば……それは朱里ちゃんです」

互いに切磋琢磨してきた彼女達。意識はすれど、孔明と龐統の二人の間の友情に偽りは無い。

「だから、怖いです。あの娘が、本当に怖いんです。負けるということが私は本当に怖い。私が敗北するということは、李信様を危機に陥れてしまうということだから」

李信様、という名前にピクリつと反応した司馬徽はそこでようやく龐統へと振り返った。

「……お主何を考えている」

「私は朱里ちゃんと一緒に旅に出ます。そして旅のさなかに李信様のことを彼女の心に、頭に刻み込むつもりです。仕えるべき主として。それに値する人物だと」

ですが……と龐統は途中で言葉を切って首を振った。

「恐らく、朱里ちゃんは……李信様を主とは定めないと思います。あの娘は完全です。完璧です。完成されています。その点では李信様に似通っている部分があると思うんです。だからこそ……相容れない」

それに諸葛亮孔明は語ったとおり軍師としては満点だ。十全であり、欠点がなく、金匱無欠にして完全無欠。故に彼女は理想を追っていた。綺麗で美しい、キラキラと光を放っている人としての究極の願望に恋焦がれている。そして同時に自分の能力を活かすことに飢えている側面がある。軍師泣かせのあの李信の下で果たして彼女は満足できるであろうか。いや、恐らくは自分の必要性に疑問視することだろう。何せあの李信——洛陽で離別して僅か数年で既に將軍位に上り詰めていると噂話に聞いた。しかも一度彼が戦場にできれば異民族は逃げ散り、城に籠っている勢力は城門を開け放って地面に頭を擦りつけ敗北を受け入れるとも言われている。最初その噂話を聞いたときは、なにそれとも思ったが——可能性的にありえてしまうのが恐ろしい。

「……でも、それでも脅威です」

もしも孔明と龐統が互いに分かれて戦ったらどうなるだろうか。

戦力的に互角ならば恐らくは勝敗は時の運に左右されるだろう。二人の能力にはそこまでの差が存在していない。

「その為に、私は見極めなければいけないんです。朱里ちゃんが……諸葛孔明が、仕える主を。その勢力を」

見極めた後に、李信の下へと馳せ参じる。彼女が所属する軍のあらゆる情報をかき集めて、勝利の一助とするために。例えどれだけの罵倒を浴びようと、友情が壊れようと、それで勝てるのならば安いものだ。

龐統が真つ直ぐと、嘘偽りのない眼で静かに告げた。司馬徽はそれが龐統の真の言葉であると理解するも、唯一気になった点を龐統へと問い掛ける。

「お主の覚悟、見事じゃ。だが、結局はお主は孔明と敵対することになるぞ。それでも良いのか？」

「何を言ってるんですか、先生」

司馬徽の自身でも少し意地悪な問いとは思いつつも、そこはやがて来る時のことも考えてはつきりさせねばなるまい。そんな考えを持った質問であったが、対する龐統は何を気にすることがあるのかと

言った表情で――。

「その時は全力で叩き潰すだけです」

我が全ての叡智にかけて。

本気だと司馬徽は悟った。龐統は真名を交換し合った友を相手に、一切の手心を加えることなく、言葉通り全力をもって粉碎することであろう。気弱で、常に人に脅えていた彼女をここまで成長させたことに、罪悪感を抱くも、それも詮無きこと。彼女を歪ませてしまったのは自分なのだ。そしてそのことを恥じることはなく、逆に誇りにすら思う。この自分が、秀才どまりの司馬徽が、龐統士元という名の怪物を誕生させることができたのだ。

「お主の考え、確かに理解した。お主の好きにするがよい」

真の意味で司馬徽から許可を得た龐統もまた一度頭を下げて退出する。シンと静まり返る部屋。時折庭で鳴く虫の音が耳朵を打つ。そんな静寂を打ち破る、愉しげな笑い声が木霊した。勿論発生源は司馬徽である。

「くつくつく……あつはつはつ!! よくぞ、よくぞあそこまで成長したものだ。あの龐統が、ワシの影に隠れることしかできなかつたあやつが!! なんと見事なものか!!」

龐統の考えは正しい。諸葛亮孔明は、恐らくではなく間違いなく李信を主君と仰がない筈だ。あれは戦乱を生き、戦乱を行く者。戦に愛された戦場の申し子だ。必要とあらばなんの躊躇いもなく武を行使する。孔明とは排他的な関係しか形作れないであろう。だが、龐統の言うとおり、彼女は一種の怪物である。李信を追い詰めることが可能な数少ない存在だ。それは師である彼女がもつとも理解していることだ。彼女の策謀は、或いは李信すらも絡めとるやも知れない。だが、龐統がいれば絶対にそんなことはさせないだろう。

諸葛亮孔明……それは謀聖とも呼ばれし軍師の極み。何人たりとも追隨を許さない智の結晶。

だが、友である龐統だけが唯一彼女を凌駕できる可能性を秘めている。本人は孔明を脅威だと言ったが、司馬徽からしてみれば龐統のほうが余程恐ろしい。

「謀神……おぬしは近い将来そう呼ばれることになるじやろう」

臥竜鳳雛。

臥竜は目覚めていない竜。それは即ち諸葛亮孔明。

鳳雛は中華に伝わる伝説上の鳥、鳳凰の雛。それは即ち龐統士元。

孔明と龐統を指して司馬徽が例えた言葉である。だが……。

「龐統……既に鳳凰の器であるか」

教え子の進化に、司馬徽は白扇を広げ何時までも楽しそうに笑っていた。



翌日、孔明と龐統が旅立つ姿を見送った司馬徽もまた屋敷にて以前から準備していた荷を持って、数年世話になった屋敷から出立しようとしていた。既に生徒たちは皆が様々な主君に仕え、それぞれの道を歩んでいる。最後の生徒として取ったのが孔明であり、かねてより計画していた通り、もはや屋敷に残っている者は誰もいない。突然いなくなることに、心配する者もいるだろうと考慮し、所在が確認できるかつての塾生達には書簡を送って心配ない旨を伝えている。

数年の間引きこもっていた屋敷から旅立った司馬徽は、どこまでも続く蒼天を見上げた。目指す先は随分と遠い。どれだけかかるかわからないが、それでも心が躍っている。数年前は、最高の軍師を育て

上げ李信に捧げる事で恩に報いることを心に決めた。だが、自分はまだ随分と若かったようだ。それでは満足できない自分がいることに気づいたのは果たして何時だったであろうか。

司馬徽徳操とは秀才である。努力の人だ。孔明や龐統のような万人を奈落に突き落とすほどの天才とはいえない。精々が一流止まり。それ故に彼女は諦めようとした。だが諦めきれなかった。故にひたすらに努力を続けた。優秀な人材のみを生徒としたのもそのためだ。怪物揃いの生徒達に負けないように、呑みこまれない様に努力を繰り返す。成長していく生徒達をも教材とし、ありとあらゆるものを吸収して、司馬徽は成長し続けた。天才達との日々の切磋琢磨——それが司馬徽の膨大な経験値となって蓄えられていった。

今の自分であるならば、天下に名を轟かせる軍師とも渡り合えるだろう。だが、きつとそれでも龐統や孔明には届かない。故に彼女は決めている。李信に仕えた際、自分は彼の闇を引き受けると。龐統やその他の軍師では賄いきれない、軍の暗部を、闇の部分を実行しよう。如何なる外道な行為も、悪辣な行動にも手を汚す覚悟がある。李信の傍にいる為に、李信に恩を返すために、李信の役に立つ為に——人としての籠が外れた最悪の軍師が、洛陽に向かって出立した。

蛇足之5：劉備玄德

幽州と呼ばれる州がある。広大な中華の土地のもつとも北東に位置する場所で涿郡、広陽郡、代郡、上谷郡、漁陽郡、右北平郡、遼西郡、遼東郡、玄菟郡、楽浪郡、遼東属国の計十一郡で分割統制されている地域だ。もつとも北方に位置するだけあり、国境は様々な異民族と面しているため、涼州と同じように日々の暮らしを脅かされていた。そんな幽州の州治所がある広陽郡の南西に位置する涿郡にて、名を馳せる人物がいた。その名を盧植。字は子幹。文武両道で、博学かつ節義も高く人望が厚い。非の打ち所がない女性でありながら、九江太守まで勤めた優秀な人材でもあった。ただ、病のため官職を去らねばならず、故郷である涿郡に戻ってきてからは、私塾を開き近隣の子弟に学問を教えることを生きがいとしていた。

様々な子供達に学問を落とし込んでいく彼女ではあったが、言い方は悪くなってしまいが所詮は幽州の片田舎。才ある者は数少ない。玉石混交とでもいうべき生徒の中で、明らかに玉とでもいうべき光を放つ人材がいた。それが学び舎となつていて彼女の屋敷に師である自分を丁度訪ねてやってきている目の前の二人の少女であった。

一人は桃色の長い髪の少女。二つ結びとは少し異なり、少しの髪のを量を両側の耳の上部でまとめ、残りの後ろ髪は全て垂らしている。俗に兔結びとも呼ばれる髪型だ。穏やかで、少女としての魅力を凝縮させたかわいらしい顔つき。傍にいただけで人を癒すようなゆつたりとした雰囲気。年齢的には十六、七歳くらいであろうか。年齢には似合わない豊かな双丘を持つ、女性的な身体的特徴がこれでもかというくらいに自己主張している様は、どこぞの未来の霸王様や十常侍の筆頭が見れば世の中の無常を悟ること間違いない。

もう一人もまた少女であった。前の少女と似通つて入るが桃色というよりは赤に近い髪色。若干長さは短く髪を後頭部で一つにまと

めて垂らした総髪。年齢もほぼ同年代なのだろうが、こちらの少女は、どちらかという十常侍の筆頭様が同胞だと喜びそうな女性的特徴をしていた。

「わざわざ見送りに来てもらって有難うね、二人とも」

ギョつと二人の少女を豊かな胸のうちに抱きしめる盧植に、複雑そうな表情を作るのは桃色髪の少女だ。長い間私塾にてお世話になった尊敬すべき大先生が、漢王朝から任命され将として召抱えられたのが先日の話。元々病を患い故郷へと戻ってきていた彼女ではあったが、数年の療養により完治するまでに至っており、それを理由に断ることができない状況がもたらされていた。以前蛮族を降伏させた実績もあり、五千人将級の扱いで復職することとなったのだが、それはつまり師が戦場に旅立つことに他ならない。師の出世を喜ぶべきか、命の危険がある戦場に行かなければならなくなったことを悲しむべきか。そんな理由もあいまって、桃色髪の少女の心中としても非常に複雑な状況である。ちなみにもう片方の赤髪の少女としても非常に色髪の少女の心境と同様であったのだが……単純に自分の顔にあたって非常にやわらかいお餅様の大きさと弾力に、なんだかどうでも良いような気持ちに襲われつつあった。

「玄德ちゃんと伯珪ちゃんも身体にだけは気をつけてね」

「はい。盧植先生も」

「おっぱつ……いえ。盧植先生も御武運をお祈りしています」

何やら口走りそうになった赤髪の少女——公孫瓚伯珪。まさかの発言をしかけた友人に、頬を引き攣らせる桃色髪の少女——劉備玄德。感動の別れの最中ではあったが、世の理不尽について考えていた故にの発言だったのだ。持つ者には持たざるものの気持ちなどわかるまい。など、と言う訳にも行かず友人である劉備の視線から逃れるべく視線を逸らす。二人の姿を見て苦笑するのは盧植である。湿っぽい別れは苦手ということもあり、この二人に見送って貰えるのは非常に有り難いのもかもしれない。それにしても普段は天然が入っている劉備に、公孫瓚が頭を痛めるとというのが恒例行事ではあるのに、今回に限っては逆とは面白い。

抱きしめていた二人を解放すると改めてマジマジと自分の生徒でも最優の二人の姿を見つめる。

公孫瓚伯珪は、恐らくは大丈夫であろう。有力豪族の子として生まれるも、生母の身分の関係で冷遇されているが、腐ることなく日々邁進している。優しく素直な性格で侠気と勇気を持ち合わせ、非の打ち所がない珍しい型の人物だ。強いて言うならば、秀でた能力がないということだろうか。武官としても文官としても、将としても大守としても、彼女より優秀な人間は数え切れないくらいいるだろう。そこだけを見て彼女を判断する者が多いのは悲しいが無理もないことだ。しかし、師である盧植の考えは違う。確かに公孫瓚は突出した能力がない。だが逆に言えば、全ての面が纏まっているということだ。苦手な分野もなく、武官文官としてあらゆる任務をこなすことが出来る。そののなんと貴重なことか。こういった人間こそ、縁の下の力持ちとして厚遇されるべきなのだろうが……生憎と彼女をそこまで高く評価している者がいないのが現実である。でも、なんだかんだでこの少女はうまいこと世の中を生き抜いていくのではないか、とも盧植は考え直す。

問題はもう一人のほう……劉備玄德である。

この少女程危うい人間を盧植は知らない。人を傷つけることを良しとせず、戦争を憎み、中華の民が平和に暮らすことができる世界を願っている。理想主義とは良くいったものだが、この少女程それを強く求めている者を盧植は知らない。人は限界を知る生き物である。大人に成るに従って、現実を直視し、可能か不可能か見極め諦めてしまう。だが、この少女は、劉備玄德にはそれが無い。純粹な光のみで構成された眩い少女。だからこそ、盧植は怖い。この少女が戦争に触れたとき、膝から崩れ落ちてしまうのではないか。いや、それならばまだ良い。最悪壊れてしまうのではないか、そんな想いを常に抱いていた。

「どうしたんですか、盧植先生？」

穴があくほどに見つめている師の姿に、流石に疑問に思った劉備が首を捻る。やはり眩い。だが、危うい。本来ならば二人に別れを告げ

て旅立つ筈であつたが、自分が育てた生徒にはやはり愛着がある。このままでは駄目になると解っている教え子を置いていくのは彼女達の師としても失格であろう。現実を知るにしても、早い方がよい。そして、崩れ落ちたときに支える者がいる方がよい。

「……玄徳ちゃん。悪いけど、しばらく先生に付き合つてくれる？」

「え……はい。多分大丈夫だと思いますけど」

一体どこへいくのか？

そんな劉備の質問に、師である盧植は優しげな笑顔を浮かべて一言。

地獄へ、と。



男は枯れ果てた木を見上げていた。

巨大で、今も見上げねばらぬほどの大きさ。彼がまだ子供の頃よりも遙か昔よりこの村を見守っていた木だ。長らく生き抜いてきた桑の木であつたが、先日の冷害であつけなく枯れ木となつた。男はこの木に、自分を投影しているのかもしれない。いや、或いはこの漠という国をも。持っていた剣で枯れ木を叩くと乾いた音が寒村に鳴り響く。

「よう、大将」

「兄者!!」

気がつけば二人の男が目の前にいた。そこで男はこれが夢なのだと気づく。この二人があまりにも若々しかったからだ。よく見てみれば、二人ともぼろぼろの鎧を着ている。あの時はまだお金も余裕がなく、こんな装備しか買えなかったことを思い出した。手に持つのも刃こぼれした剣や鍬といったろくでもないものばかり。それでも弟分二人は頼もしそうに胸を張っている。

「急ごしらえだがなかなかのものだ!!」

「後は馬さえ用意すれば格好はつくな」

戦装束を身に纏い、胸に抱くはかつて光武帝を支えた雲台二十八将の如き気持ち。そのみを自分達の柱としてこの漢を助けてみせる。男たちは若かった。ただ若さだけがあつた。そこで男は弟分二人に見せ付けるようにニヤリと笑つた。

「光武帝にならつて牛でもいいかもしれないな」

それはいい! 男達は本当に愉しそうに笑い声を上げた。

あらゆる物を売り払つて、ようやく馬を三頭買った。それはやせ細り、今にも倒れそうな馬であつた。だが、兄弟の契りを交わした三人にとつては大層立派に見えた。もはや三人に残っているものは何もない。

「これより先は天を屋根とし、地を寢床とする」

「おお、それはいいな。大将!!」

「そうだ!! ああ、そうだ!! 天下が我らの寢床だ!!」

我らには使命がある。天命がある。命を賭して漢を救うという大切な役目がある。

三人は同時に持つていた欠けた剣を空にかざし打ち合わせた。言葉にせずとも伝わる想いがある。そして男たちは、沈む太陽目掛けてやせた馬を走らせた。それでぐにやりつと光景が歪む。そして感じる浮遊感。わかつていた。だがもう少し見ていたかつた。この若かりし頃の甘美な夢を。

「……ああ。夢だ。これは夢だ」

既に夢に見たあの頃から二十年もの月日が立っている。全ては夢

幻であったのだ。自分達の敵はあまりにも強大すぎて、結局何もできなかった。

「お目覚めですか、張純様」

傍らに仕えていた男が目を覚ました張純へと心配そうに語りかけてくる。あの頃よりこんな自分を兄者と慕い、ともにいる弟分。その視線を受けてふっと笑った。

「夢を見たぞ、張拳」

「……そうですか」

多くは語らない張純の言葉だが、それで全てを悟ったのは張拳である。何故ならば、自分も昔の夢を良く見るようになっていたからだ。

「我らはどこで間違っただろうな」

それは張拳にもわからない。三人で漢という国を立て直すかと旅立った二十年前。多くの悪を討った。どれだけの暴利を貪る輩を屠ったのか。思い出すことができないほどの自分たちの正義を執行した。しかし、彼らが彼らの正義を為し悪を討ったとしても——何も変わらなかった。いや、今まで守ってきた民がさらに力の無い民から奪う無限に続く暴力の連鎖。それを解き放つただけであった。個人としての限界を知り故郷に戻った三人は、今度は上に立つ者として漢王朝を立てなおそうと尽力を尽くす。だが、無駄だった。全ては無意味であり、何の意味も持つことがなかった。どれだけ行動を起こそうとも、腐りきった漢王朝を立て直すことなど不可能だった。

「我らの道が正しいか、否かは後の世の者が決めましようぞ」

「……そうだな。我らは常に真っ直ぐと進んできた。最後までそれを信じるのみだ」

「——おい、大将。何やってるんだ。皆あんたを待ってるぜ」

突如として割って入ってきた男。こんな時だというのに楽しげに笑っている。いや、この男はいつもそうだ。どんな苦境にあつても笑みを消すことはない。

「丘力居か……なに、今いく」

かつてともに義兄弟として中華を旅し、張純が帰郷した際にはこの男もまた烏桓族のもとへと戻った。僅か十数年で遼西郡を支配する

烏桓族の大人となり、五千を超える集落を支配下に置くといふとんでもない真似をしでかした本物の英雄級の怪物である。この男がいなかったならば、張純達は漢王朝に反乱を起こそうとは思わなかったであろう。張純と張拳、そして丘力居が幕舎から出てみれば、彼ら三人の大将を迎えたのは様々な顔であった。姿形が農民そのものという者、学のありそうな若者、筋骨隆々とした武人、北方の異民族に南方の蛮族などの多種多様な面々である。四海のあらゆるところから集まった兵である。その数や尋常ではない。見渡す限りが人、人、人。当然だ、集まった兵はなんと十万を越える。凄まじき軍勢が男の、張純の、大将の号令を待っていた。彼らからの熱で、想いで身体が震えた。

「よく集まってくれた、我が同志達よ!! 虐げられ、奪われ、見捨てられた民達よ!!」

十万もの人間が集まっておきながら、張純の声を聞く為に誰一人として言葉を発するものはいない。そして、彼の声は非常によく通った。後ろの方にいる者達の耳まで届いている。

「天下の法がないがしろにされ、悪人が中華に蔓延っているのかっ!! 僅かな実りに苦しめられ、官吏に日々の糧すら奪われる!!」

天を騙る者が肥え太り、我ら民がやせ細るのかっ!! 漢は天より授けられた使命を忘れてしまった!! 即ち——漢王朝は天命を失ったのである!!」

張純の言葉。それは民の奥底に眠っていた怒りと言う感情を呼び起こす。

「漢王朝に天下の道理はもはやない!! 我らがそれを正すのだ!! 漢王劉邦の如く!! 漢再興の祖である光武帝の如く!! 悪しき王を討ち、我らが新たな世を作るのだっ!!」

そうだ。俺たちがやるんだ。俺たちがやるしかないんだ。次第にそんな言葉が集まった民の口から飛び出してくる。

「——蒼天っ!! 既につ!! 死すっ!!」

張純が両手を高く掲げた。青く広がる空を押し潰すように、高く高く広げた。



「あの先生……どこまでいくんですか？」

「遼東近辺までかな。大丈夫大丈夫。玄徳ちゃんは心配しないでついてこれば良いよ」

「……ええ、と。私もついてくる必要あったんですか？」

周囲を数千の兵士に囲まれて、中央を走る馬車の中に彼女たちはいた。盧植と劉備……そして完全に巻き込まれた公孫瓚である。劉備と一緒に連れて行くと言った盧植を見送るはずだったが、気がつけば馬車の中である。彼女とてそんなに暇ではない。やることは幾らでもあるのだから、正直とても困ってはいるものの、友人一人おいて帰るのも彼女の優しさがそれを邪魔している。ハアッと溜息を吐くのも束の間、ピリツとした空気が周囲を満たし始める。明らかに空気の質が変わったことにこの場にいる三人は当然として、周囲を固めている兵士達にも伝わっていた。徐々に重く、徐々に熱く。この丘を越えたあたりに何かがある。見えなくても伝わる莫大な熱気が押し寄せてきている。ごくりつと劉備と公孫瓚は何時の間にか口にとまっていた唾液を呑み込んだ。気が抜けば腰が抜けそうになる熱量に、知らず知らずの内に両手を握り締めていた。やがて、馬車は丘を越え――

—そして劉備は見た。この世の地獄を。

それは殺意の大雪崩であった。攻勢をかけている軍勢は、装備もろくに統一されていない。ぼろぼろになった武器を使っている者もいる。それは迎え撃つ軍からしてみれば滑稽なものだ。だが、それを遙かに凌駕する圧倒的な殺気の津波が押し寄せて、平常心を保っていない。

迎え撃つ軍とは官軍である。即ち漢王朝が保有する正規の軍だ。攻め手は賊軍。異民族や蛮族、果ては農民まで混じっている雑多な統一感のない狩られるだけの獲物であったはずだ。だが、いざ戦争が始まれば攻守は見事に逆転した。装備も人材も劣っているはずの張純軍が、迷いなく命を捨てて呐喊し、それに脅えた官軍は盾で突撃をおさえるものの、將軍の怒声むなしく押し込められ前線を後退させられる。

斬られる。切られる。潰される。砕かれる。振じ切られる。踏み潰される。ありとあらゆる死に方をしていく官軍賊軍。一秒の間に生み出されるのは数十数百の死。怒声と悲鳴の入り混じった死神の産声が木霊していた。瞬きすれば、次目を開けた瞬間にはさらなる死が訪れている。地獄。これは地獄だ。確かにこの世の地獄としか表現できない。師の盧植が例えたそれは——決して間違いではなかった。

「——う、げえ……かふっ」

吐いた。劉備は胃の中のを全て吐き出した。すえる匂いが馬車の中に充満するも、それよりもなお強い血臭が風に運ばれてくる。それにさらなる嘔吐を繰り返す彼女の背中をさするのは、友人でもある公孫瓚だ。彼女もまた顔を蒼くはするものの、吐き気を我慢して劉備の背中を摩っている。彼女は劉備を気遣いながらも、師である盧植を糾弾するように鋭い視線を向けていた。幾らなんでもこれは酷い。理想をおっている劉備に、いきなりこんなモノを見せてしまうとは。いや、劉備でなくても耐え切れるものは少ないのではないか。

「そうだね。玄徳ちゃんには酷いことをしたと思う」

物言わぬ公孫瓚の視線を受け止め、それでも盧植は苦笑した。

「でも、何時か必ず通る道だから。これが先生としての最後の教えだよ」

漢王朝は中央を中心として徐々に建て直しては来ているのは事実である。いや、よくぞここまで信じられない気持ちしかない。もはや後は滅びるだけだという大方の予想を覆し復興を目指しているのだから予想外もいいところだ。それでもまだ足りない。圧倒的に地方での人材が足りないのだ。そしてもう一つ——漢王朝以外が力を持ちすぎているというのもまた現状である。彼らがこのまま大人しく漢王朝に従っているか。だいそれた望みを持つのではないか。下手をすれば国を割る群雄割拠の時代がきてもおかしくはない。

そしてそうなれば、これ以上の地獄が生み出される。その時劉備が大人しくしていられるだろうか。いや、彼女は彼女の理想を持ってその中に割って入っていくだろう。その時のために彼女は実際の戦争の悲惨さを知らねばならないのだ。だが、きっと劉備は大丈夫だろう。そんな漠然とした予感を盧植はもっている。劉備は自分を支えてくれる友がこんな傍にいないか。それはとても得がたいものだ。彼女はきつと多くの民と友に戴かれる存在となる。そんな未来予知にも似た自分の考えに再度苦笑して、彼女は馬車を本陣へと向かうように指示を出した。五千の兵をつれてきているとはいえ、流石にこのまま眼下の平地で行われている戦場に呐喊するような真似は出来ない。雑多な敵軍とはいえ勢いが凄まじく、下手に手を出せばこちらが飲み込まれて終わる可能性すらある。しっかりとした策を持って対応しなければ官軍の敗北で終わるかもしれない。そんな最中の出来事であった。何かが発射したのではと思われる激しい爆撃音が戦場に響き渡る。何の音だと見下ろせば——こちらとは逆の丘から突撃を行った騎兵団が張純軍の横っ腹に風穴を開けていた。

「——せ、先生。なんですか、アレは」

公孫瓚が震える声を搾り出す。それを聞きながらも盧植もまた言葉が出ない。騎馬隊の先頭を行く赤い毛色のほかよりも二周りは大きな馬に乗った赤い少女がこれまた自分よりも巨大な武器を平然と振り回している。抵抗する間も与えずに、張純軍を斬殺し、突殺し、殴

殺し、轢殺する。一呼吸の間に十人を、二呼吸の間に二十人を、気がつけば彼女を通った道の両側には死体が折り重なって小さな山が出来ていた。それに彼女だけではない。彼女を先頭として背後に付き従う騎馬隊も驚異的である。自分たちよりも遙かに数が多い敵兵を前にして怯む様子は一切見られず、ただただ少女に従って張純軍を蹴散らしていく。張純軍からしてみれば僅か一千の騎兵にしか過ぎない。されどその一千は十分に戦場の大局を左右できる絶対強者の群れでもあった。

「……おい。おいおいおい!! 嘘だろ、おiiiiiiiiiiiiii!!」

「あいつ、あの女!! 見たことがあるぞっ!! あるぞ、俺はあるぞお!?!」

張純軍の誰かが声を上げた。騎馬団の先頭に行く者を指差して、カタカタと震えながら悲鳴をあげる。一体だれだ、と注視してみれば、そこらかしこから怒号染みた賛同の声が聞こえてきた。あの女はあいつだ。あの武将だ。あの武器を知っている。あれは方天画戟だ。戦場でありながら戦う手を止めて、子供が泣き喚くかのように、漣が広がっていく。彼女の名前を、正体を伝えていく。それは即ち。

「——呂、奉先!!」

戦場に響き渡るのは呂布の名声。あらゆる異民族を屠りし、絶対の武。漢王朝が所有する最強の軍を率いる猛将の一人にして、天下絶双とも呼ばれし生きながらにして伝説となった万夫不当。その伝説に偽りはなく、ただ淡々と賊軍を殺戮して回っている。

だが、だが、だが——。

賊軍が怖れているのは彼女だけではない。呂布奉先とはとある將軍に仕えている武将である。彼女がこの戦場にいるのなら、それはつまるところ彼女の主である將軍もまた現れることに他ならない。アレを見る。誰かがそう言った。官軍も賊軍も、ある一方向に視線が釘付けとなった。パクパクと口が開閉するも、言葉が出ない。その間にも呂布が賊軍を蹂躪しているというのに、それさえも意識の外へと追い出された。彼らの視線の先——そこには李の文字が刺繍された旗をたなびかせる一団があった。しかも呂布が率いる一千という

寡兵ではない。見渡す限りの騎馬と歩兵隊。その数はゆうに一万という大部隊。誰かがポツリと呟いた。信来々。李信が来たぞ。万象全て如何なる者も撃ち滅ぼす生粋の殺戮者にして破壊者が。皮肉にも涼州で怖れられている張遼と同様に、この北方の州において李信の名は最悪の災厄として轟いている。その將軍が、怪物が、やってきた。ばかな、と遠目で見ていた張純が呟く。

彼としても現在の漢王朝で最も厄介な相手である李信のことを知っている。故に、如何にしてその將軍をこの戦いに参加させないか、が勝敗の分かれ目だと考えていた。そのため、他の異民族と結託して李信を別の場所へと引き離していたはずなのだ。裏切られたのか、と一瞬考えた張純だったが、それ以上に最悪な答えが思い浮かんだ。まさか、とは思うものの——それ以外に李信がこの地にやってきた理由が思いつかない。つまり、既に壊滅させてきた。

此方の作戦を嘲笑うかのように、李信軍は泰然自若としてそこにある。その軍の威圧感、恐怖感、そして敵ながら感じるのは雄大さ。まるで巨大な霊山を連想させるほどに、静かであった。

そんな中、軍の最前には馬上の李信の姿が見受けられる。トントんと大矛で担いでいる肩を叩きながら、息を吸う。そして静かに息を吐く。齡二十を越えた彼の目は若者とは思えず、老練さが見て取れた。その瞳が半ば眠っているのでは、と思われるほどに静寂を湛え——その視線が呂布を捉えれば、即座に獣のような狂暴さを解放する。

「——おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

それは天地を揺るがす絶叫。蒼天が確かに震えるのをこの戦場に
いる者達は見た。敵味方問わず、馬が脅えた。いや、人は身を竦ませ
金縛りにあうほどの怖気に襲われる。戦場の動揺をよそに、李信は大
矛を天に掲げるとゆつくりと自身の率いる軍の前を闊歩する。強大
で巨大な李信の圧力。味方でありながら、畏怖すら覚える將軍の姿
に、軍の全ての兵士が各々の干戈を掲げ喉がはち切れ鼓膜が破れんば
かりの鬨の声を上げ始めた。あまりの怒号に、金縛りにあっていた賊
軍の身体が地面に尻餅をつくほどでもあった。

そして——李信が単騎で戦場へと疾駆する。

彼を先頭として一万の軍もまた李信に続いた。一万。一万の軍勢の総攻撃である。兵数だけで言えば張純軍のほうがまだ遙かに勝る。それでも、彼らは動けなかった。李信が放つ大將軍の威とでもいいうべき存在感に、抵抗をしようという気持ちはしない。漢王朝には様々な將軍がいる。その中でも優秀な將軍もいるとはいえ、彼らは皆後方から指示を出す者達ばかりだ。もっとも、本来であるならば、將軍とはそういうものだ。誰が命の危険がある先頭きつて敵陣に突つ込む物好きがいるだろうか。そう言った点では、李信の独自の考えにもよるが漢王朝における將軍は全員が知略型であるともいえた。

そんな中で、突如として現れた本能型の武將。しかも、あらゆる罨や策を燃え盛る炎といった感覚で暴いてしまう本能型の畢竟の李信。そんな將軍が先陣きつて軍を率いて呐喊をする。大將軍の威圧でまともな反撃を試みようとする者がいないのはある種当然であった。誰かが言ったことは本当だったのだ。噂話を話半分で聞いていた自分たちが愚かであった。飛將軍自ら先頭を行くとき——李信軍は全ての兵が鬼神と化す、と。その光景を呆然と見ながら、大將である張純は叫ばずにはいられなかった。

「——何故、だ!! 何故あと二十年早く現れてくれなかった!! お前が、お前さえいれば、この国を救えたかもしれないのに!!」
その悲しい雄叫びを聞いてこの場にいる全ての者は今ここに悟った。

既に勝敗は決してしまったのだと。



「先生……これは私が知っている戦じゃ、ないです」

震えていた。眼下で繰り広げられている一方的な殺戮劇に、公孫瓚は身体の奥底からくる震えを隠しきれずに声を震わせていた。

「……こんなの、中華で語られている戦では、ないです。万人が知る、戦ではないです……」

これでは伝説にあるような御伽噺にでてくる戦ではないですか。

李信と敵対すれば異民族は逃げ散り、城に籠っている勢力は城門を開け放って地面に頭を擦りつけ敗北を受け入れる……そんな噂話は聞いたことがある。だが、これでは噂の方が可愛いものではないか。「先生もね、ちよつと……驚いてるかな」

本音を言えばちよつとではなくかなりなのだが。

以前病気を理由に官職を辞したときにはまだ李信のことは知らなかった。最近になって復職し、よく噂話を聞いてはいたが、実際に彼が戦う姿を見たのは初めてでもある。異民族に怖れられているということは知っていたが、まさかこれほどのものとは思ってもしなかった。しかも、彼が率いる軍も目を疑う強靱さだ。単純に恐ろしいほどに強く、兵一人一人が現在の漢王朝の兵とは思えない錬度である。なるほど、彼らをもつてすれば李信の途方もない戦果も納得できると言うものだ。散り散りとなっていく張純軍を見ながら、盧植は彼らが運が悪かったという言葉を送らざるを得なかった。もしもここに李信軍が乱入してこなかったならば、もつと拮抗した戦になっていたであろうことは明白だ。いや、もしかしたら官軍が敗れ去った未来もあつたかもしれない。

思索に耽っていた盧植に突如として黒い影が覆いかぶさってくる。ハッと顔を上げればそこには馬上にある李信の姿があつた。彼の背後には華雄と高順、胡軫の姿も見かけられ、少し遅れて呂布も馬を走

らせてやってきた。今回の戦に呼ばれはしていたものの、主攻となっていたのは他の將軍による軍でもあり、李信はそれに横槍を入れた形となつている。そのため武功を譲る名目で掃討戦は他の官軍に任せていた。そんな中、丘の上に兵の姿が見えたため少し気になつて馬を走らせてきたところであつた。盧植達からしてみれば、突然の登場に固まってしまうのも無理なكارう話。しかも戦が今しがた終わったばかりの荒ぶつてゐる状態の化け物達勢ぞろいだ。兵士として新米が多い盧植軍の中には氣を失つてしまう者も少なくはなかつた。そんな兵が持つてゐる旗の盧の文字に氣づいたのか、李信はしばらく考え込んでいたもの——結局思い出せずに追いついてきた韓遂をチヨイチヨイと呼び寄せる。それに小さく返した韓遂の答へに、ああ、と納得がいつたのか李信が声をあげた。

「いや、盧植殿か。今回の参戦御苦労だつた」

「い、いえ。李信殿に我が名前を覚えていただいでいて光榮の限りです」

覚えてなかつたけどなあ……と皆の視線を背に受けた李信が誤魔化すべくカカカツと笑いを一つ。

このような状況でありながら、公孫瓚はただ目の前に現れた李信達を見上げていた。遠くから見ていたのとは又違ふ。近くにいるからこそわかることもある。強さも、怖さもあまりにも巨大すぎてわからない。李信のみならず、彼を取り巻いてゐる全ての武将にもそれは当てはまつた。彼女がこれまで見てきたあらゆる人を凌駕する怪物達の集まりだ。この人間達に比べれば、生家の家族親類など塵にしか過ぎない。比べることすら愚かしい差がそこにはあつた。

「……何故、ですか」

そんな折に地面に蹲つてゐた劉備が声を上げた。

平伏してゐる形を取つてゐるが、単に起き上がる力も残つてゐないのであろう。悲惨で陰惨な戦をこの目で見て、彼女の心は折れる寸前まで擦り切れてゐた。無理もない。仕方のない話だ。これまで抱いてきた理想を木っ端微塵に打ち砕かれ踏み砕かれた。人はかくも残酷になれるのか。人はこうまで容易く相手の命を奪えるのか。劉備

玄德が目指した理想はどこまでも高く、人では到達できない理想の極みでしかなかったのか。

「何故、こんな……酷いことが。こんな簡単に人を殺して、笑っているなんて……」

貴方達は人ではない。

恐らくはその後が続けたかったのだろうが、流石にそれを言わせる盧植と公孫瓚ではない。劉備の身体を地面へと無理矢理に叩きつけ彼女の言葉を遮らせる。

「やめろ、桃香。それ以上はやめるんだ……」

桃香——劉備の真名を公孫瓚はあえて口に出した。相手は雲の上の人物だ。下手なことを言えば無礼打ちされても文句はいえない。しかもここは戦場で、いくらでも誤魔化しようがある。盧植もまた必死で彼女を止めていた。というのも、もとの原因は彼女が劉備をここにつれてきたからである。劉備の為になると思つての行動だが、今回のこれは流石に自分でも失敗したかなと後悔をしているところであつた。

突然の三人の行動に、目を丸くする李信達。それも当然だ。会つたこともない少女からいきなり敵意をぶつけられ——肝心の彼女は地面に叩き伏せられる。一体どんな反応をすればよいのか、というものだ。地面に叩きつけられていながらなお、劉備は必死になつて顔だけでも見上げ、睨みつけてくる。普段は大人しく可憐な彼女の姿に驚かされるのは抑え付けている二人であつた。

「なんだ、お前。何か李信に言いたいことがあるのか？」

華雄が何がなんだかわからんが、といった表情で地面に這い蹲つている劉備へと問い掛ける。余計なことを言わないでくれと心の中で悲鳴をあげた二人であつたが、劉備は堰を切つたように口を開いた。「彼らは、確かに漢王朝に反乱を起こしました……それでも、それでも彼らには大儀があつたはずですよ!! 彼らには反乱を起こすだけの理由があつたはずなんです!! それを何故聞いてあげなかつたのですか!!」

「……」

なんだ、この小娘は。何を言っている。華雄が戸惑った表情で皆を見渡すが、高順は全く気にしておらず、胡軫はぼうつと空を見上げている。呂布は早く行こうと謂わんばかりに李信の袖を少しだけもって引つ張っている。李信はというと、そういったことは劉弁の奴とでも弁論してくれと内心で考えながら――。

「まあ……そうだな。それが理想だ。戦なんてやらないほうがいいってのは同感だ」

それに驚いたのが劉備である。いや、周囲にいる他の人間もまた驚かされた。まさか李信が自ら戦を否定しようとは。驚いていないのは呂布だけだ。彼女にとつては別に何がどうなつても自分には一切関係がないと思っっているからだ。李信さえ傍にいるのならそれでいい。結局のところそれに直結する。

「それでも戦をやらないといけない時もある。特に今回の件に関してはな。話し合いなんてモンじゃ解決できる領域を飛び越えてしまつてる」

「……それは、一体どういうことですか？」

「なんだ、聞いてないのか？ あいつらは幽州含む四州に渡つて略奪と殺戮を繰り返した。万を越える民が殺されたんだよ」

耳を疑った。そんな話を聞いていなかったからだ。噂話で異民族の略奪があつたことは聞いていたがそこまでの被害になつていたとは。

「うむ、小娘よ。お主には立派な大義があるのだろう。それを否定するつもりはない。だが、義だけでは人は救われぬ。救う事などできはせぬ!!」

どうも面倒臭い相手であることを悟つた韓遂が、劉備と李信の間に割つてはいる。この手の相手は確固たる己を持っている。李信の説明では納得させることは出来ないだろう。

「やつらとて大義なるものがあつたのだろう。或いはこの漢を救いたいと思つていたのやもしれぬ。だが、それだけだ。想いだけでは人は救われぬ、国は変わらぬ!!」

力。力だ。理想をかなえる為には力が必要だ。力なきものが幾ら

吼えたとしてこの時代ではなんら意味を持つことがない。

「もしも奴らが大義を持っていたならば、奴らが奴らだけで好きにしていれば良かった!! 武などに頼らず、教えで、想いで人を救っていただければ良かった。それが出来れば、ではあるがな。さて、小娘よ。やつらの殺戮に何の意味があったのだ? そこに奴らの大義はあったのか?」

「それは……」

劉備は人を信じている。人の善性を信じている。きつと誰であろうとも話し合えば別つてもらえるのだと。だが、それは本当にそうなのか。先程殺戮の限りを尽くされた賊軍は、万を越える無辜の民を殺したとも言う。本当に、果たしてそんな連中を自分は説得できたであろうか。考え込む劉備の姿に若干の興味を覚えた李信が座り込み、彼女と目線を合わせる。どうやら自分の意見だけに拘っている愚か者ではなさそうである。だが、こんな時代においてここまでの純粹無垢な相手は久方ぶりに見つけた。もう少しだけ話を聞いてみたくなった李信が、ふとした質問を投げかけた。

「なあ、お前はなんでそこまで拘っている?」

彼女が怒ったのは恐らくは李信達の殺戮に対してだろう。命を大切にすることは素晴らしい事だと思う。無駄に人を殺すほうがおかしい。特に戦をする者などどこかまともではない奴らばかりなのだ。もちろん自分を含めて、だ。敵対している者にすら憐れみをかける彼女は——李信から見てもある種の病的な恐ろしさまで感じられる。

「私の名前は……。私は……。劉備。字は玄德です」

「劉姓の生まれか……」

「はい。勿論、劉姓の生まれなど星の数ほどいることはわかっています。それでも私には、劉の血が流れています。この漢王朝を建てた劉の血が」

民を愛し、民に愛された劉の一族。

その姓を受け継ぐ誇りが彼女にはあった。この漢王朝に生きる全ての民は、劉を継ぐ彼女にとって子にも等しい。故に傷つきたくない。大切にしたい。だからこそ、彼女は武を振るわずに、仁と義を

持つて相手を説得しようとする。天下泰平を目指したい。だが、それでは漢王朝を救うことはできないのは心の奥底ではわかっている。けれど戦に頼ることは、民を傷つけることは望まない。ああ、なんとも難しい矛盾だ、と李信は短く息を吐いた。それは呪いだ。劉姓を受け継ぐ者の呪い。それにここまで縛られてしまっている。いや、無理もない話だ。数百年も続く漢王朝を創始した男の姓。それはそう易々と逃れられるモノではないはずだ。その呪いを真に受けている者が果たしてどれだけいるだろうか。少女には重過ぎるそれを、劉備は確かに背負っていた。

「なあ……劉玄德。お前に聞きたい。お前が守りたいのは……国か？ それとも民か？」

どちらだ、と李信は問い掛ける。

訥々なそれに劉備はキョトンと驚くも、一瞬考え込むようにして答えを言い淀む。

「それは……それは……」

漢王朝を建国した劉の一族。その誇りがある。だが劉備にとつては大切なのは人の命。それに嘘偽りは無い。それを天秤に架けたときどちらがより重たいのだろうか。いや本当はわかっている。どちらが劉備にとつて重要なのか。だが咄嗟に答えを口にするのができなかつた。

「じゃあ、聞くがな。国つてのはなんだ？」

即答できず、改めて問われた劉備は言葉に詰まつた。国とは何なのか。漢王朝？ そんな当たり前のことなのか。それとも皇帝こそが国なのか。或いは漢王朝を支配している宦官なのか。それとも権力を持つている外戚か。或いは洛陽の都なのか。いや、違う。そんな枠組みに入るものではないのだ。本来の国というものは。技術、文化、学問、言葉、文字、歴史……その他中華に存在するありとあらゆるもの。何一つとつてもこの国からは切り離すことはできない。それを伝える者は民であり、国である。つまりは国とは民であり、国を想う民こそが国そのものだ。数え切れない人の意思こそが国を形作っている。人の心にこそ国があるのだ。劉姓を継ぐ劉備が新たな国を創

り、築き上げれば——それは紛れもなく漢という国ともいえる。劉姓に囚われるな。今の漢王朝に拘らなくてもよい。真に大切なものを間違えるな。

劉備へとそのような内容のことを何かしら必死に思い出しながら語る姿は大変李信らしくない。まるで誰かの語った内容をそのまま話しているかのようでもあった。だが漢王朝の将軍が、まさかの今の漢を否定するに等しい発言。呆然となるのは盧植と公孫瓚の二人であり——華雄達は何か言ってるな、程度にしか感じ入っていない。ちなみに呂布は話に完璧に飽きて李信の袖を更に強く引っ張っている。言葉にはせずとも早く行こうと全身で訴えかけていた。

「国こそ民であり……民こそ国」

李信の言った言葉を反芻する劉備。

ガシガシと頭を掻きながら続ける李信は、ここまでは全部受け入りがな、と短く呟く。

「お前を見ているとちと怖ろしいな。俺達なんかよりもずっと。俺達はただ命令に従って武を行使するだけだ。だからこそ、人の生き死になんてモンはとつくの昔に飛び越えた。お前さんの悩みは……まあ、上の者としての悩みに近い」

まあ、劉姓なんだから仕方ないが。

領地も官位も何も無い。無位無官の小娘が何を言うのか。彼女のことを誰であろうとせせら笑うだろうが、李信にしてみれば笑えない。

「お前の理想を掲げ続ける限り、それは修羅の道となるだろうよ。理想をかたるのは結構だ。だが韓遂が言った様に理想を適えるには力が必要だ。言葉だけで止まるのはごく僅か。力を持たないお前が語ったところで意味はない」

もしもそれでも力も持たずに突き進んだその時、お前は民に寄り添ってもらっても死ぬのか。いいや、と李信は首を横に振った。

「真に己の持つ大義を、理想を適えようとするならば、方法は二つだ。民を見捨ててにげるか、それとも民とともに戦うか」

「……理想。大義。民を見捨てたもの、にどんな大義があるのですか。

あるはずがないです!! でも、もつと良い手があるのかもしれない。三つ目の選択肢があるかもしれない!! 私は、誰に認められずとも地を這ってでもそれを探します」

顔を上げ、燃える双眼。蒼い瞳が、爛々と光を放っている。

「かかかか。己の器を、力量を悟るのは良いぜ。でもな、それで中華を統べる魔王に勝てると思っているのか」

勝つか負けるかではない。やるかやらないかだ。

己の理想を、大義を為すために、方法を、手段を、最初から諦めたらそこで道は終わってしまう。

「まあ、今のお前ならそれでもいいだろう。だが、近いうちにお前は配下を得、戴かれる者となる。そうなった時、理想を掲げるのは結構だ。その時にお前は迷ってはならない。上に立つ者が揺らげば下も揺らぐ。選択肢をどうこう言っている暇なんざないぞ」

君主ともなれば、劉備玄德が死ねばそれで終わりなのだ。

「いいえ、李信將軍。私は死んでも構いません」

はつきりと言い切る劉備に、さしもの李信も眉尻を寄せた。

上に立つ者としての責任を放棄するか。だが、と彼女は迷いのなくなった表情で言葉を続けていく。

「私が誰かを救うのではないんです。私が国を立て直さなければならぬのではないのです」

淡々と。故に彼女が怖ろしい。

「私は私を信じ、仕えてくれるであろう人達の、私の為に死んで行く人達の想いを継いで道を作ります。私が死んだとしても、他の誰かがそれを継いでくれるでしょう」

「……上に立つ者の……王の代わりなどいるものかよ」

「いいえ、將軍。人はいずれ死にます。でも想いを継ぐ者がいる限り、人は死にません。私は想いを受け継ぐ者の一人として戦い、生きます!!」

人は話し合えば分かり合える。その想いは変わってはいない。だが、どうしようもない時もあることを認めねばならない。その時は義と礼を持って、完膚なきまでに叩き伏せて見せよう。そして、

その相手の想いすらも受け継いでいこう。国は民であり、民の想いこそ国である。ならば、私の想いが受け継がれる限り、人は国の一部となつて生き続けていく。

何時の間にか劉備を押しさえつけていた二人は彼女を放していた。そして立ち上がった劉備はじつと李信の顔を見上げている。たかが小娘の圧力、気配——それでも彼女のそれはどことなく怖ろしい。曹操孟徳のような激しく燃え盛っているわけでもなく、ただ冷たい。見掛けは業火絢爛に燃え煌びやかだというのに、熱量が見られない。底が見れない、読みきれない。

「中々に面白い、が……まだ青いな。だが、期待はしている劉玄徳」
ざつと馬首を返し配下を引き連れてこの場を離れていく。本陣へとゆつくりと馬を歩かせる李信の背後から、華雄が今は遙か彼方へと遠ざかった劉備達をちらつと振り返る。

「いいのか、李信？」

「うん、何がだ？」

「あの玄徳とかいう娘を放置して」

「ああ……随分と変わった少女ではあったな」

「同感。ただ、ボクも華雄の言いたいことはわかる。今のうちに始末しておいた方がいいんじゃない？」

「物騒だな、おい」

高順の言葉に、華雄も迷うことなく頷いた。そんな二人に、随分と過激なことを考えると李信は溜息をつくものの、二人の考えには内心で賛同は出来る。

「多分、あの娘……厄介な存在になるぞ」

「なんだ。そんな予感でもするのか？」

「いいや、確信だ。ああいった類の輩は、無駄に人を惹き付ける」

まあ、そうだな……と李信もそれには同意する。それに劉備玄徳が先程李信に示した意思。あれは上に立つ者としての覚悟としては少し厄介だ。あれはむしろ兵の心だ。言うなれば、李信が普段から行っていること。兵をあの領域にまで意識を高めることによって、兵は自分の意志で戦い、見返りも求めない。何と素晴らしい兵か。だが、そ

れが素晴らしいのは兵隊までだ。主君として己の理想の為に命を捨て、想いを受け継いで戦う。一見立派には見えるものの主君がそうであるということは、それを部下に強いるということ。最後の一兵までもが劉備の理想のために想いを受け継いで戦う——それが強制的に生み出される。曹操孟徳のような霸王とは対極。李信としてはある意味彼女のほうが噛み合い易い。もしも劉備があのまま成長していくのならば……

「ちと面倒臭そうな奴を解放したかもしれんなあ」

蒼天を見上げながらポツリと呟いた李信の台詞には、あえて誰も触れようとはしなかったが——呂布が首をちよこんと倒して殺してこようか、と問い掛けてくる。それに首を横に振ると、そうと短く頷いて赤兎馬を李信の横へと並べて歩かせた。もしも、ここにこの場に司馬徽がいたならば間違いなく劉備を暗殺していただろう。だが、肝心の彼女は未だ荊州の奥深くにいて、それを知る由もなかった。

「それはそうと、李信つて色々考えてるんだね」

「まあ……俺もそりや將軍なんだし色々考えることもある……て、なんのことだ？」

「さっきの民がどうか国がどうかかって話」

「ああ。ありや、全部煌からの受け売りだ。この間似たような話をしたからな」

あ、そう。と高順と華雄が冷たく言い放つ。どうもこいつらは劉弃のことが絡むと不機嫌になるな。と思う李信だったが、その原因は彼が劉弃のことを唯一真名で呼ぶからである。それに気がつかない李信も女心が全く持ってわかっていない。そんな時、チョンと呂布に袖を引っ張られる。

「……恋」

「ああ、なんだ？ 呂布」

「……恋」

「腹でも減ったか？」

「……恋」

「烏桓の奴らと一戦交えてそのままこっちにきたからなあ……」

ぷくりつと頬を膨らませた呂布を傍らに噛みあわない会話をしながら本陣へと到着した李信達の耳に——大将張純取り逃がしました、という報告が入り……どうやらもう一仕事しなければならぬやうだと気を引き締めなおすのであった。

黄巾の章

第21話：反乱の予兆

「ふんぶんぶんぶんふーん」

何やら機嫌良さそうに鼻歌交じりにとある街の目抜き通りをゆつくりと歩いていく少女がいる。薄桃色の呉織で着飾り、艶やかな茶色の髪を飾り布でまとめ総髪にしていた。細い肩には、薄く蒼い肩掛けを羽織っている。化粧つけが全く見られないが、年の頃は精々が十五、六。まだ自分には必要ないと判断してのことであろう。小奇麗に整った身なりは、一目でそれなりの名家の娘ではないかと推測することが出来る。容姿自体も傾国の美女——とまではいかないまでも十分に人目を引くことが可能ではあるのだが、唯一気にかかる点があるとすれば、右耳に大きな傷があるということだろうか。主役を張るような絢爛な花ではなく、道端でひっそりと咲く野花を連想させる少女でもあった。両手を後ろで組んでゆつくりと通りを歩いていく少女は、やがて目的の場所までたどり着く。そこは街の規模を考えたとしても随分と大きな屋敷であり、明らかに街の名士が住んでいる場所であることは一目瞭然。だが彼女は一切気後れすることもなく屋敷の門番に、お疲れ様です、と声をかけて素通りしていく。屋敷へとあがり、廊下を進んでいくうちに二人の年配の男女の姿が視界に映った。

「……或はまだ部屋に閉じこもっているのか？」

「ええ。どうやら相当に今回の件は矜持に傷がついたようで……」

「無理もない、か。能力を活かす機会すらも貰えなかったのならば仕方あるまい」

難しそうな顔をしている男と心配な表情の女。二人の間の重い空気を理解していながら、少女は全く気にも留めずに二人の傍へと歩み

寄つていき、拝手の礼を取った。

「こんにちは、おじ様。おば様」

「ん？ ああ……攸か。今回は本当にすまないね」

「うちの彧が迷惑をかけて申し訳ないわ。有難うね、公達ちゃん」

「いえいえ。可愛い桂花のためですから」

二人の暗い雰囲気を吹き飛ばす、朗らかな少女——荀攸公達の笑顔に、疲労を滲ませていた二人の間の空気が吹き飛ばされ、肩に押し掛かっていた重さが少し軽くなった錯覚を覚える。そんなおじ達の姿に、無理もないだろうなあ、と胸中で荀攸は二人の苦心に賛同せざるを得なかった。

ここ豫州潁川郡にはとある名家が存在する。荀一族。その中でもっとも名が知られている者として荀淑があげられるであろう。彼は儒学に精通し、沖帝・質帝・桓帝時代の漢王朝でもっとも権勢を誇っていた梁冀一族を批判し、清廉な道を貫いた。そのため神君とまでに褒め称えられ尊敬を集めたという。また彼には八人の子供がおり、皆が優秀であったため八龍と称され彼らの名声は中華に轟いた。そして、今ここにいる男性こそが八龍の一人荀？である。そして三人の話題にあがった彧とは——荀彧文若。真名は桂花。彼らの子供である荀彧も幼い頃から神童と呼ばれ、将来を期待されていたのだが……つい先日仕官した名門袁家から数ヶ月もせずに戻ってきたのだ。何故辞して帰ってきたのか最初は黙して語らず、自分の部屋に引きこもっていたのだが根気よく問い掛けていく内にようやくその理由が判明した。名門汝南袁氏に迎え入れられたは良かったが、彼女の能力を活かす機会も得られずに燻っている毎日に嫌気が差したと言う。もっとも、その点に関しては袁家が悪いとも言い難いところがある。何せ漢において四代に渡って三公を輩出した名門中の名門貴族。彼らが抱えるのは途方もない数の文官武官であり、人材の宝庫。そんな連中が上の者の目に留まろうと必死に日々の献策に走っているのだ。その中で結果を残そうと思えばとてつもない努力と労力が必要となるであろう。もっとも、荀彧ほどの天才ならばそれでも何時かは芽が出たやも知れないが——何分毒舌な上に男嫌いの性格が

災いし、その分敵となるものも多かった。結果出る杭は打たれ、ろくな結果を残せずに失意のまま袁家を去ることとなった。

おじ夫婦に暇を告げて、荀攸は廊下を行き本来の目的地へと漸く辿り着く。それは友である荀彧の私室であった。入るよ、と一度声をかけて相手の了承を得ることなく入室する。礼儀がなっていないと思われるかもしれないが、二人の関係はその程度を気にするような浅い仲ではなかった。

部屋の中にいるのは机の前に座って書物を読んでいる一人の少女。彼女こそが荀彧文若。才能溢れる荀一族においてなお、才覚を焔かせる真正銘の天才。年齢は荀攸と同年代くらいだろうか。金に近い茶色の髪と容貌は流石親類だけあって荀攸に良く似ている。穏やかそうな荀攸と違って若干吊り目になっているため、気の強そうな印象を見る者に与えてくる……もつともそれは間違つてはいない。更なる特徴として、猫耳を連想させる頭巾を被っているのがより人目を引いている。そんな荀彧は目を通していた書物から入室してきた荀攸へと視線を上げた。

「地花……久しぶりじゃない」

「うんうん。久しぶりだね、桂花」

互いに真名を交わした者同士。荀彧にとっては親類以上の関係を結んでいる数少ない友人、それが荀攸である。そして荀彧が言った久しぶり、という言葉は決して冗談でも嫌味でもなく、荀彧が袁家に仕官してこの屋敷を離れていたため荀攸と会うのは実に数ヶ月ぶり以上になるのだ。荀彧が生家に帰還したという文を洛陽にいた荀攸が受け取り知ったため、この豫州潁川郡へと彼女も先程戻ってきたばかりという状況であった。久方ぶりとなる再会に、荀彧の様子をさり気無く観察すると、なるほど表情に以前のような澆刺とした色が見られない。目の下にも濃い隈も見られる。机や部屋中に山のように積み重なっている書物を見る限り、寝る間も惜しんで勉強に励んでいるのであろう。少しまずい状況かな、と荀攸は内心で臍を噛む。天才ゆえの挫折を知らない荀彧にとっては、今回の件は随分と堪えているようだ。おじ夫婦からの手紙にあった状況以上に、現状はあまりよろしく

ない方向へと進んでいる。

「桂花……悪いんだけど、少し出かけようか」

ニコニコと笑顔を振りまく荀攸は、座っていた荀彧の手から書物を取り上げると傍にあった机の上にと綺麗に積み上げる。あまりに急な彼女の誘いに、流石に眉尻を寄せて疑問を覚えるのは荀彧だ。

「どこへ出かけるって言うのよ？ それに私には外出する時間なんてないんだけど」

「一人で根をつめても碌なことにはならないよ。それに今から行くところは絶対に桂花のためになる場所になるはずだから」

珍しくも絶対に引かない意志を込めた荀攸の言葉に、荀彧は仕方ないといった表情を浮かべる。彼女自身も今のままではどうにもならないことを頭のどこかでは理解していたのだろう。そんな彼女は、荀攸へとどこへいくのか、ともう一度訪ねると、荀攸公達は笑顔を消さないままよりそれを深くして一言。

「……洛陽にいくのか」



漢王朝の首都でもある洛陽。そこは言ってしまうえば天然の要塞である。洛陽が位置する場所は盆地であり、周囲は巨大な山に囲まれている状態だ。洛陽の北側には邙山、南側には伏牛山があつて大軍での侵入が難しくなっており、かといって東西の平地は細く西には

函谷関、東には虎牢関の二大要塞が設置されて、どのような大軍がきたとしても攻略することはほぼ不可能な難攻不落の防御基地としても知られている。さらに加えて、洛陽が位置する盆地には黄河によって運ばれた肥沃な土もあるため農業生産性が非常に高く、傍には渭水や洛水という河が流れているので灌漑も可能というとんでもない立地な場所でもある。つまりは十分な兵で東西の函谷関と虎牢関を守っていれば、数年どころか数十年単位で籠もることが可能という完璧な都ともいえた。ちなみにかつて中華を統一した国家である秦は、函谷関を越えて西の長安をさらに行つた場所に首都咸陽を置き、この肥沃な土地が大国秦を支えていたともいえる。

「……す、凄い人ね」

「うんうん。そうだね」

そんな虎牢関を越え、洛陽へと到着した馬車から降り立つたのは荀彧と荀攸公達の二人である。目の前に広がる大都市の光景に驚きを隠せない荀彧は、視線があちらこちらへと彷徨っていた。見渡す限りが人、人、人で埋め尽くされており、整備された道が縦横に走っている。都市の入り口ということもあり、道に沿ってずらりと並ぶ商店露店の数も凄まじい。これに比べれば自分の故郷の町など可愛らしいものである。

それも当然。司隸には合計しておおよそ三百万の民が住んでいるが、そのうちの三分の一がここ洛陽にて生活しているからだ。まさに文字通りの百万都市。それに数年前に比べて、政策の転換もありこの首都も以前よりも遥かに住みやすく改善されている。豫州も人口だけならば司隸よりも遥かに多い。おおよそ倍の六百万という民を抱えているが、流石に一都市に百万人などという巨大都市があるはずもなく、荀彧が初めて目にした首都の巨大さに目を見張るのも無理なからう話だ。絶え間なく響き渡る喧騒も、普段ならば頭痛の一つでもしたかもしれないが、ここまでのものだと逆に新鮮味に溢れている。

通りを行く荀彧は左を見ては目を見張り、右を見ては小さくではあるが驚きの喚声をあげた。初めて見る光景に彼女の目はきよろきよろと忙しなく周囲一帯を見渡しており、ありとあらゆる人や物に興味

を向けている。もしも荀攸が隣にいなかったならば、祭りに来た子供が如くあちらこちらへとふらふらと彷徨っていたかもしれない。初めての体験に心を躍らせていた荀彧だったが、しばらくして落ち着くと自分の傍でニコニコと見守っていた荀攸の存在を思い出して、自分の子供のような行動に顔を赤くする。

「……有難う、地花」

突然の感謝の言葉に首を捻る荀攸。

「おかげで丁度良い気分転換が出来そう。その為に私を連れて来たんでしょ？」

洛陽という百万都市をこの目で見た荀彧は自分がどれだけ自身を追い詰めていたのかようやく思い至ることが出来た。これまで挫折知らずの人生を歩んできた自分が生まれて初めて躓いた故に、それを忘れようと勉学に励んでいたのは良いが、それはあまりにも過ぎた行動であった。適度な生き抜きも必要だと、きっと荀攸はそのことを教える為にこの洛陽につれてきたのではないか。それについての感謝の礼を述べたのだが、肝心の荀攸はキョトンとした表情で荀彧を見返していたもの——そのことについて考えが至ったのか苦笑して首を横に振った。

「違う。違うよ、桂花。確かに洛陽に行くと言ったけど、目的の場所は他にあるよ」

「……」

どうやら自分の早合点だったようで、荀彧の顔に別の意味での朱が差す。くすくす、と笑う荀攸に連れられて洛陽の通りをゆつくりと歩いていく。中心に近づくに従って少しずつ人波が減っていき、やがて二人が到着した場所を見て、荀彧はごくりつと緊張のあまり口の中の唾液を無意識の内に飲み込んだ。彼女達の前にあるのは、あまりにも巨大な屋敷……いや、下手をしたら洛陽の王宮にも匹敵するほどの建物であった。小さな町ならばそのまますっぱりと入ってしまうのではないか、と思わせるほどの広大な敷地のそこに、荀攸は何の気負いもせずに向かっていく。気圧されていた荀彧は慌てて彼女の後を追い、百段以上もある階段を駆け上っていった。途中にあった門の左右

には幾人かの兵士がおり、ピリピリとした緊張感を発していた。

「こんにちは、皆さん。警備お疲れ様です」

「おお、荀攸殿。お帰りになられましたか」

そんな兵士へと荀攸は気軽に挨拶をすると、兵士達は緊張感を消失させ相手を崩して返答をする。人当たりが良い荀攸の姿に、男相手には一生無理だろうなどと自分の性格を省みるが、治す気などもとよりさらさらありはしない。黙っている荀彧の姿に気づいたのか、兵士達が訝しげに彼女へと視線を向ける。その視線を浴びた荀彧は反射的にだが、男の注目を浴びたことにより表情を曇らせ荀攸の背へと姿を隠した。

「すみません。この娘は私の親類で荀彧と言います。先生に御紹介を
と思ひまして」

「ああ、そうでしたか」

荀攸殿の親類ならば安心できるものです。笑顔で答えた兵士達に別れを告げ、荀攸に先導された荀彧は華美な廊下を歩き、やがて大きな扉の前にて足を止めた。

「先生に取次ぐから少し待っててね、桂花」

「ええ……わかったわ」

バタンつと扉の中へと姿を消した荀攸を見送った荀彧は突如として心細さに襲われた。普段ならばそのようなことを感じることはないのだが、流石に知らぬ土地のこれほどまでに大きな建物で一人ぼっちと言うのは落ち着かない。気まずさに全身が包まれているその時、扉の向こうから僅かに漏れ出てくる声を彼女の耳が拾った。気になった荀彧が扉に近づいてみると、扉内部から様々な男女入り乱れる声がかすかにだが漏れ出でてきた。

「まだだ!! 確かに北方の異民族は数年前より大人しくなってきたはいる!! しかし、だからこそ今が国内の異民族の駆逐の機会ではないか!?!」

「それこそ悪手だ。漢に恭順している奴らを駆逐してどうするとかのか。下手に手出しをして謀反を起こされては適わんぞ」

「張純の乱を抑えることが出来たのは大きい。しかも、あれだけの大

規模な反乱に対して官軍の被害は最小で過んでいる。この機会を利用して国内の安定を図るべきだ」

「それはそうだが、やはりまずはまだ残っている足元の芽を摘むべきではないか？」

「うむ。地方の豪族や貴族が力を持ちすぎているのも問題だ。彼らの力を削ぐことを第一に考えるべきだ」

様々な意見が部屋の中で飛び交っている。扉を挟んでもなお伝わってくる熱量に、荀彧の身体がぶるりつと震えた。ここまでの論じ合いを果たして自分は袁家で行えたであろうか。最初は様々な献策を行っていたが、途中からは無駄だと悟り無意味な時間を過ごしていた。最後までこの中で行われているような熱意を持って袁家に仕えていたならば——或いは何か違ったのかもしれない。

「準備ができたよ、私についてきてね」

ギィつと扉が軋む音がして開け放たれた。ぶわりつと押し寄せてくる熱い風が荀彧の身体を撫で付ける。扉が開いたことにより、部屋の中にいた者達が一斉に彼女の方へと振り返った。そこにいたのは老若男女年齢問わず様々な者達がいて、だがここにいる誰も新たなにやってきた荀彧の底を見通そうと値踏みしてきていた。袁家にいた十把一絡げの連中とは明らかに違う雰囲気と熱情を持っていて、さしもの荀彧も気圧されるように一歩後退する。特に男性からの視線に関しては普段ならば文句の一つでも出たかもしれないが、彼らのあまりにも真剣な姿と荀彧の紹介ということもあり彼女は寸前で飲み込んだ。

シンと静まり返った室内の空気にもせず、荀彧は荀彧を連れて彼らの間に行く。そして、最も上座となる場所に座っていた一人の女性の下へと案内すると同時に膝を折り拝手の礼を取る。

「ただ今帰りました。先生」

「うむ。よく帰った、荀彧。変わりはないかのう？」

「はい。この度はご迷惑をおかけして申し訳ありません」

女性——司馬徽徳操は読んでいた書簡から視線を上げ、荀彧へと目を合わせると軽く頷いた。座っているだけだというのに小さな身

体から滲み出る圧力に袁家でもこれほどの人物を見たのは数えるほどだと、荀彧は驚愕のあまり吐息を漏らす。

「そして此方が今回御紹介しようとお連れしました荀彧です」

「——」紹介に預かりました。荀彧。字は文若、と申します」

突然の荀彧の振りにも、一瞬呆けていたもののか詰まらず自己紹介をした荀彧の姿に、司馬徽はまるで彼女の内心を読み取っているかの如く薄く微笑む。

「お主のことは荀攸から聞いておる。ワシは司馬徽。字は徳操じゃ。好きに呼ぶと良い」

「……司馬徽？ ま、さか……水鏡女学院の!？」

聞き覚えがある名に脳内の情報からそれを探し出そうとするのにかかった時間は一秒を切っていた。それほどに司馬徽はここ数年で中華全域に名前を広めていたからだ。優秀な人材を何人も輩出した水鏡女学院の設立者にして、そこで教鞭を執る教師。数多の有力者からきた仕官の誘いを断り続けた正真正銘の賢者。あらゆる者達からの仕官の願いを袖にした司馬徽が何故このようなところにいるのか。「水鏡女学院は既に閉め、今はここで指導者の役割を担っておるところじゃ」

「そんな……まさか」

司馬徽の発言に驚きを隠せない荀彧の反応は当然と言えば当然である。そんなことは初めて耳にしたのだが、情報が伝わるのが遅いこの時代においてはそれも仕方のないことであろう。戦争や政変などの大きな出来事に関してならば人の噂話にもあがるのだろうか、たかが学院が一つ閉鎖した程度のこと、余程そのこと限定で網を張っているか独自の情報網を持っている者でなければ耳にすることはなかったはずだ。事実、荀彧はここ数ヶ月は袁家のもとで過ごしていたがそれについては聞いたことはなかった。上の者達ならばそれについての情報を目にしていたかもしれないが、荀彧の立場では知らされておらず、荀家に帰ってから引きこもって独学の毎日。水鏡女学院が閉鎖したということを知る機会など得られるはずもなかった。

「お聞きしたいことがあるのですが……宜しいでしょうか？」

「うむ、許す。何が聞きたいのじゃ？」

「有難うございます。その……そもそもここは、一体何なのですか？」
荀彧の問い掛けに、司馬徽は荀攸へと視線を向けると、その視線を受けた彼女は舌を微かに覗かせてテヘツと小さな笑みを返してきた。説明を忘れていたわけではなく、荀彧を驚かせる為に敢えてしていなかったのであろう事に気づいて嘆息一つ。

「この屋敷……というかもはや城みたいなものじゃが、元々は十常侍の趙忠殿の物であったが弁殿下へと謙譲された場所である。そこを利用して官僚育成機関を殿下が立ち上げたのじゃ」

「……官僚、育成機関？」

「うむ。漢王朝を立て直すのに必要なものは幾つもある。そのうちの一つである人材の発掘育成を主とする機関じゃ」

そんな機関が作られていたのか、と。僅か数ヶ月の間に随分と新たな流れに乗り遅れていることを自覚した荀彧は、無駄に時間を浪費していたことに後悔の念を抱く。もつとも重ねていうことになるが、荀彧も色々と都合がよくない時機が続いていたのだから仕方がないといえ仕方がない。それにこの育成機関が大々的に表に出されたのも丁度荀彧が袁家に仕官したばかりの頃だ。以前より人材の発掘には力を入れていたものの、優秀な人間には限りがある。それを見越してここを作り上げたのだが、様々な問題障害を解決し形になったのはここ最近。今では全国より入門の応募があるが、百人に一人入れるかどうかという敷居の高さだ。もつとも、試験以外にも面接もあり、将来性の高さを期待されて特別に許可される人間もいる。それを行うのが司馬徽であった。彼女ほど人の才能の有無を見極めるのに優れた人間はいないことを彼女の過去の功績が証明している。

「荀攸が太鼓判を押すほどの逸材。それに……うむ、なるほど。お主ほどの才ある者ならば入門試験など不要じゃろうな。もしも望むのならば受け入れるが、如何する？」

「……」

なるほど、と荀彧はここに来てようやく荀攸の狙いを理解するに至った。最初から彼女は荀彧をこの官僚育成機関に入れることが目

的だったのだ。部屋の中を改めて見渡すと、年齢性別問わず様々な文官候補が此方を注視してきているのは変わらない、新たな同門となる少女が如何ほどのものか見極めようとする彼らには、誰かを貶めようなどという邪な気持ちは一切見られない。そこだけ見ても袁家とはだいぶ異なっている。きつと彼らはこれからの漢王朝を立て直すための土台となつて各地に散つていくのだろう。荀家の自分の部屋に籠っているだけでは決して知ることが出来なかつた新たな可能性を見て、荀彧は心を覆っていた暗雲が晴れ渡つていくのを実感していた。

「過分なお言葉感謝致します。ですが、謹んでお断りさせていただきます」
シンつと静まり返る室内。選ばれた者のみが入門できるこの育成機関。しかもその長からの誘いを一蹴する者を彼らは初めて見た。あまりにも自然と、凜とした答えに、彼女の言葉を最初は理解できていた者がいなくなつたほどである。対して司馬徽は、ほうと短く呟くと、白扇でパシンと自身の左掌を軽く叩く。

「理由を聞いてもよいかのう?」

「この機関で己を磨くのは大変魅力的です。ですが、徳操殿は先程こう仰られていました……弁殿下が立ち上げた。つまりここは完全に漢王朝の色に染まっていると判断しました」

「……うむ。それは正解じゃ」

「私は漢王朝を否定するつもりはありません。ですが……ここにいては漢の官僚としての道しか歩めない。私の主は私自身が決めたいと思つています」

自分が王と戴く存在は自身で決める。

はつきりと言い切つた荀彧を見る周囲の人間の視線が厳しくなつたのは当然だ。ここにいる者達は漢を救うべく、皆が救国の士とならんために日々切磋琢磨している。知らないとはいへ、荀彧はこの場にいる全ての人間に喧嘩を真正面から売つたようなものであつた。だが肝心の司馬徽は、そうかと短く呟くにとどまつた。

「それも仕方あるまい。どうやら何も知らずに荀攸に連れて来られたようじゃいな」

「すみません、先生。事前知識がない状態の方が受ける衝撃が大きいかなあ、と思ひまして」

「それで振られてしまつては仕方なからう。まあ、それに……自分の主は自分で決める。うむ、それには大いに納得ができるというものじゃ」

ワシもそうだったしのう。

過去を思い返し、くふつと笑つた司馬徽が周囲の弟子達の敵意を抑えるべく手を軽く振つた。それを合図として渋々といった様子ではあるが、彼らの負の感情が治まつていく。合図一つで自分たちの不満を抑制できるのだから、この機関にいる者達の優秀さが見て取れるというものである。

「ワシも本来であるならば主とともに戦場を駆け抜けたと思つておるが……その主からここを頼まれては断りきれぬ。全く難儀なものじゃよ」

韓遂は李信軍の軍師としてついていけているというのに自分は洛陽で過ごす。それに不満を覚えないではないが、ここで優秀な人材を育成することが李信の役に立つのならば全力を尽くす気持ちに揺らぎはない。とはいつても、やはり心では主と一緒に中華を回りたいと願っている。人の心とは実に難しいものだ、と韓遂の勝ち誇つた顔を思い浮かべて、白扇を折らんばかりに両手で握り締めた。しかし、韓遂はどちらかといえば天才肌。感覚に従つて行動することが多い彼女は人を指導するのにはあまり向いていない。逆に司馬徽は努力を積み上げて理論で動く秀才。彼女のほうが人を指導するのには向いているのは否定できない。逆に韓遂にこの育成機関を任せたらとんでもないことになるのは火を見るより明らか。結局のところ適材適所となるのは仕方がないことだ。

「本日くらいは泊まつていくがよい。荀攸、お主の部屋に案内せよ」
「はい。では、失礼致します」

荀彧と荀攸が一礼し、部屋の外へと出ようと扉を開けて一歩踏み出したその時——二人してドンつと扉の向こうにあつた壁に顔をぶつけた。二人ともが何事か、と痛む鼻を押さえながら見上げればそこ

にいたのは二人よりも頭二つ分は大きい青年の姿。ぶつけた箇所が痛いのは当然で、甲冑姿で背には巨大な矛が一振り。だが、自分の身体が燃えているのではないかと勘違いするほどの熱量が、打った箇所を通じて伝わってくる。袁家で様々な武官を見たが、それらの比ではない超越者。その青年の姿を見た荀攸が、珍しくも慌てて洪手の礼を取った。それに続いて、部屋にいた全ての生徒たちが膝をつき礼をとる。

「失礼致しました、殿」

「荀攸か。一度帰郷したつて聞いてたが、戻つてきてたのか」

「はい。本日帰還致しました」

大矛の青年——李信の言葉に、パアッと笑顔を浮かべて返答をす
る荀攸とは対照的なのが荀彧である。元来男嫌いの彼女がここまで
男に密着してしまえばどうなるか。罵詈雑言の嵐を李信にぶつけた
としてもおかしくはない。それに普段ならば荀攸は気づいた筈だ。
だが、敬愛する李信に気を取られ何時もより一瞬だがそのことへの対
応が遅れた。だが、この場所で李信へ対する非礼は最悪の事態とな
る。まずい、と荀攸は頬を引き攣らせ、隣にいる荀彧の口を抑えよう
と行動を開始するもそれよりも早く——。

「……失礼、致しました」

はえ？ と荀攸の口から疑問が飛び出るのは当然だ。普段の荀彧
では絶対にありえない謝罪の言葉が聞こえてきたが、既に飛び掛った
荀攸は軌道を変えられるはずもなく勢いよくぶつかって二人して床
に転がっていく。突然の事態に目を白黒させる李信に、かかなくても
よい恥をかけた荀攸は、慌てて荀彧を連れてこの場から去っていく。
幾分か離れた、自分の部屋へと逃げ込むように駆け込んだ荀攸は、普
段の彼女ならば絶対に見せない落ち込んだ様子で肩を落としていた。
「あうう……格好悪いところ見られちゃったよう」

常に笑顔を浮かべて、如何なるときでも平静を保っている荀攸の姿
は大変珍しい。というか、恐らくは初めて見たのだが——その原
因は恐らく先程ぶつかった男なのだろう。しかも、荀攸が殿などと呼
ぶ程の相手。一体何者だろうか、と多少の興味が湧くのも当然だ。

「地花、あの何者?」

「変な娘だと思われてないかなあ……それとも面白い娘だと思って貰えたかなあ。ううん……でもそれは今までの私の印象とはちよつと違ってるし……」

「……」

なにやら完全に別世界で妄想に耽っている荀攸の頭をおもいつきり引っぱたく。スパンつと激しい音をたてて、その衝撃で荀攸はようやく我を取り戻した。

「で、地花。さっきの人、何者なの?」

涙目になった彼女を尻目に荀彧はもう一度質問を繰り返す。

「もうちよつと手加減してよ、桂花。いたたたつ……」

「それは悪かったわね。今度からは手加減してあげる。それで?」

「……えつと、あの方は李信様。字は永政。名前は聞いたことあるんじゃないかな」

「——はあ!?!」

名前を聞いたことがあるない、などの話を通り過ぎていく。果たしてその名を知らぬ者がこの広大な中華とはいえ、どれほどいるだろうか。南の方ならば居てもおかしくはないが、その男の名は今や漢王朝で随一の猛将として知れ渡っている大人物だ。

「官軍最強の將軍……李信。通りで……」

むしろそれ程の將軍であつたならば、受けた存在感にも納得が出来る。袁家でも彼のことは随分と話にあがっていたが、それはどうやら過大評価でも何でもなかったことを実際に目で見てようやく理解することができた。一人納得している荀彧へと、今度は先程のことで気になっていた疑問を荀攸が今度は口にした。

「それにしてもさっきは吃驚したよ。また桂花が何かとんでもないことを殿にいうんじゃないかって」

「……とんでもないことつてなによ」

「いやだなあ……そんなことを私に言わせないでよ」

あの状況だつたならば、普段であれば普通の男なら心が折れる具合の罵詈雑言を発していたはず。それなのに謝罪をすぐに口に出した

のだから彼女をしっている荀攸からしてみれば信じられない気持ちで一杯だ。今でも先程は自分の聞き間違いだったのではないか、とも思っているくらいである。

「別に……私は確かに男は嫌いよ」

両腕を組んで、ふんと鼻を鳴らす。事実彼女は物心ついてから異性に対して忌避感しか持っていなかった。それは今でも変わらない。だが、この育成機関で弁論を交わしている者達を見て少しだけ意見がかわった。彼女が嫌いなのは男性である。憎いのは、自分を女だと侮つて下に見る者。此方の足を態と引つ張つてくる者だ。数ヶ月という短い期間ではあつたが袁家での苦勞が、彼女を少しだけ成長させていた。

それに先程あつた李信という男。文官である畑違いの自分でも一目でわかる凄まじい錬度。単純な才能ということもあるだろうが、決してそれだけでアレほどの高みに昇ることは不可能のはずだ。日々の絶え間ない鍛錬がその根幹となつているのは気のせいではないだろう。自分とてそうだからだ。余人よりも遥かに優れた文官としての才能があるが、磨かなければ路傍の石と同じ。そして、才能だけで袁家で腕を奮えると思つていた驕り。そのことに対して今は反省しかない。故に、努力を怠らない者は尊敬に値する。それが例え、自分が嫌いな男であつても、だ。もつともだからといって男嫌いを治す気などさらさらないが。

「そう？　少し変わったね、桂花。うん。良くなったと思う」

「……私のことはいいの。それより貴女は李將軍に仕えてるの？」

「まだまだ見習いだけだね。将来的には殿の軍師になれたらいいな、とは思つてるけど」

照れたように笑う荀攸は、普段が大人びて見える分、歳相応に見えて大層可愛らしい。並々ならぬ気持ちを抱いているのはなんとなく理解できた。親友を取られたような気持ちになつて、李信のことが少しだけ憎らしい。そんな中、あ、そうだ、と声を上げる荀攸。

「桂花もよかつたら殿に仕えない？」

「……悪いけど、男を主とするのは絶対に嫌よ」

李信の姿を思い返して、少しだけアリかなと思ってしまった自分を律するように荀攸に断固拒否の返答をする荀彧であった。



荀家二人がそのような話をしている一方。軍議場に残された李信は、とりあえず室内の微妙な空気をコホンッと咳払いをして霧散させると外で待っていた呂布を呼び寄せて司馬徽のもとへと歩み寄っていく。

「大遠征からの無事の御帰還、心より御喜び申し上げるのじや」

そんな彼へと、司馬徽は深々と平伏し祝いの言葉を述べる。李信が今更異民族との争いでどうこうなるとは考えていないが、それでも戦場では何が起こるか分からない。見たところ大きな怪我もしていない様子に、心の底から安堵する。

「ああ、なんとかな。それより此方こそここをまかせつきりにして悪いな」

「主の願いこそがワシの望み。何も悪く思う必要などありはしないのじや。して……此度は何かワシに用が？」

李信が遠征より帰還したと連絡があったのはつい先程だ。それこそ荀彧達がくる少し前。様々な雑事があるだろうにこうまで素早く自分の下へと来るなど本来ならばありえるはずがない。悲しいかな、頼りにされている自覚はあるが、そこまで女として李信に大切にされている自信は全くなかった。そこらは華雄や高順、韓遂達と見事に横並びになっている。過ぎた時間の多さで区別されないのは有り難いことだが、一体どうすれば彼に愛されるのか……未だ糸口さえ発見

できていない。ただ今現在隣に立っている呂布だけは自分たち四人とはまた別の扱いをされているのだが、それもまた女性として愛されているとは言い難い。むしろ同等の戦友や好敵手といった枠組みではないか、と司馬徽は読んでいた。

「ああ……それなんだが。呂布」

「……恋」

「いや、あのなあ……」

「……恋」

「その件は何十回もやった。いいからさっさと紹介しろ」

自分の真名を何とか呼ばせようとする呂布の策略をばっさりと斬り捨てて、本来の目的を果たすべく強引に話題をそちらのほうへと誘導しようとする李信。シュンつと悲しげな表情の呂布の姿は大層保護欲をかきたてるが、残念なことに李信には通じず仕方なしといった様子で自分の影に隠れていた幼い少女を司馬徽の前へと押し出した。

「ねね……挨拶」

「はい、ですぞー!! 恋殿!!」

姿を現したのは小柄な、それは大層小さな少女であった。薄い緑の髪の毛をおさげにし、頭には黒い帽子を被っている。黄土色に輝く瞳には、年齢に見合わない確固たる決意の光が見て取れた。容姿的には精々二桁の年齢になったかどうか。そこまで幼い少女を何故このような場所につれてきたのか。誰もが疑問に思うに違いない。

「ねねの名前は陳宮。字は公台ですぞ。司馬徽殿、これから宜しくお願ひする、です!!」

「……宜しく」

陳宮広台——真名は音々音。呂布と陳宮と名乗った少女があわせて頭を下げるが、肝心の下げられた方の司馬徽としては何が何だかわからない状態である。一体なにを宜しくすれば良いのか、助けを求めて主へと視線を向ければ、頭に手をあてて天を仰いでいた。

「あー、とな。呂布がその陳宮という子供を拾ったはいいんだが、恩返しで呂布の軍師になるって言って聞かないんだ。流石にこのくらの歳の子供を戦場には連れて行くのもアレだしなあ……で、お前に

この娘の世話を頼みたい」

「……ワシんご？」

「この手のことに関して頼りになるのはお前だけだしな」

「——ワ、ワシだけ!? う、うむ!! そうか!! なに、このワシに任せよ!!」

ちよろい、とこの場にいる全ての者が声には出さずに心の中で呟いた。幾ら主かつ好いている相手だからといって、こうまで簡単に引き受けるのは如何なものか。仮にも中華全域から優秀かつ将来有望な才覚を持つ者のみ入門を許可される最高の官僚育成機関の長とも思えない軽さだ。他の門下生から不平不満がでるのでは、と思われるかもしれないが、基本ここにいる者達は司馬徽や李信に心の底から敬服している者のみ。その二人が決めたことならばある程度のことならば受け入れてしまう。それに、ここにいる彼らだからこそ気づいた。陳宮という幼い身体から目を焼かんばかりに迸る眩い輝き。超新星の如き煌く閃光。満ち溢れ、それでもなお余りある膨大な才気。これに気づかないようでは入門の許可などおろはすもなく、間違いないこの幼い少女は近い将来中華に名を轟かせる軍師足りえる存在になるであろう、と誰もがそんな予感をひしひしと感じていた。

李信としては別に軍師としては連れて行ってもいいかな、と少し思っただけなのだが他の面々から大反対を食らってしまったのである。彼らからしてみれば陳宮の年齢で人の膨大な数の生死が蠢く戦場を見せるのは気が引けると、李信軍のように北方をあちらこちらへと移動する軍隊ではこの程度の年齢の陳宮では体力的に厳しいと言われればよく考えずともその通りである。自分の適当さに若干呆れはするものの、李信の人生自体とんでもないものであったのだから他の人間の常識があまり当てはまらないのは仕方ないことだ。何せ李信が初の実戦を経験したのは陳宮よりもほんの少しだけ年上の頃であったし、数万の軍勢同士がぶつかりあう戦場にでたのもそれくらいだ。今思えばよく生きていられたなあ、と李信は過去を振り返るのであった。

▼

漢王朝の首都洛陽に存在する皇帝が住まう宮中。そのさらに最奥にある禁中。出入りがすることが出来る者が極僅かに限られた場所の一面——漢王朝の第一皇女劉弁の私室。それに相応しい広さと豪華絢爛な飾りが施された部屋の内部には二人の人物がいた。一人はこの部屋の主でもある皇女劉弁。彼女がここにいることは何らおかしいことではない。彼女の私室なのだから当然だ。問題となるのはもう一人——李信の方である。漢王朝第一皇女にして皇帝にもっとも近き少女の部屋に入室できる者など数え切れるくらいだ。いくら将軍位にある李信とはいっても本来であるならば絶対に来訪することは不可能な場所であるが、それを劉弁自身が認めてしまっている。

例え劉弁が認めたのだとしても、普通ならば他の人間が絶対に入室を拒絶するのであるが、覚醒して既に数年を経た今洛陽の官僚全てを掌握し認められている彼女の命令に従わない者はほぼいない。病弱の身で臥せっている劉宏が現皇帝であるのだが、彼女よりも余程皇帝らしく辣腕を振るい漢王朝復興への道を突き進んでいる。日々戦場にて暴れまわっている李信であるが、洛陽に戻ってきた際には劉弁の命により彼女の私室に招かれ過ぎることが日常となっていた。仮にも男と女が二人つきりで、しかも私室で密会……というには堂々としすぎているが、そんな状態で過ぎすという事実は、漢王朝にとっても醜聞に為り得るものである。だが、それを黙認しているのは何も劉弁の命令だけによるものではない。彼と彼女の二人の間の空気が、男女

を匂わせる雰囲気を超越してしまっているということが、この関係を認める要因の一つとなっている。市民としても、北方の異民族を壊走させる負けしらずの大英雄である若き將軍と皇女の並々ならぬ関係など、逆に嬉々として良い話ではないかと受け入れてしまっていた。

やけに煌びやかな裝飾がなされた机を前に次々と山積みになつて
いる書簡を処理している劉弁の姿に、寢台に腰を下ろした李信は欠伸
を噛み殺しながら視線を送っている。韓約の乱の論功行賞で出会っ
てから既に数年の月日が流れているが、自分はその年月に相応しいだ
けの成長をしているというのに、目の前の主は一向にその気配が見ら
れない。そろそろ年齢は十六か、七を迎えるだろうに、彼女の身体つ
きは張讓とどっこいどっこいだ。そういえば、年齢不詳の一人目であ
る張讓は一体何歳になつたのだろうか、そこは地味に気になる疑問だ
が、女性に年齢のことを聞くのはあまり宜しくない事を流石の李信も
理解はしていた。ちなみに李信の周囲で年齢不詳は何人かおり、張讓
を初めとして韓遂や司馬徽などもそれにあたる。三人が三人とも見
ただけならば十代でも通るのだから人とは実に摩訶不思議なもの
であった。愚にもつかないことを考えているせいか、抑え切れない二
度目の欠伸を噛み殺したその時、劉弁が書簡を処理する手をとめて寢
台に座っている李信の傍らへと歩いて行き腰を下ろした。

「随分と疲れているようだな、信」

「ああ、それはな……今回もなかなか大変だったぜ」

「なんでも烏桓と一戦交えてからそのまま張純が起こした反乱へと雪崩れ込んだらしいな」

「おかげで休みなしの行軍だ。その代わりにしばらくはあいつらにも休みを与えたいけどな」

將軍となつた李信が指揮する直属の軍には約一万の兵士がいる。軍師として、韓遂と司馬徽。副将に華雄と高順。副将補佐の胡軫。突撃隊長として一千の騎馬隊を従える呂布。そして数年前の涼州からともに戦乱を潜り抜けてきた生え抜きの古強者が所属する親衛隊百名。加えて北方の異民族の侵入を潰して回り何十もの戦場を経験し

ている兵士達。所属する誰もが歴戦の勇士であり、単純な話兵卒一人とつても他の官軍における千人将級の力を持っていると称しても過言ではない。特に親衛隊百名の壁を抜ききって李信へと迫り行ける者など中華広しといえど、呂布くらいなものではなからうか。その呂布でさえも、そう易々と彼らを倒しきることは出来はしない。もつとも、肝心の李信が殆どの戦場で軍の先頭を行くのだから親衛隊としても非常に困っているというのが現実であった。特に呂布と並んで二人で突撃を仕掛けることが多く、これでは突撃隊長が二人ではないか、と嘆いている韓遂の姿を戦場では良く見かけることが出来る。それがもつとも味方の被害を抑えることができるのだとしても、見ている軍師側からしてみれば毎回心臓が悲鳴をあげるといふものだ。

「お前には何時も負担をかけることになって悪い。だが、今回の張純の反乱を制することができたのは大きい」

「あー、結構ぎりぎりだったけどな。相手の策にも半分引つかかったようなもんだし」

張純が反乱を起こす前に李信達は、侵入してきた異民族の討伐の為に派遣された地域で実際のところかなりの時間を必要とした。単純に数が多かった上に、相手が時間稼ぎに徹していたのが原因なのだが、韓遂がこれは何かあると気づき情報を探らせてみたところ張純が大規模な反乱をおこしたという。かなりの無茶をして異民族を壊走させたあと休みなしで遼東郡まで軍を走らせたのには流石に本人としても相当無理をしたという自覚がある。だが、劉弁の言うとおり今、そこまでの被害を受けずに反乱を潰すことができたのは漢王朝にとつてはとても有利な状況に働く。もつとも、全く反乱に関係がない民一万が賊軍によって虐殺されたことが被害がそこまでではない、といえるかどうかは人によるだろうが。とにかく、今回の張純の乱には農民だけでなく多くの人種が参加していた。それこそ北方の異民族に南方の蛮族などの多種多様な面々など、そういった者達を鎮圧できたという事は、暫くは漢王朝への反乱は途絶えるであろうことは予測がついた。ここまでの大規模な乱が即座に鎮圧されたのだ。これ以降の者達もそう易々とは漢王朝へ牙を向くようなことはしないは

ず。もしあるとしたら、それは何も考えていない愚か者達くらいであろう。それに数年をかけて李信が北方の異民族の侵入をつぶしまわったことも大きい。おかげで彼らもまた漢への敵対を避け、講和を結ぶ部族や、従う者達も多く出てきている。これで数年の時は稼ぐことができないはずだ。

その時これからのことを考えている劉弁の肩にコツンと何かがぶつかった感触がして、何かと隣を見れば珍しくも李信が目を瞑って居眠りをしていたため寄りかかってくる場所であった。鼾をかいて、完全に入眠している姿に、珍しいと驚きを持って劉弁は目を見開く。李信が誰かに眠っている姿を見られるなど滅多にあることではない。人が近づけば気配で自然と目を覚ます生粋の武人。戦争尽くしであつた前世の影響であろうが、眠りが浅いのは戦場だけでなく日常に置いてでもだ。すくなくとも張讓や、戦場で常に一緒にいた華雄達でも彼のこんな姿を見たものはいない。いくら疲れているからとはいえ。傍に人がいるというのに無防備な姿を見せるなど絶対にありえないことであつた。そんな李信を見た劉弁は、口元を綻ばす。熟睡している李信を引つ張り倒すと自分の膝へと頭を乗せる。彼の頭を撫で付けながら劉弁の表情はとても穏やかだ。今このときばかりは彼女が背負う混沌の闇もなりを潜めていた。

「……お前のおかげで随分と時間が出来た」

それは言葉通りの意味だ。本来であれば漢王朝は既に崩壊寸前であつたとしてもおかしくはない。病弱な劉宏の崩御が切っ掛けとなり、外戚や宦官の権力争いが巻き起こる。やがて不平不満が爆発して大規模な反乱、異民族による侵略などが重なって滅びを迎えることになったはずだ。それが今は緩やかにではあるが、快方に向かつている。とはいっても、既に崩壊寸前だつた王朝を立て直すなど即座には不可能だ。如何に劉弁であろうとも、一人ではどう足掻いても無理難題であろう。故に今は優秀な人材の発掘、育成に力を入れている訳だ。それも李信がいたからこそ出来た方法である。もしも彼がいなかったならば、北方の異民族や王朝への反乱をここまで被害が少なく抑えられなかつたであろうし、育成機関を作つて官僚を育てるなど時

間がかかる政策を取ることもなかった。

「いつだつてお前は私を支えてくれるのはお前だけだよ、信」
……それでもともに居てくれるのはお前だけだよ、信」

李信が洛陽にいる間は、二人で過ごす時間がそれなりに多く取れるようにしてはいる。といつても、仕事を蔑ろにしているわけではなく、李信が帰還する前後にあわせて公務を一気に終わらせて時間を作るようにしているだけだ。そんな貴重な時間のなかで、二人は様々な話をしている。前世のこと。今世のこと。同じような話題もであるが、李信との会話は飽きることは一切ない。これほどまでにゆつくりと会話ができることは、前世において統一戦争の後半からは殆ど出来ない状態だった。それだけでも生まれ変わった価値があるというものだ。

そしてつい先日話題にあがったことがひとつある。劉弁が戯れに聞いただした結婚について、そろそろ良い女性はいないのか、と。それに明確な答えが返つてはこなかったものの、張讓や韓遂、高順に司馬徽などを多少は憎からず思っているのではないか。この男、前世から通じて女心に大変鈍い。まあ、逆に鋭い李信のほうが気味悪いが。そのようなことを話していると、今度は逆に李信から問われたことが一つ。

——お前は嫁さん、というか婿は貰わないのか？

その答えは最初から決まっている。元々が、自分の血を残す予定は立てていない。皇族としての後継者ならば劉協がいるし、彼女の子供に継がせれば問題はない。後継者に関してはそれで通るはずだ。漢の時代に生を受けて十数年。女性としての意識が強くなつてはきたものの、誰かと夫婦になるなどまだ拒否反応が強くなるのは、前世の記憶がある以上当然であろう。

それに——わが玉体。お前以外に触れさせてやるものか。

自分の膝に頭を乗せて軒をかいて眠っている李信から感じる熱と重さ。この数年で随分と体格に差がでたものだ、と自嘲気味な笑みが口元に浮かぶ。今の自分の姿はまさに少女そのもの。といつても、生憎と女性的な特徴は完全にはないのだが……それに比べて李信の体格

は実に立派になった。今世では年齢的には数歳の差があつたはずだから、今の李信は二十を越えたあたりであろうか。六尺に届く長身と鍛え上げられた鋼の肉体。乱雑に切られた黒髪と野性味溢れる顔つきがやけに色気を誘う。二十そこらの若造の雰囲気ではないだろう、と思つたがそこらは前世の経験にもよるものかと一人納得をする劉弁。何やら妙な気分になつてきた彼女は、これはいかん……と顔を横に何度も振つて正気を取り戻す。ふう、と吐息を漏らす劉弁は、李信など比べるまでもなく少女と言う瑞々しい果実でありながらも色気の塊であつた。

「……とにかく、今は出来る限りのことをせねばな」

現状十常侍含む官僚を掌握しているとはいへ、彼女はあくまでも皇女にしか過ぎない。病弱の身であるとはいえ皇帝が存在しているのだから彼女主導による政策全てを通すことはまだできない。正式に皇帝ともなればそれも可能であるのだが、そこがなかなか悩ましい所でもある。だが、さすがに皇帝を暗殺するのはいらぬところに波風をたてる結果に繋がる可能性もある。特に劉弁の威光が届いているのはあくまでも洛陽のみ。一度でも謁見すれば彼女の格を理解させることができるのだろうか……遠方の州にはなかなかそれも難しい。兎にも角にも、数年をかけて優秀な人材を育成し、地方再生の要となる人物を数多用意し首を挿げ替える。その結果、漢王朝にとって不要な人材が多く排出されることになるだろう。そういう輩が、不満を持つ各地の名門貴族などと連携し漢王朝へと反乱を起こす――までは予想が出来る。だが、その頃には李信を中心とする官軍が再編され、一新されているはず。後はそれを鎮圧すれば漢王朝復興への道筋となるはずだ。

「それにしても……皆が勘違いしている」

くつくつく……何が面白いのか、李信の髪を梳きながら一人小さく笑い声をあげる。勘違いしているとは、何か。自分と李信の関係のどこか？ 否、違う。李信將軍の力量についてだ。彼は強い。個としても將軍としても間違いなく漢王朝最強と称しても誰からも異論はないことだろう。だが、劉弁が知る本来の李信にはまだ及んではないな

い。

何故ならば、まだ自分が李信に号令を発していないからだ。劉弁が皇帝となつて、皆の前で李信に命令を下す。そうすることによつて初めて大將軍李信は完全なる復活を遂げる。

そしてもう一つ。李信が使用している武器についてだ。彼が愛用しているだけあつて決して悪い武器ではない。むしろ大金を払つて専用で作っている大矛だ。だが、それでも足りない。李信の領域に武器がおいついていないのだ。そのため毎回戦場に替えの予備武器を幾つも持ち歩いているという。劉弁としては、出来るだけ万全な状態で李信を戦場に送り出したいとおもっているだけに、その点に関してはなんとかならないか現在考えているのだが——李信に相応しい武器などそう簡単に見つかるわけもなく足踏み状態が続いていた。いや、そもそも今の李信の力に耐えうる武器などあるのだろうか。

考えるもそれに相応しい武器は一つだけだ。それはかつての統一国家秦において最強と謳われた中華六將の前身でもある六大將軍の王騎が愛用し、李信へと受け継がれた大矛。李信の晩年まで使用していた、並の者では持ち上げることすら出来ない超重兵器。それに匹敵する武器でなければ李信が振るう力には耐え切れないだろう。本格的に何か手を考えねばと思う劉弁であつたが、その武器関係の情報が書かれていた書簡の次に見た書簡に書かれていたある情報がふと脈絡なく頭に浮かんできた。最近黄色い布を頭に巻いた集団が中華全域にちらほらと見られるようになってきた、と。だが、彼らは特に略奪などをする訳でもなく中華全域を移動しているとのこと。その正体も目的も不明と少し気味が悪い集団ではあつたが、反乱を起こそうという気配も見られないため優先順位を下げている案件でもあつた。だが、このように突然浮かんでくるということは、虫の知らせとでもいふべきもの。ただの勘でしかないが、少し詳しく調べさせるかと、李信の頭を撫でながら思い直すのであつた。

そして、劉弁のその考えは吉となる。

僅か一年の後には黄色い頭巾の集団は莫大な人数となつていた。それは劉弁の予想を超え、理解を超え、中華全域に渡つて数十万とい

う数に膨れ上がっていったのだ。そして、何時からかその集団はこう呼ばれることとなった。黄色い頭巾を特徴とした集団。即ち——黄巾党と。

第22話：劉弁と趙忠

コツコツ、と歩く音が聞こえる。

洛陽が宮中の謁見の間にて平伏している趙忠は、自身が震えているのを自覚していた。音が近づくにつれ、謁見の間の空気が鉛のように重さを増していく。呼吸すら止めて、自分の存在をも消し去ったほうがまだと思えるほどの途轍もない重圧が彼の肉体を押し潰していく。コヒューと擦れた呼吸音が意識せずに口から漏れ出るのは果たして恐怖からくるものであろうか。生まれたばかりの子牛が如く、小刻みに震える老人を気にも留めず、漢王朝第一皇女劉弁が玉座へと腰を下ろす。室内の空気が全て凍結してしまったと錯覚を覚える凍て付く圧を身体から滲ませ、少女は眼下に平伏している趙忠を一瞥。

「面を上げよ」

声をかけられたただけだというのに、ビクンッと身体が大きく揺らぐ。劉弁の命に従わなければならない。それを理解していながら、趙忠は顔を上げることは出来なかった。劉弁の、彼女の姿を視界に映すことを本能が心の底から拒否している。自分の命令を聞かなかつたというのに、皇女は特に気にすることなくもう一度同様の言葉を投げかけた。面を上げよ、と。

「——っ!!」

恐怖は消えていないが、それでも趙忠は命に従って劉弁へと面を上げた。そして、秒後には自分の行動に疑問を覚え——愕然とした。今のは自分が意識して取った行動ではない。劉弁の言霊とでもいふべき力が籠った命に、趙忠の本能が従った。否、従わされた。仮にも十常侍の筆頭として、海千山千の魍魎染みた者達を相手取っていた自分がここまで格の違いを思い知らされたのは始めてのことだ。

改めて劉弁を目にした趙忠は、ガチガチと自分の歯が音を立てるのをまるで他人事のように聞いていた。これまで禁中にある自室より

ほとんど出てこなかった彼女と遭遇したことは数えるほどだ。その時でさえも傍を通っただけで背筋が凍る気配を滲ませていたが、今の彼女はまるで別人ではないかと思わせるほど。これまで仕えて来た皇帝など赤子同然の存在感を発するそれは、人の形をしただけの何か。齢にして十二か三そこらだというのに直視するのもままならない億千万の怨念を背後に従えて、一切の救いを必要としない混沌を纏いし魔王がそこにいる。

「この度は大儀であつたな、趙忠よ」

「は、ははあつ!! い、いえ、そのようなことは……」

気の利いた言葉一つ出てこない己を自覚しながら、それでも舌が回らない。それにこの存在を前にして上つ面の美辞麗句を並び立てたとしても意味は無く、不興を買うだけではないのかという漠然とした予感が身体を支配している。つい先日政敵である張讓が、劉弁と自分同様二人で謁見していたがその後の彼女は萎縮するどころか熱く燃えている姿を見せていたことが信じられない。何故、どうしてこんな化け物と相對してそのような気持ちを抱くことが出来るのか。

「趙忠よ。余計な問答はいらぬ。長らくこの漢に仕えたそなたに聞こう」

「……はっ」

「漢王朝はいつまで持つと考えている?」

「……」

劉弁のあまりといえばあまりの問い掛けに、言葉が詰まる趙忠。皇女とは思えぬ、そしてあるまじき発言に、どう答えれば良いのか判断に迷った彼はお為ごかしの返答をしようとし——それでも物言わぬ劉弁の力ある視線にそれを飲み込んだ。

「……恐れながら、長くは、ないかと」

結局趙忠がなんとか捻り出したのはそのような言葉であつた。彼の答えに、そうだな、と短く頷いた劉弁に怒りも呆れの色も見られない。

「既に漢には中華を統べる力はなくなっている。長くても二、三十年以内にはこの王朝も時代の波に飲み込まれ消え行くだろう」

余の代で歴史ある国が終わりを告げるか。なんとも面白くも複雑なものだ。

趙忠からしてみれば全く面白くもないが、劉弁の言うとおり漢が滅びるのも時間の問題といっても過言ではないだろう。それほどまでにこの国の土台は腐りきっている。

「さて、趙忠よ。何故漢がこのような状態になっているかわかるか？」
気軽に投げかけられたその質問に、ごくりつと緊張のあまり息を呑む。漢王朝が衰退して行っている原因など、わかりきったことだからだ。まるで自分を弾劾するべくここに招集したのか、と一瞬思えど肝心の皇女様の視線にはそのような非難は見られない。自分が衰退の理由を理解しているのか、否か。それを見極めようとしている。

「……始まりは、外戚と宦官の権力争いに端を発したのではないか、と」

「うむ。続けよ」

「幼い皇帝の擁立……そして後見となった皇太后による政治への関与。親族である外戚の助けを得るために高い地位を授けて、結果多くの外戚による政策への参加。彼らの横暴により王朝は混乱を極めました」

まだ小さな皇帝では止められる筈もなく、外戚勢力による政治への参加は漢王朝を混迷へと導いた。だが、それは確かに始まりでしかなかったのだ。

「そして八代皇帝順帝の時代に皇太后の外戚として力を持った梁冀。彼の人物によって漢王朝は腐敗の一途を辿ることになったのではないかと思われます」

梁冀とは八代順帝が幼帝であったため後見人としてこの皇帝を補佐することになった梁皇后の一族であり八代皇帝から、九代皇帝沖帝、十代皇帝質帝、十一代皇帝桓帝の四代の皇帝に仕えることになり、この四代の皇帝は全て幼い皇帝であったため外戚である梁冀が後見人として専横を振るうに至った。梁冀による専横は漢王朝が衰退する大きな原因の一つになったのは間違いない話であった。

「そして……」

言葉を続ける趙忠は、次に言い放つ台詞を考えながら緊張のあまり口内がからからに乾いていることを気にする余裕もなかった。

「十一代皇帝桓帝より強い力を持ち始めた我ら宦官と外戚の争いの結果が……今現在の、漢王朝を作り上げてしまった——」

最後まで碌に言えずに趙忠は反射的に頭を垂れた。恐らく劉弁は趙忠が言わずともそれくらいのこととは理解しているはずだ。そして、これまで彼が行って来た多くの非道を、汚職を知っているに違いない。実際に趙忠は自分の敵となる多くの官僚を追放して来た。自分の意のままになる汚職官僚を抱きいれて、漢王朝での立場を揺るぎないものにしたのは覆しようがない事実だ。思えば随分と好き勝手に生きてきたものだ、と趙忠はこんな時でありながら自身にあきれ返った。栄華を極めた我が人生遂に終わりを迎えるときがきたのか。それを裁くのが人知を超えし魔王の如き天人。これほどの存在に罰せられるのならば逆に清々しい気持ちすら感じられる。

「理解しているのならばそれでよい。趙忠よ……これからは余の下で励め」

「——はっ？」

呆然と、非礼に値する呆けた声を出して趙忠が下げていた頭を思わず上げた。今なんとといったのだこの皇女は。罰するわけでもなく、弾劾するわけでもなく、ただ自分の下で変わらぬ励めと言ったのか。漢王朝の腐敗を促進させた自分を前にして、何故そんな態度でいられるのか。

「多くの者を陥れ、罷免させ、無実の者を罰したそなたのこれまでの振る舞いは確かに褒められた物ではない。が……見事だ。ただの一宦官がこれほどまでの高みに昇り、座し続けた手腕は感服に値する」

もつともその対象になったものはたまったものではないだろうがな、と笑いながら発言する劉弁は実に愉しそうだ。一方の趙忠は、一体何を言われているのか頭が皇女の発言を理解してくれない。唾然と、開いた口が塞がらない様子で彼女を見上げ続けている。

「我が母にして第十二代皇帝である劉宏は良くも悪くも普通だ。現状から漢王朝を立て直す事など不可能であろう。故にこの国を、漢を——」

——復興させることは余にしか出来ぬ」

既に十数年の命の王朝を復興させることが出来ると傲岸不遜にも言い放つ少女。これが彼女以外の口から出た言葉ならば、趙忠は鼻で笑った。だが、この逸脱した存在ならば、現実を理解していながらも出来る断言する劉弁ならば可能なのではないか、と心のどこかが期待している。

「明日よりこの国の中枢は新しき体制に生まれ変わる。否、余が生まれ変わらせて見せよう。これまでの派閥、軋轢など全て捨て、余の下で漢復興への道を邁進して貰うぞ。勿論、今いる全ての官僚を切るなど愚かしい真似はせん。趙忠よ、そなたは愚かではあったが無能ではない。新しき王朝でも大役を担い、それを為すことを期待している」

ドクンドクンと心臓が早鐘を打つ。それは劉弁という未だ少女の域を出ない歳の皇女へ対する恐怖のみならず、尽きることのない希望故にであった。しかし、ああ、だがしかし——それでも領けない。領くには後一步が足りていない。これまで歩んで来た血塗られた怨嗟の道を簡単に外れることなど、犠牲にして来た者達が許すものだろうか。許されざる我欲に満ち溢れた趙忠の人生。新しき皇帝に請われたからと言って、それが認められるだろうか。犠牲になった者達が絶対にそれを認めはしないだろう。

「恐れながら、申し——」

「趙忠よ」

趙忠を遮って、劉弁が朗々と謳うように言葉を紡いでいく。

「人とは実に面白いものだ。戦場、宮中問わず命をかけて戦う者達がいるがそれらが胸に抱くのはそれぞれの想いだ。大義の為に戦うもの。仲間の為に戦う者。愛する者の為に、私利私欲の為に、復讐の為に……それ以外にも想いは人の数だけあるであろう。しかし誰も間違っていない。それらは人の持つ感情からの行動であるからだ。それを否定するつもりはない。例えば、そなただ趙忠」

彼によって一体どれだけの者が罷免され、無実の罪によって罰せられただろうか。漢王朝を正常な状態へと戻そうと努力した士大夫ら清流派と呼ばれる者達を弾圧し、終身禁錮の刑に処しもした。様々な

賄賂を平然と受け取り、汚職の限りを尽くす。嚴罰を受けてもおかし
くはない。受けなければおかしいほどの行為を行って来た。

「重ねて言うが、そなたの行い。それもまた人の持つ感情からの行動
である。愚かしいとは思うが、それを否定するということは人間の感
情……即ち人の本質の否定へと繋がる」

人の本質。人間は欲望に溺れ、人を欺き、そして憎悪し殺す。人が
人である限り戦は決してなくならないことを中華の歴史が証明して
いる。現に統一国家秦であったとしても、自分がいなくなった後にす
ぐに滅びを迎えてしまった。だが、それを継いだ漢王朝は様々な苦難
がありはするものの、確かに数百年続く一つの国家として中華を統べ
て来た。この中華を統一するという行為は、決して間違つてはいな
かつたのだと、劉弁は確信を抱いていた。そんな漢でさえも、このよ
うな現状に陥っている。

「人の持つ凶暴性、醜悪性、残虐性……それは人の持つ側面である。だ
が、それ以上の暖かな優しさと光を人は持つ。決してそれは特別な人
間にのみ与えられたものではない。人は皆一様に己を輝かせる確か
な光を己の中心に煌かせている。光り輝く人の想いを、次の者が受け
継ぎさらに力強く輝かせる。だが、それが出来ないものも確かにい
る。己の有り様を見失い、見つからず、もがき、苦しむ。結果、人は
闇へと落ちるのであろう」

それが光と闇の境界線だ。十常侍というならば、趙忠と張讓がその
良い例だ。本来であれば、張讓もまた趙忠と何ら変わりはない闇へ
と落ちた人生を歩む筈であった。だが、彼女は己が光である李信と出
会ったのだ。出会えた張讓と出会えなかった趙忠。僅かそれだけが、
彼と彼女の行く道を別つた分水嶺の選択肢だった。

「だが、それもまた人の側面にしか過ぎない。光も闇もあくまで人の
本質の一部である。渾然一体……それら二つはどちらかを忌み嫌う
べきでなく、光と闇を持って人を為す」

劉弁が玉座から立ち上がる。

「人の本質とは——中庸だ」

生まれ、育つ過程においてそのまま成長するものもいる。だが、光

や闇に染まる人間もまた多い。人を癒し、救うのまた人。人を騙し、殺すのもまた人。尊く思う行為も、憎むべき行為も人の本質に他ならない。

「己の行為を非道と自覚していたか、趙忠よ。己の闇を理解しているそなたを余は受け入れよう。そなたのこれまでの歩みにおける誹りを全て余が引き受けようぞ」

階段を降る音を響かせて、劉弁が趙忠と同じ地平に立ち尽くす。だが、見上げる彼から見る皇女の姿はあまりにも巨大。かつて初めて見た時の李信よりもなお、大きく雄大で——禍々しい。光と闇が緋い交ぜとなった混沌を背に渦巻かせて睥睨する姿はただただ圧巻。

「改めて問うぞ、趙忠よ。余に仕えよ。これまでのそなたの行為筆舌に尽くしがたく、許しがたいものである。故に、そなた自身の手によつて漢王朝復興への標を建てよ」

「……是非もなく」

趙忠は今度こそ反する言葉を持たず、静かに頭をたれた。この皇女には決して勝てない。いや、勝つとか負けるといった土俵などには上がることなどできないだろう。人のあらゆる悪意と憎悪を背負い、億千万の混沌を纏いながら、美しくも眩い輝きを放つ超越者。相反したそれを完全に支配下においてなお、平然と泰然とそして艶やかに笑うことが出来るのは、中華の気が遠くなる過去と現在、果てのない未来において劉弁が最初で最後の存在となるであろう。そんな漠然とした予感に全身が包まれる。

「弁殿下……貴女様は、一体何者、なのですか……」

だからこそ、漏れ出でた素朴な疑問。彼女は間違いなく漢王朝第一皇女の劉弁だ。それでも、一体どうすればこのような存在として生れ落ちるのか。

「余か？ 余は劉弁。この漢王朝第一皇女の劉弁である」

そして、やはり彼女の返答は予想を上回るものではなかった。

「だが、名乗りをあげるとするならばこう答えたほうがよいかもしれん」

形の良い顎に手を当てて、見上げる趙忠を睥睨しながら予想を覆す

言葉を続ける。

「余こそが三皇五帝を超えし者。唯一無二の真なる皇帝である」

三皇五帝とは、古代中国の神話伝説時代の八人の帝王のことを指す。三皇と五帝に分かれ三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされる理想の君主。三皇五帝より尊い存在という意味で、それまで使われて来た王という君主の称号ではなく、皇と帝を合わせた皇帝という新しい称号が作られたのが統一国家秦の時代である。

漢王朝が使用している中華の支配者としての意味での皇帝とは明らかに違う。今ではただの冠としての意味合いしか持たないその単語。だが、この少女の口から出る言葉には重みがある。趙忠はここでようやく悟った。これまで漢王朝に君臨して来た王は、皇帝という言葉に支配されただけの君主でしかない。だが、劉弁は違う。逆に彼女は皇帝という称号を完全に支配している。劉弁が語る、三皇五帝を超える者——それは決して誇張でもなんでもない。この世において彼女以外に比肩する者もなく、比類する者もなし。並び立つ者など絶対に存在しえぬ、真正銘本来の意味合いを持つ皇帝なのだ。

「——この趙忠。揺ぎ無い忠誠を弁殿下に捧げる事を誓います」
「うむ。期待しているぞ」

満足気に頷いた劉弁は軽やかな足取りで階段をのぼると、玉座へと再び腰を下ろした。では、下がってよし……という彼女の退室を促す声に拝手の礼とともに謁見の間を去ろうとした趙忠へと、思い出したかのように言葉を投げかける。

「趙忠よ。先程も言ったとおり、これまでの派閥軋轢を全て捨てさせるには言ったもののすぐに来るとは考えておらん。だが、そなたたちが一つだけ絶対に遵守するべきことがある」

「はっ……」

「信に……李信に手を出すことは絶対に許さんぞ」

劉弁の言葉に一瞬理解が及ばなくなったのは当然だ。予想外もないところ、まさかの人物の名前が挙がって思考が停止する。いや、それも先日の論功行賞のことを考え見れば納得がいくのだが。

「張讓の懐刀として信の名は有名であるそうだな。そしてそれはそな

たたちからして見れば随分と忌々しい存在であろう。煮え湯を飲まされたことなど幾度もあると聞く」

だが、それら全てを忘れよ。

劉弁の発言に、何故そこまで李信のことを気にするのか表情に出ていたのだろう。趙忠の顔を見て彼女は、ふつと僅かに口角を緩ませた。

「余と信は決して切れることのない友愛を持って繋がっている。あいつの苦悩は余の苦悩であり、喜びもまた余の喜びである」

李信の喜怒哀楽全てが、自分の喜怒哀楽と同義。

平然と言い切る劉弁の姿に薄ら寒い得体の知れない何かを感じ取る。

「信の味方は余の味方であり、信の敵は余の敵となるであろう。良いか、趙忠よ。信を害することは余と敵対することと知れ」

ここまで。ここまで李信という男は劉弁に愛されているのか。大切にされているのか。彼女を構成している混沌がゆらゆらと室内を、宮中を、洛陽を覆っていく。轟く雷鳴、大粒の雨がパラパラと降ってくる幻さえ見させられ、粘つく空気。重力が数十倍に重さを増して、立っているという行為すらも難しい。全てを呑み込む津波が如く、押し寄せる熱波が体力と精神をまるで鏝で削るかのようにこそぎ取っていく。見る、見る、見る——我らを見ると、誰かが鬨の声を上げる。都を震撼させる圧とともに、轟雷もかくやという喚声が迸った。いる。いた、そこに見える。確かに視えたのだ。劉弁の背後、そこに渦巻く混沌の中から現れ出るのは李信同様……或いはそれ以上の背負う者達。尊敬し、崇拜し、盲信する多くの兵と民。それ以上の憎悪と悪意を撒き散らす負の感情のみで構成された闇の集団。その対象になっただけでいながら、それを背負っただけで何の苦痛も気負いもない彼女の姿こそが、皇帝という存在なのだ。と本当の意味で認識するに至った。

「……仰せのままに」

これだけの死が蠢く空間でそれだけを必死に搾り出した趙忠もまた、そこらの有象無象とは異なる一廉の人物の証左であった。確実に

寿命が縮まるこの領域において、劉弁は楽しそうに笑っている。

「上に立つ者が友を優することを不安に思うか？ 確かにそうであるうな。王としては公私を分けねば示しがかぬだろうしな」

心の片隅に浮かんでいたほんの僅かな憂慮を言い当てられて頬を引き攣らせる趙忠。だが、確かにそうだ。彼女はやがて漢王朝を統べる者となるがそんな時に、国よりも友を優先されては非常に困る。

「それは人の範疇の話だ。先程も言ったぞ？ 余こそが三皇五帝を超えた者である、とな。それ即ち——中華における神である」

あらゆる者を屈服させる混沌を無秩序にばら撒きながら、劉弁の笑いとはどまるところを知らない。

「古来より神とは我が儘な存在であろうが」

悪びれもせず劉弁は可憐な少女の顔をして、趙忠に向かって隠すことのない本音でそう語る。

ちなみにその後状況を知った李信に頭を叩かれた劉弁であった。



「……趙忠。何をぼーとしている？」

突如として自分に掛けられた張讓の問いに、ハッと白昼夢から醒め

た趙忠は幾度か頭を振って未だはつきりとしないう意識を覚醒させる。周囲を見渡してみればここは洛陽の宮中にある軍議場であり、この場にいる皆が一体何事かといった様子で趙忠を窺っていた。それに、数年前の夢を見ていたことを悟った彼は、何でもないと答えて何故自分がこの場にいるのかを思い出そうと試みると、すぐさまその答えが脳裏に浮かんで来ることとなった。

話し合っている内容は、最近中華全域に点在する黄色い頭巾を被った集団——黄巾党についてだ。一年ほど前から見られるようになってきたが、その当時は特に略奪などをするでもなく中華全域を移動しているだけであったが、その人数がここ一年で三十万を超えたと報告があり、更には昨今突如として漢王朝へと牙を剥き始めたのだ。彼ら黄巾党は蒼天已死。黄天當立。？在甲子。天下大吉——蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし。歳は甲子に在りて、天下大吉という標語を掲げ襲撃を繰り返している現状が見られ、張角、張宝、張梁の三人を首魁とし漢王朝においてかつてない大反乱と目され始めていた。

「全く。まさか昨年の張純の乱に引き続いて、このような反乱が起きるとはな。予想外もいいところだ」

「うむ。だが、此度の乱は張純の時の比ではないぞ。あの時でさえも十万という数が揃っていたというのに、今度はそれを遥かに超える」
「今すぐにも手を打たねば、この漢王朝を揺るがす乱となるであろう」

かつての涼州で起きた韓約の乱の時とは異なり、ここに集まった官僚全員が真剣な表情で黄巾党についての対策を話し合っている。以前のの違いの大きさに、張讓は劉弁の手腕に舌を巻く。完全に洛陽の官僚全てを抱きこみ、意識を改善させていることに驚愕、の一言だ。自分がどれだけ努力しても結局は趙忠との政治争いにしかならなかったが、皇女と一官僚という立場の違いもあるのだろうか、劉弁は漢王朝の復興への道を確実に歩んでいる。その政治的手腕、恐れ怖れ畏れられながらも敬われる魅力。揺らぐことのない絶対の決意。それら全てが超越者としての輝きを放っている。流石は李信が主と認

める者である——と悔しさを滲ませながらもそれは賛同せねばなるまい。特に中華全域を駆け巡る独立遊撃部隊の隊長となつてからは、洛陽に帰還することが少なくなり会う機会も減つてしまった。戦場を行く者と宮中を戦う場とする者。彼ら二人正反対の戦場を主とする故に、それは仕方ないといえれば仕方のないことなのだが——。

「弁殿下には頻繁に会いに行つていないではないか？」

腹立たしさを抑えきれずにガンつと机の足を蹴るが、返ってくるのは固い感触。痛みに思わず呻き声を上げて蹲りつま先を押さえる張讓の姿に、何をやってるんだこいつは……と周囲の人間の視線は冷ややかだ。

「張讓はとりあえず放つておけ。今のこいつはあてにはならん」

此方は完全に復活した趙忠が、痛みにもがいているかつての最大の政敵を尻目に軍議を進めるべく口を開く。かつては虎視眈々と自分の政治生命を脅かして来た餓狼の如き存在感を見せ付けていたというのに、このポンコツ具合は如何したというのか。いや、こんな姿を見せるのはきつと李信に係係することだけだろう。そうでなければ以前の好敵手があまりにも哀れだ。

「皆の言う通り、もはや僅かな猶予もなからう。一刻も早く鎮圧し、漢王朝復興への道を歩まねばならん」

はっ!! と軍議場にいる全ての者が熱く燃える意志を示し、声を上げた。それに満足そうに頷いた趙忠は、自分を見てくる官僚を順に視線を移動させながら視界におさめ、次なる一手を紡ぎだす。

「では、諸君らに聞く。此度の反乱において総大将を勤めるのは誰が良いと思う？」

十常侍筆頭の問い掛けに、皆が静まり返つた。漢王朝には数多くの将軍がいるが、一体誰が相応しいのか。考えること数秒。一人の文官が何の躊躇いがあるのか、と堂々と答えを示しだした。

「李信將軍。彼こそが総大将に相応しいと思われませんが、如何か？」

「ほう。李信殿をか」

「数年前の韓約の乱から始まり、北方の異民族の平定。昨今では張純の乱をも最小の被害で鎮圧する第一功。彼以上に相応しい者などお

りますまい」

男の言葉に多くの官僚がそうだ、と賛同する。その中にはかつて趙忠派と呼ばれ李信を忌み嫌った者も多くいた。数年を経て以前の派閥の垣根は取り払われ、劉弁の下洛陽は政治が回っている。敵であったときは恐怖しかなかったが、味方ともなれば李信ほど頼りになる武官などそうはいない。そして彼の比類なき功績も考慮すれば、確かにまだ若いとはいえ総大将に相応しいともいえた。

「ふむ……そうだな」

彼らの言うことはわかる。そして理解出来るし、自身も李信に総大将を任せることになんら不平不満はない。張純の時でさえも一万の兵士で賊軍を壊走させたのだ。総大将ともなれば、動かせる兵士の数はその数倍。今回に限ってはさらに官軍の数は膨れ上がる。それだけの兵を自在に操れるのならば黄巾党など一瞬で鎮圧することが出来るかもしれない。

「よし、では……李信將軍を此度の鎮圧軍の総大将に——」

「——それは止めておけ」

ほぼ決まりかけた決定に待ったをかける者がいた。先程まで痛みあまり蹲っていた張讓である。いや、今も痛いのか少し涙目になっている。このポンコツめ、と思いつながら一応は自分と同格の張讓の言葉だ。彼女の意見も聞かねばならない。

「それはどういう意味だ、張讓よ」

「言葉通りの意味だ。李信を今回の乱の総大将に据えるのは止めた方が良い」

「それは異なることを。お前と李信の関係を見れば、推挙する理由はある。あつても止める理由はないように思えるが」

「普段ならばそうであろうな。今回でなければ喜んで全身全霊を持って推挙したであろうよ」

「……今回でなければ？」

意外なところからの反発に訝しげにしている趙忠の瞳が怪しく光った。

「李信軍の強さ。それは李信本人にもあるが、あいつの直属兵にも起

因する。超精銳の連中の中に他の官軍を混ぜてみるがよい……動きを妨げられ逆にろくな動きが出来なくなるのが目に浮かぶぞ」

それに黄巾党は数十万の信徒を三十六の塊に分け、一単位を方とし軍事組織化していると聞く。その反乱組織が中華全域に散っているのだ。もしも仮に黄巾党が一箇所に集まっているならば李信を総大将とするのもありではあろう。李信軍が怖れられるのは独立遊撃部隊としての一面を持つからであり、異民族へと対抗するための神速の行軍もまた武器である。総大将を勤めるということはそれら李信軍の持つ長所全てを投げ打つことになってしまう。

「それによく考えよ。李信のことだ……例え総大将におさまったとしても、間違いないく黄巾党へと軍の先頭で突っ込んで行くぞ」

ははは、そんな馬鹿な。

誰かが張讓の心配を笑うが——彼を知っている者は十分にそれが有り得ると表情を引き攣らせた。鎮圧軍の総大将が先陣切つて特攻をしかけるなど絶対にあつてはならないことだ。いや、そもそも將軍が先頭に行くこと事態がおかしいのだが。万が一李信が倒れば、それで鎮圧軍は瓦解する。それを考えれば彼を総大将に据えることは確かに止めた方が無難である。

もつとも張讓からして見れば、李信を先陣とした全軍突撃で黄巾党の集団を蹴散らしてしまう未来が見えるのだが——口にした通り今回に限っては総大将よりも普段通りの李信軍で動いたほうが彼にとってはやりやすいだろう。独立遊撃部隊としての役割でそのまま今回の鎮圧に乗り出せば、中華全域に点在している黄巾党を各個撃破することが可能となる。

「皇甫嵩殿。朱儁殿。盧植殿。この三人に各方面の大将を勤めて貰い、黄巾賊を鎮圧して頂く。李信には彼ら本来の役割である独立遊撃部隊として動いてもらった方が良いかと思うが、皆の者は？」

張讓の意見に反対の声はあがらなかった。彼女が挙げた三人の將軍も優秀であり、すっかりとした実績をもっているからだ。侮るわけではないが、反乱軍あいてならば十分に対処可能な人物と皆に期待されていた。

「では、各將軍には殿下から任命式を行って頂く。此度の反乱を最小限の被害で静めるように各々が全力を尽くすことを期待している」

趙忠の台詞を合図として今回の軍議は終わりを告げた。

こうして、漢王朝と黄巾党による戦争が始まりを迎えることとなるのだが——その頃北方で異民族へ対する警戒に当たっていた李信はなんとも言えない予感に襲われていた。張純の乱以降、急激に異民族の侵入が無くなってきたのだ。それは果たして自分達の存在故なのか……それは多少は関係しているのだろうが、それが全ての原因ではないことを薄々感じ取っていた。中華より遙か北方……異民族の領域において李信の本能をも刺激する新たな怪物が目覚めの産声をあげたのだが、彼がそれを知るのはまだ先のこととなるのであった。

第23話：荊州黄巾討伐

地平を埋め尽くす黄色い頭巾に、城壁の上から見下ろしていた太守褚貢は眩暈を起こしていた。城を攻め立てる黄巾賊の鬨の声ともいえない怒声が、言うなれば獣の雄叫びとなつて鼓膜を破らんかばかりに轟き、城を揺らしている。太守となつて数年もの月日が流れ、平穏な日々を過ごしていたかと思えばこのような想像してもいかなかったまさかの事態に、彼は混乱と恐怖の極みに達していた。砂塵を巻き起こしながら彼方より飛来するそれらは、漢をも喰らい尽くす蝗の群れのようなのだ。

「ひ、怯むなあ!! 押し返せえ!!」

押し寄せる黄色の群れに対抗するかのようには負けじと決死の声で配下を鼓舞するものの、彼の声は震えておりその声は虚しく黄巾賊の進撃に飲み込まれ消えていく。しかし、敵の火勢に既に官軍側の兵士達は及び腰である。それも無理もない話だ。ここ荊州南陽は比較的平和な地域である。勿論、近く荊州武陵郡なども蛮族が存在し両者の争いは絶える事はないが、北方地域ほどではなかった。それにこの城の官兵達は戦場へと赴いたことがない者ばかり。洛陽を中心として生まれ変わっている漢朝ではあるが、まだ彼らの救い手はここ荊州にまで及んではない。僅かな給金のために命をかけられる者が果たしてどれだけいるであろうか。それとは対照的なのが黄巾党の集団であった。およそ一万五千の軍勢が官軍を打ち破らんとある種の信仰を持って突撃を敢行している。

この状況は完全に褚貢の失策が及ぼした結果であった。兵数では負けてはいてもたかが賊徒の集まりと侮った彼は、城から出ての平地における決戦を試み、そして後悔することとなる。たかが賊と侮ることなかれ。官軍よりもよほど組織だった行動を見せているのが黄巾党であった。もつとも信仰の厚い者達で構成された右翼が遂に官軍の左翼を打ち破ると、瓦解は一瞬だ。城壁の上という安全地帯から幾

ら櫓を飛ばそうと、既に官軍には統率の欠片もなくなっていた。

「逃げるな!! 戦え、戦うのだ!!」

楯の声など既に誰も聞こえない状況となっている現在、もはや立て直す術は皆無と思われた。

「これはいけませんね。このまま突破されたら囲まれて袋叩きにあっちゃいますよー」

「――何者だ、貴様は?」

城壁の上から必死に指示を出していた楯は何時の間にか自分の横へと現れて眼下の戦を見下ろしていた少女へと訝しげな視線を送る。仮にも太守である楯貢への不遜にも聞こえる物言いは、戦場でなければ斬り捨てられてもおかしくはない。しかし壊滅寸前の官軍を見れば、藁にも縋りたい心持の楯貢にとって敗北必至の戦場において少女らしからぬ余裕と落ち着き、不遜な態度すらも頼もしく感じられた。

足元近くまで伸び波打つなんとも美しくも艶やかな金の髪。蒼色の文官服を着た、まだ身体つきも顔つきも幼い少女だ。血で血を洗う戦場を眺めているというのに、ぼうっとしている雰囲気醸し出し、どこか浮世離れた印象を見る者に与えてくる。彼女の頭に載っている得体の知れない人形がそれに拍車をかけていた。太守に問い掛けられたというのに、返事もしない彼女だったが、ようやく気づいたのか視線を戦場から楯貢へと戻す。

「ああ、名乗りが遅れました。風は程立。字は仲徳と申します。軍師の真似事などしている者ですよー」

「……程立? 聞いたことがないが」

「はい。放浪の旅の途中、先日はこちらに寄ったばかりのところですから」

「軍師? なるほど……率直に聞くが、貴様ならここからどうにかできる策でもあるのか?」

想定外の軍師の参戦に、楯貢は万が一の可能性を期待して程立と名乗った少女へと問い掛けた。怪しき満点の程立へ縋る太守の姿が、この戦場の勝敗がどうなるのかを如実に示している。

「そうですねえ……とりあえず戦列を広げて踏みとどまらせて下さい。突破させてしまつたらおしまいですよー」

理由は先程も述べた通り。官軍の左翼を抜けられ背後に回られるとそのまま本隊を囲まれる形になる。唯でさえ瓦解寸前だというのは前後から強襲されれば一瞬で官軍の敗北は決定するであろう。褚貢は慌てて左翼へと兵を送りなんとか突破した黄巾の部隊を防ぎつつ隊列を整えようと指示を出す。

「これで良いのか？」

「ただの時間稼ぎにしか過ぎませんけどねー。今の状態からこの軍だけで勝利をもぎ取るのは少し無理ですよー」

「はあ!？」

あつさりとした勝利放棄の発言に、褚貢は目を剥いた。期待していただけに程立の言葉は太守の希望を押し折るには十分な威力を秘めており、ついで感じるのは程立への強い怒りである。

「ならば、何故出てきた!? 街の中で震えておればよかつたであろう!! 貴様は何を考えている!？」

「本当なら風もその予定だつたんですよー。本来であれば街を防衛しているだけで勝てたというのに」

「防衛しているだけで? そんな馬鹿な話があるものか。一体どうやってそれで勝利するといふのだ!!」

烈火の怒りを見せる褚貢を前にしても、程立はのほほんつといった様子を変化させていない。その姿は余程の大物か、何も考えていない愚者かどちらかを見ている者に思わせる風格があつた。

「風も戦を始める前に散々忠告をしたんですよ。それを聞かずに平野での決戦を選択するとは夢にも思つてもいませんでしたが」

程立は黄巾党が攻めて来るという情報を聞いたときに、この街にいる官庁へと様々な情報と作戦を一緒にして献策をしていた。流石に官軍が負けて自分が訪れた街を蹂躪されては困る。程立は武力という面ではからつきしであり、もしも黄巾賊にこの街が襲われれば彼女もまた女性としての尊厳を踏みにじられた行為をされて命を落とすであろうことは明白。己の命を守るための献策でもあつたが、丸ごと

採用されるとは考えていなかったが、それが微塵も使用されなかったことに多少の驚きを感じたのも事実だ。

「風は旅人故に多くの情報を得ることが出来ているのです。その中で一つとびつきりの話を伝えたくもりなのですが、その様子を見るにどこかで止められてしまったようですね」

「もったいぶった話はやめろ!! 一体何の話をしているというのだ!!」

「皇甫嵩將軍と朱儁將軍を豫州潁川方面に。盧植將軍を冀州方面へと派遣したようですが。此方の荊州には誰が派遣されたかご存知では？」

「知らぬ……情報が伝達される前に黄巾どもが攻め入ってきたのだ」

「……李信殿。北方の異民族討伐において比類なき功績をおさめた万夫不当の將軍です」

「李、信!」

目が零れんばかりに大きく見開き、顎が外れたのではと勘違いするほどに開く褚貢。彼の姿に、ああ……これは本当に聞いてなかったんですね、と程立は彼の運の悪さに嘆息する。そして程立の発言に褚貢は自分のしでかした事に目の前が真っ暗になる焦燥に襲われた。確かに程立の言うとおりで。街に籠り防衛に全力を注いでいれば、そこまでの被害もなく李信軍到着まで持たせることが出来たであろう。褚貢もそれを知っていたならば平野での決戦など選択しなかったかもしれない。いや、だが黄巾党をただの賊と侮っていたのも事実だ。或いは李信が来る前に決着をつけてしまおうと考えたかもしれない。どちらかはわからないが、今はとにかく援軍が来るまで持たせなければならぬ状況に変わりはない。

「して、仲徳とやら。李信殿はあとどれくらいで到着されると見ているのか!!」

「そうですね……普通に考えれば最速で向かってきたとしても後二日程度でしょうか」

「一日?」

幾度目かの驚きに慄く褚貢の姿を尻目に、こちらもまた何度目かの

嘆息をする程立。防衛に徹していればあと二日など余裕で持たせることができたのだ。それがこの状況では如何ともしがたい。程立は實際優れた軍師であり、優秀な文官でもある。だがどれだけ優れていたとしても、九割九分負けが決まっているこの状態から勝利に導けないど土台無理な話だ。最初から彼女が軍師としての腕前を披露できる立場であつたならば話は別だつたが、たかが流浪の軍師に全権を預ける君主がいるわけもない。

では、何故彼女がこんな場所にきたのか。それは先程の台詞にもちらつとでた時間稼ぎが本来の目的だ。見たところ敗北は既に決定しているが、ほんの僅かにだが持ちこたえた、後は自分が逃げるだけだ。運動能力的にたいしたことがない程立ではあるが、勝敗の見えているここに残つて蹂躪を受けるか、このまま逃亡するか。天秤にかけたときほんの僅かに傾くのは後者となる。出来る限りの手は打つた。後他の街で合流予定の二人の下まで逃げられれば全てが上手くいく。「それでは太守殿。風はこれにて——」

愕然としている褚貢を尻目に、程立が別れの挨拶を口にしたその時であつた。

「我こそは南陽黄巾が指導者!! 張曼成!! 官軍よ、我を怖れぬのならばかかつてくるがよい!!」

黄巾賊の中央にて突撃を敢行した突端にて武勇を誇る巨人が矛をふるつて名乗りを上げた。その男は大柄な男であつた。そして戦場においてなお溢れる血の香りを発している。彼が率いる信仰を掲げる兵士達とは異なり、張曼成からは何も感じられない。彼が頼みとするのは信仰ではなく、己自身だと散じる気配と圧力が無言のまま告げていた。

「どうした、官軍ども!! 俺の名に震え上がったか!!」

張曼成が嘲笑し、持っていた矛で官軍の兵士を撫で斬りにする。その力量たるや、明らかにこの戦場において群を抜いており、彼の迫力と力量に前に立つ兵士達が反射にしる後ずさつた。その様子を見た程立は、せつかく立て直したというのにこれではすぐにも瓦解してしまうことを悟り、内心で臍をかみながらも——張曼成の姿も目に

はいらぬように遠方へと視線を向けている楮貢のそれを追って見て足をとめた。

見えた。見えたのだ。平野の遙か彼方より、砂塵巻き起こす軍勢が。日輪を求め、中華を放浪してきた程立が一度として感じたことがない全てを焦がす熱量を発する軍隊が、地平の先からやってきた。彼らが背負いたなびかせる李の旗を見た瞬間、程立は一度として動かさなかつた頬を僅かにだが引き攣らせる。

「……これはこれは。風の予測を二日以上上回りましたか」

なんと怖ろしい軍なのでしょうか。

程立の計算を二日も覆す最速を超えた神速の行軍。もしもこれが自分が指揮する戦場であつたならば、二日も読み違えたことになる。それはつまり完全な彼女の失態であり、間違いなく敗北へと直結する事態へと導かれる結果だ。彼女の思考を途切れさせるように、鳴り響く貝笛の音。長く太く、この戦場にいる者、街の中で祈る民達の頭上に、等しく届けられた。

漢王朝独立遊撃軍。李信軍の到着の知らせである。

「手遅れではないが状況はなかなか深刻であるな、主よ」

「敵およそ一万五千に対して此方は五千騎。攻められている官軍はあてにはできないしな」

韓遂の発言に同意する李信。本来ならば合計一万の兵士を従えている李信ではあるが、先遣隊により黄巾党が荊州で猛威をふるっていると聞き騎馬隊のみでの行軍を行ってきた。残りの五千は後から高順とともに遅れて到着する予定だが、今はいない兵士を勘定しても仕方ない。

「早さで押し潰すべきだな」

「そーでござえますな、姉御」

華雄と胡軫の言葉に頷いた李信が一言。

「行くぞ——李信軍。俺についてこい!!」

その貝笛に気づいた張曼成と官軍は、得体の知れない怖気に襲われ手をとめて振り返った。そしてその頃には——既に李信軍は呐喊を開始している。華雄が李信の指示の下、崩れかけている官軍右翼

を助けるべく二千の兵とともに本隊から分かれ別働隊として黄巾左翼へとぶつかっていく。李信を先頭とした本隊は、一つの巨大な稲光となった三千の一団の動きたるや紫電雷光。前に立ちふさがる存在全てを焼き滅ぼし、打ちのめす。地上に舞い降りた人型の巨大な天災。それを防ぐことなどたかが信仰のみを武器にする彼らにできようか。たった一振り。大矛による僅か一振り。李信のそれで、十人近くの黄巾党が斬り殺された。返す刀の薙ぎ払いでさらに十人が追加される。彼に続く騎馬隊が黄巾賊を轢殺し、それぞれの干戈で撃ち殺す。抵抗反抗を許さない、怪物達の進撃は瞬く間に戦場を支配し、九割九分決まっていた戦の趨勢を容易く覆していく。

「……噂に聞くのと、実際に見るのでは随分と違いますねー」

北方の異民族を壊走させる將軍李信。数年前の涼州の反乱から台等し始めた若き英雄。幾度となく聞いた彼の数多の戦果は、他の將軍の追隨を許さない凄まじいものであった。だが、程立は軍師として冷静に話半分程度に聞いていたが——そんな領域を超えている。逆だ。これでは逆ではないか。李信達の戦功を言葉にすることができず、結果噂話にのぼる程度におさまっている。確かに、これを、程立が今日の当たりに行っているこれを如何にして表現すればよいのか。彼女をして適当な言葉がすぐには思いつかない。

「背後より攻め入ってきた敵、止まりませぬ!!」

「真っ直ぐ此方にむかっております、張曼成様!!」

周囲を騒がす配下の声を聞きながら、張曼成は冷静に李信達の突撃を見ていた。凄まじい、の一言だ。兵隊一人一人の錬度が、官軍黄巾のそれらを遥かに上回っている。恐らくは自分であつたとしても先頭に行く男の背後に続く兵隊一人すらも打ち合えるかどうか。目に見える全ての兵士が怪物級。このような悪夢の如き軍が官軍には存在したのか。いや、よく見ろ。奴らの旗を。あれはまさか——噂に名高き北方の最強。李信軍ではなからうか。馬鹿な。速い。速過ぎる。

「落ち着け!! 奴らは相当な手練れだ。まともにやり合おうと思うな!! 側面から攻めて足を鈍らせよ!!」

張曼成の指揮に従い、南陽軍の右翼をほぼ打ち破っていた左翼が目標とする相手を変え、李信軍の横つ腹を抉り勢いをとめようとするも——別働隊の華雄率いる二千の兵に足を止められる。いや、止められるなどという表現ではなかった。圧倒的な破壊力を秘めた鉞の如き威力を持つて、敵軍左翼を崩壊させていく。

「右翼を上げよ!! 相手の左側はがら空きだ!! そのまま突っ込ませろ!!」

黄巾党の指導者の指示を再び受け、黄巾党は展開していた右翼を李信軍の脇腹を抉らんと動き出し——そんな彼らの背後から強襲する部隊があつた。李信本隊とは最初から別行動をとっていた、呂布率いる精銳騎馬隊一千。それが完全な虚をついて黄巾党の右翼の背中から襲い掛かり、次々と食い荒らしていく。

「て、敵の足が止まりません!!」

「とめろお!! 奴らの足を止めよ!! 三千の騎兵の突撃、しかもあのような化け物どもを受け止めることなど、この本陣ではできませんぞお!!」

「左右の援軍はどうしたというのだ!？」

喚きたてる張曼成直属兵たち。黄巾党以前より彼に従っていた兵達が左右を見れば、完全に足を止められている両翼。いや、逆に押し込まれてすらいる現状に、打つ手が悉く潰されている。南陽兵がいる中央を突破しようにもそれはつまり今まさに迫り来る李信軍に背を向けるということ。それだけは絶対に打ってはならない悪手であることはこの場にいる全ての者が理解していた。

「なんとという、強さ。なんとという速さ!! これほどのものか、李信軍とは!!」

褚貢が城壁の上から眼下の戦場を見下ろせば、自分が白昼夢を見ているのではないかと思わせる光景が広がっている。ほんの先程まではもう一刻持つかどうかと言う話だったのに、それが一瞬でひっくり返った。北方ほど李信の噂は広がっていないが、それでも漢王朝最強という称号は決して誇張でもなんでもないことを彼は骨の髄にまで叩き込まれた。

「しかし、なんだあの強さは、突破力は!! 確かに李信將軍の強さは桁外れのモノ!! だが、後に続く兵の強さは一体……」

「……李信軍の強さのカラクリ。それは単純なことですよー」
褚賁の疑問に答えるのは、何時の間にか戻ってきて肩を並べるように李信軍と黄巾党の戦いを見ている程立であつた。

「仲徳、貴様にはそのカラクリとやらがわかるというのか」

「はい。大将自ら軍の先頭を行くという常軌を逸したあの突撃。貴方ならばどう対応しますか?」

「……貴様も言うとおおり大将自ら先陣を切っているのならば、まずは頭を潰すべきだ」

「そうですね。それが正解です。本来ならば、ですが。当然、大将を討てばそれで戦は終わります。最小の被害で戦争に勝利することができる。先頭に行く大将を……李信將軍を狙わない理由がありません」
ですが、と。

「討てないんですよ、その一騎が。李信將軍を討つ事ができない。あのお方の前に立つということ、李信軍の前に立つと言う事。將軍が先陣を切る事によって極限にまで高まり昂ぶった軍の圧力全てが一丸となって襲い掛かってくるのですー」

「考えても見てください、と。程立は表情一つ変えずに褚賁へと語りかける。

「兵隊全てが並々ならぬ使い手の李信軍全ての圧力を一身に受けて……太守殿は立ち向かう勇氣などありますか?」

「……いや、無理だろう、アレは」

「はい。敵対する者は並の者では圧力に押し負けて抵抗も出来ずに終わってしまうのも無理の無い話です。敵中をあかも容易く行く突破力。勿論李信將軍の万夫不当の武力があつてこそですが——主を討たれまいと後に続く李信軍の存在が大きいでしょうねー」

あんな突撃を止める事ができる軍などこの中華に存在するのだろうか。褚賁の言うとおおり、それは無茶無謀な話でしかない。ほら、見る。既に李信率いる本隊が張曼成の喉下へと死を届けるべくやってきたではないか。

しかし、と改めて隣の美しい少女を視界の端に映しながら内心で驚愕を禁じえない。恐らくは李信とその軍を見たのは初めてだということに、彼らの強さの秘密を一瞬で見破る眼力は、只者ではない。

李信と張曼成。互いの顔が見える位置にまで近づきつつある戦場で、必死に退避を叫ぶ配下を黙らせる。左右に逃げたとしてもそれぞれの別働隊に足止めされて背後を討たれる。後ろに逃げたとしても先程述べたような結果で終わる。つまり逃げ場は存在しない——。「いや、一つだけあるな」

くはははつ、と笑った張曼成が矛を天にかざす。配下の者達へと視線を一周。そのうちの若者に目を留めて、ニヤリつと死地においてなお余裕の笑みを浮かべた。

「張拳の奴に伝えておけ。お前が狙っている李信とは——怪物であつたとな」

さあ、いけ。とその若者を一人戦場から離脱させると、残された直属の兵隊達へと力強く一喝。

「黄巾党……いや、我が兵士よ。俺についてこい」

皮肉にも李信と同様の言葉を発し、張曼成は飛び出した。前へと。いま攻め来る李信軍へ向かっていきおいよく呐喊を仕掛ける。死神へと自ら向かうそれは蛮勇でしかない。

「……正解です。それが唯一の活路ですよー」

ぶつかりあう両軍。李信を先頭とする李信軍と張曼成を先頭とする黄巾賊。両者の騎馬が激しく激突し切り結ぶ。だが、結果は見るまでもなく明らかで、次々と黄巾の者達が討ち取られていく。

「……李信軍でなければ、突破できたかもしれないですね。張曼成……一廉の者でした」

程昱の発言の秒後、一騎打ちとなる李信と張曼成。

張曼成が矛を振り上げ振り下ろす——間もなく、李信の大矛が黄巾党南陽指導者張曼成の首を刈り取った。

▼

「しかし、荊州か……様々な地域を転戦としているが、こちらは初めてきたかもしれんな」

「北方を主戦場にしていたでござーますからね」

黄巾掃討が完了し、李信達は太守達に挨拶するべく街中を歩いていった。噂に名高い李信軍を見ようと多くの住人が集まりまるで祭りのように騒がれている。流石に洛陽程の歓待ではないにせよ、ここまでの歓迎を受けるとは考えてもいなかった李信達にとっては少々むず痒いというものだ。

「こっちはこっちで蛮族の侵略があるにはあるらしい。どうにも中原からは遠いから後回しにされるといいうのも仕方ないところがあるんだろう」

「……恋もこっちはあまり旅で回らなかった」

「我がいた涼州とは随分と離れておるからなあ。我も荊州へ来た事は数えるほどだ」

華雄と胡軫。李信と呂布が並んで歩き、韓遂もまた李信の背後に付き従っている。奇しくもここにいる五人は五人とも荊州にはそこまです縁がないものばかり。多少の物珍しさもあって、きよろきよろと周囲を見渡していると、視線があつた住人からのさらなる興奮の聲が上がり、街中に響き渡る。

「ところで、李信。小耳に挟んだんだが漢朝は義勇兵を募集するらし

「いが本当か？」

「ん？ ああ、そんなようなことを聞いた覚えはあるな」

「將軍のお前が何故しらん」

「仕方あるまい。我が主も北方に出ずっぱり故に、どうしても情報が伝わるのが遅れるのは当然の話である」

華雄の突っ込みに韓遂が援護に回る。それが何時もの光景だ。完壁に敬服している韓遂は、李信が黒と言えばなんとかして白でも黒にするべく行動する。そのまま白と言い張るよりも余程厄介ともいえないかもしれない。

「ああ、でも今回の黄巾の反乱は確かに凄まじいとは聞くでござえます。何でも参加している人数は三十万を超えるとか」

「……とても多い」

「うむ。これまでの漢王朝の歴史でもこれだけの反乱は空前絶後と言っても過言ではなからう!!」

「で……話を戻すが義勇兵を募集しても、それに払う給金は出せるのか？」

華雄の心配ももつともだ。つい数年前までの漢王朝の荒れ果てた政治を思い返せば、恩賞として支払う金があるのかどうか疑うのも当然である。それを払う為に重税を化するならば、悪循環となって更なる反乱を招くのではないか。

「ああ、その点に関しては問題ないぞ。国庫には莫大な金が眠っているらしい」

「……そんな馬鹿な」

第十一代皇帝の桓帝までで国の財源は使い果たしてほぼ空っぽな状態になっていたという。しかも漢王朝建て直しの為にかかりの出費もしていると聞く。それなのに何故、莫大な金があるのか。

「良くも悪くも劉宏陛下が行った売官制度の結果だな」

売官制度というものを第十二代皇帝劉宏が定め認めた。それは文字通り官職を金で買うことができるという制度であり、つい数年前までであった制度だ。政府の役職であいている地位を金で売り財源として確保しようと試みたのだ。しかも、商人などには値踏みをして高値

で売り飛ばし、転売も許可する。在任期間も短くし、幾度も一つの地位で儲けられるように仕向けたのだ。聞くだけならば大変有効に思えるかもしれないが、それは即ち陰で行われていた汚職などが公に行われたということの意味している。こうして漢朝は政治の腐敗という代償と引き換えに莫大な金を手にするに至ったと言う訳だ。

「その時の金がこうして煌が有効活用しているのだから何がどうなるかわからんもんだ」

まあ、漢王朝を腐敗させていなければさらに楽に復興への道を歩めたのだろうか。

「それで、だ。今回の義勇兵募集の目的はなんだ？」

「勿論、兵力の補充だ。幾ら漢王朝とはいえ、中華全土に点在している三十万の反乱軍を抑えるのはちよつときついだろうか？」

「……それだけではあるまい。今回は各地の貴族豪族なども黙っているわけにもいかないだろうが。対岸の火事ではいられないはずだ」

「珍しく鋭いな、華雄」

華雄の言うとおりだ。今回の黄巾党は中華全域に渡って反乱を起こしている。しかも民への虐殺略奪も少ないとはいえ、完全には言えない状態だ。自分たちの領地の民がそのような目にあつて放置など出来るはずもない。それ故に各地の有力者も黄巾党への討伐に名乗りを上げ始めている。つまりは兵力的には十分になりつつあるというのに、まともに戦えるかもわからない義勇兵を募集する。何か裏があるのではないかと、疑つてかかるのは当然といえば当然の話だ。

「あー、なんでも煌曰く……在野に眠っている原石を掘り起こすためとかなんとかいってたな」

「なるほど!! 名が未だ知れてない者を勧誘するためであるか」

韓遂が李信の言葉に得心を得たと何度も頷き、それに遅れて華雄と胡軫もまた理解した。今現在劉弁が欲しているのは優秀な人材。もしくは将来性のある者。義勇兵でくるものは恐らくは玉石混交——圧倒的に石が多いにせよ、少なからず玉もいるはず。そういった人材をまとめて発見するための義勇兵募集の令なのであろう。特に才

ある者を集めて洛陽で育成してはいるものの、まだまだ足りない現状が続いている。大層な出費となるであろうが、官軍の兵士の被害も抑えられる点も考慮すれば納得がいく説明でもあった。

そんなワイワイと騒ぎながらも街を行く李信達を遠目で見ている人物がいる。それは程立仲徳その人であった。本来であれば、彼女はなにかしらの手を考えて李信へと接触を試みようと考えていたのだが——近づいてその考えを改めた。

「……困りましたねー。あのお方がそうかと思いましたが、どうやら違うようです」

程立仲徳。それが彼女の本名であり、程立とは偽名でしかない。彼女は幼い頃よりとある夢を何度も夢うつつに見ている経験があった。泰山に登り両手で太陽を掲げる、という夢だ。それは何かしらのお告げであると考え、日輪こそが自分が仕える主であると信じ中華を旅して回っていた。未だ、それに相応しい主とは出会えず、日々を過ごしていた今日この日——そうではないかという存在に出会えた。李信永政。漢王朝最強の飛將軍。遠目でみるだけでわかる、他とは一線を画す絶対強者。是非言葉を交わして確認をと思えど、それをせずとも理解できる。

「……あのお方は違いますねー」

二度もの否定。ぶるりつと身体が震えた。果たしてこれは一体どんな感情なのか。常に泰然としている自分が、程立仲徳ともあろう天才が、李信という名の超越者の気配に触れて進めない。いや、彼だけの気配ではない。李信を包み抱擁する万象全てを平伏させるもう一つの超越者の存在が、まるで彼は自分のものだと訴えているかのような錯覚さえ覚えさせた。背後に蠢くそれに、彼女だからこそ気がついたとも言えた。

「李信將軍……貴方様達は、風の日輪すらも焼き滅ぼす者であるというのですね」

ああ、これは紛れもない恐怖だ。一刻も早く自分が日輪と定める主を探し見つけねばならない、と程立は悟り——歓声溢れるこの街を一人後にするのであった。

第24話：孫呉の王

荊州の丁度真東。中華の南方に位置する揚州。その最東端の海沿いに位置する場所に呉郡と呼ばれる地域がある。元々は会稽郡の一部であったが、百二十九年の時にそこから分割される形で置かれるようになった計十三県を管轄する郡だ。随分と南方に位置しているため、この地域の者達は中原の民からは田舎者扱いされることが多い場所でもある。そもそも中原とはどういった意味なのか。中華文化の発祥地である黄河中下流域にある平原のことを指し、異民族から隔てられる文明の中心地という意味合いを持つ。そしてそこを中心として南方へと文明が発展していったため、漢民族にとっては中原は民族の発祥の地という想いが大変強い。そのため南方に住む者達をそういう目で見てしまうのは致し方のないことであろう。

さて、その呉郡を——いや、揚州を語る上で欠かせない人物がいる。その名を孫堅文台。若かりし頃は呉郡にて漁師をして暮らしていた女性だ。とある日何時もどおり彼女は父と共に漁に励んでいると海賊が近辺の村々を襲っている姿を目撃する。孫堅は海辺に降りると一人であるにも関わらず賊を撃退する為に兵士を率いている様に振舞った。そしてたった一人で海賊達へと攻勢を仕掛けたのだ。村を荒らしていた海賊は孫堅もまさか一人で百を超える自分達へと向かってくるとは思わず、彼女が兵士を率いていると思ひ込み急いで逃走を開始した。だが孫堅はわずか単身で海賊を撤退させたことを良しとせず、逃げる彼らをさらに追いかけて、賊の頭領のみならず海賊達を皆殺しにしたのだ。警備隊が駆けつけたときには孫堅は死体に覆われた海辺にて、愉しそうに笑っていた。あまりの逸脱ぶりに、警備隊たちが恐怖を覚えたほどであったという。そして彼女はその功績が認められ村を警備する尉に任命された。

だが彼女がその程度の官でおさまるはずもなく、時代が彼女を後押しするかのようにならな出世の糸口となる事件を巻き起こしていく。会稽妖賊の許昌が反乱を起こし、自ら陽明皇帝を名のる事件が起き、

彼の下には数万の人々が集まり一大勢力を誇るようになった。この事態を受け、孫堅は呉郡の司馬に任命され、鎮圧を命じられるが彼女は義勇兵を募って千人ほどの兵力を手に入れると他郡の官兵と協力して許昌を攻撃し、見事鎮圧に成功した。

こういった様々な功績を得て、県令の補佐官などを歴任しいつしか県丞なども転任するようになると、孫堅の満ち溢れる才覚と器に惹かれ、多くの優秀な武官文官が彼女の下へと集い始め、揚州に孫堅ありと他の州にまで彼女の名は広まって行くこととなった。孫堅は集まってきた者たちを手厚く待遇し、彼らを身内のように扱ったので、結束が強固になっていきその地の一大勢力となるのにさして時間はいかからなかった。

そんな孫堅が此度の黄巾党反乱の討伐に参加表明を出したのには理由がある。鎮圧軍における四大将のうちの一人——朱儁。朱儁と孫堅は同じ揚州出身であり、孫堅の優れた手腕を知っており今回の反乱を鎮める為にも何とかして自分の手元で用いたいと思った故の大抜擢であった。その要請を受けた孫堅は自分の配下のみならず、義勇兵を募集し二千の兵団を組織し、黄巾の勢力が強く朱儁が派遣された豫州潁川方面へと合流すべく出発した。



黄巾賊の勢力がもつとも強い地域として二つ上げられる場所がある。豫州黄巾軍と冀州黄巾軍の二つであり、そのため漢王朝は此方の

方面に皇甫嵩、朱儁、盧植の三將軍を派遣していた。だが、甘く見ていたわけでもなかったが、黄巾党の数と信仰心を過小評価していたのもまた事実。それが、たかが農民と侮ったツケが現在の状況となって牙を向くことになっていった。豫州潁川へと朱儁に合流するために凄まじい速度で北上していた孫堅文台と彼女の配下二千の兵士は、足をとめていた。眼下に行進する黄巾を被った超大軍を目撃したからである。

「おいおい……なんだ、こりゃあ。地平の彼方まで黄巾どもで埋まってやがるぜ」

健康な小麦色の肌。長身で豊満な肉体。紫紺の長い髪。一顧傾城かくやの容貌だが、女性として粗暴な言葉遣いではあるものの、それが彼女には相応しいと思わせる何かがある。見る者全てを問答無用で惹き付ける、強烈な引力を自然と放っている彼女こそが孫堅文台。江東の虎と諸国に名高い彼女が珍しくも驚愕の表情で、崖の上から行進する黄巾党の集団を見下ろしていた。

「馬鹿げた大軍じゃ。三、四……五万はおるぞ」

孫堅とは対照的な小柄で透き通るような白い肌の文官服の少女らしき人物がやけにふるめかしい言葉で主の発言に追従する。ごくり、と無意識のうちに息を呑んでいたが、それに気づく余裕など微塵も存在していなかった。

「ねえ、子布。こいつらって……」

「うむ……恐らくは豫州の黄巾賊と合流する予定じやろう」

張昭子布。こんな幼い容姿ではあるが、孫堅に仕える者としては最古参の一人である。そして、彼女に問い掛けたのもまた少女。ただし張昭に比べて随分と大人っぽいのだが。小麦色の肌に、紫紺の長髪。あらゆる点で孫堅に似ている少女ではあるが、それも当然。何故ならば彼女の名前は孫策伯符。孫堅にいる三人の娘の内の一であり、後継者候補と目されている彼女だが蒼く輝く両の眼が、自分達が率いる軍よりも遥かに多い軍勢を見て、僅かに揺れていた。

「……こやつらは一体どこから沸いて出てきた？ 儂らと同じ南方から北上しているようだが」

孫堅や孫策と同じほどに長く伸ばした薄い紫の髪を後ろで縛った妙齡の美女。孫堅に匹敵する女性的な身体つきが彼女が、鋭い眼光で他三人と同様に行進を続ける黄巾賊を睨みつけていた。

「恐らくは……揚州じゃな。わしらが討伐した黄巾賊の数があまりにも少ないとは思ってはおつたのじゃ、公覆よ」

張昭の返答に黄蓋公覆は、ギリつと齒を噛み締める。孫堅一党とその他の勢力によつて揚州から黄巾党は一掃されはしたが、情報にあつたよりは明らかに数が少なく指導者である彭脱の姿も消えていたのは知っていたが、まさか未だこれほどの桁外れの人数がいるとは。しかも五万もの軍勢が豫州黄巾党と合流すれば、そちらで戦っている皇甫嵩・朱儁の敗北へと繋がるのではないか。だが、この軍勢を止めようにも孫堅率いる兵士は二千。しかも半分以上が戦いになれていない義勇兵だ。どう足掻いたとしても勝利の目など存在しない。

「文台様!! 決して突撃など考えぬようお願いしますぞ!!」

厳しい口調で、今にもこの場から馬を走らせようとしていた孫堅を戒めたのは張昭子布その人であった。それに出鼻を挫かれたのか孫堅は、あからさまに舌打ちを一つ。

「うるせえな、婆。流石にここまで分が悪いつてのに何も考えずに突つ込むかよ」

……絶対に嘘だな。この場にいた三人の胸中に浮かぶ確信。だが、喜んで死地へと飛び込む戦闘狂の孫堅が張昭の言葉とはいえ止まるのは珍しい。一人であったならば特攻を仕掛けたのかもしれないが、今の彼女には従える二千の兵士がいる。それを思い出したのである。うか、普段よりも随分と冷静さを保っているな孫堅に張昭は安堵の吐息を漏らした。

「とにかく、わしらだけでは対応できません。朱儁將軍へこの事を知らせる為にも急ぎましようぞ」

張昭の言葉を合図に孫堅軍は、黄巾賊に見つからないように注意して北上を再開させるも彼女達を驚かせる事態がその先々で起こっていた。多くの城や街が黄巾賊によつて落とされていたのだ。彼女たちが見た五万の軍勢は、後続でしかなく、それ以上の数の兵が豫州へ

と続く道筋にて略奪殺戮の嵐が吹き荒れ、戦争の恐ろしさをまだ若い孫策は初めて実感することとなった。殺し犯され奪われる。これが戦。これが戦場。なんとも恐ろしく凄惨な現実だ。

「——おい、子布!! 既に汝南に入ったぞ!! 潁川まで距離がない!!」

「おぬしに言われんでもわかっておるわ、公覆よ!! ここまで入りこまれているとは……わしとて想定外じゃ!!」

揚州から豫州へと入り、汝南にて馬を走らせる孫堅軍一向。彼女達の行く先々で黄巾賊の暴虐が繰り返されている。戦おうにもおよそ五万からなる彼らの進撃を如何にして止めれば良いのか。それにこの五万を足止めできたとしても、すぐに後続の黄巾賊が合流し合わせて十万からなる部隊へと変貌する。質を押し潰す兵数に、流石の張昭といえど頭を回転させ続けてはいるものの、対抗できる策など思いつかない。単純な数が違いすぎている。ガリつと奥歯を噛み締める張昭だったが、その時先頭を走る孫堅が眉を顰めた。次いで気づいたのは黄蓋、孫策、一番遅れて張昭という順だ。チリチリと肌を焼くのは大規模な鉄火場の気配。一瞬新たな街が蹂躪されているのかとも思えど、決して一方的な殺戮では散じられない戦場の気配が押し寄せてきていた。孫堅たちが開けた場所へと到着してみれば、彼女達の視界に映ったのは官軍と黄巾賊が交戦している最中の光景であった。

「官軍と黄巾が戦っているのか!」

「でも……官軍が寡兵よ!! いえ……一万近くはいる!!」

「伯符殿、されど黄巾はおよそ五万!! 対抗できるとは思えませぬ!! 恐らくは豫州潁川に行かせぬよう黄巾賊を足止めしようとしておるのじやろう!!」

黄蓋と孫策が驚愕に声を上げ、張昭は冷静に無謀だと評価を下した。一万の兵士で五万の敵を相手取って足止めしようなど不可能に近い。ましてや彼ら黄巾賊はここまでの道程で多くの街や城を落としてきた。その勢いたるや凄まじいものがあり、生半可な技量差程度ならば覆してしまうであろう。

「……いや、ちよつと待て」

焦燥に囚われている三人とは対照的に、孫堅が戦場を見渡しながら眼を爛々とぎらつかせながら笑った。

「あれは、相当にやばいぞ」

「やばいって……そんなの言わなくてもわかってるわよ、母様!!」

「……待て。文台様の言うとおりだ。見てみる、伯符殿」

黄蓋の真剣な声色に、改めて両者がぶつかり合っている戦場へと視線を戻す。何を見るというのか。次々と蹴散らされ、殺されていつていないではないか。いや——違う、と孫策はようやく気づいた。粉碎されているのは一方的に黄巾賊の方だ。人が飛び、陣形に風穴を穿たれ、一瞬毎に戦の趨勢を官軍へと傾けていく姿は悪鬼羅刹の行軍にしか見えない。

「なに、あの軍!? 出鱈目に強いわよ!!」

「いや、見るのじゃ!! 官軍の掲げる旗を!! あれはまさか——」

戦場においてなお揺ぎ無い李の旗を見て孫堅は、くはつと獰猛な笑顔で腹の底から雄叫び染みた咆哮をあげる。

「北方の飛將軍!! 李信將軍かつ!!」

ドンつと離れていても耳に届く爆撃音。李信の大矛が恐怖に顔を歪める黄巾賊を打ちのめす。だがそれは終わりが無い戦い。切りのない争い。敵兵はおよそ五万。ここにいる者達だけでなく、後から後から合流してくるそれらは無限に存在するのではと思わせる蝗が如き集団。荊州からの転戦の連続。誰もが疲労困憊で万全な状態とは言い難い。今すぐにも武器を手放し崩れ落ちればどれだけ楽であろうか。そんな甘い誘惑が頭をよぎるも、李信軍の誰一人としてそれに屈するものはいなかった。立て。立って戦え。進んで殺し続ける。我らが將軍の背に続き、例え死するとしてもその時は前のめりとなって死ね。余計な考えを思考するな。ただ、我らが戴く飛將軍とともに行け。戦力比は数倍で、黄巾賊は後続でさらに五万が後から続いている。こんな状況で勝てると思っっているのか。ああ、思っているさ。間違いない。我らはただ我らの長に従うのみ。李信と先頭とし、それに続くは呂布と華雄。高順と胡軫。一万の兵すらも悪鬼となって黄巾賊を押し潰す。阿鼻叫喚の地獄絵図。死兵となって突き進む彼らは、

黄巾党の信仰をも粉々に消失させていった。

「潰せ!! 潰せ!! そいつを潰せえええ!!」

悲鳴とも聞き取れる黄巾賊の将の声。荊州黄巾党指導者彭脱であろうか。そこにあつたのは信仰ではなく、ただの一人間としての恐怖しかなかった。そして、それは黄巾を率いる頭がそこにいるのだという事実を、呐喊してくる李信軍へと知らせる合図に他ならない。

黄巾賊も孫堅軍も強かに打ち据える天風が吹き荒ぶ。直下から揺さぶられるような大震。あらゆる存在の気力を飲み込み押し潰す崩壊の始まり。揺れが大気を撃ち震わし、鳴動として大地を蠢かせる。中華全域が鼓動したのではないかと思わせる音が鼓膜を打った。それでもなお震動はおさまらないこれはなんだ。この現象は一体何なのだ。いや、わかつている。これは鬼神の行進だ。見ろ、奴が。鬼神が配下を引き連れて、我ら黄巾を奈落へと導く為にやってきたぞ。

「ばけ、ものがっ!!」

このままでは間違いなく突破される。本陣までの防御など薄紙に等しい、最強にして最悪の突破力を誇る李信軍をどう止めろというのか。顔を引き攣らせ思考が停止している彭脱へと、そんななか馬首を寄せる女性が一人。

「困りましたねえ。工夫がないただの単純な突撃ゆえに——手強く強い」

「趙弘か!! 何か策はないか!! あの化け物どもを止める手は!!」

「んー。一応ありますよお」

「なっ!? あるのか!? 本当に!?!」

「ええ、まあ……はい」

自分で問うておきながら、まさか本当に策があるとは思わなかった彭脱は驚きも露に目を剥いた。

「あの軍を真正面から止めることが出来る存在は……まあ、中華にはいないでしょうねえ。ですが、先にも言った通り、アレはただの突撃ですう。荒れ狂う猛獣をしとめるのにいきなり頭を狙う必要などありませんよお」

まずはあの馬鹿げた突撃力を生み出している足を封じます。

趙弘の指揮に従って、黄巾賊の陣形が動き始める。本陣への守りを厚くするのではなく、両翼を開き李信軍を両側から挟み込む形を取った。賊軍のその動きに、遠目で見ていた張昭が声を張り上げる。

「——まずい。敵には相当に手強い軍師がおるぞ!! 一目で李信軍の弱点を見破りおったのじゃ!!」

「弱点だど?」

李信軍の圧倒的な突破力に目を奪われていた黄蓋が、張昭の台詞に我を取り戻す。

「あの突撃は言ってしまうえばわしら孫堅軍と同様じゃ。わしらは文台様を先頭として敵兵を蹂躪するが、李信軍も似た様なものじゃろう。我らが主を守ろうとする兵の心が彼らの力を何倍にも引き上げるそれは——あくまでも仮初の力にしか過ぎん」

かつて程昱が李信軍の突破力の秘密を語っていたが、士気の高さはつまるところ主を守る為に発揮されているもの。主ではなく、自分を狙われれば素の力しか発揮することが出来ない。両翼から挟み込まれ、李信ではなく兵士達自身を削られれば、自ずと敵中に彼一人残されることなり、圧倒的な数によって飲み込まれて終わるであろう。

「さあ………終わりですよ。磨り潰してください」

くすりつと笑みを浮かべた趙弘の合図で、黄巾賊が李信軍へと挟撃を仕掛けた。戦争において挟み込まれるということは最悪な状態の一つだ。左右からの敵兵による同時攻撃が李信軍へと襲い掛かり、一気に何百もの兵士が弾き飛ばされた。

「はえ?」

そう——吹き飛ばされたのだ。黄巾賊の方が。呆然と何が起きたかわからない趙弘。それも当然だ。遠目で見ていた張昭ですら一瞬理解が及ばなかったのだから。確かに左右からの挟撃で攻勢を仕掛けたというのに、兵士達は自分たちの素の力しか発揮できないと言うのに、何故こうまで一方的になるのか。

ことは単純だ。確かに李信軍の兵士達は両側から攻撃されたことよって彼ら本来の力のみしか振るうことが出来ない。だが、それで十分だ。元々が李信とともに数多の戦場を潜り抜け、死地を踏破し、

官軍最強の名をほしいままにしている彼ら。例え彼ら素の力しか出せないのだとしても、それだけで黄巾賊など容易く屠れる怪物だらけの集団なのだ。

これは決して趙弘の読みが見当違いであったわけではない。李信軍を戦うことを選択すればあらゆる軍師が選択する策であったろう。例え諸葛亮孔明であろうと、荀彧文若であろうと、程昱仲徳であろうと、張昭子布であろうと——必ずこの方法を取った筈だ。否、これが李信軍と真つ向から戦う上で最良の選択であるからだ。だが、その最良の策でさえも彼らを止めるには能わず。

そもその地力の桁が違っていることに気づくべきであった。

僅かたりとも李信軍の攻勢を緩めることが出来なかつた趙弘が混乱の極めに達して正気を取り戻すのにかかった時間はおよそ十秒。次なる一手を打ち出そうにも失つた十秒はあまりにも貴重で、既に本陣の防御は崩壊寸前であった。だが、彭脱と趙弘を守らんと直属の親衛隊が李信達との間に割つてはいられ相打ち覚悟の特攻に、馬の足を止められた。敵陣で速度が失われるということは、命綱を断たれるに等しい状況だ。それでも敵の首魁はもはやすぐそこ。ならば、と李信は馬から飛び降り地面へと降り立ち身を前へ前へと走らせた。主を守らんとする親衛隊の剣が、槍が李信の身体を切り裂き、串刺しにしようとする。だが、李信は退かず飛び込んだ。傷つかぬ確信はなく、彼らの一撃が致命へと至る攻撃となるかもしれない。それでも、身体が雄叫びを上げている。いける、いけ。貫き、穿て。自分の命を脅かす敵兵の攻撃全てを薙ぎ払い、弾き飛ばす李信の一振り。切り結び、撃ち交わすそれら全てを歯牙にもかけない純粹なまでの破壊の一閃。大矛の斬撃が空間に炸裂の音を響かせて、矢継ぎ早に繰り出される李信の攻勢が蒼天に血の雨を降らせながら単騎で数百の兵を塵殺せん。颶風が吹き荒れ、名状しがたい力の波が大將軍の咆哮とともに発せられこの戦場にいるあらゆる敵兵の動きを縛り付けた。

「は、はははは……これが、李信。敵対するべきじゃ、なかつたですねえ」

趙弘は笑った。怪力乱神。天地を滅ぼす鬼神の類。何者も寄せ付

けない天下無双の絶対の才覚。馬鹿らしくなるほどの戦場での経験と死地の踏破。付け入る隙など一寸も存在しない完全無欠の死神。ああ、血に塗れるその姿すらもなんと美しいものであるか。圧倒的な無謬の殺意を真正面からうけて、彼女は自らの死を受け入れた。迫り来る李信の大矛を最後の最後まで見つめながら、彼女は愛おしげに微笑んで逝った。揚州黄巾指導者彭脱。及びその補佐趙弘——討ち死に。

まるで龍を連想させる特攻が、黄巾を食い尽くしていく光景を孫堅率いる全員が呆然と愕然と見ていた。言葉もないとはこのことだ。当の昔に人を逸脱した怪物の戦う姿に恐れと、怖れと、畏れを抱く。決して届かぬ至強の極地を示して見せた男の姿。それに見惚れる一人の女。人知を逸した鬼神が如きその力。天魔すらも調伏するであろう人の域を超えた技量。決して折れず曲がらずの不撓不屈の鋼の心。そのどれもがただ眩しい。美しい。輝いている。なんて素敵で、羨ましくも荒々しいのか。欲しい。欲しいのだ、あの男が。自分の物にしたい。者にしたい。ああ、ああ、ああ——この日この時この場所。孫呉の王は恋をした。生まれて初めての恋をした。



首魁二人を討たれた黄巾賊は、その事実が伝わると蜘蛛の子を散らして四方へと逃亡した。後続となる五万の賊軍もまた、彭脱と趙弘が

討たれたのを聞くとあつさりと瓦解した。信仰心が高い者達は李信軍へと立ち向かってきたがその数は総勢の一割ほど。数でも質でも負けている彼らに勝利の目など決してなかった。そしてさらに追撃を仕掛ける李信軍とそれに合流した孫堅軍の二軍によって、瞬く間に駆逐され揚州黄巾党は壊滅へと導かれることとなった。

パチパチと焚き木が爆ぜる音がする。時分は薄闇が舞い降りる頃、荊州宛城近辺まで追撃を行っていた李信達と孫堅らは、黄巾賊によって荒らされた跡地を利用して幕舎を建てた。強行軍に強行軍を重ねていた李信軍の兵士達も流石に疲労からか、勝利の宴に参加しはしたもののやがて見張りを残してほぼ全員が夢の中へと誘われていく。そしてそれは孫堅軍も同様だ。彼女達の軍もまた、朱儁達に危機を知らせようと休む間もなく北上していた上に、すぐさま戦闘に参加。そのまま荊州まで黄巾賊を追撃したのだから疲れも溜まるのは当然であった。そんな中、李信軍本陣へと姿を見せるものがいた。孫堅を含めた、孫策、張昭、黄蓋の四人である。許可を得て、四人が陣幕へと足を踏み入れると同時に幾つかの視線が突き刺さる。此方を値踏み、威嚇、底を見極めようとするそれらが心地よい。口角が歪んでいくのを抑えきれない孫堅を、背後に従う張昭ははらはらと落ち着きなく見守るのみだ。くれぐれも無礼がないようにそれはもうしつこく繰り返した張昭だったが、孫堅が言うことを聞いたことなど数えるほど。だが、今回ばかりは相手への失礼は孫家の致命と為り得る。官位としても雲の上。天下無双にして最強の飛將軍李信に不敬を働けば、首が飛んだとしてもおかしくはない。

「……お初にお目にかかる。姓は孫。名は堅。字は文台。以後お見知りおきを」

頼む頼むぞ、ともはや呪いの域に達した張昭の願いが届いたのか実に珍しくもまともな挨拶をした孫堅に内心で滂沱の涙を流す。

「孫文台が娘。孫策。字は伯符であります。李信殿、ご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願いします」

「孫堅が配下。張昭。子布……李將軍への拝謁、感謝致しますぞ」

「同じく。黄蓋、公覆。お見知りおきを」

孫堅達によるただの挨拶。それだというのに、ピリつとした緊張感が漂い始める。その発生源は勿論孫堅であり、寧猛な視線を李信へと送り続けていた。あらゆる人間を惹き付ける引力と、敵対する者を押し退ける斥力。相反する二つの圧を発する彼女の姿に、味方だというのに反射的に臨戦態勢を取らされた華雄達。呂布のみは眠たげに欠伸を噛み殺してはいるものの、手に持つ方天画戟を握り締める力が強くなっていた。南方に孫堅文台あり。江東の虎などと噂されているが、ここまでのものであったかと歴戦の兵揃いの李信軍の幹部達でも驚きに身を震わせる。対しての張昭、黄蓋も似たようなものであった。華雄達の強さは明らかに飛びぬけており、真つ向から戦えば拠点に残してきた若手の孫堅軍の者達では相手にもならぬ力量の怪物揃い。少なくとも辛うじて渡り合えるのはここにいる黄蓋と拠点で皆の補佐をしている最古参の程普くらいではなからうか。それに加え呂布奉先——李信と肩を並べる生きながらにして伝説となった少女。これは完全に別格だ。純粹な強さという意味では完璧に突き抜けている。戦ったとしても良くて数合持たせられるかといった埋めようがない溝が横たわっていた。

「文台殿らの助勢に感謝する。おかげで大した被害もなく黄巾賊を討伐することが出来た」

李信の台詞に、それが此方への気遣いであることに皆が気づいていた。例え孫堅軍がいなかったとしても確かに被害はもう少し追加されたかもしれないが李信軍のみで如何様にも出来たであろう。そもそも一萬の軍勢で総勢十方からなる賊軍をどうにかしてしまっている時点であまりにも外れすぎている。戦争の基本となる兵数をも凌駕する圧倒的な質。それもここまで桁外れであると、乾いた笑いしか出てこない。

張昭としては、黄巾対策にと拠点防衛の為に置いてきた若者達をつれてくるべきであったと後悔していた。彼女達と同年代でここまで優れた武将がいることを、中華は広いことを教えるためにも実際に目で見て理解させなければならなかった。特にこれからの時代を担っていくであろう周瑜を、孫権の補佐として残したのは手痛い失敗で

あつたことを認めねばならない。噂にきくのと実物を見るのと、実物を見るのと実際に力量を感じるのとでは受ける印象、力に天と地の差が生じてしまう。もしも李信軍と事を構えることになった際には、それが決定的な齟齬となつて敗北の引き金と為り得る可能性も出てくるはずだ。

「うむ!!.. では文台殿、下がつてもらつて構わぬぞ。我らも休ませて貰うのでな」

そんな様々なことを考えていたせいか孫堅と李信の会話が終わつていた。慌てて隣にいる黄蓋を見やれば、キョトンとした表情で張昭を見返す。それにほつと薄い胸を撫で下ろす。もしも孫堅が礼儀を欠いた対応をしていれば、黄蓋がこのような対応でいるわけがない。普段は適当なところもあるが、力のいれるべきところはわかっている彼女が止めてくれていたはず。

「……ここまでが公式の場ということでしょうか?」

安堵したのも束の間、このまま下がればよいというのに孫堅が口角を歪ませて言葉を発する。彼女の確認に、李信が頷くと口元の笑みの深さが最高潮へと達した。顔は見えずとも背から立ち昇る熱い気配に、張昭が表情を強張らせる。このような状態の孫堅がなにを言い出すか、古い付き合いの彼女は言葉に出さずとも悟つてしまったからだ。

「文台様、お待ち下され!!」

「うるせえぞ、婆。これまで我慢してたんだ。ちよつと黙つてろ」

「黙りませぬ!!」

縫りつく張昭を片手で押し退け、孫堅はもはや一切隠すことのない戦意を滲ませて笑う。晒った。高らかに嗤った。江東の人喰い虎。その名が伊達ではないことを彼女の放つ尋常ではない重圧が証明している。

「なあ、李信將軍。一手御教授願おうか。血が滾って仕方ない。このまま帰るなんぞ、生殺しもいいとこだ」

願う立場でありながら一切引く気が見えない孫堅。そして、顔面蒼白の張昭が謝罪の言葉を紡ぐよりなお早く。

「——無礼だぞ、孫文台!! 我が主に何を言うか!!」

烈火の怒りを示したのは傍らに控えていた韓遂である。自分のことならば如何なる恥辱にも耐えられるが主の李信のことに關しては別だ。一生涯尽くすと決めた李信に対して、このような対応許せるものか。まさに忠臣といった姿を見せる韓遂——だが外見は鉄仮面の黒尽くめだ。怪しさ爆発の彼女を胡乱気に見るも謝罪や先程の言の撤回をする様子は微塵もない。

「まあ、待て韓遂。孫堅殿ほどの武人ならば、彼女の発言も理解できなくはない」

怒りも露な韓遂を止めたのは華雄であった。彼女もまた李信と初めて会った際に、似たようなことをしたのだから孫堅の気持ちも言葉通りわからないでもないのが本音である。李信という怪物に触れば二種類の武人に分かれるのではなからうか。即ち、関わりあい避ける者が頂へと挑む者へと。

「だが、我らは荊州黄巾討伐から連戦の日々を送っていた。今日の今日というのは勘弁してやって貰えないか」

明日以降ならば李信も喜んで受けるであろう。華雄の折衷案に、韓遂も致し方なしと黙り込む。孫堅のことを考えた華雄の発言に感謝しつつ、これで彼女も引き下がるであろうと気が緩む張昭を嘲笑かのように孫堅はそれでも引くことはなかった。

「今だ。今以外にあるものか。機会があるからといって引くのは腑抜けのやることだ。オレは——」

孫堅の発言が途中で止まった。いや、止められた。背後からの不意打ちで、孫策が腰から引き抜いた鞘つきの剣を仮にも母親の後頭部におもいつきり叩きつけたのだ。流石の孫堅もまさかの背後から、しかも娘に攻撃されるとは予想だにしていなかったのかまともに受けてぐらりつとその場に沈み込んだ。完全に振り切った手加減なしの一撃に、戦々恐々とするこの場にいる一同。にこりと微笑む姿は天女もかくやという姿であるのに、恐ろしい。倒れた孫堅へと慌てて駆け寄る張昭と黄蓋だったが、一体どんな身体的構造をしているのか叩かれた後頭部をさすりながらゆっくりと立ち上がる。視線に力あるなら

ば、確実に二、三度殺せるほどに燃え上がった瞳で娘の孫策を睨みつけた。

「何の真似だ、伯符」

「その言葉そっくりそのまま返すわ。母様こそ暴走しすぎよ。華雄殿が明日以降ならつて言つて下さつてるのだからそれで満足するべきでは？」

「おい……だから今言つただろうが。今やれる機会があるつてのに——」

「そうね。でも、それでも引くのが人というものでしょ。今の母様はただの獣よ。ああ、それもそうね。だって母様は江東の人食い虎つて呼ばれているのだし」

「ああ？　なんだと、雪蓮。お前は誰に何を言つてるのかわかつてんのか」

孫策伯符——真名は雪蓮。普段ならば他に人がいるところでは決して使わないそれで孫策を呼ぶということは孫堅の理性が飛び掛つているということだ。だが、然もあらん。孫策の言葉は幾らなんでも親に向かつて言う発言ではない。轟々と全てを焼かんと燃え上がる大灼熱の超熱波が孫堅から滲み出る。その対象となつている孫策は——しかしども艶やかに笑うのみ。それに違和感を抱くのは最古参の宿将二人。確かに孫策伯符は孫堅の血を引く優秀な後継者だ。だが、母である孫堅の威圧をまともに受けてここまで平静を保つていられたであろうか。いられたはずがない。この少女は本当に——孫策伯符なのであろうか。何かがあれば爆発する寸前の空気のなか、動いた人物がいた。

気がつけば睨み合う親子の丁度中心にて、呂布が方天画戟を片手に眠たそうに欠伸を一つ。ちらりつと孫堅と孫策を一度見て己の干戈を持ち上げた。

「……これ以上続けるなら恋が相手をする」

面倒臭いからとつとと帰れ。こんなところで親子喧嘩をするな、という意味合いを込めた呂布の放つ気配も凄まじい。言葉通りこれ以上この場に居残るなら自分が戦うといった意思表示。孫堅文台の圧

をも呑み込む、純粋な戦人の殺気は周囲全ての空気の色を塗り替えていく。戦わずとも問答無用で相対する全ての人間を遙かな深淵へと叩き込む中華最強のうちの一人。最強が二人という矛盾を成立させてしまう至強の強者。

「ははははっ……はーはっはっはっはっ!! 面白いじゃねえか。なあ、呂奉先!! お前がオレの相手をしてくれるのかよ?」

こくりつと可愛らしく頷く呂布の姿はどこか小動物的だ。だが、放つ存在感は李信にも勝るとも劣らない。呂布と孫堅、孫策の三つ巴のような形となったそこは並の者では立ち入れない気当たりの不可侵領域を形勢し始めた。だが、呂布の様子はどこかおかしい。孫堅よりも孫策の方を注視している素振りを見せており、それに不満を持つ孫堅が呂布の頂点の気配を身に受けながらも眼光鋭く一步を踏み出す。「おい、奉先よ。どっちを向いてやがる。相手を間違ってるんじゃないぞ」

「……間違ってる。貴女は強い。でも恐くはない」

呂布の評価に誰もが驚く。彼女の口から強いという言葉を聴いたのは何時振りであろうか。そしてそれに続く恐くはないとはどういうことか。飢えた虎の如き様相を呈する孫堅に、一体どんな意味合いを持って発したのか誰もが思いつかなかった。

「恋の印象に残るのは、こっち」

孫策へと獲物を狩る狩人のように冷たい視線を送る呂布。それを受けても孫策の笑みに変化はない。

「気にいらねえな。オレよりも雪蓮の方が格上ってことかよ」

「格ならば貴女の方がまだ上。強さだけじゃない……この娘にあるのは凄いい違和感」

「はっ!! オレにはそれが無いっていうのか、呂奉先」

「ない。貴女にあるのは……強さだけ。昔の恋と一緒。貴女は確かに特別な強さ。でも……孤高の頂には辿り着けない恋達から見れば結局はただの人」

「くっ……はっはっはっは!! 聞いたか、おい!! 戦う前からここまで虚仮にされたのは初めてだ!!」

シヤランつと綺麗な音を響かせて、ついに江東の人喰い虎が己が獲物を引き抜いた。猛獣が自分の牙を、爪を構える姿を連想させる孫堅を呂布は一瞥。

「……敗北を知らない貴女は、本当の意味での強さに至れない」

「敗北？ はっ……それは弱者の考えだ。全勝することに越したことはないだろうがっ!!」

踏み込み、唐竹一閃。神速一斬。脳天へと振り下ろされたあらゆる武人を置き去りにする神懸かった斬閃を呂布は右手一本で持った方天画戟で受け止めた。あまりの衝撃と圧力にぶわりつと砂埃が舞い跳んだ。ギリギリと金属同士が噛み合い劈くかなきり音。互いの膂力は凄まじく、互いに一步も引かない膠着状態。

「お前が馬鹿強いってのはわかってる。何時もならその方天画戟を一度か二度でも振るえば決着がつくんだろうよ。大抵は受けれず防げずで終わってたんだろうがな」

呂布を押し潰そうとさらに両手に力を込める。ビキビキと筋肉が悲鳴をあげてそれでも、くはははと哄笑する孫堅文台。

「オレが大抵なんてうちにはいるかよ!!」

笑う。嗤うのは江東の人喰い虎。呂布奉先など如何なる者ぞ、と。されど対する呂布には一切の変化は見られない。

「……やっぱり」

幾ら力を入れても押し込めず、逆に圧される状態に孫堅の哄笑が止まる。

「貴女は……恐くはない」

右手一本の方天画戟が力一杯振るわれて、膠着状態は一瞬で瓦解。孫堅の身体が弾き飛ばされ陣幕を突き破り外へと叩き出された。驚愕を隠せない張昭と黄蓋が、慌てて陣幕の外へと飛び出すと、既に体勢を整えた主がいる。彼女の瞳は爛々と輝いており、未知なる強者の強さを知って喜びに満ち溢れていた。一度として力負けしたことがない孫堅が、こうまで力の違いを見せ付けられ次なる一手に逡巡したのか、彼女の放つ戦意が一瞬揺らいだのを呂布は嗅ぎ取る。

「……て、思ったよなあ!!」

しかし、それすらも罠であった。自身の戦意を相手に読ませ、油断を誘う究極の駆け引き。先程とは正反対の逆風一閃。だがそれすらも呂布の本能が容易く見切る。考えての行動ではなく、如何なる状態からでも自分に届く切っ先を判断し、対応する。至高の闘争本能。ならば、その見切りの本能すらも押し潰す手数で凌駕するのみ。呂布の方天画戟よりも小回りが利く宝剣が剣戟を繰り返し互いの間合いにて火花を散らす。呂布の間合いの更なる内に踏み込む孫堅の攻勢を悉く避け、防ぐ。

「オレはなあ——勝利だけで十分だ!! 敗北が、敗走が!! 次なる勝利へと必ずしも結びつくわけじゃねえだろう!!」

僅かな対峙でわかつたはずだ。孫堅文台は確かに強い。恐らくは歴史に名を刻み込むことが可能な存在。だが、ここにいる呂布奉先は既に伝説の域に到達した武人。強さの格が異なっている。

「オレが負けるということは、孫家の全てが否定されるということだ!! 負けるか!! 負けるものか!! 死んでも勝つ!! それがこのオレ、孫文台の生きる証明だ!!」

若かりし頃より常に最強であり続けた。不敗であり続けた。決意がある。決心もある。覚悟もあった。相手は格上——だが、それが面白い。これが初めての経験だ。この程度の壁乗り越えてみせる。ぶち壊してみせる。そうだ。それがこのオレ、孫堅文台の生き方だ。

孫堅の想いの籠った右薙ぎを呂布は方天画戟の柄で受け止めて——これまでとは異なる異様な威力に息を呑む。今度は先程の孫堅と同じような結果がそこには生まれ、呂布奉先の小柄な身体が彼方へと弾き飛ばされた。

「呂奉先!! 勝利の中になにを見てきた!! お前は敗北でなにを知った!! 精神の未熟さか!? 己の傲慢か、それとも過信か!! 肉体の弱さか!! 技術の不足か!!」

一撃一撃が加速し、重さを増していく。あの呂布奉先が防御で手一杯となっている現実には、官軍の将と戦っているというとてもない状況に関わらず損得勘定抜きで張昭と黄蓋は主を誇るように両手を力強く握り締めた。

「そんなものは、自己を知っていれば敗北の必要などなく気づくんだ!! 勝利はただの結果でしかない!! 勝利の中でも恐怖や焦燥、過信を知ることなど幾らでも出来るんだよ!! 勝利が己を成長させる!!」負け知らずなのは戦闘の結果だけの話だ。これまで心は幾つもの敗北を喫してきた。数え切れない勝利を積み重ね、孫堅文台は至強の頂へと手をかける。

「勝った者が一番強い!! それが戦の真理だろうが!!」

呂布の肉体全てに襲い掛かる刃の軍勢。孫堅の容赦ない連撃が繰り出され——遂に孫堅文台は万夫不当の頂点へたどり着いた。

「……訂正する。貴女は、恐い」

言葉とは裏腹に呂布の眼差しはまるで子供の駄々を受け止める大人の貫禄を秘めており、それを見た孫堅はぞつとした。例えるなら真冬に裸で外を歩くような、小さな子供が一人で宵闇の世界に取り残されたかのような恐怖感。頂へと登頂したと思った孫堅が改めて見上げれば未だ頂点が見えない遥かなる巨山が聳え立っている。自分の全てを掛けた今ここがまだ数合目ではないことを認識し、そして気づいた。目の前で防戦一方となっていた呂布が——初めて方天画戟を両手で握りなおしたことに。怨念渦巻く膨大な殺意と殺気。自分の敵に値すると認められた孫堅文台へと天下無双の全力が唸りを上げた。

が——ドンつと激しい地震が巻き起こされる。

発生源は大矛を地面へと叩き付けた李信であった。皆の注目を一身に浴びた彼は、頭をガリガリとかきながら周囲全ての戦意をかき消すと呆れの嘆息が漏れ出でた。

「喧嘩までなら許すがな。殺し合いまでいくなら話は別だ」

大矛を担ぎ上げ肩をトントンと叩きながら真剣な表情で呂布と孫堅を順番に見やる。李信から噴きあがるのは呂布をも凌駕し圧倒する大將軍の威。離れているにもかかわらず、自分が死んだという幻覚すら見させられる桁外れの重圧。この瞬間、張昭はこの男とは絶対に敵対してはならないと本能の域にまで危険信号を刻み込まれた。

「それ以上続けるのなら俺が相手をしてやる」

それは逆に孫堅が喜ぶのではないか、と思った皆であつたが——
存外に当事者である彼女は落ち着いていた。先程までの熱烈な気配は消え失せて、剣をおさめると一礼する。極限にまで燃え上がつていた精神が鎮火され、幾ら孫堅といえど大炎を再度燃え上がらせるには厳しいのであろう。謝罪を告げて、孫堅は孫策、張昭、黄蓋を引きつれ自分達の陣幕へと帰還していく。沈黙が続く四人であつたが、遂に我慢が出来なくなつたのか、孫堅は楽しそうに嬉しそうに高らかに笑つた。

「はーはっはっは!! おい、見たか。伯符!! 子布、公覆!! あれが最強、天下無双の李信と呂布だ!! なんていう化け物どもだ!!」
最強の看板に偽りはなく、天下無双の称号に不足はない。

あの強さ。雰囲気、気配に存在感。それら全てが人を超越した者の在り方だ。

「滾る、血が滾るぜ。なあ……なんて面白い奴らだ」

あれら二人を面白いと評価できるのは孫堅くらいじゃなかろうか。少なくとも張昭も黄蓋も、関わらずにいられるならそちらのほうを選ぶであろう。あれだけの怪物を相手取つてこの反応、主の器と頼もしさを再認識するに至つた張昭達だったが、次なる孫堅の言葉に我が耳を疑つた。

「くくくつ……なあ、伯符。おまえ弟か妹が欲しくないか？」

何を言っているこの女。

「飛將軍李信。オレは結構な好みの顔だつたしな。強さ的にも中華において比類なき傑物だ。孫家に血を残すのにも丁度いいだろう？」

とんでもない発言ではあるが、張昭と黄蓋はそれに否定できなかつた。彼ほどの優秀な血を孫家に加えられるならばそれに越したことはなく、逆にアリではないかという考えまで湧き出てくる。それに奔放な孫堅の手綱をあつ男ならば握れるかもしれないという淡い期待も抱いてしまう。

「とりあえず朱儁將軍に合流するまで、李信將軍と一緒に行くとするか」

孫堅の言葉に頷く宿将二人。こうして孫堅率いる軍は李信軍と行

動をともにすることとなった――。

「何を言っているの、母様。子供から大切な者を取り上げるなんて」

孫堅ら三人が三人とも孫策へと振り向いた。孫堅と呂布の争いが行われたゆえに忘れていたが、孫策の様子にも違和感があつたのだ。微笑む彼女は、これまでとは一線を画する奇妙な気配を纏わせている。どこが、とは確信を持って言えないが、それでも孫策の雰囲気はどこか危うい。

「なんだ、伯符。お前……何か不満でもあるのか」

そういえばさつきおもしろい頭を殴ってくれたよな、と狂暴な笑みを浮かべるも孫策伯符には通用しない。指向性のある圧力をさらりと受け流す技術に、成長しすぎだと半ば呆れる母がいた。

「ええ、母様。弟も妹もいららないから」

はつきりと言いつ切る孫策に眉を顰める孫堅だったが――。

「その代わりに孫とか抱きたくない？」

思いもかけない娘の発言に面食らうのも一瞬で――もたらされるのは今日一番の大爆笑。腹を抱えて蹲る孫堅と、続くまさかの発言に思考を停止させる張昭と黄蓋。まじまじと孫策の顔を見るも、冗談で言っている様子は微塵もなく、かつてない本気なのだど理解させられた。

「孫伯符。必ずや李信將軍の血を孫家に齎すことを誓います」

妖艶豊麗艶麗な美しき少女——孫策伯符。この首にかけて、と微笑む彼女の神聖なまでの覚悟がこの場にいる三人にその重さを指し示した。

孫呉の王は恋をした。生まれて初めての恋をした。

第25話：豫州黄巾討伐

官軍と黄巾賊の争いが続いている中原地域。特に勢力の強い地方である豫州潁川では、黄巾党指導者波才が挙兵をした。この男所謂天才と呼ばれる類の人間であり、武官文官としての能力は一級品。あらゆる能力が高い領域でまとまっている稀有な人物でもあった。そんな彼の行動は素早く、豫州の黄巾党を僅かな時間で纏め上げ、皇甫嵩と朱儁が豫州へと征伐に乗り出した情報を聞くや否や、二人の将軍が合流する前に朱儁軍へと攻勢を仕掛けたのだ。慌てたのが朱儁率いる討伐軍である。奇襲を受けた彼らは持ちこたえることが出来ず撤退し、それを容赦なく追撃をかける波才の勢いは凄まじく、皇甫嵩までもが勢いに吞まれ彼女もまた軍を退かざるを得ない状況に陥つたのだ。結果、二将軍は長社にて籠城を余儀なくされた。しかし、城に籠もった官軍を見逃すはずもなく、波才は大軍を持って長社を取り囲み攻城戦を仕掛け、もはや官軍の命運は風前の灯火と思われた。

「……落ち着かん。心がざわついているな」

既に夜の帳が降り、攻城の手を止め見張りのみを残して多くの兵士が休んでいる時分。長社を取り囲んだ黄巾賊の大軍から少し離れた場所に構築した兵站の補給地にて、砦の門に背を向けた波才が見張りの兵士とともに夜風に身を任せていた。瓢箪に入れてある水を口に含み、口内潤してからゆっくりと嚥下する。僅かな水が身体中に染み渡っていくが、落ち着く為に飲んだはずの水だったが、妙な胸騒ぎはおさまる事はなく気分が晴れることは一向になかった。目の前に広がる一面の草原。広がる草原の草花が夜風にゆれ、音を立てるそれが波才の心を表しているかのようであった。

現状の結果だけを見るならば、波才率いる豫州黄巾賊の圧勝であり、士気の高さは比べるまでもない。だが、それはあくまでも薄氷の上を慎重に渡り小さな勝利の光明を引き寄せたからだ。もしももう少しでも朱儁への攻勢が遅れていたならば、彼女は皇甫嵩と合流して此方が官軍の勢いに呑まれて敗北を喫していたであろう。彼の才は誰もが認めるところではあるが、それでも皇甫嵩と同戦力でぶつかって勝てると思っているほど驕ってはいない。彼女もまた自分を超える天才であることを骨身に理解しているからだ。その皇甫嵩が、籠城以外の手を打っていない筈がない。何かしらの逆転の策を練り、実行するはずだ。それを見破り、打ち破らねば黄巾党の頭上に勝利旗が掲げられることはないだろう。本来ならば大将である波才は休むべきであつたが、どうしても休む気になれず目が冴えていたこともあり、黄巾党が陣を敷いている重要な地点に顔を出しているところであつた。

「波才様」

「ご苦労。見回りか？」

「はい。今のところは異常はありません」

見回りの兵士を労いつつ、渴いた喉を潤すためにもう一度瓢箪に口をつけ水を流し込む。彼の姿を見た兵士は目をしばたかさせた。

「波才様は酒をたしなまれないのですか？」

「酒か。普段は飲むさ。しかも前後が不覚になるくらいにな」

ははははは、と大きく笑った波才に黄巾の兵士は首を捻る。

「ならば何故水を？」

「なに。確かに今は順調だ。このままいけば我らの勝利は揺るがぬだろうさ」

事実、この豫州黄巾党の皆がそう思っているであろう。相手は長社に引きこもるばかり。近いうちに攻城戦は終わり、官軍を殲滅できるはずだ。

「だが、相手は皇甫嵩將軍。漢王朝でも指折りの戦上手だ。油断、慢心……見落とし。それらを極力削っていかねばならん。故に今は酒を断っている」

波才より攻城戦が終わるまでは酒の禁止を言いつけられ、それに対しての不満が黄巾党のなかでもそれなりに聞かれていた。酒を飲むことは悪いことばかりではない。身体を暖め活力をもたらし、憂さを散じて士気をあげる。戦場において兵士にとつては酒は重要なものであるといえた。だが波才の言を聞き、酒が飲めない事に關して不満を持ったことに兵士は自分を恥じた。そんな時、まるで波才の言葉に呼応するかのように遠くにて兵の、馬のいななく声が聞こえ始める。

「波才様、今のは……!?!」

「……官軍だ。夜襲とは、随分とおもいきつた真似をする」

急いで本陣に戻らねば、と考えた波才の動きが止まった。嫌な予感がチリチリと背筋を焼いてくる。果たしてこのまま本陣に戻って良いのか。奴らは何を考えている。皇甫嵩ともあろう將軍が単純に夜襲を仕掛けて終わりなのか。そこまで思考して、一つの答えに辿り着いた。

「狙いは兵糧か」

黄巾党としても飯がなければ戦えない。運が悪いことにこの周辺には村や町がなく食料の補充が難しい。対してあちらは長社にて恐らくは十分な兵糧を備えているはず。後は此方の兵糧を焼き払えば、何時までもこの場にとどまることは出来ない。

「今すぐ本隊へと伝令に走って援軍を要請してこい。敵兵の数はわからんが、ここを焼かれれば我らの敗北となる」

「は、はいっ!!」

何かあつたときは副将や補佐の者達に対応は任せてある。それに官軍がここに兵糧があることを知っているのかわからないが、万が一に備えたほうが良いのは英断のはず。大量の物資が山のように蓄えられているこの拠点の簡易ではあるが城門を閉め、波才は兵士を呼び寄せ陣組んだ。ここは平原、身を隠す場所がない故に、官軍としても一気呵成に攻め入ることは分かっていたが——それでも敵の動きは速すぎた。平原の彼方から官軍が姿を見せたと思ったら、波才が守る拠点へと躊躇いもなく攻勢を仕掛けてきたのだ。まるでここに兵糧が隠されている事を知っているかの動きに疑念を覚えるものの、そ

んなことにかまけている暇はない。何故ならば、既に城門が破られようとしている光景を目の当たりにしているからだ。疾風迅雷を体現した官軍に、開いた口が塞がらない。これまで戦ってきた官軍の兵士とは目に見えて錬度の高さが違っている。夜の闇の中でも映える赤い鎧で統一された兵団は、少数ながら死すら怖れずに黄巾賊へと特攻を仕掛けてきていた。一兵卒とは思えない彼らの強さに、内心では動揺するものの、指揮官が揺れば軍全体に行き渡る。努めて冷静な表情を崩さずに、自軍へと指示を出し続けた。

「良いか、皆の者よ!! この戦いは敵兵を倒すことが目的ではない!! 時を稼ぎ、援軍がくるまで持ちこたえることが目的だ!! 我らに求められているのはそれだけだ!! それが我らの勝利であるぞ!!」

波才の鼓舞に、黄巾党の皆が自分を奮え立たせる雄叫びを上げた。もつとも今攻め入ってきている赤備えの兵士達相手にそれを為すことがどれくらい難しいのか波才自身が気づいている。それでも己の心を叱咤して、腰元の剣を引き抜いた。それと同時に城門が破壊される音が響き渡り——彼の視界に飛び込んできたのはようやく少女という梓組みを外れた若い女。黒髪を靡かせ、巨大な剣を振り回し、縦横無尽に戦場を駆け回る剣鬼。

「曹孟徳が配下、夏侯元讓!! 貴様らの首級貰い受ける!!」

黄巾賊が構える武器毎叩き斬つていく怪物が、目に見える全ての敵を打ち倒そうと吼え猛る。彼女の間を突こうとした者も、何処からか飛来した瞬矢によって脳天を貫かれ地に伏せた。その正確性、間断なく次々と放たれる矢が黄巾賊の屍の山を気づいていく、どこから来るか分からない攻撃に彼らは皆脅え竦んでいた。そして、そんな彼らは夏侯惇の良い獲物にしかならず、彼女の後から続く赤備えの兵士達もまた容赦なく敵兵を仕留めていく。

「落ち着け!! 兵数はまだ此方の方が勝っている!! 冷静に対処——」

波才の指揮を遮る一頭の馬が場内へと疾駆してきた。最初に見えたのは、赤備えの兵士とは対極の蒼。月光を反射させる鎌を携えた爛々と蒼天の如き瞳を輝かせた少女の姿。だが、不思議と彼女——

曹操孟徳の姿から目を離せない。異常なまでの引力を放つ彼女に、波才はここが戦場であることを忘れ呆然と見惚れてしまった。だが、彼もまた並々ならぬ傑物である。数秒の時間を奪われはしたものの、迫り来る曹操へ対応する為に改めて周囲の兵士に指示をだした。

「槍部隊、陣を崩すな!! 受け止めよ!!」

「了解しました!! 波才様!!」

波才の指示にしたがって、長槍を構えた黄巾の兵士が前へと出て単騎駆けしてくる曹操へとそれぞれの穂先を向けた。だが、幾人かの兵士を貫く不可視の狩人の飛矢が突き刺さり陣形を崩す要因となったそこに、短い呼吸音とともに薙ぎ払われる大鎌。小柄で細身な曹操の一撃は、されど自分へと迫り来る槍を断ち切り、幾人かの兵士の首をとばした。自分達の大將の一騎駆けに奮い立たない配下の者達ではなく雄叫びをあげながら曹操の後へと続いていく。中でも夏侯惇は、華琳様に何をするかーと吼えながら湧いて出てくる敵兵を潰していた。そして、曹操はくるりつと周囲を見渡して、彼女の瞳が波才を見るや否や、口元を深く歪める。浮き足立つ兵士には目もくれず、曹操はただ波才へと向けて馬を走らせた。

「——あなたが指揮官ね。悪いけど、その首頂くわ」

波才が曹操の一撃を受けることが出来たのは防衛本能からくる反射であった。だが少女の細腕から放たれた一撃とは思えない超重量級の威力のそれに、彼の身体が軽々と吹き飛ばされ陣地の土の上を転がっていく。痛みを堪えて立ち上がるも、その姿に曹操が僅かに驚いた表情を見せる。

「見事。私の攻撃を受けて息があるのは賞賛に値するわ。あなたの名前は何?」

「……人の名を聞くのならば、まずは名乗るのが礼儀ではないか」

「——ええ、そうね。失礼したわ。私の名は曹操。曹孟徳」

「聞いたことがあるぞ、その名。十常侍の親戚を殴り殺し洛陽から遠ざけられた不運の若き俊英の名と記憶しているが」

「失敬ね。あれは相手の罪へ対して刑を執行しただけよ。それに栄転というてほしいわね」

くすりつと笑う曹操に対して、向かい合っているだけで冷や汗が止まらない波才。なんとかしてこの窮地を乗り越えねばならないというのに、曹操の蒼天の瞳はそんな彼の心を全て見通しているかのようであった。

「無駄よ、波才様。先程あなたそう呼ばれていたわね。まさか兵糧を焼きに来て豫州黄巾指導者と遭遇するとは思わなかったわ」

「——っ」

舌打ちの一つでもしてやりたい心持ちの波才だったが、目の前で鎌を夜天に向けて掲げる曹操の姿に目を奪われた。それは龍が空に向かって鎌首を持ち上げた姿を連想させる光景でもあり、知らず知らずの内に波才は曹操という霸王の器に心を掴まれたことを自覚する間もなく、彼は逆転の一手を練る思考を放棄していたことに最後まで気づくことはなかった。

「その首級。我が覇道の礎としてあげる。心置きなく旅立ちなさい」

艶やかに笑う曹操の鎌が一閃。

豫州黄巾指導者波才——騎都尉曹操孟徳により討ち取られる。



曹操孟徳が奇襲を仕掛けたのとほぼ同時刻。

長社を包囲していた黄巾賊の本陣には皇甫嵩の軍による夜襲が行われていた。だが、黄巾賊一党も波才からの命により注意を怠ってはいなかった故に、崩れることはなく逆に官軍の攻勢を押し返し始めている。次々と討たれて行く官軍の兵士達が及び腰になった時の事であった。

「退かれよ」

凜とした声が暗闇の中に響き渡る。それが誰が発した声なのかすぐに敵味方問わず理解した。その発生主へと誰もが自然と視線を集中させ、自ずと官軍の兵士達は道を開けて行く。誰もが息を呑み目を奪われる美しい武将の姿がそこにはあった。磨きに磨きこまれた刃の如き美しさ。或いは、夜天を駆け抜ける稲妻のような勇壮の美。長く煌く黒髪が、戦場の風になびいている。金色に輝き深く澄んだ瞳。こんな場所にいなければ名門貴族の令嬢と間違えられてもおかしくはない完成された美。だが、決してそれを考えさせない完成された武。相反した二つを内包する戦場に舞い降りた女神か。或いは天より落ちた静かなる武神か。手にした巨大な青龍偃月刀が月光の光を反射しており、容易く掲げる彼女の姿に誰もが見惚れ、惹かれた。

「……何者か!!」

周囲全ての兵士を魅了した生きる武神の歩みに我を忘れていた副将——馬元義が己を奮い立たせる意味も込めて力強く誰彼と問うた。

「貴殿らの命。中山靖王劉勝が末裔、劉玄德が腹心……この関羽が貰い受ける」

関羽雲長。彼女の名前とともに黄巾官軍両方に漣が広がっていく。彼女の名を知る者は生憎といなかったが、誰もがただならぬ者であることを悟ってはいた。そして、自分たちでは到底及ばぬ傑物であることもまた。

「笑わせおる!! たかが小娘が何をほざくか!!」

斬って捨てよ。関羽が並々ならぬ者であることなど一瞬で看破した馬元義ではあるが、このままでは敗北は必至。流れを取り戻そうとする馬元義の命とともに、黄巾賊の群れが一斉に関羽へと襲い掛かった。彼らには信仰があった。国をよりよくするために命を賭ける覚悟があった。ただの農民などではなく、本物の戦士であることは疑いがなかった。

だが——敵陣が割れた。真つ二つに、圧倒的な個による進撃が全

てを破壊する。

そこにいるのはただの一人。完成された個。完全な武。後の世にて英雄多き乱世にあつて、なお武神と称される将。刀槍の森が、僅か一人を飲み込み潰すことが出来ない。逆に彼女の武威に恐れ戦き、後退までし始める始末だ。それも当然、既に事切れた数百の黄巾賊の兵士が彼女の周囲には転がっているのだから。

「なんだ、この武は!? これが、これが人に許された力だということか!!」

此方の兵数は圧倒的だというのに、それを歯牙にもかけない関羽が青龍偃月刀を振るう度に人が消し飛んでいく。関羽雲長のそれは、個人的な武勇でどうにかできる範囲を超えていた。文字通りの一騎当千。恐怖が黄巾賊の兵士全てに伝染していく。

「見事だ、関羽よ!! だが、戦場を一人で支配できると思うな!!」

怯み脅える黄巾賊の中から一騎が名乗りを上げる。その男は堂々とした面持ちで矛を携え夜天へとかざし馬を駆ける彼の身体は風となり、馬上から地に立つ関羽へと矛を振り下ろした。騎馬対歩兵。そこに生まれるのは絶対の有利不利。されど関羽は焦りを微塵も見せずに青龍偃月刀をいっそ軽やかに切り上げ——馬ごと襲い掛かってきた男を真つ二つに両断した。この日を切っ掛けとして武神と敬われることになる関羽雲長と彼女の主である劉備玄徳の名は中華に轟くこととなった。

孫堅軍を吸収し豫州へと荊州宛城から発ち北上を開始していた李信軍ではあったが、その途中で新たな黄巾賊と会敵する。その敵数はおよそ三万程度。敵意が薄く、李信軍の姿を見るや否や、恐怖にも似た怯えを見せ始めた。

「……どこかで見覚えがある軍じやな。公覆、目が良いお主なら分かるのではないか？」

「ああ。恐らくは先日討った揚州黄巾の残党ではないか」

張昭と黄蓋の会話の通り、李信軍の前に姿を現したのはつい先日首魁二人を討たれた揚州黄巾賊の残党であった。流石に十万の兵を全滅させたわけではなく半分以上が逃げ散っていったのだが、再び集合し徒党を組むとは誰もが予想もしていなかった。あれだけの一方的な戦いを見せ付けられてなお戦う気概を持てるのは、むしろ天晴れと褒め称えたくなるほどだ。だが、それでも先日の戦の恐怖は残っているだろう。彼らの脅える姿は至極当然ともいえた。

「うむ。もつとも誰かしの纏め役はいるじやろう。幾ら信仰に厚いといっても、指導者がいなければこうも早く兵を再編することなぞできはせん」

張昭の読みは的中していた。李信軍の追撃を受けて散り散りとなった揚州黄巾党であったが、彼らは新たな指導者の下李信軍を足止めすべくこうして集結したのだ。しかし、所詮は逃亡兵によって大多数が構成されている軍。合戦が開始するとすぐに黄巾賊は崩れ始めた。

「に、逃げるな!! 戦え!!」

「ここは退きましようぞ、張燕様!!」

必死に軍を立て直そうとする指導者張燕だったが、それが無理だと判断したのか彼もまた三万の兵士とともに撤退を始める。それを逃すような李信軍ではなく、逃亡している部隊の後続の兵士を次々と討ちながら追撃を開始した。先日の戦の巻き戻しを見るかのような一方的な殺戮。それでもなお逃げる黄巾賊。敵将も悲鳴をあげながら無様に逃げ延びようとするそれに、孫堅軍もまた功を得ようと血気盛

んに追い討ちをかけた。既に数千の兵が討たれた現状を知りながら馬を走らせる張燕は——不気味に笑う。

「良いぞ、ついてこい。化け物どもよ。目に見えた餌は美味かろう。お前達のような存在と真正面からやりあうなんざ、真つ平御免だ」

黄巾へ対する信仰は皆無。黒山賊と呼ばれる賊の頭領である彼は、黄巾党を隠れ蓑として略奪虐殺を繰り返してきた。そんな彼が離散した揚州黄巾党の残党を吸収し、李信軍との戦いの状況を聞いた結果理解できたことは、彼の軍とは正面からあたっても絶対に勝てないということだ。ならばどうすればいいか。真正面からやりあわなければいい。一万という、自分たちから見れば大人数とはいえない李信軍をどうにかして削ればよい。そしてそういった搦め手は山賊である自分達の得意技でもある。

逃げる。必死になって逃亡する。黄巾兵が背後から裂かれ、貫かれ、断たれ、撃たれ、潰され、刺され、穿たれ、突かれ、斬られ、削られる。無残で凄惨な光景が広がっていくなか、やがて黄巾賊はある場所へと逃げ込んだ。両側を高い崖で挟まれた一本の狭路。進む軍は細くなり、身を隠す場所も無ければ進む道も前か後ろの二箇所のみ。伏兵、奇襲、計略を用いるのにつけの地形となっていた。

これが敵の誘いであることは明々白々。それを悟ることはできるだろう。だが、ここまで黄巾賊を追い込んでいながら、敵将の首が見えている状況で、果たして軍はその勢いをとめることが出来ようか。出鱈目な強さを誇る李信軍だからこそ、誘いに乗るに違いない。何を仕掛けてこようと、数万の伏兵が待ち受けていようと、それら全てを粉碎する圧倒的な突破力を秘めた李信軍が止まる筈がない。

狭路を張燕が抜け切ったその瞬間のことであった。左右の崖の上から降り注いでくるのは巨大な岩石。丁度狭路の出口を塞ぐように幾つもの岩が落とされてきた。それは道を抜けようとしている黄巾賊を押し潰し完全に出口を塞いでしまった。それはまさに惨憺たる有り様だ。まさか味方がまだ抜けていないというのに策を仕掛けるなど誰もが想像にしていなかったことであろう。だが、これが張燕の策でもあった。李信軍と、李信を罠に嵌める為に撒いた餌。李信

軍と戦い破れた振りをし、追いつける範囲で撤退する。そして狭路において味方が抜けきった状態ではなく、その途中で巨岩を落とす。黄巾賊二万人近くを生贄前提にした罠。それが高いとは思わない。噂に、揚州黄巾賊から聞いた李信軍ならば、これだけの被害に目を瞑ってもお釣りが来るはず。後は、もう一つの出口近辺に伏せていた兵で出口を塞ぎ、両側の崖から油を撒き散らし火攻めとする。如何に凶悪な強さを誇る李信軍とて、火の脅威には勝てまい。歪む口角を自覚しつつ、張燕は笑いを抑えきれない。あの北方の飛將軍を倒したのがただの山賊である自分であるということが面白くて仕方がない。そんな中、崖の上に伏せていた兵士が焦燥の声を上げた。

「張燕様あ!!」

「如何した? やつらが抵抗しているのか?」

「い、いえ!! 李信軍、見当たりません!!」

「な、なんだと!?!」

想定外の報告に張燕は顔を引き攣らせながら現状の把握へと急ぐのであった。



時間が少し遡り、黄巾賊が丁度狭路へと逃走を開始した頃。李信軍と孫堅軍もまたその経路へと足を踏み入れようとしていた。一方的な戦いの結果に、血と殺戮に興奮している孫堅軍の義勇兵が我先にとそちらの狭路へと特攻を仕掛ける。視野は完全に狭くなっている兵士達を一瞥、クンッと鼻をならした李信が眉を顰めた。そこで大きく

息を吸うと——。

「全軍、止まれ!!」

李信軍一万と、孫堅軍二千の兵士全てが反射的にそれに従った。華雄や呂布といった李信軍の幹部のみならず孫堅ら将も同様だ。狭路の奥へと逃亡する黄巾賊を見送りながら、李信は何故か周囲を見渡す。そんな將軍の姿に、孫堅の表情には不満がありありと出ていた。「何故とめた、李信將軍!! このまま奴らの喉笛を噛み千切ってやれただろうによ」

「文台様、少し静かにしてください。ですが、主の言うとおりではないでしょうか。これが敵の罠である事は重々承知しておりますぞ。ですが、李信將軍率いる軍とわしら孫堅軍が力をあわせれば如何なる策でも打ち破れると……」

孫堅を宥める張昭が、代わりにと李信へと進言するも肝心の彼はそれを聞いているのかいないのか。既に黄巾賊の最後続は遙か先へと消え去って、それを追おうとする気配は微塵もない。ならばせめてわしらだけでもと張昭が文台へと献策しようとした瞬間、李信がちよいちよいと彼女を手招きする。一体なにかと思いつつも李信の下へと馬を寄せた張昭の頭頂部に軽く打ち下ろされた手刀。スパンつと小気味良い音が響き渡り、ふぎやつと涙目になって頭を押さえる張昭の姿に目を白黒させる孫堅軍一向。いや、孫堅だけは面白そうに腹を抱えて笑い出した。

「一体なにをするのじゃ!? 如何に李信將軍とはいえ、無礼では——」

「酔ってるぞ。多少は落ち着け」

真剣な表情の李信の進言に、張昭は言葉が詰まった。二の句が告げないとはこのことだ。李信の言葉を冷静になれば理解出来る。確かに、普段の自分ならば絶対にしない思考でもあったからだ。李信軍と行動をともにすることによって、自分たち本来の力を随分と大きく錯覚してしまっていることに今だからこそ気づいた。よく考えずともわざわざ敵の策略に乗る必要性など一切ないのに、敢えてそこを突っ切り打ち破ろうとする。自分たちの力を過信してしまつた結果の答

えだ。もつともその原因は一緒に行動をしていた李信軍の馬鹿げた戦闘能力にあるのだから、皮肉な話である。だが李信のそれだけの発言で真意を見出し、普段の自分を取り戻す張昭の姿に、ほうつと感嘆の声が漏れる。

「……優秀だな、張子布。出来ればうちに欲しいくらいだ」

「な、なにを仰るか!？」

思いがけない李信の台詞に、面食らったのは張昭子布である。漢王朝最強と目され、実際に見れば納得が出来る將軍の賞賛に力アッと燃えるように頬が赤く熱く染まった。孫堅の最古参の配下として、幹部として辣腕を振るってきた彼女は様々な美辞麗句には慣れている。されど、ここまで裏表のない褒め言葉を受けて嬉しくない筈がなかった。

「おいおい。うちの婆に色目を使ってんじや……いや、李信將軍。良かったらこの婆いるか?」

「文台様何を!!」

「ちなみに結婚とかしてんのか? してるなら別に側室でも構わんけどな。最悪子だけでも構わんが」

「構いますぞ!! わしを差し置いて話を進めないでください!!」

「うるせえ。お前もいい歳だろうが。オレの親心がわから——てつ、悪かったな、伯符。そんな冷たい目でみるなよ」

「……何のことかしら、母様」

「馬鹿、お前。親殺しできそうなくらい冷たい目してんぞ。おちつけ」

「あら。落ち着いてるわよ、私は。ええ。落ち着いてるわ」

「だから怖えって。なんだよ、お前。もう少し昔の余裕を持てよ!!」

そんな会話をする孫呉一党。その会話を聞く李信に疑問が一つ。遙かに年上に見える孫堅から婆扱いされる張昭についてだ。張昭の見掛けはどうみても十代半ば。冗談で婆扱いされているのかとも思ったが、確かにそれくらいの年齢にしては貫禄と冷静さが群を抜いている。ならば韓遂らと同様の若作りか、と勝手に納得してもう一度鼻を鳴らす。策略の匂いを嗅ぎ取った李信が自軍へと指示を出す

別方向へと突き進む。その先から伏兵が現れるものの、さして数は多くない。呂布を先頭とした騎馬隊が瞬く間に殲滅してみせ、策が失敗したと理解したのか今度こそ散り散りとなっていく黄巾賊残党に李信軍が追撃を仕掛け始めた。その光景を見ていた黄蓋が、恐ろしいものでも見るかのように吐息を漏らす。

「……強いだけではなく、策略を見破る眼力もあるか。あれは一種の怪物ですな」

「実際、たいしたもんだな。あらゆる面において飛びぬけて、突き抜けてやがる。一体どんな才能と経験を積みあげばあんな領域に辿り着けるってんだらうな」

「そうね、母様。でも、本当に恐ろしいのは李信殿じゃないと思うわ」

あん？ と聞き返した孫堅。それに頷くのは張昭子布だ。

「伯符殿の言うとおりじゃ。げに恐ろしきは一兵卒までが骨の髄まで李信軍であるということ。目の前にあれだけの功が転がっていないながら、圧倒的な軍に所属していながら……あの状態で何の疑いもなく李信將軍の命に従う完全な統制」

「ええ。誰一人として不平や不満を持たず、ただ李信殿のために命を捧げる。もしも万が一李信殿が命を落としたとしても——彼らは最後の一人まで死兵となつて敵兵に喰らいついていくでしょうね」

現状では孫堅軍では手も足も出ない圧倒的な錬度を誇る最強の軍の攻勢を眺めながら——孫策は張昭へと馬首を寄せた。

「ところで、子布。別に私は貴女がいいのなら一緒にいてもいいのよ？」

「伯符殿までなにを仰るか!! わしはまだ結婚など考えてはおりませぬ!!」

「別に結婚だけが全てじゃないと思うけど。そろそろ子布も女としての幸せを掴んだら？」

「まだわしはそんなに焦る歳では——」

「いや、十分に焦る歳だろ。なあ、婆」

「ぐ、ぐぬぬ……」

戦場近いこの場所で、そんな会話が為されていたとかいかなかったか。

ちなみにこの日完全に敗北を悟った張燕は、僅かな手勢を引き連れて根城のある黒山へと逃げ帰ったのだが——それを知る者は本当に極僅かであった。

第26話：英雄集結

「……三人ともすまなかつた」

今は遠く姿も見えなくなつた三人の少女を見送つたのは一人の男。名は張挙。二年近く前に十万近くの民を集めて反乱を起こした張純の副官にして弟分だつた男。若い頃より張純を兄と慕い漢王朝の腐敗をとめるべく行動してきた彼ではあつたが張純を李信に討ち取られて以来、生ける屍となつていた。兄によつて逃がされた彼は生きる目的を失い行き倒れになつていたところを、同じ張の姓を継ぐ姉妹に命を救われた。彼女たちこそが、張角、張宝、張梁の三姉妹であり、旅芸人をして中華全域を回っている少女達でもあつた。最初は生きる目的を失つた為と、仮にも命を救われた恩を返すために彼女達の世話係となつて日々を過ごすことになつた。

彼女達の下で働くことによつて驚かさされたのが三姉妹の魅力についてだ。旅芸人の枠組みを越えた彼女達の芸はあらゆる男達を骨抜きにしていった。次々と信者を増やしていく彼女達を見て——張挙の心に悪魔が囁く。彼女達の力を持つてすれば、もう一度漢王朝に一矢報いる集団を作り上げることができないのではないかと。願わくば、義兄である張純を討つた李信を打ち倒したい。例え無謀であろうとも、可能性が零ではない限り賭けてみたい。それからの張挙の行動は迅速であつた。以前十万にも及ぶ反乱軍を纏めていた手腕は伊達ではなく、張三姉妹の大道芸を少しづつ気づかれないうちに助言をして変化させていった。漢王朝へ対する不満を煽らせる方向へ、だ。それは予想以上に予想外の結果を生み出し、各地で徐々にだが黄巾党の数は増えていった。純粹に張三姉妹の為に動いたという者もいただろうが、盗賊、山賊、その他あらゆる者達を受け入れ、黄巾党は遂に反乱を起こすに至つた。それに驚いたのが張角達である。まさか大道芸人の彼女達が反乱軍の首魁にされるとは夢にも思つていなかったからだ。猛反発を受けたが既に中枢は張挙によつて支配されてい

たため、彼女達の言葉は外に漏れ出でることはなく——本人達の与り知らぬままもはや後戻りができないところまで来てしまっていた。「かかかった。よかったのか、張拳の旦那よ。いや、あんたが逃がしたんだ。良いも悪いもないか」

「若い身空だ。無駄に命を散らすこともないでしょう」

張拳の背後で、親衛隊に守られて逃亡していった張三姉妹を見送っていた二人の男の言葉に張拳はただ頷いた。命を救われて置きながら利用する形になったのは本当に申し訳ないと思っている。元来、この張拳と言う男悪人にはなり切れない。そうでなくては、漢王朝の腐敗を正すなどと中華を旅して回らなかつたらさう。

「俺につき合わせて申し訳ない。すまなかつた……韓忠、孫夏」

「なにを今更。そんなこと覚悟の上であんたの話にのつたんだぜ」

「漢王朝に我ら持たざるものの鉄槌を喰らわせて差し上げましょう」

これから死地へと旅立つというのに、二人の表情は穏やかだ。死すら怖れない二人の友に感謝を贈る。

「これより、我らが張三兄弟だ。俺が張角で——」

「俺が張宝か」

「僕が張梁というわけですね」

これで黄巾賊の首魁三人が揃った。負けるつもりはないが敗北した場合、自分達三人の首でこの反乱の落とし前となるだろう。元々戦が始まってから張三姉妹の姿は表にだしていかない。黄巾党の者達は見知った者がいるかもしれないが、黄巾賊の方は彼女達の顔を知っている者は居はしないだろう。

「もはや俺には漢王朝など未練はない。張純様を討ち取った男……李信。お前を見届けることこそが、俺の最後の役目だ」

もしもお前が張純様の願いを託すに値しないのであれば——わが命を持つてお前を殺す。

▼

豫州で最大の勢力を纏めていた黄巾指導者波才敗戦する、という報は各地へと瞬く間に広がった。それ程に彼が指揮していた黄巾党は膨大な人数であったからだ。それを打ち破った皇甫嵩と朱儁の名とともに、波才を討った者として洛陽や任官場所でしか知られていなかった曹操孟徳の存在もこの戦争が中華全土へと広める結果となっていた。皇甫嵩らへの援軍として先を急いでいた李信軍や孫堅軍にも無論この報は伝わっており、ある者はやつと出てきたかという考えを、ある者は彼女の存在に警戒を、ある者は新たな英傑の台頭に期待を、様々な思いを抱いて長社へと到着した。

波才黄巾賊との戦いで相当に消耗したためか、彼女たちはまだ冀州に出発しておらず軍の調整を行っているところであった。それが許されたのは官軍に相当数の死傷者がでたのと、冀州黄巾賊と戦っている盧植率いる官軍がかなり優勢な状態であったためだろう。まずは皇甫嵩と朱儁に挨拶をせねば、と李信孫堅ともに幹部を引き連れて將軍の下へと向かっている最中、突如として李信の足が止まる。

「——曹孟徳。久しぶりだな」

「はい、李信殿。御無沙汰しております」

有象無象の人間がひしめく中に曹操の姿はあった。だが、まるで境界線があるかのように彼女の周囲はぼっかりと空白地帯となっている。曹操に近づくことは許されないと、彼女の背後で護衛の任にあたっている夏侯姉妹が無言でありながら強烈な雰囲気ですべてを周囲の人間に悟らせてしまっていた。それに加え曹操が放つ存在感は桁

が違っており、自ずと李信の視線は彼女へと引き寄せられる。洛陽北門で出会ったときよりもさらに強大で濃密な小さな身体から発せられる気配。あらゆる人間を絡めとり跪づかせる引力と、敵対するものを弾く斥力は、孫家の当主である孫堅文台にも勝るとも劣らない。孫堅の半分も生きていない彼女がこれほどの高みに達していることに驚かされるのが孫家一行である。華雄や高順、韓遂らは以前出会ったときに曹操の器に触れているが故に、まだ驚きは少なかった。呂布は曹操を一瞥するも、まるで興味がなといった様子で李信の背後にひかえている。

「この度の戦功聞き及んでいます。荊州および揚州黄巾賊の首魁を討ち果たしたと。この曹孟徳……心よりお祝いを申し上げます」

「ああ、その言葉受け取ろう。だが、お前のことも聞いたぞ。豫州指導者の波才の首をあげたとか。電光石火の強襲……流石は曹孟徳だ」

「有難うございます。ですが、偶然という幸運の結果です。兵糧を狙った先にてたまたま会敵しましたので。お恥ずかしい限りです」

「例え運だったとしてもそれはお前が引き寄せたものだ。そしてそれを取りこぼすことなかったのが曹孟徳——お前の力だ」

「過分なお言葉、感謝致します」

普段と変わらず笑顔で受け答える曹操だったが、彼女の頬が僅かとはいえ薄桃に染まっていたことに李信が気づくことはなかった。それを見た華雄と高順の思いは一致する。即ち、こいつもかである。以前会ったときから怪しんでいたが、どうやら間違いなく李信に好意を抱いている。その点に関して二人の嗅覚はかなり優れていた。一方韓遂はというと、流石は我が主よ、と何が面白いのか一人高笑いをあげている。そんな時、李信は曹操の影に隠れている一人の少女の姿を見つけた。彼の視線に気づいたのか、曹操は自分の影に縮こまっていた猫耳頭巾の少女を前面へと押し出した。

「孟徳、様!! お、お待ちを!!」

「はいはい。隠れてないで挨拶はきちんとしなさい」

「ま、まだ心の準備がー!!」

何が心の準備なのか。もしも本当に会いたくなかったのならばど

こか別の場所で待っていたはずだ。しかし、男嫌いを公言する彼女が正面切つて会いたい等と言える筈もない。故に、中途半端に曹操の影に隠れるなどという真似をしていたのだ。

「……文若か。久しぶりだな。お前もここにいたのか」

「え、ええ!! ひ、久しぶりね……今は此方の曹操様の下で働かせて頂いてるところよ!!」

若干混乱に陥っているのか少女——荀彧文若が薄い胸を張って李信へと返答するものの、見事な口調に周囲の空気がピシリッと固まった。將軍職にある者へ対しての言葉遣いとは到底思えない。

「我が主に無礼だぞ、小娘!!」

「いや、構わん。文若とは洛陽の官僚育成機関で何度も顔合わせしていてな。その時に言葉遣いに関しては公の場でなければ問題ないと伝えている。こいつの言葉遣いで責められるのならばそれは俺の責だ」

「——ならばよし!!」

韓遂の対応の変化の速さにこれまた周囲の人間が思わず声をあげそうになった。流星は李信が黒といえれば自分含めて問答無用であらゆる答えを黒にすると噂される韓遂である。確かに公の場でどこぞの者ともしれない荀彧に対等の言葉遣いで話されたら李信の格が安く見られるやもしれないが、この状況でならばそれほどの心配はないだろう。

「というか、お前一人か？ 荀彧は一緒じゃないのか？」

「地花……彼はあそこに残ってるわよ。一応は誘ったけど……」

あつさりと断られたということは口に出さなかった。荀彧とは長い付き合いの親類であり親友だが、李信を優先したことに少なからず嫉妬心を抱いている。もつともそれはどちらへの嫉妬なのかいまいち本人にも理解出来ていないところがあつた。字で呼ばれる自分と、名前で呼ばれる荀彧。付き合いの長さで見れば当然の差といえは当然なのだが、それでもどこか心にしこりが残っている。そんな不分明な気持ち揺らぐなか、曹操の手が優しく肩に置かれた。

「……随分与李信殿と親しいようね、文若」

ギシリつと肩の骨が悲鳴をあげた。にこりつと笑顔を荀彧へと向ける曹操だったが、その仮面の下には何やら得たいの知れない感情が渦巻いている。荀彧の細い肩を握りつぶさんばかりの握力に、痛みが後になって押し寄せてきた。あまりの痛みに悲鳴すらも口から零れ出てこずに、その場に腰が砕けたように座り込む。

「数回顔を見た程度の間柄とか言つてなかつたかしら？」

「も、もももも、孟徳、様あ。ち、ちが……違う、違うんですう。い、いいいいたたたたつ」

「——冗談よ、ごめんなさいね」

ぱつと肩から手を放した曹操が、荒い息を吐く荀彧の手を取って立ち上がらせる。相当に痛かつたのだろうか、涙目になっている荀彧だったが、どこか頬を赤くしてやけに色っぽい雰囲気醸し出しているのは——果たして気のせいなのだろうか。

「悪かつたわね、桂花。ちよつとした戯れよ」

「華琳さまあ……」

曹操の華奢な細い指がツウつと荀彧の喉から顎までを優雅に撫でる。それに完全に惚けてしまっている荀彧。つい先刻まで肩の骨を砕き折ろうとした張本人と、折られそうになった被害者とは思えない二人の姿。そういう関係なのかとも思われたが、曹操に関しては配下で遊んでいるだけでそういった雰囲気を感じてはいない。妖しい空気が散逸するなか、呂布が李信の袖を無言で引っ張る。いつもの如く早く行こうという合図に他ならない。

「俺たちはここで失礼する。皇甫嵩將軍と朱儁將軍に用があるんな」

「——わかりました。お時間を取らせて申し訳ありません。欲を言えばもう少し話をしたかったです……」

「ああ、俺もだ。まあ、どうせ同じ軍に所属することになる。または時間はあるだろうさ。その時は腰を落ち着けて話をしよう」

「李信殿のお心遣いに感謝を。その時を一日千秋の想いでお待ちしています」

洪手の礼を取る曹操を残して、李信達と孫堅らは去っていった。こ

の場に——孫策伯符を残して。前を行く孫堅一行が佇む孫策を振り返りはしたものの、彼女の表情を見て立ち止まらずに李信達を追っていく。主である孫堅さえ朱儁への挨拶に赴けば、とりあえずのこの問題は起きないであろうと言う考えもあつての暗黙の許可であつた。一人残つた孫策の視線は、ただ曹操にのみ注がれている。訝しむ夏侯姉妹や、荀彧の姿など目にも入らぬといった様子で、彼女はただただ曹操孟徳にのみ注視していた。二人の視線が絡み合い、互いの底を見極めようと深淵を覗き込む。

だが——二人ともが戦慄し、驚愕する。

何故ならば両者が互いの底へ到達することがなかったからだ。決して深淵に辿り着くことがない底なしの闇。まるで奈落。これまで会つた中でも李信を除いてとびつきりに群を抜いた存在。王足る器。

震天駭地にして感慨無量。自分と同年代にしてこれほどまでの高みに座し、そしてなお遥かな頂に昇ることを諦めない霸王の卵が二人。蒼天の霸王と紫天の霸王。両者の対峙は地を揺らし、長社に悲鳴をあげさせる。たかが小娘、今だ名も中華に轟いていない一人。格、貫禄、圧、雰囲気、気配、ここにいる彼女らは確かに王を名乗るに相応しい全てを持つていた。例え漢王朝が減びようとも、この二人のどちらかがいれば中華を統べる王となるであろう希望を抱く。つまりは曹操、孫策ともにそれほどもまでの傑物であるということを彼女達自身が証明していた。

「初めまして。私は孫策。字は伯符。宜しく」

「此方こそ。私は曹操。字は孟徳。宜しくお願いするわ」

同格。曹操は孫策の、孫策は曹操の、未だ見ぬそれら全てを計算して互いの格付けを行った。少なくとも現段階ではどちらも一歩も引かず、能力のあらゆる点において互角に近い。例え能力一つ負けようとも他の点でそれを補う。数値化できない以上、彼女達の本当の格は戦ってみなければ決着がつかうことはない。そして、皮肉なことに両者ともが互いの存在を受け入れ、歓喜する。自分を高みに引き上げるための好敵手。それに相応しい相手の出現に、身体が喜びに満ち溢れていた。

「……揚州に孫堅あり。確かそんな噂話を聞いたことがあるわ。ならば貴女は？」

「ええ。貴女の推測通りよ。私は孫文台が長女。私も洛陽北門にて随分と活躍した貴女のことを噂話程度だけど聞いたことがあるわよ」

「お恥ずかしい。若気の至りというものよ」

「まだまだ若い貴女がそれをいうのかしら。そんな台詞はうちの子布が言う言葉ね」

哀れ張昭子布。とんだ流れ弾である。

ピリピリと油断も緩みも一切ない二人の意識。対峙しているだけだというのに、周囲の人間全てが総毛立ちこの場から離れるべきだと生存本能が危険信号を感じする。夏侯姉妹、荀彧ともに孫策が主の恐らくは個人的な意味合いの敵だと認識してはいるものの、彼女をここで討てる気が微塵もしない。単純な強さではなく、曹操同様の王の器が彼女達の身体を縛り付けている。

「ところで伯符殿。李信殿と一緒に来たみたいだけどどんな関係かしら？」

地面に突き刺していた愛用の鎌に手をやりながら一、二度柄の握りを確かめる曹操の姿は大層迫力に満ちている。まともに対峙すれば碌な受け答えも困難な圧を感じはするだろうに、対象となつていいる孫策はそよ風の如く受け流していた。

「朱儁殿に請われて助勢に北上していた先にて合流したのよ。凄かったわ……言葉に出来ないほどに圧巻だった。とても素敵だったわよ。如何なる存在も圧倒する怪力乱神——いいえ、あれが極まった人。本当の意味での大將軍という存在だったわ」

「へえ……李信殿の戦う姿が見れたのね。運が良かったわね、貴女」

ふふつと口角を吊り上げる曹操の言葉とは裏腹に、周囲の耳に届くほど強く鎌の柄を握り締めた。幼い時に出会って長い時が流れはしているものの、噂だけしか聞こえず実際に李信が戦場で暴れまわっている姿を見たことがない彼女から抑え切れない嫉妬が溢れ出る。曹操から発せられるそれに孫策が感じたのはこれ以上ないほどの優越感だ。自分と同じく李信という怪物に惹かれる女同士——余計な

問答など必要なく一目でわかるというものだ。

「李信殿とは十年近い付き合いになるけど、残念ながらまだ見れていないのよ。貴女が羨ましいわ、伯符殿」

曹操の台詞にピクリつと表情を動かしたのもまた孫策だ。出会って間もない自分と十年に近いと言い張る曹操。出会いの年月の長短はどうしようもなく、それは決して覆しようのない差ではないか。今度は曹操が誇らしげに胸を張り、孫策を鼻で笑う。

「ふふふ……そうね。出会って十年も経っているのに李信將軍の戦う姿一つ見られないなんて可哀相に」

「公務が忙しかったのよ。まあ、揚州の片田舎で過ごしている貴女にはわからないかもしれないけど」

「揚州はいいところよ。今度是非にでも李信將軍をお招きしたいと思っているもの」

「お生憎様。李信殿は北方の異民族へ対する抑えに必要不可欠な方なのよ。そんな地方に行かれることは決してないわ」

「南方にも蛮族の侵略が厳しい地域は幾らでもあるのよ。此方の地方の対応について中央にも是非考え直して貰うためにも李信殿の遠征は必要だと思うわ。あの方の進言ならば無下にはされないはずだし」
「……面白いわね。この曹孟徳と対峙してここまで引かない相手は初めてよ」

「それは光栄。でもその言葉そっくりそのままお返ししてあげる」

まともな話をしているように聞こえるものの、あちらこちらに微妙な棘が生えている言葉の応酬。初めて出会ったとは思えない遠慮の無さが、互いの苛烈な性格を表してもいた。会話を止めると互いに計ったように、うふふふと笑いながらも武器の柄を握る様子はもはや鬼女もかくやという姿。二人して睨みあう事十数秒、このままでは埒があかないと考えたのか曹操が鎌を持ち上げ真っ直ぐ孫策へと突きつけると一度目を瞑り——そして開いた彼女の瞳には孫策ですらも驚嘆を禁じえない冷たい光が輝いていた。

「孫伯符……貴女に問うわ。何故そこまで李信殿に執着するの？

会って間もない貴女が何故そこまで李信殿に惹かれるの？」

「――全て。私は李信將軍の全てに惹かれた。瞳も、鼻も、口も、眉も、髪も、腕も、腹も、腰も、脚も、足も、匂いも、気配も、技も、心も、そして強さも。最強とはかくあるべし、と体現したあの方の徹頭徹尾あますことなく全てが」

李信のどこに惹かれたのか。突然の曹操の問い掛けに、孫策は一寸たりとも迷いはしなかった。問われてから答えを言い放つにかかった時間が、それに対しての愛情の深さだと持論を持つ孫策だからこそ逡巡もなく言い放った。孫策の瞳に燃え滾る輝きは、今度は逆に曹操孟徳を驚かせるに値する力を秘めている。

「……繰り返すことになるけど、面白いわ。本当に面白い。孫伯符……貴女は間違いなく私の覇道の障害となる存在ね」

「覇道？ この御時勢に随分と危険な発言をするわね。自分が王となると宣言するのかしら？」

「徳を持って世を治めることを王道と呼び、知力武力を持って世を治めることを覇道と呼ぶ。尊王賤覇とはよくいったものね。でも、覇道が必ずしも王を指すものとは私は思わない。己の全てを持って己の道を貫くこと、決して曲げず折れずの道を歩むこと。それもまた一種の覇道^{わがみち}」

ならば曹操孟徳の覇道とは何か。そんなことは問われるまでもなく決まっている。李信と出会ってから言葉通り不撓不屈の決意を持って突き進んできた我が道。彼女は詩も読めば、歌も歌う。絵にも精通し、踊りさえ嗜んでいた。あらゆる芸能に秀で、その道で名を馳せる者でさえも彼女の才に頭を下げる。天地に二人としていない真正銘絶対の天才。そんな曹操が常に己を高め続けてきた。鍛え続けてきた。磨き続けてきた。決して切れることのない伸び代を、ただひたすらに研磨し続けてきた。その全ては、彼女のこれまでの努力はたった一つの目的のためだけに行われたもの。

「この曹孟徳が龍^天と見定めた李信とともに蒼天を行くこと。それが私の求める覇道である!!」

鎌を蒼天に向けて突き上げて叫ぶ彼女を中心として周囲全ての人間を圧する突風が吹いた。バタバタと衣服をはためかせ、抵抗のない

人間はその場に尻餅をつく。吹き荒ぶのは万象をひれ伏せさせる王者の風だ。霸王の器たる曹操孟徳がたった一人の男を求めるその姿は荒々しくも愛情に満ち満ちている。なんと小さな王であるのか、と笑いたければ笑うが良い。ただ一人を欲し、手に入れることができずに何が王か。それに求める一人こそが、中華に伍する存在であることを知れ。

ある種の告白に間違いないのだが、あまりにも堂々としすぎてこれを知った者は何と答えればよいのかわからずただ黙ったままだ。全てを圧倒する曹操へと一歩踏み出す人物がいた。言わずと知れた孫策伯符である。

「……凄いわね、曹孟徳。そこまでの覚悟、並大抵のものじゃない。心から尊敬するわ」

だが、譲らない。言葉にはせずとも孫策の瞳が爛々と輝き訴えていた。そして、それを受け止める曹操もまた同様だ。如何なる存在が相手でも彼女は引かない、退かない。何があるうとも己の意志を曲げずに突き進む。二人ともが絶対に己を貫く道を歩む者同士。だが、敵対していたとしても相手に対する敬意を持つことは出来る。それを両者は互いに今ここで知った。

霸王二人が互いに感嘆しているそんな折、パチパチと短く小さな拍手が鳴り響く。

「本当に凄いですね。こんな場所で愛の告白しちゃうなんて」

ぞつとするほどの冷たい色を乗せて飛んできた言葉。反射的に曹操と孫策が声の方へと振り向いた。ニコニコと敵意など微塵も浮かべることなく笑っている少女が一人。背後に関羽雲長を従えて穩やかに、にこやかに笑顔を見せる劉備玄徳ここに在る。

何だこの女は——奇しくも両者が揃って頭に思い浮かんだのはその疑問。曹操と孫策の視界に映るは、夥しい数の何か。想い、願い、希望。聞こえはよいそれらが真っ黒に染め上げられ渦巻き、背負っている劉備玄徳を後押ししている。頼む、頼みます。頼むぞ、頼むよ、お願いだ、任せた。託す。皆が口々に言っている。それを一身に受ける劉備玄徳はそれでも笑っていた。仲間が死ぬのは耐え難い。辛い。

苦しい。涙が出る。幾度も吐いた。夜も眠れぬ悪夢に襲われている。だが、それも慣れた。枯れてしまった。人の死を、想いを継ぐ事に草臥れる頃には早く死にたいと思えてくる。だが、死ねない。死ぬことは許されない。劉備玄徳の為に死んでいった多くの者達の想いが、願いがこの双肩に託されているからだ。力を否定するつもりはない。そして言葉で止めることもまた否定するつもりもない。だが、如何なる手段方法を使ってもこの世から戦を無くしてみせる。凄絶な覚悟、それが今の劉備を構成する全てであった。

「私は劉備。字は玄徳——孟徳殿。伯符殿。良かったら皆でお話しませんか？」

敵愾心を僅かたりとも見せない劉備ではあるが、この女とは不倶戴天の敵となるであろう。そんな直感が曹操と孫策の頭に囁かれた。

第27話：黄巾の乱終結。そして……

最大の勢力を誇った冀州黄巾党は、盧植將軍率いる官軍と互角の争いを続けていた。元々が堅実な戦法を好む盧植は大敗もしなければ大勝もしない。今回に限っては、それが吉となる結果となっている。各地の反乱を鎮めた官軍が次々と合流してきたからだ。特に豫州に派遣されていた朱儁と皇甫嵩の軍が冀州へと来たのは例えかなりの兵数を削られたとはいえ大きな戦力増強となっている。官軍の兵は既に十五万を超え、さらに膨れ上がっている最中で、その中には当然李信軍も含まれていた。各地から義勇軍まで参加する一方——冀州黄巾賊は逆に次々と人が減って行っていた。元々が純粋な信徒だけではなく、盗賊や野盗、略奪などの良い思いがしたいからといった邪な考えで参加した者達は形勢が不利だと感じれば即座に逃亡していったからだ。とはいっても元々の黄巾党の数は凄まじく、減ったといっても彼らもまた各地方より集ってきた敗残兵を吸収し官軍と同等の数を保っていた。もつともこれまで李信軍に叩きのめされた兵達も多く、そういった人間は勝ち目がないのでは、と薄々感じてはいたが、それでも残った彼らの目は穏やかですらあった。首魁となつた張挙はそれに驚きと満足を覚え、信徒達の視線を浴びながら静かに領いた。

冀州黄巾賊と官軍が相見える平原にて、遂に両者が最後の決戦をすべく対峙する。

官軍。中央——盧植將軍兵八万。及び李信軍一万。劉備玄德が義勇軍五百。左翼朱儁率いる兵四万。及び孫堅軍二千。右翼皇甫嵩率いる兵四万。及び曹操軍一千。

黄巾賊。中央——張挙率いる兵六万。左翼韓忠率いる兵四万。右翼孫夏率いる兵四万。

後世に言い伝えられる黄巾の乱。その最後が近づいていることをこの場にいる三十万近い人間は自ずと理解し始めた。冀州黄巾指導者張挙、今は張角と名乗っている彼は馬を軍の前へと走らせると、真つ直ぐと官軍を見据える。彼が放つ意気は、何も言葉を発していないにも関わらず官軍の兵士達の心を呑もうとしていた。かつては張純とともに十万の反乱兵を纏め上げた手腕。義兄の影に隠れていた張挙だったが、この度の黄巾党を指導した経験が、彼に従っている八万の信徒の想いが、彼を英傑級の高みへと昇らせていた。

「我こそが、大賢良師張角であるっ!!」

一瞬、官軍の馬がのけぞった。悲鳴のようななきがあたり、十数万の官軍を驚かせる気迫と気合。

「聞け、官軍ども!! 漢王朝が腐れ果てたのは一体誰の手によってか!! 国を腐敗させた者達の走狗となって我ら黄巾党と戦おうとする愚かさを知れ!!」

ざわめく官軍。それほどまでに張挙の声は距離を越え、彼ら皆の耳に届いていたからだ。

「皇帝とは天の意志を代行する者である!! しかし見るがいい!! 皇帝の血族というだけで外戚が権力を持ち!! 後宮を取り仕切る宦官どもに特権が与えられた!! 皇帝にのみ与えられるそれを、天の意志を捻じ曲げ自らの欲とした奴らの専横実^じに許しがたし!!」

呑まれる。呑み込む。官軍の一兵卒の心にまで訴えかける張挙の言葉は、悲哀と怒りに満ち溢れていた。

「政道の乱れは、天の意志の乱れである!! それは天の怒りとなって、病は蔓延し大地の実りを失わせた!! 即ちこれは天が漢王朝を見放したことに他ならない!! これより我らは己の心胆をぶつけよう!! 世を変えるには血と屍を用いるしかない!! されどその先には必ずや黄天の世が待っているよう!!」

「蒼天すでに死す!! 黄天まさに立つべし!!」

対して黄巾賊にはこれ以上内ほどの鼓舞となり、士気をあげてい

く。

一方、盧植軍の片隅にいる劉備玄徳は、笑顔のままぽつりと呟いた。下らない、と。彼女の傍らに控えていた関羽もまた頷く。そして、関羽と真逆の位置にいたもう一人の少女も大きく頷いた。少女という言葉よりもなお体は小さく幼い。ただし自分の身長を超える巨大な蛇矛を片手に、どこか退屈そうな表情で張拳の宣誓を聴いている。

「言っていることは立派。でも……鈴々の心には響かないのだ」

「そうだな、翼徳。奴のあの言葉は本心であろう。だが、人とは天の意志でのみ人生を左右されるものではない。人は地に根を張って生きるものだ」

蛇矛を持って吐き捨てるような発言をした少女の名は張飛翼徳——真名は鈴々。劉備を長姉とし、次女の関羽、三女の張飛という義理の三姉妹のうちの一人。どこか悲しげに語る関羽に、張飛は真面目なのだ、と本心から呆れていた。

「よく吼える!! 暴徒を操り人々の生活を脅かすことに何の大義があるというのか!!」

「国を憂いている我らが心、何故分からぬ!!」

言われっぱなしの官軍ではない。四大将のうちの一人、盧植が声を張り上げ張拳へと反論するも、それ以上の怒声が彼から帰ってきた。張拳の言に官軍が呑まれかけようとしたその時、二人の弁論を中断させる激音が響き渡ると同時に官軍、黄巾統ともに目を瞑らせる突風が巻き起こる。それは、李信が地面へと大矛を叩きつけた際に発生した音であり、衝撃の波でもあった。李信が大矛を天へとかざせば、配下の兵が鬨の咆哮をあげる。あまりの音量と熱に、呑まれていた官軍の兵全てが正気を取り戻し、釣られる様に叫び始めた。十数万にも及ぶ怒声は、離れた黄巾賊をも呑みこみ竦み上げさせる。

「お前が天意を語るかつ!! それを許されるのはお前が先程言ったように、皇帝だけだ!! それを騙りし罪は重いぞ、張角!!」

李信の声が轟き、官軍の士気を最大限にまで高め上げた。全ての官軍が認める大將軍李信の大矛が天から振り下ろされ黄巾賊へと向けられると、同時に檄走を開始する。続くは、李信直属兵一万。

「全軍——突撃!!」

声にならない喊声を響かせて、残りの三將軍の軍勢もまた黄巾賊へ呐喊した。頭の冷静な部分では、三人が三人とも、大戦開始後の策も何も無い突撃に止めるべきだと告げては来るものの、それを振り切る。少なくとも戦場を経験してきた彼女達の身、ここが正念場だと直感が確かに告げていた。ここでひよる方が、逆に危険だと理解した彼女達も各々の敵へと指揮を飛ばす。

この大戦における最初の交差は、言うまでもなく李信軍と張拳率いる中央黄巾賊であった。盾と槍を構え隙間なく陣形を形作っていたそこに、大矛の一振りで風穴をあげ侵入すると後は李信軍による破滅の進撃の良的となる。飛將軍を先頭とした漢王朝最強の軍がまるで蟻を踏み潰すかのように行進する。左右を守るように、華雄と高順が。中央に胡軫が位置取り、細かく指令を出しながら、一つの巨大な生き物となって敵兵を食い荒らしていく。

「……なるほど。張曼成の情報通りだ。これでは策も何もあつたものではない」

中央の本陣へと引き返した張拳が、李信軍の突撃を見ながら呆れにも似た声を漏らした。義兄である張純を討たれた時から薄々わかつていたことだが、あれは人の枠組みを外れた怪物の集団。所詮は農民などで構成された黄巾党ではとめることなど不可能であろう。だが、事前に多くの情報を集めていたからこそ打てる策もある。今戦っている官軍でもっとも危険なのは間違いない李信軍だ。まずはこれをなんとかしなければ戦にもならない。李信達が中央の軍勢の半ばまで突き進んだ時の事であった。韓忠と孫夏の指示により、左右両軍の二万がそれぞれ前方から侵攻してくる官軍へと突撃を敢行する。そして、残りの二万ずつが、中央へと突如として進路を変更し、さらにその二万の内の半分ずつが、中央から攻め込んできている盧植軍へと時間稼ぎの為に立ち塞がった。残された両翼合計二万の兵が、中央の軍へと合流し、李信軍が空けた穴を塞ぐばかりか背後から彼らへと襲い掛かったのである。如何に強力な李信軍の兵士といえど、完全な無

防備状態となっている背後からの強襲は防ぎようもなく、この奇襲は子供と大人程の差がある力量を埋めるに至った。まずは李信軍の兵士を削ること。それを第一目標として張拳の策が唸りをあげる――

が、その程度で戦乱多いあの時代を生き抜いてきた李信を凌駕することなどできようか。退路を塞いだ両翼の兵士達は、逆に自分達の後方から雷光のように攻め入ってきた騎馬隊に消し飛ばされたのだ。李信からの命により、ともに突撃をせずに盧植軍と同時に動き出していた呂布奉先率いる超精鋭が、中央の軍を抑えに出てきた両翼の兵士が合流するよりもはやく空白地帯となった真ん中を突っ切って背後に攻勢を仕掛けてきたことに誰が気づけたであろうか。李信軍の背後から攻撃をする予定だった両翼の兵士達は一騎当千の騎馬隊により、圧倒的な蹂躪を受け混乱の極みに達した。呆然と、一瞬で自分の策が瓦解した光景を見ていた張拳を誰が責められというのか。

これはもしもの話だが、張拳が両翼の将に、兵士達にこの策のことを伝えていかなかったならば、如何に李信といえど絡め取られた可能性はあったかもしれない。そもそも李信とは理論的な計算で策を見破っているわけではないからだ。敵軍の配置、比重、兵士の表情視線、気配に士気。自分の経験に、直感。とにかく戦場におけるあらゆる要素を元に、戦況を敏感に感じ取る。例えそれがほんの僅かな策略の匂いでも、だ。理不尽の塊――それが本能型の究極である李信という存在であった。故に、大多数の兵士に何も知らせずにもしも張拳の指示一つでこれだけの策が実行できたのなら、李信であつても反応はおくれたであろう。だが、そもそも司令官の期待に完璧に応えられる部隊があるだろうか。ましてや黄巾の者達はこれまで農民であつたものが大多数。そんな行動を取れるはずもない。結局のところ、張拳には勝ち目など最初からなかったという答えに帰結する。

狂信の叫びは絶え間なく聞こえはすれど、それをも突き破る純粹な力の突破。響くのは信徒の断末魔の声。中には得物を捨てて逃げるもの者もいる。だが、諦めずに干戈を敵にぶつけようとする勇者もいた。そんな狂乱渦巻く黄巾党を抜け、ほどなくして李信率いる軍団は

本陣へと迫った。張拳にとっては長き戦いでもあり、短い戦いでもあった。全ては幻のように消え去っていく。彼にとっては、ある目的をもって起こした争いであったが、その答えを問うものを自分の前へと導いてくれた天意に感謝の気持ちを送りたくもなかった。

血風のなか、張拳は一際強い馬蹄の音を聴く。彼の視線の先、そこには果たして乱世そのものを体現している怪物がいた。その怪物が放つ重圧はあまりにも重く深く、黒い色を為している。異様にして異常に濃い李信の気配は、人という存在を逸脱した正真正銘の悪鬼羅刹に見えた。

「李信——!!」

張拳は持っていた槍を握りなおすと、雄叫びを上げた。敗れて以来、義兄を討たれて以来、彼のことを考えない日はなかった。思わぬ日はなかった。ただ李信を討つためだけに擦り切れた心を磨き続けた張拳は、槍を構え最大にして最強の敵へと馬首を向ける。李信もまた張拳の姿を確認し、そちらに向けて愛馬を駆けさせた。

「李信よ!! 冥府への花道、お前の首を餞として貰って行くぞ!!」
「俺の首、そう易々と持っていけると思うなよ」

両者の大矛と槍が激突し、凄まじい音が響き渡った。耳を劈く金属音に、戦場にいた兵士達が渋面を作る。一撃。たった一合の交差にて、張拳は己の愛槍から伝わってきた李信の力量に感動すら覚えた。これが義兄張純を討った男の力。全てを押し潰す將軍としての格。それに羨望すら覚える。なんと良き戦士か。そして、その若さや。未来を託すには十分な器。張純が撤退する寸前に語ったという、ある言葉。何故あと二十年早く現れてくれなかったのか。お前さえいればこの国を救えたかもしれないというのに——今ならば義兄の気持ちもわかる。何故ならば、一合の手合わせで同様の想いを抱いたからだ。だが、引かない、退けない。黄巾党を率いた者としての責任が彼の双肩には乗っている。放たれる神速の三連突。突く速さ、引く早さ。どちらともが言葉通りの神速である。だが、それさえも李信にとっては見戯に過ぎず、大矛の強烈な振り下ろしが槍を弾き飛ばす。

「李信!! 李信將軍よ!! 見事、見事だ!! だが我ら黄巾を潰したと

ところで如何する!! もはや漢王朝は風前の灯!! お前にこの国が救えるというのか!!」

次の一合は防ぎきれない。そんな判断を下した張拳は、李信に向かって聞いたのだ。この国を託すに値する男かどうか。その答えを聞いたかった。

「馬鹿か、あんたは。俺が漢を救う? 出来るわけがないだろう」

張拳の血を吐く想いを李信は、否定する。所詮この男は戦にしか興味がないのか。託すには値しない男なのか。そんな想いがくるくと張拳の胸中を支配した。

「俺一人のできるなら苦労はないだろうが、その為に今洛陽で皆が駆け回っている!!」

お前達黄巾は否定しかしてこなかった。破壊しか行わなかった。否定も破壊もすればよい。だが、何故お前たちは築かなかったのか。創らなかつたのか。十万、数十万も人の想いを受け継ぎながら、何故新しく何かを生み出そうとしなかつたのか。国を壊したいと願った者は多くいた。だが、壊したくないと想った人間もまた数多くいる。国の為に立ち上がった義勇兵のなんと多いことか。中には金の為に来た者もいるだろうが、純粋な救国の為に立ち上がった勇者も大勢いたのだ。皮肉な話だ。壊したい者も守りたい者も漢と言う国の為に命を賭けて戦つたのだ。それは戦場だけにはとどまらない。この国を立て直そうと奔走している文官も数え切れない。この国はきっと皇帝劉弁と彼らの手によって、名前の残らない小さな英雄達によって立て直されるであろう。李信の熱い想いが戦場でなお溢れ、ぶわりつと張拳の身体を強かに打ち据えた。その強い念に、ああ……と短く嘆息をするのは張拳その人。

「……兄者、申し訳ありません」

やはり間違つていたのは我らの方であつた。長い間漢王朝の腐敗を見届けていたが故に目が曇っていたようだ。今を正しく見れていなかったのは、自分たちのほうであつた。後の世で、きっと我らは非道の者として名を残すであろう。だが、それもまたよし。

「李信よ!! 天下無双の飛將軍よ!! お前に、お前達に漢王朝の行く

末を託すぞ!!」

張拳は笑った。義兄が死んでから決して浮かべることのなかった心からの笑みを咲かせ、李信へと最後の攻勢を仕掛けた。誇らしさが胸をよぎる。ともに中華を駆け巡った三兄弟。そして、自分についてきてくれた多くの民。長き人生の最後でようやく張拳は救いを得たように感じた。己を討つ者、それが義兄と同じ男であることに、奇妙な縁と満足感を胸に抱き——冀州黄巾指導者張角、李信將軍の手によつて討ち取られる。



黄巾賊の反乱を遂に抑えた官軍は、当日の夜勝利の酒宴を行っていた。それぞれの陣では篝火が焚かれ、ようやく終わった長い戦の日々からの解放で皆が破目をはずして大騒ぎをしている。ひたすらに食べる者もいれば、酒を飲む者もいる。疲れて身体を横にしている者もいれば、踊っている者もいる。そんな中、戦が終われば官軍では最弱の勢力にすぎない義勇軍を率いる劉備は自分の小さな陣幕にて一人の少女と向かい合っていた。

「どうして……なんでそんなことを言うの、雛里ちゃん?!」

いや、劉備と少女——龐統士元だけではない。劉備の左右には関羽と張飛が控え、平伏している龐統へと涙ながらに訴えかける諸葛亮孔明もいた。悲哀に満ちた声をかけられながら、龐統の気配は微塵も

揺らぐことはない。何故ならば既に彼女は覚悟を決めていたからだ。だが、騒いでいるのは孔明だけで、劉備たち三姉妹は慌てる素振りは一切見せていない。あの龐統士元が辞するとうのの。ニコニコと相変わらぬ笑顔を見せている劉備へと、孔明が食って掛かる。

「桃香様!! 何故、引き止めて下さらないのですか!!」

「うーん……何時かこうなることはわかっていたから、かな?」

劉備の台詞に、驚かされたのは孔明だ。一体この主君は何を言っているのか。それにピクリつと肩を振るわせたのは龐統である。ほぼ完璧な臣下を演じてきた自信はあるが、見破られていた事実には内心で感嘆の声を漏らす。平伏していた顔をあげ、関羽と張飛を見るも二人ともが劉備と同じく驚いている様子は見られない。関羽は恐らく主である劉備が動じていない故に、感情を見せていないのだろう。一方の張飛は野生の勘とでもいうべきモノで薄々はこうなることを悟っていた。自分や関羽、孔明のように劉備に命を賭して仕えようと言う熱量を感じていなかったからだ。

「うん、いいよ。それで、士元ちゃんは今からどうするか決めているのかな?」

「それは……」

あつさりと龐統の辞意を認めた劉備が、次なる主は決まっているのかと問い掛ける。それに一瞬言いよどむ龐統士元だったが、それを見た劉備の口元が緩む。そして、笑みはそのまま小さく呟いた。当ててあげようかと。

「李信將軍のところに行くのかな?」

「——っ!?!」

驚愕。ただそれだけだ。内心の驚きを全て前面にだして、まじまじと劉備を見つめる龐統に、嬌笑を浮かべる今先程までの主は平然としていた。

「何故、わかったのですか?」

「やっぱり正解? ふふ、実は勘だよ」

笑顔の劉備は、万人を惹き付け引き寄せる。まるで夜に燃える大炎が如く。

「……勘？ そんなあやふやなもので……？」

「うん。でも限りなく確信に近い勘。だって、最初に会ったときから匂ったもの」

「に、匂う？」

反射的に龐統は自分の服を鼻に寄せ、クンッと一度嗅ぐものの、生憎と特殊な匂いなど一切しない。

「ああ、ごめんね。違う違う。士元ちゃんの匂いじゃないよ。李信將軍の匂いがしただけ」

それこそ、何を言っている、である。理解不能の答えを発する劉備に、疑問を浮かべるのは孔明だ。龐統の過去については聞いたことがあり、李信に命を救われたということも知っている。だが、それは数年以上も前の話。それ以来会っていないというのに、李信の匂いも何もあつたものではないはずだ。

「……玄德様は、李信將軍にお会いしたことが？」

龐統の疑念に、初めて劉備は表情を歪めた。常に笑顔を振りまいている彼女にしては実に珍しい。いや、両軍師が仕えてから彼女の笑顔が崩れたのは初めてのことだ。

「うん、あるよ。二年以上前に起きた張純の乱。そこで私は李信將軍に出会った」

何も知らなかった自分。何も知ろうとしなかった自分。戦争を否定した自分。力を拒絶していた自分。人殺しと忌み嫌った自分。物事を一つの角度でしか見れなかった自分。

「昔の私を、粉々に砕いた人。ぐちゃぐちゃに汚した人」

とても忌々しくて、大嫌いで、憎い人。恨み、憎しみ、嫉妬、恐怖、不満、無念に、嫌悪。軽蔑し、罪悪を持ち、劣等感を抱き、怨恨、苦悩。あらゆる負の感情を李信に向けている。この世界で間違いなく、劉備がもつとも相容れない唯一の男。

でも——愛おしい人。

世界で一番憎く想いながらも、尊敬し、憧憬し、感謝を抱いている。劉備の道を指し示した李信に相反する正と負の気持ちで心を二つに割っていた。散っていく仲間の想いを、希望を、無念を、願いを、ひたすらに拾い集めて双肩に乗せ、磨耗し砕け落ちる自らの心をかき集めて貼り付ける。人として耐えられない行為に身を置き続けられるのも、きつと李信との対話があつたからだ。心の奥底で、それが劉備の心を守護する最後の抛り所として残っていた。

「土元ちゃん……李信將軍に、宜しくね」

龐統へと近づき耳元で囁く劉備の言葉は、脳髄をとろかすほどに甘く恐ろしい。辛うじて領いた龐統は、この場から脱兎の勢いで逃げ出した。引き止める孔明の声など耳に届かず、ただひたすらに李信がいる方角へと駆け逃げる。背後を振り返れば、劉備の手が自分の首にかかっているのではと幻想させるほどの恐怖が背に張り付いていた。

「李、信様!! あの人は、劉玄德は——間違いなく貴方様の怨敵となる人です!!」

彼女の危険性を、恐ろしさに気づいている者は果たして何人いるのだろうか。自分がそれを李信へと伝えなければならぬ。危険だ。彼女は純粹に危険な存在だ。放置しておけば必ずや李信にとっての最悪となるであろう。劉備へ対する恐怖を胸に抱き、龐統はひたすらに夜の闇のなかを足をもつれさせながら駆けて行った。

洛陽へと凱旋した討伐軍は、民からの凄まじい歓声にて迎えられた。この洛陽において、民の生活は向上し日々の暮らしが以前に比べて遙かに向上している。この度の官軍は、誰もが英雄として褒め称えられる歓迎振りであった。皇甫嵩、朱儁、盧植などの名が呼ばれる中、やはりもつとも民からの声があがったのが李信であった。

「李將軍!! 李將軍!!」「李信將軍!! 大將軍李信様ああああ!!」「李信様!! 御帰還御喜び申し上げます!!」「飛將軍!! 天下無双おおおお!!」「万夫不当の李信將軍!!」

凄まじい人気だな。思わず漏らした華雄は、津波が如く押し寄せる歓喜の声に耳を反射的に押さえていた。近くにいる相手にも届かないほどに熱を上げている洛陽の百万の民。無論その全てがここに集まっているわけではないだろうが、それに近い膨大な人数が凱旋してきた彼らを迎え入れていた。もつとも、李信のみならず、呂布や華雄、高順なども名將として名高く、彼女達の名もおおいに叫ばれている。そういった熱烈な声を受けながら、李信達は洛陽の城へとゆつくりと歩を進め、門を潜り抜けた途端、変わる雰囲気。

そこを起点として突如、神聖な空気が周囲全てを満たし始める。これはなんだ、と息を呑む全ての官軍。珍しくも驚いた表情の李信の視線の先に——皇女劉弁が馬上にてゆつくりと此方へと歩み寄ってくる姿があった。あの彼女が宮中からでることはとても珍しいことだが、歩きたびに散じる尋常ではない気配に誰もが息を呑み見惚れて

しまった。此度の黄巾党との戦では多くの英傑が活躍したが、これほどまでに突き抜けた存在には誰もがお目にかかつてはいなかったからだ。

「帰ったか、信。お前の無事、万感の思いである」

「有り難きお言葉。感謝致します、弁殿下」

跪き、頭をたれる李信の語る弁殿下。その意味を悟った周囲の全ての官軍兵士が李信を做って膝をつく。それは無理の無い話だ。宮中に籠っている彼女の姿を知ることが出来る者などそうはいない。次代の皇帝の姿に、皆が皆期待に心身を震わせる。たった一目で理解出来る存在としての格の違い。彼女ならば漢という国を良き方向へと立て直せるのではないかと漠然とした予感を抱くことが出来たからだ。流石の李信も人目がこれだけある場所で普段通りの対応をするのはまずいと考えたのか随分と丁寧なそれに、劉弁はたまにはこういう李信も可愛いなと苦笑を漏らす。しかし、と跪きながら李信は疑問を覚えた。何故彼女がこんな場所に出てきているのか。単純に自分を迎える為に来たのかとも思ったが、次の瞬間にはその疑問は氷解することとなった。

「信よ。此度は大義であった。北方での功績も踏まえたくうえで、特別にお前に褒賞を取らす」

ざわりつと揺れる官軍兵士であったが、それに気がつかないほどに李信はある方向に視線が釘付けとなっていた。劉弁の後方から三人がかりである巨大な矛を運んできている。それに、その矛を見て李信の心がざわめいた。

「お気をつけください、將軍。我ら三人で持ち上げるのが精一杯なのですから」

運んできた兵士の言葉も耳に入らない李信は、目の前まで運ばれたその矛を手にとると——片手で持ち上げ空に向かって一閃。ぶわりつと空気を引き裂く衝撃波が巻き起こる。ただの偶然ではあろうが、蒼天に浮かんでいた雲が真っ二つに両断されて彼方へと流されていく。それを愕然と見ている兵士達は、ただただ圧巻。兵士達が運んできたときとは異なり、まるで意志を持っているかのようにその大矛

が煌き、発光を繰り返している。

「はははっ……よく見つけたな、煌」

「苦労はしたがな。王允が先祖代々受け継いでいたらしいぞ。実際に血の繋がりがあるかわからんがな」

「あのおっさんのところに？ 今度あつたら感謝しとくか」

「ああ。そうしてくれ。しかし、やはりお前にはそれが良く似合う」

王騎將軍の大矛。二人だけにしかわからない。二人だけにしか理解できない。二人だけが知っていればよい思い出。目を細め懐かしむ劉弁に、手に持った矛を肩に乗せ、口角を吊り上げた李信が珍しくも笑い声をあげた。その声は遥かな蒼天の彼方にまで響き渡ったという。



巨大な、底深い穴だらけの荒野。異民族が住まう漢の北方にあるとは思えない異界を思わせる平原。その穴の淵には数千の人々がいた。カタカタと皆が恐怖で震え、中には小便を漏らしている者達もいる。老若男女問わず、縄で縛られた彼ら彼女らは恐怖で悲鳴をそれぞれがあげている。中には必死になって命乞いをする者も多く、小さな子供

達すらも助けを呼んでいた。穴の淵に立たされたされている彼らの眼前の丘には一人の少女がいる。楽しげに、鼻歌まで歌って、恐怖で引き攣っている人々を見下ろしていた。

その姿や、こんな状態ですら気を抜けば見とれてしまう傾国の美少女。髪は烏の濡れ羽色。肩まで伸びた艶やかな長い髪は一本一本が絹糸が如く細やか繊細。鬨と比べても女性の髪色はなお深い、それは奈落を連想させる。芙蓉の顔、柳の眉。黒曜石のような煌きを灯す眼が、悲嘆にくれる人々を睥睨していた。無垢なる雪原に等しい白い肌。少年少女から年寄りまであらゆる人を魅了し恐怖させる十四か五の歳を迎えたか青い果実は、楚々としながらも魔性を匂わせる矛盾を孕んだ相反する美。

「お、おのれえええ!! 檀石槐!! これが降伏した人間に対する仕打ちかあ!! この非道必ずや貴様は歴史に悪名を残すぞ!!」

少女へ対する畏れを振り切り、縄で縛られた老人が一人怒りの声を上げる。それを皮切りに、数千の人々が丘の上で此方を見下ろしている少女へと怒号を浴びせていった。

「その通りだ!! まともじゃねえ!! こんなこと、天が絶対にゆるさぬぞお!!」

「呪ってやる!! 絶対に呪ってやる!! 例え死んだとしてもお前を絶対に呪ってやる!!」

「絶対に許さんぞ!! 檀石槐!! 我らが怒りは貴様の生を決して許さぬ!!」

「御慈悲をおお!! せ、せめて子供達だけでも!!」

「助け、助けて下され!! お願いだあ!! 頼みます!! 檀石槐様あ!!」

喧々囂々。怒り、憎しみ、恨み、あらゆる負の感情が乱れ飛ぶそこで、数千の民の想いを一身に受けている少女——檀石槐は笑みを零した。天女もかくやと、今の今まで絶叫していた人々がピタリつと騒ぐのを止めるほどの万人を魅了する微笑。

「やりなさい」

檀石槐の合図とともに、縄を持っていた彼女の配下達が縛られていた人々を容赦なく、躊躇いなく穴へと突き落とした。次々と、穴の底

へと落とされ詰め上がり、行く肉の山。衝撃に痛みの声をあげる彼らへと、穴の上から兵士達が土をかぶせていく。

「や、やめろおおおお!!」

「やめてくれえ!! たのむう!! たすけてえええ!!」

「いやだあああああ!! こんな嫌だあああああ!!」

泣き喚き、助けを呼ぶ彼らの悲鳴は悲哀に満ちていた。だが、恐ろしいことに土をかぶせていく兵士達はそれに一切心を揺さぶられた様子もなく、淡々と事務的に己の仕事をこなしていた。これほどの非道、眉一つ動かさずにこなす彼らはまさに氷の兵士。血が通っていないと言われても納得がいつてしまう異質異端な怪物達であった。

そんな地獄に勝るとも劣らずの最悪を、機嫌よさげに見ている檀石槐の背後にて、数千にも及ぶ騎馬兵が控えていたが、その中の一人。檀石槐に年近い一人の少年が眉を顰めていた。これほどの暴虐非道、果たして許していいものだろうか。心が悲鳴をあげている。いくら檀石槐に従わなかったとはいえ同じ鮮卑族。このまま見捨てて自分はこれからの人生を誇って生きていけるのか。

「……あ、兄上。せめて子供だけでも救ってやることはできないものか」

傍にいた騎馬隊の隊長である兄へと、子供の延命を口にだした瞬間の出来事であった。首が飛んだ——せめて子供だけでもと口にだした弟の首を斬ったのは実の兄である男であった。首を斬られた少年はしばらく馬上にとどまっていたが、やがて地面へと音を立てて崩れ落ちた。パシャンと自身が生み出した血の海へと沈み込んだ異様な光景。それを見ていながら、騎馬隊の兵士達の心の水面は風一つ浮かぶこともなく、誰一人として動揺したものはいなかった。騎馬隊の隊長である兄は、馬から降りると檀石槐のもとへと歩いて行き跪くと自身の頭を彼女へと差し出す。

「御前を騒がした罪。この首をもつて償いとさせて頂きます」

首を刎ねられたとしても後悔はなく、それさえ忠義である。無言でそれを指し示す彼に、檀石槐は一瞥することもなく、眼下で行われている無慈悲の光景を見下ろしたままだ。

「お前の首なんていらぬから。死ぬのなら戦つて敵を殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して——死になさい」

「……はっ」

完全な忠誠を向けられてなお一切の興味を持たない檀石槐は、やがて目の前の光景にも飽きてしまったのか、嘆息を漏らしつつ蒼天を見上げた。

「……思ったよりつまらなかつたかなあ。やっぱり白起を見習つて四十万くらい生き埋めにしないと駄目だったかも」

失敗失敗とぼやく檀石槐は埋もれてゆく眼下の惨劇に背を向けて、地に置いてあつた自分の相棒である巨大な矛を片手で器用に回しながら騎馬隊の下まで戻つていく途中、騎馬隊の内より精悍な中年の男が割つて出てくると檀石槐と相對する。

「まったく。貴様は我が娘とは思えぬな。だが、それもまたよし」

「ああ。父上ですか。何か用でも？」

「娘の雄姿を見物にきたのよ。いやはや、如何に降伏を受け入れなかつたとはいへここまでのことをしでかすとはな」

「出来ればもう少し生き残つてくれたら面白かつたんですけどね」

戦場にて戦つた男たちは皆殺しにしてしまいましたから。平然と言ひ切る檀石槐に、筋骨隆々な並々ならぬ武人——男の名は投鹿候。檀石槐の父であり、勇名を馳せている鮮卑族の勇者でもある彼は大声で笑つた。先程言葉にした通り、我が娘ながら自分の想像を絶する怪物ぶりに感心させられる一方だ。あまりにも愉快だったためだろうか。投鹿候の心に僅かな綻びが出来てしまったことに当の本人が気づくことはなかつた。

「恐ろしい奴よな——麗よ」

ギシリつと空気が軋んだ。その場に居合わせた全ての騎馬隊の兵士が初めて揺らいだ。彼ら彼女らの視線の先、交わるそこで檀石槐が物言わぬ咆哮を全身から発している。先程埋め殺した数千の呪いの言葉など足元にも及ばぬ怨嗟が質量を帯び、視界に映る全ての世界を軋ませ、軋む空気は暗い色を帯びこの場にいる全ての人間の視界に薄い暗幕を垂らすに至つた。投鹿候は自分が口に出したそれに、しまつ

たと思う間もなく稲光が迸り、携えていた大矛がまるで暗雲を切り裂くかのように空間を渡る。投鹿候が何かを言う間もなく、その大矛が彼の頭から股下までを一刀両断に断ち切った。まるで何かの劇を見ているのではと勘違いするほどに滑稽に、あっけなく投鹿候だった二つに断たれた肉体が左右にごろんと転がり、血の池が出来上がった。そこに冷たい視線を向ける檀石槐——真名は麗。実の父を斬り捨てて置きながら、後悔を一切見せない彼女は、もはや物言わぬ軀となった父を鼻で笑う。

「駄目ですよ、父上。真名を相手の許可なしに呼んでは。殺されても文句は言えないですよね」

くすくす、と頭がおかしくなる笑みを零す檀石槐のそれは、冥府より聞こえる餓鬼の合唱にも似た恐ろしさを感じさせる。父殺しの光景を目の当たりにしながら、それでも鮮卑の兵たちの忠誠に一切の變化は見られなかった。完全に逸脱したこの少女と敵対したくない。この少女ならば自分達をかつてない世界に連れて行ってくれる。そんな相反する想いを胸に抱き、彼らは檀石槐のための尖兵としてここにあるのだ。

そんな配下の忠誠願望を一切合財気にも留めず、檀石槐は蒼天を仰ぐ。それだけで空にあった雲が彼女を怖れたかのように散っていく。彼女から漏れ出るのは、李信にも匹敵する破滅的で壊滅的であろうようなほかに外れに外れた悪夢の圧力。

「ああ、信兄様。愛しい愛しい私の、麗の、信兄様。貴方の活躍、この地にまで聞き及んでおります」

遙か南へと視線を向けて、奈落の底にて佇む彼女はただ笑う。

「ああ。ああ。ああ——おいたわしや、信兄様。今世でも国に縛られているんですね。愛しい私に会いに来れないなんて辛いですよね。苦しいですよね」

あははは、と狂ったように檀石槐は笑う。前世にて始皇帝の娘として生を受け、李信に命を救われて以来、彼に憧れた。彼に恋焦がれた。彼に愛情を抱いた。それが報われることはなかったが、別に構わない。李信を愛している——それが彼女の絶対にして揺らぐことの

ない唯一の柱。

「待つていてください、信兄様。貴方の麗が、遠くない未来に貴方に会いに行きます。貴方の愛する私が、麗が馳せ参じましょう。漢という国を滅ぼせる力を引き連れて」

彼女の下に集った異民族は無論ここにいる数千の騎馬兵だけではない。既に鮮卑族のみならず匈奴と羯のほぼ全てを支配下に置いている。僅か数年も経たずして鮮卑の領土をかつての匈奴に匹敵するほどの版図を手中におさめていた。だが、実際のところ麗としては、漢と戦い勝っても負けてもどちらでもよいのだ。勝てば信とともに新たな国を創り暮らせばよい。その時は後秦とでも名づけるべきか。いや、あの始皇帝を思い起こさせる名は止めるべきだ。国の名前はその時に決めればよい。負けたとしても、自分がそこらの有象無象に負けるわけもない。ならば自分を殺すのはきつと李信になるであろう。「ああ……なんて甘美な!!」

李信に殺されると考えただけで天にも上る絶頂が背筋を駆け上っていく。李信を説き伏せ、叩き伏せる。それが彼を手に入れる試練となるに違いない。相死相愛——愛しているが故に、きつと信兄様は私を試す。本当に自分を手に入れるに相応しい力を持っているのか、と。

麗のそれはどこまでも都合が良い自分勝手な狂った想い。だが、それ故に強い。止められない。幾ら拒絶されようが彼女には届かない。ある意味李信達と同等の、決して朽ちず曲がらず折れずの不撓不屈にして不撓不滅の狂気を撒き散らす。

「兄様、兄様、兄様……信兄様!! この麗が、信兄様を縛り付ける全てを滅ぼしますね!! 焼き尽くしましょう!! 森羅万象あまねく全てを——灰燼と帰してみせます!!」

人として極限にまで振り切った怪物が、始皇帝の全ての才覚を受け継いで、大將軍李信の全ての武を受け継いだ極点に達した人修羅が——漢に知られぬまま極大化し始めた。

「……ちっ」

狂気に染まった天真爛漫な笑顔を浮かべていた麗が、突然に能面のような無表情となり舌打ちをする。忌々しい、俱に天を頂かない宿怨の敵ともいえる相手が、天地を揺らす激震を起こして到来を告げてきた。それは大地の怒りにも似た大震で、数千の人を生き埋めにしたがらも眉一つ動かさなかった檀石槐の騎馬兵すらも緊張させる絶望の訪れでもある。草原の彼方より此方に来るは北方を領地とする騎馬民族の集団。それは檀石槐と変わらない。ただそれを従える人間は別だということだ。轟々と、対するものは全てを燃やすと言わんばかりの煉獄の炎めいた強大な気配を滲ませた一万の騎馬兵。檀石槐が配下の氷の兵団とは正反対の、苛烈で激烈な騎馬兵が目と鼻の先で足をとめた。彼らの錬度たるや矛を交えないでも一目で敵対する者達に絶望を理解させる領域である。単純な話、この一万の騎馬兵は、中華最強の李信軍にも匹敵……或いは凌駕している戦闘集団であった。その先頭にいた巨大な矛を携えた大男がゆつくりと馬を檀石槐へと向ける。長い髪を後ろに流し、太目の眉に、鋭い眼差し。厚い唇に顎

から伸びるのは三本に纏められた長い髭。甲冑姿の大男は、先程まで檀石槐が行っていた非道を見ながら、ココココココと笑った。

「ソフフフフ。全く、やんちゃな娘ですねエ。白起さんの真似ですか？」

「……」

檀石槐が返すのは沈黙だ。ギラギラと、宿敵を見るかのような憎悪を込めて彼女は現れた大男を睨みつける。悪鬼も尻尾を巻いて逃げ出すそれを受けながら、されど対象となつている大男の表情一つ変える事はない。特に何もしていない大男から檀石槐が受けるのは、想像を絶する重圧だ。吐き気を催す程の最悪の気分。生存本能が絶えず全神経を絶叫させ肌が粟立ち、呼吸も俣ならない。彼女はこれを知っている。この状態がなんなのか気がついていない。これは格の違いだ。今は覆しようのない彼方と此方の格差を骨の髄まで身にしみて理解しているが故の心身の乱れ。超大にして強大、そして絶大。余計なものは一切含めず、纏わず、ただ純粹なまでの王道の強さ。鬼神、武神、戦神、人修羅、人食い虎——様々な人では無き呼び名をされる者はいれど、この大男の強さは言うなれば人類の頂点。荒れ狂う天災でありながら、波一つたない静かな湖面。正反対の印象を見ている者に与えてくる絶対の最強。李信や呂布といった孤高の領域に顔色一つかえることなく平然と割つて入ることができる選ばれた超越者。戦うな、逃げろ。どう足掻いても勝機は皆無。檀石槐の本能が下す判断は、この大男を嫌っている彼女でさえも正しいものだど理解している。天地がひっくり返っても今はまだ届かない力の差……それをねじ伏せてこの場に佇むだけでも一苦勞なのだ。だが、それを表に出すことは決してしない。弱味など決して見せるものかと檀石槐は覚悟を持ってこの場に立つ。

「落ち着いてますねエ……昔の童信よりもずっと。ココココココ、素質はとんでもないモノがありますよ、麗さん」

「——ッ!!」

檀石槐の声なき咆哮。己の真名を呼んでいいのはこの世界でただ一人。それを呼んでいいのは信兄様だけだ。私を汚すな、私の名前を

呼ぶんじゃない。踏み込み、大矛のすくいあげの一撃が、必殺の速度と軌跡を持って大男へと迫り行く。神速斬閃の大矛は、恐らくは中華の英傑であったとしても回避防御ができるのは一握り。李信や呂布級の怪物でなければこの一太刀で終わっていたであろう。

「とは言っても、やはり勢いが先行しているところは似てますねエ……」

ピタリつと檀石槐の大矛が止まった。止められた。気がついたときには大男の大矛の刃が自分の首に突きつけられていたからだ。自分が死地に立たされていた事に気づいた彼女の行動は機敏であった。この場から飛び下がり、体勢低く如何なる相手の行動にも対応できるように意識を尖らせる檀石槐であったが、肝心の大男は何をすることもなく大矛を持ち上げそれで自身の肩をトントンと叩く。

かつての時代、李信が咸陽に生活していた頃に王宮を抜け出して彼の屋敷へと遊びに行ったことは数え切れない。その時に幾度もせがんで聞いた昔話。李信が誰よりも尊敬し、憧れた男。大將軍という意味を身を持って教えてくれた真なる天下の大將軍。李信が中華六将と謳われるようになってからも、戦えば負ける気はしないが勝てる気もしないと言わしめた怪物。彼の心の奥底にいつだって鎮座し、死ぬまで目標と定められたこの男——だからこそ憎い。李信に必要なのは自分だけだ。始皇帝も、この男も、他の女も、一切全てが不純物。彼の横に立つのは、心の中にいるのは、自分だけで十分だ。

「全く……あの王の子が随分と歪んでしまっていますねエ。いえ、中華を統一するという偉業を成し遂げた唯一の王。その娘ならばここまで外れる素質があるのもある意味当然というべきかもしれません
が」

数千の人間が生き埋めになったそこを一瞥した大男は、馬首を返すと檀石槐に背を向ける。

「こんな遊びをしている暇はありませんよ、檀石槐さん。残っている民族は氏と羌。五つの民族を従えたその時、協力して漢へと攻め込むという同盟を忘れたわけではありませんよねエ？」

「……」

「ソフフフフ……協力はすれど目的は早い者勝ちですよ？ 貴女が童信を欲するのと同様に……私がわざわざこんな真似をしているのも童信に答えを見せて貰いたいからですしねエ」

光り輝く才能はもっていたが、まだまだ小さかったあの少年が。自分の死後、どのような道を辿り、如何なる艱難辛苦を乗り越え、天下の大將軍へと至ったのか。

「果て無き漢^{わしこ}達の命をかけた戦い。ソフフフ……舞台は私が整えて差し上げましょう。ねエ、童信」

興味は尽きませんねエ……大男はまるで怪鳥のような笑い声を残して配下の騎馬兵を引き連れて新たな戦場を求めて去っていった。残された麗は、握っていた大矛を更に強く握り締める。柄が拉げるほどに強く、血が滲み出るほどに凶悪に。これ以上ないほどの恥辱屈辱に身を震わせる彼女であったが、それがさらに彼女を強く、高みに昇らせることとなる。それはまるでかつての李信と大男の関係のようであった。抱く想いは、尊敬と憎悪という相反する感情なれど、どちらもがこの大男を目標として天を駆け上るという意味では似た者同士であったのかもしれない。ただでさえ怪物であった麗が、大男との共鳴効果によりさらなる怪物へと変貌を遂げる。ギリギリと姿が見えなくなつた憎い同盟相手を脳裏に描きながら麗は凄絶な笑みを浮かべた。

「……王騎。忘れないでください。信兄様を手に入れるのは私です」

始皇帝が娘にして檀石槐——麗。天下の大將軍——王騎。

これは黄巾の乱が終結する二年も前の話。二人の怪物が五胡全てを従えて中華を侵略する日が訪れるのはもう間もなくであった。

恋姫飛翔の章

蛇足之6：大斧と神槍

狂^まっている。

目の前で行われている容赦のない虐殺を見て、少女は失望の溜息をつく。黄巾の乱と呼ばれた未曾有の反乱は、首魁三人を討ち果たしたとはいえそれで終結するような簡単なものではなかった。各地に散り散りとなつた残党は、小規模な反乱を繰り返しており、盗賊行為や山賊行為などにも志がない者達の多くが手を染めている状況となつていた。それらを平定するために漢王朝や地方の貴族豪族が兵を出している状態が続いていて、彼女もまた討伐隊の一員として従軍している一人であつた。

目の前の惨劇は黄巾の残党を匿っていた村である。確かに反乱を犯した者を匿うのは罰せられる行為となるに違いないが、もう少しやりようがあるのではないか。そう思つた彼女ではあるが、口に出すことはできなかつた。

小柄な少女であつた。こんな絶望の現場には到底相応しくはない幼い容姿の彼女は、ただ両の拳を強く握り締めることしか出来なかつた。淡い薄紫の髪を左頭頂部で結んだ、精々が十四、五の年齢にしか見えない少女。露出の多い服に髑髏の髪飾り——そして彼女の傍らの地面に突き刺してある少女よりもなお巨大で禍々しい形の戦斧が見る者に相反する印象を与えてくる。

淡々と村人を殺しまわっているのは、山賊や盗賊といった類の人間ではない。彼らはれっきとした漢王朝の正規兵。そして命令を出しているのは彼女の上司でもある車騎將軍楊奉。ただの騎都尉ではない彼女にこの状況を止める手段も方法もありはしなかつた。

黄巾の乱で多大な戦果をあげたものもいれば、虚しい結果となつた者もいる。楊奉もまたたいした戦功をあげることができず、残党狩り

で少しでも結果を残さねばならない。そういった考えから楊奉の残党狩りは一際厳しいものとなっている——のであれば、どれほどよかつたことか。彼らはただ漢王朝のために黄巾賊の残党を狩りつくそうとしているだけだ。その過程で例え民がどれだけ傷つこうが、死のうが構わない。少女が狂っていると称したのも間違いではなく、そんな歪んだ忠義が彼らを動かしている。

「何をしている、徐晃よ」

汚泥に塗れた耳障りな声が少女——徐晃の耳に届く。振り向いた先にはまだ若く見える甲冑姿の女性がいた。いや、若いと言うよりは幼いといった表現の方が相応しい、徐晃よりも僅かに年上の少女らしき人物だ。すらりとした肢体に腰まで伸びる長く滑らかな浅葱色の髪。大きな瞳が無感情に赤く輝いている。彼女こそが、徐晃の上司でもある車騎將軍楊奉。流石は長い間將軍位についている才女だけあり、放つ気配はそこらの兵とは一線を画すものがある。いや、見掛けどおりの年齢ではありえない貫禄と雰囲気纏っている。

そして形ばかりの拝手とともに軽く頭を下げる徐晃を見る楊奉の目には温かみというものが一切なかった。氷点下に達する視線に射抜かれながらも徐晃は年齢とは不相応な冷静さを持ってその場に佇む。將軍位の重圧を受けながら気圧されることもなく顔色一つ変えない少女もまた、並々ならぬ人物である証左となるであろう。

「私は何をしているか、と聞いたぞ」

何故目の前で行われている征伐に参加しない。そういった意味合いのこもった再度掛けられる問いに、徐晃はやはり沈黙を保つ。それが彼女の無言の抗議であることを、楊奉は気づいていた。自分の圧に微塵も怖れる様子を見せない徐晃に、舌打ちを一つ。ここまでの無礼を上司に働くなど厳罰のものであろうが、外見とは真逆で出鱈目な戦力を誇る彼女は非常に使える。そのためならば多少の無礼は目に瞑つても致し方なし、と無理矢理に自分を納得させると徐晃に背を向けて去っていく。

それを見送った徐晃は、どこか憂いを帯びた視線を空へと向けた。彼女には志があつた。漢王朝のために命を投げ出す覚悟すらあつた。

だが、実際に配属された楊奉の下で経験したのは、そんな彼女を失望させるに十分な非道無道。彼らには彼らなりの忠義があるのだろうが、自分とは決して交わらないそれに、今回の遠征にてもはや未練は完全に断ち切れた。

徐晃には憧れている男がいた。現在こそ人の領域外に居座っている彼女ではあるが、数年前まではただの一般人と変わらない存在だった。劉弁の手が入る前の漢王朝は汚職にあふれ、市民の暮らしも楽には行かない者も多かった。徐晃がすんでいた司隸河東郡の陽県にある村も酷いものだった。唯でさえ貧しかった村は流行り病によって父も母も、親戚も村にすむほぼ全ての人間が命を落とした。辛うじて生き残った彼女も後は死を待つだけ。そんな状態だった徐晃は北方へと向かう際に偶々道を逸れて立ち寄ったある部隊に命を救われた。それは偶々だったのかもしれない。だが、彼女はそれに天命を感じた。

生き残った自分はこの人のために命を使うべきだと。だが、ただの幼い村娘の彼女が北方を主戦場とするその男の役に立てる訳がない。その時から徐晃の全てが始まった。寝食を惜しんで日々鍛錬の日々。時には実践を積む為に民の生活を脅かす山賊の討伐も行った。彼女には才があった。あらゆる人間を後方へと置き去りにする絶対の戦いの天稟が。天に寵愛された至高の才覚。それら全てを研磨することに時間を費やし、僅か数年で徐晃は憧れの男と肩を並べて戦えるだけの世界へ踏み込んでいた。そして漢王朝の門を叩き武官として勤めることになったが現実はそのままで甘くない。自身の願いと裏腹に、徐晃は楊奉將軍のもとへと配属されることとなった。

空を見上げる彼女の視線の先には、一羽の鳥が羽ばたき北方へと飛び去っていく光景があり、何故かそれを見た瞬間徐晃の心がふっと軽くなったのを自覚した。そうだ。もう我慢する必要はない。この任務を最後に旅に出よう。鳥のように、自由に。自分の意志で行こう、北へ。

そんな気持ちを抱き、遙か彼方へと消え去った鳥の姿を見ていた徐晃であったが——不意に何度も瞬きし、目を擦る。パチパチと何度

も繰り返す彼女は首を捻った。何故そんなことをしたのか。それは見えたからだ。空の彼方に、鳥ではなく龍の姿が。だが、それは一瞬だ。空に浮かんでいた巨大な龍は、気がつけば消えており残されたのは雲一つない蒼天。疲れからくる幻視なのかも……と結論付けた徐晃は、せめて助けることができる民だけは助けようと、惨劇の繰り広げられる目の前の村へと足を進めるのであった。

李信に率いられた——漢王朝李信軍は歴史上類を見ないほどの精強な軍であったと言い伝えられている。その屋台骨を支えたのは四傑と呼ばれる軍師。そして、一龍五虎将と褒め称えられる一騎当千の武将達。そのうちの一人。姓は徐。名は晃。字は公明——真名は香風。遙か未来まで名を残す虎子が自分の天命と出会うのはもう間もなくであった。



「ふう……」

畑を耕していた男が、一息つくように大きく伸びをしながら滴り落ちる汗を手の甲で拭った。空を見上げれば太陽が惜しみなく眩い光を大地へと降り注がせている。為れない農作業による疲労は随分と自分の体力を削っているようで、体中が悲鳴をあげている状態でもあった。今まで気にも留めていなかった農民達の苦勞が身に染みてわかるとはこういうことを言うのだろうか。

「韓暹さん!!」

しばしの休憩をと、近くの切り株に腰を下ろした男の名を呼ぶ声が聞こえ——韓暹は村の方角から手を振りながら駆け寄ってくる少女に自然と視線を向ける。ニコニコと、敵意など微塵も見せない、汚れを知らない純白という言葉が似合う少女であつた。粗末な服を着てはいるが、それでも素朴で可愛らしい彼女は、韓暹と親子ほどの歳の差が見受けられる。もっとも韓暹は結婚をしてはおらず、子供などはいはしないのだが。

そんな年下の彼女に、実のところ頭が上がらない韓暹であつた。理由は簡単で、つい最近この村の近くで行き倒れていた彼を救つたのが、少女だつたからだ。この御時勢、縁もゆかりもない道端で倒れている怪しい男を何のためらいもなく助ける人間は少ないだろう。警戒心をもって当然なのに、少女は損得抜きで韓暹を村へと連れ帰り、世話をしてくれた。そんな訳で、傷が癒えてから恩返しの意味も含めて農作業を手伝うことにしたのだが、何分初めてのことばかり。逆に多くの村人に迷惑をかけながらも、ようやく慣れ始めてきたところでもあつた。

「お仕事お疲れ様です。これ、よかつたら食べて下さい」
「ああ。いつもすまねえな……お、こいつは美味そうだ」

笑顔のまま差し出された竹包みを開いてみれば、中には握り飯が幾つか入っている。丁度良い休憩になるかとそれを頬張れば程よい塩味が効いた肉体労働後には絶妙に身体に染み渡る味付けに、反射的に零れ落ちる美味いという言葉。若干不安そうだった表情が、再度笑顔へと変わると少女は手を振って村へと戻つていった。それを見送つた韓暹は竹筒に入った水を一口飲むと、畑仕事の続きをするために切り株から腰を上げて——その動きがピタリと止まる。村へと戻つていった少女と入れ替わるように、一人の女性が韓暹の方へとゆつくりと歩んできたからだ。

まるで蒼天のような美しくも長い髪。切れ長の目に細い眉。宝石を思わせる紫に輝く瞳に、染み一つない白い服。手に持つは、韓暹がこれまで一度として見たことがない長大の槍。歩む姿に乱れはなく、

人の目を惹き付ける引力を放つ、立てば芍薬歩けば牡丹歩く姿は百合の花。そんな表現が似つかわしい美しい女性であった。こんな田舎町は愚か、都会であったとしてもこの女性に匹敵する美貌を持つ者を見つけることは出来ないだろう。少なくとも韓暹がこれまで生きてきた中で一、二を争う美人であることに間違いはなかった。自然と彼女の歩く姿に目を奪われていた韓暹だったが——突如としてその姿が消失する。馬鹿な、と呆けたように口を開いて周囲を見渡す。瞬きすらしていなかったというのにまるで蜃気楼が如く女性を見失ったのだ。

「私をお探しか」

ヒヤリつと身体中の汗が一瞬で冷たくなる悪寒と美声が背後から耳朶を打った。自身の真後ろから散じられる透明かつ零度の気配に呼吸すらまともに出来ない恐怖を感じる。この圧力はそう、戦場で幾人か出会った事がある規格外の怪物達と同格の存在。そんな化生染みた女がこちらの生殺与奪を握っていることに、自然と頬が引き攣っていく。

「何、だ……お前は、一体」

「私か？ 私は先日よりこちらの村にお世話になっている者だ」

連れ二人と一緒に、と。美しき武芸者は、ふっと笑みを浮かべる。そういえば昨夜少女との食事の折に、旅の者達が三人ほど訪れていると聞いた記憶がある。その連中の一人なのであろうか。それを思い出しながら、自分の声が擦れているのは間違いなく恐怖からくるものであることが信じられない気持ちで一杯であった。韓暹は、こう見えてもそれなりの戦場を経験してきた自負がある。そこらの盗賊山賊、自称腕がたつ程度の連中ならば一捻りで倒すことができる自信があった。それが木っ端に打ち砕かれるほどの圧倒的な実力差。ただ背後を取られただけで分かる、歴然とした格の違い。だが、何故彼女はこのような対応を取っているのか。生憎と心当たりは——。

「まだ二、三日程度の滞在ではあるが、この村の者達は実に気持ちが良い者達ばかりだ。うむ……だからこそお主に忠告しておきたいことがある」

「……忠告っ！」

「お主はすぐにもこの村から立ち去ったほうが良い」

平然と言ってくる女性に、恐怖を上回る怒りが湧き上がってくる。何故、ただの旅の途中で寄った何の関係もないお前にそんなことを言われなければならぬのか。震える声で、彼女に対しての反乱の言葉を紡ごうとしたそれより速く。

「急がねば、この村が破滅するぞ……なあ、黄巾賊の者よ」

決定的なその台詞に、一瞬で韓暹の怒りは沈静化する。先程まで感じていた恐怖を越える怖気がヒタヒタと彼の背筋を駆け上って行った。

「な、なんのことだ……」

なんとか否定しようにも、震える声を誤魔化すことが出来なかった。それが事実であったからだ。彼は元々、二人の弟分と一緒に盗賊業に実を窺っていた。だが、ある日偶々見た——黄巾の乱の発端となった張三姉妹の芸を見て感動し、古参の追っかけとして過ごしてきた過去がある。彼女達の為にと、黄巾の乱にも参加し……反乱に失敗した彼は弟分二人と散り散りになり、つい先日ついにこの村の近くで行き倒れとなったのだ。黄巾賊として参加したことは村の人間に話してはいないというのに何故ばれたのか。

戦々恐々とする韓暹であったが、女性からして見れば、推測することとは容易い事であった。韓暹が行き倒れていたということは村の人間との雑談の中で聞いたことであり、一人で旅に出る者など珍しく、逆に一人で旅に慣れている者ならば行き倒れるなどそうそうないだろう。身分の高い世間知らずという可能性もあるが、どう見ても韓暹はそういった類の人間ではない。ならばこの時機に行き倒れるなど高確率で黄巾の乱に関係した人間となるはずだ。可能性があるとすれば、官軍の逃亡兵か、義勇兵、そして黄巾賊。逃亡兵、義勇兵ならばこんな寒村に残らずにとっとと故郷へと戻ればいいはず。ならば消去法で残されるのは黄巾の乱に参加した逆賊のみだ。まあ、もっとも女性からして見れば、韓暹の顔つきがどう見ても悪人顔っぽく見えたとはい見も蓋もない答えなのだが。結果論的には実に大当たりで

あつた。

「この村に引き籠もっているお主は知らぬことかもしれないが、近頃この周辺で官軍が黄巾賊の残党狩りを行っている」

ギョつと心臓を鷲掴みにされたような衝撃が身を包む。

「しかも、だ。黄巾の者を匿っていた村人は当然として、その村ごと逆賊として処罰された、との噂も聞いている」

「は、はあっ!?! なんだ、そりゃ!?!」

女性の言葉に、感じていた恐怖も忘れて大声を上げる韓暹。それも無理の無い話だ。確かに罪人を庇った者に処罰が下るのは仕方のない話かもしれない。だが、関係のない村人までその罪科が及ぶのは流石に無茶苦茶ではなからうか。

「確かに、道理が通らぬ話ではある。だが、相手は車騎將軍楊奉——ただの民が逆らえる相手ではない」

楊奉。その名を聞いたことはある。狂信的なまでの漢王朝への忠信故に、如何なる苛烈な手段方法でも逆賊への罰を執行する最悪の將軍だ。そんな相手がこの近くに来ているのか、と韓暹は口内が自然と緊張からか乾いていくのを実感していた。

「この村の者達は皆気持ちが良い者ばかりだ。私のような旅の者にもよくしてくれる。故に、お主にはいらぬ忠告をさせてもらった」

どのような選択をえらぶかはお主の自由だ。そう言い残し、女性は韓暹の肩をポンと叩くとこの場を後にする。歩く後姿すらも美しい彼女が遠ざかっていくのを黙って見送っていた韓暹だったが、どこか決意を決めた眼差しで空を見上げるのであつた。

「明日には旅立つなんて急すぎじゃないですか韓暹さん!!」

「すまない、黄春」

決心した韓暹の行動は迅速であった。謎の女性からの忠告を受けた彼は、その日の夜に村長の下へと訪れると翌日には旅立つ旨を告げる。それに難色を示したのが村長の孫娘の黄春であった。黄巾の乱にて父親を亡くした彼女にとって韓暹に亡き父の面影を抱いていたのかもしれない。

「この村には、お前には世話になった。だからよ、俺のせいでお前達に迷惑をかけるわけにはいかないんだ」

「迷惑だなんて……そんな」

「……隠していたが俺は黄巾の乱に参加していた。漢王朝に反乱をおこした逆賊ってわけだ」

「——っ!?!」

黄春へと、韓暹は罵倒されることを覚悟して自分が黄巾の生き残りであるということを告げる。父親を亡くした原因の一因は自分にもある、と。それに二の句が継げなくなる黄春に頭を下げると韓暹は村長の家を出たその時、彼の行く手を阻むか弱い力が加わる。何かと思えば涙を堪えた黄春が彼の手を引っ張っていた。

「黄春……放してくれよ」

「……」

「この近くに来ている官軍の連中は本当に危ない奴らなんだ。俺がここにいたら最悪の事態になっちまうかもしれないねえ」

だからわかってくれ。何度も説得を試みる韓暹に対して黄春は無言で首を横に振って答えずとする。確かに黄巾の者達は父がなくなる原因であるが、それでもすべてが憎いというわけではない。それに韓暹には父の面影を見ている彼女にとって、どんな判断を下せばよいか自分の心もわからない。だが、そんな黄春も覚悟を決めて自分の本心を口に出そうとした時——扉を叩く音が聞こえた。誰かの来訪か

と思う間もなく室内の人間の許可も得ずに扉が開く。外にいたのは村人の男性。そして、彼の後ろには数人の兵の姿があった。

「す、すまない……春ちゃん、長。この人たちに喋っちまった」

震える声で謝罪を告げる男と冷たい眼差しで室内の三人を順に見やる兵士達。ぞつとするほどに彼らの眼差しには人を見る温度が見つけられない。

「既にお前が黄巾賊の一味であることは調べがついている。大人しく縄につけ」

抑揚のない口調で告げてくる兵士に、韓暹は背筋を這う嫌な予感が止まらない。今まで見てきた官軍の兵士とは異なる雰囲気と気配。しかも恐らくは末端の兵だというのに感じる力量は自分と同等以上。そして感じる自分達に対して、いや——漢王朝に反する者への容赦の欠片も無い敵意。そのことを悟った韓暹の動きは素早かった。自分の腕を掴んでいる黄春を振り払うと彼女を背後から抱きすくめ、隠し持っていた短剣を首に当てる。

「韓、暹さん!? な、なにを!？」

「うるせえ!! 黙れ!!」

大声で怒鳴り散らすと兵士達に短剣を見せびらかすようにして黄春の頬をペチペチと軽く叩く。

「こいつの命が惜しければとつとどきやがれ!! くそ……誰にも話してないってのに何故俺のことがばれやがった!!」

知らなかったとはいえ黄巾賊を匿っていたと知られば間違いなく長と黄春は罰せられるであろう。だが韓暹が逆賊であることを知らなかった体にすれば罪も軽く出来るかもしれない。このわずかな時間で判断を下した韓暹であったが、現れた兵士達は官軍でも最悪の部類に入る者達だった。

「女は?」

「賊を始末する過程での犠牲は問わないとの將軍からのお達しだ」
「はっ」

簡潔に言葉を交し合う兵士の姿と話の内容に頬を引き攣らせる韓暹は、剣を引き抜いた兵士達とは逆の位置へと黄春を突き飛ばす。短

い悲鳴をあげて転がった彼女が見たのは、即座に兵士達へと体当たりをしかけて屋外へと逃亡を図る韓暹の姿だった。だが、外へと出た彼を待っていたのは数え切れない兵の姿。誰も彼もが韓暹に僅かに劣るか同等。戦士としても一級品の腕前の持ち主ばかりだ。止まらぬ冷や汗を隠しきれない韓暹だったが、突如として人垣が割れて道が出来た。そこを歩いてやってきたのは豪華な鎧を着た吹雪が如く冷たい雰囲気を身に纏う——車騎將軍楊奉。

「ふん。情報通りいたか、薄汚い黄巾賊の生き残りが。そいつの名は？」

「はっ……韓暹という名だそうです」

「韓暹？ 確か黄巾指導者の親衛隊にそんな名前の奴がいたと記憶しているが」

「他の残党からの情報から考慮するに同一人物かと」

「これはいい。随分と大物が網にかかったようだ」

くはっとなげな笑みを浮かべて笑う楊奉に、それを見ながらも韓暹は身動きが取れなかった。噂に聞くよりも若い、強い。感じる將軍としての圧力に息を呑む。ろくでもない噂しか聞いていないが、この若さで將軍位にいるのも理解できる存在感を発している。さらには彼女の周囲を囲っている側近の者達は明らかに韓暹よりも上手の者ばかりだ。

「韓暹さん!!」

まずい、まずいと混乱の極みに達している韓暹を追って外へと出てきた黄春の姿を一瞥した楊奉が隣の副官へと目線で問い掛ける。あの娘は何だ、と。

「逆賊を匿っていた家の者かと」

「そうか。ならば始末しても構わん」

「はっ」

平然と言い切った楊奉の言に従って、傍にいた兵士の一人が黄春へと何の躊躇いもなく斬りかかる。同時に自分へと迫りくる兵士の剣撃を短剣で受け止め蹴り飛ばすものの、少女への魔手を阻止せんと韓暹が動くには遅く、遂に何が起こっているのかわかっていない黄春へ

劍が振り下ろされた。

が——何かが拉げる破壊音がこの場に響き渡る。血飛沫を撒き散らしながら吹き飛ばされる兵士。黄春へと斬りかかった筈の兵士が顔を強打され周囲を囲っている兵士への位置へと叩き戻された。何事かと思えば、黄春の背後にて、得意げに笑みを浮かべ槍を手に持つ蒼髪の佳人の姿があることに皆が気づく。今の今まで誰もいなかったはずのそこに何時の間にも現れたのか。敵か味方か不明だが、此方の兵士を血祭りにあげたのは間違いなくこの女性だ。ならばと警戒心を露にする官軍兵士の姿を見ながら、蹲っている黄春の手を取って立たせると、未だ心ここにあらずといった彼女を家の中へと誘導する。

「す、すまねえ……嬢ちゃん。あいつを助けてくれて」

「なに。このような無体見過ごす訳にもいくまい」

お主一人だったならば遠慮なく見捨てたが。と笑う女性に韓暹は頬を引き攣らせるが、それも仕方ない話かと自分を納得させる。なにはどうあれこの前の黄巾の乱に参加した身。逆賊として罰せられるのは当然のことだ。

「……何者だ、女」

「ふつ。罪もない少女を手にかかけようとする外道の貴様らに名乗る名などあると思うか」

「ふざけた奴だ」

本気か冗談かわからない蒼髪の女性の返答を聞いた楊奉は、鼻で笑いなが言葉を続ける。

「まあ、いい。我らに逆らうというのならお前も逆賊に違いない。構わん、殺せ」

だが、楊奉の言葉と同時に旋風が巻き起こった。この場にいる者誰一人として女性の動きを見切れた者はおらず、彼女の前方の地面に線が引かれており槍を片手に持ちながら数百の敵兵を前にして余裕の笑みを崩すことはない。

「その線より此方にくるといふことは、私と敵対することを意味する。もしも命が惜しければ、そのまま引き下がることをお勧めしよう」

平然と言い切る佳人の姿に躊躇は一瞬だ。兵士達が各々の武器を手に線を踏み越えた瞬間——蒼い光が疾った。瞬きする間に喉を、胸を、顔面を貫かれ地に伏する兵士達。それを為したであろう女性には、槍を構えたまま元の位置から動いていないようにも見えた。いや、単純にあまりにも速過ぎたが故にそう見えてしまっただけのこと。信じられないことだが、目の前で起こったのは紛れもない事実。

「……あれも怪物の類か。ならば怪物には怪物をぶつければよい」

焦燥を微塵も見せずに楊奉が叫んだ。徐晃と。

割れる。割れていく。兵士達の軍勢が、その少女の歩みによって左右に開かれる。將軍の命に従って、ぽっかりと開いた空間を来るは巨大な戦斧を肩に担いだ徐晃公明。味方の兵士からも怖れの色を向けられる楊奉軍に所属する怪物が姿を現した。パチリつと弾けるのは女性と徐晃の放つ戦意であり、両者ともが互いの尋常ならざる力量を瞬時に悟る。

「ジャン……ん。私は……姓は徐。名は晃。字は公明。貴女は？」

「貴殿には名乗らねばならないか。我が姓は趙。名は雲。字は——子龍。これなる愛槍は龍牙という」

趙雲子龍と名乗った槍使いの名を、徐晃は一人繰り返す。その名はどこかで聞いたことがある。だが、官軍の一員というわけではないはずだ。王朝に仕える人間全てを知っている訳ではないが、趙雲程の力量の持ち主が噂にならないはずがない。

「……趙子龍殿。ここは引いて貰えない？」

「ふふっ。その問いの答えはわかっているのではないですか？ これ引けるようなら最初からこの場に立とうとは思いませんぞ、徐公明殿」

「……うん。そうだね」

轟、と物騒な音が鳴り響く。徐晃が片手で戦斧を振り回した結果巻き起こされた旋風が、周囲にいた官軍兵士を強かに打ち据える。ただの豪腕というわけではない。音を立てて少女の幼い肉体から飛散する冷たくも透明な重圧。それらが周囲全ての人間を地面へと押さえ

つけようと降り注ぐ。全身に鳥肌が立ったことを自覚した趙雲は、眼前に聳え立つ徐晃という名の強敵に胸中にて感謝の念を送る。まさかこれほどの使い手が楊奉軍にいるとは考えてもいなかったからだ。勝敗がどちらに転ぶかわからない相手との戦いは久方ぶり、血が沸き肉が踊るとはこのことだ。

「さあ、やれ。徐晃よ。漢王朝の力と言うものを見せ付けてやれ」
「……お断りします」

楊奉の宣言をあつさり拒絶すると、今まで向かい合っていた趙雲へと背を向けて——楊奉と彼の配下達へと戦斧を突きつけた。まさかの裏切りに絶句する全ての兵士と、將軍楊奉。だが、流石と言わべきか楊奉はすぐさま我を取り戻すと忌々しげに此方に武器を向けている徐晃へと疑問をぶつけた。

「……徐晃。貴様何をしているのかわかっているのか？」

「はい。勿論です」

「ならば、何故だ。何故反旗を翻す？」

「……これまでの行為を思い返して下さい、將軍」

きつとそれでもわからないのでしようが、それこそが理由です。

徐晃の台詞に、彼女の予想通り思い当たるふしがないのだろう。何故ならば彼女が為してきたことを彼女自身が正義によるものだと確信しているからだ。幾つもの村を焼き、村人を殺してきたことへの一切の後ろめたさも持っていない。漢王朝への歪んだ狂信。楊奉と徐晃の漢王朝への忠義は決して交わらない平行線なのだ。

「そうか……もう良い。徐公明……貴様も反逆者として誅殺する。未
来永劫、逆賊としてその名を刻め」

完全に逆賊として認識された徐晃であったが、不思議と後悔はない。いや、もっと早くこうしていればよかったという気持ちすら湧いてくる。

「なんともはや……宜しいのですかな？」

「……うん」

「ふふつ。変わった御方だ。だが、肩を並べて戦うのに貴殿程頼りになる相手もそうはないでしょうな」

感謝いたしますぞ、と礼を告げる趙雲であつたが、それに首を横に振るのは徐晃だ。趙雲が楊奉の非道に立ち向かう姿を見たからこそ徐晃も覚悟を決めることが出来たのだから。彼女の覚悟など知ったことかと幾人かの兵士が瞬時に突撃を敢行した。複数人による攻勢を巨大な戦斧の僅か一振り、右払いで纏めて薙ぎ倒す。胴体を真つ二つにする脅威の豪腕に、後続の動きがピタリと止まった。

両者ともにそれぞれの武器を構えて敵兵を睨みつける。この場にいる兵士は雑兵とはいえ数百を越えており、如何に人間離れをした二人であつても苦戦は免れない。或いは数百ならば二人が協力すれば何とかなるかもしれないが、村の外にいる兵士達もあわせればその数は軽く千を超える。官軍の正規兵、しかも精兵と噂される楊奉軍相手では実際のところなかなかに厳しいというのが本音であつた。それを考慮すれば楊奉を狙った速攻の電撃作戦を取るのがもつとも勝率の高くなる戦法ではないか。だが、相手も然る者。自分が狙われると悟つたのか、即座に兵士達で自分の周囲に囲いを作る。

「無駄に戦いを挑むな。兵を集合させた後に、物量で押し潰すぞ。わざわざ化け物の土俵で争うことはない」

最強の配下に裏切られたというのに激昂せずに、作戦を述べる楊奉の姿は冷静沈着に見える。いや、或いは最強の手駒だからこそ、裏切つたときの対策を考えていたのかもしれない。

「楊奉様!!」

ある種の均衡状態がここに生まれ、そして然程時間を経ずして村の外から兵士達が集まつてきた。どうしたものか、と趙雲が突破口を探そうとするなか、外から来た兵士達の表情に焦りの色が見えるのに徐晃は気づく。自分達などに構っていられない。彼らからはそのような焦燥感を——いや、違う。あれは恐怖だ。民を殺すことに躊躇いを持たない楊奉麾下の兵士達が、あそこまで脅えているのは一体どんな理由があるというのか。

「……何やってんだ、楊奉將軍」

それは静かな声だつた。感情を見せない平坦な男の声にも聞こえたが、怒りを押し殺しているが故の冷たい声なのだ。誰しもが理解し

た。趙雲、徐晃という猛者二人を前にしながら、この場にいた楊奉軍の兵士達は一齐にそちらへと目を向ける。その声にはあらゆる人間を惹き付け、怖れさせるといふ相反する力があつた。徐晃の時とは比較にならない圧力が満ち溢れ、この場から逃げ出すという行為すら忘れさせる真の怪物の到来。

「李信……將軍か」

楊奉の搾り出す言葉は小さな声だつた。だが、それは周囲の全ての兵士のみならず、趙雲と徐晃の耳にさえ届く。李信の姿を知らぬ者でも、対峙しただけで理解出来る外れ具合。本来の姿よりも遙かに巨大で雄々しく見えるその姿。さらに彼のみならず、華雄と高順の副将二人に加えさらには方天画戟を肩に乗せる呂布の姿まである。彼らの背後には精強な李信軍の兵も付き従い——いや、一人だけ場違いな小さな少女がいた。李信の影に隠れるようにして歩いてくる三角帽子の少女。徐晃よりもさらに幼い龐統の姿に、一瞬誰しもが幻でも見ているのかと自分の目を疑つてしまう程であつた。

「俺は何をやつてるのか、つて聞いたんだけどな」

李信が喋るだけで空気が沸騰したかのように熱せられ、肌を焼く勢いで煮え滾る。灼熱色に周囲一帯を焦がし続ける圧力が、呼吸をすれば肺が焼けたと悲鳴をあげる勘違いを引き起こす。

「この村は黄巾の残党を匿つていた。今はその対応にあたつてるところだ」

平然と言い切る楊奉の言葉に一寸の淀みも詰まりもない。李信の放つ圧力を前にしても迷いなく言い切れるこの女性に、元部下である徐晃は得も言われぬ薄気味悪さを感じた。

「ああ、そうだな。それがあんたの役目だろうさ。だがな、六つの村を焼き討ちにしたのはどう考えてもやりすぎだ」

李信の言葉にピクリと楊奉の眉が動く。この男にどこまで把握されているのか警戒心を高めたのか、彼女の纏う雰囲気徐徐に変化していった。

「成程。良く調べている。だが、付け加えさせてもらおうか。その村全てが黄巾の残党を匿つていた。漢王朝に仇なす大罪だ。それを処

華雄の戦斧が右首筋を。高順の剣が心臓を。呂布の方天画戟が頭頂部めがけて振り下ろされる。相手は同じ官軍。しかも將軍位にあらうと知ったことか。我らを、我らが將軍を侮辱する貴様の行為、万死に値すると知れ。

「まあ……そうだな。単純に奪った命の数つてことに関しては反論の余地はない」

ピタリつと李信の返答で三人の刃が止まった。薄皮一枚切るか切らないかの位置で静止する三つの干戈。後少しでも何かがあれば彼女達の武器は怒涛の津波となつて楊奉の命を飲み込むであろう。

「敵も味方もお前の考えている以上に俺は殺してきたし、殺されてきた」

それは事実だ。今世のみならず前世も併せれば李信は間違いなく何十回も地獄に墮ちるだけの罪科を重ねてきた。始皇帝の金剛の剣としてあらゆる敵を打ち砕いたと言えはよいが、つまるところ戦国七雄と呼ばれる国々を滅ぼしたということだ。その過程において何百万何千万の敵兵を殺し、何万何十万の味方を殺されてきた。秦が各国に戦争を仕掛けていた時代、自国において英雄扱いされていた李信ではあるが、逆に言えば他国からは比例して憎悪されていたということだ。大將軍李信ほど多くの人間に死を望まれていた武将はいない。ありとあらゆる戦場を駆け回り、幾度の敗北を重ねながらも決して死ぬことはなく、最後には戦場に勝利を齎す彼を列国は憎悪と畏怖を込めて何時しか戦狂いの悪鬼と呼ぶようになった。他六国で李信に恨みを持たない者はいないだろう。李信の死は敵対した列国全ての願望であり、夢ですらあった。

そんな李信には、決して譲らぬ最後の意地がある。

戦場の酸いも甘いも、人の闇も奈落も見続けた彼の最後の一線。無抵抗の一般人は殺さない。甘いと言われようがなんと言われようが、それだけは戦国の世を生きた彼が……いや。戦国の世を生き抜いた彼だからこそその矜持。

「はっ……立派なものだな、李信よ。流石は漢王朝の英雄とそれに従う怪物どもだ。自分の意志でこれほどの殺戮を行うか。だがな

……」

強いが故に、足下を見れんのがお前達だ。

決して朽ちず曲がらず折れずの不屈の心をもって戦い続ける李信軍。だが、本来人とはそこまで強い生き物ではない。人を殺すということに一体どれほどの苦痛と後悔に苛まされるか。弱い、弱いのだ。人は弱い生き物だ。だからこそ、楊奉は徹底的な漢王朝への忠誠を兵士に叩き込んだ。国への忠誠心を高め抱かせ、人を殺すことへの負の感情全てを国の為と転化させる。

「漢王朝のために己を殺して戦う我らの行為!! それを愚弄するか!!」

三つの死が眼前に揺蕩っているなか楊奉は雄叫びを上げる。自分は李信達のように英雄英傑の世界へ到達することは出来ないだろう。だからこそ、自分なりに漢王朝のために戦っている。己の心情を噴出させる楊奉へ向かって歩み寄る李信。それを見た華雄達三人は武器をおさめて李信の背後へと後退する。

「漢王朝のために? 笑わせるなよ。あんたは自分の行為を国に押し付けているだけだ」

「……なに?」

漢王朝への逆賊を殺す。それは全て国のため。聞こえはよいが、結局のところはそれは自分達が犯した虐殺を漢王朝へとなすりつけているだけだ。一切の責任を負わず、国の為に自分たちは働いているのだと思込んでいる。意識してやっている分、余程性質が悪い。誰かに、何かに寄りかかるのは悪いことではない。だが、常にその状態では見えるものも見えなくなっていく筈だ。現に民への虐殺に対して一切の疑問を覚えていない。とは言っても李信は楊奉の全てを否定するわけではない。一部は理解できるからだ。李信やそれに付き従う人間のほうが少数派だ。むしろこんな連中が大多数であったならば漢王朝がとつくの昔にどうかなくなってしまっている。

「有無を言わさず逆賊として処罰するな。せめて裁判は受けさせろ。何の為に法があると思ってるんだ」

反乱に組した罪は重い。本人のみならず家族親類も下手をしなく

ても処罰される。匿った人間も当然だ。だが、村一つ滅ぼすのは行き過ぎている。

「承服はできません。漢王朝に対する逆賊を処罰するためならば私は如何なる手段でも方法でもとろう」

今更変わるものか。変わるものか。国を存続させるために国に叛する者全てを殺す。その過程で民がどうなるかが知ったことか。これまでの我らの為してきた全てを否定されるわけにはいかない。

対峙するだけで肌を焼く李信の圧を全身に感じながら一向に引く様子が見られない楊奉だったが——張り詰めた空気が破裂するのは些細な原因であった。李信達の重圧に耐える楊奉とは異なり、彼女の配下達はそこまでの経験も精神もなく、自分の主を守らんと側近の一人が剣を抜いて李信へと襲い掛かる。相手方の將軍を人質にすれば有利になるといった浅はかな考えの結果だったが、剣を振り下ろしてきた楊奉兵を華雄や兵が動くよりもはやく李信は殴りつける。何かが潰れる音を残して、顔面を強打された兵は地面に叩きつけられながら転がっていく民家の扉を勢いよく打ち破って姿を消した。それが切っ掛けとなって両軍の兵士がそれぞれの武器を手に一触即発の均衡状態を形作るも、それは一瞬だ。

待て——という両將軍の静止の命令にピタリと両軍兵士が動きを止める。それでも次何かあれば官軍同士の戦争が勃発するのは目に見えて明らか。ピリピリとした空気が充満するここで、この場でもっとも幼い龐統が楊奉の眼前へと歩を進めた。

「楊奉將軍。私は龐統。字は士元と申します。若輩者ではありますが李信様の軍師を勤めさせて頂いています」

自分の前にやってきた年端もいかない子供の姿に訝しげに眉を顰める。

「率直に申し上げます……ここは引いて頂けないでしょうか」

何を言っているこいつは。冷たい眼差しを送る楊奉に、何時もの慌てふためく様子を全く見せずに逆に堂々とした姿で相對している。

「李信様率いる独立遊撃軍。我らにはある一つの権限が与えられているのを御存知でしょうか」

「……権限だと？」

「はい。独立遊撃軍が組織された当時、常に北方の異民族によって漢王朝は侵略の憂き目にあっていました。洛陽より遠く離れた地域。恐ろしい侵攻速度の騎馬民族。彼らに対抗するために我らに与えられた権限それは——」

戦争の自由。

刻一刻と変化する情勢戦況に対して李信軍は独自に戦いを展開することを許されている。本来であれば許されるはずのないこの権限。劉弁に寵愛され、張讓を後ろ盾する李信にだからこそ与えられた理外の特権。勿論全ての相手に戦争を吹っ掛けて許されるはずもなく、漢王朝に仇なす相手に限られる。つまりとて、異民族に対してのみ振るわれる権限なのだが——。

「即ち我ら李信軍と争うということは、漢王朝と敵対することを意味します」

ぞつとするほどに冷たく鋭く。龐統士元の言葉は楊奉の心を抉っていく。甘く見ては駄目だ。こんな姿形をしていながらこの少女は怪物達の軍の軍師を勤めているのだから。

「黄巾賊の残党を処罰するためとはいえ、六つの村を焼くのは幾ら將軍でも目に余る行為。民は国であり、民こそ国。国を支える無辜の民を虐殺する貴女の行為は、漢王朝に仇なすものと判断して差し支えないかと思われませんが、如何ですか？」

「……物はいいいようだな。お前のそれは所詮は拡大解釈にしか過ぎない。例えそうであつたとしても幾らでも弁明のしようはある」

楊奉の返答に、龐統は本当に不思議な表情でこてんつと首を倒した。

「はい。そうです。ですが——」

貴女に弁明できる機会があると思つていられるのですか？

トブンと楊奉の足が何かに沈んだ気がした。見渡せば、今の今まで見えていた景色が一変している。亡者たちが楊奉を底なし沼へと引きずり込もうと群がってきた。どこまでも陰惨で凄惨な死屍累々とした地獄絵図。その幻覚を見せてきたのは眼前に佇む幼い少女——

— 龐統士元。李信を前にして、死を目の前で突きつけられても退かなかつた楊奉が、この日初めて一步後退した。ここからの選択肢間違えればこの光景が現実となるのだと第六感が痛いほどに危険信号を鳴らし続けている。

「……我らを、殺すというのか」

「楊奉將軍次第であります」

「……一人も残さず始末できると思っているのか」

「逆にお聞き致します」

出来ないと思っているのですか？

本来であれば官軍同士の争いは御法度だ。故に漢王朝に忠誠を誓う楊奉軍には迷いがある。ここで争って本当にいいのかと。だが、李信軍は違う。彼らが忠誠を誓っているのは李信に対してだ。同じ官軍といえど争うことに微塵の躊躇いもない。それに加えて兵数の違い。楊奉軍はおおよそ千人に対して李信軍は三千。さらに錬度と戦場の経験の多寡の差もある。どう考えても楊奉達に勝ちの目はない。全滅させるのは容易い事だ。そして全滅させてしまえば死人に口なし。楊奉のこれまでの行動を考慮すれば壊滅させたとしても、多少強引にだが漢王朝に叛意があった故の誅殺という形に持つていくことが可能。それなりの処罰を李信といえど受けるかもしれないが、十分にかできる範囲だと龐統は確信を持っていた。

「……わかった。お前の提案を飲もう」

全軍退け。楊奉の命令により、村を占拠していた兵士達が撤退を開始する。側近が見せる不満の表情を無視する楊奉は彼らを引き連れ無言のままこの場から立ち去っていく。例え戦ったとしても九割九分九厘の敗北の可能性と、万が一勝ったとしても相手は劉弁と張讓の寵児。どう考えても無事で済む未来が見えない。ようするに対峙した時点で楊奉は詰んでいたのだ。村から離れた楊奉は一度振り返り、見えなくなった李信達を脳裏に描く。

「李信將軍か。思っていたような男ではなかったな」

英雄として在ろうとする男ではなかった。血と暴力に狂った男でもなかった。

「あいつらは私が思っていた以上に、真つ当に狂っているよ」

常人では一日も精神が持たないであろう地獄のような戦場に住みながら正気のまま狂気の道を行く者。果たしてそれに何時まで耐え切れるのか。いや耐え切れるのだろうか、きつと……死ぬその時まで。……怪物め」



「星殿、御無事ですか!!」

「星ちゃん。怪我はないですかー?」

楊奉達が立ち去った後、李信軍の中から女性と少女が姿を現し戦闘体勢を解いた趙雲の下まで小走りで駆け寄ってきた。少女は頭に奇妙な人形を乗せた金髪の少女——かつて荊州の南陽で李信軍と黄巾賊との争いを眺めていた程昱仲徳である。もう一方の女性は、程昱よりも頭一つ背が高い女性らしい身体つき。やや茶色懸かった黒髪と若干釣りあがった眉と目。どこか厳しそうな雰囲気を持っていた。

「ああ。私は大事なぞ……稟、風」

趙雲——真名は星。彼女の真名を呼べるということは、気が置けない友であるのだろう。そして、趙雲もまた程昱の真名である風と女性の真名の稟と口にだしたということは、互いの関係性を如実に表していた。

「すみません。官軍を連れて来るのに遅くなりまして」

「いや、むしろ十分に速かった。奴らの行動が私たちの考えているよりも余程迅速であっただけだ」

稟の謝罪に趙雲は溜息をついて応えた。申し訳なさそうな表情の

彼女を庇うつもりではなく、事実その通りだからだ。趙雲達の見立てでは、楊奉がこの地に来るまでもう二、三日の余裕があったはずだ。それを考えれば程昱と稟の二人が他の官軍に助けを求めに旅立ってから想像以上に早く戻ってきてくれたため、ぎりぎりのところでこの村はすくわれたのだ。

「しかし、まさか李信將軍を呼んで来るとは……」

顔には出さずとも驚いている趙雲は、窮地を助けてもらった李信軍をじつと眺める。相手は車騎將軍楊奉故に、生半可な助けでは意味がないことはわかつていたが、まさかすぎる大人物をよくぞ引っぱりだしてこれたものだと、二人の手腕に心底感嘆する。

「ええ、まあ……その。ただの偶然なんですけどね」

事実稟の言葉通り、ここに李信を呼べたのは奇跡的な偶然だ。本当は伝手を頼りに他の清廉潔白な人物に助けを求めに行っていたのだが、途中立ち寄った町にて李信が近場に駐留していることを小耳にはさみ、予定を変更して彼のもとへと参じることとした。実際に会ったことはないが、噂通りの將軍であるならば、きつと自分達の願いも無下にはされないだろうと考えての行動だったが——彼女達は賭けに勝つことが出来たのだ。

「……ところで、星ちゃん。そちらの方は？」

程昱が趙雲の横にいる徐晃の姿に、誰彼と問う。

「ああ、此方の方は徐晃殿だ」

「徐晃……？ 確か楊奉將軍麾下に名を馳せた徐公明殿という御方がいたと記憶していますが」

「うむ。楊奉とは手を切って私に……いや、この村を守る為に力を貸してくれていた」

「——なんと」

あの將軍の部下に、そのような義に溢れた武人がいたのかと二人は驚きの声を上げる。

「……名乗りが遅れました。シヤンは、徐晃。字は公明」

「これは御丁寧に。私は——戲志才とお呼びください」

「公明様ですね。風は、程昱。字は仲徳と申します」

程昱の名乗りにも、稟こと戯志才は一瞬キョトンとして——頬を引き攣らせた。

「風……あ、貴女……」

「なんですか、稟ちゃん。友の窮地を救って頂いたお方に偽名を名乗るのは失礼だと思いましたがからねー」

ぐぬぬ、と齒噛みして何か悔しがっている戯志才を、適当に受け流している程昱。二人の様子に、苦笑する趙雲と、意味不明な徐晃。

「いやはや、しかしよくあの楊奉相手に言い切ったな。普段のお前とは大違いだな、龐統」

「うん。僕らの威嚇にも表情一つ変えなかったあの婆さんをよく引かせたね」

「……うん。凄い」

「あ、あわわ……」

長への説明が一段落ついたのか李信が華雄と高順、呂布、龐統を引き連れて趙雲達の方へと近づいてくる。楊奉相手にあれだけ言い切った龐統は、華雄達に褒められている今のほうが何故か混乱の極みに達していた。

「でもさあ、あいつ面倒臭そうなやつだったよね。サクつとやつちやうわけにはいかなかった？」

「馬鹿か、高順。相手は車騎將軍だぞ。相当な理由がない限りそのよくな真似できるわけないだろう」

「……そのわりに華雄が一番早く斧を突きつけていた」

「い、いや……あれは三人ともほぼ同時だっただろう!？」

「うーん。僕の見立てでは呂布の言うとおりに華雄が速かったね」

「出鱈目を言うな!!」

思わず大声をあげた華雄は、冷静になるためにも深呼吸をして一度コホンと咳払い。

「実際さ、車騎將軍つてどれくらい偉いの?」

「まさかお前……知らないのか」

「いや、だつてさ……官位にそんなに興味あるわけじゃないし」

「あろうがなからうが、そこは勉強しておけ。呂布でもそれくらいは

知ってるぞ」

華雄は言ってみた後に、疑問を覚えた。口にだしはしたが本当に知っているのか。知っているよな、といった眼差しを隣の呂布へと向けると——肝心の彼女は華雄から視線を逸らした。

「……凄く偉い。でも李信が一番」

駄目だこいつらは。突如襲ってきた頭痛を抑える為に額に手を当てて深い溜息を漏らす。

「ええつと……軍官の頂点が大将軍です。それに次ぐのが驍騎、車騎、衛將軍の三つとなります。つまりは楊奉將軍は文官で例えるなら三公に匹敵する地位に在る御方です」

「滅茶苦茶偉いじゃん!!」

龐統の説明に想像以上の官位だったのか、高順が思わず声を上げた。そんな相手に武器を突きつけていたとは。斬首の刑に処されても不思議ではないが——まあ、元々はあちらが李信を侮辱してきたのが悪いのだから仕方ないとあっさり和高順は肩をすくめ、呂布はそれを聞いてもとくに何の感想もないのか平然としている。

「つてことは、もしかしてあの婆さん……李信より偉かったりする?」

「お、お前は……李信の官位すら知らんのか」

「い、いやだつてさ!?! 僕達がしてたことつて異民族の討伐ばかりでしょ!?! 官位なんてあつても仕方ないというか、気にしてないというか……」

必死に弁明をする高順に、こいつが副将で本当に大丈夫かと心の底から思う華雄は何度目かの溜息をついて龐統への肩に手を乗せた。説明を頼むという合図に、龐統はこくりつと頷く。

「李信様は実のところ正式な官位を戴いている訳ではありません。高順様が仰ったとおり、北の地にて異民族の討伐を行っているという点では度遼將軍に近いのですが……」

それでも車騎將軍よりは格落ちである。官位だけ見れば楊奉の方が李信よりも高い。

「この度起きた黄巾の乱。これによって李信様は四方面のうちの一つの指揮官を任されました。これによって一時ではありますが驍騎將

軍の官位を漢王朝から拝命されました」

「驍騎將軍？ あれ、それってもしかしてさつき言ってたやつ？」

「はい。つまりは楊奉將軍と李信様は現在ほぼ同格であると考えて宜しいかと」

おー凄い。高順が笑いながら李信の背中をバンバンと音が鳴る程強く何度も叩く。それのお返しにと、李信は高順の頭に一度拳骨を落とした。涙目で頭を押さえる高順を無視して、李信は趙雲達の前で足を止めた。

「この度は私たちの願いを聞き届け下さり感謝の言葉もありません」

「深く御礼申し上げます」

「いや。此方こそ俺達官軍の問題に巻き込んで悪かった」

戲志才と程昱の感謝の言葉に、此方の問題であったと逆に謝罪をする李信。

「おお。なんとも懐の広い御方ですな。噂に偽りは無しと言う事ですか」

自分の発言で李信の注目を集めた趙雲は、將軍の前であるということも気にせず薄く笑みを浮かべて見つめ返す。先程まで死線の上にあった彼女から匂い立つ戦場の香り。されど。趙雲子龍は絶佳の如く美しさを兼ね揃えている。

「手前は姓は趙。名は雲。字は子龍と申します。以後、お見知りおきを」

「俺は知っているとは思いますが李信。字は永政という。それにしてもたいた腕前だ。その名覚えておくぞ、趙子龍。それと……」

趙雲の横にいる徐晃へと視線を移動させる。趙雲とほぼ同格と判別できる少女の姿に、こんな小さな村に華雄達級の武人が二人もいるとは予想だにしていなかった。ふわあ……と目をぱちぱちと開け閉めを繰り返す徐晃だったが、李信に見られていることに気づき、慌てて拝手の礼をとる。

「姓は徐。名は晃。字は公明です。楊奉將軍のもとで騎都尉を努めていました」

「楊奉のもとで？」

ならば何故ここに残っているのか。そんな疑問がありありと顔に出ていたのか、徐晃を庇うように趙雲が彼女の前に立つ。

「徐晃殿はこの村の為に楊奉將軍と袂を別ったのです。彼女がいなければこの村は李信將軍が到着するまでに災禍に襲われたことでしょう」

民家の周囲に転がっている幾つもの死体を順に見ながら李信が応える。

「この者達を殺めたのは私達ですが……罪に問われることになるのでしょうか?」

「……そこはどうなる龐統?」

「あの……流石にこの場で無罪放免というわけには、いかないです。洛陽で裁判を受けて頂かなければならないかと」

幾ら無体を働こうとしていたとはいえ官軍の兵士をこれだけ殺して無罪放免というのは流石に無理がある。だが、趙雲としてもはいそうですかと素直に裁判を受けにくい気になれはしない。

「そこで一つ取引をしませんか?」

「取引……と申されるか」

「はい。私たちとしても、楊奉將軍の行為を上層部に訴えたいと思っています。その証人となって頂きたいのです。代わりと言っては何ですが、子龍様と公明様の裁判は無罪になるように全力を尽くします」

悪くはない提案だ。ここで龐統の取引を無視することもできるが、李信には先程場を治めて貰った恩がある。それに楊奉に関しても、これからもあのような蛮行を行うのならば放っておく訳にもいかない。それに李信達の力があれば裁判を受けたとしても無罪になるのはほぼ確実であろう。それは同士討ちをした徐晃であったとしてもだ。考えた結果、龐統からの提案を拒否する選択肢は浮かばなかった。趙雲が念のためにと戯志才と程昱の表情を窺うと、彼女達も頷いている。二人がそう判断を下したのならばまず間違いはないはずだ。

「それにしても……徐晃といったか。あの楊奉に物申したか。たいした度胸だ」

対峙してみてもわかったが、楊奉もまた一廉の者。彼女のみならず千の配下と敵対することを選ぶことが出来る者は中々いないだろう。

「あ……はい。でも……結局は何も出来ませんでした」

項垂れる徐晃。この村は偶々うまくいった。だが、これまでの村は見捨ててきたに等しい。貴方ならばこんな真似はさせなかつたはず。後悔しかない彼女ではあるが、確かに状況的にはそうかもしれない。徐晃がしたことは、数人の兵士を斬っただけ。もしも李信が来ずにあのまま続けていれば今頃どうなっていたか。

「だが、お前の行動がこの村を救う一助となった。俺達が駆けつける時間を稼いでくれたんだからな」

お前の五常に感謝する。李信は徐晃に感謝の言葉とともに頭を下げた。嘘偽りのない憧れの將軍の礼に、言葉もなくぽかぽかと心が温かさを感じる。

「悪いがお前も俺達に付き合っつて洛陽に帰還してくれ。悪いようにはしないことを俺の名において約束する」

「……はい」

一も二もなく頷いた徐晃。そして趙雲達三人の了承を得た李信は帰還の準備をするためにこの場から離れていった。しばしの間、趙雲達四人の間に沈黙の帳が舞い降りる。いや、時折徐晃がなにやら、ふわあと夢見心地で声をあげている姿が不気味であった。

「……気をつけたほうが良いですよ、星殿」

「そうですねー。でも星ちゃんだけじゃなくて稟ちゃんと風もですけど」

「む……どういうことだ？」

完全に李信達の姿が見えなくなったことを確認した戯志才と程昱の忠告に趙雲が若干驚いた顔を見せる。

「別に李信將軍が私達を謀る、とかそういう意味合いではありません。あの御方はそのようなことはしないでしょう。ですが……」

「軍師の士元様は風達に嘘を吐かれましたからねー」

まあ、些細なことですが。

平然と言い切った程昱とそれに頷く戯志才。説明を続けてくれ、と

趙雲は彼女達の言葉を促す。

「厳密に言えば嘘とはいえませんが、この場で無罪放免とする訳にはいかない、という判断がです。はつきりと言いますが、李信將軍にはそれだけの力があります。漢王朝の上層部にも影響するだけの圧倒的な権力が」

「無闇にその権力を奮えば何かしらの軋轢を起こすかもしれないという点では、士元様の見立ても正しいとは思いますが……今回はおそらくは私達を洛陽まで連れて行く方便ではないでしょうか」

「ええ。私達……というか、星殿ですね」

一目見ただけでわかる武人として完成された趙雲。漢王朝に属しておらず流浪の身であるならば、人材を欲している李信達にとっては喉から手が出るほどに必要な相手だろう。だが、趙雲達は楊奉が村を焼いて回ったという事実を知ってしまったている。幾ら李信達が楊奉を退け趙雲達の味方をしたといっても、官軍への印象は最悪に近い。故に、洛陽までの道程でその印象を払拭してしまおうという企みがあるのではないか。それについては戯志才と程昱も同じ理由であると言える。この村への道すがら、龐統とは様々な話をした。ただの世間話に見えて、その実戯志才と程昱の底を見極めようとする眼差しであった。

「まあ、悪いことではないということだな。それならば遠慮なく一緒に行かせて貰おう」

朗らかに笑う趙雲に、わかりましたと戯志才と程昱は静かに頷き、対する徐晃は全く三人の話を聞いておらず、既に姿が見えない李信の後姿を見つめ続けていた。

ちなみに騒動の発端となった韓暹はというと完全に忘れ去られており——その後名前を変えてこの村にて永住したとかしなかったとか。

▼

李信軍のみならば最速の行軍で短期間で洛陽へ帰還できるのだが、趙雲達四人の客人がいたためゆっくりとした道程であった。夜の帳が下り、李信軍は夜営の為の準備を始める。戦争中ならば幹部の間は作戦立案などで忙しいが、現在の状況では特に差し迫ってやることもなく、夜営の準備を手伝い始める。それに意外な目を向けるのはまだ入隊したばかりで李信軍に馴染めていない徐晃と、客扱いの趙雲達三人である。嬉々として指示を出しながら準備を率先して行う将軍——しかも漢王朝最強と名高い李信永政の姿に言葉もないとはこのことだ。

「……李信将軍は変わった御方ですね」

「そうですねー。将軍位にあるお人が夜営の準備をして回るなんて話は聞いたことがないですよ」

夜営の準備が終わり、夜の闇の中で映える焚き木を囲っている戯志才が、受け取った配給に舌鼓を打ちながらそう独り言ちた。彼女の言に同意するのは程昱であり、趙雲もまた無言で肯定する。徐晃も頷くと同時に一口食べた配給があまりにも美味かったのか一瞬目を見開いた後、次々と頬張っていく。これまで従軍していた楊奉軍の料理とは全く違って純粹に味が良い。頬をパンパンにする彼女はどこか小動物的で観ている微笑ましい姿を見せてくれる。

「よう。どうだ、うちの飯は？」

夜営の準備が完了したのだろうか。李信が華雄や高順、龐統に呂布を引き連れて趙雲達の下へと姿を表した。座っていた彼女たちは一

齊に立ち上がって礼を取ろうとするが、それより速く李信が軽く手を振る。

「公式の場じゃない限り、そんな畏まらんでもいいぞ。余計な肩がこるだけだ」

俺のな……と笑う姿は、やはり官軍の将らしからぬものがある。だが、彼女達としても気を使わなくても良いのは非常に助かるためそれを口に出すことはなかった。

「悪いな、徐晃。あまり居心地がよくないだろ？」

「い、いえ……皆さんにはよくして頂いています」

「本当か？ もし困ったことがあれば俺にでもいいし、うちの連中の誰にでもいいから声をかけろ。誰であっても悪くはしないはずだ」

有難うございますと頭を下げる徐晃に対して満足気に頷くと李信は彼女達と同じ焚き木を囲んで腰を下ろす。龐統から受け取った配給の品は他の人間と同じ物であり、文句一つ言わずにそれを食べ始める。あつと言う間に食べ終わると、持ってきていた瓢箪から盃に酒をなみなみと注いでそれを一息で飲み干した。

「おお……李信將軍は酒を嗜まれますか」

「ああ。人並みにはな」

「何を仰いますか。見事な呑みっぷり。余程お好きと見えますが」

「……昔から戦場に行った時には呑んでたからな。まあ、呑みすぎなければ悪いもんじゃない」

「酒は呑んでも呑まれるな……それには同意致します」

良かったらお前も一杯どうだ、という李信の言葉に——即座に焚き木を囲っている円からの離脱を試みたのは華雄と高順だ。常に李信の傍にいる呂布すらも珍しく立ち上がると華雄達と同様にこの場からの撤退を試みていた。唯一李信の傍に残っているのはあわわと混乱に陥っている龐統のみ。彼女達の不自然さに疑問を覚えつつ趙雲は杯に李信から酒を注いで貰う。

「お前たちは？」

「私は酒は飲まない様にしておりますので」

「風も下戸ですのでお気持ちだけで結構です」

「……頂きます」

戯志才と程昱は断りを、徐晃だけが盃を差し出してきたのだが李信は彼女の姿を見て果たしてこの少女は成人しているのかと一瞬疑念を持つものの、まあいいかと相変わらずの大雑把ぶりを発揮して新しい配下へと將軍手ずから酒を注ぐ。

そして二人が同時に盃の酒に口をつけ、咽がゴクリと音を立てた瞬間の出来事であった。

「っほっ……っほっ……っほっ……熱っ!？」

酒好きの趙雲が盃を地面に置くと何度も咳き込み始める。彼女の言葉通り咽が焼けるように熱い。何かしらの毒が入っているというわけではなく、趙雲が今まで飲んできた酒が足元にも及ばぬほど度数が異常に高いというだけだ。中々咳き込みが止まらない麗しの美女の姿に、離れていた三人が憐れみの視線を送っている。

「やはり無理だったか」

「あれはちよつとねえ……僕はもう二度と飲みたくないよ。うまいまじうって話じゃないもん、あのお酒」

「……うん」

長い付き合いの三人は、既に李信が好んで飲んでる酒の洗礼を浴びていた。彼女達も戦場を生きる身。戦争中、戦争後、宴会で勝利の美酒に酔いしれることも多いが、李信の酒に対する味覚だけは理解できなかつた。

「俺は好きなんだけどな、？公酒。まあ、最初は俺も一口飲んだだけでぶっ倒れてたけど」

カカカツとかつてを思い出して笑いながらも新たについだ酒を飲み干していく。今の自分ならば前世で尊敬した？公將軍とも美味しい酒が飲めるのではないか。決して叶わない夢を脳裏に描きつつ、ようやく咳きがおさまった趙雲が二度目の挑戦を試みようとする。盃を手にとる姿を見て彼女の不屈の精神に、おおと感嘆の声を上げた。

「その意気やよし。周りは掛け声で盛り上げていくぞ」

となーりーのじじーいー金〇はー。

さあ俺に続けと、誰もが聞いた事のない掛け声を高らかに一人歌い

始める李信の姿に、目を丸くする戯志才と程昱。ハアツと深く溜息をつきながら華雄と高順が機嫌が良さげの自分達の将へと近づくと肘鉄を入れる。ごふつと咳き込んだ李信に睨まれる二人だったが、そんな李信の視線などどこ吹く風の副将二人。

「そのろくでもない掛け声は止めろと何度も言ってるだろう」

「うん。もうちよつとましなやつにしなよ。あつちの可愛い二人も固まってるでしょ」

「ろくでもないとは失敬な奴らだな、おい。これは数百年の由緒ある掛け声なんだぞ」

ぎゃあぎゃあと言い合う三人の姿はまるで子供のようにも見えないや、ようではなくむしろ子供だ。恥も外聞ない三人の様子はますますと白熱していく。

「……いつもこのような感じなのでしょうか？」

「え？ あ、その……はい。私も李信様の御傍に置いて頂いてそこまで長くはないですが……何時もこのような感じですよ」

どうやって仲裁に入ろうかと思案している龐統へと戯志才が声をかけると、若干困った顔で肯定する。漢王朝でも名高い李信軍の長と幹部の見せる姿とは思えない様子に戯志才は僅かに感じていた緊張が解け、完全に毒気を抜かれた気分となった。そんな戯志才の耳へとゴホゴホッと何度も咳き込む音が聞こえる。そちらに目を向ければ、趙雲が何口か飲めたものの盃の酒は一向に減っている様子は見られない。酒を好み、強いと自負している趙雲でさえも顔に赤みが差し目の焦点が怪しくなってきた。

「……」馳走様でした」

そんな中で、驚愕する事態が引き起こされる。注目を浴びていなかった徐晃がペコリつと頭を下げ感謝を述べた。何事かと思えば、彼女の盃には酒が残っておらず一気に飲み干していたという事実、現在進行中の趙雲と過去味わったことがある華雄達は平然としている徐晃に戦慄を感じずにはいられない。

「凄いな、徐晃。この酒を残さなかったのはお前が初だぞ。味はどうだった？」

「……少し辛かったですけど、シャン……わたしには美味しく感じました」

大笑いしながら大層嬉しげに徐晃の背をバンバンと音がするほど強く叩く。今まで一度も彼女のような反応をしてくれるものはおらず、？公酒に関してのこれまで積もりに積もった鬱憤が一気に晴れ渡っていく気持ちであった。

「よしよし、飲め飲め」

徐晃の前にて座り込んだ李信が空になった盃へと注ぎ、上機嫌の彼は小さな徐晃の頭をわしわしと力強く撫で付ける。撫でられていることに嫌な顔を一つせず、淡々と盃の酒を減らしていく徐晃。彼女の姿に見栄や嘘は見当たらない。どうやら本当に旨いと思っっているようで、李信軍の面々は引き攣った表情のまま、二人の姿を眺めている。しばらく後に徐晃は李信軍に入隊することになるのだが、それ以前から徐晃は李信のお気に入り存在となったのか、公私問わず一緒に酒を飲みに行く姿を見かけるようになったのだった。



洛陽への帰還後、楊奉の行った所業に関しては上層部に連絡をいれ、その関係で李信達は二、三日ほど忙しく動き回っていた。趙雲達もまた、証人としてしばらくの時間を拘束されたものの考えたいたよりも丁寧で迅速な対応をされたことを少々意外に感じるので

あつた。もつとも李信の客人にもあたる彼女らにそう雑な対応など出来るはずも無い。そんな中で洛陽での仕事が一区切りついた李信含む幹部達が、趙雲達三人に礼をいうべく彼女達の宿泊している宿へと足を運んだ。

「悪いな。お前達のおかげで随分と助かった」

「いえ、たいした力添えも出来ず申し訳ない」

李信の感謝に趙雲が首を振る。事実、趙雲や戯志才、程昱がいなかったとしても裁可は全くといって良いほどかわらなかつたのではないかとも思えた。それは事実なのだが、それを素直に言うほど李信軍の人間は空気が読めないということとはなかつた。

「そ、それでは……お約束通り此方が感謝の品となります」

相変わらずの人見知りを発揮する龐統が袋を三つ抱えて前に出る。チャリつと耳に聞こえる金属音と袋にパンパンと詰まったそれは大層な額だと予想が出来た。

「有り難く」

「ありがとうございますー」

戯志才と程昱が受け取つたが、趙雲は何かしら考え事をしているのか袋を受け取らずに空を見上げていたのだが、何か思いついたのか機嫌よさげににんまりと笑顔を浮かべた。

「そちらは遠慮させて頂きます。代わりと言つてはなんです……李信將軍。貴方と手合わせをお願いしたい」

趙雲の申し出に、正気かと驚きの顔を見せる華雄と高順。呂布は一度趙雲の全身を確認するも、すぐに興味をなくしたのか欠伸を一つ。龐統は、あわわと傍にいる李信を見上げ主の答えを待っている。

「いや、まあ……別にいいけどな」

「それでは是非にでも!!」

それが褒賞になるのかと眉を顰める李信だったが、返ってくる趙雲の興奮した返事に首を捻る。手合わせをするならばこのようなどころではなく、広い場所でやらねばならない。幸いにも宮殿の中の一部にある練兵場は李信達が好きに使つても良いという許可を貰つているためそちらを利用するかと皆で移動を開始した。しばらく歩き練

兵場へと到着すれば驚いたことに、李信軍の兵達が休みだというのに各々訓練をしている姿が見受けられる。そんな彼らの注目を浴びつつ、練兵場の中心にて遂に李信と趙雲がそれぞれの干戈を手にとって対峙した。

「なあ、高順。もし良かったら賭けでもしないか？」

「賭け？　どんなの？」

「もちろん、李信と子龍の戦いがどうなるか、だ」

「いやいや。それって賭けになるの？」

華雄の賭けの誘いに呆れた様子を見せるのは高順だ。それに頷くのは胡軫である。

「その賭けはちよつと無理っぽいでござえますよ、姉御。その賭けならあたしは隊長に全つっぱしますでござえますが」

「僕も李信に全賭けするけど……」

俺も、私も、僕も、儂も、と……周囲の李信軍の者達もまた同様だ。それを聞いていた華雄は、自分の頬を掻きながら若干困った顔を見せる。

「まあ、そうなるか。自分で持ち出してなんだが、確かに賭けにはならんな」

単純な勝敗、では。せめて李信に傷一つでもつけることができれば趙雲の勝利という条件下ならばまだ賭けは成立するだろう。しかし、華雄の見立てでは——それでも厳しい。確かに趙雲の力量は凄まじい、の一言だ。純粹に、強い。恐らくはこの場でまともに彼女と渡り合えるのは、呂布は別格として、華雄と高順くらいではなからうか。李信軍の古強者の面々を凌駕する戦闘者。それほどの高評価でありながらも、彼女たち配下の者達からの自身の将へ対する信頼は篤い。例え如何なる相手であろうとも李信に敗北はない。必ずや自分たちが勝利を見せてくれるといった狂信染みた絶対の信望を捧げている。

いや、まて。

だが、華雄は己の心中に湧き出た得も言われぬ不安に身を苛まされた。皆が李信が勝つと信じている。自分もまた同様だ。それに嘘偽

りなど微塵もない。ならば何故、自分はこんな賭けを口に出したのか。最初から賭けにならないことを理解していながら、どうしてこのような賭けを持ち出したのか。背中を奔る理解不能な怖気に眉を顰め、華雄は目の前の練兵場にて距離をおいて佇む二人に厳しい視線を送るのであった。

一方若干離れた位置にいた戲志才と程昱だったが、華雄達の賭け事のこと聞いて聞こえたのか、ふむと短く戲志才がつぶやいた。

「何やら面白そうなことを話し合っているみたいですね。それならば私達も見習って賭けをすることとしましょうか」

「賭け事ですかー？ でも、あちらも成立はしなかったみたいですよー。風達二人で賭けても同じ結果になると思いますけど」

「友達甲斐がないですね、風。貴女は李信將軍に賭けるといいますか？」

「はいー。確かに星ちゃんは強いですよ。風が知る限り中華において十指に入る武人と評価しています」

ですが、それでも星ちゃんは人の範疇です。
李信將軍に伍するとは思いません。

平然と表情一つ変えずにそう言い切った程昱であったが、戲志才はゆっくりと首を振った。

「ならば私は星殿に賭けましょう」

彼女の言葉に、程昱は珍しくも驚いたのか軽く目を見開いて首をこてんと横に倒した。

「大穴狙いですかー、稟ちゃん」

「そうですね。ですが……十分に賭けになる大穴だと思えます」

戲志才が言い終わった瞬間の出来事であった。刹那、誰も彼もが目を見張る。耳を劈く金属音。金属同士が激しくぶつかりあった故に生じる不快な激音が木霊した。今の今まで居たはずの場所から姿を消した趙雲が、李信の間合いへと踏み入った状態で龍牙をまつすぐと突き出した体勢でいたのだから。突き出された鋭い槍の切っ先は、李信の大矛の刃で受け止められていたが、彼の表情はただ驚愕という言葉に相応しいものに染まっている。

「御見事、流石は李信殿!! 我が槍をここまで容易く受け止めるとは!!」

心底感嘆した表情と言葉を残して、今度は誰もが見える速度でいっそ軽やかに後退し間合いを外す。そんな趙雲に追撃を仕掛けることもなく、李信はただただ驚きを隠せぬまま彼女の動きを見送っていた。ヒュッと軽く龍牙を振るいながら、誰もが見惚れ蕩けさせるような笑みを浮かべ——趙雲の肉体から噴出するのは台風を連想させるほどに荒れ狂う颯風。四方八方へと無秩序に狂い荒ぶり、あらゆる存在を調伏する。呼吸すら困難に感じる重い空気の中、驚嘆するのはともに旅をしてきた程昱であった。趙雲が強いのは知ってもいたし、理解もしていた。先程言葉に出したとおり広い中華において十指に入ってもおかしくはない。名が広まっていないのは、彼女の若さゆえにだと思っていたが、思っていたのだが……。

「改めて名乗らせてもらいましょう!! 北方の飛將軍、李永政!! 我こそは常山が武人。姓は趙!! 名は雲!! 字は子龍!!」

中華七槍全てを降した者。

神槍。趙子龍。それが今貴公の前にいる者だ。

キラキラと初めて玩具を与えられた子供のように瞳を輝かせて吼える趙雲に、程昱はようやくと友の普通ではない姿に納得をする。趙雲の出身は冀州の常山。李信がここ数年で転戦を繰り返していた北方の幽州、并州に近い場所だ。となれば、彼女も幼い頃より李信の活躍は嫌と言うほどに耳にしているはず。北方の漢民族においては絶対の英雄。それが飛將軍李信という男である。まだ故郷にいた頃より武を志していた趙雲ならば、李信を夢見、目標にしていたとしてもおかしくはない。つまりは趙雲は、我が友は、憧れの人物と矛を交えることが出来ている。ならばこそ、普段の冷静沈着な彼女の姿とはかけ離れた、あの興奮にも納得がいくというものだ。

事実、程昱の推測は当たっていた。趙雲子龍は郷里にて修行に励んでいた頃より李信の名声を聞き及んでおり、その修行時代から彼に憧れ、武の到達地点として見定めていたのだ。二年ほど前から故郷を離れて武者修行の旅に出て、各地の名だたる武芸者に挑み続けてきてい

た。

ならば何故、趙雲の名前が世間にそこまで知れ渡っていないのか。程昱は若さ故に、と考えたがその推測は間違っていた。単純に彼女は戦いを挑む際に自分の名前を名乗ることが少なかっただけだ。本来の武芸者ならば、自身の名声を高めるためにも必ず名乗りを上げる者が大多数。だが、趙雲は自身の名が知れ渡ることにより、自分が逆に世間一般の有象無象に挑まれる立場になることを嫌ったのだ。勿論、その中には強い者もいるかもしれない。無名の未だ見ぬ手練れが存在するかも知れない。それでも、それはきつと期待するのも馬鹿らしいほんの僅かな可能性であろう。

故に彼女は自分の名を名乗らずにひたすらに中華に名だたる強者に戦いを挑み勝ち続けてきた。既に死去している侯選を除き、中華七槍と称えられる槍使いの頂点の悉くを打ち倒し、人知れず神槍と呼ばれるにまで至った怪物。李信と呂布の孤高の領域を目指し高みへと登り続ける求道者——それが彼女、趙雲子龍だ。

「さあ、李信殿!! 見てください!! 見せて下さい!! 私の槍を!! 貴方の矛を!!」

至高の領域を体感させてくれ。

趙雲の身体が弓から放たれた矢が如く、その場に残像を残して跳ね進む。先程よりもさらに早く、速く神槍の刺突は李信の胸元へと吸い込まれていった。されど、ギャンつと耳障りな衝撃音が耳を打ち、趙雲の龍牙は一度め同様に受け止められる。防御されるのは当然と考えていた趙雲の動きは素早かった。今度は間合いを外すことなく、その場で繰り出される無数の連突が襲いくる。突く速さ、引く速さ、どちらともが今世にて李信が戦ってきた槍使い全てを凌駕する神速の世界の住人。いや、桁が一つどころか二つばかり違う異世界の住人であった。

速さに特化している故に、一撃一撃の重さはそこまででもない、勿論そこらの達人級の腕前の持ち主を一突で屠れる威力を秘めてはいるが、それでも李信の防御を突破するには至らない。だが、その攻防の最中くると趙雲の手首が返される。突きではなく払いへの変化。

風を切る鈍い音をたてながら水平に龍牙が払われる。その急激な変化に慌てる様子を微塵も見せず、瞬時に身を沈ませてやり過ぎたと同時に下方向からの大矛の掬い上げを放ち、趙雲の槍を上方へと大きくかち上げた。腕ごと持っていかれそうな衝撃に歯を食いしばって堪えるが、瞬時に自分の頭を割り砕こうと大矛の鋒が凄まじい勢いで振ってくる。並みの者ならば何が起きたか理解する間もなかったであろう。腕の立つ者であっても恐怖で動くことは適わなかったはずだ。だが、趙雲は僅かな恐怖も躊躇も見せることなくその鋒を瞬き一つせずに軌道を確認、認識し、一寸の見切りを持って必要最小限の後退のみで回避しきった。

「ふはっ!! ああ、ああ——なんとも容赦の無い御方ですな!! 私のような美女であつても問答無用ですかっ!!」

「——自分で美女つていうか。自画自賛もここまで躊躇いがないと気持ちいいもんだ」

まあ、美女つてのには異論はないけどな。

その言葉。有り難く受け取りましょう。

互いに無言の会話で大矛と龍牙が火花を散らす。趙雲の揶揄するような台詞ではあるが、口角を吊り上げて笑う姿はこの戦いを心の底から楽しんでいる証左でしかなかった。対する李信もまた表情から驚愕の色は抜け落ちて、純粹に笑っていた。目の前にいる自分を怖れぬ勇敢な挑戦者の存在を完全完璧に受け入れて、もはやこれが手合わせだということも忘れたのか容赦のない攻撃を仕掛け始める。あくまでも軽い手合わせ程度を予想していた彼の想像の遙か上。血が沸き肉が躍る。なんとも甘美で、極上のひと時を提供してくれる趙雲に深い感謝の念を抱くほどであった。

趙雲の言葉通り容赦のない唐竹一閃。全てを断ち切る一直線の振り下ろし。左肩から右胴を切り裂く袈裟懸け。それとは対象の右肩から左胴へ抜ける逆袈裟。右胴から左胴へと切り抜く右薙。逆胴となる左胴から右へと切り払う左薙。右下から左肩へと跳ね上がる右切上。左下から右肩へと放たれる左切上。股下から胴体を裁断すべく振るわれる逆風。それが一息つく間もなくほぼ同時に趙雲の眼前

にて披露された。

決死の覚悟でそれらを回避しつづけるのは趙雲だ。速度だけならば李信にも匹敵する彼女ではあるが、単純な膂力ならば圧倒的に及ばない。それに元々槍は、防御することに向いているという訳ではなく、相対した敵の武器を巻き上げ払い流すという操法に重きを置いている。趙雲が得意としているのは相手の攻撃を後退しながら体を左右に開いて躲し反撃する抜き技に、敵の得物に龍牙を巻きつかせて払い落とす巻き落とし。直接相手の武器を狙って叩き落とす技術などもあるが——それら技術を使う余裕が全くと言って良いほど存在しなかった。僅かな手合わせで速度は互角されど膂力、技術、経験は比べるのがおこがましいほどの差が嫌というほどに身体が理解してしまったからだ。それで趙雲を責めるのはいささか酷であろう。李信の技術は正式な武の手解きを受けたわけではないが、前世においては幼い頃から自分よりも格上の相手との死闘に加え、さらには数百の戦場での戦いを経験したことを加味すれば彼に勝る者を探す方が難しい。

そんな化け物の連撃を紙一重で回避しきる趙雲もまた人外の領域に足を踏み入れかけているモノ。カツと鋭い呼吸を吐き出すとともに、李信の攻勢を呑み込もうと火勢の連突きが放たれる。見える刺突は霞む速度の一撃のみで、実際は一瞬五連の音が後からついてくる鋭利な津波の大瀑布。しかし、それでも李信のかざす大矛の防御を破るには至らない。速度は互角でも数百の戦場を超え、千を上回る殺し合いを踏破してきた大將軍の死へ対する嗅覚と直感を凌駕することが出来ないのが現状であった。それが限界。これが現実。目の前の光景こそが目の逸らし様がない絶対的な彼方と此方の力の差だ。

ならばそれを穿ち貫くまで。

思考が加速。ありとあらゆる筋肉を弛緩させ——秒後には全身の肉体を限界を越えて働かせる。ぎりぎり悲鳴をあげる身体を無視して、趙雲が声にならない咆哮をあげて繰り出すは先程よりも更なる領域速度の刺突。しかも、しかもだ。放たれる六連突が不規則な軌道を描きありえない角度から李信へと襲いくる。六連の刺突のうち

半分が龍指と呼ばれる槍使いの秘技。龍指一度だけならば中華七槍級の達人ならば使いこなすことできるであろうが、目にも留まらぬ六連撃でそれらに龍指を織り交せて放とうなど人の限界を越えた神技だ。

龍巢。我が極限。とくと御覧じよ。

それはまさしく龍の巢に閉じ込められたかのような圧迫感と危機感を李信にすら味あわせる一手であった。迫りくる六種の龍の牙を前にして——李信は初めて後退した。大きく距離を取って、趙雲から逃げ出した。シンと静まり返る練兵場で向かい合うのは激しく呼吸を乱す趙雲と、今の今まで喜びに満ち溢れていた表情が完全完璧に抜け落ちた李信の二人。能面のような、どこか冷たい面持ちで黙って趙雲を見つめる姿に、彼を知る李信軍の面々も驚きを隠せない。強き者と戦う李信は何時だって楽しげだ。強者へ対する期待と興奮。自分にどこまで喰らいついてきてくれるのか。未知なる相手との戦いを楽しんでいる。そんな彼が、こんな姿を見せるのは誰も彼もが初めてで、どこか不気味な気配を感じさせられた。

「はあっ……随分、と……様子が変わられ……ましたな。我が槍は、貴方に脅威を……抱かせるに、足りましたか？」

李信が返すのは沈黙だ。そして次の刹那には無造作に、何の躊躇いもなく大矛を薙ぎ払っていた。集中していた趙雲の秒を十に分割したよりもなお短い意識の空白をついての一撃に、疲労もあって回避が困難だと判断した彼女は槍の柄で間一髪で受け止める。だが、受け止めると同時にきたるのはかつてない衝撃。ぶわりつと趙雲の身体が軽々と弾き飛ばされる。空が地に、地が天に。真逆となった視界のなかで、空中に弾き飛ばされたと気づいた彼女であったが、優れた平衡感覚が正しい世界へと肉体を導いた。なんとか地面に着地した趙雲だったが、李信へと視線を向けて、思わず呆けたような声が出た。

自分が先程までいた場所から軽く十メートル近くは飛ばされていたからだ。なんとも非現実的な圧倒的なまでの威力に頬が引き攣り、さらに李信を中心として黒くて暗い闇が現出し始めた。戦場を生き、

の力全てをたつた一つに、一撃に、一点に収束させて龍牙を李信へと放った。見るだけでわかる圧倒的な破壊力を秘めたそれを真正面から受け止めて——弾かれるのは趙雲の槍。ぐるりつと身体が後方へと弾かれ今にも崩れ落ちそうな体勢となった。ザツと地面を踏み締めて追撃を考えた李信の背中にひたりつと這い寄り冷たい予感。

戦場で幾度も経験してきた死という名の気配に全身が包まれる。それを肯定するのは趙雲子龍。吹き飛ばされた力すらも利用し身体を回転、低い体勢の彼女の肉体の影から突如として李信へと迫り行くのは天を駆け上る昇り龍。完璧な死角からの龍牙による突き上げに、その攻撃に、その動きに何故かピタリと動きを止めてしまった李信は、ハツと気がついたときには眼前に槍の穂先が迫ってきていた。首を捻り、龍牙の直撃を避けることに成功したが、李信の顛顛から——激しく散じる真っ赤な鮮血。動きをとめた一瞬がかする程度ではあるが、李信に傷をつけるという結果を生み出した。返り血を浴びた趙雲が後方へと大きく距離を取ると死線を潜り、死線を越えた趙雲は呼吸困難に陥りそうな程に激しく息を吸って、吐くを繰り返す。飛び散ってきた返り血が頭から頬へ。頬を伝って流れ落ちてきたそれを反射的に舐め取った。鉄臭い味わいが口内を満たし、死線を越えた興奮と李信に一矢報いた満足感に身を焦がす。一方の李信はその場で滴り落ちる血を服の袖で乱雑に拭った。

「馬鹿、な……李信に、血を流させただど？」

「……うそ、でしょ」

李信が傷を負ったということに愕然とするのは華雄や高順のみならず、練兵場にいる人間全てであった。万を越える人が入り乱れる戦場は例外として、一对一の戦いで李信に手傷を負わすことが出来たのはただ一人。涼州で勇名を馳せた手下八部も、中華の地を脅かした異民族も、華雄や高順でさえも無傷で倒した李信が唯一苦戦した怪物——それが呂布だ。つまりは趙雲子龍は、二人の間に割ってはいる事ができる武人だというのか。

そんな思考を遮るように、誰かがヒイツと短い悲鳴をあげた。それに何事か、と思えば先程までの光景が一変し、周囲が、練兵場が黒く

塗りつぶされていた。地面が底なしの沼になったのではないかと思わせる黒くて暗い漆黒の奈落がこの場にいる全ての人間を飲み込んでいく。いや、これは幻覚だ。あまりにも他とは隔絶した生物の純粹な負の感情の爆発が、この世の物とは思えない混沌と叫喚渦巻く阿鼻地獄を幻視させてきたのだ。その発生源となっているのは、いわゆるがな呂布奉先である。今にも趙雲目掛けて襲い掛からんとする姿を見せる彼女に、誰もが戦々恐々とするなかで、華雄が何の躊躇いもなく近づくと呂布の頭に手を置いて力強く撫で付けた。ギロリつと睨みつけてくる呂布の眼力はそれだけで心臓を麻痺させかねない圧力を伴っている。それを浴びながらも、くはつと楽しそうに笑うのは李信軍が副将。

「安心したぞ、呂布。どれだけ外れていようとお前も人であったのだな」

「……」

何を言っているこいつは。胡乱気に見やる呂布を無視して、腕で彼女の頭を抱えるように自分の胸元へと押し付ける。

「その気持ち。その感情。お前の胸中を支配するそれは、何か分かるか？」

意味が分からないのか反応しない呂布をさらに力強く抱きしめて。「嫉妬だ。お前は自分と李信だけの世界に飛び込んできた子龍を妬んでいる。だが、お前はそれでいい。それがいい。昔のお前よりも今のほうが余程好感がもてるぞ」

怨念渦巻く圧力を浴びながら、華雄はどこまでも自然体。

「まあ、今のうちにそれに慣れておけ。なに……近い将来そこにもう一人割って入らせて貰うのだからな」

「——もう二人だと思っけどね」

肩をすくめて華雄に続く高順も、呂布を怖れている様子は全くなかった。それどころか眼を爛々と輝かせ、李信を意識し続けている。二人力を合わせたとしても呂布の全力には程遠い二人。だが、決して諦める事を知らない華雄と高順の姿に——呂布の心の中に燃えるどす黒い嫉妬の炎は僅かに沈静するのであった。

そして、練兵場を眺めることが出来る高台から李信達を見下ろしている人物もいた。第一皇女劉弁と彼女の近衛兵である。兵士達は自分たちが想像もできない領域の戦いに感動すら覚え、瞬き一つせずに食い入るように眼下の李信と趙雲に魅入っていた。劉弁はというと、途中までは興味を持っていなかったようだが、李信の様子が一変した頃より真剣な眼差しを李信へと送っている。

「ふっ……そうか。信よ……お前はそやつに王賁の影を見たか」

かつての時代。戦国七雄に数えられた秦を除く他の六国を滅ぼすのに尽力した秦国最強の將軍達。後世に中華六将とまで謳われるようになった怪物の一人。名門貴族の後継のうえ中華最強の槍使いでありながらも軍略にも優れた万能の將軍。李信が三百将の頃より互いに忌み嫌いなながらも高めあつた生涯の宿敵ともともいえる男。その王賁の影を李信は趙雲に見た。彼女の技量、覚悟、伸び代、気配。ありとあらゆるものが李信にかつての宿敵を思い出させた。

「全く。可愛いやつだな、お前は。素直に嬉しそうな顔をすれば良いものを」

他の相手ならばいざ知らず、李信の脳裏にこびりついたのは終生いがみ合つた男の姿。自分に迫りくる趙雲にそれが重なり劉弁の言葉通り、思わず顔が綻びそうになるのを必死に我慢した結果がああ無表情だ。単純に趙雲は、王賁からのとぼっちを受け持っているに過ぎない。

「……嬉しいか、信。楽しいか、信。懐かしいのだろうか。ああ……お前のその姿を見るのが私の喜びである」

お前の全てが私の全てだ。

誰も彼もが気づかない。戦っている趙雲でさえも気づいたのは表面的なところまでだ。呂布、華雄、高順、韓遂、司馬徽に龐統、李信軍の面々でも李信の本心、本音、胸中、真意を理解できない。それに気づくことが出来るのはこの世界で後にも先にもただ一人。ともに戦乱の時代を生き抜いた不変にして永遠の友である彼女だけ。

「だが、自分に誰かを重ねていることに。信の手心の意味にも気づく

か……中々に面白い小娘だ」

そう。趙雲は李信が自分に誰かを重ねていることに気づいていた。しかも李信は、決死の覚悟で挑んでいる自分に対して劉弁の言うとおりに手心を加えている。趙雲が全力を出し続ければ命を拾えるようなぎりぎりの手加減をしながら攻撃を放ち続けていた。それは趙雲の伸び代を鍛えるため。彼女の限界を突破させ続けるため。死闘の中で鍛錬を李信は趙雲に課し続けていた。彼女程の武人が、目標として定めた、憧れの男によるそれを屈辱として感じぬはずがない。

もつとも……お前の感じる屈辱の意味がどちらであるのか。それ次第でお前の価値は決まってくるぞ、小娘。

もはや興味はない。物言わぬ背中がそう語っている劉弁は、踵を返してこの場から立ち去っていった。

自分の呼吸が今だ通常に戻らぬことを自覚しながら趙雲は一寸たりとも李信から目を離すことはなく、彼女の視線を浴びつつも李信は無言のまま天を仰いだ。影龍指か……とぼつりと呟きながらスキズキと痛む頭の傷が、彼の思考を鮮明に、明瞭にしていく。空一つない蒼天を見上げた李信の脳裏に思い出されるのは、かつて宮中で曹操孟徳とであったときの会話であった。生きながらにして死んでいる。未完の霸王にかけられた言葉を思い出す。そんなつもりはなかったが、年月が経つに従ってどこか自分が寝惚けていたのではないかと自嘲した。

自分が秦の六大將軍として過ごした黄金の日々。それに比べればどこか心の火が燃え上がっていないことに意識せずとも気づいていた。呂布との戦いのみが李信を遥かなる過日へと誘ってくれる。傲慢に聞こえるかもしれないが、それ以外の相手に心が沸き立つことは滅多にないのが事実であった。それほどまでに、李信が生き抜いてきた戦乱のあの時代は全身全霊をかけて戦いに明け暮れる凄まじい日々だったのだ。自分は決して有り得ないと理解しつつもその代わりとなるものを自然と求めていたのかもしれない。

「……悪かった」

かつて手も足も出なかった三大天の廉頗もこのような気持ちであったのか。そして、自分にそれを気づかせた趙雲に王賁のみならず少年時代の自身も重なった。昔の血気盛んであった自分がこのような真似をされればどう思ったであろうか。いや、考えずともわかる。馬鹿にするな、とおおいに憤ったに違いない。故に李信は素直に謝罪を口にした。

「その謝罪……受け入れる理由はありません」

何故ならば、趙雲がここまで憤怒に燃えている理由はただ一つ。自分の弱さに対してだからだ。手を抜いた李信へではなく、それをさせてしまった自分の力の無さ。それに怒りを覚えた。李信が自身の思考行動を反省している以上に、彼女もまた中華七槍を打ち倒しどこか自分が驕っていた事に気づかされた。

「ですが、敢えて言うならばただ一つ。私に誰かを重ねるのは止めて頂きたい。貴方の前にいるのは、この私。趙子龍であるのですから」
「……それについては言葉もない」

戦いの中で趙雲に王賁の姿を重ねていたことは紛れもない事実。彼女が李信に食らいついて来れる実力者であったのがまたこんな現状を作り出してしまった。ガシガシと自分の頭を掻きながら李信は、空に向けていた顔を趙雲へと向ける。改めて見る彼女は怪我こそないものの限界ぎりぎりの動きを続けていたため疲労によって満身創痍にも見えた。

「一つ確認するが、まだやるか？」

「無論。我が心は、身体はまだやれると猛け吼えていますぞ」

にやりつと笑みさえ浮かべる神槍はどこまでも頼もしく、逞しく。
「そうか。それなら、これまででいいのだ。俺の全力を見せてやる」

ゆらりつと両手で大矛を握り締めて空に掲げる。それだけの行動で趙雲には李信の肉体が数倍に巨大化したと幻覚さえ見せられた。身体が、精神が、萎縮していく自分を叱咤して、彼女もまた龍牙を構えた。

「子龍。お前に一つ言いたいことがある」

静かに、李信は離れた愛しい敵に向かって穏やかに語りかけた。

「俺が勝ったら、軍に入れ」

理由も、理屈も、道理も、意味も事情もなにも知らん。お前の全てを俺にくれ。

「有り難きお誘い。ですが……それは無理かと」

何故ならば私が勝つからです。

「くっ……ははは。カカカっ!! 良い女だな、お前は。なあ、趙雲」

「恐れながらもう一声頂きたい」

「ふはっ……ああ、訂正しよう。最高に良い女だよ、お前は」

「はい、知っております。李信殿」

だから死ぬなよ。

怨、と世界が闇に染まった。大將軍李信の全力全盛の開放。呂布の時同様、或いはそれ以上の喜びを胸に李信は趙雲を愛すべき闘争相手だと認識した。天に向かって掲げる大矛は、まるで龍が鎌首をもたげたかのような光景で、指一本を動かすどころか直接喉を掴まれたのではと思わせる重圧を放ち続け、声を出すことも出来ない状況がここにはあった。渦巻く戦意、殺意に狂気。圧倒的な力を持って万象全てをひれ伏せざる最強の武将の鬼気が迸る。

対する趙雲は、ふううと深い呼吸を一つ。意識を、精神を、心を研ぎ澄ましていった。これ以上ないほどに、戻れなくなっても構うものかと自分自身を深淵へと導いていく。自分の感覚の余分となるもの全てを閉ざし、必要な器官にそれら全てを回す。世界が色をなくしていく。無音の世界へと到達する。これまで一度たりとも入れなかった、いやあるとも考えていなかった領域へと趙雲子龍はついに侵入した。

そして、二人の争いの開始は実に些細なものだった。カタンつと緊張に耐え切れなかった誰かが武器を落とした音と震動。それが静かなる均衡を崩す切っ掛けとなる。

趙雲の肉体が確かに消え失せた。衝撃も何もなく、彼女の身体は初動が最高速度となって神速の世界へとたどり着く。いや、それはもはや神速などという類の速度ではなかった。

神速とは文字通り神が如き速度。

だが、今の趙雲の動きはその表現を遙かに逸脱している。ならば、この状態の彼女をなんと称すればよいのか。敢えて言うならば、もはやこれは神の領域の迅速なり。即ち——神域。中華におけるありとあらゆる武人を超越した最速が、龍牙を持つて李信へと肉薄する。彼女の姿はまさしく地上に顕現した流星。神域に至った趙雲の槍は、彼女の異名通り神をも殺す槍となつて戦場を支配する鬼神を穿つ。

「——ルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

それでも、忘れること勿れ。

趙雲が立ち向かうは、人にして天を否定せんとした武神龐煖を倒した者。人では不可能のはずの春秋戦国時代の統一を成し遂げた三皇五帝を越えし現人神始皇帝の金剛の剣。趙雲が神をも貫く槍だとしても、当の昔に既にそれを為した人を逸脱した個の最強にして天下の大將軍だということ。神槍が李信を貫こうとする中、天から墮ちてくる大矛が力も技術も速度も一切合財全てを無視して振り降ろされる光景を趙雲は確かに見た。それはさながら黒く眩く輝く彗星の如し。この一撃の前にはあらゆる存在が無意味無価値となつて散る。

そして李信の大矛は趙雲の全てを凌駕し、彼女ごと地面に叩き落とした。瞬間、凄まじい轟音が練兵場のみならず洛陽を揺らす。事情を知らぬ者は天変地異の前触れかと怖れ慄き、事情を知っている者もまたその凄惨たる爆撃染みた一撃に驚天動地の心境であつた。あまりの衝撃の大きさに大きく立ち昇る砂埃。李信と趙雲を包み込み、二人がどうなったかわからずに、戦いを見ていた者達は口から心臓が飛び出そうになるのを抑えながらじつと砂塵が治まるのを待っている。数十秒が経ち少しづつ視界がはつきりとしてくる中で、観客の視線がようやく現れた李信の背中へと集中した。

大矛を振り下ろした体勢で微動だにしない彼の足元に——趙雲はいた。地面に仰向けになりながら龍牙で李信の攻撃を受け止めたのであろうか、半ばから真つ二つに砕き折れた龍牙が悲壮感を煽る。

だが、生きている。李信の大矛は倒れている趙雲の頭の上に振り下ろされており、間一髪のところでのその魔手から逃れることに成功していた。見下ろす李信と見上げる趙雲。

「……凄まじい、ものですね。これが……貴方の……本気ですか」

かふつと吐血する趙雲は全身の服の至る所が破れ、数え切れない裂傷を負っている。李信の一撃を受け止めきれずに大地に叩きつけられた結果、もはや指一本動かす余力もなかった。それも当然であろう。大地を震撼させる大將軍本気の一撃だ。身体中がばらばらになったと一瞬勘違いを趙雲がしたとしても羞じることなどあろうか。

大矛を引き、手元に戻した李信は見上げる趙雲に背を向ける。強かった。見事だった。如何に言葉で褒め称えようが結果は李信の圧勝だ。それらの言葉は無粋にしかならない。ならば口に出す台詞は一つだけ。

「趙雲。俺は何時までもお前を待っている」

期待と興奮が去っていく李信の背から溢れてやまない。千の言葉を紡ぐよりも余程雄弁に彼の背中が趙雲を欲していると語りかけてきていた。それを眼で追いながら——神槍は静かに眼を閉じるのであった。



「星ちゃん遅いですねー」

「確かに。少々時間がかかり過ぎているようですが」

李信と趙雲の手合わせから五日が過ぎた。趙雲の身体が完治とまではいかないまでもある程度動けるようによくなつた彼女達は旅を再開させようと準備を終え洛陽の東門へと集まっていると

であった。幸いにも乏しくなった資金を、今回の褒賞で賄えたため随分と旅が楽になったとホクホク顔の程昱と遅刻している趙雲のせいか難しい表情の戲志才の二人が百万都市洛陽の行き交う人を眺めながら時間を潰している。戲志才と程昱が集合場所に來てから既に随分と時間が経っており、ここまでの遅刻は流石に趙雲といえどこれま
でなかったことに一抹の不安を覚えたその時であった。

「すまない、二人とも。遅くなった」

「ようやく來ましたか、星殿……ところでその格好は？」

人波をかきわけて現れた趙雲に返答した戲志才であったが、彼女の姿に素直に疑問をぶつけた。何故ならば、趙雲は旅支度を全くしていなかったからだ。旅慣れている彼女だからこそ、このような軽装などありえない。ならば何故と疑問を覚える戲志才とどこか察した表情の程昱に向かつて——神槍は深々と頭を下げた。

「すまぬ、それしか言えないが許されるならば幾らでも二人には謝罪しよう」

私は二人とともに行かない。

「稟……お主が曹孟徳殿に仕えるまで。風……お主が日輪を見つけ出すまで。それまで二人の護衛として友として一緒にいることを約束しながら、それを違える事に謝罪の言葉もない」

趙雲子龍が一度した約束を破る。それは武人としても許されぬことであるし、自分の誇りを汚すことに他ならない。だが、それでも……それでもだ。

「如何なる約束も、決意も、誇りよりも——武へ対する想いの方が遙かに重い」

常山で生まれ、師のもとで武に染まり育てられ、旅に出て以降も強敵達との戦いを経験した。

そして遂には飛將軍李信との全身全霊捧げでの闘争。そのなんと美しく、輝き、眩くも身を焦がす甘露なひと時。それを経験して、体験してはつきりと理解した。心がそれを受け入れた。

武が趙子龍の全てだ。

一寸の迷いなく語りきった趙雲の下げる頭を見ていた戯志才であつたが、ふうとどこか困つた表情で笑みを浮かべた。

「謝る必要はありませんよ、星殿。逆にこれまで護衛して頂いた感謝を私達の方こそ言わねばなりません」

「そうですよー、星ちゃん。今まで有難うございました」

だから頭をあげてください、との戯志才の言葉にようやく趙雲は頭を上げる。責められなかったことに幾分かの後ろめたさを感じながらも、二人の気遣いに感謝の念を送る。そして三人は別れの挨拶を幾つか交わすと、趙雲は来た時同様に雑踏に紛れて姿を消していった。友を見送つた戯志才と程昱であつたが、趙雲の姿が消えてからしばらくの沈黙が訪れる。やがて、ふとした調子で戯志才が独り言のように呟いた。

「それにしても残念でした。星殿ならば或いは……とも思いましたが」

「或いは……とはどういうことですか、稟ちゃん」

独り言染みたまその真意を見極めることが出来なかつたのか、程昱が聞き返す。しばらく口を閉ざしていたが、一分が経ち二分が経ち、やがてようやく戯志才は若干の恐れを乗せて言葉を発した。

「星殿……趙子龍。私はあの人ほど武に狂っている武人を知りません」

何時如何なるときも冷静沈着。どこか世の中を斜に見て捉えている彼女ではあるが、その本質は武へ対する執着心に溢れている。それは先程の会話でも理解出来ることだ。それに加え、李信との争いで見せた闘争本能。どれだけの力の差があろうとも全力でぶつかつていく彼女に友であつたとしても恐れを感じずにはいられない。

「……兎に角、二人旅では危険過ぎます。一緒に行ける隊商がないか探してきますね」

ここで待つていてくださいと戯志才は程昱を置いて人波の中に歩み去っていく。戯志才がいなくなつて一人残された程昱だったが、先程の台詞を思い返す。武に狂っている……なるほど。言い得て妙だ

がそれは的を射ている。確かに趙雲はその言葉こそが相応しい。思わず納得がいく程昱だったが、だからこそ惜しいと思った。後一步だ。後ほんの僅かなところまで戯志才は辿り着いていた。

「……詰めが甘いですねー、稟ちゃん」

いや、或いは自分もまた李信と以前出会えてなかったならば同じ判断を下したかもしれない。それを考えれば戯志才への評価は些か厳しいものである。確かに趙雲は強い。武へ対する想いも尋常ではない。闘争への本能はもはや狂っていると称するしかないであろう。だが、それでも足りない。絶対的に不足している。李信は違う。違うのだ。あの男はそんな表現でおさまるような怪物ですらない。力、技術、速度、心、それら全てが人の枠組みに入れて考えるべき存在ではないのだ。ガチガチと歯がかみ合い音を立てる。自然と這い上がってくる悪寒から守るためにも両腕で自分の身体を抱きしめた。あの男は。あの人は。あの將軍は。あの天蓋の存在は――。

武が狂っているのです。

「——風」

カタカタと震える自身を抱きしめていた程昱がハツと顔を上げれば、その視線の先には何時の間にか戻ってきていた戯志才がいた。彼女は目を大きく見開き、信じられないものを見たといった様子で程昱を見つめている。

「稟ちゃん……どうかしましたか？」

尋常ではない様子の戯志才に、出来るだけ何時もの調子を取り繕って問い掛ける程昱であったが、肝心の友はまるでその問いかけが聞かえていないように——。

「何故笑っているのですか？」

「——え？」

戯志才の言葉に反射的に自身の口元に手を当てる程昱。笑っていた。確かに晒っていた。程昱仲徳は、狂った三日月のような笑みを浮かべて嗤っていた。何故。どうして。それが理解不能であったのは一瞬で、明晰な彼女の頭脳は瞬時にその答えを導き出す。

……ああ、そうですか。そうなのですか。

理解してしまえば後は簡単だ。それを否定する材料はなく、自身が出した答えに間違いはないだろう。この笑みが意味するところ、それは頂点を見たことへの興奮。そしてそこへと挑戦することが出来る歓喜。その瞬間、震えていた身体はピタリと止まった。自身の震えは、恐怖から来るものではなかった。ああ。ああ……ああ、稟ちゃん。貴女のせいです。貴女の責任です。

……いいえ、誤魔化しようはもはやないですね。貴女のおかげです、稟ちゃん。貴女が言わなければ、指摘しなければわからなかった。至らなかつた。自分自身では永遠に気づかなかつたでしょう。

これは、そう——ただの武者震いでしかなかつたのだ。最強への、極点への、畢竟へ至つた存在と相見えることへの感謝であり、感動であり、魂が揺さぶられるほどの衝撃が全身を包む。もはや李信への恐れはない。怖れる必要などない。畏れることなど微塵もなかつた。逆だ。もはや逆の気持ちしか抱けない。日輪を夢に見、求め欲し探し続けてきたのはきつとこのためだつたのだ。本来であれば日輪に仕えるだけで満足できたのかもしれない。

だが、彼女は出会ってしまった。至強へと至つた頂を見つけてしまった。軍師としての本能が、自身をそこへと挑戦させようと心臓を叩き、吼える。よくぞ、よくぞ、よくぞ……自分の前へと現れてくれた、と万感が胸に迫り、感極まるほどの喜び。ある種の狂喜とも言えるそれが沸々と溶岩のように全身から噴出し、全てを熱し焦がす。この気持ちをなんと表現すればよいのか。ああ、これはあれだ。あの言葉こそが相応しい。初めてその言葉を知つたとき意味が分からなかつた。馬鹿らしいとさえ思った。きつと自分には一生縁がない言葉なのだろうと理解すらしていた。自分の範疇から無意識のうちに排除していたその言葉。それは——。

心が躍る。

きつとこれこそが、この気持ちこそが、この感情こそが、そうなのですねー。

数多の軍師が名を残したこの時代においてなお、最高の軍師として名を馳せた大將軍李信の四傑筆頭である龐統士元。謀神とも謳われた正真正銘の人知を逸した智の超越者。そんな彼女を傍に侍らしていた李信でさえも、怪物と称えた軍師が二人いる。そのうちの一人――程昱仲徳が今ここに目覚めの産声を上げた瞬間であった。

蛇足之7：神箭手

「何故、何故我の従軍が許されんのだー!! あのような幼いあわわ軍師に我が役目を取られるとはなんたる不覚っ!!」

「はいはい。そうじゃのー」

「黄巾の乱以後、我の帯同は減る一方!! それに対してあの娘ばかりともに行くことを許されているのは断じて許されることではない!!」

「はいはい。そうじゃのー」

「司馬徽!! あやつはお主の愛弟子であろう!? 何なのだ、あの化け物は!!」

「はいはい。そうじゃのー」

洛陽に存在する官僚育成機関の屋敷にて、泣き叫びながら自分の悲運を訴えるのは外見と実年齢が見事に合わない見た目詐欺師の韓遂であった。その訴えを適当に相槌を打ちながら聞き流しているのは見た目詐欺師二号の司馬徽徳操だ。

彼女達がなにをしているかと言えば、自分の仕事を淡々と行っていた司馬徽の下へと韓遂がやってきたかと思えば大声をだしながら世の理不尽さを訴えてきているところであった。ここまで司馬徽が流すにも理由があり、最近は殆ど毎日のように同様のことが起きていく為、流石の面倒見が良い彼女であってもこのような対応を取ることになってしまっている。それを証明するように広間にいる多くの生徒達は、またやつてるよといった生暖かい眼差しを送ってきていた。「まあ、そう言うでない。韓遂……お主も本当はわかっておっただろうに。所詮自分は軍略に優れた軍師がくるまでのつなぎでしかないことにのう」

「あ、あわわ……」

「お主があわわ言うても全く可愛くないから止めい。むしろお主の年齢でそれをやるのは本気できつい」

「だ、黙れ司馬徽!! 我とお主の年齢は変わらんだろうが!!」

「……いや、変わらぬが。ワシはそもそも、あわわなど言うたらん」

「ぐ……ぐぬぬ……」

もはや自分が何を言っているかわかっていない韓遂の暴れっぷりに、司馬徽は溜息の一つでも吐きたくなる気持ちであった。こんな会話が毎日行われているのだ。仕事の邪魔にもなるし、はつきり言うて鬱陶しいことこの上ない。それでも同僚である韓遂の愚痴に付き合うのだから彼女こそ聖人ではなからうか。

「……はあ。まあ、お主の言うとおりで。覚悟はしておったが、実際にそれを迎えるとなるとなかなか自分に自分を納得させるのが難しい」
「気持ちは分からんでもないがのう」

韓遂は李信の軍師として初期から部隊を支えていたが、それは実のところ適材適所と言い難いものがあった。彼女の名声を涼州で高め上げた武器は内政外政といったそちら方面の分野であり、軍略関係に關しては精々が一流止まり。だが、かつてはそれらを受け持つことができる人材がおらず、結果韓遂がその役目を負うこととなっていた。華雄や高順では不足であるし、胡軫でも心許ない。ある程度の戦略は練れる李信であるが、それでは隊長である彼の負担が大きすぎる。故の韓遂拔擢だったが、何時の日か自分の立場を奪われることになるだろうと確信していた彼女ではあったが、やはり実際にこうなってしまうと精神的な被害が実に大きいのが実情だ。

「本音を言うとならば我が自分の座を明け渡すことになるのは、あの娘だと思っただろ」

「……龐統を知らなんだお主ならばそう考えるのも無理はないのう。もし龐統の帰参がもう二年……いや、一年遅れていればお主の考えが現実となっていたはずじゃ」

死んだような目である方向を見つめる韓遂と、それを追う司馬徽。二人の視線が交わる先には多くの生徒がいた。彼女達からしてみれば慣れたものだが、この官僚育成機関を訪れぬ者であったならば異常としか判断できない光景がそこにはある。ある盤を前にして十数人の生徒と向かい合っているのは、一人の少女。

こうではないか、ああではないか。など必死で生き残る道を模索している十数人を前にして、どこか退屈そうに帽子を弄っている彼女は

——陳宮広台。かつて呂布に拾われ、この官僚育成機関に預けられた少女は随分と成長を遂げている。肉体的な成長は皆無だが、軍師としての能力は飛躍的に高まっている。いや、進化ともいえる成長速度だ。既にこの幼い少女に軍略囲碁で勝てる者はいない。それどころか十数人がかりで相手をせねばまともな勝負にもならないという馬鹿げた腕前となっている。

「はやく降参すると良いですよー。ねねは恋殿と御飯を食べに行くのです」

対戦している生徒達を煽る陳宮。洛陽で休暇中の呂布との逢瀬に気をやっつけていながらも、彼女の打つ手は迅速にして正確。そんな陳宮に韓遂と司馬徽の評は、決して過大評価というわけではない。こと軍略関係でいえば陳宮は群を抜いていた。韓遂司馬徽の両軍師の遙か上。おそらくは中華の中でも上から数えたほうが早い程の能力。いや年齢的な面を考慮すれば、やがて頂の上に手をかけることが可能なのではないか、と思わせる超新星。もつとも、その能力とは対象的に内政外政面でいえば韓遂達に軍配があがるのだが。

「主が龐統を帯同させているのも、あやつ唯一の不足。戦場を経験させるため。だが欲を言えば、あの陳宮も同伴させてほしいというのが本音ではあるのう」

「……悔しいがそれには同意するしかあるまい。実戦を経験すれば、陳宮もまた間違いなくさらに化ける」

さすれば龐統と陳宮の二枚看板。二人の知者が李信軍を操れば、軍もこれまでの比ではない飛躍を遂げる。

「もはや我が主を脅かす者など存在しまい。ふははははー!!」

先程までの韓遂とは真逆。確かに自分が戦場にも行くことが無くなったのは非常に辛いことだが、それでも主の無事が一番の願い。それを思えばどんなことでも堪えられる。それに李信の為に来ることは幾らでもあるのだから、腐るよりはまずは行動しようと思つた韓遂であったが——浮かない顔の司馬徽が妙に気にかかった。

「どうした、司馬徽。お主がそのような顔を見せるのは珍しいではな

いか？」

「うむ……」

韓遂の問いに暫しの間沈黙を保っていた司馬徽ではあったが、やがて陳宮から視線を韓遂へともどし何か覚悟を決めた眼差しで訥々とした口調で語り始める。

「……実は、ワシは厄介極まりない存在を一人知っておる」

「ほう!! お主が厄介と称するか。一体何者であるか？」

「諸葛亮。字は孔明……今は劉玄德という輩のもとにいるそうじゃ」

「ああ……確か、覚えがあるぞその名。確か張純の乱の際に李信と言いつ合っていた小娘のはず。そう言えば龐統が着た時にも言っておつたな」

うつすらと思いつ出した韓遂が声を上げる。確かに非常に厄介そうな人間だと思つていたが、数ヶ月前に黄巾の乱が終結後やってきた龐統の初めての献策が——劉備玄德を始末するべきだ、という内容だ。劉備のことを覚えていた李信がそれは却下したのだが、それも無理ない話。今のところ何の罪も犯してはいない彼女を処罰する理由はないし、李信としても劉備の行く末を実は微妙に楽しみにしている思惑もある。

「……皇族の末裔を詐称している故にその点を突けば処罰は可能、か」
龐統は如何なる手段を使つても劉備を今のうちに処罰したいのだろう。劉備は前漢の景帝の第九子中山靖王劉勝の庶子の劉貞の末裔と名乗っているという情報をあげていた。確かに劉族の末裔と詐称すれば罪となる……が、劉勝は子と孫を含めれば百人以上の血筋を残しており、可能性はなくはない。もしかしたら何かしらの証拠を持っているのかもしれないし、実は皇族の末裔を名乗る人物は劉勝のこともあつて一定数存在した。

「その劉備の軍師を勤めているのが諸葛孔明。軍事内政外政問わず、あらゆる面において超一流の軍師と評価しても構わないじゃろう」

ようするにワシの上位互換じゃ。と些か悲しくなる事実を告げる司馬徽に韓遂は微妙な表情となる。司馬徽は優秀なくせに自己評価が少し低い。龐統や孔明といった突き抜けている連中と比べれてい

れば仕方のない話かもしれないが、韓遂からしてみればこの若作りの方が余程恐ろしい。

「龐統と肩を並べられる相手、か。それは厄介であるな!! だが、それだけでは怖れる理由は少し弱いと思うが」

「……諸葛孔明は、龐統を友と呼び慕っておった。いや、あれは執着と表現したほうが良いかも知れん。そのあやつを置いて、龐統は我らが主のもとへ参じた。ワシらにとっては龐統が着たことは有り難かつたが……」

失敗だつたかもしれぬ。

龐統は孔明を完璧と称した。それに間違いはないだろう。だが、完璧なのは龐統士元とともにいたからだ。諸葛亮孔明は、幼い頃から孤独であつた。彼女は物心ついた頃より、他の人間が理解できぬ世界に到達していた。周囲すべてが人とは思えず、ただの紙人形程度の認識しかしていなかった彼女が初めて出会えた人。龐統という自分に匹敵する存在を得て諸葛亮孔明は、ようやく他者を理解できるようになった。だからこそ、孔明は龐統に拘っている。依存している。執着している。そんな彼女のもとを龐統が離脱した。となれば、孔明がどうなるかは三通り考えられる。

光か中庸か闇か。昇るか、止まるか、墮ちるか。

もつとも厄介なのは諸葛亮孔明がかつての彼女に戻ることに。人を紙人形程度にしか認識していない頃に戻れば——それを止めることができる存在は果たしているのか。

「……我が愛弟子には悪いが、今のうちに消えて貰わねばならぬかもしれんのを」

白扇を折れんばかりの勢いで握り締める司馬徽は、かつての教え子であろうが容赦なく処断しようと思意するのであつたが——。

「終わつたですぞー!! それではねねはこれにて失礼させて貰うです!!」

司馬徽と韓遂の緊迫した空気をぶち壊す、陳宮の声が響き渡つた。言うが早いのか、陳宮の姿は広間からなくなつており、残されたのは盤の前で死屍累々となつた生徒達。

「……龐統と陳宮の二人で何とかなるのではないか？」

「……そうかもしれない」

如何に孔明が覚醒しようとする能力的には恐らく龐統と互角。

ならばそこに陳宮が加わればどうか。さらに李信軍という超人染みた軍の力があれば。軍師として敗北の二文字は絶対にならない、と断言できてしまう。先程まで孔明と劉備を始末する気満々であった司馬徽は、暫しの間様子見と言う結論を下すのであった。



司隸河東郡の陽県にある小さな……本当に小さな村。そこで起こった流行り病は瞬く間にその地を席卷した。ほぼ同時期に村人達は病に倒れ、助けを呼ぶことも出来ずに滅び行く運命を突きつけられた哀れな村であった。その病に身を冒されながらもぎりぎりのところで生き残ったのは僅か二人。まだ十になったばかりの少女と弟。彼女達が病から命を拾ったのは本当に偶然だったというしかない。だが、体力も落ちてもはや動くことも適わない二人は、

静かに飢え死を待つばかりであった。地に倒れ、二人手を繋いで意識が朦朧とするなかで何日たったのかわからない。そんな時に――少女は天命と出会う。

「こいつは酷いな……病気か？」

「ああ。恐らくは……誰も彼も外傷は見当たらない。しばらく前に流行了った病気のせいだろう。」

馬蹄の音を響かせて、人の声が少女の耳に届いた。最後の力を込めて顔を上げると、馬に乗った矛を背に背負うまだ若い男の姿が擦れた視界の中やけに鮮明に映る。少女のたてた僅かな音に反応して、馬上にあった少年が視線を少女へと向けた。まだ息があることに驚いたのか、少年——李信は馬から降りると傍へとやってくる。

「生き残りがいるぞ。医療に詳しい奴を呼べ」

ハツと部隊の後方へと伝令に走る部下を見送りながら、李信は倒れていた少女の背に手を入れ支える様にして上半身を軽く持ち上げる。「意識はしっかりしているか？　まずは水を少しで良いから口に含め」

「……ありがとうございます……ごじます……でも、シャン………より………弟へ

……」

「……」

李信はだまって首を横に振った。何故、と口から言葉が出るよりもはやくシャン——徐晃は気づく。既に隣に倒れていた弟は蛆が湧くほどに当の昔に死んでしまっていたことに。

「この娘以外の生き残りは？」

「……残念ながら」

「そうか。一度近場の街に立ち寄るぞ。この娘を連れての従軍は厳しいからな」

「はっ!!」

李信に抱きかかえられる徐晃はすべてが朦朧とするなかで悟った。死ぬはずだった自分がこうして生き長らえたのにはきつと理由がある。両親も親類も弟も村の人間も死んだ中で、唯一残った自分の道。それはきつと——。

「……というのがシヤンの昔の話」

「なんと。ならば徐晃は昔に李信殿と出会っていたのか」

「うん……李信様は覚えていないと思うけど」

金属音が激しく耳を劈く空間で、徐晃と趙雲は世間話をするかのよう
に会話をしている。二人がいるのは洛陽の官僚育成機関がある館
の一部……巨大な面積を誇る練兵場にて日々の日課である手合わせ
を行っているとどころであった。会話をしながらであるが、二人の戦い
は頂点に近いと表現しても構わない。無論、まだまだ李信と呂布の世
界には到底及んではないが、中華において彼女達二人に並べる武人
はそうはいないであろう。

「人に歴史あり……とっ」

趙雲が踏み込み放った刺突と同時に、徐晃もまた自分に迫ってくる
槍目掛けて大斧を振り下ろす。問答無用で武器破壊を狙った徐晃に、
冷や汗を流しながら趙雲は無理矢理に槍を引くと間合いを外す。

「全く。後の先の使い手というのも実に厄介極まりない」

「……シヤンの得意技」

ふふつと薄く笑みを浮かべる徐晃に舌を巻くのは趙雲だ。単純な
速度だけで言えば趙雲が遙かに勝るが、徐晃は豪腕に頼った圧倒的な
火力が武器と思わせて何と云うか——上手いのだ。趙雲の戦いの
調子を狂わせるような戦い方が実に巧みだ。相手に全力を出させ、欲
する李信とは異なる。自分本来の力を十とすれば李信と戦うときに
はそれが十五にも二十にもなる自覚がある。だが、徐晃と戦えば五や
六程度しか出すことができないという印象を受ける。どちらが正し
いかとは言えないし、決めることはできないだろうが、戦場で命を賭
ける者達からすれば徐晃の方が正しく厭らしいのは間違いない話
だ。

「しかし、お主の話で信じがたいことが一つある」

「……ん？ 何？」

武器破壊を狙わせないように、龍指を交えての三連突。防ぐことは
せずに、また紙一重で避けるような真似もしない。先程の趙雲を見習

うように大きく距離をとった徐晃が問い返す。

「話が真ならば、お主の武の経験は僅か数年程度ということになるのだが……」

「うん。それくらい」

「……こうして手合わせしている身としては信じがたい話だ」

趙雲の嘆きも仕方のない話である。僅か数年程度で生涯を武に捧げてきた自分と互角に渡り合えるこの少女……徐晃公明の才能には頭を下げるしかない。武の才能だけならば、中華随一と評価しても決して大袈裟ではないのではなからうか。勿論、呂布は除いてとなるが。

「信じるも信じないも、それが事実。シヤンが李信様に拾われたのは天の計らしい」

「天の計らしい……？」

「うん……。運命天命宿命……とにかくシヤンは命を救われた」

あの天下無双の飛將軍李信に、確かに命を救われたのだ。偶然などあろうはずがない。これは必然なのだ。途方もない戦いの天稟があつた徐晃が李信に拾われたことはきつと全て定められた命運だった。

きつとこれには意味がある。無いはずがない。

戦いの天才が、戦場を支配する大將軍と出会った事。

「……天に寵愛された李信様。そしてシヤンは……天命に導かれた金剛の斧」

故にこの斧。砕けるものか。李信を守護し、あらゆる敵を打ち砕くのはシヤンだ。

不撓不屈の意志を相手に打ち付ける徐晃の気迫に息を呑むのは一瞬で——それに恐れる趙雲ではない。壊れた龍牙の代わりである槍を徐晃に向けたまま手合わせしている怪物の意気を逆に飲み込む圧の展開は、彼女達の周囲に焰舞う幻想的な光景を描かせる。

「李信殿に手を届かせた我が神槍。甘く見てもらつては困る」

ピリピリと二人を包む空気が沸騰していくなか——それが一瞬で静まり返った。熱している空気がそれを遥かに超越した大熱波に

飲み込まれ流されていく。バツと二人して対峙していることを忘れてある方向へと視線を向けるとそこに鎮座するのは方天画戟を携えた呂布奉遷。彼女はゆつくりと立ち上がると二人に近づいてくる。

「……李信を守るのは恋。敵を打ち砕くのも恋。肩を並べるのも恋」

なにやら言い出した呂布の姿に、だが趙雲と徐晃は視線が逸らせない。いや、身動き一つ取ることができない。

「弱い者はいらぬ」

おいで。遊んであげる。

静かに手招く呂布に、趙雲と徐晃は理解した。これが頂点なのだ。この存在こそが、孤高の世界に住まう本当の怪物なのだ。李信がどれだけ手加減していたのか、二人はようやくと気づき、全貌もはつきりとしなない遥かな高みの霊峰が目の前に聳え立つ幻覚を見た。二人は戦慄すると同時に、確かに笑う。二人同時に戦ったとしても決して及ばぬ、自分達の目指す果て、二人存在する矛盾した意味の天下無双——それを授けられる本当の意味を悟る。趙雲と徐晃は、李信へと手をとどかせるための目標をこの日ようやく見つけた。



「李信様、早く行かないと遅刻してしまいます」

「あー、そうだな。まあ、もう完璧に時間過ぎてるから慌てても仕方ないだろう、龐統」

百万都市洛陽の道を行く龐統と李信の姿があった。娘軍師は相当に急いでいるのか李信の手を引つ張つて少しでも目的地に早く向かうとしているのだが肝心の主は自分の調子を崩していない。

「李信軍の入隊試験がもう始まってしまします、李信様あ……」

龐統の泣き落としも通じていないのか、李信の歩みは何時もと全く変わりはないなかった。龐統の発言通り、実は官僚育成機関の一面を借りて李信軍の人員補充の入隊試験が行われることになっている。黄巾の乱や異民族との戦いで欠員となった兵の補充として、民間問わず募集したところ想像を絶する希望者が集まってしまった。そのため入隊試験を行うことになったのだが……丁度李信が王宮に呼ばれた為にその場に立ち会うのが丁度遅れてしまい、今現在試験場に向かっているところなのだ。それは龐統が慌てるのも無理なかるう話である。

「もう完璧に遅刻だしな。こうなったら開き直つてゆつくり行こうぜ、龐統」

「だ、駄目ですよお……。何が何でも連れて来いって華雄様に言われてるんです」

「まあ、試験に関してはあいつに任せているから気にするな。こんだけ遅れたらもう急いでいっても一緒だろ」

「ううう……」

文句を言うなら王宮に呼んだ官僚達に言つて欲しいと思う李信。実際、まさかこんな時に呼ばれるとは思つてもいかなかったというのが本音である。

「はやく行きますよ、李信様あ。試験が終わる前に行かないと、怒られますよ」

鬼の形相の華雄を想像してぶるりつと龐統が身体を奮わせた時の事であった。

「おおー!! あんたら李信軍の入隊試験の会場に向かつてるところなのー?」

凄まじい勢いで李信と龐統の前に飛び出してきたのは、黒……といふより灰色染みた肩まで伸びた髪を後ろで纏め、動きやすそうな服装

をした一人の少女。年齢的には龐徳よりも僅かに上に見えるが、つまりはまだ成人しているかしていないか微妙な年齢ということだ。目を悪くしているのか、右目を大きな眼帯で塞いでいるのが特徴だが、それを考慮したとしても十分に可愛らしいという表現が似合う美少女だ。背には大きな弓を背負い、小柄な彼女との対比を際立たせていた。

「ねーねー。良かったらどこで試験やってるか教えてくれない？ いやーこの都市って本当にやばいところだねえ。都なんて初めてきたけどもう何が何だかわかんなくてさー」

人の警戒心を解くような人懐っこい笑顔を貼り付けて李信達に語りかけてくる少女だったが——龐統は反射的に主の背に隠れてしまった。

「あれ？ もしかして怖がらせちゃったー？ あー、ごめんごめん。あたしってば何時もこんな感じだから結構人に面倒臭がられちゃったりするんだよねー」

てへつと舌を出して笑う少女だが、別に彼女は悪くはない。龐統は軍師に徹しているときは冷静沈着での確な判断を下すことが出来るのだが、生憎と日常生活においてはこのような状態が普通なのだ。人見知りが激しいし、会話の最中に時折噛んだりもする。

「いや、此方こそ悪いな。で、だ……お前も入隊試験の希望者なのか？」

「おー!! よくわかったね、お兄さん!! 遠く涼州から遙々きたぜ、洛陽!! お、もしかしてあんた達も希望者だったりするの？ おにーさん本当に凄い強いね。というか本気で人間辞めてる感じのやばさだよね……都って恐っ!! ……ああ、でもそっちのおチビさんは流石に違うかー」

「チ、チビじゃないです!!」
「いやー、小さい小さい!! わははーお嬢ちゃんが幾ら威勢よい声を出しても可愛いだけだぜえー」

なんだこいつは。やけに勢いが良いな、と思う李信の前で人見知りのことも忘れて噛み付く龐統の姿は、実に年齢相応だ。珍しい姿を見

たな、と李信は少しだけ得した気分となった。

「第一もう入隊試験は始まっています!! 試験に遅刻は認められません!!」

「な、何だってー!? それは本当? いやいや、冗談きついねー」

「冗談ではないです!! 時間も守らない人が試験に受かるとでも思っているのですか!!」

「わーお、確かに!! いや、でもそこはほら……一芸合格とかあったりしてー!?」

「ないです。ないです……絶対にはいいますから!! それはもう人間離れした特技でもない限り無理でしゅ……です!!」

「ええー、特殊技能……うむむ……あ、あるよ!! あたしそれあるからー。いやあ、困ったな。合格しちゃうなーあたしちゃん」

「ええ、あるんですか!? い、いえ……それこそ水の上を歩けるとかそれくらいの技能じゃないと認めませんよ」

「水の上を歩行ね……いや、できるか、そんなことお!?」

言い合っている二人の会話は結構な無茶苦茶な内容だが、地味に面白いなど李信は聞いていた。あの龐統と初対面でここまで話が出るのはある種の特殊技能ではないか、とも考えている李信の前で、ポンと手を叩く少女。

「あー、あー、あー!! あたしつてば、ほらこれ持つてるよ、これ!! これ見てよ!!」

「これじゃ分かりません。なんですか、明確にしてください」

「ほらほら、推薦の手紙!! 李信將軍に渡せば何とかしてくれるって言うってたけどなー」

「……え」

懐から取り出した書簡を手にとって天へと掲げる少女に、誰からの推薦なのか気になった李信が口を挟む。

「へー。誰からの推薦なんだ? ちょっと見せてみる」

「い、いやいや!! 何言ってるのさ、おにーさん。李信將軍に対しての書簡だよー? 中身勝手に見たら下手したら首斬られちゃうぜ!!」

「別に問題ないだろ」

「いや!! 問題しかないってば。流石のあたしも自分が原因で人死に
がでたら三日ぐらいへこんじゃうってばさー」

「いや、だから俺が李信だ」

「ほうほう。なるほど、おにーさんが……李、信?」

またまた面白くもない冗談言つてー。と笑う少女の口元は若干ひ
くついていた。

「冗談ではありません!! ここにおわすお方をどなたと心得ますかっ
!! 漢王朝独立遊撃軍が将、李信將軍であらせられます!!」

「……え。本気で?」

こくりつと龐統が領いた瞬間だった。

「は、ははー!!」

その場で何のためらいもなく平伏する少女。確かに見ただけでわ
かるとんでもない領域に住まう怪物だと気づいていたし、これほどの
存在ならば李信將軍だということにも納得できる。それに気づかず
都ならこんな存在が普通にそこらを歩いていても仕方ないと勝手に
思い込んでいた。

「いや、よく考えたらこんな化け物がそこらに歩いているわけない
じゃん!! 気づけよ、あたしちゃん!!」

よく考えなくてもそうなんだが、初の都ということ随分と気が緩
んでいたらしい。というか、当の將軍の前で化け物扱いするなどそれ
こそ首を斬られても文句を言えないのだが、それに嘯み付こうとした
龐統をおさえて平伏している少女から推薦の書簡を受け取る。封を
切つて中身に目を通した李信だったが、龐統は確かに見た。自分の主
の口元が綻んでいくのを。

「どなたからの推薦だったのですか?」

「……お前、面白いな」

龐統の質問に応えずに平伏して周囲の注目を浴びている少女を立
ち上がらせる。へへへ、と愛想笑いをしている少女の頭からつま先ま
でをじつくりと眺める李信は、推薦の書簡を少女へと手渡す。

「来い。試験は始まっているが、お前の技見せてもらうぞ……龐令明」

一瞬李信の発言の意味がわからなかった少女——姓は龐。名は

徳。字は令明。彼女はペアつと顔を明るくすると李信の後へと続く。幸いにも首切りは免れさらには試験も受けさせてもらえらることになるとは、やはり日頃の行いがいいのかとホクホク顔だ。それに対して納得がいつていないのは龐統である。試験を特別に見る上に、知らなかつたとはいえ李信への無礼。憤懣やるかたないとはこのことだ。そんな龐統を気にしてか、李信が手招きして歩く自分の真横へと龐統を呼び寄せる。

「さっきの推薦者の話なんだがな……馬騰に、傅燮。董卓、賈コウといった涼州の重鎮の面々全てだ」

「……え？」

まさか過ぎる推薦者達に驚きの声を龐統が上げる。この龐徳という少女は、それほどの推薦を受けているのか。先程までの怒りは収まり、純粹に驚きが龐統を支配する。

「……この者、中華十弓をも凌駕する腕前、か。随分と期待させてくれるな、賈コウ」

沸々と湧いてくる言葉通りの期待を胸に、李信は龐統と龐徳をつれて試験会場へと到着した。熱気と喚声が溢れる会場で、李信の到着にいち早く気づいたのは華雄であり、文句を言いに近い寄ってきた彼女だったが真剣な表情の李信に毒気を抜かれ——龐徳のことを教えられた華雄は、まじまじと弓を背負っている龐徳に視線を送った。

「弓使いか……確かに李信軍には並外れた腕前のやつは少ないが……」

華雄が推薦の書簡に記されていた中華十弓をも凌駕するという文言を聞いて眉を顰める。確かにそれほどの力量を持つ者が加われれば随分と戦力強化に繋がるが、果たしてあの賈コウの言葉とはいえどこまで信じればよいのか。その称号は、この広大な中華において頂点の弓使い十人のことを指す。決して伊達や酔狂で名乗れるほど軽くはない称号だ。

「……とりあえず、弓実技試験の場に行くぞ。自信があるようだし、皆がやっている距離の倍くらいからやってみるか」

華雄は試験場の隅で離れた的を射ている弓兵入隊試験の方を指差

すと、龐徳へと移動を促す。だが彼女は遠く離れた弓の的を見るなり一言。

「えー？ あれくらなら余裕、余裕。へいへいへーい。行くよー」

は？ と、この場にいた李信と華雄と龐統が声を上げた。止める間もなく——いや、静止の声を出そうとした皆のそれが止まった。止められた。龐徳の全身から迸る無色透明で静寂に包まれた圧に三人は目を奪われ、その一瞬で彼女は愛弓を引いて射る。残されたのは美しく、流麗な龐徳令明の残心。

龐徳の静かな構えとは真逆に、凶悪で破滅的な威力を秘めた矢が遠く離れた的の中心を貫いて——中心に巨大な風穴を打ち破った。シン、と静まり返った試験会場にて、一足早く正気を取り戻した華雄が頬を引き攣らせる。

「お、お前……まさか狙ってやったのか、今のを」

「えー？ いやいや、狙わないと当たらないでしょーに」

「馬鹿か、お前!?! 他の人間の数倍の距離があったぞ!?! 熟練どころか達人級の力量でも難しいぞ、あれは!!」

「へっへっへー。凄いでしょ、おねーさんや」

こいつ化け物か……ただただ驚愕する華雄と、常識外の腕前を見せ付けられた龐統はまだ固まっている。そんな中で李信もまた龐徳の弓の技術に驚きを隠せなかった。それは弓の射的距離もあるし、威力も驚嘆に値する。だが、実はもう一つ。華雄と李信は互いに顔を見合わせて、頷く。

「二射、撃ったな」

「え、えええ……気づいちちゃった？ まさか初見で見破られるなんて、初めてなんですけどー」

二度の速射。残像すら残さぬ速度にこの場で気づいたのは李信と華雄の二人のみ。技術速度威力——どれもが人の理を超えている。「んと、見破られたら仕方ない。じゃー、合格するためにももうちょっと凄いの見せちゃうぜ」

よく見てみれば、龐徳が持つのは一人では到底引けなさそうな剛弓だ。それをくるくると器用に回しながら李信達から離れていく。即

ち、弓の的からさらに遠ざかって行っているということだ。

「ところで將軍におねーさん。それとちびっこさんや……中華十弓の由来って知ってますー？」

「いや……生憎と私は知らん」

「……趙の武靈王の時代に弓自慢を集めて腕比べをしたとか。まあ、詳しい話は覚えてないけどな」

華雄の答えは龐徳の予想通り。だが、李信のまさかの返答に目を見開いた。

「腕が立つだけじゃなくて博識とか完璧じゃないですかー、やだあ」
ケタケタと笑いなながら彼女は随分と遠い場所で足を止める。

「その催しで優秀な成績を残した上位十人をそう呼んだのが始まりらしいですよー。で、その時優勝した方はなんでも五百歩のところから十射中八射が的を射抜いたとかなんとかー。まあ、数百年も前の話なんで結構誇張されてるとは思うんですけどね」

ここがおおよそ五百歩のところかなあ。

平然と言い切った龐徳は、そこから軽々と剛弓を引くと放つ。引いて放つ。を繰り返す。丁度十度繰り返したところ手をとめた。

「昔の中華十弓ならいざ知らず、ぬるま湯に浸かった今の中華十弓程度ならあたしの方が上ですぜえ。どうでしょうか、この龐令明を李信軍に入れても損はないと思うんですけどー」

「……ええっと、射た矢どうなってるんですか？」

あまりにも的が遠いため龐統が目を細めても結果がどうなったか不明だ。だが、李信と華雄の真面目な表情を見れば、彼女の十射した矢の行方は自ずと理解してしまえた。事実、龐徳の十射は全てが五百歩離れた的の中央に的中している。

「……実際、大口を叩くだけはある。俺は入隊を認めても良いと思うんだが」

「ああ……その口調以外は文句はない」

軍の大將と副將の答えに満面の笑顔を浮かべる龐徳。幾ら軍師とはいえ龐統が拒否したとしても結果は変わらないだろう。いや、純粹な弓の力量だけ見れば彼女を落とすなど有り得ない。それでも龐統

はしばし熟考をして、龐徳へと向き直る。

「一つお聞きします」

「おうおう。何でも聞いてくれよう、ちびっこさんや」

「だからちびっこじゃないです!!」

「またもや調子を狂わされそうになったのを実感した龐統は一度深呼吸をして心を落ち着かせる。

「……龐令明殿。貴女は馬上にてどれだけの技術を発揮できますか？」

「嘘偽りは許さない。龐統の軍師としての眼差しは、これまでの彼女とは一線を画している。龐徳の全てを見通そうとするそれに、にははと平然と笑うのは弓の怪物。

「いやだなー、軍師殿。あたしは涼州生まれの涼州育ち。馬上の方が得意なくらいさー」

「——信じます」

「パンつと手を叩いた龐統が、龐徳から李信へと視線を移す。

「李信將軍へ龐士元が献策致します。龐令明を隊長とする弓騎兵団の設立の——」

「任せる」

「——はい。有り難く」

阿吽の呼吸の二人の姿に、目を丸くするのは龐徳令明だ。今龐統はなんといったか。弓騎兵団……これの意味はわかる。では次だ。龐令明が隊長。それは一体誰のことなのか。

「あたしじゃん!!」

「……はい。貴女です、龐令明殿。実は弓騎兵団の設立を最近考えていたところでしたので」

「丁度その中心人物となる存在を探していたが、まさか入隊試験でこんな逸材が見つかるとは全く考えていなかった。嬉しい誤算とはこのことだ。」

「隊長ー？ 本当に？ あたしやっていいの？」

「はい。弓騎兵のみで構成される遊撃隊……それを貴女にお任せしたいと思っています」

「おおおー!? あたしちゃん、入隊直後の超出世!! 日頃の行いのおかげだね、やったぜえ!!」

剛弓を振り回しながら小躍りしだした龐徳が、喜びを爆発させてあちら此方を駆け回る。歳相応といえれば相応なのだが、ここまで恥ずかしがりもせず感情を全身で表現させる少女も珍しい。

「そういえば令明に聞きたいんだが、何故李信軍なんだ? それほどの弓の腕前があれば、涼州でも引く手数多だったろうに」

華雄の問いは当然と言えれば当然の質問である。中華十弓に匹敵どころか凌駕する力量の龐徳令明ならば、仕官の誘いなどそれこそ山のように来ていただろうに。確かに李信軍の名は中華に轟いているが、待遇の面を考えれば幾らでも上の誘いはあつた筈だ。

「実はあたしは馬騰様に仕えてましたよ。結構いい待遇でしたぜ、へっへっへ」

だからこの軍でもそれなりの待遇を要求します、と堂々と言い放つ龐徳の遠慮の無さに少し早まったかと後悔が押し寄せる龐統。

「まあ、優秀な人間にはそれに見合った報酬があつて然るべきだしな。そこらへんは期待していいぞ」

「おおおー!! さっすが將軍様!! 話がわかるう。いよ、天下無双!!」
「……おい。私の質問に答えろ、新入り」

女性らしいとは決して言えない……むしろ貧相な胸を李信へと押し付けながら胡麻をする龐徳の頭を背後から鷲掴みにした華雄が引き離す。渾身の力を込めた握力が、龐徳の小さな頭を握りつぶさんと圧力を加え始める。ミシミシと頭蓋骨が悲鳴をあげ、あまりの痛みに甲高い声にならない絶叫が試験会場に響き渡った。

「あ、あばばばー!! た、助け、助けて!! 割れる、碎けるう!!」

「……放してやれ、華雄」

「ちっ……」

明らかかな不満を全面に出しながらも華雄は龐徳の頭から手を放した。残る鈍痛に地面を頭を押さえながら転がっていた龐徳だったが、数十秒もして漸く痛みがおさまったのか涙目になりつつも、荒い呼吸のまま立ち上がる。

「ちよつとー痛いんですけど——あ、いえ。何でもありません」

人でも殺せそうな眼光の華雄に腰が引けたのか下手な愛想笑いで誤魔化す龐徳だったが、真剣な眼差しの華雄にこれ以上茶化すのは本当にまずいと判断したのか、咳払いを一つ。

「えー、馬騰様の下で働いてて、優秀なあたしちゃんはふと気づいちやつた訳ですよ。ああ、この人は所詮は涼州どまりだなあ、ってね!!」

別に馬騰を悪く言うつもりはない。彼女もまた十分に英傑級。涼州という戦乱溢れる地を最低限とはいえ住める場所になっているのは馬騰という存在がいるからであろう。もしも彼女がいなくなつたらばあの地は血で血を洗う凄惨な地獄へと変貌するはずだ。だが、それでも、それでもだ。龐徳から見れば、馬騰はたりない。自分の理想には決して届いていない。己の欲を満たしてくれる相手とは言えず絶対的に不足している。涼州如きで満足など出来るものか。

「あたしちゃんは自分の名前を広めたい。龐令明の名を涼州だけじゃなく、中原だけでなく、中華全てに轟かせたい!!」

馬騰のもとで異民族を相手にしばしの間自慢の弓の腕を奮った。射って、射って、殺して、殺し続けて、何時しか異民族は、龐徳の姿を見るだけで逃げ出すほどの屍の山を築き上げた。それだけの死山河を作り上げながらも、龐徳令明の名は涼州のごく一部でしか知られていない。馬騰や娘の馬超に比べれば微々たるものだ。この調子では龐徳の名を皆知るまで何十年かかることか。

「広大な領地。目も眩む黄金。食べきれない御馳走。酒も異性も、この世のありとあらゆる贅沢快樂を思うが俤にしたいんだぜえ、あたしちゃんはさあ!!」

龐徳の口に出した通り、財を為す為の領地。山のように積みあがる財貨。一生涯飽きないであろう馳走。最高の美酒に格好良い男達を侍らせるために。それを為すためには名が必要だ。中華の西端に位置する涼州でさえもその名を知らぬ者はいない中華の怪物。韓約の乱を鎮めた立役者の一人。李信永政が隊員を募集していると噂に聞いた龐徳は、それが運命だと感じた。このまま涼州で燻って過ごす

か、中華へと足を踏み出すか。自分の行く末を決める分水嶺がここにあると理解し——何の迷いもなく涼州を飛び出した。きつとこの道こそが龐徳令明が求める欲望の最速。いや、この流れに乗らねばきつと一生不可能であろうと第六感が囁いた。

「……随分と俗物的だな、お前の入隊理由は」

「俗物ー？ いいーでしょ、別に。人間の一番原始的で根本的な、欲望のためにあたしは頑張るんだからよー」

華雄が僅かに不快感を表情に表すものの、対する龐徳は全く気にも留めていなかった。彼女の人生が万事このような感じならば、例え他の人間になんと言われても気にしないのは当然のことか。龐統もまた、何故ここまで力量を誇る龐徳を馬騰が手放したのか薄々理解する。ようするに技術的な面では頼りになるが、人格を考慮すれば手放しても仕方のない人物であったのだろう。

「だからさあ、將軍様。あたしに色々任せちゃってくれたまえ。將軍様の為に何が何でも頑張るぜ!!」

「……それだけか？」

「それだけ？ 他になにかあたしちゃんあつたかなー」

本人には本当に心当たりがないのだろう。頤に指をあてて見上げながらしばし考え込むが、結果は思い当たるふしはなく李信の腕へと纏わりついてくる。

「だからさあ、あたしは手柄が欲しいのー。ねえ、將軍様。どの戦場にでもいいから連れてって!! この龐令明が百発百中の弓で貢献するからさー」

「黄巾も一段落したし、北の異民族も最近大人しいから差し迫った出陣要請はないんだよな、実は」

「な、ななななんですよー!? もしかして入隊する時期がちよいと遅かったかー、失敗したかもあたしちゃん!!」

「……まあ、南の方で蛮族が大暴れしてるって話もあるし、もしかしたらそつちにいくかもな」

「よっしゃ!! 行く行く行きますー、はいもう予約したからあたしへにやりつと身体から力が抜けてその場で崩れ落ちそうになるも、

続く李信の言葉に俄然元氣を取り戻して食いついてくる。これまで自分の周囲にいなかった性格の龐徳令明の姿に興味を惹かれる李信だったが、その時に他の場所で監督にあたっていた高順が自分を呼ぶ声を聞く。

「じゃあ、細かいところは龐統と話し合え。弓騎兵隊が形になったら俺に持ってくればいい。任せたぞ、龐統」

「は、はい。近日中には必ず」

「へいへーい!! あたしちゃんに任せれば万事うまくいっちゃうからー期待しててよ、將軍様」

去っていく李信へと両手を大きく左右に振って見送る龐徳。ニコニコと天真爛漫な笑顔を振りまく灰色の少女は、仕えることになった將軍の後姿を何時までも眺めながら――晒っていた。

もしも一瞬浮かんだそれを龐統が見ていたならば、気づいたかもしれない。いや、気づいたはずだ。龐徳令明の本性に。だが龐統士元はこの少女を読み間違えたことに長い間気づかなかった。馬騰が彼女を手放した理由。それは龐徳が手に負えないと判断したからだ。心の底に怪物を飼っている龐徳に、涼州の覇者ともいえる馬騰は一抹の不安と恐怖を抱き、李信への推薦状を持たせて追放した。怪物を御するには怪物しかいない。絶対に己の器では飼いならせるとは思わなかったからだ。馬騰はおろか馬超をも喰いつくさんとする見かけとは裏腹な無限の欲望。それが灰色の少女の深奥に沸々と渦巻いている。

うん。將軍様。あたしの弓を捧げます。何時如何なるときでも貴方の傍にて、誰が相手であったとしても七難八苦を退け、ありとあらゆる万難を排しましょう。我が全てを懸けて李信永政という怪物を、中華の歴史に語り継がれる功績の領域にまで推し上げて見せます。貴方が敗北するその日まで。李信將軍の首は五十の城を落とすより、百の將軍の首をとるよりも価値がある。その貴方が敗れる日が来たならば、どこぞの有象無象に貴方の命をくれてやるものか。その首、その命、その魂――それはあたしが頂きます。

李信永政の首を挙げた者の名は未来永劫中華に語られる存在となるであろう。遙か遠い未来の彼方まで、龐徳令明の名は噂され続ける。天下無双を屠った弓使いとして。その想像は全てに勝る。結局それは最終的な目的の通過点における副次的産物にしか過ぎないのだから。百年、数百年、千年、自分の名が語り継がれることを考えれば領地、黄金、馳走に酒に異性など比べ物になりはしない。それが例え悪名であろうと構うものか。天下無双を討ち果たした神箭手龐徳令明——ああ、それだけで子宮が疼く。

ええ、將軍様。この龐徳令明。

貴方が敗北を喫するその時まで。全身全霊をかけてお仕え致します。

蛇足之8：白象の王

「随分と久しぶりだな、李信」

「そうか？ 黄巾の乱に出陣する前に会っただろう」

「馬鹿め……それは数ヶ月前の話だろうがっ!!」

洛陽が宮中。その地の一面にある執務室にて、部屋の主である張讓と李信は対面していた。黄巾の乱が終結し、落ち着きをようやく取り戻しつつあるこの頃、たまたま宮中の廊下で会った二人は腰を落ち着けて話し合うために張讓の執務室を利用しているところであった。

嫌味も通じんのか、とぶつぶつと独り言ちている張讓。だが、李信ばかりを責めるのも間違っていることは彼女は理解している。何せ黄巾の乱は漢王朝未曾有の反乱であり、それを平定させるために随分と李信達のみならず多くの漢王朝の人間が苦勞させられた。ここ数ヶ月戦場暮らしたことを考えれば、ぬくぬくと洛陽で生活していた自分とは時間の流れの感じ方も異なってくるであろう。それはわかるのだが理屈では納得できるとも、心はそれを拒絶するのが恋する乙女というモノである。

「まあ……いい。ところでお前は昼食は食べたのか？ まだだったらどうだ、一緒に」

「あー、悪いな。少し前に食べたばっかだ」

徐晃と、と付け加えた李信の空気の読めなささはある意味大層なものだ。何故そこで他の女性の名前を出してしまうのか。ピキリつと頬を引き攣らせた銀髪紅眼の年齢不詳の見た目詐欺師三号……いや、初代見た目詐欺師は、ふうつと一度大きく深呼吸をする。

「ああ……最近お前の軍に入隊した奴か？ 徐公明……確か盗賊討伐で名を馳せた騎都尉だったか」

「おう。よく知ってるな、お前。まさか官僚全員の名前を覚えてたりするのかわ？」

「いや……流石の私も全員は無理だ。それなりに優秀な働きをしてい

るものくらいだな」

それでも張讓は他の官僚に比べれば驚異的な人数を把握している。もつとも徐晃に関しては何に出したとおりの優秀な人材ということもあるが、李信軍に入隊したからという理由も挙げられる。何と云っても徐晃公明という少女はここ最近では李信ともつとも多く食事をとりにしているという情報もあるからだ。一度眼にしたことがあるが、あの少女の輝く瞳には愛や恋などの浮ついた色を感じることはなかったが、張讓としては用心するに越したことはない。

「それでわざわざお前の執務室で話をするってことは……何があつた？」

「……何のことだ、とは言わん。よく気づいたな」

「お前も少し緊張しているからな。なんか重大な内容の話でもあるんだろ」

李信の問い掛けに、張讓は隠すことなく頷いた。盗聴対策が完璧な張讓の執務室まで連れて来て、当の本人に僅かな緊張が見られる。それを考慮すれば他の人間に聞かれたくはない、かなり重要な話があることは見当がつく。もつとも、張讓の緊張は李信と二人つきりになっていることに関してなので、彼の判断は微妙に間違つてもいた。

「実は劉宏陛下が崩御された」

「……」

「先日の話だ。黄巾の乱の影響を考えて発表は見送られているが、近いうちに国葬が行われるだろう」

「滅茶苦茶重要な話だろうが、それ」

漢王朝の皇帝である劉宏の死去。優秀な皇帝とは言いがたい人物であつたが、仮にも王朝の頂点だ。彼女が死去したとなると流石に国に動揺が走るだろう。まだ黄巾の乱が終結した後で助かつた、と考えた李信であつたが——それに一瞬の直感が否と突きつける。

「……おい。本当に陛下が崩御されたのは先日だったのか？」

「鋭いな。ああ、正確に言うならば黄巾の乱の最中に亡くなられた」

「宮廷で秘匿していたのか」

「ああ。お前達には悪いと思つたが……上層部のみで秘匿することに

決定した」

「そうか。まあ……その点に関しては仕方ないな」

皇帝の崩御について秘密とされたことについて、李信は仕方なしと判断した。黄巾の乱と言う大規模な反乱の途中で皇帝が亡くなったと発表されるほうが最悪の状況へと陥っていた筈だ。官軍は混乱の極みに達していただろうし、黄巾は天意を得たといわんばかりに勢いを増していたに違いない。もしもそんなことになっていれば未だ黄巾の乱は続いてしまったのではなからうか。

「だが我らにとつては朗報だ」

「張讓。あまり滅多なことを言うなよ」

「この部屋ならば外に漏れる心配はない……それに事実には相違なからう?」

「まあ、そうなんだが」

皇帝崩御という大事件を朗報という張讓を李信が嗜めるものの、彼女の言うことは全くもって正しい。劉宏が亡くなったと言う事は、皇帝の座が第一皇女にして第一継承者である劉弁に引き継がれることを意味する。これによってようやく劉弁が漢王朝の皇帝として正統な権力を奮うことが出来る。さすれば漢王朝の建て直しもこれまで以上に進むはずだ。

現在は皇女という立場にいる劉弁は、洛陽の官僚はほぼ掌握しているといっても過言ではない。彼女の圧倒的な皇帝としての格。それに触れて頭を垂れずにいる者が在らうか。だが、あくまでも彼女は皇女。病気がちだったとはいえ皇帝である劉宏が表に出ていたため、洛陽以外の地方の豪族貴族官僚にとつては劉弁はあくまでもただの皇女としか見られてないのだ。だが、彼らは知るであろう。皇位継承の儀が行われるその時に——劉弁という三皇五帝を超えた超越者が自分たちの主になるのだと。

「で、実際に焯が皇帝の座につくのは何時ぐらいになるんだ?」

「……劉宏陛下が亡くなられて暫くは喪に服さねばならない。その間に準備は整えるとして……一年程度は見ていたほうがよいだろうな」

「まあ、そんなもんか」

もしも劉弁でなかったならば、もつと継承の儀は厄介な状態となっていたのは間違いない。恐らくは劉弁と妹の劉協。二人の後ろ盾となつてゐる多くの者達の思惑が絡み、漢王朝を割るような事態に陥つたかも知れない。だが、現状は宮廷は劉弁一色に染まつた状態である。ここから他の継承者を持ち出してきたとしても有無を言わさず叩き潰されてお仕舞いというのが目に見えている。

「内の憂慮がないってのは有り難いな」

「うむ。まさかあの趙忠までもが殿下に忠誠を誓うとはな。あの爺と肩を並べることになるとは夢にも思つていなかったぞ」

「まあ、そりやなあ……お前も昔は相当やりあつてたしな」

しみじみと語る李信と張讓。二人が知り合つて既に十年以上の月日が流れているが、李信らが宮中にて趙忠と敵対していたのがもはや随分と昔のことのように思い出せる。そう考えれば、今の宮中の状況は劉弁の下で一本化されているのだから到底昔の自分達では信じられないような現状であつた。

と、その時——キュルツという小さな音が部屋に鳴り響く。

シンと二人の間の空気が一瞬静まり返つた。じつと見つめる李信から逃れるように張讓は視線をあさつての方へと向ける。ほんのりと彼女の頬は赤く染まつていた。

「おい、張讓——」

「気のせいだ」

「お前、腹が——」

「幻聴だ」

「——減つてるのか」

「ええい、聞いてない氣遣いくらい見せてみろ、この唐変木め!!」

椅子から立ち上がった張讓が声を張り上げるものの、それを気にするような相手ではない。李信は懷を漁ると袋を取り出し、中に入つていた干し肉を張讓へと手渡した。

「……何だこれは？」

「むかし戦場で時々食つた保存食だ。今は軍にも料理が上手い奴がいるからな。こういうのを食べる機会が減つたからか時々無性に食

べたくなるんだよな」

「……見るからに硬そうなんだが」

「まあ、騙されたと思って食べてみる」

「お前がそういうなら……」

十常侍の筆頭の地位に先祖代々在った張讓である。こんな如何にも安そうな肉……しかも保存食を口にしたことはないのであろう。クンクンと干し肉の匂いを嗅いだあと、恐る恐る口に含む。そして味わうこと数秒――。

「……滅茶苦茶硬いぞ」

「まあ、硬いな」

ガジガジと両手で干し肉を持って噛り付く見かけ美少女の姿を眺める李信。まるで小動物のような彼女は普段の凛々しい姿との差異が凄まじい。必死になってようやく一部を齧り取ることに成功したのか、何度も口の中で咀嚼しながら飲みこんだ。天井を見上げながら思案すること数秒、視線を李信へと戻した張讓は首を捻りつつ難しい表情で言い難そうに言葉を発する。

「……はつきり言っていないか、李信」

「ん？ ああ」

「まずいぞ、これ」

「正直俺も美味しいとは少しも思わん」

「――ならば何故渡した!？」

「いや、それしか持ってなかったからな」

李信の発言に、何とも言えない顔となる張讓。確かに李信は美味いとは一言も言っていない。騙されたと思って食べてみた結果、騙されただけだ。だが、はつきり言って上流階級育ちの張讓にとって、これを食べきるのは至難の技だ。一口しか食べていない干し肉をどう処分するべきか悩む張讓の姿に、李信は彼女へと近づいていく。

「あー、悪かったな。冗談が過ぎた」

李信はヒョイッと張讓が持っていた干し肉を取り上げるとそれを食べ始める。張讓とは異なり、戦場育ちの李信にとってはこの程度の硬さは気にするまでもない。張讓とは異なり。まるで柔らかい肉を

噛み千切るように、あっさりとし肉は李信の腹へと消えていく。

「ちよ、ちよつと待て!? お、お前なにをして——!?」

「なんだ? お前食べたかったのか?」

「い、いや……そういうわけでは……」

「じゃあ、いいだろ。捨てるのはもったいないしな」

最初は困惑。やがて羞恥に顔を染め上げる張讓に、忙しいやつだなどと全く検討外れの感想を抱きつつ李信はあっさりとし肉を平らげた。やがて恨みがましい上目遣いで李信を睨みつけてくる張讓に、やはり干し肉が食べたいのかこいつは……と思ったのかももう一個の干し肉を差し出した結果、おもいつきり腹をぶん殴られる李信であった。

「……ぐ、ぐう。お前の身体は一体何で出来ている……」

だが殴ったはずの張讓は右手を押さえながら蹲り、殴られたはずの李信は平然とその場に立っている。もっとも完全な文官である彼女が、戦場で鍛え上げられた金剛石の肉体の怪物を殴れば、こうなるのは自明の理であった。涙目になりながら荒い呼吸を繰り返す張讓に、流石の李信も歳を経るごとに段々とポンコツになっていくんじゃないか、こいつは——と奇しくも趙忠達と同じような評価が下してしまった。哀れ、張讓。

「で、煌が皇帝になるってことは……例の計画を実行するのか?」

「例の計画……?」

ふと何かを思い出した李信が、頬の赤みが消えない張讓へと真剣な表情で問い掛ける。彼が口にしたのは宮中でも極一部の者にしか伝えていない機密情報。それについての確認をしたというのに、肝心の張讓はキョトンとした顔で聞きなす。こいつは本当に大丈夫か、という呆れの視線を真正面から受けた張讓は、真面目な表情となつて頷いた。口元が僅かに引き攣つていたことには李信は気づいたが、もはや突つ込むことに疲れたのか敢えて見ないことにして話を続ける。

「……あ、ああ。少し予定より早いけど殿下が継承の儀を終えられる機会です。白羽の矢は誰に立ったんだ?」

「結局、白羽の矢は誰に立ったんだ?」

「まだ決定ではないが……今のところは馬騰に話を持っていく予定だ」

「劉宏陛下の崩御も計画より早まったしな。間に合いそうか？」

「間に合わせるのだ。殿下が継承の儀を行うその時が計画実行の絶好の機会なのだからな」

それでだ……と張讓が一度会話の流れを止め——そこから話を続けていく。

「その計画について、李信……お前から馬騰へと話を通してくれないか？ お前ほど馬騰に大きな貸しがある人間はいないはずだ」

「韓約……とつ、韓遂が生きていることがばれたら俺も結構まずいから、あまり貸しとは思えんが……まあ、真面目そうな奴だったし。そこは貸しと思ってくれてそーだな。まあ、わかった。休暇が一息ついたら涼州に向かうことにする」

「出来るだけ早めに頼む。もつともしも馬騰以上に相応しい人物がいるならば、そちらに話を持っていつでも構わんがな」

「俺が知る限りは……いないな。で、計画についてどこまで馬騰に話しているんだ？ 相手からの要求について譲歩の限界は？」

「一切お前に任せる。お前が必要とあらば全てお前の判断で行っても構わん」

それが一番困るんだがな、と頭を搔く李信。戦場が本職の自分にそこまで重大な任務を任されても、実に困るというのが本音であった。分野が違いすぎて、これならまだ北方で異民族と戦っていたほうが気楽である。あまり過度な期待をされても、十全にこなすことができるかなかなか怪しいと自分自身で思ってしまう。

「……相国の座を引き受けてくれるか怪しいもんだがな。俺が見た感じ、馬騰はあまり地位や名誉には拘らないと印象だったしな」

「そういう人間だからこそその抜擢だ」
「任せるに足る人物つてのは認めるが……」

二人の話題にあがっている計画の主となれば、間違いなく地位と引き換えに馬騰が築き上げてきた名声は地に堕ちるであろう。勿論名誉回復の方法は考えているが、李信達の誘いに乗るということは明らか

かな貧乏くじを引くということ。相当な漢王朝への忠誠と、これからの十年、百年、数百年の平和を考えることが出来る器の大きな人間でなければならぬ。果たして馬騰はそれに値する人物なのか。ガリガリと頭を掻き巻く李信の姿に、張讓は珍しいものを見たといった様子で眉を顰めた。

「お前が即断即決をしないとは……そこまで悩む姿は随分と久しぶりに見たぞ。何か気になる点でもあるのか？」

「いや……なんとなくなんだがなあ」

「なんとなく……か。存外お前の直感は馬鹿にはできん。だが、馬騰では不足か？」

「不足ってか……何て言ったら良いのか、俺にもよくわからん。他に相応しい人間がいるのかと聞かれたら答えに詰まるんだけどな」

李信が口に出したとおり、馬騰以外に計画の要となる人物は思いつかない。単純に優秀なだけであれば、曹操孟徳然り、孫堅文台然り、候補にあげることにはできる。だが、彼女達では今回の計画の主となるには不足となる部分が少なからずある。それを考慮すれば、李信が知る限り本命となるのは馬騰だけなのだが——何か心の中しこりとなって引つかかっている。長年戦場を生きた將軍としての直感が、馬騰で決定することを後一步のところ推し留めていた。

「とはいってももう時間も無い、か」

劉宏崩御が予定外のこともあり、時間が少ないのも事実。何もしないことが今は悪手となるならば、最善といえないまでも行動することのほうが重要だ。

「ああ。それに市井で広まっている噂話の件もある」

「噂話……？　なんだそれ」

「なんだ、李信。お前は耳にしていないのか？　管輅なる占い師がしたというところある予言についてだ」

「……聞いたことがあるな。確か世が乱れる時、天の御使いが……つてやつか」

「それだ。下らない予言ではあるが、張純、黄巾の乱と大規模な反乱が続いている今、その予言にうつつを抜かしている者も少なくはないと

聞く」

「好きにさせておけばいいだろ、そんなもん。第一世間に広まっている噂話をどうにかしようなんざ難しいだろ？　もう何年かして民の暮らしが落ち着けば自ずとその手の噂は消えていくと思うが」

「……だが、何か引つかかるのだ」

張讓の疑念を気にも留めず、李信は話はこれで終わりだといった様子で背を向け執務室の扉へと手をかけた。そこで張讓は気づいた。普段と変わらないように見える李信だが、どこか不機嫌そうないや、明らかに隠し切れない不穏な気配が滲み出ている事に。

「天の御使いか……俺にとってはどうでもいい話だ」

ぼつり、と李信は呟く。言葉通り心底僅かたりとも興味も関心も持っていない男の空虚な言葉がそこにはあつた。確かに天命というものはあるのかもしれない。いや、この果てのない中華の中で出会うこと事態が天の計らいであることは否定できない。だが、そこからの道筋は自分次第だ。人は天に全てを左右されている訳ではなく、この中華の地に自分の足で立つて戦い、進んでいく。この世界は天の意思で創られている訳ではない。数百年、千年、それだけの途方もない年月と人の命で、願いで、想いで形作られてきた。

「……今更お前天が口をだすか」

漢王朝は確かに滅びの危機に直面している。その後押しとして天の御使いなる者を送り込んでくるのかもしれない。それが天の決断ならばせいぜい抗わさせて貰おうか。滅びを受け入れるのも、拒むのも人の意思だ。何が相手であろうとも、誰が相手であろうとも最後の最後まで漢王朝の——劉弁の為に戦い続ける。それが李信の決して揺るがぬ鋼鉄の意思。何より、誰も知らない。わからない。得体の知れない天の意思など誰が信じるものか。李信にとっての天はただ一つ。

「俺にとっては、劉弁こそが唯一無二天だ」

それを侵すようなら、否定するのならば。

全てを壊そう。全てを穿とう。全てを飲み込もう。天の意志とやらの全てを、全てを、全てを、全てを、全てを、全てを、全てを、全

てを、全てを、全てを、全てを——。遙か遠い過去。永劫にも感じる遠い過日の誓いに一切の揺らぎはない。何故ならば俺はあいつの金剛の剣なのだから。

「で、なんで漢陽に寄っていくんだ？ 用でもあるのか、高順」

「いや、僕は別じゃないけど。董卓や賈☒に随分と会ってないでしょ？

馬騰のところに行くついでに顔くらい見せときなよ」

李信と張讓との密会より暫しの時が流れ、新しく入隊した部下の練兵を華雄達に任せて李信と高順、龐統と騎馬隊を引き連れて涼州へと到着した姿があった。本当ならば時間も惜しいためそのまま馬騰のもとへと直行する予定だったが、高順の提案もあって以前世話になった傳燮がおさめる城塞都市へと立ち寄っていた。

「……全く。自分でも馬鹿だと思っけどね。敵に塩を送るなんてさ」

ぶつぶつと独り言を呟く高順を不審に思いながら、ここまで来てしまったら仕方なしと言った様子で李信は傳燮達がいる城へと足を向けた。街並みも、城も何もかもが懐かしく感じられる。涼州で過ごした年月は長くなかったが、その殆どをこの街を拠点としていたのだから郷愁を感じるのも仕方ないだろう。

「李信ー!!」

既に話を通っていたのか、城の門から飛び出してきた少女がいた。

息を切らせながら駆け寄ってくるのは、賈文和。今や涼州一とも噂されている文官の頂点に立つ県丞を勤めている少女。北方を転戦していた李信だったが、賈と会うのは実に三年振りにもなり、ほんの僅かな身体的成長を見せている。もつとも重ねて言うことになるが、本当にごく僅かの成長である。

「本当に久しぶり。元気だった？」

「大事はないな。お前のほうはどうだ、賈」

「ボクも全然問題はないかな。うん、怪我一つないよ」

もしもこの場に、賈文和という人間を知る者がいたならば驚いたに違いない。普段の彼女は、以前よりは遥かにマシとはいえ、常に厳しい顔つきをしているからだ。そんな賈がニコニコと笑顔を振りまいているのだから、偽者ではないかと疑う者もでてきてもおかしくはない。

「ところで、突然どうしたの？ 何か用事でも？」

「いや、そういう訳じゃないんだが。馬騰のところへいくついでに顔を見に寄った——」

「馬騰様のところへ？ うん？ どうかしたの、李信？」

会話の途中、突如として李信の発言が止まった。呆然とする李信を見て、ここまで驚いている李信も珍しいと思いつつ、彼の視線を追って振り返る。李信の見つめる先にいたのは、自分の愛しい上司でもあり、友である董卓仲穎の姿があった。李信と賈の凝視を受けて、董卓は顔を赤らめながら首を傾げた。そんな董卓に、賈は何故李信はこんな驚いているのかと不思議で仕方なかったのだが——

「……見つけた」

見つけたとは何か。李信は一体何を言っているのか、賈が疑問をぶつけるよりも早く、李信は董卓の前へと進み出て膝をついた。この場にいるすべての人間が驚愕と疑問に教われる中、李信は言葉を紡いでいく。

「董仲穎。お前に頼みがある。漢王朝を立て直し、新たな数百年の平和の為に、お前の力を貸してくれ」

李信は見た。董卓仲穎という少女が内包する純白の意思を。如何なる色を垂らしたとしても染まることない眩き輝きを確かに視た。馬騰のことは既に頭の隅からもきえており、理由も理屈も一切合財を無視して、李信は董卓を心の底から欲していた。これはただの直感だ。だが、戦乱の世を生き抜いてきた李信の第六感が確かに囁いている。この少女こそが、董卓こそが——李信達が探していた最後の一欠けらであるのだと。



クチャクチャと肉を頬張る音がする。ピチャピチャと血を啜る音がする。バキバキと骨を噛み砕く音がする。然程大きいとはいえない城壁に囲まれた街の中が眼を覆いたくなる生き地獄となっていた。大型の犬が、巨大な虎が、獰猛な狼が、人を生きたまま貪り喰っている。助けて、やめてくれ、いやだ、自分が喰われていく感触と激痛、音を聴きながら必死になって助けを請うているが、野生の獣たちはそのような助命の願いなど理解するはずもなくただただ人を喰らうことに夢中であつた。

また野生の獣だけでなく、人として最低限の衣類しか身に纏ってい

ない顔を仮面で隠した人とは思えぬ蛮人達が、次々と街にいる民たちを斬殺していた。漢民では理解できないまるで呪文のような雄叫びをあげて、女子供も躊躇いなく斬り殺し、射殺し、殴殺していく。抵抗しようが、無抵抗であろうが、一切合財を無視して屍の山を築いていく悪鬼達の集団が街の中を蹂躪していった。

街が崩壊しつつある中央に位置する広場にて、生き残った民達が肩を寄せ合うようにして密集しているおり、そんな彼らを守護するべく円形の陣形を保ちついている兵達が、周囲を囲っている獣や蛮兵をそれぞれの武器を向け牽制していた。ここにはいない、だが生き残っている民の断末魔の声が響き渡り、それがこの場にいる多くの人間の心を鑢のように削っていく。恐怖で震える民達を背に、兵達は同様の恐れで身体を強張らせながらも逃げ出す者は一人もいない。ここに残っている彼らはみなが褒め称えられる勇氣ある漢であった。

「いいか、無駄に突っ込むな!! このまま陣形を保て!! 奴らに付け入る隙を与えるな!!」

兵達の隊長が声を張り上げ部下と民を鼓舞する。応、と叫ぶ部下を誇りに思う隊長であったが、このままではジリ貧となるのは目に見えて理解している。この街は漢の南西に位置する益州のさらに南方にある分、かなりの人数の兵と城壁によって守られていた。それがある日突然数え切れない猛獣と蛮族の強襲にあい、一刻もかからずに陥落の憂き目にあっているところであった。街のあちらこちらで家屋が焼けているため、それを不審に思った近場の町から援軍が来ることを願っているが——半端な数ではこれだけの敵と対抗するのは難しいであろう。だが、もはや援軍が来ることを期待するしか今この状況を覆すには方法がないというのが事実である。

その時、地が揺れた。最初は気のせいかと考えた兵達を否定するが如く、ズンと連続して響く音と揺れ。それが徐々に近づいてくることに言い知れぬ不安を抱く彼らを尻目に、遂に大震の正体が姿を現した。

建物を次々と破壊し、粉塵を舞わせながら、石壁をまるで紙くずのように粉碎して広場に現れたのは巨大な、あまりにも巨大な生物。想

像もつかぬ巨軀と長い鼻、ゴツゴツとした真つ白な固い皮膚。益州のさらに南方、未開の地にのみ生息すると言われている巨獣——人はそれを象と呼ぶ。

白象というに相応しいそれが現れた瞬間、兵と民を囲っていた猛獣と蛮兵達がその場で平伏した。一体この白象は何なのだ、と考えたこの場の全ての人間が考えたその時、彼らは皆現状を忘れた。忘れさせられた。全ての人間の視線を一身に集める、存在の格が違っている生物がそこにいた。

白象の上に胡坐をかいて座っているヒト。自身の背まで伸びる綺麗な白髪。顔には奇妙な造型の仮面をかぶり、獣の皮で作られた粗末な服を着た——女性。衣服の隙間からは美しく焼けた健康的な小麦色の肌が露出している。本来であれば、とてつもない巨軀を誇る白象に注意を払わなければならないのだが、人間としての本能が警鐘を鳴らし続けている。あれは、目の前にいる巨獣よりも遥かに危険な生物である、と。

「——まだ生き残りがいたか」

それは鈴が鳴るような声だ。他の蛮兵が発する理解不能な言語ではなかったが、ビクリつと反応をするのは平伏している蛮族のみならず、地に伏している猛獣達も同様であった。怒っているわけでもないのに、彼女の放つ言葉はまるで首筋に刃を突きつけられた幻を見させてくる。恐怖に震えていた民達のはとんどが、それだけで腰を抜かし中には意識を手放す者もいた。ガチガチと何かが震えていると思えば、兵達が持つ武器の手が小刻みに揺れている。一切隠す気もない女性は、純粹たる力の違いを問答無用で叩きつけてくるそれは、この場にいる全ての漢民の希望を押し折るには十分な圧力を秘めていた。

「何をしている。さっさと片付けろ、我が兵達よ。王の進撃を止める事は何人にも出来んことを教えてやれ」

鼓膜が破れんばかりの狂声が木霊する。獣達の咆哮が、蛮兵達の喚声が街中に響き渡った。獣も蛮兵も立ち上がるともはや敵対する人間の命を許さぬという絶対の覚悟を持って襲い掛かろうと身体が沈んだ。

「——お前に、一騎打ちを申し込む!!」

それよりもはやく声を上げた人間がいた。この街の守備隊の隊長である男。彼は剣を白象に騎乗している女性へと突きつけながら敵のあげる雄叫びに負けじと声を張り上げたのだ。もしも後一瞬でも遅ければ、蛮兵達が攻勢を仕掛けてきたであろう実に絶妙な機縁であった。

「……妾に、だど?」

「そうだ。お前にだ。もう一度言わせて貰うぞ。お前に一騎打ちを申し込む」

女性から返ってきたのは些か戸惑った返事であり、もう一度隊長は繰り返した。状況を見るにこの獣と蛮兵の連合隊の頭は女性だと推測が出来る。このままでは圧倒的な数の前に一瞬でここにいる兵と民は殺されて終わるであろう。ならば、万が一の可能性に賭けて女性と戦い勝利して、彼女の命と引き換えに撤退させる。格の違いは理解しているものの、どこまでも可能性の低い賭けとなるが、もはやここまで詰んでいる盤上をひっくり返すにはそれしかない。決死の覚悟を示す隊長の宣言を前にして、白髪の女性は暫しの間沈黙を保っていたが——。

「くっくっく。はーはっはっはっは!!」

高らかに笑った。馬鹿にするような嘲笑ではなく、本当に心の底から楽しい様子姿を見せる彼女に、隊長は一瞬とはいえ毒気を抜かれる。周囲を囲っている獣や蛮族は我らが主に何と不遜な、と怒気を見せていたが突然笑い出した王を理解できないといった様子が身体から滲み出ていた。

「許せ。何せ妾に戦いを挑む愚か者などここ最近とんと見かけなかった故に、感情を抑えられなかった」

白象の上に立ち上がると、そこから軽々と跳躍し地面へと着地する。ゆっくりと隊長へと歩み寄ってくる白髪の女性へと剣を向けながら、心臓が痛いほど胸を打って来ることを自覚した。剣を向けられてなお、悠然と、泰然と歩く姿は誰よりも美しく、何よりも眼を奪われる。そして白象の上にしたため遠近感が狂っていたのか、随分と長

身瘦軀のようである。少なくともそこらの男よりも頭一つ分は大きな肉体。だが、すらりつとした肉体はただ痩せているという訳でなく、どこまでも絞り鍛え上げられているのだと遠目にも理解できてしまった。両手を覆うのは黒曜石らしき物で出来た黒色の手甲。それ以外に武器を持ち合わせていないのを見るに、徒手空拳が彼女の武器なのであるか。

「一騎打ちの申し出を受けてくれたことを感謝する。我が姓は……」
「いらぬ」

風が吹いた。いや、それは質量をもった烈風そのものが自分の横を通り抜けた感覚が全身を撫で付ける。同時に誰かの悲鳴があがった。水風船が割れた何とも言えない音が響く。何が起きた、と叫ぼうとした隊長の声は喉から発せられることはなかった。ぐらりと視界が揺れる。ずるずると身体が倒れていき、気がつけば視界は蒼天を見上げていた。隊長の背後に何時の間にか移動していた女性が掴んでいた何かを地に落とす。びちゃりつと生々しい音をさせて転がったのは男の腹部。血溜まりに伏すのは別たれた上半身と下半身。そして女性の驚異的な握力が握り潰し、引き抜いた腹部。三部分に分割された隊長だったものは自分がなにをされたのかもわからずに、冥土へと送られた。

「妾に立ち向かった勇氣は見事。だが決定的に力が足りぬ」

ほんの僅かな賞賛を口に出し、死体を一瞥。それだけで女性の興味は男から消え失せた。何がおきたかわかっていない残った兵士と民を視界に入れて、彼女が浮かべるのは嘲笑だ。

「行け、妾の兵よ。全てを蹂躪せよ」

女王の命令が下される。もはや止める手段も方法もない獣と蛮族の集団が、漢の子らを殲滅せんと動き出した。僅かな躊躇いもなく巻き起こるは殺戮の宴。響き渡る恐怖と畏怖と怨嗟の声。それを聞きながら白髪の女性は愉しげに満足げにこの地獄の前で佇んでいた。

男が斧で頭を叩き砕かれていた。女が腹部を槍で突き刺されていた。子供が虎の爪に切り裂かれていた。赤ん坊が狼の牙に噛み殺されていた。地獄。地獄だ。常人ならば気が狂ってもおかしくない正

真正銘の地獄であった。だが、笑っている。白の女性は高らかに笑っている。面白くて、愉しくて仕方がない。人では理解できない、したくない人の姿をしただけの怪物がそこにいた。

「……やりすぎだにや」

その時、あらゆる獣や蛮兵に気づかれずに女性のすぐ後ろへと姿を現した少女がいた。白髪の女性に比べれば半分近くしかない小柄な少女。翡翠色の長髪に、くりくりとした大きな瞳。頭の左右には何やら虎のような大きな獣耳が二つあるのが特徴的だ。普段は人懐っこい天真爛漫な少女ではあるが、今は狂暴な光を隠すことなく宿して女性へとぶつけている。

「孟獲か。何がやりすぎだというのだ？」

「幾ら何でも皆殺しは、酷すぎるにや」

孟獲と呼ばれた少女は、女性の行為を非難する。この街の民は一体どれだけいたのだろうか。千ではきくまい。数千にも及ぶ漢の民を全滅させる。確かに自分達を南の蛮族と蔑む相手ではあったが、それでもこれはやりすぎだ。

「何を言うか。これはお前が望んだことであろう？」

「確かにみいが望んだことだじよ。でも、ここまでしなくてもよかつたにや」

話の発端は実に単純なものであった。何不自由なく暮らしていた孟獲達、南の蛮族と呼ばれる彼女達は、ある日ふと思ったのだ。もつと領土が増えればより多くの食料も手に入り、今よりさらに贅沢な暮らしが出来る。その程度の浅い思いから益州へと侵攻を開始した。孟獲はただ土地が手に入れば良かっただけだ。漢民を追い出せばいいというのが彼女の想いで、このような殺戮の果てに手に入れるような考えまでは持っていなかった。

「愚か者め。富とは有限だ。限りあるモノを手に入れようと思えば、持つ者から奪うしかあるまい」

土地から追い出す？ 馬鹿が。そのような甘い考えで妾達南方の民を蛮族と蔑む漢の者達から富を奪える筈がない。

「漢を敵に回してしまおうじよ……それでもいいのかにや」

「構わん。敵対する者は皆殺しだ。それがもつとも我らが富を独占するの到手つ取り早い方法であろう」

漢の民が減れば減るほど土地を得ることが出来る。富を得ることが出来る。ならば漢の人民の命など気にする必要はあろうか。

「……お前は強いにや。いいや、強すぎるにや……それでもお前より強い者がこんな行為を許さないにや」

「ならば連れて来るがいい。妾よりも強き者を。妾を力で止めることができる者をな。この木鹿を超越するような怪物を目の前に招来せよ!! せねば妾は止まらぬぞ!!」

仮面を手につけ外した女性——木鹿と名乗った彼女はギロリつと孟獲を睨みつける。あらわになった木鹿の顔は死地においてなお見惚れる美貌であつた。同じ南蛮の民ということもあつてか、容貌自体は孟獲と瓜二つ。異なることと言えば髪の色と、ギザギザに尖つた牙のような歯。

「……」

「去れ、孟獲。もしも妾の邪魔をするというのなら、例え汝であつても許さぬ」

木鹿は白象へと飛び乗ると、孟獲に背を向けて猛進を開始した。彼女は宣言どおり、決して止まらぬであろう。それは長い付き合ひである孟獲が一番理解していることだ。木鹿に付き従う猛獣と蛮兵達。その数はゆうに数万を超える。もしも益州が迅速に対応しなければ、瞬く間にこの州を席卷する怪物達の行進となるであろう。果たして彼女はそれとまるか。いや、止まる筈がない。その魔の手は益州のみならず他の州へと伸びるかもしれない。

「みい様……どうするによ?」

木鹿が姿を消した後、彼女の姿をじつと見つめていた孟獲の背後に跪くのは蒼い髪の少女。孟獲と同程度の身長と幼さと良く似た容姿。蒼髪の少女の問い掛けに、しばらく黙っていた孟獲だったが、溜息を漏らしつつ首を横に振った。

「木鹿はもう止まらないにや。言葉では絶対に止めることができないじよ、ミケ」

ミケと呼ばれた蒼髪の南蛮の少女は頷いた。もはや木鹿は同じ南中の民である孟獲やミケの言葉でも決して止まらぬ覚悟を持って益州へと進撃してしまっている。ならば力尽くといたいところだが、単純な戦闘能力では孟獲やミケ達でも絶対に勝てないと言いつても良いほどの力の差が存在していた。

「……探すにや」

「……によ？」

「木鹿は、みい達が生み出してしまった災厄にや。南中に天より落とされた怪物にや」

ならば漢という国にも存在するはずだ。木鹿同様に、人という種を超越した文字通りの怪物が必ずいる。怪物に対抗できるのは怪物のみ。漢が滅びる前に、その怪物を見つけ出し木鹿にぶつけるしか方法はない。

「いくにや、ミケ。木鹿と同等の怪物を見つけに。それがみい達に託された使命にや」

数多の部族が住み着いている南中の中でも最強最悪の王。あらゆる部族の王を凌ぐ白象の王。万象を跪かせる怪物の中の怪物。南蛮の八納洞の頂点に座する木鹿大王を止める為に、南蛮の王孟獲は未だ知らぬ希望を探すべく、広大な漢へと旅立った。

蛇足之9：治世の能臣。乱世の……

「趙忠様……益州刺史の代理の方より書簡が届いております」

張讓に並ぶ権力を持つ十常侍趙忠は、洛陽の宮中にある自身の執務室にて仕事をしていたところ部下にそのような報告を受けた。益州とは漢王朝南西に位置する州であり、周囲を険しい山脈に囲われている盆地で天然の要塞とも言える場所だ。時代を遡れば漢の高祖である劉邦も、益州に属する漢中郡に西楚の霸王項羽によって流された地域という曰くもあった。だが最南西に位置するということもあつてか中央に住む者達からしてみれば、益州は蛮族が住む僻地という認識が大多数を占めている状態であることは否定できなかった。

「益州から？ わかった、見せてみる」

趙忠は一度手を止めると部下から書簡を受け取ると、開封して内容にぎつと目を通す。長々と書かれてはいるが、要約すると蛮族が侵攻してきているため鎮圧するための兵を派遣して貰えないか、という内容であった。

「……益州刺史代理は劉璋であつたか」

前漢の魯恭王であつた劉余の末裔に当たる劉焉の子。父である劉焉は非常に優秀な人物で、以前の益州刺史を勤めていた郤儉が評判が良くなかつたため、監察官という役割を持つ州牧として益州に赴任することになったが、やがて郤儉が失脚すると、彼の変わりにそのまま刺史を兼任し益州を治めるようになった。だが、彼は突如として病に倒れる。空白となつた刺史の座に、新しい人物をと考えていた矢先に黄巾の乱が起きてしまい、益州の件は有耶無耶な状態となつていた。そのため娘である劉璋が代理として刺史の役目を担っていたのである。

そんな劉璋からの援軍要請。少しの間考えていた趙忠であつたが、彼はその書簡を丸めなおすと傍にあつた机へと置く。あまり緊急性を要しない類のものを纏めておく机だ。書簡が山積みとなつている

そこを見れば趙忠の仕事の量は推して知るべし。事実趙忠は、劉璋の嘆願を然程重要視していなかった。だが、この判断を責めるのは些か酷であるといえる。

まず中華の僻地である益州のさらに南方の地。漢民はそちらを未開の地とし、そこに住まう者を蛮族と呼ぶ。即ち南に住む蛮族——南蛮人と。文明の発展した中華に比べて、蛮人扱いされる南方の民。高度な文化やろくな武器も無い彼ら南蛮の人間が侵攻してきたからといってどれほどの心配があらうか。中原における南蛮の扱いなどその程度のものであり、趙忠のみならずほぼ全ての官僚が彼と同様の判断を下すであらう。それに南方は幾らなんでも中原から離れすぎしており、正しい情報が伝わってくるのが少ない。まだ北方の騎馬民族の脅威の方が身近に感じられるくらいである。

だが、中華の民は知らない。本当に理解していないのだ。南蛮の本当の脅威を知っているのは、彼らと隣接する地域の者達であるということ。

既に益州のことを頭の隅に追いやった趙忠は暫し執務に励んでいたが、間もなく太陽が中天に差し掛かる時分となっていた。休憩を挟もうと彼は部屋から出ると宮廷に行く。途中廊下ですれ違った官僚からの拝礼を受けつつ、宮殿の入り口へと到着した時のことであつた。

「なんだ、李信小僧。お前は先日涼州へと出かけたばかりであろう。もう戻ってきたのか？」

「趙忠おっさんか。ああ、今さつき帰還したところだ」

宮殿へと龐統を伴って向かってきていた李信へと声をかけるのは趙忠だ。それに気づいた李信も気軽に返事を返す。小僧とおっさんと呼び合う李信と趙忠。敵対していたこともあり以前の仲は最悪であつたが、劉弁の下で組織が一本化された現在、二人の関係は実は悪くは無い。というか、むしろ良い部類に入る。

「例の件はどうだ？」

「……そのことなんだが、ちよつと計画の変更を提案しても良いか？」

「変更？　ふむ……わかった。儂の部屋で聞こう」

李信の言葉の重要性を嗅ぎ取ったのだろう。趙忠は即座に今来たばかりの道へと踵を返した。彼もまた極一部の者しか知らない、劉弁が主導する計画の一翼を担う者。事の重大さは理解出来ている。やがて趙忠の執務室へと戻ってきた趙忠と李信。そして李信の背後に付き従う龐統。李信の頭脳ともいえる龐統も計画のことは聞いているため、この場にいることを許されているのだ。

そして趙忠の執務室にて、李信は涼州の漢陽で起きたことを全て話した。馬騰よりも計画の要となるに相応しい人物、董卓仲穎という存在に出会えたこと。彼女を李信の独断で計画に誘ったことなど、趙忠は口を挟まずに最後まで聞いていたが、話が終わった後に暫くの間考え込んでいたが――。

「小僧……お前の目を疑う訳ではないが、董卓という人物は本当に我らの計画の主となるに相応しい者なのか？」

「ああ。馬騰よりも間違いなくな。俺がこれまで会ってきた中で彼女がもつとも適している」

「……そうか。だが、儂としても、お前の言葉のみで納得するわけにはいかん。一度董卓と会ってみたい」

「洛陽に呼び寄せるにしろ、おっさんが漢陽にいくにしろ、どっちでもいいけどあまり目立たないようにしろよ。今は少しの情報も外部に漏らしたくないしな」

中華全域を飛び回る李信ならば問題はないだろうが、趙忠程の大人物が涼州へと向かうことになればいらぬ憶測を呼ぶことになるだろう。

「わかっておる。しかし、時間がないこの時機に新たな可能性を見つけるとはお前の幸運には驚くしかないぞ」

「まあ、今回は完璧に運が良かったな。馬騰に会う前に漢陽に寄って行かなければ見つからなかったしな」

話が一段落した二人は互いに薄く笑みを浮かべて嘆息する。李信の口に出したとおり、紙一重。今回はまさに薄氷を踏むかのような可能性を拾うことができたのだ。これを幸運、天意と思わずになんとするか。そんな李信の視界の端に、山積みになった多量の書簡が映つ

た。

「つーか……おっさん、あんたどんだけ仕事あるんだよ。それとも溜め込んでるのか？」

「……無駄に溜めている訳ではない。優先順位をつけて処理しているだけだ。儂ともなれば仕事の量はとてつもないしな」

「仕事の量的には……まあ、そうだな」

張讓と同格の趙忠ならば確かに処理し切れないほどの量が下からあがってくるであろう。逆に張讓のように終わらせてしまえる手腕を持つている方がおかしいのだ。

「うむ。先程も益州から嘆願書が届いてな。全く南の地域にも困ったものだ」

「……益州から？ 一体どんな内容だったんだ？」

「蛮族どもが北上してきている。それを鎮圧するための兵を送って欲しいという——」

「——悪い、その書簡見せてくれ」

趙忠を遮り、李信が突如として言い放った言葉に目を丸くする。まじまじと見返す趙忠であったが、真剣な表情の李信に言い返すことはせずに山積みとなっている書簡の一つを手にとると手渡した。李信はそれを広げると書かれている内容に目を通す。なるほど、確かに趙忠の言うとおり普段だったならば無視するか後に回しても構わないものだ。だが、今の李信には決してそれを無視できない理由があった。

「おっさん、いや……趙忠。益州には俺が行く」

「……待て、お前何を言っている？」

正気か、と言った意味合いを込めて趙忠が難しい顔で問い返す。計画実行まで後一年もないこの時期に、要となる李信が遙か南にある益州へ向かわせるなど認められるものか。

「確かに書には五万の大軍と書かれているが眉唾なものだ。それに益州には東州兵という精兵がいる。これからのことを考えれば、潰しあってくれたほうが我らにとっては利となる」

「——そんな生半可な考えで放置していれば、益州が中華の地図か

ら消滅するぞ!!」

声を張り上げた李信に、趙忠は言葉が詰まった。今、この男はなんと言ったか。益州が消滅する？ そんな馬鹿な。あそこは天然の要塞だ。いくら大軍で攻め立てたとしてもそう簡単に落ちることなどあるものか。

「確かにそうだな。俺達が攻めようと思えば本当に厄介な場所にある。だが、南中の人間にとつてはそれが普通だ。逆に奴らの本領を發揮できる地域なんだよ、益州は」

以前黄巾の乱の際に荊州へと遠征したことがあるが、その折に民達の話聞いた。中原で考えられているよりも遥かに危険で恐ろしい存在が遥か南の未開の地に住んでいる事をその時に聞き、それ以来情報をかき集めた。その情報を元に考えれば、数字で表現するのは些か難しいことになるが、単純な力量を官軍の兵一とすれば、南蛮の兵士は五。特に鬱蒼とした森林地帯や山の中で縦横無尽に動き回る蛮人や猛獣を考えれば或いはそれ以上。つまり敵兵五万といえどそれを官軍に換算すれば——実に二十五万を越える大軍の脅威と考えるも不足はない。

「それに奴ら南中の民は本当に五万なのか？ 俺が調べた限り……あそこには数十万の兵となる戦士が住んでいる」

今益州へと攻め込んできている五万の軍勢はただの先遣隊でしかないのではないか。後続となる蛮人がさらに数万、十万と増えれば然程時間もかからず益州は地獄絵図と化すであろう。そして彼らの目的は隣接する荊州へと変更され今度はそちらが荒らされることになるはずだ。

「馬鹿な……それほどの、ものか。奴らは」

「ああ。今のうちに益州で止めたほうが良い。いや、止めなければいけない」

さもなくば、益州荊州を奪われ漢民の命が十万どころか百万単位で失われる。ゴクリつと息を呑む趙忠だったが、彼も十常侍が筆頭。さすが自分を取り戻すと李信へと指示を飛ばす。

「わかった。計画は出来るだけ後に伸ばすように尽力を尽くす。お前

も蛮族どもの鎮圧を迅速に行うように意識しろ。こちらのことは我らに任せよ。益州のことはお前に任せただ、李信將軍よ」

「結構な無茶をするかもしれんが、尻拭いはよろしく頼む」

程ほどにしろ、という趙忠の言葉を背に李信は龐統を伴って執務室から退室。宮中の出口へと急ぐ李信だったが、駆け足気味についてくる龐統が李信へと疑念をぶつけた。

「李信、様。南蛮の兵士はそれほどのものですか？」

「実物を見てないから何とも言えんが、過小評価しているよりは余程いいだろ」

勿論無駄に過大評価もしているつもりはない。だが、李信は蛮族と呼ばれる者達の恐ろしさを肌身で知っている。かつての秦の時代に、ともに戦った山の民と呼ばれる戦士達の強靱さは秦の正規兵を遙かに上回っていた。同族ではないだろうが、もしも南蛮の兵士達があるな連中と同様の怪物であったならば——李信が言った益州が消滅するという言葉は決して過言ではないはずだ。これから向かう益州での方策を龐統と打ち合わせながら歩くこと十数分。

「お帰り。って……随分慌ててるけどどうしたの？」

「理由は後で皆と一緒に説明する」

宮殿の門の前にて待機していた高順が不思議そうに声をかけてきた。あの李信が高順でなくてもわかるほどに焦燥を隠し切れていないのだ。実に珍しいこともあるものだと言を捻る高順だったが、どうやら普段のように茶化して良い状況ではないということ悟った彼女は領くと無言のまま李信の背を追う。ここ数年かつて無いほどの李信の姿に、ここまで彼を慌てさせた事件が起きたことはほとんど記憶にない。或いは黄巾の乱以上の大規模な何かが起きたのかもしれないと気を引き締める高順であった。

「高順。悪いが、華雄達を呼んで来てくれ。龐統、お前は韓遂と司馬徽と——陳宮を頼む」

「了解。すぐ行って来るよ」

「は、はい!! わかりました」

三人はやがて間もなくして官僚育成機関へと到着すると、李信が二

人へと指示を出す。二人の姿を見送った李信は、腕を組んで幹部の皆が集合するのを待ち始めた。官僚育成機関は巨大な屋敷であり、多くの人間が利用している場所であるため、李信の横を行き来する者達も多数いる。李信の姿に気づいたものが声をかけようとするものの、普段の彼とは異なる威圧する気配を発しているが故に、誰もが結局声一つかけることが出来ずにそのまま去っていった。

「どうした、李信。帰りは遅くなると言っていた気がするが」
「……お帰り、李信」

李信の気持ちを汲んでか、集合をかけた幹部達は時を置かず李信のもとへとやってきた。副将である華雄。特殊騎兵団隊長の呂布。

「李信殿。お早いお帰りで」

「どうかされましたか、李信様」

「おお、將軍様。今日もとっても格好いいですねえ」

遊撃部隊隊長の趙雲。李信直属親衛隊隊長の徐晃。弓騎兵団のみで構成された龐弓隊の隊長である龐徳。

「主よ主よ主よおおおおお!!」

「無事の御帰還御喜び申し上げますのじゃ」

「おお……恋殿!! 陳宮はここにいますよー!!」

韓遂と司馬徽、そして最年少ながら龐統に匹敵する智謀の陳宮。

召集をかけたに行った高順と龐統をあわせて、武将六名と軍師四名。十名の傑物が李信の前へ膝を付いた。

「急遽の召集すまなかった。だが、事は緊急を要する」

李信の言葉に一言一句聞き漏らさぬように集中する幹部達。彼女達の視線を一身に受けた李信の佇まいは堂々としたものだ。そんな彼は、一言一人の軍師の名を呼んだ。即ち、龐統と。ハツと鋭い氣勢とともに立ち上がった龐統は李信の横に経つとこれまでの経緯を皆に説明し始める。彼女達もまた趙忠と同様に本来であれば南蛮の者達を警戒する理由がわからなかったであろう。皆、中原や北の地の出身の者達ばかりだからだ。だが、彼女達に否や、疑いの気持ちは一切見当たらなかった。自分達の将である李信が警戒している。それだけで南の住人が脅威に値するのだと確信を抱くには十分な理由で

あつたからだ。

「今回の遠征に重要なのは早さだと判断します。南蛮の者達に益州が落とされる前に合流する目的から、まずは騎馬隊で先行したいと思えます。後続となる歩兵は、高順様と韓遂様をお願い致します」

「わかったよ。任せて」

「うむ、我に任せるがよい」

龐統の指示に、高順と韓遂は頷いた。流石にこのような真剣な場で駄々をこねるほど韓遂と高順も子供ではない。

「敵兵の数と質を考えるに今回は私達李信軍だけでは対処は難しいかと思われます。益州の劉璋様の噂を聞くに、あまり勇猛果敢とは言えない御方のようにですし、恐らくは洛陽だけでなく他の州へと援軍の要請を行っていると予想されます」

龐統は言葉を濁したが、劉璋の評判は決して良くは無い。父である劉焉が優秀だっただけに厳しい目を向けられることは仕方ないにせよ、それを抜きにして出来が良いとは言い難い刺史代理である。疑い深く、思量に浅い。懐も狭いと碌でもない評価を下されているのが劉璋だ。そんな彼女が独力で南蛮の大軍勢に決戦を挑むとは考えにくい。そのためすぐには益州が落とされないとは思いますが、劉璋が州の頂点に立っている限り益州は長くないであろう。

「先生……隣接している荊州に援軍を出して頂けるように要請をお願いしたいです」

「うむ。任せるが良い」

「はい。それと趙雲様には先生の護衛をお願い致します」

「わかった。軍師殿に従おう」

司馬徽に向かつてもらうには理由がある。彼女は元々荊州の山奥にある水鏡女学院という学校で教鞭をとっていた。学校を卒業した優秀な生徒たちが荊州の各地に勤めているし、司馬徽もまた荊州刺史である劉表とも繋がりがあるため李信軍のなかでもっとも相応しい人物であるといえた。

「龐徳様。弓騎兵隊の練兵具合は？」

「うーん。結構微妙な状態かなあ。まー、でも厳しめにビシバシやつ

たからさ。騎馬民族とも結構良い勝負できるくらいの腕にはなったりするぜい」

「分かりました。これが初の実戦ですが……宜しく願います」

「おうおう。まかせろい!!」

馬上で弓を扱うにはとてつもない技量と努力が必要となる。それなのに練兵を初めてまだたいした月日が経っていないのに、子供の頃より馬を扱う騎馬民族と渡り合えるという状態に持っていつている龐徳に空恐ろしさを感じる龐統であった。

「今回はこれまでと違ったかなり特殊な状況下での戦闘を余儀なくされるかもしれません。呂布様の直属の軍師として陳宮殿を推挙致します」

「……ねね? うん。わかった。よろしく」

「おおおおおおお!? このねね!! 全力全盛を持って恋殿にお仕え致しますぞー!!」

興奮のあまりはしやぎ回る陳宮であったが、冷静な呂布との温度差が激しいものがあつた。いや、よく見れば呂布の表情も少しだけ緩んでいるのを見ると、実は結構喜んでいるのではなからうか。

「入隊試験を終え、新兵が補充されてまだ三月程度。練兵が十分とはいえない状態ですが、時は一刻を争う状況です。他の方々もすぐに出立できるように準備をお願いします」

応、と返事を残して幹部達は皆この場から飛び出していく。これが後に益州荊州及び李信軍による連合と南蛮の木鹿大王との凄惨な争いとなる、南蛮戦争の幕が開いた瞬間であった。



「失礼致します。お姉様……いえ、太守様にお目通りを願っている方がいらつしやいました」

☒州と呼ばれる州がある。司隸の丁度真横に位置する州であり、その州を構成する一つである東郡の太守に任命されているのが曹操孟徳その人だ。黄巾の乱の功績によって、済南の相に任命された彼女は赴任先の済南で、汚職を行っている役人を排し、様々な善良な方策を打ち出したことが評価され、つい先日遂にこの東郡の長とでもいうべき太守の座についたのだ。そんな曹操が普段籠っている執務室へ伺いを立ててきたのは金色に輝く長い髪の曹操に良く似た顔立ちの女性であった。曹操と異なる点をあげるとすれば、穏やかで人を包み込むような雰囲気。そして女性的で豊満な身体つきをしているということだろうか。

「ふうん。柳琳……貴女がわざわざ報告にくるなんて珍しいわね」

机に大量に置かれている書簡から顔を上げた曹操は、声をかけてきた女性——柳琳に興味深そうに返答した。真名は柳琳。姓は曹。名は純。字は子和。曹操の従妹であり、太守となつた曹操を支える優秀な文官の一人。そんな曹純が報告にくる人物。既知の者やそれなりの地位にある者ならば、それは最初に曹純が言っているはず。ならば完全に初見となる人物なのだろうが太守ともなれば、毎日そのような者は後を絶たない。必要か不必要かある程度は曹純が判断して処理しているのだが、こうして曹操へ確認にくるのは随分と久しぶりのことであつた。

「はい。それがその……私では判断するのが難しいといえますか」

言葉を濁す曹純に、珍しいと目を見張る曹操。彼女がここまで判断に困っている姿を見るのは初めてのことだ。

「司馬懿……仲達様という方を御存知でしょうか？」

「司馬仲達？ ……知ってるかしら、桂花」

「いいえ、華琳様。寡聞にして存じません。司馬の姓と字に達の字が付いていることを考慮すれば司馬七達の一員ではないかと思ひますが……」

「司馬仲達という人物は確かいなかったわね」

「はい。そのような方は記憶にありません」

司馬懿仲達という名を聞いて、執務室の隅の机にて曹操の補佐をしていた荀彧文若に確認をするが、自分と同様の考えが返ってきたのに満足そうに頷く曹操。そしてそれは曹純もまた同じである。司馬を名乗り曹操へ興味を抱かせて面会へと結びつける手管ではないのかと思つた曹操だが、その程度の考え曹純が見抜けぬはずが無い。ならば一体何が彼女を困惑させているのか。

「その……仲達様のお召し物が随分と豪華絢爛なもので出来ているようですよ」

「へえ……貴女が驚くほどに質が良いものなの？」

天子様くらしいの？ と冗談交じりの曹操の問いに笑うことなく曹純は頷いた。

「私では判断できませんが……」

或いはそれ以上の代物かと。

従妹の爆弾発言にこれまでの浮ついた考えは捨て、曹操はその司馬懿仲達なる者を執務室へと通すように通達した。曹純が去った後、曹操は即座に自身の配下をこの部屋に集まるように荀彧へと命令する。程なくしてこの官庁にいる曹操麾下の者達が集まってきた。

夏侯惇元讓。夏侯淵妙才。荀彧文若。曹操の従妹の一人である曹仁子孝。同じく従妹の曹洪子廉。そして——戲志才改め、漸く曹操に仕えることが出来た郭嘉奉孝。曹操を中心として六人の武と文の才媛達が集合した。やがてほぼ時を同じくして執務室の扉が開けられる。曹純に案内されそこに現れた人物を見て——この部屋にい

た皆が一瞬息を呑んだ。

部屋に差し込む太陽の光を反射するキラキラと輝く衣服。遠目でもわかるのは自分たちがこれまで見たことが無い素材で作られた服であるということ。冗談半分で言った天子様というのも決して間違えてはいない代物だ。そしてそれを十全に着こなしているのは女性というよりまだ幼いという言葉が似合う年頃の少女が膝をつき拝手の礼をとった。黒髪黒目、背丈は曹操と同程度だろうか。黒絹のようにきめ細かい長髪が神秘的に見える。美人よりも可愛いという表現がぴったりの彼女は、曹操含む六人の視線を集めながらも気圧されることなく堂々としている。どこか余裕すら垣間見せる姿は実に立派なものであった。

「お初にお目にかかります。私は司馬懿。字は仲達と申します。この度は謁見の機会を頂き感謝の言葉もありません」

「……東郡太守を勤めている曹孟徳よ」

司馬懿を見定めようとする曹操は、奇妙な感覚に襲われた。まるでここに在ってここに無い。ふわふわとした掴みどころの無い煙のような気配。地に足がついていない気体を思わせる存在感。司馬懿の全身から滲み出るのはそんな不気味な印象であった。

「私に何の用なのかしら？」

「曹孟徳様にありましてはどうやら率直な答えの方が好まれる御様子。ならば率直に申し上げます」

司馬懿の黒眼と曹操の蒼眼が絡み合う。曹操を見ているようで見えていない。曹操を通して他の人間を見ているような違和感。

「天の御使いであるこの司馬仲達。曹孟徳様にお仕えするべく罷り越しました」

衝撃。この執務室にいた全ての人間の背筋に電流が奔った。天の御使いなる存在は、世間に広まっているため知っていたがそれを自ら名乗る人物に初めて会ったからだ。そもそも天を名乗ることは許されることではない。自称にしる他称にしる、天を名乗って許されるのは漢王朝の頂点に座する皇帝のみ。間違いなく斬首の刑に服される大罪だ。

「漢王朝に仕える私の前で随分と大言壮語を吐くのね」

「貴女様ならばお分かりになるのではないでしょう。漢王朝はもう長くはないと」

滅びの時は近い。はつきりと言い切った司馬懿に、ピクリつと眉を一瞬動かすものの表情自体に変化は無い。見事な仮面を被っている曹操だったが、先を続けよと彼女の瞳が無言で語っていた。

「以前私は中華の民が天と呼ぶ世界に住んでいました。何が原因かわかりませんが、気づいた時にはこの中華の地にて目を覚ましていたのです。何故なのか、どうしてなのか……理由を考えていましたが、貴女様に出会って私は確信を抱きました」

天の御使いであるこの司馬懿仲達。貴女様に仕える為にこの地へと導かれたのだと。

「私には知識がありません。これより先、遥かに続く中華の歴史を知っています。無論貴女様がどのような道を辿るのか」

未来の知識を知っている。その事実には曹操以外の者達は動揺を隠し切れなかった。もしもそれが事実ならば、一体どれだけの利点となるか。

「近い将来董卓という者が相国に就き、中華は荒れに荒れます。内乱に次ぐ内乱の果て、漢王朝は滅びを迎えることでしょう。そして、その次代の新たな国——魏の王となるのは貴女様です。曹孟徳様」

司馬懿が魏と口に出した瞬間、一瞬とはいえ曹操の表情に驚愕という色が現れた。それはかつて自身が考えた理想の国家である名。曹操以外は誰一人として知らないはずのそれ。この時曹操は司馬懿がただの自称天の御使いという訳ではないことを悟った。

「貴女様には無限に広がる可能性があります。麓へ広がる山すそのように、それは複雑に絡み合った正しい道筋を探すのも難しい道程。ですが、私ならば……この司馬仲達ならば!! 貴女様が違わぬように案内をすることが出来ます!! 最短で、最良の、そして最高の可能性を貴女様に——」

「——もういいわ」

へ? と興奮する司馬懿が間の抜けた声を上げる。

「私に天の知識は必要ない。だからもういい、と言ったのよ」

未来の知識など心底どうでもいいといった様子の子の曹操に、司馬懿はここに来て初めて人間味を現した。頬を引き攣らせて、曹操の答えにその理由を聞き出すべく問いただす。

「何故ですか……私の、天の知識さえあれば貴女様は無限の可能性の答えを知ることが出来るのです!!」

「……くだらないわ。貴女の言葉を借りるならば私には無限の可能性がある。その答えを知る？ 言っていて気づかないのかしら。それはつまり、私の持つ可能性を一つに狭めてしまっているということよ」

なるほど。もしも司馬懿の天の知識が本物であれば、曹操は歴史通りの道を歩むことが可能なだろう。だが、それのなんとつまらない事か。司馬懿の言うとおり失敗もなく示された道を行く。それは生き人形となんら変わることはない人生だ。

「天の知識？ 中華の歴史？ そんなもの関係ないわ。この曹孟徳が自らの意志で歩く道こそが唯一無二」

失敗はあるだろう。後悔もするはずだ。多くの苦難に見舞われ、絶望的な状況にも陥るのかも知れない。だが、それら全てが曹操孟徳が選び歩む道。泥に塗れようが、それは光り輝く道程だ。曹操孟徳が進む先は自分自身で決める。断じて天の意思などで左右はされない。

「司馬仲達。重ねて言うわ……私には天の知識は必要ない」

改めて言い切った曹操に二の句が告げない司馬懿仲達。それとは真逆で、主の姿に見惚れる六人の配下達。どこまでも凛々しく華麗な曹操に鼻血を噴出している者すらいた。勿論、郭嘉奉孝のことである。

馬鹿な、と内心で泡を食っているのは司馬懿仲達。実のところ彼女は、この世界の人間ではなかった。正確に言うならば、現代日本にて生を受け暮らしていた少女。中国の歴史に詳しいそれなりの名家育ちの彼女は、ある日突然この地で目を覚ました。最初は混乱の極みに達していたが、状況を整理するうちに三国志の知識をほぼ網羅している自分ならば、各国の要人に取り入れることができるのではないか、と考

えるようになった。黄巾の乱が終結した混乱期の今ならばまだやがて台頭してくる英雄達も小さな勢力に過ぎない。取り入るのは簡単だと判断した彼女の目論見は——容易く砕け散った。

いや、まだだと冷静さを取り戻そうと司馬懿は首を振る。この程度で終わってしまうのなら、本来ならば存在しない司馬懿仲達の名を名乗った意味が無い。心に秘める野望を成し遂げるためにも、なんとかして曹操の配下となって我が道を進まなければならぬ。

「ところで貴女は算術はできるの？ 文字は？」

「え、はい……一通りは出来ますが」

そんな覚悟を決めた司馬懿より一手早く、曹操が問い掛けてくる。算術の不可、文字が読めるのか書けるのか。不思議とこの世界で目を覚ました時より文字が読めるようになっていた司馬懿は素直に曹操の問いに頷いた。

「そう。天の御使いとしての貴女には用は無けれど、一文官としてなら登用してあげるわ」

曹操の誘いに、一瞬言葉が詰まる司馬懿仲達。彼女の本来の目的としては軍師として曹操の傍に仕えて信頼を得ること。だが、どうやらそれは現状難しいとしか判断出来ない。今は天の知識を欲していないかもしれないが、これより先、特に袁紹といった強敵と相見える時には天の知識が必要とされるかもしれない。いや、官渡の戦いは絶望的な戦となる。ならば絶対に必要とされるはず。そこまでの我慢かと考えた司馬懿は深々と頭を下げた。

「有難きお言葉。この司馬仲達……全盛を持って曹操様にお仕え致します」

今は雌伏の時。内心の口惜しさを表には出さない司馬懿もまた現代生まれにしてはたいしたものであった。いや現代日本に生まれてきたからこそ、内心の感情を表面に出さないようにすることが出来たのかもしれない。

「柳……ん、曹純。仲達を空いている部屋に案内をお願いします」

「はい。わかりました、太守様」

曹純に先導のもと、司馬懿仲達も部屋から出ようと足を向けたその

時。

「ああ、仲達。天の知識は必要ないと言った手前申し訳ないけど、一つだけ教えてくれるかしら？」

「——はい、なんなりと」

速すぎる前言撤回に曹操は自分でも苦笑を隠しきれない様子で。

「天の知識。中華の未来で、飛將軍李信……李永政様はどのような評価をされているの？」

それは何とすることも無い興味本位の質問であった。尊敬している將軍。既に揺ぎ無い名声と評価を受けている自分が目標と定めた男が、未来でどう言い伝えられているのか。それが気になって仕方ない。わくわくと期待に胸を膨らませ、子供のように目を輝かせて司馬懿の答えを待つ曹操。

司馬懿仲達は良く考えるべきだった。胸を高鳴らせている曹操の姿を注視して、最善とは言えないまでもそれなりの答えを用意すべきであった。だが、それを求めるには司馬懿はこの世界に慣れていなかった。歴史を知っているという優越感と万能感。曹操が言った無限の可能性を一つに狭めているという言葉は何も曹操孟徳に限った話ではなく、司馬懿仲達にも当てはまっていることに気づいていなかった。

この世界で目を覚まして以来、司馬懿がかき集めた情報は主に四つ。袁紹本初、曹操孟徳、劉備玄德、孫策伯符、孫権仲謀についてだ。歴史に忠実に考えるならば袁紹の戦力は凄まじいものがある。一時期は中原を支配しかけたが、曹操に敗れさえしなければそのまま中華全てを飲み込んでいたとしてもおかしくはない。司馬懿が袁紹を天の知識で制御すれば間違いなく天下を制することが可能。問題があるとなれば、袁紹が曹操を破った後についての歴史が全くの未知数となること。そして調べた限り袁紹という人物は歴史よりも遙かに評判が良くないということだ。

その他の劉備や孫策についても司馬懿が手を貸した際に正史から外れる分、自分の拠り所である三国志の知識が役に立たなくなる。それを考えれば、やはり曹操孟徳の下で天下に覇を唱えるのがもっとも

問題が無く安全な道筋。上手くいけば後の世には司馬の名を騙る自分が魏の国を乗っ取り王として君臨することも出来るかもしれない。そういった理由で司馬懿仲達は曹操の麾下となった訳だが——彼女は現代人にしては優秀だった。優秀すぎたが故に、漢王朝については意識して排除していた。既にもはや余命幾許も無い薄氷の上に存在している国。もはや董卓によって止めを刺されるだけの哀れな亡国となることが決定されている漢。故に漢王朝のことなど全く問題視しておらず、ろくな情報を集めていなかった。もしもここが現代日本であれば簡単に情報を収集することができたが、ここは仮にも三国志の時代に相当する世界。まともな情報一つ集めるのにも大層な時間がかかってしまう。そのため重要度が低い漢王朝を念頭におかなかったのは仕方が無いといえれば仕方が無いことだ。この頃で有名どころで言えば皇甫嵩、朱儁、盧植くらいであろうか。李信永政なる人物の名は一度として聞いたことがない。だからこそ、司馬懿は素直に口にした。李信という人物の評価を。それが曹操孟徳という少女の分水嶺となることを知らずに。

「未来の歴史において李信なる人物は一字として登場しません」

天の御使いたる自分を簡単に袖にしながら、他のただの人間のことを気にする曹操への意趣返しの意味も含めた返答であった。それに事實は事実。李信という名の人間は、確かに三国志には登場していない。この世界には真名や男性だった人物が女性という歴史的な齟齬はあるが、調べた結果おおまかな流れは同じだ。ならば李信という存在は正史にも登場することがない、平凡で人並み程度の十把一絡げの人物なのであろう。少しはやり込めたか、と多少気をよくした司馬懿が退室の例をして今度こそ執務室を出ようとしたその時。

「——は？」

部屋が、街が、東郡が、□州が、中華が——凍った。部屋中の空気が零下に凍え、粘つく質量をもって司馬懿の身体を押さえつけてくる。言い知れぬ悪寒が彼女の全身を包み、あらゆる毛が逆立ち鳥肌が立つ。万象を凍えさせる絶対零度というに相応しい凍える空間がこの場に生み出され、やがて来るのは大震だ。

かつん。

耳が痛くなる劈く軋み音。揺れる足元。覚束ない心。恐怖。それ以外に何がある。それ以外に何を抱けと言うのか、この曹操化物孟徳物に。ピシピシと徐々に、崩壊の音が響き渡る。建物全体が震え、屋外からの光をもたらしていた窓が盛大に砕け弾けた。

かつん。

それだけでは終わらない。空間を支えている官庁の柱に、壁に、小さな罅割れが出来始め、巨大な建物の自重を支えきれずこのままでは崩落を始めるのは目に見えていた。

かつん。

これまで多くの優秀な人間にあってきた。一代で財を為した傑物とも顔を合わせたことがある。だが違う。こいつは、この少女は明らかに存在としての次元が違う。凡人が、才人が、何度何十度生まれ変わったとしても絶対に決して、永遠に届くことの無い至高の頂に座している。

かつん。

何時の間にか傍に歩み寄ってきていた曹操が司馬懿を睥睨する。自分の方が背が高いというのに何故見下ろされているのか。その理由は単純で、何時の間にか重圧に耐え切れずに膝から崩れ落ちていただけだ。じつと無感情な蒼い瞳で見つめてくるのは人の姿をしただ

けの何か。ああ、私は終わるのか。短くかすれる声で司馬懿は呟いた。死ぬ。死だ。私はここで。曹操孟徳の逆鱗に触れた司馬懿仲達は生を諦めた。諦めざるを得なかった。心臓を直接握られたと誤認する圧迫感と恐怖感。生を望む司馬懿の希望を押し折り、砕き、消失させる絶対的な上位者による重圧。生存本能すらも諦めさせる完全な捕食者の視線。ピタリつと鎌の刃が首に添えられる。いや、違う。現実にならなっている訳ではなく、曹操が発する圧だけで自分に刃が向けられたと勘違いするにまで至った究極の幻視。もしも刃が引かれれば想像の中ではないが首がおちる。それは精神の死だ。心が死ねば司馬懿仲達はここで死ぬ。きつと二度と目覚めることの無い暗闇へと堕ちるであろう。それがわかっているながら、理解していながら、口が言葉を発さない。咽が凍えている。身体が指先一本動かすことを拒否していた。いや、こんな状態が続くのなら、こんな圧に晒されるくらいならば——殺してくれ。死にたい。頼む、お願いだ——私を死なせてくれ。死しか彼女の救いとなるものはない。純粹なまでの重圧は、ただここに在るだけで人に生を許さない。現に曹操の姿に夏侯惇達ですら言葉もない。止めなくてはならないというのに、彼女達もまた司馬懿と同様だ。身体が微塵も動かないのだ。彼方と此方は決して埋めようが無い絶対的な差があった。

「駄目ですよー、曹操様。天の御使いさんが死んでしまいますよー」

そんな空間にのほほんとした声が割ってはいる。執務室の扉の外から顔を出したのは、頭に奇妙な人形を乗せた少女——程昱仲徳。平然と悠然と、曹操の支配する空間に侵入してくると、人を押し潰す気配をまるでそよ風のように受け流しながら膝をついている司馬懿の襟を掴む。

「この方はまだ利用価値が沢山あると思いますし、その辺で脅すのは止めておいてください」

曹操は必要ないと断言したが、軍師としては司馬懿の言う天の知

識、歴史に興味を惹かれないはずが無い。確かに可能性を狭めることになるのかもしれないが、それを取捨選択するのは自分だ。手に取れる選択肢が多いに越したことは無い。言葉通り、本物であるならば利用価値は幾らでもあるのだ。程昱は、よいしょよいしょと司馬懿を引き摺っていき呆然としている曹純へと引き渡す。

「曹純様。その方を部屋に案内お願いしますねー」

「え？ あっ……は、はい!!」

まだ本調子とはいえない曹純だったが、程昱の指示を受け慌てた様子で司馬懿を連れてこの場から立ち去って行った。自分を全く恐れる様子を見せない程昱と対峙すること一分——曹操は仕方なしといったように嘆息する。何せ目の前で普段と変わらない姿を見せる程昱は暖簾に腕押し、柳に風。全てを受け流してしまっているのだから、真面目に対応するほうが馬鹿らしい。

「……少し脅しすぎてしまったかしら」

「はい。やりすぎですねー。普通の人間だったら一生悪夢に魘されちゃいますよ」

「そうね。大人げなかったわ」

「気持ちばかりわかりますけどねー。天の知識が本当ならば、李信様の未来はあまりよくないようですねー」

「……彼女が本物ならね」

司馬懿仲達が李信に関して虚偽を述べた様子は見られない。ならばあの飛將軍の名前は歴史に一字も残っていないのだ。そんなことが有り得るのか。現在でさえも比類なき功績を残したあの將軍の名が残らないことなどあるのだろうか。いや、あるまい。

ならば考えられる原因は何か。先程司馬懿が言ったように漢王朝は滅びを迎えるということ。不敬ではあるがこれは実のところ然程困難な予想ではない。漢王朝が滅びるのを前提として考えれば、李信は一体どうするであろう。彼のことだ、間違いなく漢のために戦い続けることは簡単に推測できる。誰かに鞍替えする姿など思いつかない。それでも仮に李信が漢とともに滅んだとしても、彼の名が残らないというのは腑に落ちない。

前王朝を打倒した際に、強敵となった人物は必要以上に持ち上げられることが多い。これだけの強敵を打ち倒して新たな王朝を作ったのだと。それは高祖劉邦と西楚の霸王項羽の関係を見ればわかるはずだ。もつとも、項羽に関しては何れも全部が全部本当でとんでもない怪物であつたのかもしれないが。いや、歴史半分を考えても十分すぎる化け物だ。李信もまた同様のはずだ。あれだけの存在を打倒して新王朝設立をしたのなら、おおいに喧伝するはず。特に自分が魏を建国したのならなおさらだ。李信を手に入れるにしろ、入れられなかつたにしろ——李信永政の存在は絶対に後世へと残したはずだ。

ならば何故李信の存在は抹消されたのか。

歴史に彼の名を残すことを良し、としない人物がいたに違いない。それは一体誰なのか。漢王朝の者か。それとも自分の配下の者達か。許せない。そんな愚か者を絶対に許せるものか。

「司馬仲達の話が本当か否か。程昱……見極める核心はどこだと思ふ？」

「そうですねー。曹操様もお分かりかと思いますが、やはり……董卓なる方が相国の座につくところでしょうか」

曹操も程昱も董卓仲穎の名は聞いたことがある。が、あるだけだ。所詮は涼州の片田舎の県令を勤める役人。中央にたいした繋がりも無い彼女が相国という地位につくことは絶対にありえないと断言できる。相国とは漢王朝における最高職といつても過言ではない。その座に皇帝の親類でも外戚でも宦官でもない一役人が選ばれる筈が無い。漢王朝が滅びるといふのは予想できるにせよ、董卓仲穎が相国につく——それはまさに未来予知。つまりは司馬懿仲達が歴史を知っていることの証明に他ならない。

「もしも董卓なる者が相国となつたならば私は——」

李信が不当に歴史より抹消されることを、未来を知ってしまった。ならば、やることは一つだ。進むべき道が決定した。今ここで断言しよう。絶対にそのような未来を認めることが出来ない。ならば、あ……ならば。幼い頃の誓いのままに、李信永政——貴方と肩を並べる為に、貴方を従える為に私が、この曹孟徳が王となろう。

「う……げほっ……うああ……」

曹純に案内された部屋で一人、司馬懿仲達はひたすらに吐いていた。内容物を全て吐瀉し、果てには胃液しかでてこない状態になっても蹲ってひたすらに嘔気と戦っている。

「なん、なんなのよお……あの連中」

思い返せばまたえずく。無理も無い。現代社会では絶対に会うことは無い、文字通り戦乱の世を生き抜く存在と真正面から向かい合えば正気を保つほうが難しい。彼女には自信があつた。歴史に名を残す曹操すらも操り手駒として自分の思うがままに歴史を作り上げる根拠の無い自信が。それが木っ端に打ち砕かれたのだ。あんな逸脱した怪物を操作できるはずがない。制御不能でありながら、冷静冷酷で、まるで全てを見通すような化け物。そこで司馬懿は思い出した。歴史に残されていたある言葉。

治世の能臣。乱世の――。

「……違う。そんな生易しいものじゃない。」

あれは、あの少女は、あの怪物は、あの化け物は――。

「治世の能臣――乱世の霸王」

あれはそういった類の存在だ。

この日この時この場所で、天の知識を識る司馬懿仲達は自分の心が粉々に砕け散る音を聴いたのだった。